世界最速の魔法使い

紅の豚野郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界最速の魔法使い

【Ｎコード】
Ｎ４００１Ｖ

【作者名】
紅の豚野郎

【あらすじ】
見切り発進しました。
はい、何も考えてません。

ネギま！の世界で縦横無尽する元モトレーサー（合法ショタな男の娘）の話です。

ひょっとしたらアンチ成分が含まれるかもしれません。

ホモネタ、レズネタがあるかもしれません。ごめんなさい。
期待して見に来た人はもっとごめんなさい。大したことないです。
基本的に気が向いたら更新方式をとっていきたい。

出して欲しいバイクがあれば排気量、年式に関わらずメーカーとバイクの名前を書いて送ってください。
なるべく出すようにします。

この小説の楽しみ方

?まず服を脱ぎます。
?「地球が百人の村だったら!!地球が百人の村だったら!!」と詠唱しながら先日痛めた腰をさすります。
?ブラウザを開きます。
?アフィブログや実験サイトを見て心を落ち着かせます。
?ブラウザを閉じます。

※楽しみ方は他にもあります。自分に合った用法を心がけてください。

００１　世界最速、死す。（前書き）

やっちゃった。ごめりんこ☆

００１　世界最速、死す。

俺は白波麟（しらなみりん）。しがないモトレーサーだった。
だった、と過去形なのは死んじゃったからだ。死んじゃったぜ☆

まあいつかは死んじゃうだろうと思ってたが、何故かサーキットコースにいる一般人避けた拍子に転倒した上に突っ込まれるなんて謎の死を遂げるとは。
今日で世界大会優勝したと思ったんだがなぁ、などと考えてると、唐突に目の前に女の人が！

「ひゃあ！！」

いや、ビックリすんのは俺だろう。
ってか「あんた俺の前に出てきた！！」

「ごめんなさい！！ごめんなさい！！！」

「ヒャッハー！！ここで合ったが１００年目ェェ！！水だー！！食料もたっぷりあるぜぇ！！」

「ごめんなさい！！ほんとごめんなさい！！！」

「と、ここまで実は嘘みたいな話ですが嘘です」

「ごめんなさーい！！」

「静まれーぃ！静まれーぃ！
この紋所が目に・・・静まれーぃ！

皆の者〜、静まれっ！静まれっ！静まれっ！静まれーぃ！
この俺ををどなたと・・・静まれーぃ！
ええぃ！静まれっ！静まれーぃ！
さきのモトレーサー、白波の・・・し、静まれーぃ！
静まれーぃ！皆の者、静まれーぃ！
白波・・・静まれーぃ！静まれーぃ！静まれーぃ！」

「あわわわ」

……自分でやっといてなんだけど、何コレ？
と、殺伐とした真っ白な世界にお爺さんが！！

「お主ら……、落ち着かんか」

「うわぁーん、神王さまー！！」

し、神王！！

「うわぁーい、おじいちゃーん！！おこずかいちょうだーい！！」

「ふむ、仕方ないのう、って何をやらすんじゃ！」

「おじいちゃんのそういうノリ、好きよ？」

「お主……／／／」

「おげぇぇぇぇえ゛え゛え、頬染めんなよ気色悪い！！」

「……」

（俺の感覚で）３０分後

「で？どうしたのおじいちゃん、ごはんは昨日食べたでしょ？」

「毎日食わせろ！いやいや、そうじゃなくてな？このミーノがお主の前に顕界したじゃろ？」

「ああしたよ！クッソー！あとちょっとで優勝だったのによぉー！！チラッチラッ」

「うぜぇ！そのお詫びにお主に、まぁありふれた話、転生体験させてやろうかと思うての。うぜぇ！」

「えっ？生き返るの？俺？マジ？うひょー！」

「とは言っても元の世界では無理なんじゃがの」

「何でさ」

「だってお主もう死んじゃってるし。それでもいいの？ゾンビだけど。あえて発音良く言うならＺＯＭＢＩＥだけど」

「いやん、スプラッタ☆じゃあ何、その言い分だと代わりの世界とかもあるの？」

「ネギまとか言ったかのう、そんな世界」

「何それ、焼き鳥？焼き鳥の世界？俺ネギはさんでない普通の焼き鳥（塩）が好きなんだけど」

「いや、漫画のタイトルじゃが、しらなんだか」

「俺……バイクと車の事しかわかんねぇから☆」

「まあその世界しかないから嫌ならその魂フォーマットして適当な世界に出すだけだし」

「ったく、しゃーねぇな！！」

「いくらこっちが悪いからってその上からはいったい何なの？能力付与とかできるけどどうする？身長伸ばす？」

「身長も体重も最低限あればいいんだよ。出来ることならあと５センチは減らしたい。体重も５キロは減らしたい。バイク乗るとき極限まで抵抗を減らしたい。あとできるなら視力３倍と動体視力５倍」

「じゃあ身長１４０ｃｍで、体重は３６ｋｇと、ちっさ！！」

「この小ささがライダーとしての誇りを俺に与えてくれた。これでさらに世界最速」

「視力が６．６で動体視力は５倍」

「凄かろう」

「で、魔法とかはいいのか？」

「なにそれこわい」

「漫画の話だから。じゃあ魔力は世界最強の二倍くらいあればいい

かの。その身長と体重だと身体能力も下がるから補強をかけて……」

「えーせっかくやるんだから魔力無限とか身体能力世界最強の５０倍とか気前の良い事言えよなー」

「まあ良いけど。他はいいのか？」

「ちょっと待って、バイクはあるよな？」

「そりゃもう。何だったらこれをやろう」

「指輪？」

「知ってる物なら何にでもなる道具じゃ。複数の物にも出来るが一度に思い浮かべた数しか出来ないのと、素材から製法まで知ってる事が最低条件じゃがの」

「えー、俺バイクのことそこそこ知ってるけどそこまでマニアッカーじゃねぇからなぁ」

「そんなお主にオススメのあらゆるバイクの知識もやろう」

「あと車と護身に使えそうなのと魔法の知識もな」

「体重の９９割が面の皮に集結しとんのか」

「ちょうだいよーおじいちゃーん！！」

「仕方ないのぅ、ほれ、魔法発動体がいらなくなる能力と不老不死ももっていけ」

こいつ孫とか近所の子供に甘いタイプだ！

「でも不死って……最強なんだから実質不死じゃん」

「それもそうかの。あとは、その身長で大人ってのはちょっと無理があるのう。見た目を１０歳程度にしておいてやろう」

「わーい！じゃあもう行ってもいい？」

「うむ、じゃあ達者での」

「よしこーい！じゃあね、おじいちゃん、あとノーム？」

「ミーノです。ごめんなさい」

００１　世界最速、死す。（後書き）

次から原作介入です。
というのは嘘だ

００２　世界最速、あと幼女。（前書き）

またもややっちゃったぜ！
原作との折り合いをどうつけるか……ゴクリ……

００２　世界最速、あと幼女。

「なにここ」

はい、毎度。白波麟です。
リンちゃんとでも呼べよ。
せっかく漫画の世界に来たんだから、それなりに話の中心に居ると思う。
だって見るからに夜中だってのにさっそく３０人ほどの農民に囲まれてるもん。

「おいお前、そいつから離れろ！」

「そいつ？」

なんだかちっさい黄色いのがしがみついていた。
いや、身長差はそんなないんだけど。

「おい、何か離れて欲しい感じだぞ、嬢ちゃん」

「や……助けて」

な、何コレ

「え、じゃあ何？おじさんたちネオロリコン集団はこんな見るからに年端もいかない女の子を一生懸命追い回す作業に忙しい感じ？
いや、わかるよ。ちっさい女の子の方がいいんだよな？だってホラ、老けるとその……いろいろ不具合も出るし。
まあその不具合も愛嬌って事でここは一つな、どうかその農耕具を

収めつつ平和的に話し合いで場を収めるってのはどうだろう？」

「ふざけんじゃねぇ！！」

「うわぁ！！許されないタイプのロリコンだ！！『ＹＥＳロリータ・ＮＯタッチ』って知らねぇのか！びっくりだわ！お前にロリコンを名乗る資格は無い！」

「いいから、いや、よくないけど離れろ坊主！そいつは吸血鬼だぞ！」

新事実発覚。吸血鬼なら合法ロリとして手を出してＯＫという事か。

「いやいや、ダメだろ。見るからにこの子の同意貰えてないじゃん。助けて～ん☆って言ってたじゃん」

「そうじゃなくて、お前も殺されるっつってんだよめんどくせぇガキだなチクショー！」

「え？何お嬢ちゃん、俺殺しちゃうの？」

「こっ、殺さないよ！」

「ホラ、この子もこう言ってる事ですし、ね、ここは大人である私たちが折れるべきでしょ？ハイハイ、解散！」

「もういいじゃねぇか、このガキごと殺しちまえばよぉ」

「え～？だーめ☆」

「うるせぇ！くらえ！！」

外国の農家が持ってそうな青銅でできたでっかいフォークみたいなのを振り下ろしてくるおっさん。

「うわぁ！やめろよ！！」

そう言って手を振ると、パァン！！と風船が弾けるような音が鳴ってフォークの先が消し飛んだ。あと俺の服の袖も。

「何をするだァーッ！ゆるさんッ！」

「え？……うわぁー！化け物だぁー！！」

「落ち着け！全員でかかれば勝てる！行くぞ！！」

え？なに今の？世界最強の５０倍？すっご。

というか、身体的有利が確定した今、０．００１秒を見るレーサーの５倍の動体視力を持つ俺に負ける道理は無いぜ。

「よし、嬢ちゃん、俺の背中につかまれ」

「うん、どうするの？」

「何をする気だ！？」

「ふ、ふはははははは！！決まってんだろ？しっかり掴まってろよ？」

一帯に緊張が走る。

農民達は手にそれぞれもった農具を構える。
俺はそいつらをひと睨みした後に

「逃げるんだよォ！お嬢ちゃーーーーんッ！
どけーッ、農民どもーッ！！」

一目散に駆けていく。

「あっ！待てっ！って速っ！！何アレ速っ！！」

「あ～～ばよおお→ぉぉ←（ドップラー効果）」

「撤いたか？」

振り返るも追ってくる気配は無い。↑気配とかわからないけど一度言ってみたかった。
ともかく、体感速度８０ｋｍ／ｈで３０分も走ったんだから追ってこれるほうが気色悪い。

「お兄ちゃん、きぼぢわるい……」

「失礼な！お兄ちゃんは気持ちいいぞ！？」

我ながら意味わからん。

「酔ったんだな。ちょっと待って、今降ろす「おぇえええええ」ひいいいいいいいいいい！！」

うわぁ・・・白波さんの背中あったかいナリ～
まあ仕方ないから降ろしてあげよう。

「うぅ、お嬢ちゃん、大丈ｂぎゃーーーす！！！だっ大丈夫かぁぁぁあああああああ！！！！！」

口からすっごい大量の血を吐いている。
どうしてこんなになるまで放っておいたんだ！！

「ちくしょう、俺にはどうすることもできないのかー（棒）」

「けふっ、お兄ちゃん大丈夫だよ。私は絶対死なないもの」

「何それ」

「私は真祖の吸血鬼。だから心配はいらないよ。……怖い？」

「良かった。じゃあ吐血で死にそうな幼女はどこにもいなかったんだ。これで俺も安心して……眠れ……る……」

「お、お兄ちゃーーん！！！」

「はいはい、お兄ちゃんだよ。幼女声高いから耳に悪い」

上着を脱いで近くにあった湖で絞る。
幼女のやや上等っぽい服も適当に擦る。

力を入れる意思がないか、考える余裕も無いくらいじゃないと物を壊すほどの力は入らないみたいで便利。

「恥ずかしいよぅ」

「うっせぇ。しかしどうするかなー。お嬢ちゃん、家帰れる？」

「……」

ふるふると首を振る幼女。

「んーじゃあ今日はこのへんに野宿して、明日町でも探すか。ちょっと待ってな。家建てるから」

そう言って簡単なログハウスを思い浮かべて指輪を意識する。

すると殺伐とした森の中にログハウスが！！

「すごい！」

「はっはっは！称えよ！」

で、服も乾いたしログハウスの中のベッドに腰掛ける。

「よっと、んで、嬢ちゃんはどうしたい？」

「私は……もう帰るところが……ぃから……」

「……そうか。じゃあ……俺と来るか？」

「お兄ちゃんと？」

「ああ。きっと、楽しいと思う。お前の辛い記憶を少しでも楽しいものに変えてやれると思う」

「う、うん。よろしく……ね？」

ふはは、頬染めちゃって！惚れたな。

「じゃあ今日は寝るか。おやすみ。えーっと……」

「エヴァンジェリンだよ。エヴァンジェリン・マクダウェル」

「そうか。俺はリンだ。シラナミ・リン。言っとくがシラナミが姓でリンのほうが名前だからな？よろしく、エヴァンジェリン」

「よろしくね、リンお兄ちゃん」

今日はとっても楽しかったね　明日はもっと楽しくなるよね　ねっ

ババムート太郎

００２　世界最速、あと幼女。（後書き）

誤字脱字、不思議な表現などあれば教えてください。

さて、……さて。

どうしたもんか。

まあ発進しちゃったからにはがんばります。

００３　世界最速、助けられる。（前書き）

もうごめん以外出てこないわ。
バイクについてはあとがきで。

００３　世界最速、助けられる。

「何コレ？」

毎回こんな始まり方の気がする白波麟です。
ログハウスで寝て起きたら隣のベッドで寝てたはずの子猫（キティ）がこちらのおふとんにスニーキングしとりました。
ちなみにもう夕方です。結局昨日寝たのは明け方だったしな。

「んむぅー」

「おはよう、エヴァンジェリン」

「んー」

なんだこれが恋か。違うな。

「４０秒で支度しな！！」

「ひゃぁ！……お、おはよう」

「うむ、おはよう」

「ほれ、外の湖で顔洗って来い」

まだ眠いみたいだ。
俺はちょっと近場で食えそうな感じのもの（果物とか）をもぎ取って帰ってくる。

「いやぁー燃費いいわぁー」

「燃費？」

「うん燃費。ほら、お互いちっさいから食い物がちょっとでも大して腹減らないし」

「うん、そうだね」

「あ、燃費といえば！！」

「ん？」

食べ終わってからログハウスを指輪に戻してから知識でバイクを出す。

ＣＲ８０（魔）改（造）。林道だからオフロード車。あとメットとグローブも。

改造箇所は本来レーサーのため一人乗りのところ、二人乗りできる構造に。あと二人とも身長が低いから車高も少し下げている。思い浮かべればできるなんて素敵！抱いて！！

あとは気になるガソリンだが、

「うん、ちゃんと入ってるみたいだな」

タンクキャップを開けて見てみるとガソリン、オイル混合かはわからないがしっかり入っている。

「お兄ちゃん、これ何？」

「これはお兄ちゃんの商売道具の一つだよ。コレに乗って町を探すから俺が乗ったら後ろに乗って全力でしがみついといて」

「また昨日のやるの？」

不安そうに見てくる。

「しかし大丈夫。いいかいエヴァンジェリン。いや、もう長いからエヴァって呼ぶけど、人の背中ってのは乗り物じゃない」

「うん」

「そしてこのＣＲ８０は乗り物だ」

「うん」

「要するに全力で走ってる俺の背中よりも乗り心地は良いと思う。少なくとも俺は大好きだ。」

「じゃあ頑張る！」

「あー、うん。くれぐれも全力で掴まっとけよ」

「でもそんな力いっぱい掴まったらお兄ちゃん千切れちゃうよ」

「どひいいいいい！！！！そいつは困る！！と言いたい所だが大丈夫。お兄ちゃん最強やから。ほら、これかぶって乗って」

「うん。よいしょっ」

普通のオフロードヘルメットを渡す。俺もかぶる。

「じゃあ何か話がある時は俺の太ももを叩いて。行くよ」

キックスターターを踏みこむ。
パパパパンと高く大きい音が鳴る。聞いたことも無い機関銃の音はこんなんだろうなと思って発進。
ちなみにエンジンがかかるまでは控えめにつかまってたエヴァだが、排気音が鳴るなり思いっきり掴んできた。
幸い千切れはしなかったし、背中のちょっとした膨らみと、そういえばスカートで乗ってんだよな……ゲヘヘｗｗｗという溢れ出るＳＰ（紳士パワー）でノーダメージどころか一秒ごとに何か全回復してる。気がする。

一時間ほどゆっくり（時速８０キロ程度）走ったら遠くに村が見えた。
今回はエヴァの体調も大丈夫そうだ。
あと2キロといったところだろう。バイクを停めて降りる。
タンクを見てもガソリンが全く減ってない。神様やるじゃん。

「楽しかったね！どうしたの？」

楽しかったのか。愛が国境を越えたな。

「ほら、あそこに村があるだろ？」

「え？どこ？見えないよぉ」

「ああ、お兄ちゃんすっごい目がいいから。とりあえずあるんだ。
今晩はあそこで土人の哀れを誘って宿を借りよう」

「？よくわかんないけどお兄ちゃんが言うならいいよ」

お兄ちゃんみたいに穢れきった子にならない事を祈るよ。

と、ここで急に地面に横たわり転がりだす。

そして指輪を数本の矢に変えて、

「これで兄ちゃんの背中を刺すんだ。さあ、早く！」

「お兄ちゃん、いつになく怖いよぉ」

「いいから！生きるためなんだ。お兄ちゃん世界最強だから大丈夫！さあ、さあ！！」

さすがの吸血幼女もドン引きである。

でもためらいがちに背中に矢を当ててゆっくり押し込む。

「あぁっ！一思いにっ！勢いよくやって！！ゆっくりしないで！！」

クソみたいなこと言いながら背中に二本と足と肩に合計四本の矢が刺された。肩と足は自分で刺したが。

「さて、エヴァ。肩を貸してくれ」

「何で？」

「お兄ちゃん矢が刺さりすぎて歩けない（という設定な）んだ。

そしてはやく村にたどり着いて治療してもらわないと死んでしまう

（という設定な）んだ」

「ええ！お兄ちゃん、死んじゃやだよぉ！！」

「ああ。だからゆっくり行こうな。疲れたら言うんだぞ」

「うん。ちょっとのどかわいちゃったな」

何この幼女、狂気を感じる。

とりあえずエヴァに血を与えて村へ向かう。

「あーもうあかん。間もなく死んじゃう。これ死んじゃうわ俺ー」

「うわぁーん！お兄ちゃん！！死んじゃだめぇえ！！！」

村に近付くにつれ適当にエヴァを煽って泣かせる。

もうすぐ到着するぜってところでやっと村人の誰かが気付いたのか松明をもってこっちに来る。

「おい、どうした！誰か居るのか！？」

「お兄ぢゃーーん〜」

「おいどうした！！ひどい怪我じゃないか！いったい誰がこんな事を！とりあえずこっちに来い。治療してやる」

「うぅ、すいま……せん」

「お兄ちゃん死なない？」

「ああ、大丈夫だ。おっちゃんが助けてやるからな！」

……なんか超ごめん、おっちゃん。

『こうして俺は、きこりのおっちゃんに助けられた』

００３　世界最速、助けられる。（後書き）

ＨＯＮＤＡ　ＣＲ８０Ｒ２
７９．４ｃｃ
２５．７ＰＳ／１２，５００ｒｐｍ
前後ディスクブレーキ。
ＨＯＮＤＡのオフロード車です。
競技用のため、ライト、保安用電装（ウィンカーとかブレーキランプとか）はありません。
当然一人乗り用です。
今回行った改造はシートの長さの延長とタンデムステップ（後ろの人が足を乗せる出っ張り）の追加、フレーム補強です。
孫に甘い神様がどんな扱いをしても絶対に壊れない仕様にしてくれてるため、実は補強はいりません。
ちなみに、この豚野郎（作者です）が乗ってるＣＲは前後ドラムブレーキの走る骨董品仕様です。
また『ＣＲ８０Ｒ“２”』と書いてありますが、無印との違いはさしてありません。
ホントはＣＲ持ってるとは言え実は小排気量のロードバイク専門だから詳しくなんです、私。

で、あとがきですが、なんか自分で書いていながら下衆いですね。
人の良心につけこむあたり。このきこりのおっちゃんはひどい目にあわせられないね。
あとエヴァがアホっぽい。
まあ１０歳だしこんなもんだろ。
ではまたそのうち。

００４　世界最速、発つ。（前書き）

今のところそんな最速っぽくないよね。
これは言い訳ですが、バイト先で書いてその場で投稿してるので、
あんまりビッグイベントとか起こすポテンシャルがありません。
鬼の定時退社後にちょっとええ話を入れたい。

００４　世界最速、発つ。

よーっす、白波の麟でげす。
燐って書くと急に猫っぽくなるよね。
異常に回復速度も旋回速度も速い俺だけど矢の一本が心臓に到達してました。
エヴァさんほんま容赦ないでぇ。

今はきこりのおいさんに世話になってます。

「坊主、何があったか、話してみろ」

便箋上坊主って書いてるだけで俺フサフサだから。
ほら、そもそも日本語じゃないし。
もっと外語っぽい何とか語。限りなくイギリス英語に近い。
俺５ヶ国語ほど喋れるから。
日本語と関西語と英語とイタリア語。あとハナモゲラ語。
何で外国語話せるようにしておいてくれないんだよ神様ったら。

「家が賊に襲撃されて両親が殺されたんだ。妹と命からがら逃げてきたんだけど、この村の２キロほど向こうで追いつかれて。妹が無事で良かったんだぜ！」

「苦労してんだなぁ」

「たいしたことないんだぜ！」

ちなみにエヴァは騒ぐだけ騒いだらさっさと飯食って寝ました。
俺？マミーだよ。別名ミイラ男。

いまは客間っぽい所でおっちゃんと話してる。

「坊主、名前は？」

「ユナ・マクレーン。妹がエヴァ・マクレーンだよ、おっちゃん」

偽名だよ、おっちゃん。

「よっしゃ、じゃあおっちゃんが大人になるまで育ててやろう！！」

「えぇーーー！！！！」

僕たちブラザーズは大人にならないんだ！！

そうです。ここがネバーランドです。

「気持ちはありがたいんですけどー、あのー、ちょっと困っちゃうっていうかー、俺こう見えて２５歳だからあんまり人の、えー、そのーお世話になるってのもー、ホラあれなんで。それにこのくらいの怪我なら明日には治ってるから一晩泊めていただいただけで大感謝祭ものなんでー、あのー、ここは丁重に男割させていただきます」

「おいおい、目がバタフライしてるぞ。きらめく風になって今すぐ君に会いに行きそうな勢いで」

「いやいや、そんな訳が。この話は９９割事実なんでホント大丈夫です。お礼はしますから。明日中に木とかもう森がなくなるくらい刈り尽くしますから」

「あんまりガキが遠慮するもんじゃねぇ。今日は寝な」

「いやもうホント遠慮とかそんなんじゃ無いんだけど、まあ続きは明日にでも」

「ああ。じゃあな」

「おやすみママ（地声）。おやすみ坊や（裏声）」

チュン……チュン……

チュン……

「中（チュン）、三暗刻（サンアンコー）、対々（トイトイ）、ドラ３　親の倍満（バイマン）で２４０００点じゃぁぁぁあああああ！！」

はい、起き損ねて抜け出し損ねました。

「んんぅ……」

っと、騒ぎすぎたか。

俺は優しくエヴァの頭をなでながら言う。

「お前飛んだから」

「ぅーん……何が飛んだのぉ？」

「みんなの想い……かな？おはよう」

「おはよー」

起き抜けにおっちゃんに挨拶しようと思ったが日光が当たって死にそうになってるっぽいのでエヴァを部屋に置いたまま駆け出す。

「おっちゃんおはー」

「ああ、おはよう。なんだ、もう普通に歩けてるじゃないか」

「世界最強なんで回復余裕でした。今晩にも出ていくよ。迷惑かけたね」

「怪我が大丈夫ってんならいいし、どうしてもっていうなら止めやしないが、昼間に出たほうが安全じゃねぇか？」

「いや、うちのエヴァが太陽に当たったら爆発する病気にかかってるからおいそれと昼間は動けないんだよ」

「ふーん。まあ今日一日はこの家も好きに使ってくれてかまわねぇから、まあゆっくりしていけよ。妹さんについててやんな」

「ありがとう！おっちゃん超イケメン！」

「はっはっは。じゃあ俺ぁちょっと出かけてくるぜ」

「おお。あばよ！」

「おぃーす！エヴァ生きてるー？」

「生きてるよー。お兄ちゃん」

「吸血鬼なんだから朝には弱いだろ。どこにもいかないからもうちょっと寝ててもいいんだぞ？」

「うん、そうするよ。おやすみー」

「そうこうしてるうちにもう日が暮れたとさ」

「誰と話してるの？」

「世界の意思」

「じゃあおっちゃん、俺たちもう行くよ」

「おぅ、そうか。この家の前の道をあっちのほうに行くとちょっとした町がある。次はそこで休むといいだろう。あと大したことはできないがこいつをやるよ」

「これは？お金？」

「ああ。久々に孫に会えたみたいでな。小遣い程度だが持って行きな」

「あんたって人は……また来るぜ！」

「おお。達者でな」

「ばいばーい」

この世界のおっちゃんの孫煩悩率と達者率は異常。

一瞬きりがいいかなとか自分でもよくわからない事思ったけどバイクに乗らなきゃ始まらない感じの世界の意思がどうとか。

「さて、行くか、エヴァ！」

「うん！」

そして無事とわかるやまったくこちらの体調を気にかけない狂気の幼女。

いや、別に文句もないんだけどな。

しかしホント世話になったな。

アンタのことは忘れないぜ、おっちゃん。

ちなみに他の村人は顔も見ませんでした。

という訳で、比較的静かなＨＯＮＤＡのリード９０（ちょっと改）を出す。

具体的にいうとキャブレターを大径にして圧縮比を少し上げただけのやつ。

あとサスペンションも柔らかいのを入れてタイヤをブロックのでかいやつにしてるけど、こっちは改造ってほどじゃないしノーカウント。ノーカウントだから！
ちなみにリードは大きめなスクーターだ。
荷物もいっぱい入る。載せる荷物無いけど。

「ほら、昨日のより速くないけど昨日のより乗りやすいよ。おいで。ってちょっと待てキティ、前に座るな。後ろに座れ」

「えー」

「んぇえー☆　じゃないの！お前そこどれだけ危ないと思ってるのよ。吹っ飛ぶわよ」

「はーい」

「ほら、行くわよ」

ぺぺぺぺぺーとゆっくり走り出す。

「あの……ねえ、お兄ちゃん……」

「どうしたー？」

「私、ね。……ホントに人を殺したんだよ？」

――おいお前、そいつから離れろ！――

――お前も殺されるっつってんだよ――

「……ん」

「お……お兄ちゃん？」

――クソッ！轢いたのか！？――

――あんまり気にかけるな。レースじゃよくある。ただの事故だよ、麟――

「……まあ、よくある話だ」

「……」

ベーペペペペペペ……

００４　世界最速、発つ。（後書き）

ＨＯＮＤＡ　リード９０
８９ｃｃ
８．４ＰＳ／６，５００ｒｐｍ
前ディスクブレーキ、後ドラムブレーキ
ＨＯＮＤＡのスクーターです。
２ｓｔでなかなか速い。んで意外とパワフル。
巨大な車体だけど意外と取り回しが良い。
二灯式なのに妙に暗い。
特筆すべきはその収納性で、シート下のメットインにはフルフェイスとハーフのヘルメットを一個づつ入れてもまだ余裕がありそうな上に、フロントカバーにも鍵付きの小さな収納がある。
ちなみに麟の出したリードはライトのＯＮ／ＯＦＦスイッチが付いた骨董仕様です。
豚野郎はこのスクーターが一番好きです。

さて、あとがきです。
面倒くさくなってる感が否めない仕上がりになっちゃいました。
正直この話はいらなかったよな。
最後の方のリードの上での会話が若干シリアスっぽいですが、掘り返す予定は特にありません。
気が向いたときに覚えてれば。
ここからは巻きで進めていきたい。

今回は前回以上に見直しが無いのでかなりひどい内容になってると思います。
とは言っても、仕事の必要書類よりは見直してます。
まあ小銭をもらえるイベント程度に見ていただければ。

ではまた。

００５　世界最速、布告する。（前書き）

僕は……僕は何をしたいんだろう。
帰宅したらちょっとええ話書きたいって言ってたけどまだ帰宅してないからええ話書かなくてもいいよね。
ってかひっどいサブタイだなぁ。どんだけ焦ってるんだ。

００５　世界最速、布告する。

お兄ちゃん、ＨＩＰ　ＨＯＰで食っていこうと思うんだ。
白波（２５）です。あ、麟の方です。
めっちゃふくらはぎかゆいけどがんばってエヴァの生い立ち的な話とか聞きながら走ってます。

「だから殺したんだ。私、もういい子じゃないんだね」

「そうか。悪い子も嫌いじゃないぞ、俺は」

「ホント？」

「まあ俺が悪い子だしな」

「んうー」

「何それ」

べし、べし

「おい、叩くなキティ」

「キティって何？」

「キティは子猫（キティ）だろ」

「知ってるよ！」

「ふはは」

「んむー」

「お、おっちゃんの言ってた町ってあれか。案外すぐ着いたな」

「うん！」

「御免！！」

宿屋を見つけたので扉を叩きながら叫ぶ。

「誰だ！」

「俺だよ！俺、俺！せめて扉開けて言えや！」

「何だガキがガキ連れて。お前にはまだ早いんだよクソっ！クソッ！俺だってなぁ、俺だってなぁ！！」

「うるせぇ&うぜぇ！宿泊客だよクソボケ！これで足りる？」

おっちゃんにもらったこづかい袋を見せる。

この世界の通貨とか知らないし。

「えー……マジ？こりゃパンくらいしか買えないわー。しかもカンパンのほう」

おっちゃんホンマにこづかいやないかー！

「まあガキにしちゃ頑張った方だと思うよ？うん。ほら、今日はもう遅いから帰りな」

「帰る家ないもん……」

「エヴァ？」

「グスッ……帰りたくても、帰れないんだもん」

うわぁ、荒ぶる幼女。

「つっても俺も商売でやってんだしなぁ。何があったかしらねぇけどさ……ん？コイツは……。おい、ガキ」

「んだよオッサン」

「うわ、利がないと分かれば即この態度。怖いわー。何、ちょっとした手伝いしてくれるなら泊めてやってもいいって話だよ」

「何？」

「まあ入れ」

何ここ最近のハートフルコメディっぷり。すっごいやん。

「話は簡単だ。お前は明日この平原の先にある森の木を１０本倒してこい。そこそこ太いやつをだ」

「倒すだけか？」

「ああ。たいして難しくないだろ？」

「まあそういう事なら」

「じゃあ今日はもう寝ろ。明日は叩き起こすぞ」

「ああ」

「ねえ、お兄ちゃん」

「何だ？」

「私あの人あんまり好きじゃない」

「俺もだ」

「……おやすみ」

「あまりにナチュラルにこっちの布団に潜り込んでくる事にはもう突っ込まんぞ」

「おいコラ起きろクソガキ！！」

「いや、テンション高い所、申し訳ないけどもう起きてるから」

「じゃあさっさと木切ってこい。ほら、のこぎり」

「あいよ。ああ、妹は置いて行くぞ。日光に当たったら爆発するから」

「嘘にしてももう少しマシな嘘つけよ。じゃあな。いそがねぇからゆっくりしてこい」

……妙だな。っつーか分かってはいるんだけど、変に疑って何もないとそれはそれでまずいだろうし、まあさっさと終わらせるか。森までは5キロってところか。開けた所だから前の森の中から見た2キロよりはずっと見やすい。バイク乗ってくほどの距離じゃねぇけど急ぐからな。一応早いの乗っていこう。

ＨＯＮＤＡ　ＮＳ２５０Ｒをネイキッドにしてまたがる。

杞憂だったらいいのにな。

と、もうついた。

さすがに速いわ。

「この辺りの木はまだ細いな。奥の方が太いか。さっさと終わらせんべんべ」

「っと、待ちな坊ちゃん」

小汚い風貌の男が４人、木陰から出てくる。

「ん？なんだオッサンら。俺のケツはバイク専用だから」

「悪いがここで君の冒険はおしまい。お前は死んで１万ドルの賞金首が手に入るって訳だ」

「賞金首？」

「しらねぇのか？お前といっしょにいたメスガキだよ」

なるほどなるほど。

「どうした？命乞いしたら笑ってやるぞ？殺すけどな」

「あぁ、残念、ホント残念だ。いい年してやっていい事とやっちゃいけない事の区別もつかないなんてな……がっかりだ」

「なに言……」

一番近くの男を殴り飛ばす。

パン！という音とともに首から上が消し飛んだ。

「おい、おま……」

近づいてきた男の腹を横から蹴ると胴が上下に分かれる。

「ひ、ひぃいいいい！！」

「ち、ちょっと待ってくれ、俺たちは別にこんな事したくなかったんだよ！」

２人の返り血を浴びた男は青ざめて命乞いを始める
が、クールな俺はそんな男に「俺だってしたくなかったよ！死ね！」
と声をかけると、すぐに帰るためにバイクを出す。

ＨＯＮＤＡ　ＮＲ５００（改）。

アンダーカウルを外し、ロングスイングアームで直進安定化、及び
ウィリー防止を図る。
タイヤもブロックパターンのものにしてすぐにバイクを押し、エン
ジンをかける。

当然だが、草原で後輪が滑る。
気にするな。俺は世界最速だ。滑ろうが、振られようが、回すだけ。
さすがに死ぬ前だったら、この車格だと身長も体重も低すぎて扱い
にくかったが、今は視力も力も安定している。
焦ってはいるけど超乗れてる。いけるぜ。むしろいけてるぜ俺。
ともなれば２分もしないうちに着くのは当然。
なんか３０人くらいが宿屋の周りを囲んでいる。
胸糞悪い。
１人がこっちに気付いたみたいだけど、もう遅い。
進行方向の真横を向いて吼えるＶ型４気筒をそのまま人の群れに突
っ込ませる。

みんな慌ててよけたおかげで誰も轢かなかった。
バイクを人殺しの道具には使いたくなかったし。結果論だけど。

「と、ここで殺伐とした宿屋にお馬さんに乗ったナマハゲが登場。
いい子も悪い子も無差別に千切って鼻毛千切って鼻毛まーーす！！」

壁を突き破ってバイクを振り回す。

「お〝に〝い〝ぢゃあ〝〝あぁぁん！！！！！」

「げぶぉあああああああああああああああああああ！！！！！！！」

ロリっ子に抱きつかれて俺は死んだ。スイーツ（株）

「リア充の１００倍リア充な俺が迎えにきたけど大丈夫だったか？」

「宿屋のおじちゃんに縛られそうになって……怖かったよー」

「おーよしよし。で、おっちゃんは？」

「ここ」

ｒァ　倒れた壁の下

急いでおっちゃんを引っ張り出して動かないように踏みつける。

宿屋の周りを囲んでた奴らが遠巻きに見てくる。気に食わない。

「で、俺のエヴァに何してくれようとしてた訳？」

「“俺”のだなんて……」

「へへ。照れるなよ。俺まで恥ずかしい。で、何しようとしてたの？」

「お……俺は別に何も……」

「お前がどうしようもなくクソみたいな脳みそしか持ってないみたいだからもう一度だけ聞いてやる。
聞き返したら殺す。黙っていても殺す。後でウソを言ったと分かったら、また殺す。逃げようとしても助けを求めても命乞いしても殺す。体の末端からインチ単位で削り落して殺す。
何で俺がここに居るか考えなかったの？馬鹿なの？死ぬの？お前のお友達は大した奴らだったよ。俺１人に５人でかかってきても１０秒で終・わ・り☆
まあ、死んだのは２人だけだったけど。で、よく見たらわかるよな？お前の上に乗ってる足だよ。この足に着いてる赤いのはいったい何でしょうか？あれ？もう黒くなってるわ。
で、俺のエヴァに何してくれようとしてた訳？」

「や、やめっ、ぎゃあああ！！」

「はいペナルティ１個目。まずは足の指な。次はどこがいい？」

「そっ、そいつを……領主に差し出せば、１万ドル手に入る、から」

「何？１万ドルってそんな大金なの？そんな端金でこの宇宙１かわいい女の子にひどい目合わしていいと思ってんの？」

「お、お兄ちゃんったら……」

「そ、そんな化けも」

グシャ……って？
ああ、踏み抜いちゃったぜ☆
あーあ、やっちゃった☆

まあ仕方ないよな。何かすっごい不快い話しそうな雰囲気だったし。

「お前一人を人殺しにしておけるかよ」

「そんな……／／／」

「おいエヴァ、こい」

「うん、お兄ちゃん」

俺はエヴァを抱き込み叫ぶ。

「いいかクソども！俺の名前は白波麟だ。んで、こいつが俺の大切な家族、エヴァンジェリン・マクダウェルだ。アレだ。とにかく広めろ。エヴァンジェリンを狙う奴はその悉く(ことごと)を白波麟が殺すと。わかったな？」

周りを見渡すが、全く反応がない。

俺は、俺より少し背が高い程度のガキを呼びつける。

「おい、そこのガキ！こっちに来い」

「えぇっ……「早く」は、はい」

助けを求めるように周りを見たが、そのガキを中心に人が引いていく。

諦めるような顔でこちらへ歩いてくるガキを超にこやかに迎える俺。

「俺が怖いか？」

耳元に顔を近づけて聞く。

「そ、そんな……」

「その恐怖を伝えて回れ。エヴァに手を出せば、白波が殺すと。いいな？」

「は、はははははいぃぃぃぃぃい」

「最低な返事だ。これをやろう」

ここを出る前に渡されたのこぎりをそのガキにあげる。

「ん？何？不満そうだけどいらないの？」

「いえ、まさかそんな……」

「ああ、そうなの？俺なら絶対要らねぇわー」

「え、えぇぇえええ！？」

「おいエヴァ、行くぞ」

「うんお兄ちゃん」

と、倒れたＮＲを見ると

「す、」

「す？」

「すっげぇえええええええええ！！」

「え？え？」

「だってホラ、あの勢いで突っ込んだのにフォークも曲がってなけりゃカウルにもヒビすら入ってねぇ！何これ！！やっべぇ！！！」

「お、お兄ちゃんって時々変」

「おい！俺は常に変だぞ！失礼だなぁ」

土民が見守る中2人でキャーキャー言いながらＮＲをリードに変えて走って行った。

あ、血は途中にあった湖で「チクショウ……取れねぇ……取れねぇよォ……」とか言いながら洗い流した。

別に時を超える勇者が下の町から生きてる婚約者を連れ帰ってきたりはしなかったし、夢の世界でもなかった。

００５　世界最速、布告する。（後書き）

ＨＯＮＤＡ　ＮＳ２５０Ｒ
２ｓｔ
２４９ｃｃ
４５ＰＳ／９，５００ｒｐｍ
前後ディスクブレーキ（前は二枚）
えげつなく速いフルカウルのレーサーレプリカです。
レプリカだから公道走行可能。だけど全力のポテンシャルは街中では出ないだろうね。
本文中に『ネイキッドにして』とか書いてありますが、カウル外してタイヤをブロックパターンに変えただけです。
豚野郎（わたし）が次買おう、次買おうと思い続けて買い時を逃したバイク。

※杉やん様にリクエストをいただきました
ＨＯＮＤＡ　ＮＲ５００
水冷４ｓｔ
４９９．４９ｃｃ
１２８ｐｓ／１９，０００ｒｐｍ
４気筒、９０°Ｖ型、ＤＯＨＣ３２バルブ、全シリンダツインスパーク
という男のロマンを詰め込んだ品。
実はすぐにでも出したいけど道路が舗装されるまで大分かかるし…
…という葛藤の末出た妥協点が「アンダーカウルレス」と「ロングスイングアーム」です。
ウィリー防止とか直進安定性とか本文では書いてますが、言い訳です。
ドリフトしたかっただけなんです。
エンジンは押し掛けなんで体力が要ります。きっと。

上記のステータスは１９８２年の最終型のものです。

あとがき

自分でも何したいのかわからない。
俺がわかんないんだから他の人はきっともっとわかんない。
戦闘描写って何だ。振り向かない事さ
バイクって何だ。ためらわない事さ
そんな感じで、ひょっとしたら大幅手直しをするかもしれません。
（多分しません）
次こそ家で書くので少しはましな文章に仕上げたいです。

追記
書こうと思って忘れてた。
今１４世紀って設定だけど『ドル』って通貨単位が出るのは１６世紀だから、文章中のドルは
「現在の価値に換算して３０００万円である」
とかそんな感じに認識していただければ是幸い

さらに追記
本文にＮＲをＶ８とか書いてたけどＶ４なので修正しました。
ってかあとがきに４気筒って書いてンじゃんあたい。
超恥ずかしい／／／
指摘してくださってありがとうございます、杉やん様。

００６　世界最速、魔法を覚える。（前書き）

逆にここまで魔法に触れなかったのはどういうアレなの？

００６　世界最速、魔法を覚える。

「お兄ちゃんは、強いね」

「どうしたんだ？急に」

「私ははじめて人を、殺したとき、怖くてずっと逃げてた。しばらくは何もたべれなかったもん」

「ああ」

「でも何より怖かったのが、溢れ出てくる……血をみて……ぉいしそうなんて思う自分が一番……」

「イインダヨ。キニスンナヨ。俺だって初めて人を殺しちゃった時はそりゃもうびびったさ。アレはスプラッタだったなぁ」

私のことを心配してくれるお兄ちゃんが好き。

「でもお兄ちゃんは昨日……」

「あぁ、別にアレが初めてってわけでもねぇし、それにホラ、俺みたいな仕事は多少狂ってないとまともにやろうなんて思えないしな」

まるで自分のこと悪く言ってるのに自身満々なお兄ちゃんが好き。

「そうなんだ。ねえねえ、お兄ちゃんの仕事ってなんなの？」

「レーサーって知らない？」

「れーさー？」

「ああ、バイクでどれだけ速く走れるか競う競技なんだけどな、知らないか」

私の知らない事を知ってるお兄ちゃんが好き。

「うん。ごめんね、お兄ちゃん」

「あーあー、別に！別に気にしてませんですしおすし！！」

普段は大人の人みたいなのに急に子供っぽくなるお兄ちゃんが好き。

「ふふっ、お兄ちゃんかわいい」

「あったりまえだろコノヤロー！子猫（キティ）ちゃんのお兄ちゃんは世界一かっこよくて世界一かわいいんだからな」

私のこと、キティって呼ぶお兄ちゃんも好き。

「お兄ちゃん大好き！」

「バカお前俺のほうが俺のこと好きだし」

「そんなことないよぉ」

「いいや、そんなことあるね。んで俺のことが大好きな俺は、俺よりエヴァの方が好きだぜベイベー」

お兄ちゃん大好き！！

どうも、砂吐きそうな諸君。
ちっさいリア充代表の白波麟（裏声）だ。
昨日、アレからそこそこ走ったあと、またえげつなく良いタイミングで湖があったからログハウスを建設してお話してたらいつの間にかイチャラブ空間が出来上がってた。
ンッフｗｗｗ恐ろしい話です。

ちなみにここまでくっさいセリフを言えるのも普段の努力の賜物さ。
ほら、レーサーってヒーローやん。ヒーローってかっこいいやん。
要するに俺かっこいいやん。
まあそれでも童貞なんだけど。
いや、ホラ。こっちにも選ぶ権利とかそんな話。
俺がロリコンだからとかそういう事実しか一切無い。　あれ？

ちなみに明日から魔法の修行でもするつもりです。
だって今まで「世界最速の魔法使い（どや顔）」とか言ってたのに魔法全然使ってない。
タイトル詐欺にも程がある。
明日から本気出す。（出展・未来訳聖書）

チュン……チュチュン……
チュチュチュチュチュン……
レーレデデデー
スズメかと思ったか？　インベーダーゲームだよ。
「ハッ……なんだ夢か」
「んぅー……」
寝る子は育つって言うけどどんだけ育つ気なんだろうねこの子は。
まあ吸血鬼だし朝に弱いのも仕方ないのか？
起きるまで待ってればいいか。
まあ俺も眠いしもう少し寝とこう
「んぅー……っはぁ」
「お兄ちゃん……寝てるの？」
「すー、すー、はー、すー、はー、すー、はー（二重息吹）」
昨日一生懸命頑張ってくれたもんね。
私のために……なんて思っていいのかなぁ／／／

「じゃあ私も……もうちょっと……」

「ふぁーーーあ→ぁ←あ→」

「あ〝ー、寝すぎて腰が痛い。ってもう夕方じゃん。おい起きろー、どんだけ大きくなるつもりですかー」

「ぅん……お兄ちゃん？」

「おはよう、キティ」

「おはよ、お兄ちゃん」

「って全然早くねぇんだよぉ！！魔法の練習どうすんだよ俺！今からやったらいいのか、そりゃそうだ！」

「ど、どうしたの、お兄ちゃん？」

「いやね、アレだよ。今日魔法の練習しようと思ってたんだよ」

「じゃあ私も練習いっしょにする！」

「いっしょにするっつっても俺魔法なんか使ったこと無いし何も教えられないと思うぞ？」

「え？でもお兄ちゃん魔法使いなんでしょ？」

「いや、当然、世界最強の魔法使いだけどな、でも使ったことは無い。まあ物は試しだよな。とりあえず外出るか」

「うん！」

セイホー。っつーわけで魔法の練習を始めます。

「お兄ちゃんの魔力ってすごいからきっと魔法も凄いよ！」

「何？そんなのもわかっちゃうわけ？」

「吸血鬼だもん！」

「やっぱりエヴァはすごいな」

貰ってきた記憶からー何かお手軽っぽいのは……

お、魔法の射手か。あとは火よ灯れ？勝手に灯ってろ。風よ？火よ？その続き何だよ？

「プラクテ　ビギ・ナル　魔法の射手・光の一矢」

指先よりちょっと向こうから出てきた光の棒がえげつない光量と音量を撒き散らしながら着弾点から半径２０ｍを焦土に変えた。

魔法ってすっごいな。

「お、お兄ちゃん？」

「あ、ああ、エヴァ」

「多分お兄ちゃんが最強だからこんなんなってるだけで、普通はこうはならないと思うよ？」

「……世界最強も良い事ばっかりじゃないって事なんだろうな」

「落ち込まないで、お兄ちゃん」

「おちこんでなきゃ、おちんこもでてないよ。何言ってんだい」

「？？？」

「じゃあ次はエヴァやるか？」

「でも私杖なんて持ってないよ」

「ああ、そうか。ちょっと待ってな。えーと、杖、杖……って杖無くても魔法は使えるみたいだぞ？」

「えぇ、そういえばお兄ちゃんも杖は使ってなかったよね」

「いや、吸血鬼は無くても使えるらしい。俺は吸血鬼じゃないけど、ほら、最強だから」

「お兄ちゃんだもんねー」

「ああ。じゃあやってみる……前にだ。エヴァは魔法を使えるようになったら何をしたい？」

「私は……空飛んだり、お兄ちゃんと遊んだり、困ってる人を助けたりしたいかなー」

「うんうん、お兄ちゃん自慢の妹だな。でもお兄ちゃん独占欲も世界最強だから俺以外に優しくされると少し寂しい」

「えぇっ！じゃあ困ってる人は助けないよ！！」

「それもどうかと思うけど、まあ状況により、だな。それも追々勉強してもらいたい所存です。まあ、使ってみない事には始まらないし、いっぺんやってみ？さっきお兄ちゃんの言ってた呪文そのままで」

「うん！　プラクテ　ビギ・ナル　魔法の射手・光の一矢！」

ぽすん……
ぽすん……って……

「うぅ……」

「ちょっと待ちたまえ！！泣くにはまだ早いぞ妹様よ！！」

「ぅぇ？」

「人には向き不向きがあってな、光の矢が向いてなかっただけかもしれない。
がんばれがんばれできるできる絶対できるがんばれもっとやれるって！！
　やれる気持ちの問題だがんばれがんばれそこだそこだ諦めんな絶対にがんばれ積極的にポジティブにがんばれがんばれ！！
　北京だって頑張ってるんだから！」

「お兄ちゃん……／／／……ペキン？」

一瞬で涙目幼女を笑顔にするなんて、さすが炎の妖精やでぇ。

「だから一個づつ練習していこうな。大丈夫、エヴァなら出来て当然なんだから」

「うん！」

「じゃあさっきの光の一矢を火の一矢やら氷の一矢やらに変えてやってみようか」

「はい！」

結果だけ言うならエヴァは氷の魔法が得意みたいだ。

でも俺が撃った魔法よりかなり弱い。

かと言って落ち込むでもなく、むしろ「やっぱりお兄ちゃんは最強だもんね！」と、頭おかしいんじゃないかってくらい誇らしげに、かつ可愛く言ってきやがった。

やっぱりうちの子猫が世界一可愛いわ。

００６　世界最速、魔法を覚える。（後書き）

あれ？バイク……。
ども。紅の豚野郎です。

お気に入り登録してくださる皆様、評価をくださる皆様、感想を送ってくれる皆様はきっと神様に違いありません。
愛しています。

今回はどうやってバイクに絡めようか考えている間になんかキリが良くなったのでひとまず終わっておきます。
次もいつ投稿になるかよくわかりませんが、よろしくお願いします。

００７　世界最速、５００年分巻きで行ってー。（前書き）

サブタイ何コレ

エヴァの名前にＡ・Ｋつけたかっただけなのに勢いで５００年たった。

００７　世界最速、５００年分巻きで行ってー。

おうぇっほ！！えっふ！！げっふ！！！
最近タバコを吸いはじめた白波麟です。
ゲホゥ！！
最近凄いことが判明しました。
実は今１４世紀らしい。これにはさすがの俺もびっくらこいた。
そらバイクもレースも知らんわな。

エヴァに魔法を教えてもう5年目になりました。エヴァも教えた魔法全部無詠唱で出せるようになったし。
始動キーは俺が考えてあげた。３年も悩んで。あの時の喜びようと言ったら、もうそのまま式場に駆け込む勢いだったな。
初めの２年くらいは強者も雑魚も問わず一週間に一回くらい賞金稼ぎが襲い掛かってきたりしてたけど、２人以上の時は一人を残し全員を殺した後残った奴を全力でビビらせるってのを繰り返してるうちに大分減った。
エヴァもこの5年間で結構スれてきたのか、「身の程を思い知れ」だの「その程度の力で私たちに勝てると思っていたのか？めでたいバカだな貴様は」などとドS化が進んでいるようです。
吸血鬼独特の光に弱いとか流水に弱いとかはほぼ克服してるし怖いもの無し。
俺に対しては相変わらず「お兄ちゃぁ～ん」などと甘ったるい声を出して抱きついてきてるから安心。
いや、安心じゃないだろ。エヴァにゃんもう１５歳だぞ。いくつになってもかわいいな。安心したわ。

「お兄ちゃんも老けないんだねー」

「ああ、世界最強の不老不死だから。不死殺しでも死なんかもしれんね」

「Ａｔｈａｎａｓｉａ　Ｒａｃｅｒ（不死のレーサー）って奴かな？」

「リン・Ａ・Ｒ・シラナミって何か締まらんな。でもそういうお前はＡｔｈａｎａｓｉａ　Ｋｉｔｔｙ（不死の子猫）って所か」

「エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル？」

「様になってるじゃないか！それでこそ我が妹よ！！」

「えへへー」

「で、Ａ・Ｒはいったい名前のどこに入れるべきだろう……アタナシアレーサー白波麟……漫画のタイトルみたいだ。しかもあんまり面白くない方の。シラナミ・Ａ・Ｒ・リンでいいか」

「別にそんな無理しなくても」

「何言ってんの。エヴァが考えてくれたのに名前に入れないとかバチが当たるの一周して俺がバチ与えるっつの」

「お兄ちゃんっ！」

「おいおい、そんなすぐに抱きつくなよ。うそです。１００年後も１０００年後も変わらず抱きついて来い」

あはははは、うふふふふ

「っと、悪いな嬢ちゃん、坊ちゃん。そこまでだ」

きゃっきゃっなんてエヴァと戯れていたら革の腰巻！って感じのおっさんが2人とボストロールが一匹出てきた。ボストロールの「ボスト」って何だよ。

「誰おっさん？」

「何だ貴様は？賞金稼ぎか？」

「賞金？何いってんのか知らねぇけど俺たちはしがない人売りさ。んで君たちは商品になるって訳だ」

「弁えろよ、クズが。お兄ちゃんと私に触れられると思っているなんて、見下げ果てたバカだな」

「口の減らねぇガキだな。捕まえろ！」

「ふん、とりあえずこれはおはようの挨拶だ」

そう言って氷の矢を放ち男たちの足元を固める。
じゃあ俺も。

「そしてこれがお休みの挨拶だ」

火の一矢で一帯を焦土に変える。
挨殺するたび、友達増えるね☆

「あの世で会おう。最も、俺達があの世に行く日は来ないがな」

「お兄ちゃんかっこいい！！」

ｂｅ　ｃｏｏｌ．．．

……ｃａｎ't　ｃｏｏｌ

「エヴァもかわいいぞぉぉおお！！」

火の海で二人で抱きつく。

何この構図。

～さらに数百年後～

ドドドドドドッと低音を響かせて走る。テキサスからこんにちは。

えげつなく足つきの悪いＨＯＮＤＡ　ＣＢ１３００に一人で乗ってる。

エヴァは毎晩底なし魔力の俺の血を吸ってる間にものすごい魔力になった。

３００年ほど前に魔法世界で居城を構えていたけど、飽き際に城ごと瓶詰めにして持ち運んでいる。

魔法って凄いよね。

あとは闇の魔法とかも開発してたし、吸血鬼の弱点なんかも完全克服。天才。お前らにはやらない。

何より変わったのが、最近旧世界の都市部で、荒削りだけどバイクを見かけるようになってきた。

だいたい１９００年台だろう。と思う。
今エヴァは「人形にばっかり戦わせるのも飽きた」と日本でちっさいおっさんに合気柔術とやらを習ってる。
簡単な護身術くらいなら知識の中にあるから教えられると思ってたけど、いざ調べてみれば銃の構造、撃ち方やら剣の扱い方やらの道具があることを前提にする技術ばっかりだった。
まあこの指輪があるからだろうけど。
ちなみに、バイクと車だけでいいって言ったのに飛行機や潜水艦、船などの乗り物の構造、及び操縦の知識もあるみたいで、意外と重宝してる。
ここ、アメリカから日本に数十分で行く事も可能な訳だ。転移したら一瞬だけど。

あと、大した話じゃないけどエヴァの賞金が５００万ドルになってるらしい。
そしてこっちは大した話で、俺の賞金は2億ドル。２００億円ってアホか。何回宝くじ当たるつもりだ。
魔法世界から一国の軍が空飛ぶ戦艦に乗って来た時も魔法の射手だけで墜とした上に
「君らの戦力うーんこ☆」とかクソみたいな挑発したり、お城に絵の具でＡＨＯＮＤＡＲＡとか書いたりしたり、投石だけで軍隊潰してたら賞金が凄いことになってた。これ内定とかに影響すんのかな。
エヴァは「闇の福音」「人形使い」「悪しき音信」「禍音の使徒」「童姿の闇の魔王」「悪の妹」などと呼ばれてる。
一方、俺の方は「邪神」。いや、わかりやすくていいけどさ。
決して「邪神モッコス」で検索しないように。

そして、まあ、アレなんだが、エヴァとアレをソレ、にゃんにゃんして魔力パスを繋げたから、どれだけ離れてても魔力で会話できる。
にゃんにゃんしても呼び方はお兄ちゃんだが。

と、ちょうどお呼びがかかった。

『お兄ちゃーん、免許皆伝もらっちゃったよー』

『おお、そうか！ならば今日は宴じゃぁぁあああああああああ！！！！ちょっと待っててな』

空気を伝い、風を媒体に転移魔法を使う。エヴァの前にバイクに跨ったままドリフトで現れる。

「お兄ちゃん」

すかさずエヴァも抱きついて流れるようにタンデムシートに乗る。

「ちょりーっす☆惣ちゃん、エヴァ回収に来たぜ」

惣ちゃんってのがエヴァに合気柔術を教えてた先生だ。本名は知らん。

「おお、麟か。随分強うなってもうわしも勝てんわ」

「ふはは。エヴァは天才だからな」

「白波様。そのけったいな乗りもんで出てくるなと言ってるじゃないですか」

こいつはエヴァの兄弟子の盛平。いいおっさんだ。

「まあまあ。じゃあ惣ちゃん、生きてたらまた合おうぜ！」

「じゃあな。世話になった」

やっぱり普段はこの態度なんだ、エヴァ。

「ああ。お前らも達者でな」

はい久々の達者いただきましたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
ぶるるん！ぶるるん！ぶるるるるるるるるるる

「エヴァはどこ行きたい？」

「お兄ちゃんとならどこでもいいよ！」

「そうだ、京都行こう（言ってみただけ）」

「京都！？やったぁ！！」

「うわぁっ！すっごい食いつき！」

京都行きました。

００７　世界最速、５００年分巻きで行ってー。（後書き）

ＨＯＮＤＡ　ＣＢ１３００　ＳＵＰＥＲ　ＢＯＬ　Ｄ-ＯＲ
水冷４ｓｔ
１，２８４ｃｃ
７４ＫＷ［１０１ＰＳ］／７，０００ｒｐｍ

ＣＢ１３００って書いときながら、ＳＦじゃなくボルドールというフェイントです。
あれ？初めての排気量４桁台だ。
普通に考えて身長１４０ｃｍじゃ乗れない。
当然サスペンション交換とシートのアンコ抜きはしてあります。

豚野郎は昔これに乗った先輩とツーリングに行ったとき、ＲＧ２５０Γ（ＲＧＶじゃないです）に乗ってたのに直線で置いていかれました。
無茶苦茶速いです。

あ・と・が・き
合気道の事に関しては突っ込まないでください。
全然知らないんです。
あと、面倒になったから５００年飛ばしました。
これといってめぼしいイベントも無かったし。
麟に銃を使わせるかはまだ決めてません。
幸い身内にガンマニアがいるから資料には事欠きませんのであるいは。

００８　世界最速の妹、バイクに乗る。（前書き）

あんまり詳しく書くとよくわからなくなるからそれほど一生懸命にならないように書きました。
チャチャゼロ初登場！

００８　世界最速の妹、バイクに乗る。

どうも、白波麟です。
エヴァと京都行って奈良行ってと観光しとったんやけど、時が建つのも忘れて遊びほうけてたらいつの間にか戦争始まるいう話聞いたから魔法世界に逃げ込んだ所やねん。

「お兄ちゃん」

「どないしたん？」

「移ってるよ、京都弁」

「まあ奈良弁やねんけどな」

現地人以外には奈良弁も大阪弁も同じように聞こえるみたいやけど。
ちなみに逃げ込んだのに旧世界より殺伐としてるのはこれどういう事なんだろうね。

「見つけたぞ！邪神と闇の福音だ！！」

「見つかっちゃったＺＥ☆」

「お兄ちゃんったら、お茶目なんだから」

前方に１０００を超える魔法使いがいる。

「魔法用意！撃て！」

「エヴァ、下がってろ。ここは俺が受ける！」

邪神が闇の福音を下がらせる。
どういう訳か、魔法は全て邪神に着弾した。
大きく土煙が上がり、標的が見えない。

「やったか！？」

「油断するな！次隊、構え！詠唱準備！」

「はい、隊長！」

ゆっくりと土煙が晴れていく。
奴が倒れていすシルエットが見えるが、まだ安心する訳にはいかない。
いや、あれは……犬！？
倒れ伏した邪神の横に、犬がいるように見える。
ってかいつの間にか闇の福音がいない。
邪神は犬の頭に手を置き、

「パトラッシュ、僕もう疲れたよ……」

な……何か言ってらっしゃるーーーー！！！！！！！！！！
えぇえええええええ！？
何！？何コレ！？どういうことなの！？
ええい、意味の分からんことを。

「かまわん！詠唱開始！！」

「た、隊長！私には……できません」

「うっ、パトラッシュ……」

「絵は……絵は見れたんだろうか……」

な……「何でやねぇぇぇぇえええええええええん！！！！！！！！
！！！！！！！！！！！！！！」

「確かに私も泣いたけど！！！
でも今やらないといけないの、ソレ！！！！
んでお前ら、アレはネロじゃないから！！邪神白波だから！！！！
そこんところ間違えないように、冷静になってもう一回詠唱開始し
て欲しい」

「た……隊長……」

「何だ！撃てないってのか！？」

「アレを……」

口と目を見開いている副隊長が指差す先には邪神がいたはずだ……
が……

「天使が降りてきているゥぅぅぅうううううううう！！！！！！！！
！！！！！！！！！」

ど、どういう事だ！？
犬だけなら確かに用意も出来ただろう。
しかし天使！？
何故、何故邪神の元に天使が……
天使が……邪神とパトｒ……犬をつかんで空に飛んでいき、そして
見えなくなった。

「隊長」

「……ああ」

「帰ったらフランダースの犬をもう一回読んでみます」

「ああ！」

帰って国王に報告したらフランダースの犬（書籍）が本体に配給さ
れた。
私は一生国王についていこうと思った。

「
『フランダースの犬』

ネロ：白波　麟
パトラッシュ：指輪
天使（太）：指輪

演出：エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル

主題歌
明後日からの咆哮
作詞：ニーチェ
作曲：近所のおっさん
歌：ＧＡＭ　ＰＲＯＪＥＣＴＯＲ

うん、超大作だったな、エヴァ。
お前の糸が無かったら成功しなかったぞ」

「えへへ。お兄ちゃんもカッコよかったよ」

「ふはは。しかしよくアドリブであんな上手く出来たもんだよ」

「そりゃそうだよ。もうお兄ちゃんとは５００年以上一緒にいるもんね」

「一心同体だもんな」

「うん！」

さて、せっかく無意味に土地が広大なんだからエヴァにもバイクを乗る練習をしてもらうとするか。
きっと楽しいはずだ。

エヴァは「お兄ちゃんの後ろが一番好き」なんて抱きつきながら言ってたけど。犯すぞ。

「エヴァ！エヴァ！！キティ！！おいチャチャゼロ、キティ見てない？」

「ア？見テネーナァ。愛想尽カシテ出テイッタンジャネェカ？」

こいつはチャチャゼロ。大昔拾った人形にエヴァが魂を入れた奴だ。なかなかイカレた性格をしてる。
何故か俺のことを「ニイサン」と呼ぶ。「ニーサン」じゃなくて良かった。

「砕くぞクソ人形」

『エヴァどこー？』

『あ、お兄ちゃん！今水浴びしてるんだ』

「水浴びしてるらしい」

「ソレヲオレニイ言ッテドウスンダヨ」

「乗り込んでくるぜー！！お前は来んなよ」

「頼マレテモ行カネー」

「エヴァー！」

「速ェ！！」

「キティィ……」

「お兄ちゃん……」

ふぅ・・・

え？あぁ、うん。そうだよ。

「エヴァ」

「なぁに？」

「エヴァもバイク運転してみたくない？」

「うーん……。お兄ちゃんが教えてくれるなら」

「ィヤッホォォォォウイ！！！」

とりあえずブロックパターンタイヤでスプロケットをロングに振ったＨＯＮＤＡ　ＮＳＲ５０を二台とスオーミーのエクストリーム（

ヘルメットだぜ！）をふたつ出す。

「このバイクちっちゃいね」

「オレヨリデカイケドナ」

「白波はバイクを選ばないんだよ。太公望もルアーを選ばないというしな。じゃあ各部名称からだ」

「うん！」

「イカれたメンバーを紹介するぜ！
キー！シート！タンク！ハンドル！アクセル！ステップ！前ブレーキレバー！後ろブレーキペダル！クラッチレバー！シフトペダル！キックスターター！スタンド！
以上だ！
これだけ覚えてたら何とか乗れる！」

ビシィィィィイ！と一々指差しながら叫ぶ。

「わー」ぺちぺちぺち

「タンクは常に足で挟んでおくように！例外はあるがひとまずはこれで覚えよう！」

「そしてシフトペダルだが、クラッチを握りながら変速する。
これはリターン式と言って、かなり一般的に普及されてる変速方式だ。
他にも前出したＳＵＺＵＫＩのバーディーみたいなロータリー式、リードのような変速動作の必要ない無段階変速というものもある。

操作方法だが、1↓N↓2↓3↓4↓5↓6速の順番で、一番下が1速だ」

ガシャンガシャンとシフトペダルを動かしながら説明する。

「とまあ口で言っても俺がどこまで説明したからわからなくなるから乗るのを見といて。
左手と左足が重要だから特によく見とくように」

「はい」

「じゃあ次はバイクに乗るとき気をつけることだ！
エヴァがこけたら死ぬ！」

「私不死だよ？」

「俺が『エヴァをバイクに乗せてしまったばっかりに、いくら死なないとは言え転倒させてしまった』というストレスで死んでしまう」

「過保護モココマデ来レバ立派ナモンダヨ」

「しかし、バイクはこけて覚えるもんだ！（違います）なので俺は考えた。そうだ、エヴァって吸血鬼なんだから身体能力高いしいざこけそうになったら離脱すればいいじゃん」

「うんうん」

メモとってる。
そんな重要なこと言ってないと思うんだけどな。

「ソレデモコケソウニナッタラドウスンダ？」

「俺が助ける」

「お兄ちゃん……」

「キティ……」

「オェェエエエ！オイ御主人！イツノ間ニ砂吐ク機能付ケヤガッタ！」

「愛の成せる技だな、エヴァ！」

「付けた覚えないけどね」

「ちなみにブレーキかける時は路面が舗装されててタイヤのグリップが良い時は前強め、それ以外は後ろ強めだ」

「うん！今は後ろ強めだね」

「そうだ。さすがエヴァ！天才！愛してる！
当然だがバイクごとにブレーキの効きや力加減が変わってくるから慣れろ！
じゃあひとまず乗ってみよう。エンジンはかけるからN↓1↓2↓

1→Nで停車だ。
まだ曲がらなくてもいいぞ」

「うん！」

～30分後～

「よし、エヴァは天才だから俺の予想通り発進、停車は完璧だ！
これを覚えればもう半分乗れたようなもんだ！」

「私もレーサーになれるかな」

「それはまだまだ先だな。そもそも一般道を走る乗り方とサーキットを走る乗り方は全然違う」

「御主人ヲ甘ヤカサナカッタノッテ、コレガ初メテジャネエカ？」

「こればっかりはな。でもいずれ全開で走る俺についてこれるようになるといいな」

「うん！」

「じゃあ次は旋回だ。ハンドルを曲げるんじゃない。心を曲げるんだ。嘘だ。走行中に車体を倒せば曲がれる。
これも手本を見せるからちょっと見てな。次見ておくのは全部の手足だが、大丈夫だよな」

「当然だよ！」

「というわけで走ってきたけど、何かわかったか？」

「曲がる前にブレーキで曲がり終わる時にはアクセルだね」

「ああ。さすがエヴァ！」

「お兄ちゃんっ！」

「オエェェエエエエ！」

抱き合う俺達をみて砂を吐くな、チャチャゼロ！

エヴァが旋回してる。

「普段自分では絶対にしないような模範的な乗り方しといてよかった」

「ニイサンノ運転ハイカレテルカラナ」

「よーし、エヴァ、もういいぞー！」

「どう？お兄ちゃん」

「宇宙一かわいい！」

「モウ吐ク砂モ残ッテネエヨ」

チャチャゼロの横に砂山が！

「じゃあ走ってみるか。この道沿いに行こう。エヴァが前走って。後でフォームチェックするから」

「うん！」

エヴァと俺が続いて走り出す。

この時俺はこんな日常がずっと続くと思っていたんだ。

あんなことが起こるまでは……。

言ってみたかっただけなんだ。

「オレヲ置イテ行クナヨ……」

００８　世界最速の妹、バイクに乗る。（後書き）

ＨＯＮＤＡ　ＮＳＲ５０
水冷２ｓｔ
４９ｃｃ
７．２ＰＳ／１０，０００ＰＳ
前後ディスクブレーキ
今回はギアを最高速寄りにセッティングすることによる、急加速の低減とブロックタイヤにすることによる路面対応のみになります。

中高生の三種の神器のうちの一つ。
後の二つはＮＳ－１とエイプ５０（豚調べ）。
通称Ｎチビらしいが僕の周りではＮ５（エヌゴ）。
５０ｃｃクラスではかなり速いほう。
未だに一部の峠では現役。

ＳＵＺＵＫＩ　Ｂｉｒｄｉｅ
空冷２ｓｔ
４９ｃｃ
多分２．４ＰＳくらい（？）
前後ドラムブレーキ
３速ロータリー式ミッションとそのどう見てもカブにしか見えない風貌からスズキのカブ、略して「スズカブ」と（豚野郎に）呼ばれている。
２ｓｔなのに嘘みたいに遅く、ノーマルではギアの限界か、４５キロあたりから体が液状化現象を起こしかねない振動と共にエンジンがうなる。
そのくせ燃費はしっかり２ｓｔ。
現行のバーディーは４ｓｔ５０ｃｃモデルのみとなっている。

マイナー国産車の中でも特にファンの少ないバイク。
私はけっこう好きです。

ＳＵＯＭＹ　ＥＸＴＲＥＭＥ
イタリアのヘルメットメーカーのフルフェイスヘルメット。
一つ８万円ほどするが、値段相応のかぶり心地。
今回出したのがピンク（エヴァ用）と赤（麟用）の一つづつ。

あとがき

エヴァをバイクに載せる計画！
麟はエヴァにバイクには乗って欲しいけどレースには出て欲しくないと思っています。
俺はどっちでもいいと思ってます。
皆さんは安全運転で乗ってください。

チャチャゼロが出ましたね。
すっかり忘れてました。
赤き翼イベントは全無視してエヴァ、麟とナギをちょっと絡ませるくらいでいいかな。

００９　世界最速、おちょくる。（前書き）

父さんが少しかわいそうな話。
というか……バイク……。

００９　世界最速、おちょくる。

言えない……
実はバイクに乗るより足で走る方が速いなんて口が裂けても言えない……
ああ、どうも。げんなりナリ。しらなみです。

腐った火星みたいな所の偉い人を散々脅したりからかいまくった挙句追っ手が面倒になって適当に旧世界とか魔法世界とか関係無しに逃げてる。
その過程で、魔力を隠せるネックレスとか売ってたからスペアに２本と俺とエヴァで一本づつ買ってつけてる。

今朝いい感じの湖があったからこの６００年で、最早ログハウスとは呼べないレベルの木の豪邸で休んで、起きると来客があった。
みたら赤髪の優男が扉の前にいる。

「すんませーん、誰かいるか？」

「うわ！イケメンだ！！おいエヴァ！逃げろ！！イケメンがうつる！！！」

「なぁに、お兄ちゃん……誰だ貴様？」

「その落差にはちょっと傷つくな。俺はナギ・スプリングフィールドってんだ。君らくらいのオレンジの髪の子供捜してるんだけど、見てねぇか？」

「ちょっと待って。エヴァ、俺にイケメン伝染ってない？大丈夫？」

「大丈夫。女の子に見間違えるくらい可愛いよお兄ちゃん！イケメンにはなってないよ」

「これは初めてされる反応だな……」

「そして、ナギ・……ふふふんフィールド。残念ながら旅しまくってる最中の俺達も旧世界、魔法世界共にその情報だけで印象に残るほどのオレンジ色の髪を見た覚えはない」

「情報が少なすぎるんだよ、小僧。出直せ。死ね」

「んのクソガキどもが……ってかスプリングフィールドだよ！」

「もう少し短めの苗字で。よろしく」

「ナギ・スフィとかどうだ、小僧？」

「あーあー、わかったわかった。俺が悪かったよ。で、親御さんとかいる？」

「「いらない」」

「要るか要らないかじゃねぇんだよ！！居るか居ないか聞いてるんだよ！！」

日本語じゃないのにどうやってニュアンスの違いとかわかんだろう。この人怖……。

「親はいないよ。残念だったな」

「というわけでナギ・サスペンションフィールド「スプリングだな」……ナギ・スプリング。お前はこの面倒なガキ二人をわざわざ相手したのに結局無駄だったって訳だな。かわいそうに」

「やめときなよ、お兄ちゃん。この小僧、お兄ちゃんのお尻狙ってるよ」

「狙わねぇよ!!」

「俺、後ろはバイク、前はエヴァ専用だから。お前に入ってくる余地はねぇから!!」

「いや、もういいわ。邪魔したな」

やっと諦めてくれたか。

俺はエヴァに目配せをして荷物を纏める。

「何でついてくる?」

ナギがこっちを見ながら言ってきた。

俺達は肩を寄せ合い、エヴァと耳打ち合う。

「お兄ちゃん、こいつ何か言ってるよ?」

「進行方向が一緒だからってついてこられてると思ってるんだよ。

過去、よっぽどひどいストーカー被害に遭ったんだろう。そっとしといてやろう」

「聞こえてるからな。というか聞こえるように言ってるだろ！！」

「まあまあ、そう怒るな。お兄ちゃんもこの通り、反省してるんだし」

「チッ、うっせぇなぁ……。反省してまーす」

「く……ハッハッハ！！いいぜ、このガキ。俺をここまでバカにした奴は初めてだ。
ちょっとキツイ灸を据えてやるから覚悟しな。
信じるか信じないかはわからねぇが、俺は魔法使いってやつでな。
まあ半日ほど怖い夢を見てもらうことになるが、覚悟しな」

「おい、聞いたか、エヴァ。可哀想な上に痛い人だ」

「怖いよ、お兄ちゃん」

この時“ブチッ”っと聞こえたのは多分気のせいじゃないと思う。
ナギは懐にさっきまで持ってたメモ帳か何かを仕舞ってこちらに杖を構えた。

「マンマンテロテロ……雷の斧！！」

何で怖い夢見せるのに攻撃魔法なんだよ！
とっさに元々攻撃範囲に入ってなかったエヴァを２０ｍほど遠くに転移させて魔法を受ける。

「魔力は抑えたから死にはしてないだろう……が……」

そこには天に指を突き立てた仁王立ちの俺が！！

あれ？ネックレス割れてるじゃん。

あ、落ちた。

とりあえずエヴァに手を振っておこう。

「おい、何で立ってやがる！？っつーか何だよその魔力！？」

「そんな事よりナギ！お前……卑猥な始動キーだな」

「うるせぇ！英語圏じゃ別に卑猥でもなんでもねぇよ！！っつーか今お前妹に転移使ったよな！その有り余る魔力で！！」

「ただいま、お兄ちゃん！」

「おお。おかえり！」

そう言いつつエヴァのネックレスもはずす。

エヴァの魔力量にも気付いたようで、

「何者だ、お前ら……」

「こちらエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル・シラナミ。俺の自慢の妹だ」

「そしてこの方がシラナミ・Ａ・Ｒ・リン。私の自慢のお兄ちゃんだ」

「シラナミ……だと……！？」

この反応……死神か！？代行の方か！？

「ふん、ようやく気付いたか」

「やっぱり今時車も走ってない未開の地出身の人って世間知らずだわー。麟ちゃんびっくり」

「闇の福音と、邪神？」

「誰がモッコスだ！！」

「お兄ちゃん、流石に言ってないよ」

「な……何てこった」

「という訳で、俺達にお前を殺す意思は無い。泣いて感謝しろ」

ペンダント代をもらってスペアをつけた俺に死角はない。

「そうだ、お兄ちゃん」

「んあ？どうした、エヴァ……なるほど」

エヴァの目を見ただけで判断した。

「よし、ナギ、感謝しろ。俺達はしばらくお前についていく事にした」

「感謝しろよ？」

「ちょ、まてまてまて！！俺はそんな事頼んでないぞ！！」

「照れるな照れるな！！」

「いくらお兄ちゃんがかわいいからって手を出すんじゃないぞ？」

「出すかぁぁあああああああああ！！！！」

ナギと行動を共にするようになったから側車付のバイクを出すか車を出すか迷っている。

「おい、ナギ。そのクソ長い杖折り畳め」

「無茶言うんじゃねぇよ」

「オイ御主人、コイツ殺ッテモイイノカ？」

「暇つぶしの道具だ。一歩手前で我慢しとけ」

「包丁で突いてくんじゃねぇ！」

「仕方ない。車で良いか」

指輪をＨＯＮＤＡ　Ｚ　ＴＵＲＢＯ（軽車）に変える。

理由は後部座席が狭いからだ。

「？何言って……何だこりゃ！？」

「おい、早く乗れ」

そう言って運転席のシートを倒してやる俺マジ紳士。

「ちょ、狭、狭いぞ邪神！」

「麟だ、三千院ナギ」

「マジで出してくれ……」

「チッ、仕っ方ねぇなぁ！！」

今のって俺が悪いのか？と嘆くナギを尻目にＺを一旦指輪に戻してＴＯＹＯＴＡの３代目ウィンダムを出す。

「ほら、乗れ。エヴァは左から回ってな」

「……あいよ」

「はーい」

「で、目的地どこだよ」

「あ?あぁ、今は西に向かってる所だが」

「ふーん」

鍵を回してエンジンをかける。

今日は少し暑かったからエアコンの風が心地いい。

「世の中にこんな乗り心地がいい車があったなんてなぁ。さっきのはマジで地獄だったけど」

「ああ、まだ無ぇよ」

「何言ってんだ?まあいいか。しっかし聞いてたのと随分違うな。麟もエヴァも」

「フン、大方ろくでもない噂ばっかりだったんだろうさ」

「そうだよな。普通に考えたら『☆超可愛い兄妹賞金首☆』としかならないもんな」

「いや、普通に考えた結果なら最もそうなるべきじゃないだろ」

「じゃあどんな噂だったのよ、ナギ助」

「ああ、相手の首をねじ切る兄と、その吹き出た血を啜る妹って聞いてるぜ」

「マジかよ!!そんな奴いんの!?怖っ!!外出歩けねえよ!!!」

「お兄ちゃん、私達の事だよ？」

「そんな事しねぇよ！！！」

「したなんて言ってねえだろ。どんだけ自由だ、お前は」

「血も涙も無い殺戮兄妹だとか「殺戮人形ならお前の隣にいるぞ」名前を呼んだらその晩殺しに来るとか「そこまで暇じゃねぇよ。暇だけど」」

人の車に「でもなぁ」とか言いながら偉そうにふんぞり返ってる。何なのこいつ？

「いざ蓋を開けてみるとシスコンにブラコンだ」

「「すごかろう」」

「ってかちょっと待ってよ、Ｈｅｙ　ｂａｂｙ。ナギ・スッパムーチョってどっかで聞いた事あんだよな。ごく最近」

「スプリングフィールドだ。千の呪文の男（サウザンドマスター）っつってちょっとくらい有名なつもりだったんだがなぁ……」

「ああ、それだ。サウザンアイランド。前潰した国の王がそいつが俺達を狙ってるっつってたわ。狙ってんの？」

「狙うかよ。勝てる気がしねぇわ、バーカ」

「誰が天パだ！！！！！！！」

「言ってねえよ！！！！！」

正直ちょっと楽しかった。
え？ナギとの掛け合い？
違う違う。ナギと話してる間つまらなさそうに外見てるエヴァ観察するの。

「おい、エヴァ」

「ん？どうしたの？お兄ちゃっ……」

言葉の途中だがナギに見せ付けるようにキスしてやった。

「この際、兄妹なんだから、とかあんまり見せ付けるな、とか言わねぇからせめて前見て運転してくれ！！」

００９　世界最速、おちょくる。（後書き）

※自動車のスペックはあまり詳しく載せません。

ＨＯＮＤＡ　Ｚ　ＴＵＲＢＯ（四輪車）
４ＷＤ
軽自動車
後部座席が狭くて、意外と遅くは無い。
５０００ｒｐｍあたりから申し訳ない気持ちになりそうな音と共にターボがかかる。
豚野郎の母が知り合いから無料でもらってきた。

３代目　ＴＯＹＯＴＡ　ＷＩＮＤＯＭ
ＦＦ
高級車然とした高級車。
乗り心地は最高で、車幅が広いため下手くそお断り仕様。
強いてあげるなら排気音が静か過ぎるため、走ってるのに気付かれないことが稀にある。
レクサスのＥＳという車輌と同系統。

エヴァと麟のイチャラブ物語　あとがき

毎回読んでいただいてありがとうございます。
今話の内容もスカスカになっています。
どうやって麻帆良に繋げるか考えた結果、原作沿いでこうなりました。
ってか麟にはちゃんと前が見えているんだろうか……。
細かなところに原作とのズレが生じているかも知れませんが目を瞑

っていただければ幸いです。
では本日はこれにて失敬！

０１０　世界最速、麻帆良へ。（前書き）

トリゾーです。

０１０　世界最速、麻帆良へ。

オッスオッス！！
先週、海辺の塔を瓶に封印した。
６００年前から今までで１００回くらいしか髪切ってない白波麟だじぇ！
ナギが「俺もバイクに乗らせろ」などとクソみたいな事言ってたけど「お前にはニンバス２０００があるじゃねぇか」とか言ってほったらかしてたら拗ねた。（当然そんなものは無い）
ウザい。

ちなみに、このネックレスの効果もあるだろうが、ナギといる時は敵が襲ってこなかったから何かと旅が楽だった。
今朝はアルビレオ・イマとかいう優男に会った。
会った瞬間に俺達の正体に気付いたいけ好かない好青年だ。

「次は日本にでも行ってみるか。俺の古い知り合いがいるんだよ」

「俺達の古い知り合いはみんな死んだなぁ。お、盗賊か？潰してくる」

「お兄ちゃん、私も行く！！」

「やめろやめろ！！ったく、俺の何十倍も生きててその落ち着きの無さか！」

「で、なにしに行くんだＹＯ。日本人は生来毛塘には縁が無い生き物だけど、こんな極東に“件の姫”でもいると思った？」

「いやいやいや、お前らが半月前から旅飽きたっつってたから仕事紹介してやろうと思って連れて行ってやるんだろうが！
ったく、耳元で飽きた飽きたって騒がれるこっちの身にもなりやがれよ……」

「うーんこっ、うんこ、うーんこーっ（フーワッ☆フーワッ☆）」

「オイ、……何だそりゃ……」

「うんこ組曲、第一章『イッヒ・フンバルト・デル・ウンコ』」

「バカにしてんだよな？それ俺に喧嘩売ってんだよな！？」

「まあまあナギ、リンはあなたが本気で戦っても勝てる相手じゃありませんよ」

「じゃあお前も手伝えよ、アル！」

「はっはっは、ご冗談を。麟に挑むなんて、命がいくつあっても足りませんよ」

激昂してるナギをなだめるフリしながらバカにしてるこいつがアルビレオ・イマ。
正直アルビオレだと思ってた。今でも思ってる。

「お前なら大丈夫とでも？」

「第二章『ヘーヒルト・ベンデル』もあるけど、聞く？」

「誰が聞くかクソバカ！！」

「しかし、見た目小さな女の子にしか見えないリンがそんな事言ってると思ったら、下卑た妄想が広がりますね」

「おい、アルビレオ・イマ。お兄ちゃんで気持ち悪い妄想をしていいのは世界で私一人だぞ」

「何、このテンション？ひょっとして俺がおかしいのか……？」

ナギがこのメンバーの会話を聞いてるとだんだん死にそうになってくる事が最近判明した。
そして会話に参加したら寿命が縮むことも。
かわいそうにｗｗｗｗｗｗ

「おちこんでるな。いや、おちんこでてるな、ナギ」

「出てねぇ！放っておいてくれ」

「ふぅ、仕方ない。ナギ、一度しか言わないから良く聞け。
汝、求めよ。全て家に置いてきた」

数瞬、時が止まる。

「ごめん、ちょっともうホント何言ってるかわかんない。ホントごめん」

「俺にもわからんわ！！」

「威張って言うな！！」

「ふふ、ツッコミに回るナギというのは中々見れるものじゃありませんよ」

「小僧……お兄ちゃんに突っ込む気か？」

「俺どっちかというと突っ込む方なんだけど。突っ込まれるのはちょっと……」

「うるせぇ！！お前ら俺にどうしてほしいんだよ！！」

「お兄ちゃんに突っ込まれていいのは私だけだ！！」

「もうホントヤダ。何コレ。帰りたい」

夜も更けたが、俺は今アルと飲んでる。
麟とエヴァは「俺達良い子だから」とか言って先に寝に行っちまった。

アルには久々に会った事だし積もる話も、と呼び出された訳だが、実際は酒の口実がほしかっただけみたいだ。
他愛の無い話をしている。

「しかし、リンは本当にラカンに似てますね」

「んあ？そうか？」

「ええ。あのでたらめな力といい、何も考えてなさそうで本当に何も考えてない発言といい、始動キーが未だに初学者用のものなところといい」

「ああ、そういや。まあラカンは隙だらけに見えて実際はそうでもないけど麟はそのまんま隙だからな。努力とかしたこと無いんじゃないか？」

「何をされても絶対に大丈夫という自身の表れか、今まで本当に殺されるような目にあったことが無いほどの強さ。
あの最強種とすら呼ばれる吸血鬼にも倒す方法はあります。同じく古龍でも、殺すとまではいかなくても、ラカンのように倒す事は可能です。
しかし、全く危機察知能力が無く、魔力や気も感知できないというのに、２億ドルの賞金がありながら今まで傷ひとつ負ったことの無いリンこそ真の最強種、というものでしょうか」

「ま、知らずに見てる分には、ラカンの兄弟とかいとこって言われりゃ信用しちまうね、俺は」

「見た目は天と地ですね」

「ハハッ、どっちが天でどっちが地なんだろうな」

「そりゃリンは天でしょう。このネコミミセーラースク水をラカンが着ている所なんて想像するのも口にするのもおぞましい」

「俺はその考えに至るお前がおぞましいよ。どっから出した」

「おぞましい、は酷いじゃないですか。せめておそろしい、止まり

にしてください」

「変わらねえよ」

いい朝だ。

今日もティウンティウンとスズメが男鳴きに鳴いている

「おはーーーーウィッシュ！！！！！」

「おはよう、お兄ちゃん」

「おはようございます」

「おい、ナギはまだ寝てんのか？」

「いえ、二時間ほど前に『狩ってくる』と言って出て行きました」

「何やってんだよアイツ。９時には出発っつってたろ。今何時だと思っていやがる」

時計を見るともう１１時過ぎだ。

「何だ、俺が寝坊してただけか！昨夜は随分頑張ったからなぁ！！」

「もぅ、お兄ちゃんったらぁ／／／」

「ナギの気持ちが少しわかります……」

その時、閑静なログハウスの扉がイノシシを担いだナギに開けられた。

毎度の事ながら湖の際に建てます。

こりゃもうアレだな。俺が休憩しようと思った所に湖が現れる能力だな。

「気持ちがわかった次は胃を治療するための魔法を覚えることになるぞ」

ちなみに俺達（俺の言う『俺達』の有効範囲は俺とエヴァのみだ）はおはようのちゅーとおはようのちゅーちゅー（吸血）をやってる。

「ナギが魔法を覚える!?……それはそれは、一刻も早く日本に行かなければいけませんね、ナギ。頑張ってください」

「おい待てアル、二重の意味でそいつはどういう事だ?」

「私には他に変えのきかない、実にやんごとなき用事があるので、頑張ってください」

「おい、待て!逃げるな!!……クッソー、アルの奴、転移してまで逃げるか!?」

ちゅーとちゅーちゅーが終わって見ると、息の荒いナギがこっちを見てる。

やめて、怖い。

「早く日本へ行くぞ。麻帆良のじじいにてめぇら押し付けてやる。

小学校にでも入学しやがれ」

「ちょっと待て、エヴァは中学生の制服でこそその本領を発揮するタイプだと俺は見ている。女学生エヴァ……、なるほど、日本に行くぞ！！」

「お兄ちゃん、さすがに中学生みたいなアホのガキに囲まれるのはちょっとヤダよ」

「あ、そう？……さすがにエヴァのしたくないことをさせるのは俺も嫌だなぁ……。女学生エヴァ……」

「ってちょっとだけ思った事もあるけど、私も学校行ってないし、その、行ってみたいな？」

「おい、聞いただろナギ。さっさと準備しろ」

「もうホントやだ」

～一週間後、麻帆良学園・学園町室～

「おいじじい！警備員欲しがってただろ。連れてきたぞ」

「おいじじ、って頭長っ！！！」

俺達が連れてこられた部屋に妖怪がいた。
後頭部とマユゲとヒゲと耳たぶが長い、神主みたいな服を着たぬらりひょんだ。
しかしそんな事より驚くべきは『かんぬし』と入れて変換したとき『ＺＵＮ』が候補に上がったＩＭＥ辞書の方だろう。

「ほっほっほ、久々じゃのう、ナギ。で、そちらのお二人は？」

「エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル・シラナミだ」

「トリゾーです」

「……。６００万ドルの賞金首、エヴァンジェリンと2億ドルの賞金首、白波麟だ」

「ほ？」

「愛と正義の魔女っ子、トリゾーです」

「そ、そんな冗談を覚えて来おって。こんな少女二人を連れて来るとは……」

「あ、面白かった？トリゾー。じゃあ戸籍くれよ、戸籍」

「おい、じじい。さっさとお兄ちゃんに戸籍をよこせ」

「なんじゃろ、コレ」

「俺も一年近く思ってる」

「じゃあ本当にこの二人は『闇の福音』と『邪神』なんじゃな」

「はい。トリゾーです」

「そりゃもうええわ！！」

「はい。ブロリー、です……」

「ホント、腕は確かだから。頼むよじじい」

「なんでお願いされてるのに呼び方はじじいなんじゃ……。ええけど」

「じじいは俺の戸籍用意！エヴァは中学に編入！俺はそれまで寝る！」

「のう、ナギ、こいつら持って帰って」

「本気で断る」

「おじいちゃーん、お願い☆」

「クッ、人心掌握とは、高難易度の術を！！（使っていません）」

俺の特殊スキル、「孫煩悩化」は健在のようだ。

「ホラ、俺生まれついてのライダーだけどさ。戸籍無いとレースにエントリーできないじゃん。
そうなるとストレスで何やっちゃうかわかんないよ」

「とうとう脅しをかけてきおった！！認めたくはないが仕方ないかの……。いいじゃろう。しかしこちらの条件も呑んでもらうぞ」

じじいは渋々と言った感じで条件を言ってくる。

1．エヴァを、外交的に配下に置いたとわからせるために『登校地獄』の呪いをかける。
2．その後エヴァの賞金を何とかして取り下げるからその間全力で身を隠す。
3．そして、なんとか自分で自分の賞金を取り消してから出直す。

この三つの条件で戸籍を用意すると言ってきた。

「いいだろう！お兄ちゃんの為なら『登校地獄』くらいいくらでもかかってやるわ！」

「エヴァァァァアアア！！！」

「なあ、抱きついてるみたいだし二人まとめてかけてもいいよな？」

「エヴァンジェリンならともかく、白波君にはかからんじゃろ」

「つーわけだ。さっさと離れてくれ」

「ぶーぶー」

「いくぜ。『登校地獄』！！」

「……何か変わった？俺魔力がどうとか全然わかんないんだけど」

「ちゃんとかかってるみたいだよ、お兄ちゃん。おい、『千の呪文の男』。よくやったな」

「ナギっち見直したっち」

「お主よく耐えれたの……」

「そろそろ無理。じゃあ俺行くわ。二人とも元気でな」

「あぁ～ばよ、とっつぁん！」

「ふん。そのうち遊びにでも来い。歓迎はせんがな」

ナギが手をヒラヒラと動かして出て行った。
エヴァは俺に抱きついている。↑基本的に描写されていない間はずっと抱きついている。

「……さて、じじい。俺からもいくつか話がある」

「……ここは禁煙なんじゃが。戸籍の事か？」

「２０歳以上ならなんでもいい。そんな事よりエヴァの制服はどうなるんだ？」

「安心せい。購買部が売っておるわ」

「ちょっと行ってくるわ」エヴァを引き離す。
「買ってきた」エヴァが再度しがみつく。
「速っ！！」
「さあ、エヴァ！この、指輪で作った便利な更衣室で着替えるんだ！！」
「何で既にお主が入っておるんじゃ」
「うん、お兄ちゃん」
「普通に入って普通にカーテンを閉めた！！」
「あっ、ダメだよお兄ちゃん」
「ふはは、愛い奴よ」
「何をやっとるんじゃぁぁあああ！！！」
「着替えに決まっているだろう。ボケたか？じじい」
「おじいちゃん、ご飯は昨日も食べたでしょ？」
「毎日食わせろ！！」
更衣室のカーテンを開けてエヴァが一度その場で回る。
「どう？お兄ちゃん」

「愛してるの言葉じゃ足りないくらいエヴァが好き。おいじじい、ここから近いホテルってどこ？なるべく高いホテルで」

「。」

片手で両目を隠しながら窓の外を指差すじじい。

「じゃあな。エヴァの賞金の件、頼んだぜ！」

お姫様抱っこでエヴァを抱えて窓から跳ぶ。

ちなみに、じじいがエヴァの賞金を取り下げるまでに新しい制服を２０着買った。

０１０　世界最速、麻帆良へ。（後書き）

ば……バイクが不足してる……。
今日半年ぶりくらいにＮＳＲ５０（後期）に乗りました。
前後ＢＴにブレンボの４ポッドだからブレーキだけで死にそう。

あとがき
難産の割に読み返しても山もオチも無い。
エヴァが入学するのは原作と同じ時期です。
ここから１４年間、色々します。
レースとか。

誰も興味ないと思いますが、麟が吸ってるタバコはピースの２１ミリ。
お酒は『白波』を飲んでみたけどすぐに吐いたそうです。

０１１　世界最速、ジムカーナ出場。（前書き）

※総合評価を１４０、お気に入り登録を５３もいただいてしまいました。
本当にありがとうございます。

ただ登校するだけの呪いじゃ他の魔法使いを説得できないんじゃないか、と指摘いただいたので、慌ててこのえもんに結界を張ってもらいました。
指摘くださった　Ｔｅｓｔａｍｅｎｔ　様、ありがとうございます。

まさかの２５歳説と２３歳説が混在していたので２５歳に統一しました。

０１１　世界最速、ジムカーナ出場。

このえもんが学園の電力を使って学園から出られなくなる結界を張ってから二ヶ月。

その間、魔法世界の偉い人が本当にエヴァが学園から出れないのかとか、魔力は弱くなってるのかとか見に来たりで一月。

誰を脅せばいいのかわかんなかったから賞金取り消しまでに一月。

結果だけ言うと案外あっさりいったわ。

２億ドルとか意味のわかんない賞金額になってたのは『どうせ邪神に勝てるような奴居ないだろうし』的な意味がふんだんに込められたクソみたいなブラックジョークだったらしいし。

あちら側からの今後一切の不干渉を約束させてきてやったじぇ！

そしてあちら側へは、エヴァに何かしてくる場合は一切の手心を加えないという脅しもしっかりかけておいた。

俺に対しては好きにしろという素晴らしすぎる条件付で。

まあできるもんならやってみろよ。絶対無理だろうけど～。ヘイヘイボーイｗｗｗｗｗ

って感じの言い方だったけど。

「ぐぬぬ」って言ってた。

「おじーちゃぁぁぁあああああん！！！賞金消してったから戸籍ちょーだあああああい！！！！」

「うわぁっ！急に出てくるな！心臓に悪いわ！！」

「戸籍いいいい！！！」

「ほれ、抄本じゃ」

「うお、２５歳！無理あるわーｗｗｗｗおじいちゃん大好きー☆
ヘイヘーイ☆」

「このかがこうならんように祈るばかりじゃ……」

「あ、家どっかその辺に建てるけどいいよな？」

「もう好きにして」

「エヴァ、今朝ぶり！」

「お兄ちゃん！！」

天下の往来で抱き合ってます。
え？一ヶ月？何言ってんの？ちゃんと毎日帰ってたよ。
転移魔法で。

「世界中、全歴史中探しても魔法世界と旧世界を触媒も無しに転移
魔法だけで行き来できるのはお兄ちゃんくらいのもんだよ」

「そりゃもう天才だからな。みんなに自慢しまくっていいぞ！」

「嫌だよ。お兄ちゃんは私だけのお兄ちゃんなんだから」

「ほら、あの姉妹……」「でも今お兄ちゃんって……」「近親相か……」

「お兄ちゃん、みんなに見られてるよ？」

「バカ、見せてんだよ」

家は一ヵ月後に建ちました。
例の馴染み深い、湖の横に建ててたログハウスと同じ形の建物で、それに地下室と電動シャッター付ガレージを増やしたタイプの。
金はいくらでもあるから突っ込めるだけ突っ込んで作らせた。
麻帆良すげえ！

「じゃあエヴァ、行ってくるわ」

「うん、行ってらっしゃい、お兄ちゃん」

制服のエヴァとキス（※ディープでないものとする）をして家を出る。

戸籍も手に入れた事だし、早々に免許を取ってジムカーナレースにエントリーした。

ジムカーナってのはアレだ。
狭い所をちょこちょこ走るやつ。

大昔、レースにも出てた記憶が薄っすらとあるけど、あまり覚えていない。
駄菓子菓子、そんなものは関係ない。
ただ速く走るだけだ。

先日買ったばかりのフルノーマルなＮＳＲ８０に跨り、調子乗って『変身』とか言いながら、既に着用してる状態で指輪をブーツ、グローブ、革ツナギ、ヘルメットに替える。

まさかの自走出場。

～午前１０時・会場～

「よっすよっす！」

「ん？どうしたんだい、嬢ちゃん？お父さんといっしょに出場かい？」

「いやいや。、エントリーしてた白波（２５）です。単独で出場」

「ああ、はいはい、白波さんね。って（２５）！？」

「よく子供みたいって言われます」

「ああ、その、頑張ってね」

「……あたぼうよ」

ＮＮ級（初参加の場合、ほぼノーマルの車輌のクラス）のゼッケンとコース図を受け取って立ち去る。

きっとこの兄ちゃん『やだ、かっこかわいい（かっこよくてかわいいの略）』と思っているに違いない。

下見もウォーミングアップも終えて端っこの方でタバコを吸っていると知らないおじさんに声かけられた。

「おいおい、子供がタバコなんて吸うもんじゃないぞ」

「６２５歳ですよ」

と言って免許を見せ付けてくれるわ！

「おお、こいつは失礼。あまりに小さかったもんだから」

「おかげで重量も抵抗も随分少なくて、けっこう速く走れますよ。っと、もうすぐ俺だわ。行ってきます」

「おお。頑張ってな」

ピッピッ……ポーン
という（他の車両の走行音とヘルメットの遮音性で全く聞こえない）音と共に出走する。
ってかつま先ｗｗｗｗｗｗ無くなるｗｗｗｗｗ
バンクするたびにつま先が地面について切ない。
バックステップくらい組んでおくべきだったんだ俺。
バンク中はつま先とステップ、ロングストレートではウィリー、ゴール地点ではジャックナイフとサービスしまくった。
１分３５秒６２２、とアナウンスが入る。
その瞬間歓声が上がったからさっきのおじさんに手を振りながら戻る。

今のところ、スコアはトップで１：３５．６２２。二位との差はだいたい３秒か。
これは中々のスコアだな。

「凄いじゃないか！」

「いやぁ、まだわかりませんよ。これだって８０ｃｃだし」

「にしても相当な速さじゃないか。と、次は俺だ」

「頑張ってください」

「おう！」

さっきのおじさんが出走する。
車両はＹＡＭＡＨＡ　ＸＪ４００。改造箇所は多分バックステップとショートマフラーのみ。
なかなか怒涛の勢いで走ってるようで、スコアは１：４０．２２３。
今のところ俺に続き二位だ。
しばらく座ってるとおじさんが帰ってきた。

「いやー、走ってみてわかったけどホントすごいわ。それでＮＮ級だもんな」

「大会初参加なもんだから、どうあってもＮＮかＮＯ（走行自体に変化が出る改造をした車輌のクラス）しか出れないもんで」

「あれ？ＮＬ（女性用クラス）は？」

「え？俺男ですよ？」

「え？」

「え？」

割と滞りなく第一ヒート（午前の部）も終了。
今のところトップは俺のため、何かいろんな雑誌の編集者とかが話しかけてくる。

「白波・Ａ・Ｒ・麟さんですよね？私、集楽社の月刊バイクライフ

の朝倉と申します。いくつか質問大丈夫でしょうか」

「ああ、毎週読んでますよ。時間は大丈夫です」

「初参加でトップですが、いやーお若いですね」

「こう見えて25歳なんですよ」

「25！成人じゃないですか。となるとお仕事は？」

「今は無職ですよ。求職中って訳でもないけど」

「なるほど、ではこの大会での意気込みは？」

「第二ヒートも低速全開で！あと意気込みというか、家の妹に優勝商品のファミコンを持って帰ってあげたいですね」

「なるほど。妹さんがいらっしゃるんですか」

「ええ、宇宙一かわいいです。写真見ます？これなんですけど、かわいいでしょ。この間も……」

「あ、もう第二ヒート始まっちゃうか」

「え、ええ。ありがとうございました」

何故か朝倉さんはしんなりしていた。
朝倉さんにはあんなかわいい妹がいないからしょうがないな。

他の人のタイムとか見たりさっきのおじさんと話したりして俺の番、
滞りなく１：３５．１００。

滞りなく一位入賞してファミコンを手に入れた。
なにこれソフトついてないんですけお。
あとは朝倉さんのインタビューにちょっと答えて自走帰宅。

帰りにマリオ買って帰ったらエヴァが一晩中やってた。

０１１　世界最速、ジムカーナ出場。（後書き）

ＨＯＮＤＡ　ＮＳＲ８０
水冷２ｓｔ
７９ｃｃ
１２ＰＳ／１０，０００ｒｐｍ
前出したＮＳＲ５０の８０ｃｃバージョン。
速いです。
最近は見かけませんね。
昔もそんな見かけませんでしたが。
僕はエヌパチと呼んでいます。

ＹＡＭＡＨＡ　ＸＪ４００
空冷４ｓｔ
４９８ｃｃ
４５ＰＳ／１０，０００ｒｐｍ
前ダブルディスク後ドラムブレーキ
車体重量が重いためジムカーナには向かないと思います。
でも速いから大丈夫かな？
ＹＡＭＡＨＡのバイクはホントわからないんで大分苦労しました。

あとがき
ジムカーナですよ。
つま先が当たるのは大丈夫ですよね？
今回想定したコースは何の変哲も無い普通のジムカーナコースです。
レースの入り口としては、クラスくらいしか制限は無く、いくつか禁止事項はありますが車輌のタイプは何でもよく、車輌に何か特別なことをしなくてもけっこう走れるので適切だと思い書いた次第です。

バイクに乗っているみなさんも是非。
作中のタイムは適当です。

ちなみにライディング中の麟はオートで働く身長、体重、視力、腕力以外一切チートしてません。あとは魔力くらいしか無いけど。
元からレーサーだったわけだし、戦闘で世界最強でもバイクで勝てない事はあるかもしれません。

あと、僕の一番好きなキャラは茶々丸です。エヴァは１．０００００１番目。
どうしてこうなった。

こんな所で言う事でもないと思いますが、金土日曜は見たいアニメが多すぎて、更新が滞ります。
更新しないつもりは無いので多めに見てやってください。

０１２　世界最速、雑誌に載る。（前書き）

きっと小さくて可愛らしいから華があったんでしょう。
ちなみに麟は、バイクに携わる時は話し方が丁寧になります。
「バイク乗りは紳士でなければいけない」という矜持があるのです。

０１２　世界最速、雑誌に載る。

と、学園長室に登場したのはこの俺、白波麟。
何気ない顔でこのえもんに話しかける。

「エヴァの魔力を抑えたり学園内に留まらせる結界を破壊するけどよろしいですね！！」

「ひょ！？いやいや、いかんにきまっとるじゃろう。わしがどれだけ……」

「いいか、コノえもん。別に登校地獄を解呪する訳じゃねぇんだ。認める認めないって話でもない。
確かにエヴァは魔力が封印されててもほぼ最強だろう。でもナギクラスになると封印されてる状態だと１京分の１程度は負ける可能性がある。
そんな可能性を全て取り払ってやるのが兄ってもんじゃないんだろうかと」

「し、しかしのう……」

言い淀む学園長だが、ここで俺が顔を上げた！

（実際の音声）
「よし、このえもん。いい事を教えてやろう」

「良い事？」

「俺は世界よりエヴァの方が大事だ」

これにはさすがの学園長も苦笑い。
実はこの俺は、世界中を敵に回しても1人で立ちまわれるほど最強なのである。

説得（）を終え、結界を破壊する俺。

一ヶ月後、そこには元気に走り回るエヴァの姿が……！

「……これは何ですか？」

「まる見え」

「何が」

「今からひと月前」

白波ッス。
何が元老院だ。
わざわざ親切心から説明しに来てあげたら1人を残してみんな逃げた。
今もクルト・ベンデル（？）とやらしか残っていない。
そして俺はありったけの兵士に囲まれている。
前来た時もこんな感じだった。

「まずは彼らを落ち着かせるのが第一だと考えました」

「それはもういい！それを我々に話してどうしようと言っているのか聞いてるのですよ！」

「え？ああ、ほら、いざという時、どうしても困った事があれば俺に言うといい。
他の元老院の方々はいけ好かんがベンデルさん「ゲーデルです」モーデルさんのお願い事なら気が向いたら聞いてやらんでもない。かもしれない」

「どっちですか。というかゲーデルです。「ミーデル」もういいです。
いえ、お気持ちはありがたいのですがあなたに頼ることは無いでしょう。ではお引き取りください」

「いやん、い・け・ず。
ああそれと、くれぐれも、“俺以外の”白波姓を持つ者に手出しをしないように。これは他の元老院の偉い人にも言っておくんだな」

「わかってますよ。あなたにだってとても手を出せません。では」

追い出された。

「おいじじい、そう嘆くな。見苦しいぞ。ねえ、お兄ちゃん」

「おうともＹＯ！見苦しいともＹＯ！」

お爺さんが白くなって窓から外を見ている。
ただでさえ長い後頭部の影が光を受けさらに伸びている。
もはや妖怪どころの話じゃねぇ。

「わしはもうやっていけんかも知れんね」

「そう落ち込むなよ。俺はお前の敵じゃないぞ。味方でもないけどな」

「そんな敵でも味方でも無い奴が麻帆良の結界壊しました、等と言って魔法世界の、しかもＭＭ元老院に殴りこむと麻帆良の信用が」

「ああ、そんなもんはじめっから無い無い。根拠は無いけどそんな気がするわ、俺」

「ひどい言いようじゃのう」

「そんな事よりエヴァ！前のジムカーナで受けたインタビューが載った雑誌が今日発売なんだよ。買いに行こうぜ」

「うん、お兄ちゃん！」

「行ってきまーす」

「ここはおぬしらの家じゃないぞ！」

ＫＯ－ＢＡＩ！

「ほんとキティ、立てば白百合、座ればガーベラ、歩く姿はライラックだな」

「お兄ちゃんだって、立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿はカリフラワーだよ」

「あはははは」「うふふふふ」

ＩＣＨＡ★ＩＣＨＡしながら購買に突撃すると何やらこちらを見る女学生がいる。

「ほら、絶対あの雑誌の子だって」

「えー、でもそんな人がこんなとこに居るわけ」

「エヴァ、お前世界的に有名なかわいさっぽいぞ」

「いや、あれはお兄ちゃん見てるんだよ。お兄ちゃんが世界的に可愛いんだよ。雑誌って言ってるし」

「あ、ホラ、こっち見たよ」

「あのー、すいません。白波さんですか？」

「そうです。私が変なおじさんです」

「やっぱり！サインもらえますか？」

そう言って出してきたのは月間バイクライフ。何故か俺とFN（フルノーマル）のNSR80が表紙になってた。
そんな事より変なおじさんはスルーか。
と思いながら渡されたサインペンをポケットに仕舞って、筆ペンでサインを書く。

「はい」

筆ペンと雑誌を渡して俺もそれを買った。

「キャー、ペンもらっちゃった！」
「かわいいー！」
「あの人絶対有名になるよー」

もう有名なんだけどね。

「ホラ、お兄ちゃんだったでしょ？」

「エヴァの方がかわいいもん」

意味のわからない拗ねかたをしてサインペンを捨ててから帰った。

「何で俺も買ってんのにエヴァも買ってんの？4冊も」

「保存用と観賞用とスクラップ用と装飾用だよ」

「装飾用！？」

「うん！」

「装飾ショールームの増築する？」

「する！」

部屋が二つ増えました。
俺用エヴァのショールームととエヴァ用俺のショールーム。
何これ、もうお互いがお互いのオタクみたいになってるやん。

ちなみにこのえもんは、俺が別なレースに出てる間中新築した俺部屋や俺の自慢話を聞かされてげんなりと
「何とかしてくれんかのう」
とか言ってきたから、エヴァが学校行ってる間中エヴァ部屋やエヴァの自慢話を聞かせたらちょっと後頭部が縮んだ気がした。

０１２　世界最速、雑誌に載る。（後書き）

今回これだけ少ししか書いてないのには大きな理由があります。
豚野郎は、家で書く場合はサクラエディタを使ってるので行数がわかるのです。
だから「だいたい２００行でいいや」とか言いながら１００行くらいしか書かなかったり３００行ほど書いたりすることもあるのです。
しかし、仕事用のパソコンだと、一日中座ってるにもかかわらず共用なので、テキストエディタひとつ入れるのにもいちいち許可が要ります。
「あのー、小説書くからエディタ入れていい？」などと言うと、ただでさえ座りの悪い前歯が亡くなってしまう事もありえるのです。
抜けるんなら何故か２０になってから生えてきた親知らずが抜けばいいのに。
ありがたい事に、ホントやる事のない暇なバイト先なんですが、まじめな顔してパソコン打ってる分には何も言われないので姿勢よくこんなウンコみたいな文を打てています。
今もカタカタやっております。隣に主任が座ってるんです。

あとがきですが、特に書くこともありません。
少しだけ麟が有名になる話です。
これからどんどん有名になって行くかもしれない。
ホント何も考えずに書いてるのでこれからどうなるか豚野郎にも全くわかりません。
このような稚拙な文章ではありますが、これからもどうか世界最速と豚野郎をよろしくお願いします。

０１３　世界最速、妹にバイクを買う。（前書き）

エイプを出してぇ。エイプを出してえよォ。
いつも通り見直してません。

０１３　世界最速、妹にバイクを買う。

らほーい！らほーい！らほーい！らほーい！らほーい！らほーい！
らほーい！らほーい！らほ～い！らほーい！らほーい！らほーい！
らほ～い！らほーい！

麟だよ！

初ジムカーナからもう８年。
エヴァもずいぶんバイク慣れしてきて、そこらの走り屋くらいなら話にならないくらい速くなってきたんだ。
なので、今日はバイクを買ってあげるためにバイクショップに来てるんだぜ！

「おいさん大口の客やでー」

ＮＳＲ８０を買った店でふんぞり返る。他にも学生の客がいたが、ほっとく。
ちなみに、実を言うと他にもここで２０台くらい買ってる。
おっちゃんも俺がレースやってるって知ってるから金の出所以外は特に気にもならないらしい。

「お兄ちゃん、どのバイクがおすすめ？」

「スーパーカブ」

「じゃあそれで」

当然だが、戸籍上、エヴァは１３歳になっているため、公道は走れ

ないが、そこは私有地麻帆良。
コノィェモンにＯＮＥＧＡＩして「麻帆良ならどこ走ってもいいよ」
的な事を言わせたから買いに来たってわけよ。

「一台でいいの？」

「じゃあ他のおススメは？」

「んー……この中だと乗りなれてるＮＳＲ５０も買っとくか」

「じゃあそれも」

「他はいい？」

「うん。二台もあれば充分だよ」

「ふーん。……おっちゃん、めずらしいバイク入ってない？」

「ああ。ＨＯＮＤＡじゃねぇけど新車のＤＢ２が入ってきてな」

「ＤＢ……ビモータの？」

ＤＢ２。決してドラゴンボールとは関係ない。
ビモータのフレームにドゥカティ９００ＳＳのエンジンを載せてある。
ドゥカティ　ビモータ　の頭文字を取ったシンプリングな名前だ。

「おう。２５０で出そうと思ってんだが」

「それ買った」

もう一人いた客が「高っ！！」とか言ってた。
ふはは、貧乏人め。（金持ちでも躊躇う値段です）

「言うと思ったよ。あとＮＳ５００もあるんだが、買うんだろ？」

「買うに決まってんだろ。合計おいくらですか？」

「うーん……お得意だし６８０万でいいぞ」

学生が「ろっ、ろっぴゃく……ろっぴゃくごぢゅう！！」と呟いている。

「どんだけ悪い事したらそんな値段で売れるんだよ！安っ！！」

「えぇっ！？」

とうとう立ち上がりやがった。

「なんだガキ！さっきから後ろで喚きおって。お兄ちゃんが静かに買い物出来んではないか」

「ま、まあまあエヴァちゃん。普通の学生にしたら６００万円なんて、本当に存在するかも怪しい金額なんだよ」

「お前のも買ってやろうか？」

「へ？いやいや、いいですいいです！」

「遠慮すんなよ。こいつホント腐るほど持ってるから。ほら、６８

８」

「はいよ、７００。釣りはいらねぇ」

「あ、あの……ホント大丈夫ですか」「うるせぇ！ハゲ！じゃあなおっちゃん。配送頼んだぜ！」

「邪魔したな」

店を出てメットをかぶる。

「お兄ちゃんの後ろ、なんか久しぶりだね」

「それもそうだな。よし、今日はどっか行くか！」

「うん！」

「前のバイク、左に寄せて止まって下さーい」

このパターン、エヴァと居るときは初めて。

1人の時はほぼ毎回。

「ビッチ！！！！！！！！！！！！！！！！！
！」

「はいはい、このバイクどうしたの？」

「ファック！！！！！！！！！！！！！！！！」

「何だ貴様？言いたい事があるなら言えばよかろう？」

「いやいや、君ら小学生？だよね？」

「マザーファッカー！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「ちょっと落ち着いて君、ホントお願いだから」

「誰が小学生だ、公僕が！」

「ここまでが、まるで嘘みたいな話ですが本当に嘘です。免許を持ってないのも嘘。バイクを盗んできたっていうのも嘘。俺がどう見ても小学生ってのはホント」

「え？え？どういう事？」

「ほれ、免許」

「え？嘘？ちょっと待っててね」

2人いたうち、背が高い方の青い服の怖い人が免許を持ってパトロールリング・デスキャッスルに入っていく。白に黒の線が入った、別に死を運ばない、恐ろしいセダンだ。しかもだいたい高級車だ。

「お兄ちゃん、こいつら私たちの事馬鹿にしてるんだよね」

「おい、マジで？エヴァを馬鹿にしたら懲戒免職な」

「いやいや、しないよ、ってお兄ちゃん！？女の子かと思った」

「羨ましかろう。崇めよ」

「いや、別に羨ましくは」

「私のお兄ちゃんが貴様のお兄ちゃんじゃないのに羨ましくないと抜かすか、貴様……」

「先輩！！助けて！！俺もう無理っス」

後輩が何やら嘆いているっぽいから棒でつついておこう。

「アファム！！！痛、ちょ、やめてぇ！」

「ああ、ごめんよ君たち。やめてやってくれないか？ちゃんと確認しておいたから」

「ホント。俺もう３３歳だよ？」

「うっそ！？若々しいにもほどがあるだろ！！」

「エターナルショタとエターナルロリータですけんのう」

「ホントなんだよ、これ。免許書の覧全部埋まってたの見たときはこれやりたいがために偽造したのかと思ったくらいだ」

「これやりたいがために全部の免許取ったんだけどね」

「さすがお兄ちゃん！」

「天才だからな。じゃあお兄さんたちもパトロール頑張れ。超頑張れ。あと、ナチュラルに考えて、バイク盗むような奴がツーリングジャケットやらフルフェイスヘルメットやらを持ってるはずがない事も少し頭に入れておいてほしい。それじゃ」

「次は覚えておけよ。三下共」

「お兄ちゃん」

「え？どうした？」

「認識阻害の魔法かけたら止められないんじゃない？それに律儀に止まってあげることないのに」

「それはな、エヴァ。止められる事も楽しむのがツーリングってものな（訳がない）んだ。ホントはからかって遊びたいだーけ？」

「お兄ちゃん、性格悪くて素敵！」

「あっはっは、こーいつぅー」

ホテル行ったら断られました。

０１３　世界最速、妹にバイクを買う。（後書き）

ＨＯＮＤＡ　スーパーカブ５０
４ｓｔ空冷
４９ｃｃ
３．４ＰＳ／７，０００ｒｐｍ
前後ドラムブレーキ
上記は現在のカブのスペックです。
言わずと知れたストリートバイク。
耐久性、燃費、価格、どれをとっても世界のＨＯＮＮＤＡの名前に相応しいバイクです。
最早語るまでもないでしょう。

Ｂｉｍｏｔａ　ＤＢ２
４ｓｔ空冷
９０４ｃｃ
７６ＰＳ／７，０００ｒｐｍ
前後ディスクブレーキ
イタリアのバイク。
作中でも書いたようにＤｕｃａｔｉ　Ｂｉｍｏｔａの頭文字を取ったバイク。
ドゥカティの９００ＳＳというバイクのエンジンが載っている。
Ｌ型のエンジンをしてるのでＬツインドゥカティと呼んでいます。
でもＬ型してようが正しくはＶ型らしいです。
ちなみに、これは旧車ってほどでもないですが、豚野郎はイタリアの旧車が大好きです。
しかし遅いのでそんな出しません。

実は００５の前から杉やん様にリクエストいただいてました。

ＨＯＮＤＡ　ＮＳ５００
水冷２ｓｔ
４９６．９９ｃｃ
１２７．５ＰＳ／１１，０００ｒｐｍ
前後ディスクブレーキ
今まで黙ってましたが、省エネやらエコやらが蔓延するこの時代において、私、紅の豚野郎は、時代を逆行するかのように２ｓｔ車が大好きです。
ちなみにＲＳ５００Ｒという市販できるようにした車両もあるらしいです。
走行シーンは遠からず入れます。

ついでに学生が買ってもらったバイク
ＳＵＺＵＫＩ　薔薇
空冷２ｓｔ
多分４９ｃｃ（うろ覚えですが３０ｃｃ台だったような気が）
４．０ｐｓ／６０００ｒｐｍ
セル付きとセルなしの差額がだいたい１万円。
所で新車の薔薇が近所で８万円で売られてたんですが、どうしましょう。

アファム
有名なスプロケットメーカー。
軽い。すごくいい。

あとがき
もう８年経ったよって言いたいだけの話。
キティにゃんのバイクも別にいらんかったね。
でもエイプが出る頃までに運転が上手くなっておいてほしかった。
麟がカブ勧めた理由は「カブに乗ってるエヴァもかわいいよ！」

時間軸的には多分１９９６年くらい。季節は考えてない。
エヴァにゃんには戸籍があるけど、３年ごとにあの手この手でこのえもんが１３歳に戻している。
麟は公式にレーサー活動をしているため戸籍放置。
では、今回もありがとうございました。

０１４　世界最速、世界最速を証明する。（前書き）

「世界最速、もう走んのやめる。」
にしようかと迷いました。
嘘です。

０１４　世界最速、世界最速を証明する。

最終ラップ、今のポジションは二位、秒差は０．２。充分いける。
１キロ以上あるロングストレートを抜け、速度を一気に９０キロまで落とす。
スリックタイヤが少しずつ外へ滑るが、膝で挙動を抑えて抜け切る。
すぐに次の左コーナーが迫るがクリア。同じくらいの距離で右も加速しつつクリア。
一位のスリップストリームに入り込み加速、第４コーナーで内側に並び、第５コーナーでインから抜く。

第６、７とこのコースでは比較的ゆるやかなカーブを過ぎ、スロットルを空ける。
第８はもうタイヤが限界だ。滑らせながら抜けて第９も滑らせながら突入。

途中、急にグリップが戻ってハイサイドを喰らいそうになるが、アクセルを開けて回避。膝を地面に叩きつけて回復する。

第１０、１１コーナーでさっきの失敗を全く生かさず、倒せるだけ倒して抜け切る。

第１２コーナーで膝を磨りながらバランスを取ると、急にバンクセンサーの感覚が無くなる。右コーナーが多いコースでコーナリング時は地面で擦りっぱなしだったから削れ切ってマジックテープに接触したみたいだ。
幸いにも、右コーナーは次で最後。
１３コーナーを乗り切れば、左に回る第１４コーナー。ここでも前輪、後輪、左膝の三点ドリフトで駆け抜けて、ハイサイドを無理に

立て直し、最後のホームストレートはタンクにへばり付いてスロットルを回す。

どうも、イタリアはムジェロサーキットからこんにちは。世界中から歓声を受けてるカマ野郎、白波麟です。
ロードレース世界選手権、通称ＷＧＰと（現在はＭＯＴＯＧＰとも）呼ばれる２００１年大会の２５０ｃｃクラスで優勝しました。
主催者も観客もレーサーも死ぬほどビックリしてます。
そりゃそうだ。
何せ、プライベーターがノンストップで一気に優勝しちゃったんだから。

ってか表彰台ｗｗｗｗ
三位の奴と頭の位置が同じｗｗｗｗｗ
二位の奴に至っては俺より高しｗｗｗｗ
やーめーろーよーｗｗｗｗ

トロフィーを渡され、マイクを押し付けられる。

「愛してるぜ！！！」

とりあえず泣きながら叫んだけど、何コレ。

詳しいことは覚えてないけど、俺はここに立つために生まれてきた気さえする。

エヴァを抱きかかえて、俺はレースの退却宣言をした。

アレから3ヶ月

レース前から鬼のようにスポンサー契約やらレーサー契約やらをいろんな会社から迫られてたけど全部断って、ＨＯＮＤＡのロードレーサーである規制カツカツまで改造したＲＳ２５０Ｒに乗り、しかも優勝を果たした奇跡のライダーとして祭り上げられている。
実際、レースというのは金がかかるんだよ。
インタビューの以来も怒涛だったけど、「俺はアイドルじゃなければ、もうレーサーでもない」と言って、ある一社の1編集者以外の取材は全部断っていた。

「白波さん、大挙ですね。まさかレースを辞めるなんて言うとは思いませんでしたよ」

「ああ、朝倉さん。お待たせしてすいません。しかし、俺らも中々の付き合いの長さですね」

インタビューはもう優勝した時点でげんなりするほど受けたから今日はプライベートで会っている。
どうやら、次々と名を上げる俺を追ってインタビューをしてたが、ＧＰ２５０の件でとうとう集楽社の副社長になったみたいで、
「副社長にもなって自分から取材に出るような人いませんよ！」などと部下に押さえ込まれているらしい。
お礼と恨み言を言うために俺を食事に誘ったという訳だ。

「ええ。初めて会った時の事を思い出しますよ。ってか全然見た目変わってないじゃないですか。どうしたんですか」

「童顔なもので。というか前会った時点で成長期は終わってたわけ

ですから、そう考えれば別に」

「不思議ですよ！何ですかそれ。すっごいなぁ」

「でもこれからは会う機会も無くなりますね」

「いや、そうでもないんじゃないですか？白波さん、麻帆良ですよね？」

「というと、朝倉さんも？」

「いやいや、私の娘が麻帆良でして、来年には中学生ですよ」

「これはこれは、じゃあ俺の妹と同級生って事になるんですね」

「ああ、そうなりますね」

ここでも認識阻害はしっかり働いてたか。いや、まあわかってるけど。

俺との年の差に全く疑問を持たないようだ。

長くなるので簡潔に言うと、電力を使った学園結界は、エヴァの魔力を抑えるとともに認識阻害を麻帆良全体、及び関わったことのある麻帆良関係者にかける結界だった。

何を言ってるのかわからねえとおｍ（ｒｙ

「しかし、白波さんのおかげで全く取材に出なくても良くなっちゃいましたよ。もう暇で暇で」

「トップが暇なのは会社が安定してる証拠ですよ。良かったじゃな

いですか」

「ははは、嫁と娘にも言われてますよ。やっぱり私が変なのかな」

「まあまあ、老兵は去るのみですよ。あとは若い世代に任せましょう」

「白波さんなんか全然若いじゃないですか」

「まさか。朝倉さんの１００倍は長生きですよ」

「ははは！乾杯！」

「乾杯。水で失礼します。全くお酒は飲めないもので」

「ますますレーサーじゃないですか。本当に惜しいなぁ」

エヴァが本を読んでたから後ろから抱きつく。

「エヴァー」

「なあにー？」

「お兄ちゃん、学校の先生になろうと思ってんだよ」

「ホント！？じゃあ私の中学校にも？」

勢い良く上を向いたもんだから俺のアゴにエヴァの頭がクリティカルヒットした。

「あべし！そうだなぁ。教員免許取ったらじじいとＯＨＡＮＡＳＨＩしてエヴァの学校に行こうかな」

「うん、待ってるよ！」

「差し当たって、パソコンを買います。ってか買いました」

「おおー、流石のフットワークの軽さだね」

「元ＧＰレーサーだからな。そして昨日ホテル行ってた間にＬＡＮ工事も済ませておいた」

「らん？とにかく、私も機械に強くならないといけなくなったからまさにグッドタイミングだよ」

「何で？」

「んーまだ秘密。でも新しい家族が増えるよ」

「やったねたえちゃん」

エヴァが俺に隠し事をするとは……
悲しくもあり、うれしくもある。

さて、俺もさっそくじじいとＯＨＡＮＡＳＨＩして、大卒資格もらうか。

教員免許？それは流石にもらわないだろ。
だって人に物教えるんだぜ。
エヴァも朝倉さんの娘さんもエヴァもいるかもしれないのに中途半端な気持ちで教えるわけには行かないだろう。
エヴァもいるかもしれないのに。
大学はいいんだよ。
もうそろそろ戸籍上では４０なのに他の大学生と一緒に勉強ってのはちょっと個人的に切な過ぎる。

という夢だったのさ

お・し・ま・い

嘘です。

０１４　世界最速、世界最速を証明する。（後書き）

ＲＳ２５０Ｒ
水冷２ｓｔ、Ｖ型二気筒
２４９ｃｃ
８７ＰＳ／１１，７５０ｒｐｍ
前後ディスクブレーキ

ＨＯＮＤＡのロードレーサー（公道走行不可車輌）。
カツカツの改造と言っても詳しい内約は知りません。
というのも、豚野郎はＧＰレースの事は全くの無知だからです。
はたしてどこまで改造してもいいものか……。

あとがき

麟がレーサーを辞めてしまいましたね。
バイクはまだまだ乗りますよ。
麟がレーサーを辞めた理由としては、書いてても何やってるかよくわからない、というのと、きっと読んでるほうもそれほど面白く無い筈。
という風に思っているからです。
あとは、豚野郎自身が鈴鹿とかスポーツランド生駒とかのホント近場しか走ったことがないのも大きな原因です。
ムジェロとか中継でしか見たこと無い。

ちなみに、もうわかるかと思いますが、麟は麻帆良の教師になります。
あまりネタバレはできないんですがね。ふふふ。などと言いながらホント何も考えてないだけです。
シラナミファミリー加入者候補は一応2、3人居ます。

茶々丸だけはどう転んでもシラナミファミリーに入れる！

では、本日もありがとうございました。

０１５　世界最速と、エイプ。その１（前書き）

エイプはＨＯＮＤＡが生んだ奇跡だと思います。

０１５　世界最速と、エイプ。その１

ガリ勉麟ちゃんやで。
どもこにちは。

お兄ちゃんはめっちゃ勉強してる。元々頭いいほうじゃないし。
普段は普通に勉強して、休日は教師の何たるかを。
指導員として新田先生とやらがついてくれている。やや愚痴っぽく酒の勧め癖がウザいが、いい先生だそうで。
周りの魔法先生どもは『邪神が改心』とかクソ以下のラップみたいな韻を踏んだ評価をしてくれてるおかげで何かと生暖かい雰囲気だ。
このままいくと滞りなく来年の８月には教員免許もとれそうだ。

そんなこんなで待ちに待った２００１年２月、俺とエヴァはまたもやバイク屋に来ている。
今回は無理やり二人乗り可能で公道走行可能な改造を施しに施したＮＳ５００で。

「おっちゃーん、エイプ発売したんだろー売ってよー」

「おお、お前ら何か久しぶりだな。優勝したのにレース辞めたんだって？っつか老けねえな」

「エイプー」

「はいはい。２６万でいいよ。カラーリングは？」
新車価格より少し安めで売ってくれるらしい。
いや、どうせいくらでも買うんだけどな。
「エヴァ、何色にする？」
「白にするー」
「白かー。限りなくクリーム色に近い汚い白ならあるんだが」
「全塗装……か……。全塗装やってよー」
「いや、俺ただの小売だからな。知り合いの塗装屋に頼んどくわ」
「じゃあとりあえず２６万。オプションは全部無しで。どうせ来た瞬間から改造が始まるからな」
「バイク屋としては改造車なんて危ないもの乗るなと言っておく」
「おっちゃんとしては？」
「いいぞもっとやれ」
「よし来た」
サムズアップにはサムズアップで返す。そいつが俺のルールだぜ。
「じゃあ出来上がったらまた家に頼んだぜ」

「頼んだぞ、店主」

「はいはい」

「あ、そうそう、慣らし運転とかやってくれないよね？」

「失せろ」

出来心で聞いたら怒られちゃった

「じゃねー！」

「よし、今日はどっか行くか！」

「うん！」

「前のバイク、左に寄せて止まって下さーい」

何これすっごい知ってる。

「サノバビッチ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「おお、ごめんごめん、久しぶり白波君」

「あれ？老けた？」

「そう言う君はどんだけ老けないつもりなんだよ」

「なんだ、また貴様らか。懲りもせずセコい真似をしているな」

「エヴァちゃんも久しぶり」

「ジーザスクライスト！！！！！！！！！！！！！！！」

「落ち着いてください、先輩もわかってて停めましたから」

「許さん。マジで許さん」

エヴァに棒を渡し、二人でつつく。

「ブレンボ！！！痛、ちょ、やめてぇ！」

「繰り返しはギャグの基本だからな、エヴァ」

「わかってるよ、お兄ちゃん」

「相変わらずだなぁ、これからどこに？」

「さあ……。オススメのツーリングコースとか無い？」

「うーん……俺はバイク乗らないからな。定番は海か山じゃないの？」

「ん。まあいいや。エヴァ、海行こうぜ、海」

「うん、お兄ちゃん！」

「じゃあおじさんもパトロール頑張れ。超頑張れ。あと公私混同はどうかと思わないんだなこれが。あと最近大阪まで行って買ったんだけどこのジャケットどう？黄色地に黒い矢印のワンポイントが超☆クールな逸品なんだけど」

「ああ。似合ってるぞ。じゃあ気をつけてな」

スリックタイヤで公道走るもんじゃないね。一気にスリップタイヤだよ。

二週間後にエイプが届いたからとりあえず二人でノーマルの乗り味を存分に堪能した。

「お兄ちゃん、これ思ったより遅いよ」

「そりゃそんな風に作ってあるからな。あ、３５００回転より回すんじゃないぞー」

「はーい」

慣らし運転しんどい。

０１５　世界最速と、エイプ。その１（後書き）

ＨＯＮＤＡ　Ａｐｅ５０
４ｓｔ空冷
４９ｃｃ
３．７ＰＳ／８，０００ｒｐｍ
前後ドラムブレーキ

ちょっとＨＯＮＤＡさん、人がエイプ買った瞬間にタイプＤ発表とかホント勘弁してよ。で有名なエイプ５０です。
遅くてすぐにステップが地面についてノーマルタイヤはうんこ、おまけにブレーキはほとんど利かないしフロントフェンダーはあってもなくても変わらないという伝説のバイクです。
更にキャブレターはまさかの１６π、エアクリーナーボックスに謎のノズル（通称ブタ鼻）、マフラーは何をろ過してんだよというくらい詰まってます。
が、カスタムベース車輌としては世界最強だと思います。
次話はエイプをいじる話にしたいですが、「このパーツはこの年代にはまだ出てない」という突っ込みは勘弁してください。

ブレンボ
有名なブレーキメーカー。
ものすごい止まる。

あとがき
教員免許のいいかげんさについてですが、全然知らないのと調べる気がないのとどうせ麻帆良だし。という三種の妥協によってあのような仕上がりに。（仕上がってない）
麟が教師になろうと思ったのは、

１・時間が余った
２・エヴァと禁断の兄弟愛に加え禁断の教師、生徒の愛もしてみたい
３・朝倉さんの娘の教師になって保護者説明会の時に死ぬほどビックリさせたい
４・エヴァかわいい
５・エヴァの１３年に渡る登校地獄（もはや機能していない）に彩りを
というそんな感じのアレです。
しかし今回のオチの弱さは一級品ですね。

いつも見てくださってる皆さんはありがとうございます。
今日初めて見てくださった人もありがとうございます。
愛しています。

０１６　世界最速と、エイプ。その２（前書き）

やっと書けたー。

０１６　世界最速と、エイプ。その２

パーツもちょくちょく出始めたことだし、改造（イジ）るか。
白波・Ａ・Ｒ・麟です。この『Ａ・Ｒ』覚えええる人ってどのくらいいるんだろうね。

「ｋｉｔｔｙ！」

「ｗｈａｔ？」

「ｃａｎ　ｓｐｅａｋ　Ｊａｐａｎｅｓｅ？」

「しゃべれるよ、お兄ちゃん」

「今日もかわいい。っと」

宇宙一かわいい！キティ天才！日記に今日の一行エヴァを書く。

「それ何？」

「宇宙一かわいい！キティ天才！日記」

「見せてー」

「はい」

日記を渡す。

「これ日付と『今日もかわいい。』しか書いてないよ？」

「ん?ああ、例えばこの日は
『今日はレース前にエヴァと2分キスした。アメリカの雑誌編集者が英語で野次を飛ばしてきたから流暢なハナモゲラ語で返答。エヴァに「お兄ちゃんかっこいい!」と言ってもらった。エヴァもかわいい』
と書いてる。」

「お兄ちゃんすごい!じゃあこれは?」

「『昨晩、いつも俺が布団に忍び込まれるから今日はこっちから忍び込んでやろうと思ったらもうエヴァは部屋を出た後だった。そのまま布団で待ってたら半べそかいたエヴァが帰ってきた。声をかけようとも思ったけどかわいかったから放置。今朝起きたとき俺が何でか全裸だった。』」

「あの日かぁ。そんな事もあったね」

「ノートは書ける量が決まってるから、かさ張らないように俺が編み出した究極技法、『今日もかわいい。』法だ」

「お兄ちゃん、天才すぎるよ!」

「取り出だしたるはキティ号(エイプ)。んでこっちが今指輪で作ったキティ号とキャブが違うだけの同じバイク」

「ほうほう」

「で、エヴァにはこの指輪号に乗ってもらう。で、それが気に入ったらキティ号に同じ改造をする。と、ここまでは大丈夫？」

「うん。大丈夫！」

「じゃあどうぞ」

ぶぶぶぶぶぶぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ……

……ぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼぼ

「うーん、下はいいんだけど上が伸びないなぁ」

「やっぱり24はでかすぎたか……。排気も変えてみよう。じゃあっこれでもう一回乗って」

パァン！パァン！パァァァアアアアアアアアアンパァァァアアアアアアアアンパァァァァァ……

……パァンパァァアンパァァァァァァァァァン

「前よりずっと速いよ！」

「じゃあそれで。他にも試したいパーツいっぱいあるからな」

「うん」

「お兄ちゃん……今日もうバイク乗れない……」

「よく頑張ったな、エヴァ」

「うん……お兄ちゃ……ん」

「エヴァーーーーー！！！」

必要なパーツをリストアップしてバイク屋を呼ぶ。

「おいおい、もう違うバイクじゃないか」

「いけるいける。じゃあ組み付けまで頼んだぞ」

「もう3台新車でエイプが買えるな。めんどくせー」

「バイク屋ェ……」

一ヵ月後……そこには元気に走り回るエヴァの姿が！！

詳しいことは面倒なので省くけど

ＰＥ２４
ファンネル
ＯＶＥＲレーシングアップマフラー
ツインスパークヘッド
オイルシャワーヘッドカバー
５段オイルクーラー

Ｆ　１４Ｔスプロケット
Ｒ　３２Ｔスプロケット
前４ポッド後２ポッドディスクブレーキ化（ブレンボ）

セパレートハンドル
ハンドルストッパー
バックステップ

アンダーカウル
ＫＩＳＳ　ＲＡＣＩＮＧ　アッパーカウル
ダウンフェンダー
泥よけ
タンクカバー

合わせて必要なパーツ各種も。
これを組み上げたイカレエイプの登場だ！

まあ１００万近くかかったりもしましたが、財布は元気です。
そしてどう見ても違うバイク。
エイプ？ああ、エンジンの下のほうとフレームがたしかにエイプっぽいね。
って感じになってます。
タイヤはエイプ買った時点でＢＴに変えてるよ。

あとは各部にバカ魔力で強化魔法と防水、減音魔法をかけると完成！

魔改造（元）エイプ『キティ号』

バックステップ・セパハン・タンクカバーによる……圧倒的……前傾姿勢

エヴァの低い身長が生み出す……奇跡……一体感……

無理のないポジション……っ！！

そしてさらに……バンク角……っ！

以前のステップ位置では確実に擦っていた地面が、頑張らねばステップが届かぬ距離に！！

この話し方疲れるね。

んで高圧縮ツインスパークヘッドによって生み出されるトルク、高回転型マフラーの抜け。

吸気、圧縮、爆発、排気のバランスを極限まで（バイク屋が）整え、加速、最高速ともにバランスの取れたバイクに仕上がった。

５０ｃｃのままここまでやるのは俺の夢でもあったからな。

エヴァも「久しぶりー」などと言いながらほお擦りしている。

「お兄ちゃん、これすっごい乗りやすいよ」

「ははは、それが乗りやすいってのはひょっとしたら一般的にはそんな良くないのかもしれないけどなぁ」

今日も白波一家は平和です。

０１６　世界最速と、エイプ。その２（後書き）

バックステップ組んでもステップ擦るよね？
紅の豚野郎です。
ここにエイプのスペックでも書こうと思ったけどそもそもそんなエイプ組んだことないからわからん。
多分６馬力くらいはある。
あと一日三回くらいセッティング要るんじゃないかな。魔法の力で何とかしてるってことで。

さて、特に後書くようなことも無いので麟のスペックでも。
魔力：無限
無限です。魔法の才能は普通。良くて中の上。
身体能力：世界最強の５０倍
世界で一番足の速い奴の５０倍の速度で走れて世界で一番力が強い奴の５０倍力が強い。世界最強が更新されればそっちに自動で合わせられる。
頭脳：知識は上の中、知能は並以上、知性は上の上、理性は無いに等しい
よくわからない事にすごいポテンシャルを発揮することがある
攻撃力：魔法の射手一矢を本気で放つと大惨劇が起こる
防御力：その大惨劇が起こる一矢を受けても無傷

身長：低い。
体重：軽い。
顔立ち：女の子。
髪：４年切ってない。
声：高い
性格：嘘をつかない。身内に優しい。アホっぽい。

パソコンを買うと初めにＯＰＥＲＡを入れるタイプ。

０１７　世界最速、家族が増える。（前書き）

やったねたえちゃん！

０１７　世界最速、家族が増える。

もう少しで教員免許が取れそうな白波麟之助です。
道具の名前と使い方はわかりません。
もう少しでとか言ってるけど努力値に比例するのではなく期間だけの話です。
必要な単位はもう取り付くしたし。

「よろしくお願いします。白波麟様」

「え？う……うわぁぁぁあああああ！ロボットだあああああ！！！！！」

「ふふふ、びっくりした？お兄ちゃん」

「茶々丸と申します」

「キエエエエアアアアアシャアベッタアアアアアア！！！」

「ちなみに、正確にはガイノイドです」

「なんだ、ガイノイドか……ロボットかと思いきや……ガイノイド……」

「それはそれで困る反応です。ロボットのガイノイドというわけです」

「クラスメイトのハカセと超鈴音が大学部のロボット工学研究会で作ってきた凄い奴だよ」

この無表情でオロオロしてるガイノイド茶々丸が……

ガシャーンガシャーンとか言って＜＜３ｇｅｔしてくれるのか。

「＜＜３は任せた」

「何の話でしょうか？」

「ちなみに私と主従契約もしてあるよ」

「なんだと！コラ茶々丸、エヴァと間接キスすんぞオラァ！」

「そ、そんな、困ります……」

「キスじゃなくてドール契約だよ。チャチャゼロと同じやつ」

「アレみたいに口汚く包丁を振り回すのか……はい、茶々丸、包丁」

「その……困ります……」

茶々丸がご飯も作れるというので作ってもらった。

ちなみに俺が死ぬほど甘やかしてるからエヴァは食事を作れない。

普段から俺が作ってる。
これからも作る機会は無いはず。
純和風に鯵の塩焼き、わかめしか入っていない味噌汁、白菜、大根などの浅漬けに白米。
シンプルながらスタンダードの味わいがある、和の心という奴だ。

「いかがでしょうか」

「うん、うまい。和食は作れないんだよな、俺」

「思ったより大した奴だ。ハカセと超も、それにお前もな」

「ありがとうございます」

「しかしアレだな。味噌汁って具材が2種類以上入るもんじゃないよな。１００歩譲ってわかめと豆腐まで」

「それ以上入ったら味噌煮込みだって言ってるもんね」

「バランスを考えずにいれたらもう味噌煮込みからクソ煮込みにランクダウンだ。
まあ味噌は魔法の調味料だからまずくなるって事はそうそうないけど、一定以上美味くしようと思っても至難ともっぱらの噂よ。
それをここまで美味く作れるなんて茶々丸ステキ！」

「うむ、お兄ちゃんも喜んで、何よりだ。よくやったな茶々丸」

「はい、ありがとうございます」

「茶々丸は飯いらないの？動力とかどうなってんだよ」

「最近までは外部からの電力供給だったのですが、実用にあたり、頭部のぜんまいを魔力を込めながら回すことによって、機械と魔力による動力が得られるよう改造されました」

「混合給油式……か……」

「レーサーだね」

「うん、茶々丸はレーサーだな」

「？？」

茶々丸は何かわかっていないようだ。当然だね。

あれから一週間、茶々丸も大分こちらの生活に慣れたようだ。↑様式美。

ホントは初めから普通に問題なく働いてくれている。

俺が魔力を込めてぜんまいを回したら一回暴走したけど。

「茶々丸にも白波を名乗る権利をやろうと思う。今日この頃」

「そんな、私が麟様の姓を名乗るなんて、おこがましい」

「遠慮はいらぬ！！」

「お兄ちゃんもこう言っている事だ。とりあえず受け取っておけ。そうすれば裏には絶対に手出しされんようになるぞ？」

「それに魔法関係で危ない時……攻撃されそうな時なんかは、白波を名乗ればだいたい押し通せるはずだ。ありがちな話だが、お前ももう俺の家族だからな」

「家族……ですか……」

「ん？どうしたの？うれしい？うれしいの？感動してんの？？」

「……はい。これはうれしいのでしょうか……。うれしい……です」

「やだ、かわいい」

「お兄ちゃんもかわいいよ」

「マスターもかわいいです」

「何このトライアングルフォーメーション。じゃんけん？」

「白波茶々丸ってのはそんなにノらないんだよなぁ。絡繰も名前の一部だし」

「私みたいに絡繰茶々丸・シラナミっていうのは？」

「呼びにくくね？いっそ絡繰・Ｓ・茶々丸とか」

「なるほど。お兄ちゃん天才」

「と言うわけだ。攻撃されそうになったらちゃんとシラナミの者ですと言うんだぞ、茶々丸」

「はい、お気遣い感謝します」

「うむ、苦しゅうない」

マスターには「茶々丸」と立派な名前をいただきましたが、マスターの兄である白波麟様に、危険がこの身に及ぶ可能性がある時は白波姓を名乗るよう命じられました。

このＣＰＵ内の処理が『うれしい』というものなんでしょう。

私はマスターの従者でありながら白波の家族にもしていただきました。

マスターは６００歳にもなる最強の吸血鬼らしいです。

普段は誰に対しても尊大な態度ですが、兄と慕う麟様にだけは常に甘えています。

ハカセにインストールされた、『話し合いすら通じない敵』一覧の「滅ぶべきバカップル」という項目に連ねられている行動にそのま

ま当てはまります。
ですが、兄妹なので問題はないのでしょう。

麟様はよくわからない人です。ハカセがインストールした人格対応プログラムのどのパターンにも当てはまりません。
本当に、思ったことをそのまま口に出しているようで、秒刻みに主張が変わる事もあります。
ですが、マスターはもちろん、白波姓を名乗るようになってからの私に対しても優しく、というより甘すぎる接し方をされます。さすがにマスターに対するほど無条件で褒め倒されたりはしませんが。
変わってはいますが、とてもいい人です。
たまに、何故か私をレーサーと呼びます。

私は、この家の家族になれて良かったです。

０１７　世界最速、家族が増える。（後書き）

アト・ガガ

遅くなりました。
今日はこれしか更新できないのか俺。
そんな事はないだろ？頑張れよ俺。

と無駄にハードルを上げてはみましたが、実際のところわかりません。

あと、８／１０も新約禁書２巻が発売なので、更新がやや滞るかもしれません。

ィヤッホーーーーーウ！！！
茶々丸！！好きだ！！！
結婚してくれ！！！
ちなみに茶々丸をバイクに乗せるかはわかりません。
最低でも４００ｃｃクラスじゃないと厳しいんじゃないでしょうか。
重量的に。
エヴァがエイプを乗ってる隣でＣＢに乗る茶々丸……なるほど。

多分実現しますん（？）

では、今回もありがとうございました。

０１８　世界最速、教育実習に行く。（前書き）

日付変更までに間に合った。
いつも通り見直しとかしてません。

０１８　世界最速、教育実習に行く。

超童顔の３９歳、教師になる

１　：０２／０７／０６
再来週から教育実習なんだけどｗｗｗ

２　：０２／０７／０６
＜＜２ｇｅｔ

３　：０２／０７／０６
＜＜２ゲットォォォォッォオオオオオオ！！！！！

４　：０２／０７／０６
（・∀・）スンスンスーン♪　（　゜Д゜）ハッ！

５　：０２／０７／０６
ｕｐ

６　：０２／０７／０６
おいおっさん、今日は『がいしゅつ』記念日だぞ。

７　：０２／０７／０６
＜＜３何やってんのこいつ

８　：０２／０７／０６
＜＜３
バーカｗｗｗｗｗｗ
＜＜４

ほらｔｔｐ：／／ｗｗｗ．ｉｋｅｍｅｎｒｏｄａ．ｃｏ．ｕｋ／ｕｐ００２６６６５．ｊｐｇ

９　：０２／０７／０６
＜＜１ｕｐ

１０　：０２／０７／０６
＜＜８
かわいいいいいいいいいい！！
娘の写真載せてんなよおっさん

１１　：０２／０７／０６
＜＜１
３９で教育実習なんて・・・カワイソス

１２　：０２／０７／０６
＜＜８
ちうたんに匹敵するかわいさ

１３　：０２／０７／０６
＜＜１２匹敵しねぇよハゲ市ね

１４　：０２／０７／０６
＜＜１３
どんだけレス速いんだよｗｗｗｗ
必死すぎワロタｗｗｗｗｗ

１５　：０２／０７／０６
＜＜８
偽装．ｊｐｇ

そんな事よりゴミ拾い行けよお前ら。
凄いことになってんぞ

16：02／07／06
＜＜9
何で1アップしてんの？
きのこ拾ったの？

17：02／07／06
＜＜8
こいつレーサーの白波じゃね？っておもってグッたら白波だった
wwwwwwwwww

白波です。
この混沌さが絶妙。

さて、ちうたんって誰だよ。

［ちうたん　　］［検索］　カチリコ

「ネットアイドル？」

「何見てるの？お兄ちゃん」

［ちうのホームページ］を見てるとエヴァに声をかけられた。

「ネットアイドル」

「なにそ……茶々丸ー！」

「どうしましたか？」

「コイツ、アレだよな」

「ハイ。９８．３３６％の確立で千雨さんでしょう」

「何？知り合い？」

「同級生だよ。地味なほうの。名前は長谷川千雨」

「いや、めっちゃキラキラしてるやん。地味の正に対角やん」

フリッフリの「あたい魔女ッ子☆よろすくｗｗｗｗ」って感じのプリチーな少女の写真とか貼ってある。

「きっと『ちうたん』にも色々あるんだよ。何か学園結界の認識阻害が効いてないからストレスもあるんだと思うよ」

「ふーん、認識阻害が効かないなんてことあるんだなぁ。……で、どう？」

「うん。いいよね」

「何の話でしょうか？」

「いいか茶々丸」

「はい、何でしょう」

「このちうたんに会ったとしても、『ちうたん』だと知ってる事を悟られるなよ」

「はい。大丈夫ですが、何故？」

「それはお兄ちゃんがそのうち教師として学校に入った時、それをネタにからかえるからだ」

「なるほど」

「いいよねー」

「３Ｐとかしたいよねー」

「茶々丸も入れて４Ｐもあるいは……」

「「うへへへへ」」

「な……何でしょう、この空間は少し怖すぎます……」

茶々丸がマジ引きしてる。

「と、まあ冗談はこれくらいにしておいて、だ」

「うん」

「じょ……冗談だったのですか」

思いっきりマジだけど。

「二人に言わなきゃいけないことがあるんだ」

「どうしたの？」

「俺は次の次の月曜、要するに２２日から教育実習が始まるんだが」

「はい」

「……本当は、口に出すのも辛いんだが……」

「う……うん」

「俺は実習期間の３週間……帰ってくることが……できない……」

「……」

「……」

黙り込んでしまった。二人とも、相当驚いているようだ。

「に、３週間も？」

「えっ？」

茶々丸が普段は絶対にしないリアクションまでする。

二人とも寂しいんだろう。当然、俺も死ぬほど寂しい。

「二人とも、寂しいのはわかる。でも、乗り越えなきゃ……いけないんだ……ズビズボバビッチ（鼻をすする音）」

「お兄ちゃん……私、大丈夫だからね。お兄ちゃんが居なくっても心配……しないように……グスッ」

「あ、あのー、二人ともよろしいですか？」

「ん？なんら？」

俺にだきついてべそかいてるエヴァが茶々丸に返事をする。

「お二人の今まで生きてきた６００年間と比べれば2週間程度は些細なものですよね？」

「そうだが、どうした？……ブボボ……モワッ（鼻をすする音）」

「え？いや、ですから、3週間くらい離れてても……」

茶々丸からすっごい不自然な言葉が聞こえてきたけど、何？幻聴？

「バカッ！茶々丸のボケロボ！！……ズズッ……お兄ちゃんと私はなぁ、出会ってから２４時間以上離れたことが無いんだよ！！」

「完全にお互いがお互いの一部なんだよ！！……ブリュンスタッド（鼻をすすｒ）」

「えー……えぇー……」

後で聞いた話だが、茶々丸はこの時『呆れ』という新しい感情を生

み出したそうだ。

「お兄ちゃん行ってくるからな。何かあったらこの一週間前三人で駅の近くの携帯ショップで買ってきた最新型の携帯電話に遠慮なくかけてくるんだぞ」

「うん、お兄ちゃん。その間学園の警護と食事はまかせて。もし何かあったらこのお兄ちゃんと色違いの値段も一番高かった高機能な携帯電話でえんりょなくかけるね」

「いってらっしゃいませ、麟様。ご安心ください、元々学園の警護はマスターしかしておりませんし、食事も私がお作りいたします。ちなみに私の携帯もお二方と色違いですので、有事の際はこの麻帆良工業大の電子学部が開発したレスポンスのとても速い携帯電話で連絡いたします。」

「いってらっしゃい、お兄ちゃん」

「うん、……いってきまウィッシュ☆」

～駅の改札口～

あれ？俺電車の乗り方知らなくね？

「どうしたん、お嬢ちゃん？」

「電車の乗り方わからへんねん」

お嬢ちゃん？ああ、慣れてるから。間違われても特に何とも思わないから。
京都っぽいイントネーションだったから京都っぽいイントネーションで返す俺はきっと紳士。

「どこまで行くん？」

「あこ」

目的地の表示を指でさす。

「ああ、それはなぁ、とりあえず７２０円の切符買ってあっちに来る電車乗るねん。
しばらくしたら終点に着くからそこで乗り換えや。そこまで行ったらもう一回駅員さんに聞いてな」

「そうするわ。姉ちゃん、ありがとう」

「気つけてなぁ～」

～４時間後～

まさか電車に乗るのがこれほど重労働だったとは……。
もう二度と乗らない。

特に急ぐことも無く、麻帆良学園外の普通の中学校に歩いて行く。

「すいません、白波ですぅ～。超遅刻しちゃいました～」

「遅いですよ、白波さん！大人が子供に与える……影響……を……
どうしたんだい、お嬢ちゃん？どこの教室の子？」

このロリコンめ！

「いえ、実習生の白波です。電車の乗り方がわからなくて、気付いたら知らない所にいたんです。
割と（２割ほど）一生懸命戻ろうとしたんですけど、結局４時間もかかってしまって」

「ええ！？
ああ、いやその、まあどっちにしろ今日は顔合わせと校舎案内だけだから私が。
っていうか本当に実習生？どう見ても小学生くらいだけど……」

「一応こう見えても大人です。はい、免許証と新田先生に書いていただいた紹介状です」

「ああ、そうなんだ。ちょっと失礼……男！？ってさ、３９歳！？」

６００歳以上でちゅｗｗｗｗｗしゅんましぇんｗｗｗｗｗ

「確かに、拝見しました。じゃあとりあえず校長先生の所に」

「はぁい」

コンコン

「教育実習の白波麟さんが到着しました」

失礼しマースガラガラガラと校長室を開けると地味に見覚えのあるおっさんが。

「遅かったじゃないですか。ってやっぱりお前だったか！テレビでも見たけど全然変わってねえな！」

「え……あー、ジムカーナの時の！！」

そこにはジムカーナの時にちょっとだけ話したおっさんが！！（011　世界最速、ジムカーナがなんとかかんとか参照）

「校長、お知り合いなんですか？」

「ああ。知らない？2年前、スポーツ新聞でもない普通の新聞で一回バイクの記事が一面に載っただろ？」

「え？あー、あの……えー！？なっ何で教師なんか？」

「ってかおっちゃん教師やってたんですね」

「あの時はまだ学年主任だったけどなぁ。というか教師『なんか』とは随分じゃないか。いや、俺もそう思うけどさ」

「だってあのままプロレーサーになってたら教師をやる、下手したら１００倍以上稼げるのに」

「いやぁ、あの雑誌記者の朝倉さんっていたでしょ？あの人の娘さんが今中学生なんですよ。
それで、あの人にも恩があるもんだから俺が少しの間だけでも面倒を見たいと思ってね」

「ああ、居たなぁ。それに実力が伴っていたら立派だぞ。やってくれるか？」

「当然。白波に不可能はありませんよ。　　電車に乗るの以外は」

「電車……乗れねえのか？」

「遅刻の原因だそうです」

「ば、バイクがあるんで」

「……それもそうだな！」

「ここが体育館」

「なるほど」

「ここがグラウンド」

「ほーん」

「ここが大講堂」

「ヤイサホー！」

「で、担当してもらう二年各教室がこのエリア」

「なるへそ」

「最後に、ここが職員室だ」

「よしきた」

「おや、校長、実習生……転校生ですか？」

「こう見えて実習生だ。ほら、麟先生」

「白波・A・R・麟です。英語担当の実習で来ました。よろしくお願いします」

「かっ、かわいいですね。じゃなくて！！」

この後も免許を見せたりレースの話をしたりでもう帰る時間になった。

「じゃあ麟先生、これから3週間、よろしくお願いしますね」

この人が職員寮内で隣の部屋になるという宮田先生だ。俺の受け持つ3組の担任でもある。男だ。

担当は科学らしい。

「はい、よろしくお願いします」

「ああ、ここですよ」

「じゃあここは俺が出しときますね」

言ってはいなかったがタクシー帰宅だ。このブルジョワめ！

俺は明日からバイク通勤だから全く問題ないけどな。

「いやいや、そんな」

「これからお世話になるんですから。それに俺、元Ｎｏ．１レーサーだからそれなりに持ってますよ？」

「あはは、じゃあ今日のところはお願いしますよ。また今度何かおごらせてくださいね」

「これはやられましたね。ああ、お釣りはいいです。募金にでも」

万札を出して懐の広さをアッピルする俺に死角は無かった。

「はい、これは鍵です。おやすみなさい」

「おやすー」

さて、部屋にも入った事だし、帰るか！

「ぅぅ……お兄ちゃん……」

「マスター、食事は「いらん！」かしこまりました」

マスターは麟様が居なくなって完全に拗ねています。

私も少しは寂しいのですが。……寂しい？これも新たな発見ですね。

でもこれはあまり『嬉しく』ありません。

「チッ、侵入者か。こんな時に！行くぞ、茶々丸！お前の力も見ておきたかったしな」

「かしこまりました」

さて、俺は最強だ。
急に何の話だと思うかもしれないが、まあ聞いてくれ。
ぶっちゃけ、何されても絶対に死なないし傷もつかない。
だから敵から身を隠す手段とか全く知らないし気配の消し方も知らない。覚える気も無かったし。
あとは殺気とかもわからない。
天地が返ろうが負けるわけが無い相手ばっかりだから、そんな蟻んこに「ぶっ殺してやる！！」なんて思われても何も感じないじゃん。
蟻に殺気を向けられた経験はないけど。
で、殺気を出す方法も知らない。「絶対ぶっ殺してやる！！」とか思うまでも無くちょっと速く近付いてちょっと勢い付けて殴ったら充分人を殺せるし、光の一矢でも適当に出せばそれでも充分。

これは余談だが、俺が無詠唱で使える魔法は『魔法の射手』と『転移』だけだ。いや、他の魔法は試したことがないだけでやったら出来るかもしれんけど。

要するに何を言いたいかというと、囲まれた。中学生くらいの一人と高校生くらいの一人に。

「何者だ！？子供？」

「油断するなよ、刹那」

「わかっている。貴様、名を名乗れ」

自分で言うもんじゃないかもしれないけど、銃と剣突きつけて見た目幼女に言うセリフじゃないよね。

「この名前はお前らにとったら呪いみたいなもんかもしれんけど、

聞く？」

「早く答えろ！」

「おお怖い。『白波麟』って言うんだけど、知らない？」

「？何を言って……おい、どうした龍宮？」

「それは……本当なのかな？」

「本当。別に害意があって入って来た訳じゃない。エヴァに用があるんだよ。だから引き下がってくれない？」

「何を言って「やめろ、刹那！」何故！？」

ガングロお姉さんが龍宮、刀っ子が刹那と言うらしい。

「今の話が本当なら、お前の適う相手じゃない」

「そんな訳があるか！格闘をやっている歩き方でも無ければ鍛えてる風でもない！殺気だって微塵も感じないぞ！それに……」

「それに、魔法は『魔法の射手』と無触媒の『転移』しか使っている所を見られた事は無い上魔法発動体は持って居ない。なのに発動体も無く放たれるその魔法の矢は本気ならこの県ごと、いや、ひょっとしたら日本ごとこの麻帆良を沈めることも可能かもしれない、そのあまりに桁違いの強さから、名前を呼べば来るという噂が流れ、政府から緘口令（かんこうれい）が布（し）かれるほどの強者。どう見てもただの小さい女の子なのに、あの「闇の福音」の兄にしてその「闇の福音」よりも恐れられる、史上最強で最悪、元２億ド

ルの賞金首、『邪神』白波・Ａ・Ｒ・麟だ」

「よぉーくご存知で。１０ＳＰ（シラナミポイント）あげちゃう」

「だが嘘かもしれないんだろ？魔力を全く感じない。何より、影も水も使わずに転移できるなんてバカな話聞いたことも無い」

「魔力を隠す魔法具だってある！それにもし本当だったら私たちは今かなりまずい事をしているんだぞ！！」

どう見ても小さい女の子を無視ですか、そうですか。
別にいいけど。
ちなみに１０ＳＰでうまいＢＯＷを１００本プレゼントだ。

「じゃあさ、こういうのはどう？一発だけ刀の君に攻撃をして、外す。それで君らが、ってか刀持った君が勝てると思ったら戦闘開始で」

「いいだろう。だが外すなんて言っても敵の言うことな」

とりあえず刀の子の横の木を一発、強めに殴る。
パァン！という音とともに、丁度手の形に抉れた木を見てから元の位置に立つ。

「ど信用……」

「刹那、隣の木を見てみろ」

「な……何だ、これは？」

「俺の手形。なんなら合わせてみる？ぴったりだと思うけど」

「な……」

「刹那、私たちの負けでいいよな？学園長も相手が『邪神』だと聞いたら流石に許してくれるだろう。
正直、私は今すぐにでも帰って泣きながら布団に包まりたい気持ちでいっぱいだよ」

「だとしても、それでもウチは……」

「ハァ……。ッ！！まずい刹那、避けろ！」

ナッパ！なんつって

とかやってる間に尻尾まいたお二方は２０メートルほど離れる。
と同時に、確か『こおる大地』とかいう魔法が俺に直撃した。
今日暑いもんねｗｗｗちょうどいいクーラーだもんねｗｗｗｗ

「よりにもよってこの私の期限が最高に悪いときに来るとは、つくづく運の無い……お兄ちゃん！？」

「おお、エヴァ！！会いに来たぞ！」

つくづく運の無いお兄ちゃんだけども！

「お兄ちゃん！お兄ちゃん！！！」

「「え？」」

「エヴァンジェリンさん、彼は……」

「私の最愛のお兄ちゃんだ。貴様にはやらんぞ、刹那。
そんなことより魔法直撃させちゃったけど大丈夫だった？」

「ああ、世界最強だから。全然大丈夫」

「な、刹那。あれがシラナミだ」

「悔しいが……全く勝てる気がしない」

ビクンビクンｗｗｗｗｗ

「それに敵じゃない事もわかったしな」

「敵？貴様ら、お兄ちゃんといったい何をしていた？」

「エヴァを待ってる間カードゲームしてたんだよ」

「なんだ、そっかぁー」

「まあ嘘なんだけどね」

「当然、わかってるよ、お兄ちゃん。
さあ、貴様ら。遺言があるなら聞いておくが？」

「まあまあ、許してあげようじゃん。こいつらにもきっと沢山の仲間がいる。決して一人じゃない。
信じよう。そしてともに戦おう。工作員や邪魔は入るだろうけど、絶対に流されるなよ」

「お兄ちゃんの風が吹いてきそうな長台詞に免じて許しておいてやるが、次は無いと思えよ？」

「だから言ったろ、刹那」

「……すまん」

家に帰って一通りにゃんにゃんした後声が漏れまくってたらしく（というか漏らしたことによって）辟易した茶々丸に見送られてバイク持って寮に帰ります。

「じゃあな。明日はどこかで外食でもするか」

「うん。心当たりがあるから一緒に行こうね！」

「おお、おやすみ」

「おやすみ、お兄ちゃん」

「おやすみなさい、麟様」

翌朝、隣の宮田先生は「いつの間にバイクを！」と言った後、「子供がバイクに乗るもんじゃありませんよ」とか言ってきた。
あんた昨日俺がレーサーやってる大人だって話したよな？

０１８　世界最速、教育実習に行く。（後書き）

亞斗餓鬼

バイク乗りてぇー。
でも皆さん事故には気をつけてくださいね。

次はバイク出します。
大きいのにしようか、小さいのにしようか……

ではまた翌日。
今日のあとがきは短めで失礼します。

０１９　世界最速、教育実習に行く。２（前書き）

内臓の調子が悪すぎてこれだけしか書けませんでした。
明日はがんばる。

０１９　世界最速、教育実習に行く。２

「改めてよろすく☆白波麟でぇす？」
職員朝礼だョ！全員集合
「実習生の白波麟君だ。こう見えても坂本君より年上だぞ」
と、こうちょっさん（校長＋おっさん）からの紹介を終え、宮田先生と共に往こう、教室へと。
ガラララララアアアアアアアアアアア！！！！！！
「席に着いてください、このクソ虫どもが」
「「「おはよーございます、宮田少尉！」」」
男女共に統制された動きで号令もなしに起立、最敬礼、着席をする。
少尉って何？
「おはようございます！今日欠席の人（クズ）は手を挙げてください。いませんね。
今日から教育実習の先生がいらっしゃいます。どうぞ、白波先生」
なんで転校生紹介するみたいな流れでやってんの？
ってか宮田先生のキャラわかんねぇ……。
「なっすーん！！白波リンリンでーす☆よろしくぅ？」

「という訳です。担当教科は英語。質問がある奴(クズ)は授業の時にでもやってください。
では戻りましょうか、白波先生」

「はい」

宮田先生もまともじゃなかったよ……。
俺の方がかなりまともに見える。
昨日は普通の人だったのに。

職員室に戻った俺は刺青まみれのハゲた白人と向き合ってる。

「じゃあさっそく一時間目からですね。彼が英語担当教諭のセンチメンタル坂本です」

「小室マイケルです。よろしく、リンさん」

「ホント何ここ。魔境？」

お前が俺（の設定年齢）より年下の坂本かよ。
どう見ても５０代だわ。

～教室～

「ミナさん、オハヨーございます！」

「「「おはよーございます、ダダ教官！」」」

「誰なんだよこの白人はヨォォォォォオオ！！！！」

「マイケルです」

「うるせぇ、宇宙怪獣！！」

まともじゃ無いのはこの学校だった。
宮田先生だけじゃ無かったんだ！

「今日から私とイッショに英語をしてくれるリンさんです」

「よろスク水。トリゾーです」

「「「はい、よろしくおねがいします！」」」

みんな一斉に敬礼する。
なんで中学生が号令も無しにこんな統率されてんだよ。気色悪いなぁ。

「私もエイゴあんまり知らないから助かるよー」

「……はい。もうなんでもいいです」

「リンさんに質問がある人は手を挙げてクダサイねー」

しーん……と、完全に静まり返っている。
いや、正確には、隣の教室から叫び声とか聞こえる気がするが、少なくとも教室内では完全に無音だ。

と、急にセンチメンタル（？）先生が懐からベレー帽を取りだしてかぶった。

「注目！

２－１部隊下士官兵に告ぐ！現在この教室は宮田技術中尉の管理下に無い。

よって、私、坂本マイケル少佐の権限によって、現状況を、私が許可するまで教室内でのみ『休み時間』と仮定し、行動する事を許可するものである！

繰り返す！！現在この教室は宮田技術中尉の管理下に無い。

よって、私、坂本マイケル少佐の権限によって、現状況を教室内でのみ『休み時間』と仮定し、行動する事を許可するものである！

尚、『休み時間』内の権限もこの時復活するものとし、下士官兵内の上下関係も認めないものとする！

以上！状況開始！」

「「「はい！ありがとうございます！」」」

もう嫌だ。俺、教師になれなくてもいい。

何で義務教育の中学校に陸軍階級が適応されてんだよ。

何よりここ認識阻害ねえだろ。

俺がおかしいのか？

「麟せんせー！！質問です！！」

女の子が手を挙げる。

「どうぞー」

「小学生ですか？」

「３９歳のおっさんです」

えー！うっそだー
などと普通の中学生みたいな野次が飛ぶ。
なんか、すっごい疲れた。

「ダダ先生の本名知ってます？」

「知らぬ」

「はっはっは！私の本名は小室マイケルデスよー」

さっきおもっくそ流暢に日本語で喋っていたセンチメンタル坂本（？）が朗らかにカタコトでほざいてる。
こいつマジ何なの？死ぬの？

「麟先生って、確かプロレーサーですよね？」

「違う」

「でも新聞に出てましたよ？」

「オーウ、私も見ましたよー」

「プロレーサーってのはメーカーの支援を受けてメーカーの名前でレースに出て金を稼ぐ奴な。
で、俺はプライベーターっつって自分の小遣いでバイク買ってレース出たら優勝して帰ってきたの」

おおー！すげー！
説得力あるな。
金持ちなんだねー！
説得力あるな。
とまたざわつく。
センチメンタル小室マイケル坂本ダダ先生、略してセコムマサダ先生も嬉しそうに頷いている。
お前ホント上腕二頭筋の存在感エグいな。スーツはち切れるぞ。

「せんせーってバイク乗るの上手いの？」

「そりゃレーサーだからな」

「校長先生とだったらどっちが上手いの？」

その時、ガララと扉が開いて校長が入ってきた。
それと同時に緩みきった空気が一気に張りつめ、全員起立をし、一斉に校長の方を向き敬礼した。

「「「おはようございます！閣下！！」」」

「構わん。この教室内の全権は坂本少佐と白波特殊指導官にある。いつも通りにしたまえ」

誰だお前は。

本当にジムカーナのおっさんか。

「「「はっ！ありがとうございます！！」」」

「白波特殊指導官、すこしいいかね？」

「はい、まあ」

～ろうか！～

「なんか、ホントごめんね。あのクラスの担任の宮田君が重度の軍事マニアでね」

「じゃあ宮田さんは自分が軍隊やりたいからあんな事に……？」

「いや、スタンド使いとスタンド使いは引き合うが如く勢いであの教室には軍事マニアしかいないんだ」

「ホント何なの、この中学校」

「他にはガンマニア、ビブリオマニア、パソコンマニア、交通機械マニアが隔離された教室がひとつづつと、それ以外がまるっと詰められた混沌とした教室がひとつ」

「いくら私立とはいえ、それは……」

「でもみんな成績はいいんだよ。まあ、私立だから。ちなみに、う

ちの教員は全員、それぞれのクラスに完全対応できるように訓練されてるよ」

「気色悪い」

「俺もそう思うわ」

ちなみに、今日教えた教室は軍事の1組、パソコンの3組、交通機械の4組だった

パソコンの3組は、全ての机の上にパソコン完備で、しかもそれは学校の備品ではないらしい。
全部持ち込みか、自分で組んだそうだ。
英語と一緒にプログラム言語やタグや煽り文句が飛び交う気色悪い空間だった。
「ヒャッハー」とか「俺のプログラムにうんこのスタンプ実装した奴出てこい！！」とかの叫び声も出してる。
1組で聞こえた叫び声お前らだったのかよ。

他の授業もパソコンでノートを取っているらしい。

一番熱気が異様だったのが4組だ。
中学生の割に詳しいどころじゃない。
専門大学生クラスの詳しさだよアレは。
英語の話とか1秒ほどしなかった。（「英語担当の白波です」だけ）
それこそ、自転車から宇宙船まで何の話でもしていた。

バイク一台にしても、ブレーキキャリパーなどのパーツ1つから車体そのもの、更にはその風の抵抗まで気になって仕方ないような奴までいた。

バイクだけじゃなく車、飛行機、船舶の知識も持ってるのがこんな所で役立つとは。持っとくもんだなぁ。

という訳で、俺は4組の神になった。

「疲れたでしょ」

「俺、もう教師いいかな」

「いやいやいや、明日のクズはもっとおとなしいので大丈夫ですよ」

「ハァ、そうですか」

「では、お疲れ様です」

「お疲れさまでーす」

今日はもう帰ってエヴァに癒してもらおうと意気揚々とDB2（013　世界最速、妹が今日もかわいい　を参照）に跨る。

そして職員寮につくなり、家の近くに転移した。

「エヴァ、お兄ちゃん、アルティメットガンバ★ルンバ」

「お兄ちゃん、何かあったの？」

「緊急の癒しが必要な事態が起こった。具体的に言うと、精神力がゴリゴリ削り取られる」

「よしよし」

「ってか茶々丸は？」

「さあ？」

いねえのかなぁ。

とか言ってると「ただいま戻りました」と玄関から声がした。

「おかえりなさいませ、茶々丸。どこ行ってたんだ？」

「そのー、猫に餌をやりに……」

なぜだか申し訳なさそうにしてるからいっそホメ殺してやろう

「猫に餌……だと……！？」

マズい、茶々丸の霊圧が消えた！？

「も、申し訳「ありますー」……へ？」

「へ？だって、かっわいー☆

なあ、キティ？」

「そうだね。中々かわいいところもあったんだな、茶々丸」

「いえ、その……」

「猫に餌あげる茶々丸かわいい！！」

「え？」

「怒られなくて戸惑ってる茶々丸かわいい！！」

「あ、あの……」

「褒められ慣れてない茶々丸かわいい！！」

「そ、そんな」

「コンビニとかで猫缶買ってる茶々丸かわいい！！」

「み、見てたのですか！？」

「見てないけど言ってみたら当たってて予想よりもだえてる茶々丸かわいい！！」

「恥ずかしいです」

「新たな感情が芽生える茶々丸かわいい！！」

「お兄ちゃーん」

「エヴァもかわいい！！」

「ごはんいこ？」

「白波はみんなかわいい！！」

～超包子～

「来たぞ、サツキ、超鈴音」

――こんばんは、エヴァさん――

「よく来たネ」

「おーっす、さっちゃん、チャオ☆リン」

「知り合いだったの！？」

――「「いえ、ぜんぜん」」――

「だと思ったよ。じゃあいつもの頼む。お兄ちゃんも同じので」

――はい――

「しかし、いつぞや話は聞いたけど、本当に随分可愛らしいお兄さんネ」

「チャオリンもいつぞやエヴァに聞いたけど、特に何も思わん」

「随分ネ。そう言えば、最近茶々丸の調子はどうカ？」

「随分と感情が芽生えてるようだぞ？さっきも恥ずかしがってたし。なあ、茶々丸」

「いえ、私はそんな……」

「何ト！？これはハカセに報告しないとネ！」

――お待たせしました――

「早っ！？さっちゃん超早いね！」

――仕事ですので。それに、楽しいですよ――

「いい子だなぁー」

「幸せの化身とまで呼ばれてるからね。アホばっかりのクラスメイトの中でも数少ない、私が認めてる人間だもん」

「すごいんだな、さっちゃんは……」

――いえいえ。あ、呼ばれてるので行きますね――

「なんか儚(はかな)いしゃべり方する子だったなぁ」

「たしかに。お兄ちゃん、今日はもう行くの？」

「また明日帰ってくるから」

「当初言っていた3週間帰ってこれないという心配も無くなったようですしね」

「じじいに確認するように言っておいたからね」

「さすがエヴァ」

「うん。じゃあおやすみ」

「おやすみなさいませ」

「ああ、おやすみ」

寮の部屋に行ったら窓が開いてて襖が開けられてた。
備品の机の上には「盗むものも無くてかわいそうだからあげる」と書い封筒の中に１０００円入ってた。

大事なものは持ってきてないだけだよ。
ほっとけ

０１９　世界最速、教育実習に行く。２（後書き）

泥棒に情けをかけられる麟の話でした。
ちょっと今日は本格的に内臓（主に胃と肝臓）がまずいので、明日はがんばります。
さっちゃんの話し方を考えるのに一番時間がかかった気がする。

総合評価３１２にお気に入り登録を１３２件もありがとうございます。
愛していると言っても過言じゃないでしょう。
では、本日はこれで失礼いたします。

０２０　世界最速、教育実習を終える。（前書き）

終えます。

※注意※
今回の話には、アガサ・クリスティ著『そして誰もいなくなった』の重大なネタバレが含まれて居ます。
ご注意ください。

０２０　世界最速、教育実習を終える。

「……」

「……」

「……」

「……先生は本、持ってないんですか？」

「もっとらんですばい」

「じゃあ、これ貸します」

「あ、どうも」

――Ｗｈａｔ　Ｅｖｅｒｙ　Ｍａｎ　Ｔｈｉｎｋｓ　Ａｂｏｕｔ　Ａｐａｒｔ　Ｆｒｏｍ　Ｓｅｘ――

『男がセックス以外に考えてること』

「……」

「なにこれ」

「洋書です。英語の時間なんで」

「俺、こう見えても男なんだけど……」

「っ！！返してください！！」

「はい……」

「……代わりにこれどうぞ」

「はい……」

――And Then There Were None――

『そして誰もいなくなった』

「ありがとう」

「ウォーグレイヴ判事が犯人です」

「……」

「……」

「静かだったでしょう？」

「2組こわい」

「？」

えげつない精神攻撃を受けまくっていた白波です。ホント何なのあ

の子。マジ怖いんだけど。
ミステリー小説のネタバレ先にするとか、ガンジーでも助走つけて殴るレベル。

「今日は二教科だけなんですね」

「ああ、宮田先生」

「これからうちのクソどもに科学を教えに行ってきます」

「……がんばってください」

「はい」

「じゃあ私たちも行きまショー」

「……はい、坂本先生」

「小室マイケルですヨー」

ちなみにこいつ、ホントに英語ほとんど知らなかった。なんだよこの英語教師。
ってか何だよこのマッチョハゲ。

「ぐっもーにんえぶりわーん。小室ダヨー」

「ヘイカモーーーン！！」

「ちょっと、あたしの犬見てない？」

「太一ならさっき匍匐（ホフク）前進で1組に逃げていきましたわ、お姉さま」

「ふーん。じゃあいいわ。カスミ、あなたが今日から私の犬ね」

「お姉さま……」

「誰！？携帯鳴ってるんだけど！！あ、あたしだったわ。ゴメンゴメンゴ」

「3．141592653589793……続きなんだっけ？」

「2384」

「おお、そうだそうだ。626433832795028 8……」

「お帰りはあちらーーーー！！！お帰りはーーーーー！！！」

「離れろ……死にたくなかったら、早く俺から離れろォォォォォォオオオオオ！！！！」

「フハハハハ！やっと覚醒しよったか！！」

「XPもう入れた？」

「様子見」

……無理。

「すいません、今日からおなか痛いんで帰り裂きます」

「ちょ、リンさん！リンさーーーん！！」

「校長先生！」

「ん？どうしたんだ？」

「教師、無理」

「そんな朗らかな笑顔で……5組か！！」

「いや、確かにとどめはそこだけど！全クラス！全クラスだから！！等しく無理！！」

「まあ……しょうがないか。いや、麟君は充分持った方だよ」

「マジかよ、まだ二日目だぞ俺」

「だいたい、適合性の無い人なら持って半日だからなあ。

正直、教師いなくてもやっていけるんだよね、生徒」

「いや、誰がいようがやっていけねえよ、あの混沌っぷりじゃあ」

「うーん、仕方ない。うちでの一日は他の学校のひと月相当だからね。もう卒業検定、合格でいいよ」

「よしきた。じゃあ帰ります。今までありがとうございました」

「また来てもいいんだぞ？」

「ああ　こんなにお断りしたい気持ちになったのは初めてです」

「まあ仕方ないか。合格証明は？」

「後ほど麻帆良の桜ヶ丘４丁目２９に」

「おお。じゃあまたいずれ」

「あいよ」

「エヴァぁぁぁぁあああああああ！！！」

「お兄ちゃん！！どうしたの！？」

「ああ、三週間の予定だったのが、俺が天才すぎて3日で終わっちゃった。ってか学校は？」

「今日は休んだー。だってお兄ちゃんと居れないならどこにいても一緒だもん」

「あはは、そりゃそうだなー」

「「ねー」」

「じゃあ久しぶりに走りに行くかー」

「うん、お兄ちゃん！！」

「今日は後ろ乗ってもいいぞ」

「わーい！」

信じられるでしょうか。この子、だいたい６００歳なのです！

「じゃあ装備を整えたらガレージな」

「うん！」

～ガレージ～

「お待たせ～ってアレ？こんなバイクあったっけ」

「ああ、指輪だよ」

「指輪？……ああ、そんな機能あったね、そう言えば」

「全く使ってなかったからなぁ。まあいいや。乗るぞー」

ＳＵＺＵＫＩ　ＲＥ－５

ロータリーエンジンと茶筒（メーター類のディスプレイ兼用）を載せたバイクだ。

うそ臭いほどの巨大なエンジン周りと、妙な加速感が癖になる一品です。

鍵を回すと、電動とは思えない、ものすごい勢いで茶筒が開く。

半透明のカバーの中には、タコやスピードなどのメーターが絶妙にレイアウトされている。

セルスターターボタンを押せば、不安定な低回転のアイドリングが始まり、不規則な排気音が聞こえる仕様だ。

「お兄ちゃん、コレホントに走るの？」

「不安な気持ちはわかる。でもスズキだから大丈夫！」

「そっかー。スズキだもんね」

「ああ。行くぞ」

ところで、回せば回すほど振動が減っていくのも奇妙な感覚だよね。

～麻帆良　路の駅～

「近隣ツーリングもたまには悪くないな」

「こんなとこあったんだね」

「最近出来たってＹＯチェケラ」

「お兄ちゃん、タバコは体に悪いよ」

「大丈夫。俺だもん」

「そうだよねー」

「「あははは、うふふふ」」

などと、ベンチで談笑してると、変なメガネの黒人が話しかけてきた。

「ちょっと君、子供がタバコなんて吸うと……って、エヴァンジェ

リン・A・K・マクダウェル？」

「マクダウェル・シラナミだ。何の用だ？正義の魔法使い」

「ふん、君に用事はない。そっちの子も君の関係者か」

「リンリンでーす☆よろしくしなくてもいいにょん」

「まあ君の関係者なら、訳有りだろうしあまり大きく言わないが、公共の場であまり堂々とタバコを吸わないでくれ」

「ふん。用がないならさっさとどっかいけ、ガンドルフィーニ」

「そうだじぇ！ガングロフィーニ。優しげな目しやがって」

「……まあ、あまり目立たないでくれよ？」

「ふん」

「なんだったの、今の」

「ガンドルフィーニ。『魔法先生』をやってて正義感溢れる男だよ」

「ほーん、正義、正義ねぇ……。
実は俺も正義の味方なんだけどね」

「お兄ちゃんはいつでも私のヒーローだよ！」

「アハハ、こーいつぅー」

ヒュゴーンヒュゴーンと帰ったら茶々丸がオロオロしてた。

「ああ、マスター。どこに行ったのかと思ってました。麟様も、おかえりなさいませ。」

「なんだ、心配してたのか？」

「そうですね。少し……心配しました」

「ｗｏｏ．．．」

「それで、明日はハカセに点検整備をしていただくので、家を空ける事になります」

「そうか。私たちは大丈夫だから行ってこい」

「あたしもいくー！！」

「お兄ちゃん！？じゃあ私も行く！」

「マスター！？じゃ、じゃあ私もいきます」

「「どうぞどうぞ」」

「なんでしょう、これ……」

ほんと何でしょう、これ

０２０　世界最速、教育実習を終える。（後書き）

何なんでしょう、これ。

ＳＵＺＵＫＩ　ＲＥ－５
水油冷シングルロータリー
４９７ｃｃ
６２ＰＳ／６，５００ｒｐｍ
前：ディスク　後：ドラムブレーキ
死ぬほどほしいです。
生産、出荷台数が約６０００台という超希少車。
ロータリー大好きな豚野郎としては喉から手が出る逸品ですね。
ＳＵＺＵＫＩ再販しねーかなー。

こちらのバイクも杉やんさんに案をいただきました。
いつもながらありがとうございます。

作中のＷｈａｔ　Ｅｖｅｒｙ　Ｍａｎ　Ｔｈｉｎｋｓ　Ａｂｏｕｔ　Ａｐａｒｔ　Ｆｒｏｍ　Ｓｅｘですが、かなり最近の本だったと思います。
こちらはネタバレしません。

原作キャラが誰も出ないにもほどがあったんで、早々に教育実習編は打ち切りました。
これ以上続けると麟が普通の人になっちゃう！

では、今日もこのような拙作を読んでいただき、ありがとうございます。
尚、１１日（木）の夜～１２日（金）は、私用で遠くに出るため、

更新できない可能性があります。
申し訳ありません。

０２１　世界最速、ハカセとのコンタクト。（前書き）

バグレベルの主人公よりバグレベルのＣＰＵがほしいんだよ！

０２１　世界最速、ハカセとのコンタクト。

「わかってないなぁ。足を見せりゃいいってもんじゃないんだよ。メイドってのはロングスカートが一番いい」

「でもミニスカートメイドさんだってなかなか捨てがたいものがありますよ。ハイソックスとスカートの間に見える生足がなんともいいんじゃないですか」

リン・アタナシアレーサー・シラナミです。茶々丸にメイド服を着せて大学に行ったら、さとみんとロングスカートとショートスカートのメイドならどっちの方が、という話になりました。

「そりゃもうメイドさんじゃなくてメイドのイメクラだよ。だいたい、それじゃあドロワーズがはみ出るだろ」

「なるほど、ドロワーズですか。たしかに、普段無い日常を求めるならそれも外せませんね」

「でもさとみんなら膝下までのスカートが一番似合いそうな気がするな。ロングすぎず、ショートすぎず」

「茶々丸ならミニも捨てがたいですよ。腿（もも）の接合部も見えるし、なにより熱が篭りにくいです」

「茶々丸の貞淑さは天地を揺るがすレベルだから、ショート穿いたら宇宙が崩壊するかもしれない」

「あの、お二人とも、点検は……」

「とりあえず、ショートスカートの茶々丸を見てみない事には話が始まらない」

「それもそうですね。じゃあ茶々丸、とりあえずコレを」

そう言って取り出だしたるはメイド服（イメクラ仕様）。
いや、好きだけど、違うんだよ。
和食を食いたいときに中華が出てくる感覚なんだよ。

「こ、ここででしょうか」

「ん～別にどこで着替えてもいいけど、何で？」

「その、ここだと麟様も見ていらっしゃいますので、その、恥ずかしいんですが」

「恥ずかしい！？じゃあ超さんが言ってた事はホントだったのね？こうしちゃいられないわ！」

「茶々丸、俺はガン見するけど早く脱ごうぜ！」

「お兄ちゃん、久々に下種くてステキ！」

「エヴァさんが麟さんがやることなら何でも許しそうな雰囲気に！！こんな所まで超さんの言った通り！」

「当然だろう。シラナミは全員がシラナミのやる事全てを赦すんだ」

「「ねー」」

「そんな無茶苦茶な……」

「ともあれ茶々丸、お兄ちゃんもこう言ってるのだ。脱いでもらうぞ」

「は、はい」

茶々丸がゆっくりとメイド服を脱いでいく。

ぐへへへへへwwwwwww

「いいなぁー。このメカメカしい感じがステキだなー」

「そ、そんな……恥ずかしい……です……」

「俺もこんなんなりたいなー」

「そっち!?」

何故かさとみんが嬉しそうに驚いてる。

「でも多分俺、日本刀も通らなければ地雷の上でタップダンス踊っても無傷なんだよな。注射針も入らないし。

メカニカルになりたきゃ外付けしかないんだよな」

「そ、そんなぁ……。ってそんな非科学的な話が……」

「本当だぞ、ハカセ。因みにお兄ちゃんは時速２００キロのバイクで壁に突っ込んでも無傷だ」

「前、私が暴走したときは自動スリープモードに入るまで取り押さえられていました」

「頑丈にできてるんです。でも心はガラスの１０代」

「ちょ、ちょっとだけ解剖させて……ああ、でも刃物が通らないんなら開けないし……」

開きたくて仕方ないみたいだ。
ちなみに髪の毛はさらっさらなのに金切り鋏じゃないと切れなくて、火の上を歩いても焦げすらしない謎素材だ。

「あの、もう服を着てもいいでしょうか？」

「ああ、ごめんごめん、整備だったね。すぐ終わるからねー」

ハカセが茶々丸の首の後ろにケーブルを繋いで、なにやらものすごい勢いでカタカタやってる。

「はい、駆動部位は全身特に異常なしだよ。そう言えば、記憶ドライブの点検がまだだった。ちょっと待っててね」

「いえ、その、そこは別に」

「いいからいいか……ら……／／／／／／」

「ん？どーしたん？」

ちょぬっとモニタを覗いてみたら、何やらエヴァと合体してる俺が映ってる。

「そ、そんな、兄妹でだなんて……あれ？でも茶々丸の基礎システムを作ったＭＩＴの日本人兄妹もかなりイチャイチャしてたって聞くし、で、でもこんな子供同士でなんてってそうじゃなくて、あわわ」

「何だ、茶々丸。見るものはしっかり見てるんじゃないか」

「か、鍵もかけずに、そ、そんな……ゴニョゴニョされたら……見もしますよ、マスター」

「ん？何したら？何したら見ちゃうの？麟ちゃん気になるー」

「す、すごいセクハラだわ……それにしても……」

「何だ、気になるのか？ハカセ」

「いっ、いえいえまさか。私は科学が恋人ですよ！？そんなんじゃなくて、私は茶々丸が気になってるんじゃないかなーって思ってるだけで、……親心……そう、親心なんですよ！！ねえ茶々丸、ちょと兵装減っちゃうけどえっちにゃこともできるようにしてあげるよ！！」

「いえ、そこまでは」

「いいじゃないか、茶々丸。やってもらえ」

「そうだそうだー！ってか魔法使えば兵装って減らさなくてもよくない？」

「そんな使い方も出来るんですかー？」

「俺も家のパソコンに魔方陣描いた紙貼り付けて魔力通して強制冷却でＯＣ（オーバークロック）させてるし。ペンティアムなのに５．６ＧＨｚを記録してるぜ」

「そっ、それだあああ！！ねえねえ、何度くらい下げれるんですか！？」

「絶対零度までなら」

「よっしゃぁあああ！！！ちょっとひと月ほど時間をください ね。

ふふふ、茶々丸？あなたにはうちの最先端の科学をすべて注ぎ込んできたけど、未だ実現には至らなかったものが一つだけあるのよ。実際あのＣＰＵが完成すれば……冷却さえなんとかなればクロック数２０ＧＨｚも夢じゃないのよ！

もうこうしちゃいられないわ！ちょっと麟さん！その魔方陣、どれくらいあれば出来ます！？」

「５分」

「じゃあお願いします！うふふふ、魔法ってすごいですねー。いつか科学的に解明してやりますよー」

「いやいや、そんな事出来るのはお兄ちゃんだけだからな？」

「そんな事より服は……」

「はい、茶々丸」

「麟様……」

～ごふんご！～

「はい、できたー」

「ああ、５枚もありがとうございます。ふふふ、これで茶々丸も……」

ミニスカメイドさん、茶々丸はさっきからさとみんと目が合うたびに半歩づつ下がってる（眼福）。

「でもこれ全然冷たくないですよ？」

「そりゃ魔方陣なんだから魔力流さないとクーラーにも使えないだろうさ。一応これからひと月分ほど魔力を込めるけど、間違っても低温設定時は素手で触らないように（迫真）。と、凍傷どころじゃ済まないんだからねっ！

あと、この枠があるだろ？ここに英数字で度数を書けば５度から－２７３．１５度までの温度調整が可能になってる。

機械制御にするんならチャオリンといっしょにやってくれ。お兄さんとの約束だぞ」

「さすがお兄ちゃん！普通は絶対にどんな魔法使いにも出来ないような事を平然とやってのけるなんて！」

「そこにシビれる！あこがれるゥ！」

ズギュウウウン！！

「じゃあモノになったらまた連絡しますね。というわけで今日はもう帰って大丈夫ですよー」

そういってさっさと帰って行きやがった。

「なあ、茶々丸？」

「何でしょう、マスター」

「私たちとやってみたくはないのか？」

「なっ、なな何をでででしょうかマスター」

「わかりやすい奴だな。まあ、保留って事にしといてやる」

「わ、わわ、私にはなんの事だか、さ、ささ、さっぱりです」

「ハンズノモクザイビーム！！！」

「きゃぁ！り、麟様！やめてください」

「ジョインジョインジョインジャギィ！！！」

「マ、マスター、助けてください！」

「シャバドゥビドゥバドゥバッバァッダッダァ！！」

茶々丸のヒラヒラスカートを６０ｒｐｍ／秒の速度で叫びながらめくりまくってたら顔押さえて走って帰っちゃった。

だってかまってくれなかったんだもん。

０２１　世界最速、ハカセとのコンタクト。（後書き）

しまった！！
新約禁書の２巻が発売日だからって無印の最終巻から読んでたら日付が！！

そんな事より、シュレリア様とライナーが麻帆良に来ないかなー（チラッチラッ
世界樹が何故か塔と同期してて、平行異世界だったんだ！！
とかいうの誰か書かないかなー（チラチラリコ

超さんって書こうとすると『ちゃおｓなｎ』になっちゃう。
右手と左手の同期が甘い豚野郎です。

友人が飛び出した鹿を避けて事故しました。
ほんま奈良は戦国やでぇ……

では、明日もよろしくです。
あさっては更新しない可能性が濃厚です。

０２２　世界最速、魔法先生と会う。（前書き）

戦闘とかしません。

０２２　世界最速、魔法先生と会う。

ちう　＞　今日も担任は出張だったよん！上司とか同僚と仲悪いのかな～（；；）ｂ
ちう　＞　担任が好きなクラスメイトが暴れてて動物園みたいだった（ｗ
ちうファンＨＩＲＯ　＞　ちうちゃんの担任毎日出張だよね。こんなかわいいちうちゃんが見れないなんてかわいそ（ｗ
りんりん　＞　ダンディな担任っぽいのがオジコンの生徒を持つと光と闇が両方そなわり最強に見える。
りんりん　＞　ショタコンの生徒を持つと逆に頭がおかしくなって死ぬ
ちうファンＨＩＲＯ　＞　→＾＾；
福音　＞　私の担任も居なくても変わらんな。
ちう　＞　あはは、ありがとー！お礼に今からちうの写真のせちゃうよ～？
りんりん　＞　９枚でいい

「エヴァｗｗｗｗちうたんの担任とお前の担任ｗｗｗｗｗ同一人物ｗｗｗｗｗ」

「ちなみに同僚との仲は悪くないよ☆」

ピピピピッ、ピピピピッ
このえこのえこのえもんにいざという時（ってどんな時かしらんがそんな時）のために渡されてた携帯電話が鳴る。
バックモニタにも『ぬらりえもん』などと表示されている。
通話ボタンを押したら、そこは一面の銀世界でした。

ピッ

「おお、すまんが「何よあなた！　こんなところにまで電話かけてくるなんて！　しつこいのよ、しつこいのよ！　あんまりしつこいと、自慢のアンデス空手でプチ殺し（小さく殺す・・・・・半殺しの意）てあげるんだからあっ！

だってもダンテもないのよこのデビル野郎！　あなたの靴の裏で叩き潰したゴキブリのような後頭部も見たくないし、靴の裏でゴキブリを叩き潰すときの音みたいな声も聞きたくないのよ！

黙って、黙ってよこのフニャチン！　私が言いたいのはただ一つ、あなたみたいなケツ穴ファシストなんて大嫌いってことよ！

変わった？　そうよわたしは変わったのよ！　未知の宇宙エネルギー・マグネトライトロンの聖光を浴びて超越浄土世界への扉をくぐる資格を得たのが二つ前の仏滅の日のことよ！　そら変わるっちゅうねん！

そうよ私はさそり座のおかまになったの！　いい、わかった!?

わかったならあんたが伸ばしてきた後頭部今すぐ縮めなさい！

そうしないとあなたの自慢のケツの穴に炭酸浣腸ぶちこんでやるんだから！

ふぁっきゅーめーんっ！」」

ピッ

「ふうー」

「おおー、すごーい！」

「声紋まで完全に変わっていました。最早別人の声ですね」

ピピピピッ、ピピピピッ

「ええい、中々骨のある奴めぇ。ゲシュタルト崩壊に導いてくれようか」

ピッ

「この電話番号は、ただいま貴様のようなイエローモンキーに対しては一切使用されておりませーん！

クソおかけになった電話番号を、もう一度そのミニマム脳味噌と節穴ＥＹＥでクソお確かめの上、クソ改めて「わしじゃわしじゃ！」……って近衛君ではないか。いったいどうしたというのかね？」

わかってたけどね。

「ハァ……お主「用がないなら切らせてもらうが」まてーい！！お主の教員免許の発行に伴い、麻帆良での勤務の準備を進めておったんじゃが、どうも反対意見が多くての」

原因はわからんが、解決策ならわかる。

「なるほど。……消せ、と」

「言うとらん！！お主の存在は公にはなっておらんが、どうも『魔法先生』と少数の『魔法生徒』は、お主が『闇の福音』の関係者だと気付いておるらしく、どうも教員採用を渋っておっての。それに2月には……いや、とにかく説得せねばならんからお主が顔を出すのが一番早いと思って電話をかけたんじゃ」

「なるほどなるほど。……消「させはせんぞ！」……いつだ？」

「魔法先生の中でも一番強いタカミチが今日出張から帰ってくるか

らの。今晩がいいんじゃが、どうかの？」

「ちょ、エヴァｗｗｗｗタカミチってお前の担任じゃねｗｗｗｗ」

「そうだよ、お兄ちゃん」

「で、その強制ボイコットのタカミチ君が帰ってきてからとｗｗｗｗ何時？汝、何時になりにけるかｗｗｗｗ」

「……じゃあ２１時に世界樹前の広場で待っておるよ」

「はい……ブロ麟です……」

ガチャ……

切られたｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

「お兄ちゃん、私も行くー」

「学校には行かないくせに～」

「学校にはお兄ちゃんいないもーん」

「「あはは、うふふ」」

「ハカセ、超鈴音、今日もシラナミは平和です」

ちなみに、ちうたんは律儀に９枚アップロードしてくれました。

やっさしー？

「こちら、世界樹の上でーす。現在、時刻は午後8時30分。20時半になります（小声）」

「エヴァに気配遮断の魔法をかけてもらってるため、絶対に見つかりません（鼻声）」

「お、どうやら一人目が来たようです。あれは……シスターですねー。大中小と揃っております（裏声）」

「さてお次は……ピザが来ました。肉まんをかじっています。あれは……超包子！！（地声）」

「さて、残す所あと5分となりました。恐らく、全員来ているでしょう。いつぞやの、銃のたつみんと刀のせっちゃん、ガングロのガ、ガ……ボブもいます（喉声）」

「さて、残す所一分となりました。しかし白波麟、現れない！どうしたんでしょうか？そうです。わたしです。私が白波です。ボブは腕時計を見ながら、随分苛立っているようです（金切り声）」

「ではカウントダウン。4・3・2・1（だみ声）」

世界樹から飛んで、魔法先生、生徒たちの前に降り立った。

コマネチをしながらクールに最後のカウントを紡ぐ。

「ゼロ（猫なで声）」

「……」

「……」

「……」

「おまたせっく「言わせはせんぞ！」早すぎるのも遅すぎるのもマナー違反と教わってたんでぴったりに来ました」

「君はあの時の……」

「へーイ、ボブ！」

「誰がボブだ！」

「黒人を見たらボブ、白人を見たらジョン、日本人なら太郎と思えと教わったもので……」

ボブ（仮）は　あきれている！

「……まあいい。どういう関係かは知らないが、前に君とエヴァンジェリンが一緒に居るところを見たからね。一応進言させてもらったよ」

どや顔でこちらを見てくるボブ（仮）。

「学園長、聞いてませんよ」

「まったく、こうなると知ってたら来ませんでした」

「おお、せっちゃんにたつみー！」

「お主らも知り合いじゃったか……その様子だと」

「ええ。知っていますよ」

「だーれも知らない知られちゃいけーないー」

「少し黙っててくれないか」

「ソーリー、ボブ」

「で、刹那君、彼女の正体は？」

「いえ、彼女というか……彼というか……」

こっちをチラチラみてくる。惚れたか？

などと思っても無い所に、エヴァと茶々丸が手を振ってやってきた。

「あっ、エヴァ遅ーい」

「ごめーん」

「良いって事よ。

そう、この通り、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル・シラナミの兄、白波・Ａ・Ｒ・麟とは、あたいの事よっ☆ミ」

「うぜぇ！『闇の福音』に兄だと！？聞いたことがない！うぜぇ！」

「いや、待ってください、ガンドルフィーニさん。僕は一度聴いたことがある。エヴァンジェリンを遙かに凌ぐ残酷さに強さを持った『邪神』と呼ばれる兄がいると」

「高畑先生、兄って、彼女はどう見ても女の子じゃないですか。それに歩き方も体つきも全然なっていない。
世界樹から飛び降りるくらいなら魔法を覚えたての１０歳の子にも出来ますよ」

「アホめ。お兄ちゃんはな、そんな努力必要ないほど強いんだよ。
ここに居る全員が一斉にかかろうが、怪我一つ負わんほどにな」

「お前らは一級廃人のおれの足元にも及ばない貧弱一般人
その一般人どもが一級廃人のおれに対してナメタ言葉を使うことでおれの怒りが有頂天になった
この怒りはしばらくおさまる事を知らない」

「→＾＾；」

「仮にその話が本当だとしても、私たちは彼の妹であるエヴァンジェリンには何とか勝てるつもりだ。なら彼に勝つことも」

「ガンドルフィーニ君、タカミチの言っている事もエヴァンジェリンの言ってることも本当じゃ。おそらくわしら全員でかかろうが、下手すると東西合わせた日本の全員がかかろうと勝てる相手ではない」

「ですが納得いきません、学園長！」

おや？話がおかしな方向に……

「お待ちください、皆様！！」

とりあえず敬語で喋って場を収めようと思ったが、あからさまに無視されている。

ビクンビクンｗｗｗ

「待て待て待て！待てーい！！」

「何だい？」

「おかしいやないか！何で教員やるっつー話やのに戦ったらどっちが強いって話になってんの？俺が強いけど」

「君がそういう事ばかり言うから！」

「落ち着けよ、ボブ「ガンドルフィーニだ」ランボルギーニ。「イタリア車！？」ほら、お互い社会人なんだからさ。そんな喧嘩の強い弱いで話するような年でもないでしょ？」

「その通りじゃ、ガングロフィーニ「ガンドルフィーニです」ガンドルフィーニ君。お主らは教師として、白波君がやっていけるのか気になったから連れて来いと言ったんじゃろ？それを強いだの弱いだのという理由で文句をつけるんじゃない」

「で、本音は」

「適うわけないんだからさっさと諦めてもらいたい」

「学園長……。確かに、私は間違っていました。しかし、彼は本当に教員免許を持っているのですか？」

「ほいさ」

ピラっと教員免許を取り出して見せる。

「教育実習も、新田君の同僚が校長をやっておる私立ボムボム坂中学で合格をしてきた、紛れも無い本物じゃ」

「あ、あのボムボム坂で……。済まない、麟君。私は君を誤解していたようだ」

そんな名前だったのかよ、あの中学。

「はい、この世の末みたいな所でしたが、なんとか合格してきました」

「これからよろしくな」

「ホッホッホッ、では他に何か質問のある者は……、どうしたのかね、刀子君？」

「話はわかったし、彼が先生になるのは、その（すごくかわいいし、）全然問題ないのですが、そのボムボム坂高校とはいったいどんな所なんでしょうか？」

んっふっふ、　聞こえてますよぉ、刀子さん。

「刀子先生、あそこには興味を持っちゃいけない。あそこは、本当にこの世の終わりなんだ」

「ガンドルフィーニ先生……」

あんたも被害者だったか、ランボルギーニ。

「すいません、いいでしょうか」

「どしたん、せっちゃん」

「せっちゃん……。いえ、私たちの教師になるということですが……年齢はお幾つなんでしょうか？」

「書類上だと３９、いや、来月で４０だわ。実際は６００歳くらい。エヴァより１５歳ほど年上だにょん」

「にょん……」

刀子先生がもだえている。このキャラで行く気か。

「じゃあ麟さんも吸血鬼？」

「馬鹿者！お兄ちゃんを吸血鬼なんかと一緒にするな！」

「この人自分で“なんか”って言っちゃってる！！じゃあ麟さんは何なんですか？」

「人間のつもりだったけど、何なんだろうね？新種族シラナミとでも」

「どういう事かな？」

と、せっちゃんの質問をたつみんが引き継ぐ。

「最強種にも殺す手段ってのは存在するだろ？吸血鬼にしろ、古竜にしろ。でも俺にはそんなもん無い。

だからバイクと教員免許取得の為の努力以外は全くしてこなかったし、かの英雄、サウザンアイランドのナギ・ふふふんふんフィールドの魔法でも傷一つ負わなかったぜ。すごかろう」

「ちょっと待ってくれ！それは本当なのかい！？」

今まで黙って爺ちゃんの隣に立ってたメガネダンディが急に詰め寄ってきた。

「え？どれ？どれのこと？冷蔵庫のプリンは昨日エヴァといっしょに食べたけど」

「ナギの所だよ！君はナギと知り合いだったのかい！？」

「ああ、一年ほど一緒に旅してたわ。旅に飽きたっつったらここに連れてこられた」

「というかタカミチ、エヴァはナギに連れてこられたって話さんかったかのう？」

「え？あ、ああ。すいません。取り乱しました」

「しかし何でそんな食いつくかねえ」

「知らないのかい？ナギは１０年前に亡くなったんだよ……」

「なんだ、アイツも死ぬ事があんのか」

「不思議なもんだね、お兄ちゃん」

「ず、随分軽いね」

「いや、俺の知る限り3番目に強かったからな。俺＞エヴァ＞ナギィの順番に」

「森の妖精の名前みたいな呼び方をしないであげてくれないか」

そっかー。ナギ死んだかー。

「じゃあ他の先生ももう無いかの？ん？その肉まん、増えとらんか、二集院くん？」

「え？ああ、私は麟君を先生にするのは全面的に賛成ですよ？」

「……白波君？」

「……ヒュー、ヒュヒー」

しまった！俺、口笛が吹けない！！

「……まあええじゃろう。日程が決まり次第、こちらから連絡するからの、ちゃんと出てくれよ」

「アーラホーラサッサー！」

「では解散じゃ」

その号令を合図にみんな散り散りに帰っていく。

「俺らも帰るか」

「うん、お兄ちゃん」

「実は私も居たんですよ？」

うん、見えてたから知ってるよ、茶々丸。

「しっかし、あんまり凄そうな人に見えなかったっスねー。魔力も私らより少ないんじゃないッスか？」

「馬鹿」

「美空は彼の首にかかってたペンダントの事は知らないのですか？」

「ペンダント？あー、あったッスね。エヴァちゃんとおそろいの。シスコンにブラコンッスか」

「魔力隠蔽用の魔法具」

「ええ。それに能ある鷹は爪を隠すと言います。見た目に油断して狩られないよう気をつけなさい」

「か、狩られるって……そんな大げさな。脅かさないでくださいよ、シスターシャークティ」

「あら、脅してなんかいないわよ。でもいずれあなたも知るときが来るでしょう。一応、心構えだけでもしておきなさい」

「何のッスか？」

「それは自分で考えること」

「ココネも厳しいなぁ」

「あー疲れたー。嘘。言ってみただけー」

「お兄ちゃん、お風呂いっしょに入ろっ」

「オエェェェエエ」

「お久しぶりです、姉さん。家の中であまり砂を吐かないで……砂糖！？」

「御主人トニイサンヲ見セラレ続ケテ数百年目ニ初メテ砂ヲ吐イタケドヨ、マサカ砂糖マデ吐ケルヨウニナルトハ……」

「姉さんも苦労しているんですね」

「ソノウチオマエモ吐ク事ニナルカモナ、我ガ妹ヨ」

「それは、……人形の姉さんもそうなるという事は、私にも少しありえそうです」

二時間後、全裸のマスターを担いだ全裸の麟様がお風呂から出てきました。

ええ。何も聞こえてません。

でも、砂を吐きそうになりました。

０２２　世界最速、魔法先生と会う。（後書き）

このえもんから電話がかかってきた時の長台詞はエロゲの「家族計画」から。
ランボルギーニはイタリアの自動車メーカーから。

あとがき
皆さん、明日は更新できません。
楽しみにしてくれている方、ごめんなさい。
してくれていない方、さーせんｗｗｗｗ

戦闘させるかどうか迷いましたが、それはまた次の機会に。
ちなみに、麟は『麻帆良の魔法先生』になるのであって、『関東魔法協会』に所属させるわけではありません。
ちなみに彼、朝倉さんの話からもわかる通り、結構義理人情に溢れています。

関係ない話ですが、彼がこんなお金を持っているのは、エヴァが賞金首を探す→麟が捕まえて突き出す。
というのを繰り返したり、喧嘩を売ってきた国を滅ぼして略奪してきたりしてたからです。
現在所持している資金がだいたい４００億くらいですね（適当）。
実際は、レースをやるのにもお金がかかるから、という親心だったんです。
ホント、ちょっとしたレースでも数十万単位。
彼にはそんな苦労してほしくない。
では、本日もありがとうございました。

０２３　世界最速、少し寂しい。（前書き）

ほんとすいませんっしたー！！
ホントは昨日の朝には帰ってるはずだったんです！！
夕方には一本上がってたはずだったんです！！

０２３　世界最速、少し寂しい。

白波（全力）です。
ぶちゃいくに誘拐されそうになりました。
関係ないけどハカセがテンション高に電話をかけてきたので茶々丸をつれて大学に行ってきます。

「おいすーおいすー！！」

「ああ、麟さん！できたんですよ！！茶々丸の新ＣＰＵが！！
それにハードを作るにあたって、ＭＩＴまでわざわざ出向いてかの天才兄妹に会ってきたんです！
いやぁー、いい収穫だったなぁ。科学だけじゃなくてプログラムもやってて良かったって思いましたよ。
お兄さんの方が情けない感じなんですけどプログラミングは……」

顔を見るなり掴みかかってきてすごい剣幕でまくしたてる。
無理無理。半分どころか半％も理解できない。

「待て待て待て、凄かったんだよな？」

「ええ！プログラミングはさすがの私もとてもかなうと思えませんでしたよ！そもそもプログ「ＯＫ！ＯＫ！！わかった！わかったから！！」
本当にわかったんですか？」

「なんでやんわりと責められてるんだよ！わからねぇよ！そしてどうでもいいんだよ！
車に乗ってるやつの１％も車がどうやって動くか理解してないよう

に、茶々丸を使う俺も茶々丸をそこまで理解しなくてもいいだろうが」

「茶々丸を使うだなんて……その気なんですか？」

「その気はなくもないけど、その生温かみを帯びた目はやめてくだち」

「何のことでしょうか？」

うぇっへっへｗｗｗ初なおぼこじゃあるまいしｗｗｗｗ
いや、おぼこだったな。俺どうかしてたわ。
ってかそうじゃなかったらそうした奴どうかする。

「そもそもそんな知識がなくても、茶々丸は俺の家族なんだから大丈夫！
家族だからって脳の出来や形まで詳しく知ってるはずがなかろう！
でも実はＣＰＵは気になってるんよ。どれ？」

「ああ、これです。見た目は少し大きな普通のＣＰＵですが、麟さんにもらったクーラーによって２８．７ＧＨｚのクロック数が出せるようになったんですよ！いやぁー、出力はケチるもんじゃないですねー。ちょっと前まで気を使いながら液体窒素をかけて１８ＧＨｚを無理やり出してた時期がなつかしー！」

「すげー！！それ、適合するマザーある？」

「まさか！２０５５ピンですよ？茶々丸専用です」

「それはそれで凄いＣＰＵだったんだな」

「でもそれを設計したプログラムはウィンドウズで作った代物……うふふ」

「なん……だと……」

「デバッグは完成時、死人を出してまでやったんで問題無いはずです」

「茶々丸の命は多くの死人の上に成り立ってたんだな」

「そ……そんな……」

「ショックを受ける必要なんてないのよ、茶々丸。みんな笑顔で死んでいったわ」

「俺たちがそいつらの為に今できることは、生きていくことだ。そいつらの分まで、な？」

「……はい！」

三回仕様を変えると死ぬと聞いていたが、変えなくても死んだんだろうか。

「じゃあ茶々丸は預かっときますね。完成したらまた連絡します。じゃあエヴァンジェリンさんにもよろしくお伝えください」

「んちゃ！」

「ではさようなら」

「プピー！プペポー！！」

「麟様、行ってきます」

「行ってらっしゃい（クルッピー、プペポパ！！）」

エヴァはじじいと中将棋を打ってるとかでいなかったはずなんで近くのケーキ屋に突入する。

しばらくブラックで頼んだクソまずいコーヒーを飲んでいると白玉ぜんざいをのせたお盆を持つ、たつみんに声をかけられた。

よくそんなの売ってたな。

「あっ、麟さんじゃないか。どうしたんだい、こんな所で」

「俺がスイーツ（笑）を食ってたらおかしいか。和スイーツ（笑）」

「……まあ、なんと呼んでくれてもかまわないけど。ところでそれはケーキには見えないんだが、これから頼むのかい？」

「このコーヒーブラックに見えるかもしれんがだいたい１０リット

ルの砂糖が入っるから充分飲むスイーツ（）」

「そうなのか。それは気付かなかったよ。相席いいかい？」

「嘘だけどね。別に俺の家じゃないし座りたいところに座れよ。白波のここ、開いてますよ」

膝の上を指してみる。

「向かい側が開いてるからこちらに失礼するよ」

「プピー！プポポプペー！」

「かわいいと思ってやっているかは知らないが、かわいいけどやめてくれ。闇の福音とは一緒じゃないんだな」

「そんな常々いっしょにいて一時も離れないと思ったか？」

「思ってたよ。しかしつくづく不思議な話だ。あの邪神とこうしてお茶するなんてね」

「俺は邪神なんて名乗った事ないよ。誰がモッコスだ。共通点バイクに乗ってるくらいじゃねえか」

「誰も言っていないよ。しかし大変だね。私たちの担任になるんだろ？」

「え？初耳……何それ」

「先日の会合の時にそんな話をしていなかったかい？」

「でも俺エヴァの教室を、殺してでも担当するつもりだから」

「誰を殺すかは、あえて聞かないよ。しかし、エヴァンジェリンの担任ということは、私の担任でもあるということだからね」

「……ちゅうがくにねんせい（笑）？」

「なぜそこで今まで何も入ってなかった（）の中に“笑”が入るんだ！！」

「どう見ても大……高校生じゃんｗｗｗ」

「なっ！！」

「映画館とか中学生料金で入れないタイプだろｗｗｗｗｗいやいや、落ち込むなよ。俺も映画館大人料金で入れないタイプだ・か・ら？」

「効かないのはわかっているが、歯を食いしばってもらおう……」

言うやいなや、デザートイーグルをどこからともなく出して俺に向ける。

その瞬間、なぜか忍者みたいな格好の女も現れた。

「助太刀いたすでござる」

「助かる、楓」

「忍者なら気付かれないうちに殺せよ。わざわざ出てくるって何な

の？老け顔なの？」

「はて、忍者だの老け顔だの……何のことでござるかな」

「やっべ、何この人たちｗｗｗ俺も年齢相応に見られないんだから仲間じゃんｗｗｗ切れんなよ。かわいい顔が台無しだぜ？」

「私よりかわいい男に言われても」「腹が立つだけでござるな」

ドン！ドン！カチッ、カチャッと足元に、一度俺に着弾した銃弾が落ちる。

楓も『マジで撃つんかよこいつ』って顔でたつみんを見た後で『マジで全然効いてないじゃんｗｗｗワロリッシュｗｗ』といった風に俺の方も見た。

「あれ？死ぬと思った？ふへへ、大丈夫なんだなこれが」

「せ、拙者はすこし大人っぽい顔をしてるからこれにて失敬」

「あ、おい！逃げるな楓！！」

忍者楓がにんにんとか言いながら走っていった。

お前の忍者観どこソースだよ。

「死んだらどうする！！」

「どうせ死なないだろうと信じてたよ。多少腹が立ったのは事実だが、事を大きくするつもりはない。周りも一応人払いは済ませてあるし、許してはくれないかい？ここまでやって許してくれるなら、だがね」

「『どうせ死なない』なんて後ろ向きに積極的な信じ方があるかよ。ちくしょう！俺のＬ９６が火を吹くぞ」

「許してくれないのかい？私は次のあなたの生徒だよ？」

「俺、そんな事よりＬ９６の話題を掘り下げてほしかった」

「……好きなのかい？」

「銃の中では。ボルトアクションじゃないライフルはライフルに非ずと言い張るくらいには。たつみんの次くらいに好きかな」

「本気にしてしまうぞ？私も、ボルトアクション銃は好きだよ。自動銃よりはね。Ｏｎｅ　ｓｈｏｔ　ｏｎｅ　ｋｉｌｌには、美学がある」

「わかってるじゃん」

Ｌ９６に変えた弾倉が空の指輪をガシャガシャと無意味にリロードする。

それをたつみんが心配そうな目で見ている。壊れないから大丈夫さ。

「ところで聞いてもいいかい？」

「なんだぬ？」

「なぜ、銃を向けた相手になにもしない？」

「そりゃお前、赤ん坊にちょっと叩かれたくらいで目くじら立てな

いっつの。そんぐらいで怒るかＹＯ」

「あまり聞きたくは無かったね。どうあってもそれ以上の認識はなしかい？」

「人がどう頑張ったって象より重くはならないだろ？」

「圧倒的、と？」

「サウザンドマスターの京倍以上の魔力に、どこかの世界最強の５０倍の身体能力だ。そんな奴が人間相手に本気で怒ってみろ。地球に人間の席ねぇから！！」

「……それは流石に嘘だろ？」

「さぁねー。嘘だと思えば嘘だし本当と思えば本当だし」

「なんだいそれ」

「しっかたないなぁ。ネックレス外してあげる」

そう言ってネックレスを外しても特に反応がない。

あれ？魔力下がった？

「今、大気中の魔力が倍くらいになったんだけど、まさかそれかい？」

「……知らないけど、それじゃない？」

「……い、いい魔法具だね」

「エヴァとおそろいだからな。やらんぞ？」

「いや、もう何でもいいや。
これからはどんないい条件でも君やシラナミを名乗る人間がターゲットになる依頼は受けないよ。割に合わないにもほどがある」

「ゴクリゴクリコ、っはぁーまずかった。どうやったらコーヒーこんな不味く作れるんだろうな。麟ちゃん不思議」

「……飽きたのかい？」

「うん！」

「悪かったね、足止めして」

「いんだよ、帰ってもエヴァいないし、どーせ」

「……頑張ってくれ（？）」

「ＭＡＫＡＳＥＲＯ」

トコトコと歩いてるけど、全く人が居ない。営業妨害にもほどがあるじゃん。

「大源（マナ）の濃度が上がらんかったか？」

「あ、お兄ちゃんネックレス外したんだ」

「昔、宇宙空間にまで満ちていた大源の濃度が下がったと魔法世界で大きな問題になったことがあったが……」

「多分お兄ちゃんと私がネックレスを買った時だな」

「なんちゅう規格外キャラじゃ」

「なんたってお兄ちゃんだからな。貴様も下手に逆らおうとせんことだな。王手」

「誰が好き好んで逆らうと言うんじゃ。……待って？」

「断る。ここまでどれだけ時間がかかったと思っている」

「むぅ……！！ゲホッガハァ！！持病のアレがぁ！！」

「私の勝ちでいいな？」

「年寄りはもっと労わらんかい……」

「じゃあお前の数倍生きてる私たちはもっと労わられて然るべきだな」

「ひぃぃ、じじい虐待じゃよ」

「ハッ」

０２３　世界最速、少し寂しい。（後書き）

まさかこんなに遅くなるとは。
帰ってきたのが一時過ぎだから予定より半日以上遅く帰った事になるのか……

たつみんは誰かの依頼で麟の実力を測るように言われたんでしょうか。
いきあたりばったりで書いてるのでわかりません。

急いで上げなきゃという気持ちが先行しすぎていい加減な仕上がりかもしれません。
どうか、どうかご勘弁を！！！
日曜は！！日曜こそは！！！

０２４　世界最速の妹の従者、帰る。（前書き）

おかえＷＲＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ！！！！！！！！！！！！！！

０２４　世界最速の妹の従者、帰る。

でででででででーでろん

おきのと゛くて゛すが　ほ゛うけんのしょ１ばんは　きえてしまいました

おきのと゛くて゛すが　ほ゛うけんのしょ２ばんは　きえてしまいました

おきのと゛くて゛すが　ほ゛うけんのしょ３ばんは　きえてしまいました

「ホォァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！　１１１１

ウェええエエアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「どっ、どうしたのお兄ちゃん！！！！！！」

「あ…ざやか…に…　も…える…み…ど…り…　…」

「消えたんだ……冒険の書……」

「もうＦＣのゲームはしないって誓ったんだ☆」

「そんな良い笑顔で！！」

ハァイ！シラナミの、冒険の書が消えたら魔王に対する大いなる怒りを目一杯込めながら誓った方、麟です！

魔がさして缶ピースを吸ったら勢いがつきすぎて葉っぱも食べちゃうよね！

次回！「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａ　ｐｅｎ（愛は世界を救う）」

Ｓｅｅ　ｙａ！

「俺もうセーブいらないゲームしかやらない。マリオとかスペランカーとかセクロスとか」

「今日も相当きてるね」

ピピピピッ、ピピピピッ

「あ、ハカセだ……どうした？ああ、そうか。じゃあ今から行く。ああ」

「茶々丸？」

「出来たってさ」

～だいがく～

「我が麻帆良大の科学力はァァァァァァアア世界一ィィィイイイイ」

ひとまずトリップしているさとみんを落ち着けてから話を聞く。

「こちらがその新生茶々丸です」

「茶々丸です。ひと月ぶりですね」

「なんと演算速度が以前の１８０倍！チップセットは耐震性能も考えてすこし大きくもなりましたが充分すぎる許容範囲です！そして麟さんのおかげで冷却効果も以前の比ではありませんよ！ほら、外部接続アダプタ経由で１００台のＸＰパソコンを同時起動しても２秒です！ここまで来るのに２０人以上の工学部の連中が死んじゃったんだけどねー」

「死んじゃったんですか！？」

おお、心なしか以前より表情豊かに（なっていない）……

「ほら、あそこ」

デスクの下に寝袋が敷いてあり、その上で無精ひげの男たちが死んだように眠ってる。

「新機能とかは無いのか？」

「当然、ありますよ！冷却のためのシステムが全部要らなくなったからその分武装に回したんですが、廃熱ダクトをジェットブースターにしてロケットパンチが従来の５倍のスピードに！そしてモーターもハイパワーのものを入れました。今なら砲丸だって握りつぶせますよ！」

「それで誰が得するんだ……」

「さらに完全防水、完全防塵にほにゃほにゃの機能も搭載！！」

「ほにゃほにゃ！？ハカセ、ほにゃほにゃって何ですか！？私の体にいったい何が！！」

「ほう、それは……やったね、お兄ちゃん！」

「☆★☆」

「どう発音したんですか！？」

「さらに色んな機能を搭載した結果！なんと重量が元の倍、だいたい４００キロになっちゃったんですよ！！」

「いやったぁあああ！！！」

そう言って茶々丸をお姫様抱っこしたら膝辺りまで埋まった。

「元々小さいのにもっとちいさくなっちゃったじぇー」

「大丈夫！かわいいよお兄ちゃん！」

「その、恥ずかしいのであんまり……」

「その細い体のどこにそんな力が……非科学的な……」

「いや、科学的だぞさとりん」

「せめてさとみんにしてください。人の心は見えませんよ」

「棒に対して、横に力をかけるのと縦に力をかけるのではなんたらかんたら」

「なるほど！」

「さらに遠心力で体の水分がどうたらこうたら」

「なるほど！」

「そして筋繊維の総合的な太さではなく一本一本の強度と量をハッパフミフミ」

「なるほど！」

「ここまで全部適当」

「ええっ！」

「まあどうあっても俺の世界最強はここまでもこれからも揺るがないから。それだけ、わかってほしい。うーんＭＫ－２（セダン）」

「ああっ、生物学は専門じゃないのに調べたい！！物理とかに応用できそうっ！」

「よーし、茶々丸、帰るか」

「はい、麟様。ではハカセ、また」

「筋繊維に代用できそうなゴムを作って……でも強度の問題もあるし、骨も合金だと重すぎるしそもそも……」

「ただいまー！」

「ただいまー！」

「ただいま戻りました」

「「おかえり」」

みたいな皆が得する茶番劇をくり広げて、久々に茶々丸をエンジョイする。

「茶々丸ぅ～」

「茶々丸ー」

二人して茶々丸に飛び乗った瞬間、メゴン！とか言って床が抜けた。

「あわあわ、す、すすすいません！」

「これが４００キロの重圧か……」

とか言って引っ張り上げる。

重力低減の魔法は……これか

「プラクテ・ビギ・ナル……」

「おお、お兄ちゃん、久々の魔法だね」

「おうよ！」

あ、始動キーに『おうよ！』が挟まった。まあいいや。強行しちゃえ

「ああ、体が軽くなりました！」

「いけるもんだなぁ」

「お兄ちゃん、体重計持って来たよ！」

何も言わなくても持ってくるエヴァの頭を撫でて茶々丸の前に差し出す。

「ほれ」

「失礼します……ああ！」

「８０キロか……魔力少なかったかな？」

「気の使いすぎだったんだよ」

「まあ元よりだいぶ軽いし、いっか！」

「ありがとうございます。各駆動部も、重力による抵抗が低減されて動作が軽くなりました」

「いいってことよぅ！茶々丸ぅ～！」

「茶々丸ー！」

メゴン！！

「とりあえず、修理してからやるか」

「そうだね、お兄ちゃん」

両親の不在を異様に気にするおっさんが一週間かけて修理してくれました。

０２４　世界最速の妹の従者、帰る。（後書き）

一方通行が麻帆良入りするやつ書きたい
こちらが終われば書くかもしれません。

？あとがき？
最近ｕｎｉｃｏｄｅの多用が過ぎます。
紅の豚野郎でございます。
最後の一文は何の伏線でもありません。
ただの人妻好きのおっさんです。
今日は頑張って更新しちゃうぞーとか言ってた記憶があるけど、他の人の作品が面白すぎてそれ所じゃないんです。
あと、クーラーが効きすぎて風邪をひいたからクーラーを切ると汗が出る。なのでクーラーをつけると汗で体が余計冷え、風邪が悪化する。
コレを死の螺旋連鎖（デス・スパイラル）といいます。今適当に考えました。

では、今回もありがとうございました。
Ｓｅｅ　ｙａ！

０２５　世界最速の妹、メシがまずい。（前書き）

東京のうどんには本当に墨汁が入ってると信じてた時期がありました。

０２５　世界最速の妹、メシがまずい。

【うどんに】妹のメシがマズい【墨汁】

「エヴァ、これ何入ってるの？」

「うどんだしと墨汁とたまごと醤油と……」

「待て待て待てぇーい！！！
入らないよ！！！うどんに墨汁は入らないよ！！！！ってか、墨汁食い物じゃねえよ！！！！！
当然飲み物でもねえんだよー！！！関東のうどんが黒いのは、昔こいくち醤油しかなかったから！
こいくちは色は濃いけど味は薄い！だからいっぱい醤油を入れて味を濃い目につけた！ドゥー　ユゥー　アンダスタンンンドゥ！
ギリギリ使って竹炭だよぉおおお！！」

「ごっ、ごめんねっ。うぐっ、ごめんなさいぃ」

「いいってことよ」

妹が何を考えたか、料理を作るなんて言い出したへたれのりんです。
ってかあの顔で泣かれてそれ以上言えるかよ。
この墨汁うどんも慣れてきたら案外……マズっ！！！慣れない！まずい！！

「今度一緒に料理しような」

「うん！」

「これ、水分の9割が墨汁ですね」

茶々丸が何か言っているが、不死身の俺も死ぬかもしれない。
しかも何故か俺の分しかない。
いや、これをエヴァに食わせるわけにもいかないが……。

「うぇーっぷ！じゃあ食材を買いに行おうぇーっぷ」

「うん、お兄ちゃん！」

「和食は高難易度から低難易度まで幅広くあるし、低難易度とされるものでも極めれば他の追随を許さない味になります」

「はい！」

「でもこういう時に作るのはカレーって相場が決まってるからとりあえずカレーの材料を買いにいこう」

「うん！」

「トマト、りんご、鶏肉、レッドペッパー……」

「お兄ちゃん、これは？」

「そのチョコレートは隠し味に使わないし当然カレールゥでも無い

から返してきなさい。でも個人的に食べたいならかごに入れればいいよ」

「返してくるね」

隠し味ってのは、その料理がまともに作れるようになってから入れるんだよ、エヴァ。

「ターメリックとコリアンダーと……」

「カレールゥは入れないの？」

「俺が今まで作ってきたカレーにカレールゥを使った事は、実は一回も無いんだ」

「なんで？」

「ガーリックが入ってることがあるからな」

「お兄ちゃん大好き！！」

ん？あれはエヴァちゃんと、麟さん！？
じゃあ麟さんの妹ってひょっとしてエヴァちゃん？
そう言えばエヴァちゃんの名前にもシラナミって入ってたような……。

うわぁー抱きついちゃってるよ!!しかもすっごい笑顔!
学校じゃ見れないねぇー。とりあえず撮っとこ。
あ、エヴァちゃんと目が合った。声かけるか……。

「玉ねぎと鶏肉も入れてやるぜッベイヴェー!」

「どーもー」

「朝倉か……」

「お?かずみんじゃん」

「「知り合い?」」

「麟さんはお父さんの友達でエヴァちゃんはクラスメイトだよ」

「なんか久々だな、かずみん。背伸びた?」

「伸びた伸びた。麟さんは相変わらずちっさいねー。今日は二人でデート?」

「今日はお買い物。毎日がデートだZE。このイチャラブっぷりで世界を狙えるな」

「熱いねー、お二人さん!」

「貴様にはやらんぞ?」

「あらら、これはいよいよもってラブラブだねー」

「記事にしてもかまわんぞ？」

「残念、うちはゴシップ誌じゃないからね。じゃあまたお二人さん、いずれ」

「ふん」

「お父さんによろしく」

いやぁー、お父さんに聞いてはいたけどすっごいシスコンっぷりだったなぁ。
うちの兄貴もあの半分くらいシスコンだったらなぁ。兄貴とかいないけど。
別にショタコンって訳じゃないけど、ちょっとだけエヴァちゃんがうらやましかったりして。

「あとはフェンネルにジンジャーっと。うん、これだけあれば充分だな」

「本格的ー」

「そらエヴァのためなら一流シェフにもなるわ」

「うふふ、お兄ちゃんったらぁ」

「でも今日はいっしょに作るからな。」

「うん！世界一おいしいカレー作ろうね」

「うぇへえへえへへへｗｗｗｗ世界一おいしいに決まってんじゃんｗｗｗｗ」

「っかいけー、ごーせッスお会計は５０００円になります）」

「うーーーい。（オライッ、ォライッ（丁度ありました）」

「ざーッス、おこしゃさいッス（ありがとうございました。またおこしくださいませ）」

「さっきのって何語？」

「ＤＱＮ語」

「私も６００歳超えてるのにまだわかんないことだらけだなぁ」

「一兆年生きてもわかる必要のないことだらけだよ、世の中（オライッ、オライッ

じゃあシラナミ流、カッルェーの作り方だ。

とりあえず鍋に油を突っ込んで測量したスパイス類をこれだけ入れます」

「うん！」

「で、適当にまぜつつ、俺がものすごい速さで刻んだ玉ねぎ１０個分を入れて炒めます」

ジュー！と、それはそれは勇ましく水分が蒸発する。
エヴァも一生懸命混ぜているが、実はそんなに混ぜまくるもんじゃない。

「あめ色になったりしたような感じになったと思わんでもなければ、皮を剥いで刻んだトマト達を入れてくれよう」

「はあい！」

「さっき入れなかったスパイスを全てぶちこんでくれるわ！」

「よぉし」

「そしてエヴァ、その買った覚えのないチョコレートをゆっくりとテーブルに置くんだ。いいか、ゆっくりとだ」

「入れないの？」

「あれ？入れるって言ったっけ？」

「テレビだったら……入れるって……」

「いいか、見る分にはいいけど、信用するもんじゃないぞ。テレビの料理人よりお兄ちゃんの方が料理暦長いから」

「それもそうだね！」

「うむ。じゃあすりおろしたりんごと鶏肉を入れて蓋を閉めた後弱火で煮込む。
これからはしばらくやること無いからエヴァはゲームでもしるといいんじゃないかと思うのですよ！！」

「うん！」

鍋の近くに座ってたまに鍋をかき混ぜる。
本を読んでると横に立ってた茶々丸が声をかけてきた。

「麟様はよろしいのですか？」

「けっこう長い間火を通すから。ゲームやると玉ねぎ君の焼死体が出来上がるから」

「私が見ていましょうか？」

「いや、いいよ。お前も食えたら良かったのにな」

「今後ハカセにお願いしてみます」

「ああ、きっと喜ぶぞ。変態だから」

「ふふふ」

「最近良い顔するようになったな」

普通の笑顔をしてる茶々丸に何気なくそんな事を言った。

「そ、そうでしょうか……」

「そうだとも！さとみんもちゃお☆りんも褒めて遣わす」

「今度伝えておきますね」

「おーい、エヴァ！」

良い具合に火が通ってきたのでエヴァを呼ぶ。
トトトトっと、軽い音を立てて走ってくるエヴァを抱きとめてひとまずちゅーして降ろす。

「どうしたの？」

「ああ、本来はこのまま一晩寝かすんだけど、まあ今日はいいや。ヨーグルトを５００ｍｌ入れてかき混ぜる」

「よいしょっ」

「で、最後に塩で味付けをしてみるんだが、とりあえず小さじ１／４だけ入れてから混ぜて味をみる」

「んむっ、ちょっと薄いかな」

「で、少しずつ足していって、こんなもんか」

「あ、いつものカレーだ！」

「で、またしばらく煮込むと完成だ。頑張ったな」

「えへへー。ん～……ちゅっ」

「姉さん、最近、砂を吐くより先に録画を始めてしまいます。何なんでしょう、これ」

「知ルカヨ……オヴェエエエエエ」

「いただきまーす」

「いただきまーウィッシュ☆」

「んー、おいしい」

「ハムッ　ハフハフ、ハフッ！！」

「キメェヨ、死ネ」

最近、シラナミになったチャチャゼロとサムズアップを交し合う。

手を握って親指を上げるアレだ。

茶々丸は羨ましそうにみている。気がする。
完全に俺の主観だが。
これは、次のステップに進むのもそう遠くない話だな。

「ハムッ　ハフハフ、ハフッ！！」

「キメェヨ、死ネ」

今日もシラナミは平和です。

０２５　世界最速の妹、メシがまずい。（後書き）

本突入するまえに整えておきたい事が……そんなに無かったはずなのに、まだネギの麻帆良入りくらいしか決まってない……

エターナルネギフィーバーで死ぬほど笑わせてもらいました。
家から全く出ないため色白な紅の豚野郎です。
部屋に機械がいっぱいあるから冬でも暖房要らず。
パソコンが3台あっても俺は一人しかいないんだからどうあっても一度に一台しか使えないよ。
夏は言う必要もありませんね。
また懲りずに茶々丸の改造フラグを立てて、この子ったら。
次回、早急にやります。いえ、やるかもしれないです。

……やる可能性もあります！

では、今回もありがとうございました。

０２６　世界最速の妹の従者、現行最終型。（前書き）

濡れ場は全面カットです。
アニメのＲ－１５も白い巨大な帯で隠してるしいいかなと思って…。

０２６　世界最速の妹の従者、現行最終型。

おなじみ、大学です。
前もって言っていた嗅覚と味覚のデバイスが出来上がったと報告を受けて。
ついでに軽量化も打診してみたら案外すんなりいった。
丁度試作機も出来上がったと言っていたしね！とか言って。

あ、Ｒ・Ａ・Ｒ・Ｓ、麟・Ａ・Ｒ・白波です。

「基本的に外骨格頼りだったんだけどねー。動きに少しづつ無理が生じてきちゃうんですよ。
一応、内骨格は指だけになるんだけど、他の部分も外装はしっかり作ってあるからね。明日には出来上がってますよ」

「重畳」

などと話しているとじい様から連絡が。
とうとう本採用日が決まったか。

「やっと決まりやがったかこの×××野郎！」

「いきなりなんじゃ、お主は。２月の第一月曜日、来月からじゃの」

「……何で知らせるのが今更なんだよ。もっと早くから知らせろよ」

「す、すまん」

「具体的に言うと０２２　世界最ｓ「な、何を言ってるかさっぱりじゃが、必要書類は用意してある。取りにきてはくれんかの」

「今回だけやで？」

ピッ

「どこか行かれるのですか？」

「がくえんちょのところに」

「あら、いってらっしゃい」

なに良妻気取ってんの？シラナミに入りたいの？

「行ってきます」

「おお、来たか」

「呼んどいて来たかもクソもねえよ。で、書類とやらはどこ？」

「それはこれじゃ」

「ほいさっさ。２－Ａでタカミチのクラスだよな、エヴァとかずみんがいたのって。帰っていい？」

「いやいや、ちょっとお願いがあっての」

薄べったい封筒を引っ手繰ってさあ帰ろうと勇み一歩を踏み出すとなにやら面倒な話になっているようで。

「ＯＮＥＧＡＩ？」

「ナギ・スプリングフィールド……覚えておるじゃろ？」

「ああ、サスペンドな。覚えてる覚えてる。死んだんだって？」

「おお、そうらしいの。そんなスタンバイしそうな名前じゃなかったんじゃが……それの息子が今度麻帆良に教師として来るんじゃよ。お主のクラスの担任として」

「なにそれ。息子いたの。てかいくつよ。アイツあの時まだ１５くらいじゃねえの？」

「ネギ君というんじゃが、もう９歳だったかの」

「何」

「９歳」

「じいちゃん、あんた充分頑張ったよ。後の麻帆良は新田先生に任せて、もう隠居しろ。ってか死ね」

「ひどっ！わしだって考えあっての事じゃよ」

「ほざけ。何をどう考えたら小４が教師になるんだよ。後頭部長すぎて脳みそまで血液回ってねえんじゃねぇの？」

「そこまで言うかの……いいか、これは魔法関係の話じゃ。ネギ＝スプリングフィールド。英国のメルディアナ魔法学校を二年飛び級した上に主席で修業した天才少年。当然、人にモノを教えるわけじゃからな。オックスフォード卒業級の知識はある。この子を正しく育てるのが我々大人たちの務めではないじゃろうか。しかし、卒業後も修行があっての。ネギ君の場合は」

「大方、麻帆良で教師でもやってこいってか。クソにまみれた話だな。いいか？俺はこれでも、教師はちゃんとやるつもりだ。そのネギ先生がクソにも劣るゴミ野郎で、もう矯正のしようもないと思ったら何がなんでもやめさせるゾ☆」

「まあ殺さないだけマシなのかの……」

「一応顔見知りの息子だからな。それに俺が今まで殺してきた奴らだって殺したくて殺した訳じゃねえし」

「もう耐えられないと思ったら先にわしに言うんじゃぞ？」

「ケッ、わかってますよ、上官」

「うむ。ではもう帰ってよいぞ」

「ＡＢＡＹＯ」

ってか書類上は４０の俺より３６０度どこから包囲しても９歳のガキが担任っておかしくない？

「ナギのガキがお前の担任だってさ」

「らしいね」

知ってたのかよ！！！！
ってか、何で生徒のエヴァが知ってて次担当するはずの俺が知らねえんだよ！！！
びっくりだよ！！

「お兄ちゃん、もしかして聞いてなかった？」

「なにも聞かされてなかったよあのじじい！！！！
絶対面倒だと思って今まで黙ってやがったな！」

「ごめんね、お兄ちゃん。まさか聞いてないとは思わなくて」

「エヴァはなにも悪くないからな。あのじじい、張っ倒してやるんだからねっ！」

「おや、今寒気が……若いつもりでおっても年かのう」

～翌日～

「いやぁー、兵装と骨格の軽量化でまさか２００キロも落ちるとは思いませんでしたよ。チタン合金にカーボン皮膜で軽量化＋剛性もアップですよ！」

「というわけで、元の２００キロです、麟様」

「まあそれでも軽量化魔法はかけるんだけど。さっとみーん」

シャランラーと手に持っていたモンキーレンチを振って魔法をかけた。

「確かに、前より軽くなったように思います」

「むむ？茶々丸、ちょっと」

ちょいちょいと茶々丸を重量計に乗せると随分驚いたようで、

「よ……４０キロになってる！！」

と、さとみんビックリ。

「シラナミの魔法力はァァ！」

「世界一ぃ！」

「キティったら、ナイスアシスト」

「一心同体だからね」

「やっぱり魔法はすごいなぁ。今度検証させてくださいねー」

「おうともよ（？）。じゃあいこっか、茶々丸。せんきゅーさとみん」

「いえいえ。ではお元気で」

「じゃあな」

「お世話になりました」

「ふへへへ、茶々丸ぅ～」

「茶々丸ー」

「こ……これはもしや」

「ヒャッハー！我慢できねぇ！！やっちまえー」

「わーい！」

「ああ！楽しい！楽しいけど困ります！姉さん、どうしたら！！」

「イヤ、ソレコソドーデモイーワ」

「ぅひゃぁっ！アンテナはぁ、首筋はぁ！」

「なんだなんだ、随分敏感サラリーマンじゃねぇかＹＯちぇけら」

「ふふふ、お前もこちらの道に引きずり込んでやるわ」

「セクサロイドですぅ！セクサロイドですぅ！！！」

「ひゃぁあああ！ダメ！ダメです！」

「ぎぇひゃひゃひゃひゃｗｗｗｗ」

「ハーッハッハッハッハ！」

「ダメダ。俺デモ引クレベルダ」

「……姉さん、私の胸取れてません？」

「ドンダケ全身ヌメッテルンダヨ。見タクモ無エ」

「そっ、そんな！！」

「……ふぅ、どうした、茶々丸？お兄ちゃんがカレーを食べさせてくれると言ってるぞ？」

「いくらマスターや麟様でも、そんな事で私をどうにかできると……」

「おいひい！おいひいれす！！カレーがこんなにおいしいなんて！」

「泣きながら食べて……。なんか不憫な子みたいになっちゃったぞ、茶々丸」

「まあ今まで何も食べてこなかったみたいだし、仕方ないのかな？」

「しかしかわいいなぁ、茶々丸も」

「うぅ……、一生ついていきます、麟様ぁ」

「マスターである私はどうなんだ？」

「マスターも麟様についていきます」

「いや、ついていくけどそうじゃなくて」

「安心しろよ、チャチャゼロ。お前も連れて行くからサ？」

「頼マレナクテモ憑イテッテヤルカラ安心シナ」

「「「「あはははは、うふふふふ」」」」

※茶々丸は【嗅覚】【味覚】【えっちなおもいで】【だいじなおもいで】を手に入れました。

０２６　世界最速の妹の従者、現行最終型。（後書き）

あとがき

らほーい！豚野郎だよ！
ついに本編に関係ありそうな話になってきましたね。
おじさんもびっくら！
今回はちょっとシリアスかなと（書く前に何の根拠も無く）思ったけど書いてみたらやっぱり尻ａｓｓだった。いつもの事です。
性描写についてはご勘弁を。童貞の限界法界大殺界でげす。
ひとまずコレで、僕の考えたさいきょうの茶々丸は一時終了となります。
なお作中の、チタン合金とカーボンのアイディアは杉やん様にいただきました。
いつもありがとうございます。

誰か茶々丸オンリー同人誌書いてください。買います。
ほぼ固定の一人称視点のため、事実が正確に伝えられる可能性は限りなく低いです。ごめんなさい。
力量不足を嘆きながらも、今日もずんどこ更新できたのは皆様のおかげです。
明日は普通に更新できますが、明後日はひょっとしたら忙しいかもしれません。

では今回もありがとうございました。

ミスタースカーレットピッグ

０２７　世界最速、顔合わせ。（前書き）

瀬流彦先生は、小心者だと思う。

０２７　世界最速、顔合わせ。

来週から教師の白波どす。
アニメの関西弁のイントネーションが気になって仕方ないんです。

準備をしに来るようにとじじいに言われて来ました。
俺はなぁ、正規雇用教師なんだよ。アルバイトじゃないんだよ。
年下のくせに顎で使いやがって。

「来ましたー☆白波でぇす？」

「おお、来てくれたか」

「ひょっとしてテンプレートでもあんの、そのセリフ？」

「ではしずな先生、タカミチ、あとは頼んだぞ」

無視されたｗｗｗくやしいｗｗｗｗｗでも……ビクンビクンｗｗｗｗ

「はい、よろしくお願いしますね、白波先生」

「よろしく、麟君」

「うむ、苦しゅうない」

「ははは……」

朝礼前、僕が職員室でお茶を飲んでたら彼はやってきた。
いや、そろそろだって聞いてたから別に不思議じゃないんだけど、
やっぱり流石に怖い。
聞いた話によると、“あの”闇の福音より何倍も強いって言うじゃ
ないか。僕なんて一瞬だよ。
ここは気付かれないように極限まで影を薄くしておこう。

「お久しぶりです、新田先生」

「おお、麟先生！ここに居るということは」

「はい。おかげさまで、教員試験、合格しましたよ」

「それは良かった。今夜は久々に羽目を外しますかな」

あれ？意外と礼儀正しい……僕の勘違いだったかな？
それとも、新田さんにだけか……。

「新田さん、麟君とは？」

「ああ、新田先生に指導してもらったんだよ、タカミチ」

新田さんにだけだったー！
義理と人情に篤いタイプの人だあああ！！
身内には優しくてそれ以外には厳しいってまんまヤクザじゃん！

「あら、そうだったんですか」

「瀬流彦くんも、久しぶり」

やっべ、声かけられた！返事くらいはしとかないとマズいよなぁ。

「はっ、はい！お久しぶりです！！」

「何だ、瀬流彦君も知り合いだったか！君も今晩付き合えよ？」

ひぃぃぃぃぃぃぃ！！

「よろしく、瀬流彦きゅん☆」

この人絶対怖がられてるの知っててやってるよ！！

こえーーー！

いや、待てよ？ここで僕も味方のポジションを手に入れておいたら安泰じゃないかな？

よし、それでいこう！

死ぬより１００倍はマシだ！

「よ、よろしくお願いひましゅ！！」

「さて、もう職員朝礼も始まる。その時に自己紹介でも。白波先生の席は、私と瀬流彦君の間だな」

「改めてよろしくお願いします。瀬流彦君も、ヨ・ロ・シ・ク？」

「ッよよよッよよろっしいくいおねっがあいしまますううう」

Ｕｎｉｃｏｄｅならドクロが見えてる！！
いったいどういう意味が……。
やめて欲しいよ、学園長も……。僕は限りなく一般教員に近い魔法教諭なんだよ？
多分学園の魔法使い最弱だよ！？

「ほっほ。じゃあ職員朝礼を……と言っても白波君の紹介だけじゃがの。じゃあよろしく」

「来週から正規雇用される白波麟、４０歳でぇす☆」

「「「よっ、４０歳ぃぃぃいいいい！！！？？？」」」

まあ、そうなるよね。

「これこれ。ちなみに3年前までバイクのレーサーをやっておった。これが写真じゃ」

なんで持ってるんだろう、この人。

「変わってない……」

「レーサーだったんだ」

「あーん、やっぱりかわいいー！！どうやったらその若さが保てるの！どうやったら！！」

刀子さん、落ち着いてください。言わないけど。

「ちなみに、こう見えても彼は男じゃ」

「「「男!!??」」」

「ちくわ大明神!」

誰だ今の!!!!

顔合わせは無事に終わった。
いやぁー、良かった良かった。

「やぁ、さっちゃん。失礼するよ」

「ヘイさっちゃん!久しぶり」

――お久しぶりです。こちらへどうぞ――

「とりあえず一杯……麟先生はお酒は?」

「このナリ通り、全く飲めませんよ。エヴァはそうでもないんですけど」

ちなみに今晩、エヴァはじじいに酒をせびりに行っているらしい。

「ふむ、じゃあウーロン茶でいいかね?ジャスミン茶もあるようだが」

――ウーロン茶とジャスミン茶のブレンドもありますよ――

「じゃあそれで」

「「「乾杯！」」」

ちびちびと口をつける。

新田先生はそこそこに、瀬流ピコは勢い良く煽ってる。

「ッハァ！さっちゃん、もう一杯！」

「瀬流彦君、今日は随分飲むねぇ」

「飲まなきゃやってられませんよ！だって……ああ、いえ、なんでもないんです」

こっちをチラチラ見ながら言う。

何だ、久々にケツの危機か？

「やぁ、やってますね」

「おう、タカミチ。空いてるぞ」

「ああ、邪魔するよ。僕も一杯もらえるかな」

「しかし、さっちゃんは随分料理が上手いな。和食では茶々丸に及ばず、中華ではさっちゃんに及ばず」

「そういえば麟君はエヴァのお兄さんだったんだね」

「おお、そうなのかい、麟君？」

「そりゃもう、俺が生まれた瞬間から俺はエヴァの兄ですよ。あの頃は随分可愛かったなぁ。いや、当然今も変わらずかわいいですよ？昔からバイクに乗ると大喜びでねぇ。３００キロも出したときなんかはキャーキャー騒ぎながら……」

「それは喜んでいるのか……。瀬流彦君、何を飲ませたのかね」

「そんな畏れ多い！！」

「畏れ多い？」

「彼は極度のシスコンで、素面でこれですよ。思えば昔、共学制だった頃エヴァの家にプリントを持って行ったら彼に殺されそうになってねぇ。ははは」

「昔の話を蒸し返すなよ、タカミチィ☆」

「いやいや、マッチ棒でもあの速度で投げたら人が死ぬよ」

「いったい何があったのか……」

「おっと、もうこんな時間か。邪魔したねさっちゃん」

「ごっそーさん」

「瀬流彦君が完全につぶれてるぞ」

「はは、僕が職員寮まで運んでおきますよ」

「ああ、頼んだぞ、高畑君。では麟先生も、来週からよろしくな」

「はい、よろしくお願いします」

「うぇーーーぁ！ただいまスカンク！」

「おかえりなさいませ、麟様」

帰ったらエヴァがいなかったから茶々丸の背中に抱きついて寝た。

「録画したいけど背中から降ろしたくない！姉さん、どうすれば！？」

「死ヌホドドーデモイイ」

０２７　世界最速、顔合わせ。（後書き）

紅のです。
次回こそはバイクを出したい。
けど次回はネギ先生が……来る……ざわ……ざわ……
ちなみに副担任のしずな先生は高等部の英語教員に、タカミティは出張天国に。
なります。

では今回もありがとうございました。

０２８　世界最速と、魔法先生。（前書き）

よっしゃ長かったー！

０２８　世界最速と、魔法先生。

今日、初顔合わせ＆初授業らしく、下仁田葱・スプリングフィールド氏が来訪なさるともっぱら。
ってか当日にいきなり授業なんて、先方にも準備ってもんがあるだろうに、何考えてるんだろうね。
まあテンポよくていいけどさ。

っつーわけでおなじみ白波・アスカ・ラングレーではなく白波麟です。
ぐーてんもるげん！

朝からじじいと他愛ない話をしながらそのネギ助を待ってるって訳だ。
ヘイカモーン！！

コンコンしつれーしまーす
返事を聞く前にガチャリコと扉を開けて三人入ってきた。
一人はいつぞや会った駅前のお姉ちゃん、一人は頭に鈴付けてるジャージのバカっぽいガキ、最後の一人が、絵本でおばあちゃんがかけてるメガネみたいなんをつけたちんちくりん。
このちんちくりんがネギだろう。と思う。

「あら？お嬢ちゃん久しぶりやねー。あの時はちゃんと着いた？」

「ああ、着いたぜ！ありがとうなんだぜ！」でも結局遅刻したんだぜ！

「でも何でここにおるん？」

「その子はのう、そう見えてもう４０歳じゃ」

「またまた、嘘いうてー」

ハンマーで……殴った……！！

俺もやりたい！

「いやいや、これが本当でのう。で、今日からおぬし等の副担任じゃ」

「すらなみりんだすｗｗｗｗｗよろすくｗｗｗｗｗ」

「なんか無性にウザいわねぇ」

「これで４０歳かぁー。不思議な事もあるもんやねー」

認識阻害ってすごい！

「でもそっちのネギ君は、正真正銘１０歳の天才少年じゃ。まずは、これから3月まで教育実習生として働いてもらう事になるのじゃが、この修行はおそらく大変じゃぞ。ダメだったら故郷に帰らねばならん。二度とチャンスは無いが、その覚悟はあるのじゃな？」

「は、はい！やります！やらせてください！」

「うむ、わかった！では今日からさっそくやってもらおうかの。２－Ａの担任になるんじゃが……」

「そ、そうよ！ちょっと待ってください！」

「ど、どうしたんじゃ、アスナちゃん？」

「こいつらが「おいおい、こいつらって何よ。俺は一応正規雇用だぞ？」……ごめん、こいつが教師をやるのは１００歩譲っていいとして、担任ってことは、高畑先生は……」

「まあまあ、タカミチは今まで通り出張＆帰省のヒットアンドアウェイ野郎として麻帆良の外を駆け回るよ。今までと何も変わらないって」

「それもそうか……って、でも……」

「ああ、そうそう、しばらくはネギ君をお前たちの部屋に泊めてくれんかのう？まだ住むとこ決まってないんじゃよ」

「げ」

「ええよー」

「もうっ、そんな何から何まで！学園長ー！！」

「かわえーよ、この子。こっちの子もかわえーけどな。日本人形みたいや」

「ガキは嫌いなんだってばー！！」

「仲良くしなさい」

「「うぐっ」」

え？それで収まるの？

「じゃあみんな、行きましょうか」

いつの間にかいたしずな先生が三人を引き連れて出て行った。

「……さて、何でお主に残ってもらったのかは他でもない、ネギ君の魔法が、極力他の者にばれんようにしてもらいたいんじゃが……」

「極力？完全にじゃなく？」

「そこまで目くじらを立てて見張る事もあるまい。バレてしまうのならそれでかまわん」

「はぁん。なんだ、思ってたより悪人じゃないの、お代官様も」

「ふぉふぉふぉ、お主ほどじゃないよ。いや、本当」

「まあいいや、俺も行くぜ」

「うむ、頼んだぞ……」

教室の前に着くとすでに入る直前だったようで、黒板消しの挟まっ

た扉に手をかけている。
お、開けた！止まった！かかったぁぁぁぁあああああ！！！！！！！
何　故　と　め　た　！

「いやぁー、あはは、なるほどー、ゲホ、ひっかかっちゃったなあ、ゴホ」

「ひゃひゃひゃｗｗｗｗｗｗｗ」

笑って見てたらロープに足をかけて転んだ上からバケツが落ちてきて頭にはまって転がってるうちに何本も吸盤つきの矢が刺さって教卓に当たったところで止まった。

中から笑い声が聞こえてくる。
と、ここで俺も笑いながら入場。

「あひゃひゃひゃｗｗｗｗぎゃひひへひゃはははははｗｗｗｗｗ
見事に全部引っかかってｗｗｗｗなにやってんすかｗｗｗｗ」

見事に引いてるほとんどのガキどもをひとまず捨て置き挨拶する。

「今日から副担任の白波麟、４０歳、男です、よろすくｗｗｗｗ
こいつは担任のダスティ・スプリングフィールド。得意な歌はＩ Ｏｎｌｙ Ｗａｎｔ Ｔｏ Ｂｅ Ｗｉｔｈ Ｙｏｕだ。よろしくしてやってぇ？」

「ネギです！ネギ・スプリングフィールド！！」

あれ？違った？

「キャーかわいー！！」

「４０歳って嘘だよね！嘘って言ってよ！！」

「二人とも持って帰りたいー！」

「まずい、任せた、ネギ先生！」

と言って早々にネギくんを差し出し、エヴァの隣に座る。

「おはよーモーニング」

「おはよ、お兄ちゃん」

「おはようございます、麟様。今朝ぶりですね」

「うむ。しかしアレだな。予想以上にバカっぽいな」

「……わかる？」

「わかるわ、そらわかるっちゅーねん」

などと話していると向こうの方ではさっきの鈴を頭につけたツインテール、たしか明日菜とかいったっけ？あすにゃんと呼ぼう。
あすにゃんがネギボーイに詰め寄ってる。ワロスｗｗｗ

「何故あなたがここに？」

「え？ああ、せっちゃんか」

「……答えによっては」

「答えによってもお前におにいちゃんをどうこうできる訳なかろう？引っ込んでろ」

「べつに何もしないって。してくれって頼むなら話は別だけど」

「クッ！」

「おい、またやってるのか。すまないね、刹那も悪気がある訳じゃないんだ」

「たつみんか。別にいいよ。どうでも」

「そういう事だ。お兄ちゃんには貴様ごとき、視界の隅にすら残らない程度の雑魚なんだよ」

「落ち込むなよ、せっちゃん。俺からしたら世界中の人間がそうだからさ。そんな事よりアレ何やってんの？」

視線の先ではあすにゃんと雪広あやか……ゆっきーがつかみ合ってる。

「あれは、まぁいつもの事です」

せっちゃんもため息をついちゃうくらいいつもの事か。

「はいはい、みんな、時間もおしてるし、授業しますよー。じゃあネギ先生、白波先生、私は高等部があるのでお願いしますね」

しずな先生も流石に飽きたのか、そう言って教室を後にした。

「じゃあネギ先生、俺はサポートに回るから頼んだぞ」

「は、はい！まずは１２８ページの、の、……の……、届かない～」

「その高さでいいんじゃないか？見えないほどじゃない」

「は、はい！あでっ」

座席の方から消しゴムが飛んできたようで、ネギ君の頭にあたった。

「わるいな、あすにゃん。丁度消しゴムが無くなりかけてたんだ。
でもちぎってくれるくらいなら丸ごとくれないか？」

というと下を向いてしまった。いじめがいの無い奴だ。

ひとまず滞りなく授業は終わったが、どうも教え方が良くない。
アレはわかる奴がわかってる事をそのまま言ってるだけで、勉強を教えてるとは言いにくいかもしれんね。
知ってる奴が知らない奴に教えるのは大変なんだよ。
まあエヴァには魔法教えたときもバイク教えた時も何にも苦労しなかったけどな。エヴァ天才だし。

ちなみに、他の時間も授業はあったが、どういうわけかネギ先生は３－Ａ以外の授業は無いらしい。
じじいに聞いたら、「まだ１０歳じゃからのう」と言ってた。
意味わからん。９歳じゃなかったのかよ。

「あ、いたいた！麟さん！」

「おろ？かずみんじゃん。どうしたの？」

「いやぁー、驚いたよ。まさかうちの副担任だなんてねぇ。いつの間に教員免許とったのさ」

「前スーパーで会った時にはもう持ってたよ。それにホラ、俺免許大制覇目指してるから」

そう言って全欄埋まってる運転免許証を見せる。

「ハハハ。そう言えば昔も言ってたねぇー。って、そうそう、この後歓迎会があるんだよ。エヴァちゃんも参加するし、今から行こ」

「うむ、良かろう」

「あはは、変わらないねー。ってアスナとネギ君じゃん。おーい！」

「あれ？朝倉と麟先生？どうしたの？」

「どうしたのって……そこまで脳が……ほら、歓迎会！アンタも買ってんじゃん」

「ああーそっか！忘れてた」

言って、扉を開けると、

「ようこそ？ネギ先生！リン先生！」

と、クラッカーの音と共に迎えられた。

「うむ、苦しゅうない」

「ほらほら、主役はまんなか」

「わぁー、嬉しいなぁ」

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ」

「センセ、私からもコレを……」

「うわー！先生たちの銅像！」

「何だソレー！」

「もらっちゃったＺＥ☆」

「喜んでいただけて何よりですわ」

「よくやったな、雪広あやか」

「エヴァンジェリンさん？何であなたが？」

「タカミチ、向かい側、空いてるな」

「ああ。お疲れ様、どうだった？」

「どうもこうもねぇよ。実質ほとんど俺だけが英語教諭じゃねぇか」

「まあまあ、お、ネギ君もおつかれさまだったね」

「あ、タカミチと麟先生」

ネギ君か。まあがんばれ。
ん？あすにゃん何やってんだ？
とりあえずシラナミイヤーを……『説明しよう！シラナミイヤーは地獄耳！！ちなみにシラナミウィングはない！故に空を飛ばない！といいつつ、実はただの読唇術だったのだ！！』

「チャンスよチャンス！！わかってるわね！」

「ハ、ハイ！読心術ですね！」

ここまで言うとタカミチに向き直る。

「ところでタカミチ、アスナさんのことどう思ってる？」

そして読心術を始めやがった。

「ど、どうって、うーん……。毎朝バイトがんばって……しっかりしてるし……」

「ふむふむ……」

「ちょｗｗｗｗｗｗｗタカミチｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「しーっ！しーっ！」

「心読まれても動じないクールな男ｗｗｗｗｗｗ」

トトトト「ノーパンって思ってます」

「ブファッｗｗｗｗｗｗｗ無理ｗｗｗｗｗｗｗｗもう無理ｗｗｗｗｗｗｗ離脱ｗｗｗｗｗｗｗエヴァ、行こうずｗｗｗｗｗ」

つくづくバカだな、タカミチも小僧もな」

「うん、お兄ちゃん。

「うーん、手厳しいなぁ」

「じゃあ先に帰るわ。みんなはよろしくやっといてくれ」

「えー？もう帰っちゃうのー？」

「まだ仕事が残ってるんだよ。あんまり遅くなるんじゃねぇぞ」

「はーい。さよならー」

「あれ？エヴァにゃんも？」

「当然だろ？私とお兄ちゃんは愛し合ってるんだからな」

教室を後にする。

直後、教室が揺れたが、残念！もういないんだな、コレが。

「朝倉顔見知りだったよね！！」

「ちょ、勘弁してよー」

などと聞こえてくるが、まあいいや。
こんな教室居られるか！俺は明日の分のプリントを作るぜ！

「ふぅー、終わったー。これ初日にやる仕事じゃねぇよな。タカミチは何をサボってやがるんだか」

「お疲れ様、お兄ちゃん」

「おお、帰るかー」

「うん！」

「あれ？今日は徒歩？」

「そだね」

「じゃあ茶々丸も先に帰ってるし、タンデムでいっか」

「うん！」

ＮＳＲ８０に二人で跨り、スターターを踏む。
軽快な滑り出しで回しながら走り出した。

「は、ハクシューン！！」

「きゃ！またかお前はーっ！！」

「ご、ごめーん！！」

またネギにやらかされた。
今日は一日散々だったなぁ。
高畑先生も担任じゃなくなっちゃうし……。

「なあ、アスナ、アレ」

「ん？何よこのか」

見てみると、物凄い速度で二人乗りのバイクが走ってる。
確かに珍しい光景ではあるけど、わざわざ見るほどの……ん？アレよく見ると……。

「エヴァちゃんと麟せんせーちゃう？」

「言われてみればたしかに……って速っ！！」

割と遠くの方から見てたけど、パァーン！！とか音を出しながら物凄い速度で横を走っていった。
ってかバイク乗れるんだ……そう言えば４０歳だったわ……ってアレ？そうなるとエヴァンジェリンさんって同い年だから１４よね？
３０歳以上の開きがあるの？あの兄妹……。

「まあ、いろいろあるわよね」

「なぁ、速かったなー」

「僕の杖でもあれだけは「ってバカ!!」ご、ごめんなさい!」

「どないしたん?」

「なっ、何でもない!!何でもないわよ!!」

「んー?」

このかをあんな目にあわせられるわけないわよね。

そっと心にしまっておこう……。

０２８　世界最速と、魔法先生。（後書き）

A☆HO☆GA☆KI
深刻な描写不足です。
初めは３人称視点で書こうと思ってたんですが、どうにもナレーション部分にキャラの心情とか書いてしまいそうになるので、いっそ一人称視点で！と思い立ったのが凶事でしたね。
実際、事実と違うことでも麟が思えばそれが文章上の真実となってしまう訳なんで、多少おかしなこと書いてもいけんだろ！
などとタカをくくってました。

試しに少し書いてみます。

ーー

日本人形のような少女に見えるだろうか。
薄手の英語の教科書持った、彼女ではなく彼なのだが、白波麟は教卓に立つ同僚を呆れたような目で見ている。
先程も黒板の上のほうまで手が届かない彼に、その高さで充分じゃないかと進言したばかりなのだった。
彼が急に頭を抑えて後ろを振り返った。
それを見た麟は、彼の後ろで物を拾うような動作をした後、口を開く。

「悪いな、あすにゃん。丁度消しゴムが無くなりかけてたんだ。でもちぎってくれるくらいなら丸ごとくれないか？」
見ればその手には消しゴム、その欠片が握られていた。

話に上がったあすにゃんこと神楽坂明日菜も、まさか見られている
とは思わなかったのか、気まずそうに顔を伏せている。
彼はすこし呆れたように笑い、また教卓を眺めるのであった。
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――

極端すぎましたかね。
毎回１０００行越えとかしちゃいそうです。
でも麟も僕もアホなんで、結局
――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――
「その高さでいいんじゃないか？見えないほどじゃない」

「は、はい！あでっ」

座席の方から消しゴムが飛んできたようで、ネギ君の頭にあたった。
「わるいな、あすにゃん。丁度消しゴムが無くなりかけてたんだ。
でもちぎってくれるくらいなら丸ごとくれないか？」

というと下を向いてしまった。いじめがいの無い奴だ。

――――――――――――――――――――――――――――――
―――――――――――――――

となってしまうんです。
こんな壮大な言い訳したのは初めてです。
すいません、僕の力量不足でした。
もっと鍛え上げます。

では皆様、長くなってしまいましたが、今回もありがとうございました。
一回言った気もしますが、明日は多分忙しいので更新がどうなるか……。
なるべく上げれるようにがんばります。

０２９　世界最速、特に何もしない。（前書き）

見直しもしない。
→
見直ししなかったが故にみんなチート使って進級してた。
３－Ａから２－Ａに修正しました。
ご指摘くださったザンレイさん、ありがとうございます。

０２９　世界最速、特に何もしない。

み・ん・な・の・白波ー！！
エヴァは俺の嫁、俺はみんなの嫁。白波です。

はい、授業もなんとか滞らず。
ネギ先生は相変わりもせず２－Ａの相手ばっかりしてる。
なにこれ。
じじいが「２－Ａはネギ君がおるから行かんでも大丈夫じゃよ」
とか言ってたからピアス穴を1号拡張してやった。

「ひぃぃぃぃい、じじい虐待じゃよ」

うるせえ、パワハラじじい。
授業内容に差がでるからテストにも差を出すってのか？そりゃ学年一位にもなるっちゅーねん。

「俺はもう授業だから行くぞ。２－Ａのな」

ちなみにネギ先生には、わかるような授業の方法を教えてやったがいまいち理解してないみたいだ。天才は人に対して、もの教えるのに向いてないな。

「じゃあ今のところ誰に訳してもらおうかなー……」

みんなびっくりするくらいペン回し上達したな。先生、悲しいぞ。
そしてネギ先生。はい訳して！でぱっと訳せるような奴に授業は必要ないぞ。
一度もやってない事をやらせようとするんじゃない。

「んーじゃあアスナさん」

ペン回し過ぎてペン先が唸ってたあすにゃんをご指名とはいいセンスだ。

「な……何で私に当てるのよっ！？
フツーは日付とか出席番号で当てるでしょ！」

「でもアスナさん、ア行じゃないですか」

「アスナは名前じゃん！」

「あと感謝の意味も込めて……」

「何の感謝よっ！？」

それを雪広あやかことゆっきーが挑発してあとは売り言葉に買い言葉だ。
訳を始め……れてねぇー！
ジェイソンさんをなぜ殺した……。

「アスナさんって、英語ダ「おい、ネギ先生？今ならまだ日本語が“ダメ”だったって事にして許しておいてやる」

何て言おうとしたのかはわからんが、ちょっとフォローできなさそうな事を言おうとしてたので、ひとまず止める。
ネギ先生も、自分が何を言おうとしてたのか気づいたようで、少し顔を青くした。

「え？……あっ、ごっ、ごめんなさい！！」

「俺じゃないだろ」

「アスナさん、ごめんなさい」

「な、何がよ」

「わかんなくっても謝らなきゃいけないときってのがあるんだよ…
…男ってのは、悲しい生き物なんだよ」

「いいんでしょうか？」

ネギ先生が聞いてくる。
何言ってんだこいつ、年相応のバカだな。

「いいも悪いもねえよ。何でお前は言わなかった」

「そ、そうですね。じゃあ授業を続けます。ここの訳し方は……」

ちょっとはマシになったかな？
まあ、後で授業をつけてやるか。

「ネギ先生、今日君をここに呼んだのはほかでもない。君にちょっとした授業をつけてやるためだ」

「は……？え、でも僕先生なのに」

「そう言うな。考えあってのことなんだＺＥ！」

「はぁ。では、手元に資料はあるな？今日は、というか今日限りだが、エンジンについてだ」

「はい」

「エンジンの中でも最もメジャーなレシプロエンジンってのがあるが、ピストン運動でガソリンを吸気、圧縮、爆発、排気のプロセスを経て回転力を生み出す機構と考えてもらってかまわない」

「はぁ……」

「これを二度の回転で賄うのが４ストロークエンジンだ。ではここで問題、、この回転を一度で賄うのは何エンジン？」

「え？あ、わ、わかりません……。でもいったい何の関係が？」

「そりゃわからねえわな」

「へ？」

「いや、勘のいいやつならわかるだろうが、これは２ストロークエ

ンジンだ。ちなみに、４ｓｔの場合上死点でやることは圧縮と排気。２ｓｔの場合は？」

「いえ、その……」

「あれ？わかんない？」

「はい……」

「恥じるな。別にバカにするためにやってるんじゃないんだゾ？ネギ先生は天才だからな。天才は天才なりに苦手な事ってのがあるもんだ。で、天才だったばっかりにその苦手なことが何か気づきにくい」

「はぁ」

「ネギ君は賢いけど、正直に言って、中学生ってのはだいたいバカだ」

「そ、そんな……」

「いや、バカだね。間違いなく。いや、１４程度のガキがみんな賢かったらそれこそ気色悪いが。で、バカだから当然予習なんてしてこない。だから、さあ訳せ！なんていざ言われても訳せる訳がない。当然、俺らがそこまでフォローしてやる謂れは無いかも知れんが、まあそこは義務教育だ。一応、やってない事をやらせるのはよくないな。せめてまとめてから訳させるべきだったんだ」

「そ、そうですよね」

「で、ここに一枚のプリントがある。はい」

「あ、どうも」

「それを適当に読んでくれ。……もう読めたか。早いな。キモい。で、ローターハウジング内でローターを回転させることによって吸気、圧縮、爆発、排気を行うエンジンだが、こいつの名前は？」

「あ、これかな？ロータリーエンジン、英名はヴァンケルエンジンです」

「　　ハイ正解！！

／射命丸／／射命丸／／射命丸／

と、こんな風にちょっとしたプリントを用意してやるだけで、教科書のみで授業を進めるよりよっぽどわかりやすくなる訳だ」

「はい。僕、間違ってました」

「何、子供は間違って大人になっていくのさ。」

「ロータリーエンジンってすごいんですね！」

「いや、すごいよ！すごいけどさぁ！！そうじゃないんだよ！」

「え？えぇ？」

「あ、いや、もういいわ。ロータリーの凄さがわかっただけで充分だよ」

「へへっ」

勉強はできるけど理解力がえげつなく低いな、こいつ。

「だーだーい〝ーま〝ー」

「おかえり、お兄ちゃん」

「おかえりなさいませ、麟様」

「うむ」

エヴァと茶々丸が抱きついてくる。

お前もか……。

「お疲れだねー」

「ケケケ、ニイサンデモ疲レル事ナンテアルンダナ」

「いや、精神的にな。下手にバカ相手にするより疲れるよ、ありゃ」

「ネギ・スプリングフィールド？……殺す？」

「バカ、そんなん殺さなきゃいけない状況になった時俺が真っ先に殺すっつーの」

「俺ノ分モ残シテオイテクレヨナ。近頃人ヲ殺シタリナイ」

「姉さんったら、麟様とマスターの教育に悪い事を言わないでください」

「茶々丸、お前最近言うようになったな」

「改造と教育のたまものやね」

「はい、皆様のおかげです」

なぜか誇らしげに言ってくる。

「もっとロックに」

「皆様のおかげだぜ、べいべー（棒）」

「京美人で」

「皆様のおかげさんどす」

「英語で」

「Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ａｎ　ａｐｐｌｅ（皆様のおかげです）」

「俺がお前に教えることは何もない……グフッ！」

「お兄ちゃん！！」

「麟様！！！」

白波は今日もジェイソンに花の上に落とされる事によって春がきます。

０２９　世界最速、特に何もしない。（後書き）

英語のえの字もわからない紅の豚野郎です。
第二外国語はヒュムノス語なんです。
職場で書いたため、資料となる原作はありません。
あと、ネギきゅんに対する授業とかかなりいいかげん。
ロータリーへの愛情のみで押し切りました。
ＲＸ－８ほしいよー！

では、今回もありがとうございました。

０３０　世界最速、出席を取る。（前書き）

中途半端に終わってますが、頭が頭痛で痛い（？）今の僕にできる精いっぱいがこれです。
見直しなんて、無いんだよ。

０３０　世界最速、出席を取る。

「要するに、ロータリーエンジンはレシプロエンジンに対して、遥かに優れるわけです！」

「それはどうかと思うぞ。確かに、まったくロスがなければという前提で話すなら４ｓｔエンジンの６倍の出力があって然るべきだが、ロスの大きさと燃費の悪さはロータリーの永久課題だ。確かにＲＥＮＥＳＩＳで重量は従来より１０キロも落としたのは大きな成果だが、それでもレシプロの汎用性には敵わない。パワー至上主義者がよく陥る勘違いさ」

「西洋人だからって米国人と一緒にしないでください。イギリス人は効率主義者なんです」

「どおりで美味くもない飯いつまでも食ってられる訳だ。あんなクソでかいフィンのついた燃費の悪いエンジンに効率もクソもあるかっつの」

「何ですか？ひょっとして喧嘩売ってるんですか？買いますよ？」

ネギ先生がこうなったのはきっと俺のせいじゃないはず。
白波げんなり。

いや、俺もロータリーは好きだよ。愛してる。でも他のエンジンも同じくらい愛してるんだよ。
それをこのブリティッシュが、「ロータリー以外は大したことないね」とかしたり顔で抜かすもんだから、そりゃ喧嘩腰にもなるっつの。

「ちょ、ネギ君、落ち着いて！麟君もあんまりいじめないでくれよ」

「タカミチもロータリーが一番だって思うよね！」

「おい、普通に考えて２ｓｔエンジンだろ！？」

「え？うーん……僕はリニアモーター機関がいいかな」

一瞬だけ空気が凍った。

「はっエコテロリストが。行きましょう、麟先生」

「ケッ、お前にはがっかりだよ。エコ気取ってエゴ押しつけやがって」

「僕が何をしたって言うんだ……」

白くなったタカミチをおいて職員室を出ると、しずな先生に声をかけられた。

ってかあんたよく見るけど、もう高等部の教師だよな？

「あら、ネギ先生。学園長先生がこれをあなたにって」

「ホントですか？どれどれ……えっ！？僕への最終課題！？」

『ねぎ君へ

次の期末試験で、

二－Ａが最下位脱出できたら

正式な先生にしてあげる

P．S．　お風呂上りに耳掃除をすると湿っている』

「ムカつく」

「ってえぇぇえええ！！テストなんですかぁ！？っていうか最下位！？」

「気付いてなかったのぉ！？俺が啓発して２－Ａですらテスト勉強してたのに！？」

「え～？なになに！？どーしたのーネギ君」

「あー、ネギ君本物の先生になるんだぁ」

「あ、見ちゃダメですよう」

そういってネギ先生は遠くを見つめながら思い耽っていた。ムカつく。

ひとまず教室に殴りこんだ。

「おいクズども！てめぇらは二年のカスだ！ゴミだ！ウジ虫だ！」

「ちょ、麟先生！いきなり何を！？」

「うるせぇクズレッドが！てめえ含む5人のクソレンジャーが全員の足引っ張ってんだよ！ゴミどもめ！悔しかったら勉強してみろ！ってわけで、はいコレ。みんなの分のプリント。せんせー夜なべしてがんばっちゃったぞ？」

「あのかわいさは卑怯でござるな」

「うぅ～、あんなに言われたのに許しちゃうアル」

「許す許さねぇは俺が決める事なんだよ！いいか、ネギ先生はな、このクラスが次のテストも最下位だった場合は［ピー］ちょんぎって坊主にした上で日本からの永久追放だ！その他、お前らにもえげつないペナルティが待っている」

「「「えぇ～！！？？」」」

うむ、しっかり驚いてるみたいだ。
ちなみにネギ先生が一番驚いてる。

「ほ、本当なんですか、麟先生？」

「当たり前だろうが。俺が言えば黒いカラスも白くなるっつーの」

「ひ、ひぃ～」

「せんせー、プリントの上に名前書いてあるよー」

「それぞれのレベルに適したカリキュラムが組んである。これをやっときゃケツはない筈だ。わかんないことがちゃんと聞きにくるの

よ？」

「「「は～い！」」」

「うるせぇ！小学生か！Ｆｕｃｋ　ｙｏｕ　ブチ殺すぞ……ゴミめら……」

「「「えぇ～！？」」」

「はーい？提案提案」

「ほい、しーちゃん！」

「椎名桜子でしーちゃんかぁ……。
お題は『英単語野球拳』がいーと思いまーすっ！！」

「死ね！」

わぁ～！！

じゃねぇよ。

どうにも収まらない。
で、何故かネギ先生が魔法を使おうとしてたから武力介入しようと思ったら、あすにゃんが止めてた。
もう気付かれてんのかよ。仕事速ぇな、ネギきゅん。

～つぎのひ～

「ハァ！？行方不明！？」

「は、はい。図書館島に入ったっきり連絡が……」

「何で図書館島に？」

「その……頭がよくなる魔法の本が……」

わぁーお！バカ発見ｗｗｗｗ

「ちょっと待ってろ」

「は、ひゃい！ごめんなさい！！」

何謝ってんの？

まあいいや、じじいに聞いてみよう。

「おお、白波君。丁度電話をかけようと思ってた所だったんじゃ」

「……」

「実はネギ先生達が図書館島で勉強しておってのう。その間授業をお願いしたいんじゃが」

手近な５０×５０ｃｍくらいの石をつかむ。

「かまわんかの？」

それを学園長室に向かって投げた。

「ああ、いいぜ。ただしそのころにはお前は八つ裂きになってるけどな」

「ほ？何を言って……ぎゃぁあああああ！！」

何だ、電話を切りやがった。まあいいか。

「あわわわわわ……」

「おい、のどっち」

「ひゃわい！！」

何をビビってるんだか。ああ、アレか。怒られるとでも思ったのか。

「教室行くぞ」

「は、はい！ごめんなさい！」

「きにすんなよ」

～きょうしつ～

「せんせー！せんせーが行方不明って！！」

「ど、どどどうしましょう！わたくしはどうしたら！」

「静まれーぃ！静まれーぃ！
この紋所が目に・・・・静まれーぃ！
皆の者～、静まれっ！静まれっ！静まれーぃ！
この俺様を誰だと・・・・静まれーぃ！
ええぃ！静まれっ！静まれーぃ！
さきのグレイトティーチャー、白波の・・・・し、静まれーぃ！
静まれーぃ！皆の者、静まれーぃ！
白波・・・静まれーぃ！静まれーぃ！静まれーぃ！」

「で、でも！」

「いろいろあって来れないと聞いてるが何の問題もないな！」

「そ、それでしたら……」

あ、やっぱり納得しちゃうんだ。

「じゃあネギ先生がホントアホみたいにバカ引き連れて合宿行っちゃったんで、出席をとりまーす」

「ア、アホみたいにって……」

「ネギ先生に向かって何という！！」

「春日にゆっきー、いるのはわかってるから呼ばれるまでじっとしといてね」

「じゃあ一番から点呼な。えーさよっぺ」

『あ、はい！』

「いるな」

「「「ええっ！」」」

『ええ！？』

あ、お前も驚くんだ。

「ゆうちゃん」

「ゆうちゃんか……ちょっと恥ずかしいな」

「かずみん」

「はいはーい！」

「ゆえぴょん……はいねぇんだな」

「……ゆえぴょん？」

「あこりん」

「ちょっと恥ずかしいなあ」

「ＡＫＩＲＡ」

「何かかっこよく言われた！？」

「ミサミサ」

「はーい」

「バ神楽坂あすにゃん、いないっと。
春日ェ……」

「私何かしたっすか！？」

「茶々丸」

「はい、麟様」

「りん……さま？ちょっと、朝倉」

「ハイ来た！これはスクープだよ！！」

そう言ってＣａｍｅｒａを取り出す。
そうはい神裂！

「かずみんは後でパパと一緒に呼び出しな」

「Σ　何故っ！？」

「まどか☆まぎか」

「はい……マギカ？」

くぎゅうううううううううううううううう！！！！

「くーへもいない。もういよいよこのクラス駄目じゃね？」

「そんな事ございませんわ！」

「と言いつつこのちゃんもいないと」

「うぅ……」

「落ち込むなよゆっきー。お前は何も悪くない」

「パｒ……水橋」

「ちょっと待って！！水橋！？」

「水橋妬ましい。そんな感じ。次ーせっちゃん」

「……ハイ」

「気持ちはわかるけど落ち着こうな。おお、睨むな睨むな。ハハッ（裏声）！

ピンクもいないと。何だこのクラス。おかしくね？え？俺だけ？それ思ってんの？ハハッ、ワロス」

ちうたんの口元がやや引きつってる。ハハッ、ワロス。

「しーちゃん」

「はい」ガタタッ

「座ってろ。マナっち」

「それは、私のことかな？」

「うん。
チャオ★リン」

「切るトコそこじゃないヨ」

「知ってるわ。
楓忍法帖もいないと。
ちづねえ」

「はい」

「双子」

「「はーいっ！」」

「お前ら小学生だろ。
さとみん」

「はい。そう呼ばれるのは初めてです」

「ふはは！

えーっと、ちうたん」

「ブーーーッ!!!!ちょ、おま!!どこでそれを!?」

ふふふ、登校前にエヴァと二人で見てたよ。

「エヴァ!」

「お兄ちゃん!」

抱き合ってキスしようと顔を近づけると

「待て待て待て!!!!!」

「朝倉!!!」

「『兄と妹、そして教師と生徒!!純愛の嵐が教室に舞い降りる!!』」

「「「ソレだ!!」」」

「なんだ、見世物じゃないが見たいならみていいぞ」

「お兄ちゃん、ちょっとだけ恥ずかしいよ」

「こんなのエヴァにゃんじゃねえええ!!!」

チュ

「続きは帰ったら、な」

「うん、……お兄ちゃん」

教室がフットーしそうだよおっっ

「すっげえ心に毒だったよ」

「なんだ、ちうたん？羨ましいの？」

「長谷川千雨ならお兄ちゃんとキスしてもかまわんぞ？」

「ちうたんじゃねえ！ってか、べっ、別に羨ましくねえよ！」

「長谷川さん、クールだと思ってたら案外……」

「くぅっ……」

ちうたんは机に顔を埋める。

ふはははは、無駄よ！！耳まで真っ赤だわ！！

「のどPはいるな」

「ひぃ！は、はい！いますぅ！」

「それは何より。

なつみん」

「な、なつみんかぁ」

「ゆっきー」

「おりますわ」

「さっちゃん」

ーーはいーー

どうやって喋ってるんだろう。

「ＸａａＸｉ．（ザジ）」

「」

手を上げている。

ちなみに、当然だがこれでザジと読む事はそうそう無い。

そして気になった人は［ＸａａＣｉ．］で検索するのもまた一つの道であるとだけ。

「よし、じゃあ居ない奴以外は全員いるようなんで、あちらはあちらで勉強してるだろうしこっちもこっちで勉強しておいてくれるわ！！」

「おー！」

「とは言っても英語は3時間目だからそれまで貴様らは各自その教科の勉学に励むこと。もしちゃんとしない奴がいたらそいつの前で俺リストカットするから」

「怖っ！！」

「そして重っ！！」

「じゃあひとまず解散！号令はいらん」

なんかボムボム坂中学を思い出すなぁ。

特に1組。

０３０　世界最速、出席を取る。（後書き）

もうホント、頭痛がえらいことになっとります。
豚野郎です。
今回はいつもより自由な麟くんを書いてみました。
しかし何故ネギがロータリーフリークになってるんだろう……。
私はロータリー大好きですよ。
ちなみに麟はコーヒー派なんでもうひと悶着ありそうですね。
無いかもしれませんが。
これからは薄っぺらい学力の底上げをします。

では今回もありがとうございました。おやすみなさい。

０３１　世界最速、授業をする。（前書き）

０３１　ちうたん、焦る。

０３１　世界最速、授業をする。

～３時間目～

昨日渡されたプリントを少しやってみたが、かなりわかりやすくなってる。
要点だけ簡潔に纏められて、所々パソコン用語と関連付けられてるから教科書で勉強するよりまだわかりやすい。
ちなみに、那波のプリントを少し見たけど、何書いてあるのか全くわからなかった。
本当に全員分作ったらしい。

大した気力だよ。
ちなみに、どう見ても小学生の麟先生だが、朝倉に聞いたところ本当に４０らしい。
１０歳の先生のほうがまだまともに見える。いや、対外的な話で、授業の中身は麟先生のほうがかなりわかりやすいし、そういう意味じゃあ本当に４０歳かも知れないけど。
あのわかりにくいガキの授業よりよっぽどしっかりやってくれてる。
やってくれてる、けど。
今朝私のこと『ちうたん』っつってたよなあああ！！！
バレてんのか！？ひょっとしてバレてんのかぁぁぁああ！？
いや、バレてるわけねぇ。『千雨』で『ちう』って読んでるだけだろ。
他の奴らもまともな呼び方されてねえし……。
そうであってくれ！！
クッソーなんでもっとわかりにくいハンドルネームにしなかったんだよ私！！

って来たか。平常心だ、私。
二枚の仮面を使い分けろ……。クールになれ！

「授業を始めます。号令はいらねぇ。俺はテストの問題と回答完全に知ってるけどお前らに教える訳にはいかないから頑張って欲しい。お前らにできねぇ訳ねえんだから。ちなみに赤点とっちゃった奴はリストカットな。俺が、目の前で」

「えー、先生教えてくれないのー！？」

「テストの回答教えてよー！」

無駄に重いことを言ってる先生に双子がぶーぶー言ってる。
バカか。普通に考えて教えるかっつーの。

「Ｆｕｃｋ　Ｙｏｕ　ぶち殺すぞ……ゴミめら……！
おまえたちは・・・・　大きく見誤っている・・・・
この世の実体が見えていない
まるで3歳か4歳の幼児のようにこの世を自分中心・・・・
求めれば・・・・　周りが右往左往して世話を焼いてくれる
そんなふうに　まだ考えてやがるんだ　臆面もなく・・・・！
甘えを捨てろ　お前らの甘え・・・・その最たるは
今　口々にがなりたてたその質問だ
質問すれば答えが返ってくるのが当たり前か・・・・？
なぜそんなふうに考える・・・・？
バカがっ・・・・！
とんでもない誤解だ　世間というものは　とどのつまり
肝心なことは　何一つ答えたりしない
住専問題における大蔵省　銀行

薬害問題における厚生省
連中は　何か肝心なことに答えてきたか・・・・？
答えちゃいないだろうが・・・・！
これは企業だから　省庁だからってことじゃなく
個人でもそうなのだ　大人は質問に答えたりしない
それが基本だ　お前たちはその基本をはきちがえているから
今朽ち果てて　2年の最下位にいるのだ
無論中には　答える大人もいる
しかし　それは答える側にとって
都合のいい内容だからそうしているのであって
そんなものを信用するってことは
つまりのせられているってことだ
なぜそれがわからない・・・・？
なぜ・・・・　そのことに気付かない・・・・・？」

ざわ・・・・
　ざわ・・・・

クッソー！突っ込みてぇー！
どんだけ自由なんだよ！
ってか完全にこっち側だろ、あの先生！！

「無駄話はここまでだ。泣き言をいう暇があれば勉強しろ。お前らみんなやれば出来るんだから。俺はそんなお前らを愛してる。
じゃあ昨日渡したプリントでも出して。忘れた人は予備の分も刷ってあるから死ね。じゃなくて取りに来て。さとみんとちゃおりん、ゆっきーは好きなことしといて」

「」

「ん？どうした、ザジ」

え？今こいつ何か喋ってたか？
ってか完全にノーモーションだったよな！？
あんたはこのピエロから何を感じ取ったんだよ！！

「」

「いや、それは『完全な』で合ってる。ちょｗｗｗウムラウトは英語だからいらないｗｗｗ」

会話が……成立してる……。

「」

「あ、ホント？じゃあさよっぺといっしょにやっといて。だからドイツ語じゃなくてｗｗｗじゃなくてｗｗｗｗ」

「ハイ」

しゃ、喋ったぁぁあああああ！！！！！！
どんな内容だったんだ！？
耳打ちとか全然してなかったし表情の変化も全く無かったよな！？
そこから何を感じ取ったんだ！？
いいんちょも『あらあら』みたいな顔してやがる！？
何でだよ！？
お前らいったいピエロの何を知ってるってんだよ！！
ってかさよっぺって誰なんだよ！！

「あ、そうそう、ちうたん」

「ひっ！？な、何だよ？」

先生が耳に顔を近づけてくる。

ってかちうたんって呼ぶなよ。心臓に悪ぃ。

「ちうのホームページの『りんりん』って俺な」

は？何を言って……？

……………………

ど、どひぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃいいいいいいい！！！！

「ど、どどどうし、どどどうして！？」

「次のテストの結果、りんりん超楽しみ☆」

「は、はは、はははは……」

終わった……

今日の俺は修羅波麟です。

愛ゆえにテストでいい点をとってほしい。愛ゆえに修羅にもなる。

そんな気持ち。

「エヴァァぁ」

「ふふっｗｗｗお兄ちゃんｗｗｗｗｗあれはダメだよｗｗｗｗｗｗ」

「ものすごい取り組みっぷりですｗｗｗｗｗちうたんｗｗｗｗｗｗ」

「ブフゥｗｗｗやめてｗｗｗｗ」

「さあ、エヴァも頑張れよ」

「任せてよ！お兄ちゃん！！」

「ファイト！」

エヴァも家で勉強をしてる。

曰く、「お兄ちゃんが副担任なんだもん。下手な成績は取れないよ！」と。

羨ましかろう。お前らにはやらん。

「先生、お嬢様は……」

桜咲・せっちゃん。このちゃんをお嬢様と呼び付回す、親、祖父公認のストーカー。

マジ怖い。

「無事だ。とじじいが言ってた。お前がクソみたいな点数取ったら京都に送り返してみようか？」

「クッ！あれ！？」

「お探しのものはこいつか？」

何抜こうとしてんのよ。怖いわね！

「返せ！」

「うるせぇ！俺を切るより勉強したほうが有意義ってわかんないかな。あんたもウルトラバカ。はいこれ。いらないから返すね」

「覚えていろ！」

何で棒切れ返してあげたら恨み言言われなきゃなんねぇんだよ。お前がバカなのは俺のせいじゃないっつの。

「やっぱやーめた」

は？みたいな顔してやがるな。フヒヒｗｗｗ

「お前がクソみたいな点取ったらこのちゃんの前でリストカットしよっと！」

などとニヤニヤしながら言う。

「下衆が……！！」

「じゃ、勉強がんばってね☆」

「ふん」

あららｗｗｗ

「っと、あと１０分か……。じゃあ一旦しまってー。ひとまず小テストなんぞ作ったからコレをやってみようか」

そう言ってプリントを配る。

「じゃあ適当に初めてー。制限時間は５分。フォイ！」

困惑しながらも始める一同。そういうとこ、好きよ。

「終わった？じゃあ５分間好きなことしててていいよ」

回収して物凄い速度で採点を始める。

うん、恐らくは全員多少なりともレベルアップしてるようだ。

「ん？何だよそんなに見て」

「先生……すっごい仕事速いね……」

「天才だからな。ほい採点終わった。ちなみにこのテスト、４点以下の奴はちょっと死ぬ覚悟しといたほうがいいかな。４点以上の奴は自惚れるな。１０点満点だ。じゃあ置いとくから勝手に持って帰って。今日の英語はここまで。授業もこれで最後だから勝手に帰っていいよ。号令はいらん。じゃあお疲れ～」

ちなみに４点以下はいなかったよ。

０３１　世界最速、授業をする。（後書き）

テストまであと2日
がんばれみんな！
勉強なんかできなくったって何とでもなる！

０３２　世界最速、勉強会を開く。（前書き）

世界最速、食事会を開いた。
そんな感じ。

０３２　世界最速、勉強会を開く。

授業を終えたし職員室に戻るバックトゥザ白波（直訳：白波に帰る）です。

教室を出たら、ちうたんにつかまった。

「ちょ、先生！」

「あら、どうしたのかしら？」

「カマ言葉に躊躇いがねぇな。じゃなくて、い、いつ知りやがった！誰が知ってる！！」

「ん？なぁにが？」

おや？ちうたんの様子が……

おい、Ｂ連打しとけｗｗｗまだ進化させる訳にはいかぬぅ！！

「ぅの……ページ」

「え？何？聞こえない」

「ちうのホームページだよぉ」

涙目いただきましたーあーりゃっす！

んでゅえあばぼ！！

殴られちゃった☆

「クソッ、なんで、うぐ、しってやがる、ぅぅ、言うなよな。ぜっ……、ぜったいあいつらに、言うなよな……」

「ちょ！マジ泣きもらっちゃったじぇ！落ち着いてちうたん！言わないから！言わないから！」

「ほ、ほんとぉか？」

「う・そ？」

「ぇ、ぅ、ふぇ……」

「あああいやいや、冗談！ホント！ホントいわなる！ドMの俺にドSのような事をさせようと世界の意思がどうたら」

「や、約束だからな！言ったら、……ひ、ひどいことするからな！」

なんだろう、これは言った方がいいんだろうか。
ひどいことをされてみたい。

「参考までに聞くけど、そんなひどいことすんの？」

「え？……あ」

「俺のオススメなんだけど、樫の棒で俺のケツを叩きまわすとかどう？どやさ？」

そういって木刀（お土産仕様）をポケットから出す。

「……何期待してやがんだよ。……そんなことされたら……ホーム

ページを閉じる」

「どひぃいいいい！我ら兄妹の数少ない楽しみがぁあああ」

「え？ちょっと待て、兄妹ってもしかして……」

その瞬間、ちうたんの後ろにスポットライトが照らされる。

「『福音』とは私の事だ。長谷川千雨」

「なっ！マクダウェル！？」

「私も貴様のホームページは楽しみにしているからな。閉じられるのは困る」

「へ？」

「私もいますよ！」

「あんたは絡繰！？」

ちうたんを中心に正三角形が出来上がった。

「……何だコレ」

ごめん、ちうたん。俺にもわかんない……。

「ま、まあ何だ、その、言わねぇってんなら、テストもがんばるさ。ファンの期待には答えてやらないとな」

で、デレた！！
おい茶々丸！
目配せをすると茶々丸の方もまかってますと言わんばかりにカシャカシャ言ってる。
後で焼き増しな。

「お兄ちゃん、にやけてるよ？」

「フヒヒｗｗｗいつもにやけてるさ。そういうエヴァだって」

「ふふふ」

「な、何だこの兄妹……」

「慣れれば快適ですよ」

「お前は何を悟ったんだよ」

「あ、そうそうちうたん」

「ちうたんって呼ぶんじゃねぇ。何だよ」

「明日と明後日、１１：００から教室で勉強会するから。自由参加だけど同級生見かけたら声かけて？」

「なんで私が……」

「おねがぁい？」

「クッ、わかったよ！」

～勉強会～

教室に入ると異様な熱気が飛び交っている。

まさか全員来るとは。

「来てくれたんだな、ちうたん」

「私が言って回ったのに私が来ないのはおかしいだろ」

「言って回ってくれたんだ。ありがとー？」

「ま、回ってねーよ！」

赤くなっちゃって、かーわいー！

「ネギ先生をクビになどさせませんわ！　皆さん、しっかり勉強するんですのよ！」

「私別に今さら勉強なんかしなくても問題無いネ」

「帰って研究したいんですが」

「だまらっしゃい！私たちは皆さんに勉強を教える役目ですわ！皆さんも、粉骨砕身、ネギ先生のために頑張っていただきますからね！」

「いいんちょ、いつになく燃えてるなぁ」

「よし、全員いるな。自由参加なのに元気なこった！俺が貴様等を見る限り、貴様等、絶対最下位になれるなどと思うなよ！泣いたり笑ったりできなくしてやる！」

「勿論ですわ、麟先生！」

「いい返事だな！ネギが帰ってきたらファックしていいぞ！では新たなプリントだ！わからない事があったら頼めるか？」

「はい、先生！私と超さんと葉加瀬さん、のどかさんで教えて回りますわ」

「いい返事だ！しかしそれ以外のときはお前らも勉強をしておくといいんじゃないかな。では開始！
そして俺は席を外すがしばらくしたら戻ってくる！あまり動き回るなよ」

～一時間後～

「やっとるかね～」

「せんせー、お腹すいたー」

「すいたですー」

双子が手を上げて主張してる。

「せんせーそう言うだろうと思っておひるごはん作ってきたんだ。ほれ、みんなの分」

そう言うとメイド服に着替えた茶々丸が台車を押して入ってくる。台車の上にはカポターナ、リゾット、ピザ、スパゲティなどのイタリア料理の定番が！
しっかり人数分の取り皿まで用意してある徹底っぷりだ！

「わぁー、これ全部先生が！？」

「当たり前だろ。俺は世界最強だぞ！」

「せんせーすごーい！」

「はっはっは。じゃあ焦らずゆっくりと迅速に良く噛んでさっさと時間をかけて食え」

「先生無茶苦茶ー」

「当然だろ。世界最強だからな！」

いただきまーす！と号令して食事を始める。
頭を使って腹がへったか。そうかそうか。どうでもいいわ。

――とてもおいしいです――

「ありがとう　ございます　　―　＾ｏ＾　―　　さっちゃんにそう言ってもらえるなら白波家は安泰だな」

「いやホント、大したもんネ」

「ええ。うちのシェフにも劣りませんわ」

「ふはは。そうだろう！お兄ちゃんは天才だからな！」

「エヴァちゃん、麟先生大好きだもんね」

「いいなー。私も麟くんみたいなお兄ちゃんいたらなー」

「逆に麟先生の妹になれば……」

「「それだ！」」

「ふん、妹枠はもう私のものだ。貴様らにはやらん」

「えー、エヴァちゃんずるーい！」

「ずるくない。ちなみに今開いてる枠は恋人、親、姉、妻、妾、娘、その他妹以外だ。妹はどうあってもやらん」

「まるで俺が甲斐性の塊みたいになっちゃってるじゃないか、エヴ

ァ」

「でも普通お兄ちゃんとキスなんかしないよね？」

「え？私お父さんとキスするよ？」

「あんただけだよーゆーなー！」

「お父さんがいいなら私は何だって……」

「ぎゃー！！」

おいてけぼ麟。

みんな自由に盛り上がってくれてるみたいで何より。

スローフードは体にいいしな。

「あまり腹いっぱい食いすぎると眠くなるからなー。寝たら死ぬぞ。

ってか俺が頃す」

「「「「ごちそーさまでしたー」」」」

「うむ。ちなみにデザートもある」

「よしきたー！」

「ねえエヴァちゃん、本当に麟せんせーちょうだい！」

「ぶっ飛ばすぞ！」

「んおいしー！アイスクリーム？」

「これはジェラートですわね」

「さすがいいんちょ！」

「作り方教えてー！」

「テストが終わってお前らが生き残ってたらまた作ってやるし作り方も教えてやる」

「よっしゃー頑張るぜー！」

「「「おぉー！！」」」

「麟先生」

「何だたつみん」

「あんみつは作れないのかい？」

「日本の食べ物は茶々丸の仕事」

「そうか。……うん、うまい」

～16：00～

「じゃあいい時間だから今日はこれまでな。明日も11:00からだ。
家帰って勉強すればいいが徹夜はするなよ。やるなら早起きしてやれ。いいな」

「「「ありがとうございましたー！」」」

「号令はいらないって言ったのに！！」

走って教室を飛び出した。

ちなみに号令がいらない理由は特に無い。

「お兄ちゃん、お疲れ様」

「まあ好きでやってるんだけどな。ちょっと前まで最下位だったクラスが一位取ってみろよ。笑えるぞｗｗｗ」

「お兄ちゃんが教えてるんだもん、取れるよ！」

「まあ精々明日も頑張るさ」

「マスター、麟様、夕食の用意ができました」

「うむ、ご苦労」

今日はとってもなんとかかんとか。
あしたはもっとどうたらこうたら。
ねっ、バハムート！

０３２　世界最速、勉強会を開く。（後書き）

―　＾ｏ＾　―　＜　オレンジジュース　おいしいです

それは　オリーブオイル　です　＞　―　　―

紅の豚野郎です。

今日は洋食に強い麟の話です。
あとちうたんにメキメキフラグを立てたい。

２０．２１．２２日あたりに出かける用事が出来たしまったので恐らくこの三日は更新できないものと思われます。
全国２億人の読んでくださっている皆様には申し訳ない限りです。
すいません、調子乗りました。
クオリティなんぞ端から無いようなもんなので更新速度が強みだったのに３日も開けるなんて！あたいのバカ！

では今回もありがとうございました。

０３３　世界最速、勉強会を終える。（前書き）

第一話「書き間違いがあった、ような・・・・・」
嘘です。
食事会その２

０３３　世界最速、勉強会を終える。

はいはーい、よしこーい。
白波１１：００だよ。
ドーン！！

「今日もみんな来てるなー。はいプリント。全教科分あるから。んじゃ昨日と同じ感じで。俺はメシ作ってくる」

――あ、手伝います――

「ダーメ☆今は勉強に集中してね。今度また食べに行くから」

――はい。あの、頑張ってください！――

「お互いな」

言ったらさっさと出て行っちまった。
私のプリントは１５枚ほどだけど、ロボのプリントは５０枚ほどある。
どーなてんだ？
……ＪａｖａＳｃｒｉｐｔ？

「麟先生は凄いねー」

「まさか全教科分もプリントを作ってこられるとは……」

「いいんちょちょっと見せてー。わーホントに全員違う内容だ」

マジかよ……麟先生の睡眠時間とかどうなってんだ？

「当然だろ。普段全く努力をしないお兄ちゃんが珍しく努力して作ったんだからな。ありがたく勉強しろよ」

「いや、普段全く努力しないってどうなんだ？」

「努力なんて必要ないほどの天才だからな。私の知る限り、バイクと料理以外に努力したのは教師になることくらいだ」

はぁー、いるもんなんだな、天才ってのも。

でもバイクって何なんだ？

「麟先生って、せんせーやる前はレーサーだったんだよね」

「うちのお父さんが昔、麟さんがレースやってた時に取材してね。世界一になった瞬間にレース辞めたってさ」

思ったよりずっとすげえじゃねぇか！？

何で教師なんかやってんだ？

「わぁー、かっこいい！」

「で、その直後教師になるために勉強を始めたんだ。私のためにな

！」

「わーシスコン！」

マクダウェルのために、なぁ……。

別に羨ましくなんてないが……いや、少しくらい羨ましいかな。

「ほらほら、始めますわよ」

さて、たまには勉強もしてやるかな。

「おいすー！みんなやっちょるばってん！ってどこの方言やねんな。

っつーわけでご飯出来たわよー。

今日はマズイと評判のイギリス料理の中でも割と美味い部類の代物を用意したから安心して食べて欲しい」

「わーい！」

今日の献立はローストビーフ、ヨークシャープティング、ジャケットポテト。食後にアッサムの紅茶とトライフルを。

「高級レストランみたいー」

「うなぎゼリーは？」

「死人が出るから作ってない。ってか作りたくない。そんな時間も

無い」

「思ったよりおいしー」

「UKに旅行行ってもがっかりするなよ」

「UK？」

「United Kingdom of Great Britain and Northern Irelandの略でイギリスと呼ばれるのがこれだ。
ちなみに、イギリスという国はイングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドの四国で主に成り立ってる。
ネギ先生の祖国、ウェールズは南西の方にある」

「へぇー、先生詳しいんだね」

「俺は天才だからな！」
「お兄ちゃんは天才だからな！」
「麟様は天才ですので」

「な、なんという！！なんという溢れ出る自信！！」

「これが世界一の風格というのか！？」

「ありがたやー」

「ありがたがってないでさっさと食え。アフタヌーンティーも用意してあるぞ」

「これがいいんちょの普段の生活かー」

「イギリス料理なんて、ネギ先生がいらっしゃるまで全く食べたことがございませんでしたわ」

「まあ好き好んで食う裕福層はいねぇだろうな」

「へぇー」

「「「ごちそーさまでしたー」」」

「はい、お粗末さん。今紅茶入れてるからな。はい、デザートにトライフル」

「わー、なにこれー。プリン？」

「ケーキ？」

「まあそんなもんだ。ほら、全員分入ったぞ」

「すごい手際ですね」

「天才だからな。
落ち着いて飲め。集中力が捗るぞ。ミルクと砂糖は置いてある。
コーヒーも一応用意してあるから言ってくれれば入れる」

「しかしはたしていいんちょの合格点をもらえるレベルの紅茶か！

？」

「これは……アッサム産の、ファインティッピーゴールデンフラワリーオレンジペコーですわね」

「流石はゆっきー、お目が高い……」

「なんかわかんないけどすごそう！」

「ゆっくりのんどこ……そんなおいしくないー」

「ミルクを入れるとよろしいですわ。しかし麟先生……いったいどこでこれを？」

「ひ・み・つ」

「そんなすごいもんなの、いいんちょ？」

「１０ｇ６０００円、あるいはそれ以上しますわ。それにお金を出せば買える類のものでも無い。これをこの人数分用意するとなると……」

「じゅ、１０グラムろく千円！？」

「ヤバイ薬とかじゃないよね！？」

「満足してもらえれば何よりだ。では３０分後より授業を始める。それまでゆっくりしとけ」

「はーい！」

俺もタバコ吸いに出るかな。

「っふー」

「なあ先生」

「ん？ちうたんか」

「うわっ、タバコ吸ってんのかよ！」

「大人だから。だいじょび。で、どしたん？」

「いや、どうしてそこまでしてくれんのかと思ってな。普通はしないだろ。他の教師にもバレたらまずいんじゃねえか？」

「いやいや、全く。じじいを脅せば済む話だし。それに見てみたいじゃねえか。うちにあのクソ気色悪いトロフィー置かれてる景色を」

「そんな事のために？ってか学園長を脅すって……」

「そうそう。そんな事のために。あとはエヴァとかかずみんとかちうたんとか、ガキの笑顔見たさか。ちうたん全然笑ってくれないよな」

「私の笑顔は安くないんだよ」

「モニター越しならあんな笑顔なのに」

「っせえ」

「あ、笑った！」

「わ、笑ってねえよ」

「笑いましたしおすしー！俺の脳内に永久保存な」

「ちょ、やめろよ」

「やーめーなーいーｗｗｗ」

「クソ、私は戻るからな！」

「やぁん、怒んないでよお？」

「アレは４０のおっさん、アレは４０のおっさん……」

「ひでえｗｗｗｗ」

俺も戻るか。

「よしクソども！明日から実演に入るが、しっかり休養をとり、明朝より復習すること！徹夜は俺が許さん！貴様等カスどもがやってきた事が無駄じゃないことを証明してみろ！全員２－Ａに食券１００枚かけろ！」

「「「はい、先生！」」」

「いい返事だ！貴様等クソどもは明日からのテストによってクソを卒業する！いっぱしの中学生を名乗りたいなら結果を上げろ！」

「「「はい、先生！」」」

「じゃ明日がんばってね。りんちゃん応援してるから？じゃあ解散！号令はいらん！」

「せんせーさよならー」

「ごはんおいしかったよー」

「テストがんばるね」

「おおそうか、そうしなさい」

「お兄ちゃん、帰ろ」

「おおそうか、そうしなさい」

エヴァと帰りましたが、
茶々丸にもバイクを買ってあげようとおもいました。

０３３　世界最速、勉強会を終える。（後書き）

「おおそうか、そうしなさい」
マザー２のヒーラーです。
次はいよいよテストですね。わくオラオラしてきたぞ！

では、今回もありがとうございました。
追記
紅茶のことなんて何も知りません。
コーヒーの事なら少しは……知りません。

０３４　世界最速の妹、拗ねる。（前書き）

本当はテストの結果発表だけで一話出来てたんだけど、完全にアップロードした気になってて間違って消しちゃったから適当に纏めました。
悔しいです！

０３４　世界最速の妹、拗ねる。

おはりん。

今日は結果発表だぴょん。

「みんな頑張ったから当日来てなかった８人を除いた平均点が９２点だ。やるじゃん。バカレンジャーが多少惨めな点取ろうが１位は確定ですね」

「せんせー、そのバカレンジャーは？」

「ネギ先生もろとも、昇降口のモニターで結果発表待ってるとさ。まあ今日の朝礼は自由参加だからな」

「それでも担任の先生が来ないってどうなんだ？」

「ほれほれ、お前らも気になってるだろ。好きに見て来い。じゃあ今日は解散な。おつかれー」

『おぉっと、今回はすごい事になってるぞ！これは……第一位！２－Ａ、平均点なんと８７．３だぁ！！万年最下位なのは牙を隠していたのか！！』

おぉぉおおお！！

「１００枚賭けてた食券が４５０枚に！！！」

「すげぇよ、麟先生！！」

「うっ、ぐすっ、やったな！」

「ほらほら、泣くなよ」

「超りん何点だったの？」

「私もハカセも全教科満点ネ」

「お、お二方から後光が！！」

「明日は『学年トップおめでとうパーティー』だね！」

「おー、そりゃいいねぇ！」

「俺９００枚も食券入ってきたからあした皆で使おうぜ」

「いぇぇえええ！！」

今日は帰ったら和食が食いたいなぁ。

「おはようございます！えーと……長谷川さん！」

ん？

「んー？２－Ａでも特に目立たない方の千雨ちゃんまで覚えてるなんて、教師の鑑っ」

「いえ、あの……」

ムカつく。

ってか遅刻でもないのに何元気に走ってるんだ、あいつら。ガキ……。

ん？随分騒がしいな。バイク？

何だアレ、あんなバイク映画でしかみねぇぞ……って麟先生か。

髪長ぇし背低いからすぐ気付くな。

うわっ、でっけぇ音……って、すげぇー！

アレ何て言うんだ？後ろタイヤ上げてターンしやがった。たしか、ジャック……何だ？

ってこっち向かって手振ってやがる。

「ちうたーん！乗ってくー？」

「乗ってかねぇよ！声かけんな恥ずかしい！」

「あっそう」

そう言やレーサーだったんだな。忘れてたわ。

うわ、前上げっぱなしで走っていきやがった……。

今日も麻帆良は非常識だな。

「フォフォフォ、皆にも一応紹介しておこう――
新年度から正式に本校の英語科教員となるネギ・スプリングフィールド先生じゃ」

なっ……何ぃ～～～～！！

「そして先月より正式に英語科教員として働いてくれておる白波・A・R・麟先生じゃ」

「ベイベベイベ、ベェイベェーーー！！！」

べ、べいべー……

「本日をもって貴様らはウジ虫を卒業する

本日から貴様らは立派な中学生である

姉妹の絆に結ばれる

貴様らのくたばるその日まで

どこにいようと2－Aは貴様らの姉妹だ

多くはエスカレーターで高校へ向かう

ある者は二度と戻らない

だが肝に銘じておけ

2年は進級する

進級するために我々は存在する

だが2－Aは永遠である

つまり――貴様らも永遠である！」

「「「Ｓｉｒ，Ｙｅｓ　Ｓｉｒ！」」」

なんだよ、この軍曹みたいな挨拶は……。

で、こいつらも随分ノリがいいな。

どこで練習したんだ。

「じゃあネギ先生、あとは頼んだ」

「は、はい……

では2－Aの皆さん！3年になってからもよろしくおねがいしまーす！！」

「よろしくー、ネギ先生！」

「ほら、見て見てー！学年トップのトロフィー！」

「みんなみんなネギ先生のおかげだねー！」

んなわきゃねぇだろ！
全部麟先生ががんばったからだろうが！！

バン！
と、後ろで机を叩く音がした。
……マクダウェル？

「行くぞ、茶々丸」

「はい、マスター」

「エヴァやーい、俺も行くぜー」

「り、麟先生も！？」

ま、そりゃ怒るわな。
私だってけっこうギリギリだったし。

「ど、どしたアルか？」

「ああ、バカレンジャーは知らないんだね。みんながいなかった間に麟先生、全員違う内容で、全教科分のプリントつくって勉強教えてくれてたんだよ。
で、エヴァちゃんもすごくうれしそうだったし、それにすごいブラコンだからさ……」

「そ、そうだったの……」

「知らないんだから仕方ありませんわ。それに、今こうしてネギ先

生が働けるのも、ネギ先生はもちろん、麟先生のおかげでもあるのですから」

「でもすこし軽率だったよ。今度ちゃんと謝らないと……」

「僕も麟先生にちゃんとお礼言わないと」

「ま、そりゃ怒るわな」

「ちょ、ちょっと長谷川……」

「そのトロフィー、きっとマクダウェルが一番……いや、いい。私も帰るわ」

「長谷川さん！」

ちょっと頭冷やさないとな……。

ん？ありゃマクダウェルとロボと麟先生か？

「うぅ、お兄ちゃんが、一番、グスッ、がんばったのにぃ……」

「んなことねぇよ。俺は天才だぞ？頑張る必要なんかないんだ」

「麟様、マスター……」

「あいつ等誰のおかげで……グスッ、ぅぅ、一番になれたか、わかってない」

「みんな頑張ったから一番になったんだよ。勿論エヴァも茶々丸もな。
俺まだ仕事残ってるからもう少し学校居るけど二人で帰れるか？何だったら早退するけど」

「ん、大丈夫だよ、お兄ちゃん。茶々丸と帰るから。頑張ってね」

……まるでデバガメじゃねぇか……。

行こ……。

エヴァも帰れるって言ってたし、少し心配だけど

「おーい、何葬式みたいになってんだよ。せっかくのナンバーワンだぜ？」

「り、麟先生！エヴァちゃんは！？」

「あ？体調悪くなったから帰るってさ。昔から日光に弱くてな」

「そうなんだ……」

「ほら、景気の悪い話はここまでだ。なんとかパーティーするんだろ？早くいこうず！」

「いこうずー！」

「そ、その、麟先生！」

「何だ、ネギ先生？」

「その、僕がいない間、ありがとうございました」

「お前一人のクラスじゃないだろ。気負うな」

「は、はい！」

あークッソー、イライラするぜ！！

何なんだよあのガキはよぉ！

実際何にもしてないのにいつの間にか担任になってやがるしよー！！

だいたいアイツテストの成績に何にも関係してねえじゃねえか！

その間ずっと麟先生が勉強教えてくれてたっつーの。

それが何であのガキのおかげになってんだよ！！

だいたい１０歳の担任って何なんだよ！！

性格はそれなりにまとも……じゃない、外見が１０歳程度なのに実年齢４０の麟先生も意味わかんねえけどよ！

しかもクラスの奴らは全員不思議にも思ってないなんて、クッソー！
私がおかしいのかよ！！

私は苛立つ心でパソコンの電源を押す。

――テレレレーレー――

ＯＳはＷｉｎｄｏｗｓ２０００、ＣＰＵはＰｅｎｔｉｕｍ４　Ｗｉｌｌａｍｅｔｔｅの２ＧＨｚでメモリはＤＤＲで５１２ＭＢ、更にＨＤＤも８０ＧＢは乗せてある自慢のパソコンを起動して、すぐにインターネットで私のホームページに繋ぐ。

ちう　＞　おハロー（・▽・）ｑみんな元気ー！？
ちう　＞　今日はと～っても嫌なことがあったよん（＜　＞）ｉ
ちう　＞　うちのクラスの担任が変態でー！！ちうに色目を使ってくるんだよう
ちうファンＨＩＲＯ　＞　許せねぇ！何だその男？！
福音　＞　下種が、明日の朝日が拝めると思うなよ
通りすがりＢ　＞　俺らがブチのめしてやろうか、ちうたん。（ｗ
アイスワールド　＞　でも気持ちはわかるよな～。ちうたん美人だし～。
リンリン　＞　おれの怒りが有頂天になった仏の顔を三度までという名セリフを知らないのかよ。リアルだったら時既に時間切れ
ちうファンＨＩＲＯ　＞　→＾＾；

ふふふ、全ては私の思い通り……。

撮影、修正、アップロードで跪くこと請け合いだ！

ってかコイツら（福音、リンリン）何やってんだ……。

ガチャ

「失礼しまーす」

「あ、あんた……どうやって!?」

「あ、すいません、鍵が開いてたもので」

鼻歌を鼻ずさんでる白波・ｏｆ・リンリン・サーフェイサー（下地塗装）です。

機嫌を直したエヴァといっしょにお気に入りのネットアイドル、ちうたん（）のチャットに返信してから打ち上げ?か何かの会場近くまで転移。

「ちょ、ホントやめろよ先生!」

「ん?ちうたんじゃん。何やってんの?野外露出的な?」

みるとフワッフワなバニースーツを着たちうたんがネギを追っかけてる。

「ぶっ飛ばすぞクソガキ!!そうじゃなくてネギ先生にこの格好で連れてかれてるとこなんだよ!おい、メガネ返せよ先生!」

「ふん。まあ止まれ、ネギ先生。そしてそのメガネを置いて頭を後ろ手に組み伏せるんだ。次は懺悔をしろ。今までの行いを悔い、来世に期待するんだな。市ね」

「なんだ、麟先生じゃないですか。ちょっと手伝ってくださいよ」

「素無視か。で、何を？」

「千雨さんが、こんなかわいい服着てるのにみなさんの所には行きたくないって。だから一緒に連れて行ってくださいよ」

「それも楽しそうっちゃ楽しそうなんだけどさぁ、断る」

「何でですか？せっかくこんなかわいい服着てるのに。みなさんに見てもらえないなんて勿体無いですよ」

「お前勿体無いって言いたいだけだろ、外人。あとネギ先生のそれは、親切じゃねえんだ」

「そんな、親切だなんてつもりは……。僕は千雨さんの事を思って……」

「まあ聞け。例えばな、俺は『人を思いっきり殴るのがとても親切で真摯な挨拶』の国から来たんだよ」

「え？どういうこぽげるめられーッ！」

「ちょ！！」

振りかぶらず、本当に弱い力でネギを殴る。

このままッ！！親指を！こいつの！目の中に……つっこんで！
殴りぬけても良かったんだけど、さすがにやり過ぎるのもよくないからね。
やっぱ親切で真摯だわ。

「な、何をするんですか！？痛いじゃないですか！」

涙目でこっちを見てくる。ふひっｗｗｗ

「挨拶だよ、挨拶！！ネギ先生のことを思った、親切で真摯な。」

「そ、そんな挨拶なんて聞いたことありません」

「（そりゃそうだろ。俺も聞いたことねえよ。）いいか、ネギ先生。お前が良かれと思ってやってる事が全ての人間に対して正しい事だと思ってんなら、死ね。
じゃなくて、『俺の』親切で真摯な挨拶が、『お前にとっても』親切で真摯だったんなら、俺からは何も言う事はねえ。いや、やっぱあるわ。このドMが！！
そう思わなかったんならな、お前がちうたんにやった事は俺がお前にやった事と同じことなんだよ」

これを聞いたネギがぁ！！
こちらを睨みぃ！！
しかし立ち上がらない！！

「じゃあ、じゃあ麟さんは、千雨さんがみんなと分かり合えなくても、それが千雨さんの幸せだって言うんですか！？」

「えー、そのー、あーごめん、ちょっと何言ってるかわかんないわ」

「ですから！」

「あのな、……幸せって何？」

「え？」

「だから。え？何で？何でみんなといないと幸せになれないの？てか幸せって何なの？振り向かない事？躊躇わない事？」

「何を言ってるんですか？」

「ちうたんの「ちうたんって呼ぶな」幸せとお前の幸せが一緒だと思うなよ。
皆を幸せにしてあげるのが僕の幸せですって感じのその態度はホント立派。３ＳＰ（白波ポイント）あげる。１０ＳＰでうまいＢＯＷが１００本だからとっとけよ。
でも、今のお前はまさに『皆を幸せにした気になるのが僕の幸せ』状態なわけだろ？
そうするとさ、ホント、『そっとしておいてあげようよ』レベルの偽善のほうが一億倍ありがたいわけよ」

「そんな……僕はそんなつもりじゃ」

「わかってんだよんな事。だからこれから勉強していくんだろうが。間違ったってやりなおせるんだろうが。ホラ、立てよ」

ネギに手を差し出してやる。
そしてその手を掴み立ち上がった。

「麟さん……。はい！じゃあ千雨さんも行きまスポリレルヌロロ！！！」

「死ね！！！」

そりゃ殴るだろ。ホント何聞いてたの？

さすが天才は違うわ。超天才の俺にも理解できない。

「おいおい、麟先生……」

「アイツは駄目だわ。すっげぇ馬鹿だ。いたよね、昔から。勉強はできるのに最っ高に馬鹿な奴。知識は知性と違う。アイツまさにそれだよ」

「けっこう容赦ねぇんだな」

「そりゃな。ネギ先生のクラスではあるけど、俺のクラスでもある。それに生徒ありきの教室だ。誰かが嫌な思いをしなきゃいけないんならそれは俺たち教師がするべきなんだよ。それを１０歳だからなんて理由で生徒に押し付けていい道理なんてねぇよ」

「ちょっと良いこというじゃねぇか」

「深良い～。気が向いたら着替えて来いよ。着替えなくてもいいけど」

「ま、考えとくよ」

俺はネギ先生を引き摺って行った。

妙にあすにゃんが絡んできてウザい。

お前だってショタコンじゃねえか。

「ほらよ、食券大散財じゃぁ！！」

「麟先生男前ー！」

「天才だからな！」

「あはは、麟先生かわいー！」

「あ、千雨ちゃんだ！」

「長谷川さん！」

「……やれやれ」

「白波のココ、開いてますよ」

「あれ？僕は何を……夢？」

「おお、起きたか、ネギ先生。急に眠ったからどうしようかと思ったよ」

「あ、そうだったんですか？すいません……」

何謝ってんだコイツ。

～いえ！～

「今日ちうたんと話した」

「えー、いいなー」

「じゃあなんとかぱーちー出れば良かったじゃん。そもそもエヴァ学校で話せんじゃん」

「あんなアホガキの群れに飛び込むような真似したくないよ。私はまだあいつ等を許した訳じゃないし。
それに学校では話しかけられたくないオーラ出てるんだもん」

「そのオーラ気のせいだって。じゃあさ、どうせだからこっちに引きずり込めばよくね？認識阻害も効いてないみたいだし、シラナミの方が安全だろ」

「なるほど、さすがお兄ちゃん！！天才！大好き！！」

「「へっへっへ」」

「姉さん姉さん、レズレズに見えなくもないですよ！」

「オマエモ高性能ニナルタビニ、バカッポクナルナ。妹ヨ」

０３４　世界最速の妹、拗ねる。（後書き）

麟の乗ってたバイクはＮＳＲ－８０（二人乗り仕様）です。
ちうたんはフルカウルのバイクなんてそうそう見ないタイプの子です。
逆にフルカウルのバイクを頻繁に見る女子中学生って何なんだ？

ああ、消しちゃったぜ。紅の豚野郎です。
俺のバカ……。
次回は茶々丸にバイクを買ってあげる話になる！といいなぁ。

では、今回もありがとうございました。

０３５　世界最速の妹の従者、バイクをもらう。（前書き）

オレンジカウンティチョッパーズで検索だ！
ってか自分で書いておきながら、申し訳ない話、本当に面白くない。
今回。

０３５　世界最速の妹の従者、バイクをもらう。

「ｎｏ　ｐｒｏｂｌｅｍ．ｏｋ，ｏｋ．７０００$？」

「ＨＡＨＡ　ｆｕ○ｋ　ｎｉｃｅ　ｂｉｋｅ．　ｌｉｇｈｔ！ｓｅｅ　ｙａ」

ブツッ

「お兄ちゃん、誰と話してたの？」

「ああ、バイク屋。茶々丸のバイクが無いだろ？」

「なるほど」

「そんな、申し訳ないです……」

「遠慮しなさんなよ。知れてる値段だって。ねー」

「ねー」

「ケケケ、仲イイコッタ」

「なんだ、羨ましいのか。仕方ないな」

「オイオイ、ナンダヨ……」

「チャチャゼロにも買ってやるか、バイク」

「良かったですね、姉さん」

「イヤ、別ニイラネ「良かったなチャチャゼロ」ソウダナ御主人。ダカラ俺ノ腕ヲサッサト返シテクレ」

英語だって何とか話せるしらなみん。
ネギと話す時も他に誰も居なかったら普通に英語だぜ。

ちなみに、白波姓を持つのはこの世界では俺たちだけらしい。
大昔から『白波を名乗るな』という言い伝えがそこかしこに。
でも酒の名前にはなってんだよな。不思議！

「今日は趣向を変えてドライブにでも行くか」

「そうだね、お兄ちゃん」

「ええ、是非行きましょう」

「前の車、左に寄せて止まって下さーい」

「ｋｉｃｋ　ａｓｓ！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

「白波君、俺、来年で定年なんだよ……」

「死ぬほどどうでもいいわ！！」

「先輩も年ですからね」

懐かしの警官たちだ。

完全に使い捨てキャラだと思ってたのに……。

「久しぶりだな、貴様ら。相変わらず精を出して、今横通って行った原付、ノーヘルだったぞ」

「君も老けないね。どうなってんだい、この兄妹……そちらは？」

「絡繰茶々丸と申します。お見知りおきを」

「礼儀正しいね。……ロボット？」

「ガイノイドです」

エヴァと茶々丸に棒を渡し、三人でつつく。

「べりアル！！！痛、ちょ、やめてぇ！」

「貴様も変わらんな、後輩！」

「私は別に突付きたいわけではないのですが……」

「おいおい、そんな所まで相変わらずかい。今日はバイクは？」

「今日はドライブの日だから。山行ってくる」

「ふーん。気をつけてな」

「ＡＢＡＹＯ！」

「ふん」

「お仕事頑張ってください」

がけ崩れで道が塞がっていた。

「ＦＵ×××！！！！！！！！！！」

～３週間後～

ピッ

ジー……

―ＡＭＥＲＩＣＡＮ　ＣＨＯＰＰＥＲ―

「日本から注文が入ったんだ」

「誰？」

「イタリアかぶれのモトレーサーだって」

「タイヤの細いチョッパーがいいとさ」

「自転車くらい？」

「親父さんの横幅くらい」

「それは細いな」

「おい、何だこれ」

「ターミネーター見た？」

「見てない」

「いかしてるだろ？」

「リックの趣味はわからんな」

「おい、ホイールが届いたぞ」

――今までで一番大きいタンクだ。いや、２番目かな？とにかく大きい。これまでに無いタイプのチョッパーを作れってさ。フレームの下をくぐらせるタイプだからエンジンとの距離もネックだ――

「完璧だ。ＯＣＣのエンブレムも入れておこう」

――親父さんも重い腰を上げた――

「おい、フロントフェンダーをリアにつけるのか？」

「これはリアフェンダーでいいんだよ」

「未来的だな」

「ピッタリだ」

――シートにピッタリつくフェンダーの角度に苦労したよ。でもはまってみれば、これ以外はなかったね――

「タイヤはこれでいいのか？」

「メルセデスより太いぞ」

「俺より細いだろ」

「フェンダーの幅が合ってないな」

「それはフロントホイールだよ」

「いいな」

「完成だ」

「かっこいいな」

「色は？」

「機械らしくていいだろ」

「ガンメタリックだ」

「出来ましたか？」

「ああ、リンだな」

「モトレーサー？」

「始めまして」

「見てくれよ。できたてホヤホヤだ」

「これはかっこいいね」

「そうだろ？」

「俺、あんたをテレビで見た事あるぜ」

「黙ってろ」

――怒られちまった――

「じゃあ確かに渡したぜ」

「じゃあな、レーサー」

「はは、ありがとう」

ピッ、とビデオを止める。

「以上だ」

「何でしょう、これ」

「俺がバイクを頼んだときの話が編集されたんだよ。来月には放送されるらしいぞ。アメリカで。で、そのバイクがこれ」

「こんな素晴らしいものをもらっても良いんでしょうか？」

「そのためにお兄ちゃんがアメリカまで行って買ってきたんだから、ありがたくもらっておけ」

「ありがとう……ございます。大事にします」

「これどこのバイク？」

「Ｏｒａｎｇｅ　Ｃｏｕｎｔｙ　Ｃｈｏｐｐｅｒｓっていってな。ニューヨークにあるバイク工房だ」

「へぇー」

「長エナ」

「ホイールベースが２．５メートルあるからな」

「ちょっとまたがってみろ、茶々丸」

「はい。……どうでしょう」

「うむ、似合ってるぞ」

久々にやるか。

「チョッパーにのる茶々丸かわいい！」

「えっ」

「困ってチャチャゼロを見ちゃう茶々丸かわいい！」

「あ、あの」

「思わずあたふたする茶々丸かわいい！」

「は、恥ずかしいです」

「茶々丸かわいい！」

ドコドコドコドコ……

「では少し走ってみますね」

「ああ。行ってらっしゃい」

「はい」

ドドドドドドド……

「けっこう速いね」

「馬力はそれほどでもないけどトルクがあるからな。排気量もだいたい１６００ｃｃだ。Ｖ２なのに」

……ドドドドドドッドッドッドッドッド

「どうだ？」

「はい、楽しい……のでしょうか」

「よしこーい！行こうぜエヴァ！チャチャゼロは茶々丸の前にでも座ってろ」

「邪魔スルゼ、妹」

「はい、姉さん」

ＣＢ１３００　ボルドールを出してエヴァとまたがる。

「よし、じゃあゆっくり走るからついてこいよ」

「はい」

ドドドドドドドド

「どうだった、茶々丸。これからそいつで通学する事になるけど」

「えっ！？本当ですか？」

「エヴァもたまにバイクで通学してるだろ？本当なんだよなコレが」

「はい、乗りやすくていいバイクです」

「それは何よりだぜ！ヒャッハァー！！
移動購買部の度肝抜いてやるんだぜ！ノーヘル暴走族め！」

「ふふ」

「嬉シソウダナ」

「はい、姉さん」

「じゃあ帰ろうぜ！」

「うん！」

帰りに瀬流ピコ君に見つかったけど別に怒られなかった。
怒られるような事してないけどね。

０３５　世界最速の妹の従者、バイクをもらう。（後書き）

ＯＣＣ
１６００ｃｃ
Ｖ型２気筒
１２０ＰＳ／９５００ｒｐｍ
１０．５ｋｇｍ／８５００ｒｐｍ

ＯＣＣはディスカバリーチャンネルで放送されてる『アメリカンチョッパー』の舞台となっているバイク工房の名前です。
いつかはほしいですね。
ちなみにステータスは適当です。
作中では書かれてませんが、チャチャゼロにはポケバイを買ってあげました。

３０ｃｃ
５．０ＰＳ／８０００ｒｐｍ

あまり気に入ってないようです。

今回は特に描写が無かったなぁ。

ベリアル
チャンバーやサスペンションなどを作っている。
豚野郎は結構好きです。

では、次回もよろしくお願いします。

０３６　世界最速、取り持つ。

Ｙ２Ｋを２０００万円で買っちゃった……白波です……。
世界一速いなんて言われたらそりゃ買うだろ。
走る場所ないけど。
悔しいからＧＳＸ１３００Ｒ隼、通称ブサも買っちゃったぜ。
ぬっへっへｗｗｗｗ速い速いｗｗｗｗｗ

フロント上がりっぱｗｗｗｗ

麻帆良市内を超高速巡回中です。
法定速度と書いて徐行と読む！！
ぅわっほぅい！！！

ん？アレは……このちゃんや！

フォゥーンフォゥーンと近付いて
ジャックナイフで半回転
こいつが俺の、ルールだぜ……。

「へいこのちゃん！随分おされして、どないしたん？」

「びっくりしたー。麟先生かぁ」

あんまりびっくりしてないように見えるのは仕様なんだろうな。

「木乃香さまー！？」

「どこですかー！」

「黒服？」

「あっ、あかん！ウチ逃げな！」

「乗ってくかい？」

「ええん？乗せてー」

「はいヘルメット」

指輪をヘルメットに変える。俺はもうどこのメーカーのかもわかんないシステムメットかぶってるからいいんだよ。

「おおきに。どっから出したん？」

「バイク用品は常に心の中に。男ってのはそういうもんだぜ」

「そうなんやー」

アホだなぁー。

「着物やから跨りにくいと思うけど我慢してな」

「はーい」

「出すで。しっかり掴まっときや！」

ゆっくり発進する。

自転車ほどの速度で。
逆に難しいわ。

「あ、いたぞ！」

「危ないので降りてください！！」

「えへ☆見つかっちゃったっ？」

「もっと飛ばしてー」

太ももをぺしんぺしんしながら訴えかけてくる。
そら時速8キロなんかすぐ追いつくわな。

「えぇー。仕方ないなー。せーのっ」

パァァアアアン！！

「ひゃぁあああ！止めて！止めて！！」

「え？何？聞こえない」

スロットルを限界まで回して速度を上げていく。
とはいっても２００キロほどしか出さないから運転ミスもなし。見通しいいし。

そのまま世界樹前広場まで一気に走っていく。

「ふぅーい、おつかれー。このちゃん、ぱんつ丸見えやで」

よっこいと抱え降ろす。
着物の裾を整える。
ああ襦袢まではだけて。

「お、おおきに。死ぬかと思ったわー」

「うわぁあああああん！死んじゃやだぁぁあああ！！」

「わ！泣かんといてや。堪忍やで」

「泣いてへん泣いてへん。俺もう４０歳やで」

「あ、そーいえばそーやったなぁ」

「で、何で逃げてたん？がくえんちょが借金のカタに売ったん？」

「もう、ややわ」

ハンマーで叩かれた。誰にでもやってんのか。
アルティメットバイオレンスやな。

「そんなんやなくてな。お見合いの写真撮らされるとこやってんけど、途中で逃げてきてもうたんや」

「アーハン。富豪の娘も大変ネ」

「せやろ？ウチ、まだ子供やのに、将来のパートナー決めるなんて早すぎやと思わへん？」

「せやな（裏声）」

「こんなおじさんらパートナーにするんやったらウチ、麟先生がパートナーになってくれたほうがええなぁ」

「素敵じゃねーの？でも俺４０歳じゃねーの？充分おじさんじゃねーの？」

「そう言えばそうやったなぁ。ネギくんもおるからすっかり忘れてもーてたわ」

「あ、ガスの元栓閉めてたっけなぁ」

「なぁ、麟先生？先生はウチみたいな子供は好きじゃない？」

……？

俺こんなフラグ立ててたっけ？

っかしーなぁ。ちうたんにしかフラグは立ててなかったつもりだったんだけどなぁ。

ああ、からかってんのか。からかい返しちゃお。

「……お見合いがイヤなんやったら、逃げてきてもええねんぞ？こんな、合うたことも無い奴に取られんのは、悲しいやろ？」

「ちょ、先生？」

よっしゃ、顔も近づけてみよう。

「なぁ、いつでもこのちゃんの事を一番に考えてる奴がおるってのを忘れんといて欲しいねん。

どんな事があっても、何があっても、このちゃんを守るって誓って

んから」

「そんな、あかんって。うちら、先生と生徒やで……」

「なぁ、せっちゃん」

「ひゃわぁ！な、なんで気ぃ付いたん！？」

「せっちゃん！？」

居たのか。

流石だな、公式ストーカー。

「うわ、ホンマにおったんや。言うたら出てくるんちゃうやろか、思て言うたら……ホンマに出てきおった。随分なストーキング精神やの。

ほな後は任せたで、せっちゃん？」

「そ、そんな！私も」

「待って、せっちゃん！」

「お嬢様……」

ポテトチップス食いながら見てよう。

「お嬢様なんて呼ばんといて。昔みたいにこのちゃんって呼んでくれな嫌や」

「ですがお嬢様、そういう訳にはいきません」

「せっちゃんは……ウチの事嫌いなん？」

ペリポリポリ……

「そんなわけ……

麟先生、少し静かにしていただけませんか？「へ。すんまへん」

……そんなわけありません！」

「ほな何でウチのお願い聞いてくれへんの？

ウチ、ずっとせっちゃんに嫌われた、思て……」

「そんな言い方……ずるいわ……このちゃん」

「せっちゃん……せっちゃん！せっちゃん！！」

「このちゃん！！うぅ……」

ポリポリポリ……

梅味にしとけばよかった。

抱き合ってるみたいだけど、どんな野次飛ばせばいいの？

とりあえず口笛ふいとこ。

「……ヒュー、ヒュヒー」

しまった！俺、口笛が吹けない！！

「麟先生、ありがとうな。ウチ、せっちゃんと仲直りできたわ」

「私も、その……ありがとうございます」

「おお、末永くお幸せにな。国によっては女同士でも結婚できるみたいよ？」

「そ、そこまではさすがにまだ、その……」

「もう、ややわ先生」

誰？この子にハンマー渡したの。

ってかハンマー考え付いたの。

「ほなな、せんせ」

「失礼します」

「ああ、じゃあね」

ふぅー、と煙を吸い込む。

「でもせっちゃんの子供ならウチ、ちょっとだけ欲しいかもしれへんわ」

「お、お嬢様……」

「このちゃんってよんで！」

「こ、このちゃん……」

「せっちゃん！」

ふぅーーーーーーーーーっ……

「レズレズじゃのう……」

０３６　世界最速、取り持つ。（後書き）

感動系の話なんて書けない豚野郎です。

ＭＴＴ　Ｙ２Ｋ　タービン　スーパーバイク

ターボシャフト型
ロールス・ロイス　ｐｌｃ製２５０　Ｃ１８型エンジン

軽油燃料　３２４ｐｓ／５２０００ｒｐｍ
ジェット燃料　４２４ｐｓ／５２０００ｒｐｍ
５８．８ｋｇ－ｍ／５２，０００ｒｐｍ

５２０００ｒｐｍってなんやねんと。
知る人ぞ知るジェットエンジン搭載バイク。
最高４００ｋｍ／ｈを超えるキチバイクです。
乗りたくはないけど見てみたいもんだじぇ。

スズキ　ＧＳＸ１３００Ｒハヤブサ

１２９９ｃｃ
水冷４ストロークＤＯＨＣ直列４気筒
１７５ｐｓ／９，８００ｒｐｍ
１４．１ｋｇ－ｍ／７，０００ｒｐｍ
最高時速３１２ｋｍ／ｈ

前後油圧式ディスクブレーキ

鈴菌産乗りやすいリッターバイクの皮をかぶったモンスターマシン。
国内で走行可能なバイクの中で一番速いバイクでした。今もそうかな？
街中でも比較的よく見る部類の代物ではないかと。
ちなみに、コレを買った先輩が「今日は１６０キロ出した」とかいう死ぬほどどうでもいい自慢をしてきます。

では、今回もありがとうございました。
ボーナスステージ的なものでしょうか。
いつも通り何も考えずに書いています。

では、今回もありがとうございました。

０３７　世界最速の妹、魔法先生を虐める。（前書き）

隼の人気にびっくりです。

エヴァは神様じゃないので使徒→使い魔に修正しました。
ご指摘くださった　たまご様、あちがとうございます。

０３７　世界最速の妹、魔法先生を虐める。

「３年Ａ組！！ネギ先生ーっ？リン先生ーっ？」

「らほーい！みんなお久～！元気にしてたー？」

「「「はーい！！」」」

「げんきそうで何より。じゃあネギ先生」

「はい！

改めまして、３年Ａ組の担任になった……」

眠い。春眠暁を眠い。寝ます。リンです。

「あれ？麟先生寝ちゃってる」

「あはは、僕が保健室に連れて行っておきますね。うわ、軽い。では皆さん、身体測定ですので、準備しておいてくださいね」

「「「はーい！」」」

よいしょっと……あれ？『魔法の力』？

とにかく保健室で詳しく見てみないと……。

間違いないや。
でも何で？僕の他にも魔法を使える人がいる……？
図書館島以外でこんな力を感じたことは無い。……穴？噛み傷……
もしかして！

「ネギ君、麟先生大丈夫なん？」

「あ、はい。すみません。ただの寝不足だと思います。あと僕、今日帰りが遅くなりますので、晩ご飯いりませんから」

「そうなん？」

「ぁあー！んっ、っはぁー。あら？寝てたのか。まあいいや、始業式だけだし」

もう日が暮れ始めてんじゃん。びっくリンリンだわ。

「おはよ、お兄ちゃん」

「おはようございます、麟様」

「もしかして吸いすぎちゃったかな？」

「いやいやそんなんじゃなく、春になったら常に眠いよなぁ」

「あはは、そうだねー」

「じゃ、帰るかー」

「血圧高いのかなー。寝て起きたら吸ってもらわないと安定しない。ちょっといい？」

「うん、お兄ちゃん。いくね」

「ばっちこーい」

んっんっ……お兄ちゃんの血……おいしいな。

「待てー！ぼ、僕の同僚に何をするんですかー！ラ・ステル　マ・スキル　マギステル……」

んのクソガキが。いい所で邪魔しおって。

「氷楯」

「僕の呪文を全部跳ね返した！？」

「ちょ、ネギ先生。放せ」

「当然だろう。ナギにも勝てるんだからその息子に勝てねば笑い話だ」

「な……何者なんですか、あなたはっ！僕と同じ魔法使いのくせに何故こんな事を！？」

めでたいな。世界には正義と悪しかないと思ってるタイプだ。

「ふん、正義が無くとも地球は回るぞ？氷結・武装解除」

「うわぁ！」

「抵抗したか。まあいい……。
いこ、お兄ちゃん」

「合点承知の助」

合いの手もかわいいなぁ。

どうして麟先生が血を？
エヴァさんの言うことなら何でも聞いて……、それにあの常人離れした身体能力……。
もしかして吸血鬼の使い魔！？

「何や、今の音!?」

「ネギ?」

「明日菜さん、木乃香さん……

あっ、待て!!」

「ちょっとネギ!?」

「僕は大丈夫なんで先に帰っておいてください!」

正義が無くとも地球は回るなんて……世のため人のために働くのが魔法使いの仕事のはずだろっ。

それに『ナギにも勝てる』って、あの人、僕のお父さんの事知ってるのかな……。

「追ってきてるよ、お兄ちゃん」

「マジで?うわ、マジだ。めんどくせ。もう帰ろうぜ。俺空飛んだ事ないんだよな。

アル＝シエル（唯一つの偉大なる大地）にタイヤを這わせて生きるために生まれてきたから」

「じゃあ私、久々に運動でもしてみるよ。お兄ちゃんは見てて」
「危なくなったら助けに入るからな」
「多分大丈夫だけど、その時はお願いね」
「ＭＡＫＡＳＥＲＯ！」

「迎えに来たぜ、茶々丸」
「おや、どうしたんですか？」
「エヴァが暴漢に襲われてる」
「またまた、ご冗談を」
「まあおっかけっこしてるのは本当だ。茶々丸も行こうぜ」
「ええ。従者ですからね」
「ん。転移」

「風花　武装解除！」

「アレは……当たらんな」

「そうそう貴様みたいなガキに肌を許すわけにはいかんな。しかし、ここまで追っかけてこれるとは、思ったよりやるじゃないか、先生」

「約束どおり教えてもらいますよ。何で麟先生を使い魔にしたのか、それに父さんのことも」

――――――――――

「エヴァ何の約束してんのｗｗｗってか使い魔ｗｗｗ二人のヒストリーがファーストキスから始まるｗｗｗｗｗ」

「調子に乗ってしまったんじゃないでしょうか。マスター、あれで乗りやすいもので」

「いつも乗ってくれてるけどなぁ」

「麟様の時だけですよ。あ、そろそろ出番なんで行きますね」

――――――――――

「真祖にして世界で二番目の魔法使い、闇の世界でも恐れられたこの私に、これで勝ったつもりなのか？」

ズシャッ！ってｗｗｗｗ

茶々丸かっこいいじゃんｗｗｗｗｗｗ
惚れてまうやろｗｗｗｗ

「さあ、お前の得意な呪文を唱えてみるがよい」

偉そうに言ってるけど働くのは茶々丸だけなんだなぁ　まつを

「新手!?　ラ・ステル　マ・スキル　マギステル　……　サギあたっ！」

で、デコピンやぁー！
さぎあたって何のまほー？

「き、君はうちのクラスの！」

「紹介しよう。私のパートナー、出席番号１０番“魔法使いの従者”絡繰茶々丸だ。
パートナーのいないお前では私には勝てん」

「な、パ、パートナーくらいいなくったって！風の精霊……」

「茶々丸。もういい。飽きた」

飽きてるｗｗｗｗ
だから帰ろうよって言ったのにｗｗｗｗ

「すいません、ネギ先生。マスターの命令ですので、恨むならマスターを恨んでください」

「お、おいおい……」

「どうします、マスター？とりあえずこのアホ毛刈りますか？」

最近良いセンスだな、茶々丸。

「うわぁ～ん！誰か助けて～～！！」

「コラーッ！この変質者どもー！！」

やべｗｗ

エヴァと茶々丸を退避させて、あすにゃんの着弾点にネギを配置して、「転移」

「ウチの居候に何すんのよー！」

「ちにゃぁ！」

おお、滑る滑る！

「ぬべぇっ！あべし！うわらば！」

「ってネギ！？」

「いたたた、明日菜さん！？」

「何だなんだ、愉快な事をやっているじゃないか、神楽坂明日菜？」

「あんたたちうちのクラスの……それに麟先生！？どーゆーことよ！？」

「ふん、どうでもいいわ。お兄ちゃん、茶々丸、帰ろ」

「はい、マスター」

「おうとも」

「あ、ちょっと！……ここ８Ｆよ……？」

こ、怖かったぁ

「うっうっ……」

「ネ、ネギ！さっきはごめん。痛かったわよね？」

「い、いえ。大丈夫です。ありがとうございます、明日菜さん。助かりました」

「私は別に……ってそうよ。何でエヴァちゃんと茶々丸さんと麟先生が！？」

「は、はい。これは僕の考えなんですが……」

・・・

「じゃあエヴァちゃんが吸血鬼で、茶々丸さんがパートナー、で、麟先生がエヴァちゃんにかまれたしと？っていう操り人形になってるってわけ？」

「はい。多分それで間違いないと思います。うう、僕はどうしたら……」

「うーん、ま、悩んでても仕方ないじゃない。そのしとってのにされても死ぬ訳じゃないんでしょ？
今日は帰ろ。あんまり遅くなっても木乃香に心配かけちゃうわよ」

「はい……」

「茶々丸はあのアホ毛刈ってどうするつもりやったん？」

「庭に植えたら玉ねぎが生えるかもしれないと思って……」

「バロッシュｗｗｗｗｗｗｗ」

０３７　世界最速の妹、魔法先生を虐める。（後書き）

明日菜に蹴られたとき「き、きぼぢいい」とネギが言わなかったのは豚野郎の最後の良心です。

ネギの勘違いがおもろげな方向に伸びるといいな。
ブラックラグーンネタは使いどころが難しいです。

では、今回もありがとうございました。
明日は多分１本しか更新できないです。もうしわけございません。
何とか二本更新できればいいんだけど……。

０３８　世界最速、キレる。（前書き）

ほんと一瞬だけキレます。
キレる６００代です。

０３８　世界最速、キレる。

おはりん。趣味は嫌いな奴の家の庭に琵琶を植えることだよ！
もう予鈴鳴ったんだけどネギ先生職員室にも来てない。
昨日のアホ毛狩りがそんなに怖かったか。
しかしこのクラス、狩れそうなアホ毛がいーち、にー、お、はるなっち二本も生えてるじゃん。一粒で二度おいしいな。

「みんなおはよー！」

「アスナ、ネギくん、おはよー！」

「ひぃ！麟先生！！エヴァンジェリンさんに茶々丸さんも！」

なんだ失礼な奴だな。居て当然ナンダロ、ソウナンダロ。

「あれ？俺ここで泣いたらネギ先生どうなんの？」

「とりあえず、理由も無く怖がられた私は泣いていいんですよね、麟様？」

「大いに困らせ……困らせるため泣いてやれ」

「えーん。えーん（棒）」

「ちょ、何で言い直したのよ！？「どもった」そんなわけあるかー！
だいたい、理由も無く、なんてよくも言えたもんね！」

「え？何かしたっけ、俺ら」

「ううん、何もしてないよね、お兄ちゃん」

「私のログには何もありませんね」

してても言えないよなぁｗｗｗ

オコジョは嫌だもんなぁｗｗｗｗ

「いけしゃあしゃあと！昨日まほ……」

「だ、ダメですよ、アスナさん！」

い、言うのかと思った。

驚きのバカさ加減だな。

「あ、そっか。とにかく、昨日の事、忘れたわけじゃないからね！」

「アスナさん。麟先生は使い魔なんだから、本当に何も覚えてないかもしれませんよ？」

そんな教室で堂々と……あこがれるやん。

「はぁーーーーー……」

「ネギ先生、授業」

「はっはい！ごめんなさい！えーと、このｈａｚａｒｄｏｕｓですが、これには“冒険的な”の他に“危険な”といった意味もあり、と、とても危険なのでその、吸血鬼には気をつけ……」

「ネギ先生？」

「ひ！は、はいいいいい！！」

「保健室で休んでおけ。体調でも悪いんじゃないか？」

「は、はい。そうします……」

「ちょっと大丈夫？付いていくわよ？」

「ネギ先生は大丈夫じゃないかもしれないけどあすにゃんの成績も大概大丈夫じゃないからあこりん行ってあげて」

「ええよー」

「ちょ、私は大丈夫だから！」

「もう何だったらヴァッカレンジャイ以外全員ついてってあげてもよかばい。でも５ｄｂ以上の声出したら焼き土下座な」

「ひぃ～！」

「つーわけで授業を引き継ぎます。ここの意訳は、

『ボブ：前にジョンが勢いよくモニターを殴ったら画面の中のやる

夫が血を吐いたんだよ！
　ユミ：それは本当？ガンドルフィーニ先生！』

となる。ここのポイントは、私には黒人がみんな同じ顔に見える！というユミの悲痛な叫びが聞こえるかどうかだ。
俺には全く聞こえん」

……

……

……

…

「もう終了五分前だな。先生は五分前行動が基本だからもう終るわ。でも5分前に授業始めると思ったら大間違いだからな。じゃあばよ！また放課後！」

ーーーーーーーーーーーーーーー

ん？侵入者か？
ま、どうでもいいか。

「どーした、エヴァ？」

「大したことじゃないよ、お兄ちゃん」

うん。大したことじゃない。
お兄ちゃんさえいれば世は太平だ。

――――――――――――――

翌日！

「なァ～に落ち込んでんだよ？相談に乗るぜ、兄貴！！」

落ち込んでたらカモ君が声をかけてくれた。
やっぱり優しいな。カモ君は。

「カモ君……。実はうちのクラスに問題児が……」

「やハっ！刻みネギ先生！さわやか＆クールな朝だね！」

「先生がボイコットなんて笑えん話の二度目はいらんぞ？」

「おはようございます。玉ねぎは生えないそうですね」

「くっ……！！」

「おっと、勝ち目はあるのか？今後関わらないのが身のためだと思うがな？」

「それにここは学校だ。そんなあっさりと杖を抜くのには賛成できぬぅ！！」

麟先生一家だ！

思わず杖に手をかけたけど、確かにここじゃ被害が大きくなりすぎる。

それにエヴァンジェリンさんの言ったとおり、とても勝てるとは思えない。

「己の無力を嘆き、恥じ、修練を積むが良い。されどお前が私達に勝つことは無いがな。

と、マスターが言っています」

「いや、言ってない」

くっ！バカにして！！

僕だって、ぼくだって！！

う、うう……

「うわああーーーん！！」

「ネギ！」

「何をやっとるんじゃ、アイツら。

確実に茶々丸の発言がトドメだったな」

「マスターの意思を代弁したまでです」

「思っとらん。それにしてもあのオコジョ……」

「尻愛？」

「昨日侵入者があったんだけど、きっとあのオコジョだよ。まあどうでもいいかなって思ってほっといたんだ」

「そうだな。どうでもいいな」

「ええ」

ネズミは満場一致でどうでもいい判決が下された。

～ほう☆かご～

「麟様、マスター、猫に餌をやりにいきます」

「む、そうか」

「俺も行くー！」

キティに餌付けしてた頃を思い出しながら猫に餌を押し付けたい。

「お兄ちゃんも行くの！？ああ、でも今日はお兄ちゃんがレースに

出たときの映像がＤＶＤで発売されるから……うぅ～」

「９枚でいい」

「わかった！行ってくるね」

「おゆうはんまでには帰るのよー」

「麟様、普通に考えてわたし達のほうが遅くなります」

「ですよねー」

「お気をつけて、マスター」

「うえーん！うえーん！」

「ハァハァ、お、おじょうたん、ど、どうしたんだい？」

「あたしのふーせん！あたしのふーせんー！」

風船が木にひっかかってるようだ。

バシュッ！と茶々丸の背中からジェット噴射機みたいなのが出てきてそらに飛び上がった。

ゴチンと桜の枝に頭をぶつけながら風船を取って、それを幼女に渡す。

「わー？お姉ちゃん、ありがとー！」

「いいってことよ」

「あなたは違うもん」

「へぇあ」

「バイバーイ？」

「あ！茶々丸だー！」

「リンもいるぜー！」

「ハァイ、クソガキども！なんかのキノコと百円やるから帰れコノヤロー！」

「あははー！」

「空飛んでよ！」

クソガキがウザイ。
ショタ需要とかねぇんだよ。

あれは……

「ばあさん、乗りなよ」

俺の広大な背中に、歩道橋を登ってたばあさんが乗る権利をやろう。

「あらあら、ありがとうね。でもお嬢ちゃんにはちょっと厳しいかな」

「麟様、私が」

ああ、俺小さいんだった。
別に忘れてなかったけど。

「茶々丸がまた良いコトしてるぞー！」

「リン情けねー」

「お前も蝋人形にしてやろうかぁ！！」

デンデンデーデーデーデーデーンデンデンデンデーデーデー

「わー！」

「逃げろー！！」

「いつもありがとうございます、茶々丸さん」

「いいってことよ」

「お嬢ちゃんもありがとうね。これあげる」

「わーいわーいありがとうおばあちゃん大好き」

腹筋はもらえなかったけど酢昆布をもらった。
ィヤッホォォオオウ！！
ん？橋が騒がしいな。
「警察に連絡を……」
「仔猫がドブ川の真ん中に……」
ダンボールにインしたリトルキャッツがリバーを流されている。
「マズイ、茶々丸！コレを使え！！」
つ―〇　↑金魚すくいのアレ
バサンバサンと川の中に入ってダンボールごと仔猫を救出してきた。
金魚すくいのアレはもう指輪に戻したよ。
無視されたもん。
「麟様、教会の横で待ってますので猫缶をそこのコンビニで買ってきてください」
「……はい」
パシらされるんだ、俺、一番偉いんだぜ？
猫缶を買ってさっさと行こう。

フンフラフラー太巻きラフラ～

あれはネギ？
それにあすにゃんと、
に茶々丸……。

まさか尾けられていたとは……油断しました。
なんとか麟様が戻られるまでに勝たないと、二人があぶない。

「魔法の射手　連弾・光の１１矢！！」

追尾型魔法・至近弾多数――避けられない。

「マスター、麟様……」

「呼んだな？」

「麟様！？」

もう当たる、と思った時には、麟様が前に立ちふさがって全弾受け止めてしまいました。

「嘘っ！」

「麟先生！？」

皆さんも驚いているようです。

私に、麟様が止められるでしょうか。

「今、何してた？」

「いえ、あの……」

「俺以外のシラナミに対して、何してた？」

「し、シラナミだって！？」

あのオコジョはシラナミについて聞いたことがあるそうです。

ならばもう、何をやっても無駄ということはわかるでしょう。

私も一度しか聞いたことがありません。

麟様を倒すためにマスターを人質にとろうとした者の末路は……。

「プラクテ　ビギ・ナル……」

「詠唱！？」

「魔法使いだったの！？」

「麟様！おやめください！！」

「魔法の射手　連弾・光の３００１１矢」

私の声は届きませんでした。

麟様の魔法は突き出した手の先から、最早光といっていいのかもわからないほどの力の壁が絶え間なくネギ先生達を貫いています。

恐らくもう、原型も残っていないでしょう。

ネギ先生たちの後ろにある教会の分棟が、跡形も無く削れ飛んだのですから。

「ぐぅ、ガハッ……」

「な……何者よ……アンタ……」

麟様の魔法の後、後ろにあった建築物は軒並み円形に抉れ、地面は１０メートルほど削れていました。その底に生きている二人が確認されます。

神楽坂さんは欠損無し、その後ろにいたネギ先生は、左手の肘から先が無くなって、二人とも体のいたる所に擦り傷や打撲痕があります。

杖とオコジョは無事でした。おそらく神楽坂さんは魔法無効化の持ち主なのでしょう。

「シラナミ」

「うっ……なぜ……あなたは操られてただけだったんじゃ……なかっ……」

「ネギ！あんた手が！！ネギ！ネギ！！」

「ま、待ってくれ……アンタ、リン・シラナミだろ？
今回このロボの嬢ちゃんに攻撃をするようけしかけたのは俺っちだ……。
俺っちはどうなったってかまわねぇ。だから二人を見逃してくれ！
頼む！！」

「麟様。私にも異常はありません。ですから、どうかおやめください！」

その時、麟様の影からマスターと高畑先生が転移してきました。

「マスター！麟様を止めてください！！」

「お兄ちゃん、どうかしたの？」

「ネギ君！アスナ君！！」

「エヴァか。いや、こいつらが俺の不在に茶々丸を攻撃してたからな。シラナミを甘く見たツケを払わせてやってるところだ」

「そうだったの。茶々丸、調子は？」

「問題ありません。ですから、もうおやめください、麟様」

「僕からも頼む。気が済まないようなら僕も殺してもらってかまわないからどうか二人は……」

「そんな！高畑先生！！」

「黙っててくれ、姐さん！！」

オコジョと高畑先生が麟様に土下座し、アスナさんは気絶したネギ先生を抱きかかえて泣いています。

「何だよ。俺が悪者かよ」

「そのへんにしておいてあげたら？お兄ちゃん」

「あぁーもう、しゃーねぇな。次やったら日本とその周り半径1万キロごと沈めるんだからねっ☆
ほら、ネギ先生こっちよこせ」

マスターの言うことにはやけにあっさりなんですね。
少し悔しいです。

「誰があんたなんかの言う事なんて信用するもんですか！」

よこせと言われたアスナさんはネギ先生を強く抱きかかえています。
もうこの実力差なんですから、あっさり渡してしまえばいいのに。

「じゃあ一生引っ付いてろ、クソボケ。“治癒”」

麟様が治癒魔法をかけて二人を治療する。
ネギ先生の腕もみるみる回復し、千切れ飛んでいたアホ毛も生えてきました。無限アホ毛ですね。
アスナさんも、治癒魔法は無効化しないのか、体中の怪我の痕が消えていきます。

「何で……直してくれるのよ……」

「そりゃエヴァに許してあげてぇ？って頼まれたし、シラナミに何かしてこない限りはお前みたいなヴァカでも生徒だからな」

「麟君……すまない。ありがとう……」

「俺っちからも、もう二度とアンタには逆らわないよう、二人にはちゃんと言っておきまさぁ」

「きにすんなタカミチ。事後処理はまかせた！」バリバリ！

「そしてネズミよ。別に俺に何をしてくるのもかまわないし、何とも思わないが、俺以外のシラナミに手を上げる時は、世界で最も残酷な自殺をしたい時だけだって、ちゃんといっとくんだぞ」

「そういえばアンタ、そういう人らしいっすね。お任せくだせぇ」

どうやら麟様も落ち着いてくれたようです。

「じゃあ帰ろうぜ。今日メシどうする？超包子行く？」

「そうだね、お兄ちゃん！」

キャッキャッと二人でいちゃつきながら歩いて先に行ってしまいました。

私も行くとしましょう。

「では神楽坂明日菜さん、ネギ先生によろしくとお伝えください。お待ちください！マスター、麟様！」

俺っち生きてる!?生きてるよな!!
こ……怖かったぁー……。

「すごい魔力反応があったから来てみたら……。まさか、結界内部で相当押さえられてるだろうに、あれほどの被害が出る魔法を使えるなんて。
二人とも無事かい？それに君は……」

「あぁ、オコジョ妖精のアルベール・カモミールっす」

「高畑先生！麟先生はいったい？」

「あぁ、それについてはネギ君が起きてから話そう。アルベール君も何か知ってるみたいだし、ね。

ああ、もしもし、学園長。ええ。麟君でした。教会前の人払いと修復をお願いします。
はい。死人は出てません。それでは。

ああ、すまないね。じゃあ行こうか」

知ってるっつっても御伽噺レベルのことぐらいしか知らねえんだけどなぁ。

０３８　世界最速、キレる。（後書き）

なんか取り返しのつかない事をしちゃった気がします。
紅の豚野郎です。
３００１１矢って何やねん……。
一発適当に撃っても半径２０ｍだから……

何本も同じところを通っていったってことにしてください。
前方に半径５０ｍほど。

ちなみにこの後もう一話続く予定です。
恐らく短めで。
今日中に上げないと次上げれるのが早くて２２日、遅くても２３日……。
ドキがムネムネします。

では今回もありがとうございました。

０３９　世界最速、仲直り（？）する。（前書き）

みんなで行った、千葉！滋賀！佐賀！

039　世界最速、仲直り（？）する。

「まずは君達の考えと事実の差異の調整からだ。君達は麟先生の事をどういう風に思ってる？」

ネギの兄貴は、あの後すぐに目が覚めた。
なにがあったかは覚えているらしい。
姐さんともども、痛みは全く残っていないし体調も全く悪くないらしい。

「麟先生は、いい先生だよ。僕達が図書館島に行っている間もみんなに勉強を教えてくれていたみたいで」

「うん、そうだね。麟君とネギ君、二人の力で前の期末試験は学年一位だった」

「エヴァちゃんとすっごい仲がいいって聞きました。教室で、その、キス……とか、するくらい」

姐さんも乙女だねえ。
ってか何をやってんだ、あの兄妹。

「はは……何をやってるんだ、麟君……」

「あと、たまに怒られます。始めの授業のとき、アスナさんにひどい事を言いそうになった時も怒られました」

「あんた前もそれ言ってたわね。いったい何を言いそうになったのよ？」

「いえ、それは……」

「お・し・え・な・さ・い・よ！」

「ひぃいいい！！」

姐さんが兄貴の頭を拳で挟んでグリグリやってる。
あれ痛えんだよなぁ。

「ははは、アスナ君、その辺で勘弁してやってくれないかな？」

「あっ、その……はい……」

はぁーん、なるほど。アスナの姐さんはこの高畑先生にラブっすねぇ。

「ここまでの話だと麟君は、まあちょっと不思議だけどいい先生だ」

「うん。普段からずっと助けられてるよ」

「でもあんな魔法使って、私達に、ネギにあんなひどいことしたんですよ！」

それはちょっと暴論だぜ、姐さん。まあけしかけた俺が言うことじゃねぇけどさ。

「じゃあその前はどうだった？」

「その前？」

「麟先生が僕らに向かって魔法を使った時の前？」

兄貴も思い出したのか、震えてる。そりゃそうだ。３００１１矢なんて聞いた事もねえ。

普通の魔法使いなら一年分魔力を溜めれたとしても撃てる量じゃねえからな。

「そうだ。それまでに、麟君を怒らせるような事をしたんじゃないか？

彼はたしかにやりすぎる事もあるし、人殺しに対しても何も思っていない。事実、彼が殺してきた人の数は裕に１０万人を超すとも言われている」

「そんな……」

「とんでもない極悪人じゃないですか！！」

「そうだ。でも、“ある事”をされない限りは絶対に理由無くあんな怒ったりしないんだ。

ただ、その“ある事”をやってしまえば、男も女も、大人も子供も、村でも国でもあっさりと殺してしまう」

「そうだ、僕は麟先生がいない間に、茶々丸さんに……」

「それに麟先生が操られてないんだったら私たち、とんでもない事しちゃったんじゃ……」

二人とも何かに気付いたみたいにハッとした顔をした。

なんだか居心地が悪くなってきたぜ……。

「きっとそれだね。出席番号１０番、絡繰茶々丸、本名は、絡繰・Ｓ・茶々丸。このＳはシラナミの事なんだ」

「そういえば、さっきも言ってたわね、あんた。シラナミがどうとかって。白波って麟先生の苗字じゃないの？」

「ああ、俺っちも御伽噺くらいの話でしか知らないんだけどな。シラナミを名乗る者には、絶対に何があっても手を出しちゃいけねえ。
もし手を出したら『邪神、リン・シラナミ』に殺されるって話だ。本国でも、いくつもの国が潰されたことがあったらしいが、その邪神一人の仕業だってな。
やけに生々しい話だったから今でも覚えてたが」

「な、何よそれ……」

「でもあれだけの魔法が使えるなら、本当に国のひとつやふたつくらいは……」

「カモ君が言った事は本当だよ。
正確には数百年前に本国でつけられた二つ名が『邪神』なんだ。
かつて２億の賞金首だったんだよ、彼は」

「あれ？でもエヴァちゃんが６億円ですよね？じゃあ麟先生は確かに多いけど……」

「ドルなんだね、タカミチ」

「ああ。２億ドルの元賞金首だ」

「え？に、２億ドルって事は、いちじゅーひゃくせん……２０億円！？」

「……」

「……」

「え？え？何よ！？」

「……２００億円だぜ、姉御」

「……続けてください。グスッ」

泣くほどの事かよ……

「そんな彼だが、確かに行き過ぎた所もあるけど、それは全て自衛、というかエヴァを守るためだったんだ。

大昔、エヴァは吸血鬼ってだけの理由で迫害されててね。麟君は、立ち向かうのもバカらしくなるくらい強ければ家族に何かされる事は無いだろうと思って、敵対する人や組織や国を潰していったんだ。中にはよくわからないコントをされた国もあったらしいが」

「そうだった……んですか」

「僕はなんてひどいことを……」

「まあ、だからといってあそこまでする事はなかったと思うけど、この世の中に彼より強い人間なんていないだろうからね。謝るときは誠心誠意謝るしかないんだよ。主にエヴァにね。さあ、着いたよ」

なんて読むんだ？
ちょうほうし？

「え？」

「ここって……」

「あれ？さっきぶりじゃん。ココ空いてんじぇ」

超包子でシューマイ的なものを貪りながら話をしている。
エヴァは桂花陳酒をロックで飲んでるが、俺はえげつなく酒が弱いからファントムグレープ味を飲んでる。

「ＤＶＤ６枚しか残ってなかったんだ」

「また買いに行けばいいじゃん」

「帰ったら見ましょうね、マスター、麟様」

――何の話ですか？――

「お兄ちゃんが優勝した時のレースのＤＶＤが出たんだよ」

――そうなんですか。私も見てみますね。あ、ＤＶＤプレイヤーがありませんでした――

「じゃあ買ってあげるぜよ。レーサーやってたリンちゃんもよろすく」

「私もビデオでしか見た事が無いので楽しみです」

「あの時のお兄ちゃんはホントにかっこよかったなぁ。普段は一番かわいいのにその上一番かっこいいなんて凄すぎるよ」

「ふはは、当然であろう」

「「んーちゅっ」」

「何だ茶々丸、そんなじっと見て」

「混ぜてほしいんだよ。なあ、茶々丸？」

「い、いえ、私はそんむっ！……っはぁ……うぅ、二人ともえっちです……」

――わ、私は何も見てませんよ――

「ふぅははぁ」

「え？」

「ここって……」

後ろから声が聞こえたもんだから振り返ってみるとさっきの面子がいた。

「あれ？さっきぶりじゃん。ココ空いてんじぇ」

「ん？貴様らか。もうバカな気は起こすなよ」

――どうぞ。開いてますよ――

「ああ、邪魔するよ。さっきは悪かったね」

「どうでもいいわこのヒゲメガネ野郎」

「「え、えぇー！？」」

「何だ？さっさと座れ」

「よーし、今日はリンちゃんみんなの分おごっちゃうぞー」

「あ、あの、麟先生、さっきはすいませんでした」

「チッ」

舌打ちしてネギの頭を軽く殴る。

「あでっ！」

「俺じゃねえだろ」

「あっ！茶々丸さん、さっきはすいませんでした！」

「わたしも、ごめんね、茶々丸さん」

「いえ、かまいませんよ。ところでそのアホ毛、肉体の一部だったりするんですか？」

「い、いえ……普通の髪ですが」

「そうですか。はーん……はぁーん」

最近茶々丸がやるようになってきて嬉しい限りだ。

「ああそうだ、坊や」

「ぼ、僕ですか？」

「お前なんぞ坊やで充分だ。ナギの情報を知りたがってただろう？」

「な、何か知ってるんで……」

「ああ、さっちゃん、僕もエヴァと同じのを」

――はい、餃子と炒飯と桂花陳酒ですね――

「シューマイあるヨ、高畑先生」

「ええいめんどくさい！メニューにある食いもん片っ端からもってこい！」

「あはは、ごちそうになるよ、麟君」

「金は投げ捨てるもの……。というのは嘘だ。まあ持ってるから好きにやっちゃってよ。
ほら、ネギ先生も。もういいっつってんだからいつまでもいじけてんじゃねぇ！ゲロカス野郎が！さっさと食え」

「えぇ！？いえ、父さんの話が……」

「別に話は逃げん。お兄ちゃんが勧めてるのに食えんと言うのか？貴様もだ、神楽坂明日菜」

「え？あ。いただきます」

「おいしい！これほんとにおいしいですよ！！四葉さん、お料理の天才ですねー」

「相変わらずおいしいわね」

――いえ……。まだまだ勉強中ですよ。中華以外は麟先生に全く敵いません――

「麟先生も料理の天才だったんですか！？」

「料理は秀才だ。そう何でも天才だったら他の奴らがかわいそうだろうが」

他はだいたい天才だけど。

「はぁー、すごいんですねー」

「俺は」「お兄ちゃんは」「麟様は」「「「天才なんで」」」

「すごい息の合いっぷりだなぁ」

「愛の成せる技だな」

「で、貴様の父親、ナギ・「サスペンション」フィールドについてだが……」

「ちょ、ちょっとまってください、今おかしなことになってませんでしたか!?」

すんまそんｗｗｗ

「気のせいだ。で、奴は１０年ほど前に死んだ。その先は知らん」

「え?で、でも父さんに呪いをかけられたんですよね?タカミチに聞いた話だと……」

「こんなもんいつでも解ける。お兄ちゃんが教師をやめる時が、私が生徒をやめる時だ」

「制服エヴァの写真コレクションもここ１５年でアルバム１５０冊分になったしな」

「ちなみに鏡にも映れるぞ」

「へぇ……じゃなくて、僕父さんに会った事があるんです。その時にこの杖をもらって……。
だからきっと、父さんは生きています！」

「はぁ～ん、どうでもいいわ」

「ひどっ！ちょっと麟先生！それはひどいんじゃない！？」

「だってどうでもいいもの。あぁ、そう言えば京都にあいつの隠れ家があったな。うちのクラスの忍者なみに忍んでない忍び家だけどねっ。ちなみに俺の書いたノートが５０冊ほど貯蔵されてる。ってかいらないから押し付けたわ。
次の修学旅行先も京都だし、自由行動の時にでも行ったらいいんじゃないかね。何か手がかりが無いかもしれん」

ちなみにノートのタイトルは『ぼくのかんがえたさいそくのバイク』だ。
男の子なら誰でもやるよな！
え？やらない？うそぉーん！？

「そっ、そうなんですか！？あの日本の有名な！？あぁ、楽しみだなぁ」

久々に外人だな、こいつ。

「ちなみに、しらがネギ先生は日本に来る前は日本の街ってどこ知ってた？」

「それはもう、日本の三大都市、京都、奈良、アキハバラの名前はよく聞いてましたね」

「いかにも外人らしい偏向放送だ！！」

京都、奈良、キョナラってフラッシュが学生達に大人気らしい。

０３９　世界最速、仲直り（？）する。（後書き）

誤字とかあったらごめんなさい。

では明日から（ってかもう今日だけど）三日間鳥取に行ってくるので更新できませぬ。
くやしいのう、くやしいのう。

僕、海がものすごい嫌いなんですよ。
肌はべたつくし機械は錆びるし喉は痛めるしで。
でも友人と行ったら一番引かれるほど楽しんでます。
ちなみに、別に海に行くわけではありません。
奈良県民らしく山にへばりついて生きたいです。

そんなことより、次回から修学旅行の準備回とか修学旅行回とかですね。
懐かしいなぁ、中学の修学旅行。
と言いつつも、修学旅行先は東京でした。
マッキーミウスの楽園とか行きましたね。ホントは京都に行きたかったんです。いえ、いつでも行けますが。

では、今回もありがとうございました。

０４０　世界最速、バカ笑う。（前書き）

私は帰ってきた！！
今回の話はホント読まなくても大丈夫です。
素の自分のテンションで書いてるので意味わからない代物になってるはずです。

そんな事より、ホントにアルポータル終わっちゃうんですね。
私のトウコウは結局一回しか採用されませんでした……。
精進不足ですね。

０４０　世界最速、バカ笑う。

おひさ白波。
昨日はあの後、結局１２時くらいまで騒いでからかえりました。
何であすにゃんに『あんた』とか呼ばれなきゃなんないんだよ。

で、もう眠いからすぐ寝てたら危うく遅刻する所だった。
毎日出発の２時間前には起きて準備するもんだから、あと一時間１５分しかないとわかった瞬間、エヴァの別荘に勢い良く逃げ込んだの。

「一日も時間できちゃった。もうひと眠りしようぜ、エヴァ」

「こ、こんな朝早くから？でもいいよ、お兄ちゃんなら……」

「うるせぇ、俺は眠いんだよ！おやすみー」

「うん、おやすみ！」

「ＯＨＡＹＯＯｏｏｏｏ！！」

「おはようございます、麟様」

「うむ。何時間寝ておった？」

「8時間です」

「寝すぎですね。エヴァはどこにいますか？」

「隣で麟様に抱きついておられます」

「おはよ、お兄ちゃん」

「貴様ァァアアアアアア！！！！おはよう」

挨拶は大切だよ。
貴様らも見習え。

「ならば俺はこれより朝の準備をしたいんですがよろしいですねっ！！」

「手伝おうか？」

「問題ない。2分で終わらせる。やっぱ5分で終わらせる。まってろよ！」

「うん！」

本来は昨日（今朝？）するはずだった荷物の整理をして、その他必要書類を整える。

具体的にはじじいからの

『関東魔法協会の所属してくれんか？』

とか、正式書類なのに話し言葉で書かれたクソ以下の紙の裏に

『ああ、こんなにお断りしたい気持ちになったのは初めてです。
死ね』

と殴り書いて油汚れのついた茶封筒に丸めて入れ、ガムテープで封をしたものにロイヤルミルクティーをこぼして、鞄の中にグシャグシャになるように詰める作業だ。

この間わずか１０分!!

「終わったー!」

「お兄ちゃん遅いー」

「あはははははは!でも下の方は早いから大丈夫!いや、あんまり大丈夫じゃないのか!?しかし回数は無限回。ふむ、大丈夫!!」

「うふふ」

「あはは」

「ふふっ」

シラナミヌクモリティ!!

「エヴァ!オセロやろうぜ!!」

「うん！」

唐突だがオセロがやりたくなった。
とりあえず普通に初めの四枚を置いてその次に四隅に黒を置く。

「俺が黒だが負ける気がしねえ」

「お手柔らかに」

「審判は私、絡繰・シラナミ・茶々丸が勤めさせていただきます。
ではどうぞ」

「初めはここだな」

白の下に黒を置いて白をひっくり返す！

「じゃあ私はここ！」

「ふん、斜めだと？その程度か！」

――10分後――

●○○○○○●
○○○○○○○
○○○○○○○
○○○○●○○
○○○●○○○
○○○○○○○
○○○○○○○

●○○○○○○●

「勝者、マスターです」

「やったぁ！！」

「ど、どうしてこうなった……」

逆にこうはならないだろ！エヴァが強いのか！？いや、まさか、俺が弱いのか！？

「クソっ！こうなったら将棋で勝負だ！！」

「うん！」

▽王　↑麟
▲金　↑エヴァ
▲歩　↑エヴァ

「勝者、マスターです」

「グボォア！！！！！！
俺の墓には……稀代の棋士と……ゲボッ！！」

「お、お兄ちゃん！！死なないで！！あと嘘でもそんな事書けない！」

「正直な子に育ってくれてうれしい。でも将棋とか強いのは悲しい」

「いや、お兄ちゃんが決定的に下手なだけだと思うよ」

「……茶々丸！！」

「はい、実際、麟様はえげつなく下手くそです。５０年前のパソコンにも勝てないレベルです」

「いや、５０年前のパソコンも今のパソコンも指先一つでダウンだから。俺との愛を守るために旅立ちかねない勢いだから」

世紀末で救世するから。

「なあ、今すっごい面白いこと思いついた」

「何なにー？」

「気になります」

興味津々か！いやしんぼめ！！

「この混沌とした世の中に破滅という救いの手を、歌〇です」

「ブフッ！」

デデーン

「マスター、アウトー」

「なっはっはwwwww」

デデーン

「麟様、アウトー」

「ちょ、ちょっと待て！茶々まあんっ！！」

「いやいやいや、今の無しやって、やめ！や……アフン！！」

「エヴァ、俺の腕な、取れんねん」

「どうしたの？急に」

「いや、指輪で作った剣なら切れるねん。腕」

「ふふっ……う、腕だけ？」

「いや、あと足もな、取れる」

「そうなんですか？」

「ほら、見てて」

指輪で作った日本刀を出して腕を落とす。

ボトッ……

「な？（どや顔）」

「ふっ……ふふふっｗｗｗ」

「ふｗｗ　な？って……麟様……ふっふふ」

「ただな、こっちの腕落としたからもう一方落とせへんねん」

「ふはははっ！お、おに、おにいちゃんｗｗｗ」

「それは落とせないでしょうｗｗｗ」

「でも前は落とせたようなブフッ！気がしてんけど……ぶはははｗｗｗ」

「ブフゥｗｗｗｗ落とせないよｗｗｗ」

「りんｗｗｗ麟様ｗｗｗｗ」

「んで落ちた腕ひっつけたらな、引っ付くねんｗｗｗｗ」

「あっはっはｗｗｗｗ何でそんな事しようと思ったのよおｗｗｗｗ」

「ひっひっひｗｗｗｗいやな、取れるやろ思てやったら取れたからなｗｗｗつくやろう思てつけたらついてんｗｗｗ」

「ｗｗｗｗｗ」
腕を拾ってつける。
「な？（どや顔）」
「ぶはっｗｗｗｗｗ」
「ガイノイドなのにｗｗｗｗ呼吸困難ｗｗｗｗ」
「なっはっはっはっはｗｗｗｗ」

「……ふぅ、今のは深夜のテンションだったな」
「危うく死人が出る所だったよ」
「私まであんな事になるとは思いもしませんでした」
「今考えたら何も面白くなかったよな……ふふっｗｗ」
「へはっｗｗｗｗ」

「１０年に一度、見れぬか見れないかのテンションだったな」

「それだと一回も見れないね」

「いつもの笑顔もいいけどたまの笑い顔もかわいいよ」

「お兄ちゃん……」

「ベッドはメイキング済みです」

「ふはは、よくやったんだぜ！茶々丸」

「そうだ、お前も来るか？」

「いえ、私は……」

「そうか、茶々丸も参加か」

「引っ張らないでください！なんで人間の３０倍のパワーがある私をこんな平然と！」

「「最強だからな！」」

「うぅ……」

「というわけで、暫定一週間分、茶々丸のポジション決めをしたいと思います」スパー

「わー」ぱちぱちぱち

「楽しみです」

「現在空いてるポジションは……キティ！」

「うん。

母親、姉、娘、叔母、伯母、姪、祖母、妻、嫁、妾、友達、彼女の１２こだよ。ちなみに妹は満席。

友達の中には『お前は今朝登校中にぶつかった食パン女！』とか『麟くんの事……小学生の時からずっと見てたんだよ？』とか『別にお前の事好きでも何でもねえよ！』『本当に？』『そんなわけ……ほっ、本当だよ！』とかのパターン分けがほぼ無限に可能よ」

「そんな中から茶々丸はどうする！？」

「えっ？え？あの……」

「じゃあ俺達で決めようぜ！」

「そうだねお兄ちゃん！」

指輪で回るダーツボードとダーツを作る。

「ちなみに真ん中に当たるか外れるかしたら茶々丸のポジショニングは『たわし』な」

「えぇっ!?そんなの無かっ……」

「ほいさぁ!!!」

威勢のいい掛け声と共にダーツを軽く投げた。
ストンと小気味いい音が刺さった事を主張する。

「さて、どこに刺さっているのか!!普通に見えてるしお前らも余裕で見えてるだろうけど止まるまで待つのはお約束だ!!」

「あ、もう止まるよ、お兄ちゃん!」

「ど、どうなるのでしょうか……」

ピタ……

「決まったーーー!!おめでとう!」

「ふはは、どうやら貴様はお兄ちゃんの『姉』らしいな?」

「かと言って別にエヴァのお姉ちゃんになる訳じゃないけどな」

「そ、そんな、困ります……」おろおろ

「何だ、嫌なのか、茶々丸?」

「いえ、嫌とかそんなのでは……」

「お姉ちゃんは俺みたいな弟はいらないの？」

「お姉ちゃ……むしろウェルカムです」

「よろしくなお姉ちゃん」

「はい……麟くん……」

「とりあえず鼻から出てるオイルの滝を止めろ」

現世の大瀑布やー！

茶々丸　は　特技　油符「機械の潤滑大瀑布」　を　手に入れた！

０４０　世界最速、バカ笑う。（後書き）

何だこのオチ……何だ……？
今回の話は本筋とは何も関係ない話です。パラレルワールドです。
なので次回からも茶々丸の呼び方は茶々丸だと思います。
麟の事なんで、急になんと呼び出すかは責任をもてませんが。

鳥取に行って腰を痛めました。
２０歳の豚野郎です。１００m以上も歩いたのは久々。
帰って３０分で書き上げました。
（僕の）息抜き回です。

鳥取の蚊は奈良の蚊の２０倍くらい凶悪。
背中の真ん中とか指の先とか平気でさしてきます。
まさに人非人。

このポテンシャルで本筋を更新するのは諦めました。
明日はちゃんと書きます！
真面目にふざけます！

くまのプーチン

ごめんなさい、言ってみたかっただけなんです！

皆様も、数々のご感想ありがとうございます。
フラッシュ世代が多くてうれしかったです。

兄貴ィ！……って何だ？
まわれＭｅらわない事さ！

では、今回もありがとうございました。

０４１　世界最速、お泊まり会、前編。

「おいクズども！我々３－Ａは来週からキョナラに修学旅行に行くが、準備は済んでいるのか！！」

「「「はーい？」」」

「うるせぇ！！ピーチクわめきやがって！小学生か！ブチ殺すぞ！！準備が終わってるなんて勘違いも甚だしいわ！ちゃんと荷物の再確認を行え！衣類は一着分余計に持って行け！かさ張ると疲労の元になる。なるべく小さく纏め上げろ！
いいか、修学旅行は修学しに行くんだよ！遊びに行くんじゃない！嘘だ！遊びに行くんだ！携帯ゲームはワンダースワン以外を持って来たら叩き割るからな！」

「ゲームボーイカラーはー？」

「黙ってろ妊娠！！」

「京都楽しみだね、お兄ちゃん！」

「京都も奈良も全く興味無いがエヴァの楽しんでる姿を奉って納めるために８０万円する一眼レフを買った俺に隙は無い」

「あっ、いいなー麟さん！」

「じゃあかずみんにあげる。まだあるし。でもエヴァの写真は頼んだぞ」

「へへっ、任せてよ」

この後も京都を選んだ理由とかで盛り上がったりゆっきーがネギに求婚したりとカオスな話になってたので知らないフリを決め込んでた麟です。

危うく挨拶忘れるとこだった。

「ネギ先生、麟先生、学園長がお呼びですよ」

「あ、はーい！！」

しずな先生、あんたホントは高等部の教師やってないだろ。

「えぇー！？し、修学旅行の京都行きは中止～～！？」

「誰を殺せば行けるんだ？」

「こ、これこれ……

まだ中止とは決まっておらん。ただ、先方がかなりイヤがってのう」

「……詠春を殺せと？」

関西呪術協会の長である詠春とはちょっとした顔見知りだ。

以前、麻帆良に住み着く前、京都を遊園した時に会った。

無理やり酒を勧めてくるもんだからそれを全てエヴァにトスしながら障子に穴を開けまくってたら巫女さんに怒られた。詠春が。

「いやいやいや、そんな事は言うておらん！今年は魔法先生が一人おると言うたら難色を示してきおったのじゃ」

「だから殺せばいいんだろ？ってか一人って誰の事よ？」

「いや、一人って言っちゃったけど、そう言えば一人じゃなかったのう。まあええか」

「あの……何の話ですか？」

「お、おお。すまんの。実は……」

じじいがネギに説明をするが何も考えずにタバコに火をつけて肺に吸い込む。

「ここは禁煙なんじゃがのう」「もう！ダメですよ、麟先生」などと幻聴が聞こえてきたが適当に無視して二人の会話を聞く。

「この親書を向こうの長に渡してくれるだけでいい。ただ道中むこうからの妨害があるやもしれん。彼らも魔法使いである以上、生徒や一般人に被害が及ぶような事はせんじゃろが……」

「わかりました、任せてください学園長先生」

「白波先生も、ネギ君のサポートを頼めるか？」

「何の？」

「親書を渡す……」

「おことわりします」

「な、なぜじゃ？」

「生徒の事なら任されても良かったんだけど？何？おつかいのお手伝い？じゃあ誰が３－Ａを見るの？他の先生に皺寄せるの？ってかそんなくだらない事に俺を使おうと？」

「う、うーむ。じゃあ白波先生には通常通り生徒の監督を……」

「ああ、任せておけ」

「じゃあ白波君は帰ってもよいぞ。で、ネギ君、孫のこのかの事じゃが……」

退出！！！

駐輪所まで歩いてるとちうたんに合った。

「おーすちうたん。買い物かね？」

「ん？ああ、そうだよ。先生は帰りか？」

「んー帰ってもいいんだけど俺も買い物行こっと。ついてっていい？」

「まあ別にかまわねえけど、面白い事も無いとおもうぜ？」

「やっほうぅい！！エヴァ！買い物行こうぜ！」

と言ってみると茶々丸に乗ったエヴァが茂みから出てきた。

「うん、お兄ちゃん！よろしくな、長谷川千雨」

「ど、どっから出てきてんだ！」

「まあまあ、気にしない気にしない」

「よろしくお願いします、長谷川千雨さん」

看板に『ファッションセンターしまじま』と書かれたパチモンくさい店の前にいるが、かなり人が多い。
お前ら他に行くところねえのかよ。

「ほらほらちうたん、これとかかわいいよ！」

「着てみろ、長谷川千雨」

「嫌だよ！私はもっとおとなしい色の服が好きなんだ！」

「……ビブリオンの服はさすがに無いな」

「ぎゃー！てめえそれ以上言ってみろ！！」

「あ、お兄ちゃん、このスカートかわいいよ！お兄ちゃんはいてみてー」

「ふはは、まかせろ！」

「おいおい、あんた男だろ」

「麟様はかわいいので何ら問題無いかと」

試着室を開けっ放しでズボンをぬいでスカートを穿く。

「いや、閉めろよ！」

「赤くなっちゃって、かっわいー」

「クッ、連れてこなかったほうがよかったのか！」

「似合う？」

「きゃー！お兄ちゃんかわいいー！」

「うむ、じゃあ買おう。で、ちうたんにこっち買っておそろい」

「な、何で！？」

「あー、お兄ちゃんずるいー、私もちうたんとおそろいがいいー」

「じゃあみんなの分買っちゃう！」

「え？おいあんた今私のこと何て！？」

「やったー！お兄ちゃん大好き！
って何だ、長谷川千雨？」

「え？ん？気のせい？」

「マスターは麟様用とそれ以外の全て用の性格があって、家で麟様と話している間はずっと『ちうたん』と呼んでおられます」

「何だ、普段からそう呼んで欲しいならかまわんぞ？」

「いや、いい。あんたはまともだと思ってたんだが……」

「いやいや、あの変人ぞろいの３－Ａの中でも俺ら3人は特にイカレてるよ？俺ら６００歳以上だし、茶々丸は＜＜3ゲットロボだし」

「ガシャーンガシャーン。ガイノイドです」

「……私はこの服にする」

俺達の話は聞かなかった事にされる。

「タイトでいかしたジーンズじゃん（タイトとかわからないけど言ってみた）
このメーカーあれだろ？あの、ブリジストン」

「いや、普通にしましま製だよ。タイヤとか作ってねえよ」

「なんだ、作ってないのか」

女物の服いっぱい買っちゃった。これもう、しばらく女装してうろつきまわろう。

って言うとエヴァが満面の笑み。

脳内エヴァフォルダ（約４０００ヨタバイト）に保管。

「なあ、あんたロボなんだろ？」

「ロボじゃなくてガイノイドです。ロボットです」

「いっしょだよ！」

「ガイノイドなのでこうやってプロジェクター機能を使い壁にちうたんの写真を映し出す事も……」

「ぎゃー！やめろ！！！」

「なあなあ、ちうたん」

「ちうたんって呼ぶな。何だよ？」

「魔法ってあると思う？」

「……は？」

何言ってんだお前って言われた（言われてません）。
お前って、俺先生なのにお前って……（言われてません）。

「いや、ねえだろ。流石に魔法ってのは無しだろ」

「でも俺魔法使いですしおすし」

「ハァ？じゃあ魔法使ってみろよ」

「いや、ここでは使えない」

「何でだよ！使ってみろよ！！」

「いや、ここでは使えない」

「だからっｗｗ使えって！ぶはｗｗ」

「デデーン！千雨、アウトー」

そう言った茶々丸がちうたんを捕まえてエヴァがしりを叩く。

「何だよそれ！ちょ、ずるいじゃねえか！魔法使えよお前！ぁぅん！
何で私がケツ叩かれなきゃなんねえんだ……」

「ぁぅん！ってｗｗｗ
いやホント、使いようが無いんだよ。エヴァなら大丈夫だけど」

「うん。魔法の矢、氷の一矢」

氷の矢を木に放って、その幹を半分ほど抉り、凍らせる。

「は、はは、どんなトリックだ、こりゃよぉ……」

「まほー」Ａ４

「まほー」Ｄ４

「まほー」Ｆ４

「「「信じるか信じないかはあなた次第です」」」Ａ５，Ｄ４，Ｆ４

「バカみたいな話だな……」

「この完璧な和音を無視してそんなドライな反応をなさるとは……」

「大物だな」

「うるせー！こっちは必死に纏めてるんだよ！ってことはアレか！？ここで度々起こる謎の不思議現象は全部魔法使いが？」

「んなわけあるか。ここは素でおかすぃよね」

「あの木とか初めて来たとき『へし折ろうか』ってお兄ちゃん言ってたもんね」

そんな事言ってたのか、俺。

「なんか無茶苦茶だな……。魔法使いってのはみんなこうなのか？」

「まっさかー☆俺が規格外なだ、け？
さて、ここまで来れば大丈夫だろ」

あたりは結構な広さの森だ。
歩いてたらついた。

「ど、どこだよここ！まさか魔法で！？」

「いや、普通に歩いてたらついた。茶々丸、ここどこー？」

「家の裏です」

後ろを見てみるとマイ・Ｓｈｉｒａｎａｍｉハウスがあった。

「おお、これは奇遇な！」

「じゃあ茶々丸とエヴァは俺の今日乗ってったバイク取ってきてくれない？」

「いいよー。いってきまーす」

というわけで。

「ココまで来れば魔法を使っても大丈夫だから、見せてあげよう！
ラピ○ュタの雷を！！
阿呆の射手　光の一矢！」

あ、間違った。
矢はそのまま飛んで行き、一本の木にささった。

しばらく見ていると突然その木が光だし、下から火を噴いて空へ飛んでいく。
ただのタイプミスがこのような効果をもたらすとは……。
魔法を知らなかったちうたんは普通に驚いてる。ごめんね。

「今のも……魔法か？」

「……今のは阿呆だった」

「は？」

「再チャレンジなり！
魔法の射手　光の一矢！」

これも一本の木に当たり、爆発音とともに着弾点から半径１０メートルが削がれた。

「いやぁーこれでもかなりコントロールできるようになったのよ。
昔は何も考えずに撃ったら半径１０ｍ～１００ｍほどランダムに焦土と化してたからなぁ」

「……そんな嘘みたいな話……」

「あるんだよ。ただいま、お兄ちゃん」

「おお、お帰り。テンキュー！」

「どういう事なんだ？」

「ちうは今日もかわいいぴょーん！」

「ぶっ殺すぞ！！」

「お兄ちゃんはかつて、魔法使いで知らぬものはいないほどの大魔法使いだったのだ。
だいたい１５年ほど前までの話だな。世界最強の魔法使い、白波・Ａ・Ｒ・麟とはお兄ちゃんの事だ！」

「すごかろう」

「いや、言われても凄さがわかんねえよ。ってか１５年前って、あんたまだ０歳じゃねえのか？」

「は？６００歳以上と言っただろう。私は真祖の吸血鬼でな。不老不死って奴だ」

「先生もか？」

「いや、俺は何だろうな？人間でも悪魔でも鬼でもないっぽいし、新人類ヴェルダースオリジナルとでも名乗ろうかな」

「そんな甘くてクリーミーそうな……ってか二人とも人間ですらないのかよ！」

「「「えへへー」」」

「3人だったか……。ってか何で私に話した？」

「だって」「なんだか」「だって」「「「だってなんだもん」」」

てててー

「息が合ってるのは充分わかったから！！」

「うむ、この麻帆良には認識阻害の結界があってな」

「ああ」

「結界とか言われてわかるの？」

「いや、普通に生きてりゃ普通に聞くだろうが」

「で、麻帆良の中で多少おかしな事が起こっても大して気にならない訳だ」

「でもそれはお前に対して、何の効果も成してなかった。
何も知らずに巻き込まれるのはかわいそうだと、お兄ちゃんが貴様に情けをかけてやったのだ」

そ、そうだったのか……。
何にも考えてなかった気がしてたけど、俺そこまで考えてたんだな……。慧眼だな。
やるじゃん、俺。

「そうだったのか……じゃあ、私は変じゃなかったんだな……」

「辛かったんだろうな……」

「うぅ……」

エヴァがちうたんを抱きしめた！！
今ってそういう雰囲気だったの！？

「泣きたければ泣け。ここには私たちしかいないぞ？」

「別に……泣きたくなんか、グズッ、ない」

「ふん、強情だな」

けん玉しとこ。

けん玉簡単すぎｗｗｗｗｗ
玉穴だらけｗｗｗ

「麟様、家に戻りましょう。あとけん玉はそういう遊びではありません」

「フォイ……」

「さあ、顔を洗ってこい。その顔じゃ聞きたい事も聞けんだろ」

「悪いな」

「茶々丸、人数分のお茶を。ちうたんは紅茶でいいや」

「はい、麟様」

「さて、じゃあすっかりあたりも暗くなってるけどお待ちかね、質問タイム！と言っても知らん事は答えられないのよ？」

「魔法つ「質問するときは手を上げろ！嘘です、言ってみたかっただけです。続きをどうぞ」……
魔法使いって何なんだ？」

「え？魔法……つかう人だけど……大丈夫？」

「うるせえ」

へぇあ

「貴様にも素質はあるぞ、長谷川千雨。魔力量はそこそこあるようだしな」

「魔力量？」

「名前の通り、魔力の量だ。多ければ強いという訳でもないが、まあ無いよりある方が有利だな。
参考までに、私の魔力量はかなり多い。日本全土を凍土にできる程度だな。同じ魔法を使ったとしたら、普通の魔法使いでは一都市で限界だろう」

「なんかすげえ危険人物だな……。先生は？」

「さあ？地球に氷河期を再来させるくらいなら余裕だと思うけど、やった事ないしなぁ」

「……」

「お兄ちゃんの魔力量は測定しきれた事ないもんね！」

「最強だからな！」

「「「ＨＡＨＡＨＡ！！」」」

「アメリカのホームドラマか！
ってかそんなに強くて狙われたりしないのか！？」

「いや、別に？」

「かつては狙われもしていたがな、お兄ちゃんは冗談抜きで世界最強だ。いや、史上最強だな。
魔法においても、身体能力においても。当然、相手が世界中の魔法使いだろうとお兄ちゃんには勝てん。
更に言うと、お兄ちゃんは『シラナミ』を持つ者、自分に懇意なものに敵対する者以外には何も手出しはせん。
だから賞金も取り消され、こんな所で教師もできる」

「最強より最速の方がいい。最速だけど」

「その『シラナミ』ってのはあんたらの名前じゃないのか？」

「ああ、そうだ。そしてこの名前が持つ意味は『絶対手を出しては

いけない者』。
お兄ちゃん以外のシラナミに手を出したのものは皆お兄ちゃんが殺した」

「ころっ……」

「大量殺人犯でぇす☆」

「そんな引くな。貴様が生徒で、シラナミに何もせん限りは、お兄ちゃんは絶対手出しをせん。
そもそも、向こうから手を出さねば何もしなかったんだよ」

「あらやだわ、こんな美人に向かって漢だな・ん・て？」

「誰も言ってないよ、お兄ちゃん」

「まあ、そうか……。少しショックだっただけだ」

「気にするなよ！」

「ちなみに、今シラナミの名前を名乗るのはここにいる４人と、魔法世界のひとつの国だけだ」

「四人？魔法世界？」

「私、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル・シラナミ」

「私、絡繰・Ｓ・茶々丸」

「俺、シラナミチャチャゼロ」

「俺、佐藤裕也（、ェ、）ピャー」

「「「「……」」」」

「しらなみ、えー、あーる、りんでしゅ……」

「ってか待て待て！人形！！」

「チャチャゼロダ。御主人、コイツ引キ裂イテモイイノカ？」

「そんなことしたらお前の腕を引き裂くからな。
こいつは大昔、魔法で動けるようにした人形だ」

「私の姉さんです」

「魔法なら仕方ないな」

見事な思考停止だ。

「ってか魔法世界？国って？」

「ここは別に魔法世界ってのがあって、そこの町を救った時、町に『シラナミ』って名前つけられた。
いや、良いっていったけど。で、その町が発展して今や一国家」

「いや、すげえじゃねえか」

「ちなみに常に国王不在だ」

「あんたが国王なんだろ！？」

「ソ～ナンダロソ～ナンダロ」

「そうだ。お兄ちゃんが国王だ。「スルーか」
だから他国は『シラナミ』に対して強く出れない。
とは言ってもただの農耕国家だから、領土は広いが取るものも無い、
平和な所だよ」

「じゃあもしシラナミを騙った奴が犯罪でも起こしたら？」

「姓にシラナミが入らない者が重罪を犯した場合は死刑だ。
本国、魔法世界の連中は、シラナミ姓を持ってる奴を把握している」

「へー便利にできてんだな」

「お前が言うなよ！」

怒られちゃった☆
関係ないけど着替えよう。
スカートとか一回はいてみたかったんだよな。結構はいてるけど。

「ってか私にも魔法が使えるって？」

「何だ、使ってみたいのか？女子中学生だな」

「悪いかよ」

「いや、悪くないぞちうたん、しかし俺の地獄の特訓に耐える事が
できるならな」

「上等じゃねえか。どんな特訓なんだ?ってかいつの間に着替えた!?」

どんな特訓なんだ?

「なあエヴァ、どんな特訓なんだ?」

「さあ?茶々丸、どんな特訓なんだ?」

「わかりかねます。どんな特訓なんでしょうか、姉さん」

「イヤ、知ラネェヨ」

「よし!魔法とか使ってもらう!!」

「いや、それをどうすんのか聞いてるんだよ!!」

「んなもんアレをあーしてこーする感じで出来るんだよ!」

「実際はそんな簡単なものでもないから私が教えてやる。それでできるのはお兄ちゃんだけだよ」

「天才だからな!」

「なんかそればっかりだな」

「何、生まれ持ったものの違いさ。俺にだって出来ない事くらい、ある」

「ボードゲームが死ぬほど弱いもんね」

「あれは手加減に次ぐ手加減の末の結果だよ！！本気でやったら一瞬だから！碁石とか粉々だから！」

「砕いてどうする……」

粉にして飲む。

「さて、もう質問も無いようなので、泊まってく？」

「いや、どうなんだそれ？生徒が教師の家に泊まるって」

「学生が同級生の家に泊まるわけでもあるがな」

「ちなみにパソコンとネット環境は整っております」

「いや、別にそういう事じゃなくて……」

「じゃあばんごはん作るよ！」

「よろしく、お兄ちゃん」

「ご飯出来たわよー」

「わーい」

「わーい」

「ワーイ」

「ってかロボと人形！お前らメシ食うのか！？」

「ひ、ひどい！千雨さ……ちうたんは、ガイノイドには食事を取る権利さえ与えてくれないのですか！？」

「おい、何で言い直した、ボケロボ」

「テカ、魔力ニ変換出来ルカラ喰ウ事ニモ意味ハアルンダケドナ」

「「「「いただきまーす」」」」

「え？あ？い、いただきます」

「おいしい？」

「おいしいよ、お兄ちゃん」

「はい、やはり洋食はとても適いません」

「まあ、確かにかなり美味いな」

「俺ハ味ワカンネエケドカナリノ魔力量ガアルナ」

「あ、指切っちゃったからかな。
麟も指を切るって諺にならない？」

「ならないってか先生の血とか入ってるのかよ」

「何だ、そんなにうれしいか。
お兄ちゃんの指切れるほどの包丁なんてあったんだ」

「いや、最近調理器具一式指輪で作ってるからなぁ。そりゃ切れるわ」

「指輪？」

「ああ、また後でな」

「「ごちそうさまでしたー」」

「食細っ！いや、その体型だとそんなもんか？」

「燃費いいよな」

「いいよねー」

「別に残してもいいぞ？二人が食う」

「一人目です」

「何デ俺ガ二人目ナンダヨ」

「魔力変換機構搭載だからな」

「便利なもんだなぁ、それを一番先に使えるようになりたいわ」

「肉体改造すれば或いは……」

「やっぱいい！」

良い考えだと思ったんだけどな……。

０４１　世界最速、お泊まり会、前編。（後書き）

間に合え！！

追記

２３日に間に合わなかった豚野郎です。

昨日あんだけ大きな事を言っときながら更新できなかったって何よ。

ちうたんの魔法バレ回です。

ホントすぐに長谷川・Ｓ・千雨にしたい。

では、今回もありがとうございました。

明日はひょっとしたら忙しいから更新できないかもしれません。

ゴメナサイ

０４２　世界最速、お泊まり会、中編。（前書き）

らほーうぃ！

０４２　世界最速、お泊まり会、中編。

「ちうたん、俺らといっしょに寝る？多分グチョグチョになると思うけど」

「……帰る」

「では千雨さんはマスターの部屋で寝てください」

「和室に布団を人数分敷けばよかろう」

「ちうのホームページ更新しなくてもいいの？」

「別にそんな毎日更新してるわけじゃねえよ。ってか話聞かないなお前ら」

一家全員人の話を聞かない白波です。

「ってかあんたら実の兄弟じゃないんだな」

「ハァ？」

「何言ってんだ、ちうたん。シラナミは全員家族だから」

「でも血は繋がってないんだろ？」

「はたして血の繋がりにどれほどの意味があるのか、血のつながりというのはそれほどに大切なものなのか？」

「俺はシラナミが何より大切だ。それで充分だろ」

「そういうもんなのか」

「羨ましいのか？」

『羨ましいのか？』と『羨ましかろう』は俺の決め台詞みたいなもんだ。

ちなみにネギの決め台詞は『うんこ食べたいんだＺＥ☆』だ。今決めた。

「ちょっとだけ、な」

「言質取ったどぉぉぉぉおおおおお！！！！！」

「茶々丸、再生」

「はい。

ジーー・・・

『羨ましいのか？』『ちょっとだけ、な』

以上でよろしいでしょうか？」

「でかした。

そしてこれは即ち要するに、ちうたんが『シラナミ』に入りたい事に他ならない！！」

「え！？いや、別にそんな事言ってな……」

「そう遠慮するな、長谷川千雨。それとも何か？シラナミなどいらんと言うのか、貴様は？」

「そういう訳じゃ……」

「ならば良かろう！貴様は今、これからシラナミの者だ。誇りを持って名乗るが良い！」

「ちょ……！ちょっと整理させてよぉ……」

……

「まずい、茶々丸がオーバーヒートしている！！エヴァも鼻血を出している！！増血鬼にもなれたのか！
クソ、この場で無事なのは俺とチャチャゼロだけ……グボォア！」

「ニイサン！クソ、何テコッタ！史上最凶トマデ呼バレタシラナミガｋｏｎｏｚａｍａトハ！！」

「俺の墓には……『おちんちんランド、入り口はコチラ←』と……書い……て……」

「ニイサン！ニイサーン！！」

国家錬金術師ですｗｗｗｗ

「危ない危ない。何て攻撃力だよ、ちうたん」

「う、うるせぇ！そんな事で騒ぐなよ！」

「で、整理はできたのか、長谷川千雨。返事はハイかＹＥＳで答えろ」

俺はエヴァの鼻血を拭いている。

「うわっ、選択肢ねえ！まあ別にいいんだけどよ、名前変えるのは嫌だぜ。これでもけっこう愛着があるんだからな」

「何、みんな名前に足してるだけだ。お前も『長谷川・Ｓ・千雨』とでも名乗ったらどうだ？」

「緊急時はそう名乗るとよいでしょう。“こちら”の人間にはわかります。更に、普段から名乗っておけばその緊急時さえ来ない可能性が高いです」

「なんかすっげぇ便利だな。それならみんな欲しがったりしないのか？そのシラナミの名前」

「欲しがらないなぁ。やっぱ評判悪いしな」

「でも魔法世界にはお兄ちゃんのファンクラブもあるぞ。隠れファンの人数は知らんが表だってファンだけで１２０万人だ。ついでにいうと、こちらの世界にも数十万人規模のファンクラブがあるぞ。５０万だったかな」

「どんなチートキャラだよ！」

「モテモテやん、俺。（↑ファンクラブあるとか今初めて聞いた）
まず欲しがっても俺が好きな人にしかあーげない」

「好きって……」

「ちうたんの大ファンダカラー！結婚してもいいくらい」

「けっ……！！」

よく赤くなってるみたいで、麟ちゃん血圧がしんぱい。

「わたしもちうたんと結婚したいー！」

「私もです」

「俺ハイイカナ」

「何だ、冗談かよ」

ちょっと拗ねてるみたいだ。
かわいいんだから。

「え？本気だけど？」

「私とちうたんと茶々丸で三股だね！」

「近親相姦ですね」

「トテツモナイ節操ダナ」

「いやいや、まずこんな短時間で私の常識に大穴を空けにくるのやめろよ」

「えー、そんな信用ならない？」

後で結婚指輪買ってこよう。

今の給料の３０倍くらいの値段の。

これから就寝です。

「ごめんね、ちうたん、俺全裸じゃないと寝れないんだ……」

「私も全裸じゃないと寝れない」

「ちうたんは服着ててもいいから」

「今からでも帰る」

「そんな事をしたら次の授業は全裸でやる」

「そして私は、お兄ちゃんが長谷川千雨に脅された！！と言う」

「やーめーろー！！」

「どうぞ、千雨さん。客間のベッドメイキングが終わりました」

「命拾いしたな」

「うるせぇ！！」

「怖い話しようぜー！！」

「中学生か！なんて落ち着きのない６００代だ！」

「ごっ、ごめんね、ちさめおねぇちゃん。迷惑……だったよね？」

「い、いや、別に……」

「やーい引っかかったー！」

「寝る！！」

あ、出ていっちゃった。

「今のかわいかったよ、お兄ちゃん！」

「り、麟様、出来れば私にも今のを……」

「だめだよぉ！お姉ちゃんわがままばっかり言って！どっちがお姉ちゃんだかわかんないよぅ！」

「グハァ！！マスター……地球は……青かったです……」

「意味わからんが、その映像、後で出力しろよ」

茶々丸がサムズアップして沈んだ。

「じゃあ結婚指輪買ってくる。転移」

「いってらっしゃーい！」

「ませー」

茶々丸の挨拶がかつてないいい加減さだった。
何この。

というわけで、魔法世界についたった。１ドラクマがだいたい６２円ほどだから、このあたりで見繕うか。

「ちょっと、そこの町民よ」

犬とサツマイモのキメラみたいなおっさんに意気揚々と話しかける。

「ん？何だ嬢ちゃん？」

「このあたりに魔法の媒体を売っている店を知らんかね？」

「何だ、大仰な喋り方だな。それならそこの骨董屋にあるんじゃねえか？しらねえけど」

「ほう、すまぬな。これは例だ。取って置け」
するめイカをわたす。
「……」
「たのもー！」
カランカランカラーン！！
「うおっ！！なんだ、客か」
おにぎりの獣人みたいな店主が驚いてる。
あ、ちがうわ。おにぎりじゃなくてパンダだこれ。
「魔法発動体の指輪を買いたいんですがよろしいですねッ！！」
「いや、指輪はねえなぁ。杖ならあるが」
「いらねぇんだよぉぉぉおおお！！！指輪じゃないとヤダヤダー！！！」
「つってもねえもんはねえからなぁ。あ、王都シラナミの魔法専門店（マジックショップ）ならあるんじゃねえか？
あこの鉱山はいい石がよく取れるらしいからなぁ」
「俺あそこ嫌いなんだけど他にしらないの？」
「いや、しらねえな。メセンブリーナまで行けばあるかもしれねえ

が、バカみたいな距離だし」

「うーん。仕方ないか。テンキューおっちゃん。これいくら？」

「ああ、2ドラクマだが、ってか何で嫌いなんだ？」

「ほいよ、2ドラクマ。そりゃいつの間にか人を国王に祭り上げるキチガイ国家なんて好きなわけねえだろ。きっといっつも居ない国王とかも頭おかしいぜ」

「はは、確かにな。なんたってあの……っと、言ったら役人さんに睨まれらぁ。じゃあな、嬢ちゃん。名前何ていうんだ？」

「ナンパか？俺は男だぞ。シラナミ・リンだ。じゃあな、おっちゃん」

「……は？」

かっこつけたかっただけなんだよ。
ちなみにさっき買ったのはナスの形したはし置きだ。

「コンビニいてくる！」

今のってるこれは
ライドチェイサー　アディオン　というらしい。
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０５７８

w／
→のミッション・0．5話でもらった。

気色悪い形で、ホバーしてる謎バイクだがけっこう速い。
ちなみにウィリーしたら真ん中から折れ曲がる謎構造だ。
さらに障害物とかなんかビームみたいので破壊できる。意味不明。
あとは何故かジャンプできる。いや、普通のバイクでもできなくはないけど、なんか規模と挙動がおかしい。

ちなみに当然だけど、乗り味は普通のバイクと全然違う。

「ヒャッハーァ！！水だぁー！！」

ドカーン！と首都の門を破壊する。

「侵入者だー！！」

「まさか！ここはシラナミだぞ！？」

「つかまえろー！！」

王様虐待　俺様反対
特に意味もなく韻を踏んでみた。

「あばばばばばばばばｗｗｗｗｗｗ」

「おい、アレ国王様じゃね？」

「おい、国王様！門破壊すんじゃねえよ！！」

「あばばｗｗｗすんまじぇーんｗｗｗ」

「すんまじぇーんって何だよ！王様コノヤロー！」

何コレ、国王の扱いじゃなくね？

「今日は何しに来たんだよ」

「てめえらに用はねえんだよ！！クソどもが！！どけ、ハナクソ」

「ハナクソって言った方がハナクソだし、この下痢便王様！」

「てめえ様つければ何言ってもいいと思ってんの？オデノココドハボドボドダ！！」

「何言ってんだよう国王様」

「うんこ食おう様！？」

とんでもねえクズやでぇ……

「おばちゃーん、魔法発動体売ってよー、指輪型な」

「はいはい、いらっしゃ……なんだ、王様かい。はい、２６０万ドラクマ」

「何で俺こんな扱いなの？税金とか一円も取ってないのに。何故か王城がジャンボリーテントなのに。はい、２６０万」

ちなみに今の教師の給料がいろんな謎手当てがついて月５０万円だ。

「別に嫌っちゃいないよ。みんな親しくしてるんだ。いいじゃないか王様。ちょうど貰ったよ。じゃあね。さっさと帰りな」

「あばよクソババア！」

「ボっ殺すぞ王様てめぇ！！」

髪とか縦に伸びるのか。怖いな。

「ただいまー」

「おかえり、お兄ちゃん！」

「ちうたん寝てる？」

「そりゃもうぐっすりと。晩御飯にまぜたアレが効いたかな？」

「悪い顔してますよ、マスター」

「お前だってな、茶々丸。でも一番悪いのは晩御飯にアレをまぜたお兄ちゃんだよ？」

「「「ふっふっふ……」」」

「よし、じゃあ茶々丸はちうたんを連れて地下室へ。くれぐれも起こすなよ？」

「了解です、マスター」

「お兄ちゃんと私はすぐに地下室に向かう」

「よっしゃ、行こうぜ」

ちなみに料理にまぜた『アレ』はメラトニン。
米とかに含まれるリラックス効果があるホルモンだ。
当然俺もエヴァも食った。

０４２　世界最速、お泊まり会、中編。（後書き）

ライドチェイサー　アディオン
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０５７８ｗ／
→のミッション・０．５話で豚野郎がリーゼ様にもらいました。
これでコンビニ行った時、免許不携帯で切符切られました。
元ネタはロックマンＸ４。
超高性能すぎてＸとかゼロくらいしか乗れないはずなのに何故か麟が乗れてる……。
レプリロイドかよ、麟……。

さらっと１ドラクマ＝６２円とか言ってますけど独自設定です。
そんな遠くないよな……。

あっさり王都シラナミに触れましたが、こう見えても（？）農国です。鉱山とかもあるけど。
次回でお泊まり会終了か……。
纏められるきがしない！

では、今回もありがとうございました。

０４３　世界最速、お泊まり会、後編。（前書き）

お泊まり会編、終了！
じゃないんですよねこれが。

１ドラクマ＝６２．２６円かよと。適当です。

０４３　世界最速、お泊まり会、後編。

「う……ん……」

朝か。
この部屋は？
……ああ、昨日は先生ん家に泊まったんだったな……もっかい寝るか。

って「あれ？この部屋昨日の部屋と違わねえか？」

辺りを見回したら、いた。

麟先生とマクダウェルが同じベッドで寝てる。
っていうか私もそのベッドで寝てる。いや、寝てた。

「って待て待て！！！」

「あ、おはようございます。ちうたん」

「ちうたんじゃねえよボケロボ！ってか何でこいつらここで寝てやがる！そもそもここはどこなんだよ！？」

「うーん……お兄ちゃんうるさいー」

「うへぇあおっぱそももみもみ」

……おっぱそももみもみって何だよ。

「かわいいですよね。千雨さんも口元が緩んでますよ」

「は！？緩んでねえよ！！」

「いえいえ、間違いなく緩んでいました。この通り」

壁にさっきの私の写真が映し出された！

「消せー！！」

「うーん……」

言い合ってると先生が腰に抱きついてきた。
ちっさいな。それに暖かい。

「って起きろ起きろ！！」

先生をゆすって起こす。

「ん～……おはよー」

「何で同じベッドで寝てるんだよ」

「そりゃ同じベッドで寝たからじゃねえの？その点トッポってすげぇよな、最後までチョコたっぷりだもん」

「いや、意味がわからない」

「俺チョコって好きか嫌いかで言うと大嫌いなんだよな」

「ホントどうでもいいわ。ってかここだよ！どこなんだ！？」

「別荘」

「は？別荘？」

「一時間を２４倍に引き伸ばせるダライラマ魔法球」

「おはよ、お兄ちゃん。そんなチベット仏教の名跡みたいな名前じゃなくてダイオラマ魔法球だよ」

ダイオラマ？ジオラマか？

「というわけで、今起きた所でも外に出た時には、まだ一時間しか経ってないという計算だ」

「便利だなそれ。
で、何で私はそのダイオラマ魔法球の中に居るんだ？」

「そりゃ色々やる事もあるから……」

「やる事？」

「はい、これあげる」

「何だこれ、箱？」

先生から手渡された、濃い紅色の高級感がある箱を少し見てみる。
箱の上面には金色のプレートがあって何か彫ってある。

『Ｍａｒｒｉａｇｅ』

こんばんりんりん。
ちうたんに指輪をプレゼントしたんだって言ってんでしょーが！！

「なっ！なな！！おま、これ！」

「マリッジじゃないか。大切にしろよ、長谷川千雨」

「な、何言ってんだよ！！こんなもんもらったら、私はどうすりゃいいんだよ……」

「結婚☆」

「というか長谷川千雨、それは魔法世界にある魔法具店の、商品グレードの名前だぞ？」

「へ？」

「王都シラナミにある魔法具店、『Ｅｎｇａｇｅ－－エンゲージ－－』の中でも『Ｓｉｌｖｅｒ　Ｅｎｇａｇｅ』から始まってゴールド、プラチナ、ダイヤ、マリッジの順にグレードが上がっていく。金地に『Ｍａｒｒｉａｇｅ』としか書かれてないそれは最高グレードの商品だ」

「な、何だ、そういうものか……焦って損した」

と言ってちうたんが飲んだそれは俺のモーニングおコーヒー！！
砂糖入れちゃだめえええええ！！

「ちなみにキャッチコピーは『愛する人と共に』だ。良かったな」

「ブーーーー！！！」

朝シャン（砂糖入りコーヒー）の麟です。

「お兄ちゃん、いくらだったの？」

「２６０万。あの国の商品は安くはないけど品質がいいからな。口はクソ悪いけど」

「お兄ちゃんにだけだよ」

「って２６０万！？」

「何だ、魔法世界の通貨単位でだが？２６０万ドラクマだ」

「ってことはレートも日本円とは違うんだな。焦ったー」

「そうだな、日本円に換算すればだいたい……一億六千万円くらいか？」

「ブーーーーーッ！！！！」

朝シャン（二回目）の麟です。コーヒーでキレイキレイしましょ？

「そ、そりゃ流石に嘘だろ……」

「正確には一億六千百八十七万六千円ほどだな」

「給料（月給約５０万）の３００倍だぜ！まあ、持ってるから」

親指と人差し指で丸を作る。

「やだー、お兄ちゃんやらしー。うわっ、ベトベト……」

「傷つく。」

「ちょ、ちょっと待て！！流石にそんなするもん受け取れないって！！」

「遠慮するな。ホント持ってるから、俺。それに魔法やるなら発動体は要るし」

「お兄ちゃんは金を火の焚き付け代わりにできるほど持ってるぞ？したことはないが。それに、このダイオラマ魔法球とは別の魔法球があるが、そっちは５００万だ。端金なんだよ、お兄ちゃんからすれば」

別にそこまで端金じゃねえよ。まあ、あるけど。持ってるけど。

「とりあえずおふろはいってきていい？」

「あ……悪い」

「何をしているんだ、長谷川千雨。

いってらっしゃい、お兄ちゃん」

「ちうたんの口に含まれたコーヒーレロレロｗｗｗｗ」

「その幼女顔で言うな！きめぇ！！」

んふひひひひひひひひひひｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

えげつなく高いが、もらったもんなら一応見ておくかと思って箱を開いてみると

「これは指輪？」

銀色の指輪が入っていた。
先生のセンスはよくわからないが、ゴテゴテしてなくてシンプルな細身のリングだ。
細かい金色の柄が書かれている。
けっこう好きなタイプだな。

「そうだな。左手の薬指にはめてやる」

「ちょ！やめろ！！」

「ん？そうか、お兄ちゃんにはめてもらいたいのか。欲張りな奴だ！」

そ、そんな事言ってねえ！

「麟様は今お風呂に入ってらっしゃいますからね。行きますか？」

「行かねえ！」

「そんな事より茶々丸、言っておいた物は？」

「ええ、当然。今見ますか？」

「そうだな、せっかくだ。貴様にも見せてやろう」

「何の話だ？」

絡繰の目が光って壁に写真が写される。

これは……

「ちょ！何写してんだよ！！」

ビブリオ　ルーランルージュコスの私の写真が！

「……あ、いっけね。まちがった（棒）」

「わざとなんだろ！？」

「ホントはこちらです」

「麟先生か？」

壁には髪の短い麟先生が映し出されてる。
結構な美少年じゃねえか……。

「ひゃぁあああ！お兄ちゃん～～？」

「うわっ！人が変わりすぎだろお前！」

「会ったばっかりの頃はこんな感じだったんだよねー。ほらほらちうたん。これもすっごいかわいいでしょ！？
今のお兄ちゃんもかわいいけどこの頃のお兄ちゃんもかわいかったなぁー」

「はい、今のマスターも非常に愛らしいです」

「ってかお前その言葉のベクトルもかなり定まってないぞ！？」

「お兄ちゃぁ～～ん？」

「呼んだ？」

「うわっ！！」

突然後ろから長襦袢姿の麟先生が出てきた。

なんか盛り上がってるっぽいから声かけたらちうたんにめっちゃび

びられた。俺がびびるわ。

「あれ？俺髪こんな切った事あったっけ？」

「ああ、コラージュ画像ですよ。麟様の写真を加工して短髪にしました」

「何だ、言ったら切ったのに」

「ダメだよ」

怒られちゃった。

「この写真見てちうたんも『美少年じゃねえか』って言ってたよ」

「え！？声出てたのか！？」

「適当に言ったら当たってたパターンだな」

「たまにあるよね」

「チクショー！」

「そしてようこそ、シラナミへ！」

「……フン」

あれ？これはいいの？ダメなの？

あ、エヴァが満足そうに頷いてる。いいんだ。

「そうそう、指輪つけた？」

「え？いや、まだだが？」

「じゃあつけたげる。手」

「何だよ」

「出せよ。手出せよぉおおおおお！！！」

「出すからそんな勢い良く泣くな！！」

「ちょっとまって、この指輪左手の薬指にはめないと効果薄いから左手出して」

「一応聞くが、何でだよ」

あ、信用してないな。
本当なのに。本当に嘘じゃないことなくないのに。

「魔力が体を循環するよね。その時、魔力を送り出す機能が血液にもあるんだよ。で、外から取り込んだ血液が一番初めに通るのが心臓。で、全部の指の中で一番心臓に近いのが左手の薬指なの。だから左手の薬指じゃないとダメなの」

俺の猛攻でちうたんはへのへの（？）だァーッッ！！

「そ、そーなのか？」

「だから、手」

「それでも、その、こういうのは一番大事な人に……」

「おい、貴様お兄ちゃんがこれほど……」

「いやいい、エヴァ」

「先生？」

「どこの指につけても合うように出来ているから好きな指につけていいよ。
その代わり俺の事が一番になったら言えよ？左手の薬指につけてやるから」

ひぃー！
このセリフめっちゃヒーローやでえええ！！
俺かっけえええええええ！！
ちうたんも赤くなってるしよ！！！
これ大勝利やろ！！

「まだ……ここだな」

そう言った真っ赤なちうたんは左手の人差し指にマリッジをはめる。

敗北を知りたい……

０４３　世界最速、お泊まり会、後編。（後書き）

左手の人差し指の意味は積極性。
王都シラナミがどんどん万能になっていく。

次回はちうたんの教育的なアレです。
いや、豚野郎の事なんで、正確にそうなるとは言えませんが。

はぁ、アルポータル……。
この小説終わったら次は謳魔法持って別世界入りしようかな。
まだ終わる予定全くないけど。

ございます　と書こうとしたら　ごあじます　になる右手と左手の同期が取れていない豚野郎ではありますが、これからもよろしくお願いします。

では、今回もありがとうごあじました。

追記　機能が昨日になってました。魔力を送り出す昨日っていつだよ……

０４４　世界最速のロゴマーク。（前書き）

画像はありません。

０４４　世界最速のロゴマーク。

海辺の俺、白波麟です。
ハァァァァアアアアアアアアアアアアアアアド・ボイルドだぜ。

「まずそのマリッジやねんけどな、指輪自体の名前は『マリアージュ』。意味は、まあ知らなくてもいいや。
んで、使い方よ。いくつか効果もあってね。
魔力の貯蓄。大魔法5回分ほどの魔力が貯められるっつってんだろうが！「いや、知らねえよ」
魔法の吸収もできる。大魔法5回分ほど。
魔法の抵抗（レジスト）。そこそこの魔法の効果を弱める事ができる。ザコの魔法の射手くらいならノーダメージじゃね？まあ吸収したら完全勝利だけど。
んで身体能力あっぴ。あっぴ？アップだな。貯めた魔力を身体能力の強化に回せる。
ちうたんのおっぱいもみもみ。「死ね！」
そして魔法発動体にも使える（本当はこれがメイン）。
注意点は、俺が魔法の射手を本気で打ったら多分無駄。そのくらい」

「それはすごいのか？」

「普通の発動体なら、それこそ魔法を撃つだけでいっぱいいっぱいだ。
練習用の杖なんかだと、ちょっとした魔法で壊れたりする」

「ちなみに俺は練習用の杖を持って敵陣に突っ込み、思いっきり魔力を流して、簡易グレネードとして使ってた」

「スタングレネードほどの効果しかなかったけどね」

「へぇ、そんな使い方もあるのか」

「そんな事できるのは俺だけ。じゃあ魔法の使い方な。

まず装備した状態でお空に響かせるつもりで呪文を唱えます。

ピリカピリラァァアアアアアアアア！！！！！！！！」

ドーン！と、砂浜の一部が消し飛ぶ。

「だいたいこんな感じで」「出来るかぁぁあああ！！！」

無理らしい。

「こっちにこい、長谷川千雨。お兄ちゃんが天才すぎて着いてこれんだろう。私が教えてやる」

「茶々丸ェ、人生ゲームやろうぜー」

「その“ェ”はどうやって発音したのでしょうか。ともあれたった二人で人生ゲームですか。かまいませんよ」

「ふはは、貴様如きがこの俺様に勝てると思うなよ？」

・・・・・・

「もう……てく……んだよ……。

もう許してくださいっつってんだよォォォオオオオオオ！！！」

「うわっ、先生ホント弱いんだな」

「お兄ちゃんはボードゲームなら運まかせのゲームだろうが敗率１００％だからな！」

「ふふっ、どうしたんですか、麟様？どうやったら二人で遊んでて借金２兆円とかになるんですか？」

「……俺、死ぬ☆」

「あぁっ！白星！！」

「負けたのに往生際が悪いですよ、麟様」

「うるせー☆死ぬっつってんだろ☆ってか何でちうたんここに居るんだよ☆練習してたんじゃないのか☆」

などと喚きながらジタヴァタと寝転んで暴れまわる。

「うざっ！さっき一個魔法使えるようになったんだよ。うざっ！」

「火よ灯れが使えるようになったんだよ！」

「マジ？見せるべき。死にたくなければはやく見せるべき」

「プラクテ　ビギナル　火よ灯れ！」

ぽっ……と、かなり優しい火が指の先に灯った。

「クッ……やるじゃねぇか……タバコにも火がつけれるレベル」

「いやいや、たかだかあの程度の魔法でああなるお兄ちゃんがおかしいんだよ」

「どうなるんだ？」

「こうなる」

ゴオォォォオッ！などという音と共に火柱が上がる。

「……そっちの方がすげぇじゃねえか……嫌味か？」

「いやいや、こういう魔法じゃないからね！そのちっさい火が本来あるべき姿だから！火柱が上がる魔法じゃないから！！」

「お兄ちゃんは非殺傷魔法を殺人に使えるからね」

「求めちゃいねえ！！」

「ところで先生がつけてるその指輪、それもそこで買ったのか？」

あ、そう言えばこんなんあったな。

あれ？誰かにもらったんだっけ？

「それはお兄ちゃんと初めて会ったときからつけてるよね？どうしたの？」

「いやぁ、誰かにもらったような気がするけど全然覚えてないわぁー。むしろ良く覚えてたな、エヴァ」

「そりゃお兄ちゃんの事だもん」

「「ねー」」

「で、そりゃどういうもんなんだ？」

「ああ、何にでもなる」

「は？」

「だから何にでもなるんだよ。ほれ」

そう言って調理道具を作る。

「あとはこんなんも」

調理道具一式を消してＣＲ８０を作る。

「便利なもんだな。それも魔法具か？」

「さあ、魔法具なの？」

「魔力は全く感じられないから魔法具じゃないと思うんだけど、なんだろ？」

「って持ち主が知らないのかよ」

「いや、覚えてないだけだ」

「威張るとこじゃないな」

へっ！

「これから教えるのはとても大事な事だからしっかり覚えておくように！」

「はい！」

「はーい！」

「はい」

「エヴァと茶々丸はいい。まずは足を肩幅まで開く」

「こうか？」

「で、服の袖をつまむ」

「ふんふん」

「引っ張りながらこう言う」

「……」

「ヂャッヂメントディスノ！！」

ズコーーー！！

ってこけないで！！

「なにやらすんじゃーー！！」

「やっぱり一目でシラナミってわかる目印がほしいよな……」

「無視すんじゃねえよ！！」

「よーし、解散解散！！これから俺はシラナミのロゴを作る！」

「コラー！！」

「ほら、行くぞ、長谷川千雨。いや、もう家族だしちうと呼ぶべきかな？」

「そうですね、行きましょう、ちうたん」

「もうどうこう言わねえからせめて千雨って呼んでくれ……」

ちうたんが引っ張っていかれた。あふん？

「さて、この『闇の福音』、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル・シラナミの教えを受けるからには、貴様には人間最強の魔法使いになってもらうぞ！と言いたいところだが、どうせお兄ちゃんが守ってくれるからそれほど強くならなくてもいいだろう。少しくらい自衛ができれば良しとする！
そして名前のA・Kはお兄ちゃんにつけてもらった『アタナシア・キティ』の略だ。羨ましかろう！！」

「あ……あぁ」

何だコレ……

「ちなみに始動キーだが、魔法がある程度のレベルに達したら考えろ。何なら一緒に考えてやってもかまわんが、普通は自分で考えるものだ。
そして私のリク・ラク・ラ・ラック・ライラックはお兄ちゃんに考えてもらったんだ。羨ましかろう」

「そうだな。
でも今使ってる始動キーは先生のもんなんだろ？」

「いや、あれは魔法学童児用（ビギナー）の始動キーだぞ？」

「じゃあ何でそんなもん先生が使ってるんだよ？」

「私が聞いたときは、『別に魔法とかそんな使わんしのうのう』と言っていたぞ」

「そうなのか？」

「魔法など使わなくても充分強いからな」

そんなもんなのか。

「では他の魔法を覚えてもらう事になるが、見るからに闇の魔法が得意そうな顔をしているな」

「どういう意味だよ」

「そのまんまの意味だ。魔法の射手を使ってみろ。呪文は『魔法の射手　闇の一矢』だ。
さっきも言った通り、発動体が自己と外を繋ぐ扉、橋である事を意識しろ」

目を閉じ、意識を指輪に集中させて呪文を唱える。

「プラクテ　ビギナル　魔法の射手　闇の一矢」

人差し指の指輪に力が集まる感覚がある。……が

「ダメだ……」

「目は開けていていいぞ。射手というくらいだ。目を閉じていては普通当たらん」

「そりゃそうだな。絡繰は魔法を使わないのか？」

「私のことは是非茶々丸、とお呼びください。
私は魔法が使えません。ですが魔力を使ってこういう事が出来ます」

そう言って背中辺りからガシャン！と鳴ったと思えば空を飛んでいた。

わかってても慣れないもんだな……。

「ちなみに茶々丸の兵装には魔法を使ったものも多くあるぞ」

「そりゃ便利なもんだ」

「肉体改造すればあるいは……」

「それはもういい！」

結局、魔力が集まる感覚はあったものの、その日は魔法を撃てなかった。

「そんな一朝一夕で身につく訳がなかろう。皆苦労して覚えるものだ」

「ま、そりゃそうか。一つ使えるようになっただけでも万歳って訳だな」

「ただいま戻りました、麟様」

あ、みんな帰ってきたか。

「まじか。わかりやすそうなシラナミのマークできたけどどう？」

ドラッグレーサーマシン風にアルファベットを並べたロゴマークだ。我ながらいかしてる。

「素敵だよ、お兄ちゃん！」

「かっこいいです」

「悪くないんじゃねえか？」

「横に伸びすぎた。これもうドラッグレーサーだわ。アリだな。これをワッペンか何かにしよう」

「そうだね、お兄ちゃん」

「ところで、そろそろこちらに来て２４時間が経過いたしますが、帰りますか？」

「おお、帰ろう帰ろう、そうしよう！」

「もうそんな経ったのか。って、そういう言い方するって事は２４時間経たなきゃ帰れないって事か？」

「そうですね。さあ、そろそろです、行きましょう」

「わぁい！」

帰った。

０４４　世界最速のロゴマーク。（後書き）

『帰った。』って何やねん。
どんだけ手抜くねん。

ちうたんが魔法『チャッカマン』を覚えました。

前書きの通り、ロゴマークの画像はありません。
考えてもいません。
つくろうかな？

なんとか日が変わる前に投稿したいので、この辺で失礼いたします。
明日はえげつないハードスケジュールのため更新できるかわかりません。
では、今回もありがとうございました。

０４５　世界最速、メタ発言。（前書き）

これはひどい

０４５　世界最速、メタ発言。

「夜じゃねえか」

「一時間って言ったじゃん。まだ夜中の３時じゃん」

真夜中の麟です。

「寝ようぜ」

「そう言いながらナチュラルに同じ布団に入ってくるお前らを見てるとどんな顔すればいいのかわからなくなるな」

「笑えば……いいと思うよ？」

「うるせぇ」

※一緒に寝ました。

～朝～

「おはピース☆麟にょん☆」

「お兄ちゃんウザかわいい！」

「麟様、臭カッコイイです」

「先生キモめんどくさい」

「あれ？ちうたんのだけパーフェクト悪口じゃね？いいの？俺のワイングラスより薄いガラスのハートが粉々に砕け散っちゃうよ？」

「散れよ」

「もう食事が出来ますよ」

顔を洗って食卓に着く。

「うぇへうぇぁーい！！（いただきます）」

「「「いただきます」」」

「うまっち、うもっち（とてもおいしいですね）」

「本当ですか？ありがとうございます」

「今先生何て言ってたんだ？」

「うまっち、うもっち　と言っていました」

「ぺぺぺぺぺぺ（あばばば）」

「もう意味がわからん」

「お兄ちゃん、お行儀が悪いよ」

「往生際も悪いです」

「性格と態度もな」

「そうだ、俺死ぬ（そうだ、俺死ぬ）」

「送っていかなくても大丈ビ？」

「大丈夫だって」

「私もついていきますのでそんな心配しないで下さい」

「しっ、心配とかしてねえし！！別に何かあってもかまわねえし！！」

「茶々丸、涙目お兄ちゃんブロマイド」

「ほいきた」パシャ

「さっさと帰っちゃえ！！」

「いや、だから帰るっつってんじゃねえか」

「ジャアナ」

「エヴァ、何でチャチャゼロ機嫌悪いん？」

「ここまでほとんど全く出番が無かったからじゃない？」

「むしろ、私たちの出番の多さによって姉さんのキャラがぶれない事に感謝してもらいたいくらいですね」

「チョット何言ッテンノカワカンネエナ」

「また来い。貴様なら歓迎してやる」

「ああ。じゃあな、エヴァ」

「おっぱいぱい」

「先生はまれに死ね」

「まれに死ね!?どういうこと？ねえ、ねえ!?ああ、無視して去っていくちうたんの背中が凛々しい!!」

日の丸を背負う幻影が見えました。

「ひ～まひまひまひ～まひま～」

3日に一回カラオケに行かないと死ぬ。嘘だよ。

「お兄ちゃん、囲碁やろうよ～」

「チャチャゼロとやれ。俺は寝転びながら歌を歌うのに忙しいんだ」

「じゃあ仕方ないね。おい、チャチャゼロ、囲碁やるぞ」

「妹トヤレヨ。俺ハニイサンノ歌ヲ聴クノニ忙シインダヨ」

「おい茶々丸、囲碁やるぞ」

「あ、すいません、マスター。今姉さんの関節の掃除中なんで後でいいですか？」

こいつどんどんふてぶてしいな。

「む～！！」

ふくれっ面エヴァを脳内ＳＳＤに保存。

保存した画像を脳内Ｄ，Ｅ，Ｆ，Ｇドライブにコピー。

左手に持ったスケッチブックに鉛筆で出力。

出力したふくれっ面エヴァを額に入れて飾る。

この間なんと3秒!!

「ほらほら、見て」

「なんと、これは素晴らしい。私にも一枚いただけませんか?」

「ちょっとまってな、ほれ」

「ありがとうございます。シラナミ家の家宝にします」

「もうなってる」

「タイシタモンジャネエカ。ニイサン何デモ出来タンダナ」

「何でもじゃないわよ。出来ることだけ」

後ろにネコの幻影を浮かばせる。

「お兄ちゃんは声も変えれるしね」

「そう言われてみればそんな話もあったな。022あたりで」

「今日はメタくさいね」

「いつになくバイト先の雰囲気に流されてるんだろうな」

「バイト先……ですか?」

「あれ?俺今何か不思議なこと言ってたな」

「オ前ラ本当ニ今日ハ好キ放題ダナ……」

「あ、そうそう、３－Ａに幽霊がいるって階段な」

「怪談だよ、お兄ちゃん」

「麟様はおっちょこちょいですね」

「何で会話なのに漢字の違いがわかるんだろうな？
さよっぺがさぁ、さよっぺがさぁ。俺にとり憑こうとしてんのよな」

「あの色白幽霊が？何でまた」

「ナチュラルに話しかけてもうたんよ。で、いっその事取り憑かせようと思ってね」

「ふんふん」

「所で、そのさよっぺ？というのはどなたでしょうか？」

「例のクラスメイトの幽霊。コイツ一人でクラスの平均点を大幅に下げるとんでもない奴さ。
で、思ったから超とハカセにさよたんのＢＯＤＹを作ってもらったんだよ」

食器棚の下の引き出しからさよボディ（実物大）を出す。

「おお、さすがお兄ちゃん！」

「どう見てもこのサイズのボディが入る引き出しじゃないのにぬるっと出てきましたね」

「ちなみにこの状態だと完全にカカシだけどここにさよっぺが乗り移る事によってぬるぬる動ければいいなぁ」

「いいねぇ」

「それはそうと、前回のロゴをピンバッジにしたから先に三人に渡しておく」

「わーい（前回？）」

「ありがとうございます（前回？）」

「マア貰ットクゼ。……前回？」

「前回。わかりやすいところに付けるも良し、持ち物に付けるも良し、付けないのも良し」

「茶々丸、私の耳に初ピアス穴を開けるぞ」

「どっこい。いつでもどうぞ」

「らめえええええ！！服とかにつけるべし！」

「はぁい」

「イツモ以上ニ今日ハ意味ガワカンネエ」

疲れてんだな。今日は寝よう。

０４５　世界最速、メタ発言。（後書き）

ほんとごめんなさい。
思考能力に著しい障害があるようです。
一時的なものだと思います。

昨日、結局帰ってきたら日が変わっていて、今朝からレクリエーションと言う名の拷問を受けていました。
バトミントンなんですが、まさかラケットを振ったくらいで筋肉断裂とは……。

ｈｔｔｐ：／／３８５８．ｍｉｔｅｍｉｎ．ｎｅｔ／ｉ３００１７／
ロゴです。ホイールベース長いです。

では、次回はちゃんとやりますのでどうかお願いします。
今回もありがとうございました。

０４６　世界最速、ＧｈｏｓｔＷｉｆｅ。（前書き）

遅れました。

０４６　世界最速、ＧｈｏｓｔＷｉｆｅ。

『……うらめしや……』

「ほーん、やっぱバカだわネギ先生」

「そ、そんなぁ……」

「『すぉーんぬぇあー』じゃねぇんだよ！クソボケ！」

「そ、そんな事言ってないですよぉ！」

やっぱり気付いてもらえないですよね……。この前出席を取った時に呼んでくれたのもきっと気のせいなんですよね……。

『あのぉ……うらめし……』

「うるせぇ！てめぇに怨まれる謂れも覚えもねぇんだよ！すっこんでろ！」

『ひぃっ！ご、ごめんなさい、ごめんなさい！』

「わぁっ！ど、どうしたんですか、麟先生！？」

「あ？何でもねぇよ！何でもねぇんだよ！」

あれ？

今……私に言ってたんですよね？

『ねえ、見えてるんですか！？聞こえてるんですか！？』

もう少しだけ……頑張ってみます！

『ね、ねえ、見えてるんですよね！聞こえてるんですよね！！先生！！』

「見えねえ聞こえねえ」

『なんだ、聞こえないのか……ハァ……。って返事できるって事は聞こえてるってことじゃないですかー！！』

「ぬむぬぬーん！！聞こえぬったら聞こえぬーん！！」

『ぬ、ぬーん？』

「そして貴様に体をくれてやらん事も無い」

『ほっ、ホントですか！？』

「ウッソー☆というのはウッソー☆というのがウッソー☆というのもウッソー☆さあ、どっち？」

『え？あ、えーと、えーと！』

「正解はあ・げ・る・でしたー！ハイ残念☆タイムアップー！！というわけで、このデコイに入るんだよさよっぺ！時間が無い！さあ！早くしろ、間に合わなくなっても知らんぞ！！ハリーハリー！！」

『は、ひゃいっ！』

さよっぺを急かす麟です、こんばわ。
実は、夜中の学校に忍び込んでいます。

そしてこのさよっぺ用の体、なんと人工筋肉と人工血液、及び強化ゴム製人工皮膚にカーボン製骨格を使用した完全オーダーメイド製だ。
人間と何ら変わりない挙動が出来るようになっている。
人間用の体じゃないから、脳移植したって動かないけど、幽霊ならなんかいけそうな気がする。
なんたってこの日のためにオカルト板で知り合った大学生に凄腕の霊能力者を紹介してもらって、その霊能力者からイタコさんを紹介してもらって、そのイタコさんに大学生を紹介してもらって、大学生に凄腕の……

とにかく、もらってきた霊媒用のステキなロープが脊髄を通るように通してある上に、なんかいけるかも知れない（？）から魔力を溜める指輪を心臓部にブチブチ込んだからね。

「……気分はどうだ、ＢＡＢＹ？」

「す、すごい！触れる！机にも椅子にも先生にも！！」

「ひっふぁるなよさよっふぇ」

「ひゃぁ！す、すいませんべっ！！」

「慣れない体ではしゃぎ回るからそんな事になるのよ、情けないわね」

「す、すいません、ごめんなさい。私、幽霊のときもよく転んでたんです」

「リンケージきたら浮くからシュレリア様でさえ転ばないっつーのに器用なＧＨＯＳＴやでぇ」

「しゅれりあさま？」

「さぁ、誰だろ？」

誰かシュレリア様を知りませんか？

「そんな事より全裸で走り回るのはトレンドなの？目のやり場に困るんだけど、胸を見ればいいの？股を見ればいいの？ケツを見ればいいの？」

「ひ、ひゃぁぁあ！そ、そんな見ないでください……」

「うなじもええのうｗｗｗおお、髪で隠すか！その背骨もえろいｗｗｗｗ座ったときに地面に押し付けられる尻もｗｗｗｗ」

「ひーん！ひーん！！」

「いい泣き声だな。感動的だ。だが、無意味だ」

背徳感おいしいです＾ｑ＾

「お兄ちゃん、もう許してあげたら？」

「んむぅー！もっとからかうー」

「もう、仕方ないんだからぁ。
という訳だ、我慢しろ相坂さよ」

「そんなぁー、助けてくださいよぉー」

「もう、仕方ないなぁ。この服を着るといいよ」

と言って服を渡す俺紳士。

「あ、ありがとうございます……」

「ひん剥く楽しみが増えたでゲスｗｗｗｗブヒヒヒヒヒヒｗｗｗｗ」

「ひゃぁぁぁあああああん！！」

「グスッ……ひぐっ……ひっ、ひどいですよぉ……。もうお嫁さんに行けません～」

「フゥハハー！なら俺がさよっぺを嫁に貰えばいいんだな！！」

「わぁ、お兄ちゃん大胆～」

「男は度胸、何でもやってみるのさ」

「きっと気持ちいいぜ」

「「いぇー」」パンッ

「あのぅ……」

「何だ、相坂さよ」

「その、私をお嫁にもらってくれるって……ホントですか？」

「ならば問おう！お嫁になってくれるんですか？」

「えっ！？あ、あのぅ、そのぉ……、会ったばっかりですし、お互いのことをもっとよく知ってから、あのう……」

「そんなもん、これから知っていけばいいんじゃないか。な？それとも、さよは俺のこと……嫌いなのか？」

「い、いえ！そんな事ありません！！」

「ならば良いではないか。お兄ちゃんの嫁になれ、相坂さよ」

「は……はい！よろしくお願いします！！」

お嫁さん、ゲットだぜ！！

「わぁ、ホントに歩いてる！うれしいなぁ！」

アハハンウフフンとさよっぺが憑いてくる。

いや、もう嫁になるんだし、さよっぺもないよな。

「おい、さよ」

「あ、はぁい」

「お前は俺の嫁になるんだし、これからはさよって呼ぶわ」

「は、はい。じゃあ私は麟さん……と」

「んへへー」

「おい、帰ったぞ」

「お帰りなさいませ、マスター、麟様。そちらの方は、相坂さよさんですね。

私からは一応、初めましてでしょうか。出席番号１０番、絡繰・シラナミ・茶々丸です」

「あ、これはご丁寧に。１番、あいさ……白波さよです」

「ん？もう名乗るのか。なら私も、貴様をいつまでも相坂さよとは呼べんな。よろしく、さよ。これから貴様も白波（うち）の家族だ」

「そうだそうだー！」

「ふふっ。よろしくお願いしますね」

この後、チャチャゼロの紹介とか、そんなんもした。

「ナンカオ前、俺ト似テル気ガスルゼ」

「へ？そうなんですか？」

この人はチャチャゼロさん。
３人目の『シラナミ』だそうです。
シラナミって麟さんの苗字ですよね？

「ソレ、オ前ノ体ジャナカッタンジャネエカ？」

「そうですね。今日いただいたばかりです」

「フーン。マ、頑張ンナ。砂トカ吐ク事ニ……ッテ、オ前ハニイサンノ嫁ダッタナ。ジャアオ前モ吐カセル側カ……」

「へ？何ですか？」

「何デモネエヨ。デモ、コレカラ色々大変ダト思ウガ、ニイサンに愛想尽カサナイデヤッテクレ。
ニイサンハ、節操ガ甲斐性ノ１００ブンノ１モナイガ、イイ人間（？）ダカラナ」

「浮気性って事なんでしょうか……」

「イヤ、アリャアソンナモンジャネエヨ」

「も、もしかして、チャチャゼロさんも麟さんのお嫁さんなんですか？」

「ブーッ！！」

ワインをかけられちゃいました。お酒くさいぃ……。

「ソンナワケアルカ！ニイサンガ人形ニ手ェ出ス訳……」

「出す訳？」

「……アルカモシレネエナ。何セ、妹ニモ手ヲ出ス位ダシナ……」

「え、えぇ～！？い、妹ってエヴァさんですか！？」

マクダウェルさんって呼んだら「他人行儀だから貴様もエヴァと呼べ、さよ」と言われてしまいました。

「イヤ、確カニ御主人ニモ手ヲ出シチャイルガ、俺ガ言ッテルノハ、俺ノ妹、茶々丸ノ方ダヨ」

「じゃ、じゃあ麟さんは、ご友人の妹さんにも手を出すほどの……」

「イヤ、マア本人モ悦ンデルミタイダシ別ニイインダガ……」

麟さん……あなた一体!?

「えくちっ!」

「お兄ちゃん、くしゃみまで可愛すぎるよぉ!」

「んあれー?誰か俺のこと噂してんな」

「ベタだねー」

「せやねー」

同衾は籍を入れてからですっ!お母さんが言ってました!

って言われたからエヴァと同衾してまうまう。
通常営業やねんな。

「まあいいや、寝ようぜ、エヴァ」

「うん、おやすみ……んちゅっ……」

余は満足じゃ。

０４６　世界最速、ＧｈｏｓｔＷｉｆｅ。（後書き）

ＫＣＮの代理店なのにインターネット繋がらなくなるって何事なん？
ってのが昨日の話です。

さよっぺシラナミ計画。
修学旅行に連れて行ってあげたかったんです！！

はぁ、清水寺行きたい……。
奈良とかホントいつでもいけますからね。
ってか、ここが奈良です。

そういえば今日、バイト先の裏にものすごい大量の毛虫が群生してました。
マジで毛虫の絨毯。
夢に出ます。

では、今回もありがとうございました。

０４７　世界最速のお嫁さん。（前書き）

タイトル考えるのに一番時間使ってる気がする。

追記：→とか言いながらタイトル入れ忘れてたｗｗｗ

あたいのバカ！アホ！ボケ！

麟がぬめぬめとヒュムノス語を使ってるシーンがありますが、気のせいか何かです。

０４７　世界最速のお嫁さん。

白波さよです。
今日は旦那様の家に暮らし始めて一日目の朝なんです。
とは言っても、まだ籍を入れていないので一緒には寝れないんですよ。
お母さんも言っていました。

コンコン……
「麟さん、起きてらっしゃいますか？」

「ん～」

とってもかわいらしい声が聞こえます。
私よりも背の低い、私よりかわいらしい、とっても博識な、私の旦那様。

「失礼します」

そう言って部屋の中に入ると、麟さんはまだお布団に包まって寝てました。

「んぅー……んちゅ……」

親指をくわえて体を丸める麟さんは……

「かわいいでしょう？」

「あひゃぁっ！！茶々丸さん！？」

「んんぅ……」

「お静かに。
……さよさん、ひとさし指を出してみてください」

「は、はい。こうですか？」

人差し指を立てます。
すると茶々丸さんが麟さんの口から親指を出して、私の指を麟さんのお口の中に……

「んちゅぅ……」

「んひゃっ」

すると、麟さんは私の指を吸い始めちゃいました。

「ぅん……んじゅ、ちゅ」

「やぁ……はぁ、ん……」

「すごいでしょう？」

「んっ……離して、くださいぃ、麟さぁん……」

「ふふふ、無駄ですよ」

「んー……何だ、さわがしい」

「おはようございます、マスター」

お布団の中から裸のエヴァさんが出て……

布団が取れたら、辛うじて下まで見えないものの麟さんも裸で……

「なっ、なな、なんで……」

「なんだ、さよも居たのか。私たち兄妹は全裸じゃないと寝れんのだ。っん～！」

「い、いっしょのお布団に!?そう言えば昨日チャチャゼロさんも……！」

「兄妹なんだから別に不思議でもなかろう。お兄ちゃん、起きて～」

そう言ってエヴァさんが麟さんをゆすります。

「んぢゅっ……」

「あ……」

麟さんのお口からよだれが……

「もう、また指吸って、お兄ちゃんったらぁ。んちゅっ……んむぅ……じゅるっ……」

え、エヴァさんが麟さんに……きっ、キ……

「きすぅー……」

「おい、どうし……！さよ……お……」

「んふぁー……ん？どないしたん？」

なんか起きたらさよがもたれかかってたりんだほい。

「さぁ？」

「きっとこの朝だけで起こったあまりの事に、脳の容量をオーバーしてしまったんでしょう」

「あまりの事？何があったんだよ？」

「さぁ？」

「今日も平和ですね」

色々準備も終え、食卓についた。

さよは椅子に座らせてある。あれから2時間も経つのにまだ寝てるなんて、将来有望じゃん。

「ん……うーん……」

「おお、起きたか」

「お、おぁよーございまふぅ……」

「ちなみにもう朝食だ。いただきマッソォォォォォウウ！！」

「「いただきます」」

「へ？あ、い、いただきます！」

ぺちこぬーん！と両手を合わせて威勢良く挨拶をするさよ。

「おいしい！おいしいです！」

「そうですか？そう言っていただけたなら作った甲斐があります」

「ホントに……ぐすっ、こんなおいしかったんだぁ……」

「涙腺緩っ」

「おいしい……うぅ、おいしいよぉ……」

「私の奈良漬けをやろう」

「わたしの沢庵もどうぞ」

「俺のポークビッツも……そんな目で見ないでください……」

「あ、そうそう、間に合うかわかんねっけど、早けりゃ今日中に転入手続きやら何やら終わらせるから心構えだけしといて」

「え？て、転入ですか？」

「いや、復帰にしとくか？……まあじじいに相談して決めるか。とりあえず、今は朝だから相談する相手は牛乳な」

「学校に行けるんですか！？」

「あァ！？当たり前だろォが！！」

「ひぃ！す、すいません！！」

「ああ、気にするな、さよ。お兄ちゃんは発作的に叫ぶ病気にかかってるんだ」

なにそれこわい

「いってきまァァァァァアアアアアアアアアア！！！！！！！」

「「いってきます」」

「い、いってきます！」

「時に、さよは車とバイク、乗るならどっち？」

「私は……麟さんの好きな、バイクに乗ってみたいです」

「んっふふふへへｗｗｗならば着いて来い」

「はい。茶々丸さんとエヴァさんもバイクなんですか？」

「はい。麟様に買っていただきました」

「ああ。お兄ちゃんに買ってもらった」

「へぇー。お金持ちなんですね」

「それなりに。さぁて、ついたぜ」

なにやら偉そうに言ってるが普通のガレージだ。
１６番まであるけど４番と９番と１４番が無い。

「んー、ブサかなぁ、ＣＢかなぁ、ＣＢＲかなぁ……。さよ、どれ乗りたい？」

「私ですか？んーと……アレがいいです！」

そう言って指したのが真っ白のＶｅｓｐａ　１２５　ＧＴ－Ｒ　。
先々月くらいにバイク屋に行ったら、もうすぐ入ってくるとか聞いて、予約してまで買った最高の下駄だ。
ちなみに３０万円だった。
これを選んださよはなかなかいいセンスだと思う。遅いけど。

「なんでアレがいいと思ったん？」

「かわいらしかったから、つい。……ダメでした？」

「んなわけあるかァァァアアアア！！これをかぶるんだ、さあ、早く！そしてグローブをはめろ！」

指輪を防具一式に変えてさよに押し付けるッ！！

「は、はい！でも何で？」

「いいか、俺は絶対にこける事は無いし、事故も起こさない。でも、もしさよが何を考えてかバイクから飛び降りるような事があった時、それが命を守るんだよ！でも本音を言うと何があっても怪我してほしくないからな。ほら、サポーターもつけて」

「麟さん……はい！」

「……先に行っておきましょうか」

「……そうだな。お兄ちゃんならアレで二人乗りしてても追いつくだろ」

「いや、それは流石に無理だけど先に行っとけばいいよ」

「うん。じゃあまた後でね」

んべーべべべべべぶぇーぺぺぺぺぺ……

「わー！速いですー！」

遅ぇー。９０キロも出ない。

「楽しいですねー、麟さん！」

「そうやねー」

ちなみに、早めに出てるのでまだ学生の数は少ない。

『バイクに乗るときはフルフェイス、ブーツ、長袖長ズボン』が家訓なんだ。

急に言いたくなった。

っと。

「着いたよー」

「はぁい」

防具を指輪に戻す。

「わわっ！どうやったんですか？」

「気合だ」

「へぇー、すごいんですねぇ」

アホだなぁ。

「じじい！いるんだろ？入るぞー！」

「い、いいんですか、勝手に入っちゃって」

「いいのいいの」

「いや、ようないわい。そちらの娘さんは、……相坂さん？」

「ひぃっ！ぬらりひょんさんに知り合いはいません！ごめんなさい！」

「いやいや、わしじゃ！近衛じゃ！」

「ん？お尻合い？」

「近衛？……近衛くん？」

「おお、覚えてくれておったか……」

おいてけぼ麟。

「やだぁ、懐かしいなぁ……何でぬらりひょんなんてやってるんですか？」

ワロタｗｗｗｗ

「いや、別にわしも好きでこうなった訳じゃないんじゃが……、一応、ワシが今の麻帆良の理事長じゃよ。相坂さんの方こそ……てっきりもう……」

「ヘイヘーイ、ストップゥー！
知り合いみたいだから単刀直入に言うけどぅ、さよの戸籍を用意して欲しい。いや、無いなら無いで別にかまへんけど、とりあえず３－－Ａに入れさせろ」

「ん、おお！すまんすまん。おぬしがおった事をすっかり忘れとったわい」

「ひでぇ」

「わ、私は忘れてませんでしたよ！」

「ええ子やのぉ。
ってかアレか？知り合いか？」

「はい。昔クラスメイトだったんですよ」

「うむ。懐かしいのう……あれはまだワシが……」

「いや、そういうのはいい」

「つまらん奴じゃ。
では、病気かなんかの療養から復帰とかそんな感じでええかの、相坂さよ君」

「はい。よろしくお願いします、近衛くん」

「それはそうと……、何で白波君といっしょに来たんじゃ？」

「え？そ、それは……私が麟さんの……お嫁さんだから……ぽっ」

いやんいやんしながらさよが言ってる。
この表現伝わるの？

「ブーーーッ！！」

「うわっ！汚ぇ！」

「な、なな何と、お主……！！」

「全て事実だ！じゃあ頼んだホイ。行くぞ、さよ」

「お願いしますねー」

「転校生だゴルァ！！！」

ぼふん……
と黒板消しが頭上に落ちてきた。

「……」

「「「……」」」

「いくら……ホントは転校生じゃなくて、……病気から復帰してきた子の紹介だからってこれはひどいんじゃない？」

「ご、ごめんなさいです」

「ｘＯ　ｙｏｒｒａ　ｈＹＩｍＯｍＯｒＯ　ａｙｕｌｓａ　Ｎａｒｕｔａｋｉ／．」

「い、意味はわからないけど物凄い憎悪だ……！」

黒板消しを頭に乗せたまんま教壇に立つ。

「俺の頭上にある悲しみのチョンマゲには触れない方向で、長期休養を終えた生徒を紹介します。
カモーンさよ！！」

「はい。失礼します……って麟さん、どうしたんですか、そんなの頭に乗っけて！」

「俺の意思じゃない。強いて言うなら世界の意思」

「ふふ、おっちょこちょいなんですからぁ」

うれしそうにハンカチで頭をパタパタやってる。喜んでるみたいだから俺のチョーク美白の事はまあいいかな。

「麟さん、その子は？」

「ああ、つい最近まで『しゃばだばらったん病』で療養してた相坂さよ」

「……何そのふざけた名前の病気」

「あれ？知らない？物凄い存在感と見た目が薄くなってなかなか人に見えなくなる病気」

多分嘘は言ってない。
まあ嘘平気でつくけど、俺。

「いやいや、幽霊じゃあるまいし」

「ふふふ、そいつはどうかな……。ちなみにさよの席はそこな。わかってるだろうけど」

「はぁい」

ちなみに、こっから例によってさよにウルトラマシンガンな質問攻めがあったけど、ネギとあすにゃんが遅刻してきたのをはやし立ててうやむやにした。

ティウンティウンティウンティウン……

これは校内放送の合図であって、べつに死んだ時の音じゃないんだからねっ！

『３－Ａ　相坂さん、３年英語科　白波先生、至急学園長室までお越しください。繰り返します……』

「……呼ばれたな」

「……呼ばれましたね」

ちなみに、今ものすごい会話が少ない。
というのも……

――５分前、教室――

「ヒャッハーァ！！世界最速だァー！！

ブーンブゥーン！！」

修学旅行の用意でだいたいみんな帰ってしまって、教室には俺しか居ない。

俺は、教員用のローラーがついた椅子に跨って教室内を縦横無尽に駆け回ってた。

「フォーーーーン！！ブゥーンブゥーン！！！」

「えへへー、忘れ物しちゃいましたー」

「フォーーブブブブブブ→（レブリミットの音）」

ガラガラ　っと、さよが扉をスライドさせて入ってきた。

「ブー……ん……よし、椅子には異常なしだな」

「その……ごめんなさい……」

「何がさ……」

「その、椅子の……点検を見ちゃって……」

「今のは知らないふりする所だろォーッ！！」

――明日って今って明日さ！要するに今さッ！――

「きた」

「きました」

「何かあったんかの？」

「ええ、さっき「言うの？」何もなかったんです」

「……まあええわい。ハァー……、言っておった戸籍じゃがの、用意できたぞ。ハァー……」

「うん。ありがとう」

「ありがとうございます」

「ハァー……」

「抄本持って行く」

「失礼しました」

「うむ……」

後で（タカミチに）聞いた話だが、さよはじいさんの初恋の相手だったそうだ。
ちなみに幽霊やってた事は知ってたらしい。
それであんなテンション低かったんか
ホンマどうでもいいわな。

「というわけで籍を手に入れました。そして（魔法世界的に）籍を入れました。晴れて白波を名乗るが良い」

「は、はい！」

「良かったな、さよ」

「挙式はまた追って、俺の国でやろうぜ」

「麟さんって外国の人だったんですねー。それにしても、お嫁さんって夢だったんですよ。うふふ、嬉しいなぁ……。ありがとうございます！」

あれ？そうなのかな？
確かに日本語使ってる期間がトップクラスに少ないけど。

「かわいらしい夢じゃねェかァ！！」

「ならば私がウェディングドレスを仕立ててやろう」

「ありがとうございます！」

ちなみに婚前交渉はダメなんだってさ。
でもそういうの悪くないと思うよ、俺は。

０４７　世界最速のお嫁さん。（後書き）

Ｖｅｓｐａ　ＧＴ－Ｒ　ＶＮＬ２Ｔ
２ｓｔ単気筒
１２３ｃｃ
７．８ｐｓ／５０００ｒｐｍ
前後ドラムブレーキ

みんな大好きベスパです。
この名前聞くとＧＳ美神を思い出すのは私だけじゃないはず。
ホントは１６０ＧＳ　Ｍｋ１を出したかったんですが、びっくらするほど資料が少なかったのでこちらに。
さよたんにはベスパが似合うと思います！

ちなみに、もしこれの資料も見つからないようならリードに乗せてました。
リード大好き！

部屋を掃除していたらファミコンが出てきたのでドラクエ４をやってたらこんな時間になった豚野郎です。
アリーナ仲間にしたらレベル８０でした。何やってたんだよ、過去の俺……

ちなみに、部屋掃除をする前にバイク屋さんに行ったらスオーミーのエクストリームが３９，０００円で置いてあって、思わず買いそうになってしまいました。
もう持ってるのに。

ここいらでひとつ、調子にのってアンケートなぞを。
別にハーレムものにするつもりなんて無かったのに妙な雲行きになってきたんで、いっそハーレム物語でもやったるかと。
誰かいい人いませんか？
あすにゃんとのどか以外で、『こいつを麟の毒牙にかけてやるんだぜ！』って相手を。
全員ハーレムに加えられるわけではないと思いますが、がんばります。

では、今回もありがとうございました！

０４８　世界最速、お買い物。（前書き）

最近そんな最速っぽくない。

０４８　世界最速、お買い物。

「う〜〜〜アイスアイス」

今　アイスを求めて全力疾走している俺は
女子校に通うごく一般的な男の娘（？）

強いて違うところをあげるとすれば
ふ菓子に興味があるってとこかナ――
名前は白波麟

そんなわけで帰り道にある
駅前の駄菓子屋にやって来たのだ

ふと見ると
ベンチに一人の若い女が座っていた

ウホッ！いい女……

ハッ

そう思っていると突然その女は
俺の方を見ながら
手を振りながら近付いてきたのだ…！

「麟くんやん。原宿（こんなトコ）まで来て何してんの？」

「ふ菓子」

「こんなとこに無いと思うけど、帰ったら私が買うたろか？」

「ほんまに？わーい！」

「その代わりウチの買いもんに着いて来てよ」

「たかだか３０円やそこらであつかましい女やの。とか思てへんからええよ」

「もう、ややわぁ」

俺の頭ハンマーがハマリそうなヘコみかたしてない？
ごぬ！とか聞こえたんだけど。

「何を買うってのよ」

「アスナの誕生日プレゼントやねん。皆には内緒やで？」

「へぇ。あすにゃんのねぇ。何買うかは決めてへんの？」

「それもこれからやねん」

「別に、女の何買うか決まってへん買いモン付き合うんってクソめんどくさいねんなぁ。とか思ってへんから行こか」

ごぬ！

苦っ！正直ゴーヤをなめてた！！
ってアレは……？

「ん？」

「どしたの柿崎」

「いや、アレ麟くんとこのかじゃない？」

「ホントだ。何やってんだろ」

「てかこう見るとあの二人、完全に姉妹ねー」

「でも麟せんせーって男だよね？」

「あれ？そうだっけ？」

「そうだよ、だってあのエヴァちゃんも『お兄ちゃぁ～ん？？』とか言っちゃうくらいだよ。教室内でキスとかしちゃうくらいだよ。間違いなく男だよ」

「それが判断基準になるかどうかは置いといて、エヴァにゃんのブラコンっぷりからして、二人のあの距離はマズいんじゃない！？同じグラスからジュースとか飲んじゃってるよ！？」

「あ、麟先生、電話かけてるよ？」

「なになに？『今日、帰り、遅くなるよ』？こ、これってすごい事

言ってない！？」

「むしろアンタの耳がすごいわ！」

桜子の耳はどうなってんのよ！？

「と、とにかくエヴァちゃんに連絡しないと！！」

「柿崎、あんたエヴァちゃんの番号知ってるの！？」

「連絡網に書いてあった。携帯のほうと家のほうがね」

「ちょ、まちなよ柿崎！！そんな事したらエヴァちゃんがダークサイドに堕ちてこのかを刺し殺しちゃうよ！？」

『ん？誰だ？』

あ……考えてなかった……。

「な、ななんでもないよ！？」

『その声……柿崎美砂か？先程お兄ちゃんからも電話があったが、もしかして一緒にいるのか？』

「あ、あーその、一緒にいるっていうか居ないっていうか……」

『煮え切らんな。はっきり言え！』

こ、怖ぇ～……。３－Ａの中でもおとなしい方だと思ってたエヴァちゃんが電話越しでもド迫力だよ～。

「そ、その……」

『もういい。貴様等、今どこに居る？』

「ひゃい！原宿のＣＥＣＩＬ　ＭｃＢＩＥＷってお店の前でしゅ！！」

『今行く……ブチッ、ツー、ツー、ツー』

「ど、どどどど、どーしよぉー！！」

「何があったのよ、柿崎！」

「え、エヴァちゃんが……かつて無い迫力で『貴様等、今どこに居る？』って聞いてきたから思わず……」

「ちょ、エヴァちゃん何て！？」

「『今行く』ってすっげー低い声で言って電話切った……」

心なしか膝が武者ブルってんよ……。

「こっ、このかー！！！」

桜子が大声でこのかに声をかける。

「ん？桜子に美砂にまどかやん。どないしたん、そんな慌てて？」

「ん？桜子に美砂にまどかやん。どないしたん、そんな慌てて？」

「敵襲かぁー！！ものども、であえい！であえい！！」

「このか、逃げて！！」

あ、今回も無視の方向ですか。最近快感です、ヌフヒｗｗｗｗ

「え？逃げてって、何から？」

「さ、ささ、刺されるよ！？」

「何だ貴様等、そんな慌てて」

「だからエヴァちゃんが痴情のもつれでこのかを……って、ひぃぃぃぃいいいい！！」

「速っ！エヴァちゃん速っ！！」

「あれ？エヴァじゃん」

「お兄ちゃん！」

あはは、急に抱きつくとは、こやつめ。

「で、私が痴情のもつれで近衛木乃香に何をするんだ？柿崎美砂、ん？」

「い、いえその、もしかして気にしてない？」

「は？何をだ？」

「先生がこのかといっしょに買い物してるのを……」

ここに芋を植えよう。

「何で私がそんな事を気にしなければならんのだ」

「だ、だってエヴァちゃん、あんな麟先生にべったりなのに、先生がほかの女の子と仲良くして気にならないの？」

じゃがいもとさつまいもあるけどどっちにしようかな。

「別に、どうでもいい。お兄ちゃんが誰に手を出そうが、誰とヤろうが、最後に帰ってくるのは私の所だからな」

「か、漢だ……！！」

長芋にしよう。

「というか私もお兄ちゃんが手を出した女には手を出すつもりだしね、お兄ちゃん」

「え？あぁ、うん。やっぱ里芋にするわ。俺里芋嫌いだけど」

「だよねー？」

「え？今の会話の中に何があったの！？
ってかエヴァちゃんホントに男らしいな！！」

「なぁんだ、あたしらの勘違いかー」

「娘が明日誕生日だからこんな殺人犯がいるかもしれない部屋にいられるか！俺はこの仕事を終えたらまとまった金が入るから田舎で畑仕事でもして暮すんだ！！」

「ちょ、何をすごい勢いで死亡フラグ建ててるんですか！？」

「やったか！？」

「→　やってない。」

やってないそうです。

「でもそういう事なら、アスナの誕生日会、応援しちゃうよ！！せっかくだしさよちゃんの歓迎会も兼ねてさ！」

「むしろ参加しろよ。はい、資金。俺若者の感性とかわかんないか

らこれでプロデュースしてあげて」

と、内ポケッツからお金を出して渡す。

「うわっ！札束！！」

「これ一千万くらいあるんじゃない！？」

「いや、普通に１００万だから。余ったらクラスのレクリエーションとかそんなのに好きに使えよ」

「太っ腹ぁ」

「せやろ？惚れるやろ？」

「ややわ麟くん」

ごぬ！

……できれば傷害罪で捕まってほしくないんだけど、どうするべきなんだ？

「カラオケボックス貸し切りじゃぁぁああい！！」

「クラスのみんなも呼ぶよー！」

「うん、頑張れ。超頑張れ。じゃあ行こうぜこのちゃん」

「そうやな、行こか。エヴァちゃんも来る？」

「別に神楽坂明日菜の事なぞどうでもいいが、お兄ちゃんが行くなら付いていくぞ」

「ほな行こな。せっちゃんも来るんやろ？」

「な、なぜ私がここにいると！？」

うわっ、出た！

「うわっ、出たな桜咲刹那！」

「せっちゃんはウチのストーカーやさかいなぁ」

「こ、このちゃん……」

「本人からも公認になってしまったストーカーは最早ストーカーと言えるのか？」

「わ、私はストーカーなどではありま「す」ん！！ってちょっとぉ！！」

「よーし、行こうぜー」

「うん、お兄ちゃん！」

「何買うたろかなぁー。ホラ、せっちゃんも行くでー」

「あ、はい！今行きます！」

「お、コレなんかどやさ」

そう言ってバーベルを手に取る。

「うわぁ、麟くん、ようそんなん持てるなぁ」

「「最強やから！」」

「何キロあるんですか？」

「さあ。やっぱこんなん欲しがる女子中学生なんぞおらんわな。はい、せっちゃん」

「あ、どうむぅお！！」

「どうむぅおｗｗｗｗｗｗ」

「アハハ！せっちゃん、そら卑怯やわ。ハハハ！」

「ちょ！これホントおもっ……。麟先生！なんとかしてください」

「いや、置けよ」

「お兄ちゃん、コレを神楽坂明日菜に着せるのはどう？」

エヴァはフリッフリのドレスを持ってる。

「アスナってこんなんはそれほど好きちゃうみたいやねんけどなぁ」

「知るか。着せる。店員さん！これいっこちょーだいっつってんだろーが無視すんなやゴルァ！」

「お、おお、おちついてくだしゃいお客ささま！！！」

「いや、むしろ貴様が落ち着け」

ラッピングしてもらったにょん！

「あ、このオルゴール……」

「どうしたのですか、お嬢様？」

「ん？あんた誰？」

「ど……どうしたのですか、こ……このちゃん」

ごっつええ笑顔でひどい事を言われたせっちゃんが真っ赤になって涙目で「こ……このちゃん」……だと！？

「こ、これが萌えか……！！」

「あやうく私も持ち帰るところだったよ」

「あかんで、このちゃんはウチのモンやねんから」

「そんな……『ウチのモン』だなんて……」

「カーッ！ペッ！！で、何？そのオルゴールヘシューッ！！！アメリカンバトルドーム！！」

「……」

そんな生臭い目でこっちを見るなよせっちゃん。

「ああ、これなぁ。アスナの好きな曲やねん」

「ならばコレを買おうそうしよう」

「そうやな。きっとアスナも喜ぶで」

「ほな明日の楽しみやな。時間とかどないしよか？」

「昼からだろ。午前中は修学旅行にもってく荷物の確認も要るしな」

「そうだね。じゃああたしらから皆に連絡しとくよ。アスナとネギくんにはこのかから頼める？」

「うん。ええよー」

「じゃあまた明日なー」

「はいはーい」

「ばいちゃ！」

「修学旅行の準備じゃオルルルルァ！！！」

「はい！」

「下着！ぱんつ！ドロワーズ！そしてたまには思い出してあげてください。褌！！」

「わぁ！！」

パチパチパチ

「俺は越中より六尺の方が好きです」

関係ない話だけど、海水浴場に普通の水着で行ったら警備員に止められて「わしは男じゃー！」とか言いながら引き摺られていったアイツは元気なんだろうか。

「勝手がわからないだろうから、ある程度は俺が荷物を纏めて置い

たけど、必要なものがあれば言うよろし」

「はい、ありがとうございます！」

「いいって事よ……」

とうおるるるるるるるるるるるるるるるるる　るるるん

とおおるるるるるるるるるるるる

とぉるるる…

ぶつッ！！

「もしもし、はいドッピオです。」

『あぁ、麟さん。柿崎から聞いたけど、さよちゃんの歓迎会とアスナの誕生日会、明日の昼からだってさ』

「はい、ボス！」

『んじゃまた明日ね～』

ピッ

「どしたんですか、麟さん？」

「ああ、かずみんからの連絡。明日時間あるよな」

「はい、大丈夫ですよ。何かあるんですか？」

「ひ・み・つ？明日になってからな」

「はぁい」

あ、さよ用のプレッゼントゥ買ってないやん、俺。

明日の朝買おう。

０４８　世界最速、お買い物。（後書き）

ちょっとＫＣＮさん、僕の休みの日に回線工事するのなんとかして。

豚野郎です。
昨日のヒロイン募集のアレ、まだやってますよ。

素晴らしき紅マグロの世界　を聴きながら書きました。
そんなもん挟む余地も無いのに何度『マグロード』と書きそうになったか……。

というわけで、今回もありがとうございました。

０４９　世界最速、街道レース。（前書き）

前話の夜の話です。

０４９　世界最速、街道レース。

あ、呼ばれてたんだ。
呼ばれてた麟です。

「今何時？」

８時だよ、お兄ちゃん

「行ってきまァァァアアアす！！！」

「どこに？」

「ホラ、レース。あの野郎、メコメコメッコールしてくる」

「あ、麟さん、いってらっしゃい」

「行ってらっしゃいませ」

「私たちもすぐ行くからね」

「マァァァァァアアアアアア！！」

フォゥーンフォゥーン……

「待たせたな！」

持っている中で一番速いバイクに乗って来いなどと言われて、さすがにＹ２Ｋ（０３６参照）は無しだろと隼に乗って来た。
今夜中だぜ？

「いや、それほど待ってないよ」

「そこは、『僕も今来た所だよ』だろ？これだからオッサンは」

「ははは、手厳しいね。君のほうが年上だろうに」

「しかし俺に挑戦なんて随分余裕こいてるんじゃない、タカミチぃ」

そう、タカミチだ。
クライスラーのダッジバイパーに乗って意気揚々とタバコをふかしている。

「確かに君は世界最速かもしれない、でもこの麻帆良において、はたして僕に勝てるかな」

「ハッ、ほざきやがれ。２５０で優勝したからって１３００に乗れないなんて道理はないんだぜ？
四輪が必ずしも二輪よりも速いって訳じゃないんだぞ」

「井の中の蛙はどっちだったか、思い知らせてあげるよ」

「年期が違うんだよ。後でべそかいても頭なでてやんねぇ」

「そう来なくっちゃね。じゃあルールの再確認だ……」

学園長公認、麻帆良街道レースのルール

麻帆良中等部をスタート後、露天街を通り商店街に。
大きく回って高等部校舎周辺を旋回、図書館島でターン。
最後に大通りを通って中東部前。
これを3周して中東部の校門前でゴールだ。
3周で37．8ｋｍある。

ちなみに、さっきからタカミチと話している内容は一種のマイクパフォーマンスだ。
かずみんが録画しているが、一応ライブでローカル配信もされている。

事の始まりは1週間前、ＤＢ2（０１３参照）に乗って巡航してる時にタカミチが張り合ってきて引っ込みがつかなくなった所をじじいに止められた。
その後、今日ゲリラ的にレースをする事になったけどなぜかじじいに知られてしまい、安全対策のために公認にされてしまった流れだ。

「どっちが速いか決めるのはチェッカーフラッグと結果だけだ。ここで言い合っても仕方ない。
大人気ないと言われてもここを譲ってやる訳にはいかねぇな。全力で行くぞ」

「望むところだよ。さあ、行こうか」

タカミチも幌と窓をを閉じ石灰で引かれたラインに並ぶ。

観客に手を振りながら辺りを見渡すと、エヴァ達も来てたようで、こっちに手を振っている。
俺も手を振りかえしてエンジンをかける。
前を見るとザジとその他不思議生物が旗を持っている。

『さぁて、間もなく始まります！司会は私、朝倉和美が！』

『解説は絡繰茶々丸がお送りします』

『『よろしくお願いします』』

『革ツナギにフルフェイスヘルメットの白波麟教諭！知る人ぞ知る数年前の世界大会を優勝した時の格好だ！』

『絶対に負けないと言う意志の表れでしょうか。対する高畑教諭も不適な笑みを浮かべています』

『左右で座席が違うようですが、アレは？』

『フルバケットシートですね。走行中に体がブレるのを防ぐため、そしてシートの剛性強化と軽量化のために装着されます。また、車体が以前見たときより４ｃｍ近く下がっていますね。サスペンションも少し固めのセッティングを施されているようです。』

『なるほど、詳しいですね。さて、そろそろスタートでしょうか。

心なしかエンジン音も先程より大きくなっているように思います！観客の熱気も司会席まで伝わってきますよ！』

『はい。中々見れないカードですからね。まさか誰が予想したでしょうか。麟様と高畑先生の真剣勝負です』

『さて、ここでザジ・レイニーデイさんがスタートフラグを振った！！双方物凄いスタートだ！！前輪が浮きっぱなしだが、麟さんの方がややリードか！？とにかく、ものすごい音だぁ！！』

『……そんな……？

あ、はい。車体重量、空気抵抗、エンジン性能などの鬩ぎ合いの中で、麟様の方がリードしたんでしょう。さて、間もなく最初のコーナーに差し掛かります』

『おっとぉ！間もなくカーブだというのに双方全く減速しません！！ってか大丈夫！？アレヤバいんじゃない！？

って、曲がったぁ！！いやぁ、早速冷や汗をかいちゃいましたよ。茶々丸さん？』

『へ？あ、ええ。そうですね……』

『ん？どうかしたんですか？』

『いえ、恐らくですが、麟様はかなり……手を抜いていらっしゃいます』

『……へ？』

『高畑先生のクライスラー　ダッジ・バイパーですが、だいたい５

１０馬力です。対する麟様のＧＳＸ－１３００Ｒ隼ですが、こちらは改造によってだいたい５００馬力なんです』

『アレ？でもそれだと麟さんのバイクのほうがちっさいよね？』

『当然、馬力が速度とは言いませんが、麟様の隼は２８０ｋｇ、高畑先生のバイパーは、恐らく１５００ｋｇ前後です。さらに言うなら、自動車とバイクでは当然風の当たる面積も大きく異なります』

『そ……それは……』

『しかしまだ短いストレートでしたから、それほど差が無いのも当然かもしれませんね。
と、もう高等部を一周し終えたようです。このまま図書館島の橋を走行することになりますが、現時点での差は０．１秒ですね』

『この差はどれくらいのものなんでしょうか』

『コースによりますが、ここで言うならだいたい５０ｍほどでしょうか』

『はぁ。私にはその差が広いのか狭いのか全くわかりませんが、とうとう双方図書館島の橋に差し掛かりましたよ！』

『はい。あ、アレは！！』

『ど、どうしたんですか茶々丸さん！』

『はい、恐らくですが、このキャプチャーで高畑先生がスイッチを上げていますね』

『ええ。コレは？』

『恐らくＮＯＳでしょう。ナイトロス・オキサイド・システムの略で吸気性能を強化し、さらにエンジン内部を冷却することによって約１．１倍の圧縮比を出すことが可能です。これによって、通常のエンジンの排気量の１５０％の性能を引き出せます』

『とにかく凄いんですね！確かに、麟さんと高畑先生の差が少しずつ埋まっていっています！
おぉっとぉ！！陸橋も半分を超えた辺りで高畑先生が抜いた！！』

『目が離せませんね』

『そして完全に渡り切った所でターン！あれ？なんか麟さんのバイクさっきより速くないですか？』

『アレは何でしょうか……』

『茶々丸さんもわからないなら私にわかる道理は全くありません！っと、ここで高畑先生、またもスイッチを入れた！！』

『そんなに安いものでもないはずなんですが、流石は高畑先生と言った所でしょうか』

『しかし麟先生もどんどん距離を詰めていきます！ってか速過ぎない！？』

『やっぱり手を抜いていたんでしょうか。それとも出せない理由が？』

『うーん……私にはわかりませんねー。っと、麟先生が抜き返したぁ！！速い速い！！怒涛の速さです！』

まあまあ速いけど、俺の敵じゃぁ無かったわ。こっからツーリーングでもするかな。

って、随分着いてくるなぁ。

あんなカニ走りしてｗｗ。今なら周りに民家もないし、３秒くらい離しとくか。

『まっ、まだ加速したぁ！！麟選手、後ろを振り返ったと思えばさらに急加速だ！！』

『データが入ってきました。今の高畑先生の速度が２８０ｋｍ／ｈ』

『に、にひゃくはちじゅうー！？』

『対する麟様の速度が３５０ｋｍ／ｈですね』

『……レースって凄いんだね。

ともあれ、流石の高畑先生もレーサーである麟さんには全く敵わな

いのか！！』

『間もなく両選手、こちらを通過します。少しずつ音も近付いてきています！
撮影班は危険ですのでもう少し下がってください！』

『このままのスピードで１０秒後にはここを通過します』

おっ、集まってるなぁ。
ちょっとサービスするか。

『おぉっとお！！間もなく麟さんが通りますが！！前輪が浮きっぱなしだぁ！！なんというサービス精神！！ってか見てるほうが怖いぞ！！』

『流石は麟様ですね』

『って、シートに立ち上がったぁ！！おい誰か止めろ！！思いっきり手を振ったまま通過して行きます！』

『高畑先生も通過して行きます。現時点での差は２．８６秒、かなりの差ですね』

『もう高畑先生の勝ちも絶望的なのか！？』

「そんなこと無いわよ！！」

「そうですよ！タカミチが負けるわけない！！」

「何だ、貴様等？ガキはさっさと返って寝ろ」

「麟さんが負けるわけないじゃないですか」

「言ったわね！！だいたいエヴァちゃんだってガキじゃない！」

「何だ、もう一度あんな目にあいたいのか？お勧めはせんがなぁ」

『観客席もヒートアップしてきています！』

『ちょっと待ってください。麟様が勝つに決まってるじゃないですか、アスナさん』

『せめてあんたには中立でいてほしかった！かなり混沌としてきています！
麟さんは早くも図書館島でターンだ！それに高畑先生も続く！！』

「あんたら表に出なさいよ！」

「ふん、ここが既に表じゃないか。さすがバカレッドは言う事が違うな」

『負け惜しみはみっともないですよ』

『せめてマイクを切って話せ！！おっと、麟さんが何かを出したぞ！！』

『アレはペットボトルですね』

『ああ、お帰りなさい茶々丸さん。でも何でペットボトルなんか？』

『大方パフォーマンスでしょう。さて、もう帰ってきますよ』

『麟さんがペットボトルのフタを開けて……えぇっ！？』

『カウルの間から流し込んでますね』

『いったい何の意味が！？ってものすごい煙だぁ！！まさかマシントラブル！？』

『あれは水蒸気ですね。この道沿いに蒸気の線が出来上がりました』

『パフォーマンスとしては少し弱いですねってペットボトルを投げた！？』

『見事にゴミ箱に入りました。余裕のアピールですかね？更に加速して行きました』

最早タカミチはミラーにも映ってないな。
ふはは。じゃあこのラップで本気を出してくれるわ！

『両者タイヤのところがすっごい赤くなってますよ』

『ブレーキの熱ですね。鉄も焼けるほどの温度です』

『凄いですねー』

『ええ』

『ってかバイクってあんな倒して大丈夫なんですか？』

『ええ。参考までに、麟様の優勝試合の画像を用意してみました。どうぞ』

『いや、こけてるこけてる！！最早倒すとかの次元じゃない！！！』

『当然今回は、路面とタイヤの違いを考慮してこのバンク角なんだと思われます』

『いや、私にはどう違うのかさっぱりです。そうこうしてる間にもどんどんその差は離れて行きますよ』

『麟様はもうターンを終えていますが、高畑先生は今橋に差し掛かったところですね。すれ違いざまにサムズアップをしていました。そうとう性格が悪いですね、麟様』

『あ、あんたがソレ言っちゃうんだ』

「なんたってお兄ちゃんだからな！」

「ちょ、全然誇らしげに言う事じゃないじゃない！！」

「は？」

「へ？」

『そうなんですか？』

「いやいや、こいつ等完全に盲目だから何言っても無駄だよ、神楽坂」

「千雨ちゃん！？」

『さて、こちらもレースとは何の関係もない事がヒートアップしています！そしてもうすぐ麟さんが帰ってきますよ！！』

『決まりましたね』

『ゴーーール！！チェッカーフラッグが振られました！』

キキィーッ！とスキール音を鳴らしながら停車。
そしてスタンドを起こしてバイクから降りる。

「明日って今さぁ！」

『意味がわかりませんが、麟さんの勝利だぁ！！なお、麟さんの倍率は１．７倍！！受付はこちらではありませんのでお間違いないきようお願いします！！』

『おかえりなさい』

『と、高畑先生も戻ってきました！』

ふぉうーんふぉうーんとエンブレを効かせながら減速、停車する。

「いやぁ、完全に負けちゃったよ。僕もまだまだ修行不足かな」

「何、なかなか走れてたぜ。もし俺のバイクが１２５ｃｃだったら負けてたのは俺だったな」

「こんなボディに来る嫌味は初めてだよ」

「ぬははｗｗｗ」

「お兄ちゃん！」

「おお、エヴァ、ただいま」

「おかえり！かっこよかったよ！」

「はい。凄かったです」

「世界最速だからな！」

「なかなかやるじゃないか」

「ちうたんも「ちうたんっていうな」来てくれたんだね！」

「高畑先生……」

「アスナ君。いやぁ、かっこ悪いトコ見られちゃったな」

「そ、そんなこと無かったです！かっこ良かったです！！」

「そうだよタカミチ！負けちゃったけどすごかったよ！」

「ありがとう、二人とも」

なにこのホームドラマ。胸が熱くなるな。

後ろのほうでは「クソー、デスメガネが負けたかぁー！」とか「あの子かわいいな」とか聞こえる。

そうだろ、かわいいだろう。

『さて、じゃあ勝者の麟さんからコメントをいただきます！』

ちょ、マイク押し付けるな！

俺『あー、ふぇんどぅるぶるっとぅんすびゅーぬべ』

茶々丸『今日は見に来てくれてありがとう。みんなの思い通りの結果になったかもしれないし、ならなかったかもしれない』

俺『すっぱねるーとぅんむりょろべっつ、かもーすぱねっそーる』

茶々丸『でも、僕が勝てたのはみんなの応援があったからだ。ここに感謝の気持ちを表したい』

俺『い、さもぬーると、ぐらっつぇ、あすぶるーのくとむ、のびーのびそだつよ』

茶々丸『明日は学校がある人もいるだろうから、今日は早く帰って明日の準備をしてほしい』

俺『へぶぬーで、さめつーのぶ、すべれっつぃえ、鯖の味噌煮』

茶々丸『教科書、ノート、宿題、鯖の味噌煮』

俺『忘れないように学校に持って行こう』

茶々丸『まあどうでもいいけどな。じゃあ解散！』

『……あ、ありがとうございました！！』

茶々丸、最近高性能すぎるわ。

「じゃあな、タカミチ」

「ああ。また勝機があれば挑戦するよ」

「ないない。じゃあ帰ろうぜ」

「いや、私たち転移だからお兄ちゃんだけバイクで帰るんじゃないの？」

「ハァ！？俺も転移するし！」

「ふふ、じゃあ行きましょうか、麟さん」

「ちうたんも送っていこうか？」

「ああ、頼めるか？」

タイヤの溝が完全に無くなっちゃった。

スリックタイヤみたいだけど、その実天然のスリップタイヤなのだ！

そしてかなりの倦怠感があるが、これでもまだ９時なんだぜ……

「ところで、インタビューのアレ何だったの？」

「俺のファーストシングル、『おにんにんもみもみするだ』のＢ面の歌詞」

もみもみするだ。

０４９　世界最速、街道レース。（後書き）

コースと長さについてはけっこういい加減です。

初めはいい勝負をさせようと思ってたんですが、街道レーサーがＧＰレーサーと張り合うってのがどうも想像できませんでした。いや、もっとＲＧ５００Γとか低い排気量のバイクを持ってこさせたら良かったのかも知れないけど、それだとタカミチが納得しないだろと、勝手に彼の人物像を書き換えてる僕の脳に戦慄します。

ってかえげつなくオチが弱いな。

さよと魔法と千雨の関係については、色々あったんです。ちなみに千雨はまださよが麟のお嫁さんって事を知りません。

にしても眠い。おやすみなさい。

今回もありがとうございました。

０５０　世界最速、パリィパリィパリィ！！（前書き）

めるとだうなーがおそってくるんだよ
おお、息子よ。あれは柳の枝だよ

０５０　世界最速、パリィパリィパリィ！！

よし、行くぞう！
俺ぁカラオケボックス行くだ。麟でぬ。
タカミチに電話をかけます。

「おいコラタカミチコノヤロー」

『ど、どうしたんだい？』

「アスナ、今から、誕生日会、駅前、カラオケ」

『言いたい事はわかるけど、なんで吹き替え版の原住民みたいになってるんだい？』

「いいから来いっつってんだよヒゲ」

『わ、わかった、いｋ　ブツン……

来るみたいだから切った。

「おいコノヤロー行くぞ」

「へ？どこ行くんですか？」

「黙って俺について恋」

男ってのは背中で語るもんよ。

→あんま関係ないけど言ってみたかった。

「はぁい」

ちなみにエヴァと茶々丸はもう出てる。
俺も隼に跨ってさよを催促する。

「後ろに乗りな！」

ちなみに、昨日帰ってからすぐにマスターシリンダーのエア抜きとタイヤとブレーキパッドの交換をした。
その際、「ヒャウ☆！！！バイクのタイヤ交換死ぬほど面倒くさいぜェ！！」とか叫びながら作業していたってのは俺と君達との秘密だ。

パァン！パァァン！とエンジンを鳴らしながら走る。
ちなみに、昨日手を抜いてたように思われてたらしいけど、手を抜いてたんじゃなくて、ホラ、８時とは言え、夜だからそんな喧しくもできないじゃん。
改造に改造を施して、１６０００回転まで回せるけど、そんだけ回したら近接で１３０Ｄｂもの大音量。
暴走族なんて騒ぎじゃないぞ。

フォゥーンフォーゥン……
とか言いながら着いた。

もうだいたいみんな集まってるようだ。

「麟くーん？」

「へイこのちゃん！」

「あっるぇー？タカミチさんじゃないッスかぁｗｗｗｗおはっすｗｗおはっすｗｗｗ」

「うざっ！こんにちは、麟君」

「さぁて、残るはアスナとネギ君だけだねぇ」

「まだ来てないのかＹＯ！」

「いや、実際待ち合わせまであと５分ある訳だし」

「ホラホラ、アスナさん、こっちですよ」

「もう、何だってのよ……みんな？」

「へェア！！」

「うっ、アンタ昨日はよくも！！」

「まあまあアスナ君。真剣勝負に負けたんだ。また次勝てばいいさ」

「ヤイサホー！！ヤイサホー！！！

ＨＡＨＡＨＡ、納得できないなら５００ｃｃで出直さん事もないぜ

？アレうるさいから夜向きじゃないんだけど」

「昨日のアレよりうるさいってどういう事なのよ……」

「ホラホラ、ええから入ろ、アスナ」

「っていうかどうしたのよ、みんな集まって……」

カラン☆コロン☆アハン？コラン☆！！！とベルのついた扉を勢い良く開ける。

「頼もー！おねげぇしますだｗｗｗｗおねげぇしますだｗｗｗｗｗ」

「いらっしゃいませ。３４名でご予約の白波様ですね。御連れの方々は先に案内させていただきました。こちらへどうぞ」

「はぁい」

ぬるぬる案内されてお部屋の前に到着する。

「さて、どうぞ、お二方」

「ちょ、押さないでよ！」

「ひゃあ！おしり触らないでくださいぃ」

「げへへｗｗｗ」

二人の背中とおケツを押して扉を開けさせた。

パァン！

「「「「アスナ、誕生日おめでとー！そしてさよちゃん、３－Ａにようこそ！！」」」」

「へ？……え？」

「は、はわー」

「ふん、別にあなたの誕生日なんてどうでもいいんですけど、さよさんの歓迎会も同時に行うと聞いて来たんですわ！」

「またまたー。いいんちょだってこんな大きなケーキ用意してたくせにー」

うわっ！ウェディングケーキかよ。ってかよく入ったな

「いいんちょ、ネギ、みんな……わ、私……私うれしいよっ」

おや？さよの様子が……

「ふ、ふぐっ……うわぁあああん！！」

「おぉう！どうしたのさよちゃん！？」

「ぁぁぁん！！うれしいですぅ！！」

「ちょ、落ち着いてさよちゃん！！意外と強いわね！？」

さよがあすにゃんに抱きついて号泣してる……

「さよたｎ泣いてるｎ？！！？」

「さよちゃん……」

「よっしゃぁ！騒ぐよぉ！！」

「その前に、一応プレゼントを渡しておきますわ。はい、アスナさん」

「いいんちょ、ケーキだけじゃ飽き足らず……！！」

「うるさいですわね！！はい、アスナさん。せいぜい大事にしなさい」

「うん。ありがとね、いいんちょ」

「っ！！べ、別にかまいませんわよ！」

「あはは、ラブラブやなぁ。はい、アスナ。私とせっちゃんからやで」

「ありがとう、二人とも……」

「なっ！何で私とアスナさんがラブラブしなきゃなりませんの！！はい、さよさんも」

「えぇ！？私にもあるんですか？あ、ありがとうございます！！」

「私たちからもあるよー！！」

「拙者も用意してるでござるよ」

「私たちもネ！」

「みんな……ぐすっ……」

「よっしゃあ！んじゃ歌うかぁ！！」

「おぉー！！」

「おいゴルァ！！俺に酒飲ませようとすんじゃねぇタカミチ！！」

「ハハハ！君も電車で帰ればいいんだ！！」

「ソレを俺に飲ませたらリバースカード『リバース』がリバースされるぞぉ！！」

「茶々丸、酒」

「はい、マスター」

「エヴァは一応中学生なんだからそんな堂々と僕の前で酒を飲まないでくれよ」

「次麟くんの番だよー！」

「おっしゃ来いやぁ！！」

「何入れたのー？」

「甲賀忍法帖！！！」

「ん！？拙者は忍者ではないでござるよ！！！」

「すっこんでろ！！！！」

「かえで姉、この妖花忍法帖っての入れなよー！」

「しっ、知らないでござる！陰陽座なんて聞いたこともないでござる！！」

「ぬはぁー！歌ったぁ！！」

「んじゃ各自解散って事でー」

「あ、あすにゃんあすにゃん」

「何よ？」

「いやあんた先生に対してその態度はどうよ？」

「かまへんかまへん。これ、誕生日プレッセント」

「へ？ありがと。一応もらっとくわ」

なにこれひでえ

「ああ、アスナ君。僕からも、目覚まし時計なんだけどね」

「あ、ありがとうございますっ！高畑先生！！」

なにこれひでえ

「じゃねー」

「Ａ☆ＢＡ☆ＹＯ！
じゃあさよも乗って」

「はい」

「また後でね、お兄ちゃん」

「うむ。じゃあの」

ぶぉ〜んぶぉ〜〜ん

「麟さん！家はこっちじゃないんじゃないですか！？」

「いいんだよ。着いたぞ」

「ここって何屋さんですか？」

宝石店だよ。

「いいから入るんだよ！」

腕を引っ張って連れ込む。

「いらっしゃいませ」

「白波だ」

「はい、白波様ですね。こちらにご用意させていただいております」

「へ？え？」

「お掛けください」

「あ、はい。失礼します。

ねえねえ麟さん、なんでこんな凄そうな所に？」

「黙って座ってろ」

「あ、ご、ごめんなさい……」

「べ、別に怒ってなんかなかったんだからねっ！！」

なんか言ってたら白い手袋をはめた店員さんがやってきた。

「お待たせいたしました。こちらになります」

アメジストのネックレスを高級感溢れるガラステーブルにのせる。

プラチナ地に、ダイヤモンドカットを施された薄紫のアメジストが乗せられた2センチ程度の小さめのネックレストップに、４５ｃｍのプラチナ製小豆チェーンを合わせたおとなしいネックレスだ。

「俺からのプレゼントだ。ようこそ、さよ」

「り……麟さんっ！！」

「ハッハハ、こやつめ、店内で抱きつくんじゃない」

「ぁぅ、ごめんなさい」

「つけて帰る」

「かしこまりました。……はい、大変お似合いですよ」

「わぁ……ありがとうございます！」

「じゃあまたそのうち頼むわ」

「はい、ありがとうございました」

ちなみに、もう金は払ってある。
あんまり野暮な事するもんじゃないもんな。

「一生大事にしますね！！」

「はは、死なないから永遠に大事にしないとな。あれ？もう死んでるのか？」

「詳しい事はわかりませんけど大事にします！」

「んっふふｗｗまあがんばれ」

「はい！……うふふ」

さっきからチラッチラ見てはにやけてる。

「じゃあ帰るか。エヴァたちにも自慢してやれ」

「えへへー？」

「あ〝ーかわいいなこいつぅー！！」

「え……ふふ、麟さんもかわいいですよ」

０５０　世界最速、パリィパリィパリィ！！（後書き）

ちなみにあすにゃんにあげたのはメリケンサックです。

でもアレ？オルゴール買ったのって麟とこのかじゃね？
まあ色々あったんですよ。
きっと僕らにも計り知れない何かが……

さよ回でしたね。
え？違う？
ちがうかもしれません。

もしかしたら無意識下で『あすにゃん』を『あずにゃん』と書いてしまっているかもしれません。
『麟さん』を『燐酸』ひいては『火焔猫燐さん』などと書いているかもしれません。
そうだったらごめんなさい。

ここで丁度５０話目ですね。
一ヶ月と少し、ここまで書けたのもみなさんの応援のおかげです。
初めはバイクで暴れまわるだけの話にするつもりが、着々とハーレム化が進んでおります。
これも愛ゆえに……。

というか、麟はロン毛でバイクに乗って邪魔にならないんだろうか……
タンデマーとか死んじゃうような気がしますよ。

そしてとうとう次から修学旅行です。

京都の事はそんな詳しくないんですが、頑張ります。
じゃあ奈良の事は詳しいんか？っつうとそういう訳でもなく、まあアレです。灯台下暗しというヤツです。

では、今回もありがとうございました。
一年のうち３６４日間はお腹を壊してる豚野郎でした。

０５１　世界最速、皆でなら電車に乗れるもん！（前書き）

一人だとホントどこ行くかわかんないよ、コイツ。
というか一話丸まる使って電車出発する手前って何だコレ。

０５１　世界最速、皆でなら電車に乗れるもん！

「お兄ちゃん、起きて！！」

「起きてください、麟さん！」

「んー……今何時ぃ？」

「４時４５分だよー！」

「消し飛ばすぞ」

二度寝りん。

「お兄ちゃん！はやく起きないと遅刻しちゃうよぉ！！」

「おっはよぉございまぁぁぁぁあああああああああああああああす！！！！！」

飛び起きて時計を確認、午前６：０８！！

煙草に着火！一気に吸う！

「ゲブブベェアァァアアアアアア！！！！

今日も元気だ煙草でむせる！スパーッ！スパニーッシュ！！」

「お兄ちゃん、早く行かなきゃぁ」

「そ、そそそうですよ麟さん！！」

「落ち着け……。まだ慌てるような時間じゃない……」

生徒が９：００集合、教員は７：５０だ。要するに間に合いまくってる。

「お前らが急かすから俺はもう行くがな、ホントはまだまだ余裕なんだからな！」

「待たせるより待つ、そんな人間になりたいんだ」

「私もそんな人生を歩みたいです」

「おい、吸血鬼に幽霊」

「おはようございます」

「おっ、おはよう、麟君」

「お、おおおはようございまさす！！」

「おはようございます、新田先生。そして落ち着け瀬流ピコ」

「あっ、麟さん！おはようございます！」

「馴れ馴れしい！うぜぇ！テンションを下げろ！」

「だって京都奈良ですよ！日本の古都なんですよ！楽しみだなぁ！」

「いや、田んぼと山しか無いから」

「え……」

田舎のほうはな。つっても全土田舎だけど。

この後日程の確認やらエヴァの相手やら班の確認やらエヴァとさよの相手やらエヴァの相手やら挨拶回りで時間を使い、その後集合時間になり、点呼、注意事項の確認を行い車両に生徒を押し込む。

1班
柿崎・釘宮、桜子・和泉・まき絵

2班
さっちゃん・忍者・葉加瀬・古・超

3班
なつみん・千鶴・あすにゃん・このちゃん・せっちゃん

4班
双子・ゆな・たつみん・アキラ

5班

のどか・ハルナ・ゆえ・ゆっきー・春日

6班
エヴァ・さよ・茶々丸・ちうたん・かずみん・ザジ

こんな感じ。

とりあえず、出発まで時間はあるし見て回っとくか。

1班
「うち、奈良って初めてやねんなぁ」

「亜子って大阪？」

「え？うちはうちやけど……？」

「あんたちょっとアホだったんだね……」

「えぇっ！？」

うん。
アホだよね。

2班
――肉まんいりますか？――

「ここ校外だけどそんなナチュラルに販売してもいいの？2個ください」

「先生も肉まんの虜になるといいネ？」

「あいあい」

「まだ眠いですー」

「靴下ズレてるアルよ」

ホントにアルって言うチャイニーズはじめて見た。今までも言ってたのか？言ってたのに俺はスルーしてたのか？

3班

「なあせっちゃん、眠ない？うちのひざまくらいらん？」

「こ、困ります！」

「むー。ほなせっちゃんのひざまくらで寝るもん」

「そ、それは……」

「座り」

「でもぉ……」

「座り」

「……はい」

「このか、あんた……」

「ひゃあっ」

「あらあら？夏美ちゃんにはまだ刺激が強かったかしらね」

今日も平和（ピンフ）です。

4班

「キャハハハー！」

「お、落ち着いて……」

「まるで保護者みたいだよね」

「むー！ひどいです！！」

「座ってろ、双子のバカの方」

「せんせーヒドっ！！？」

元気でよろしい。

5班
「ささ？ネギ先生」

「そのー、自由行動日を……」

「頑張るですよ。易々といいんちょにネギ先生を渡すなです！」

「あ、あたしゲームボーイアドバンス持ってきたんだよー」

春日ェ……

「ボッシュートです！」

「ひ、ひぃぃいいい！？麟先生！ご勘弁をぉおおお」

「えぇいならん！！代わりといっては何だがコイツをやろう！」

「ワンダースワンじゃないっすかぁ！！」

「クソボケが！スワンクリスタルだよ！ソフトもあるし電池もくれてやる！！」

「くぅ……。で、何ッスか、このソフト？」

「テラーズとマリー&エリーとミスタードリラー」

「何でグンペイが無いんすかー！」

「もぉ、うっせぇなあ、そんだけ言うなら返してやるよ！」

「あ、ありがとうございます！ってソフトが全部ロックマンゼロになってる！？
何でっすかぁ！！発売日４日後じゃないっすかぁ！！それに私ナムコ派なんすよぉ！」

ぬはははｗｗｗｗ

６班
「わあー！電車って広いんですねー！」

「おい、茶々丸！パンフレットを出せ！！」

「落ち着けよ。ってかうるせぇ」

「どうぞ、マスター」

「はい、チーズ！っておぉ！びっくりしたぁ、麟さん急に入ってくるんだもん」

「ほっほっほゥ！！」

「……」

「え？いや、そこの連結の所にあると思うけど」

「……」

「のっふぉうｗｗ帰っていただきなさい！」

「……」

「んー、じゃあ今回だけよ？」

「……ん」

「麟さんとザジさんの会話は、毎回どう成り立ってるのか不思議で仕方ないよ」

「「「天才なんで」」」

「おぉっ！？一人増えてる！！」

「……」

「んーむ。まあ自由行動だし、みんなバラけるだろうから着いて行くのも吝かではないかな」

口数の少ない子だ。

「んじゃー出発するからな。座ってろ」

「「はーい？」」

「車輌は貸切だけど電車自体は貸切じゃねえから静かに座ってろよ。７２Ｄｂ以上の音を立てた奴はＯＨＡＮＡＳＨＩな」

「お兄ちゃーん！いっしょにすわろー！！」

「こっち禁煙車輌だから、むしろエヴァが来い」

「いきなりさっきのルールガン無視したエヴァちゃんの声量をガン無視してるー！！？」

「うるせぇ……テスト前の再来来るぞ」

「え？ホント？」

なんで嬉しそうなんだよ。そうですね、至れり尽くせりでしたもんね。

と、こんな幕開け。

０５１　世界最速、皆でなら電車に乗れるもん！（後書き）

用事があったはずが、台風パワーで結局どこにも出かけなかった豚野郎です。
一話まるまる電車に座っただけで終わった。
明日は鬼の連続更新をしたいなぁ（希望）
でも、今日の予定は明日に押し出されるんだろうか（絶望）
何故かザジフラグを押し上げて行きたい豚野郎です。

では、今回もありがとうございました。

あ、当然、まだヒロイン候補を募集しております故、奮ってご参加ください。

現在は刹那に一票

以上だ！

０５２　世界最速、闇のゲーム。（前書き）

遊戯王回です。
僕はもうやってないので最近すぎるのは詳しくないです。
あと、時代設定的にシンクロ召還は無いだろと思いながらも、まあアレの話なんで華麗にスルーしてくだち。

０５２　世界最速、闇のゲーム。

「隊列を組め！現刻より本隊は東京駅ホームを移動する！荷物を纏めよ！５分後、一〇一六より状況を開始する！！猶予は四分も無いものと思え！」

「「「Ｓｉｒ　Ｙｅｓ　Ｓｉｒ！！」」」

「いい返事だ！隊列を乱さず新田先生に着いて行け！俺は乗換えが死ぬほど苦手だからお前らのケツを引っ叩きながら後ろに続く！」

電車が減速を始める。

「いいか、東京駅は魔境だ！自分達以外は全員敵だと思え！もう一度言おう！隊列を乱さず新田先生に着いて行け！ここを超えれば勝ったも同然だ！誰も死ぬ事無く、滞りなく『ひかり２１３』に乗ること！では、状況を開始する！」

「「「Ｓｉｒ　Ｙｅｓ　Ｓｉｒ！！！」」」

何故か変なクラスになってしまった。

びっくりするくらいの統一性で２列に並び黙々と新田先生に着いて行く。

ええ。このクラスをこんなにした麟です。

この混雑の中で一切列を乱さない事に、新田先生は泣きそうになっている。

「全員欠ける事無く無事に乗車出来た事を誇りに思う！貴様らも誇れ！これでこそ３－Ａだ！！」

「「「Ｓｉｒ　Ｙｅｓ　Ｓｉｒ！！！」」」

「では各自いつも通りにやればいいんじゃね」

「わーい！」

「カードゲームやろーぜー！」

「お菓子賭けなー」

騒がしいクラスだ。

「麟くん……私はかつてこれほど感動した事が無いかもしれんよ……」

「みんなＯＨＡＮＡＳＨＩすればわかってくれる、いい生徒ですよ」

「君は本当に教師に向いているのかもしれないな」

「ふはは、褒めても大根の葉しか出ませんよ？」

「何でそんな物が出て来るんだ？」

調理方法によってはけっこうおいしいんだけどな。葉っぱ。

『お兄ちゃん、魔力反応があるけど』

『え？マジ？全然わかんねぇわ。抵抗（レジスト）しといたほうがいい？』

『そうだねー……』

『ん。レジストしといた』

「特にケガには気をつけ……あぶっ！」

「えーお弁当……あっ、すいません」

「ぬははｗｗｗお姉ちゃん、今のは良かったｗｗｗ」

「え？え？ありがとうございます？」

『ってかアレか？このちゃんの？詠春の娘だしじじいの孫だし、ミラクルキーパーソンだろ』

『さぁ……まあどうでもいいけどね』

『せやな』

何で俺らは隣に座ってんのに念話なんかしてんだ？

ああ、魔法の秘匿か。

どうでもいいから忘れてたぬん☆

どういう事や？
呪術が全く使えへん……
ここでは警告程度で済ませとくつもりやったけど……そっちがその気ならやったろうやないか、西洋魔術師！

「ぬははｗｗｗ禁煙生１４分目だｗｗｗｗ」
「麟さん、いつもはどんだけ吸ってんのよ」
「一日一箱」
「……多いの？」
「タカミチの１／４くらい」
「全然わかんないわ」
「そ？ちょっと他の班に攻め入ってくる」
「いってらっしゃーい」

「お、やってんじゃん」

「知ってるですか？」

なんか皆の衆でカードゲームなんぞやってる。

「ライトロードの『グラゴニスの鱗（うろこ）』っつーとちょっとは有名なつもりなんだがな」

「ま、まさか先生が！？」

「確かに同じ字だ！！」

「そしてこれがそのデッキだ、と言ったら？」

「ふ、ふふ、やりますか？お菓子を掛けてもらうことになりますが」

「……闇のゲームか……面白い！はたして俺のハッピーターン（のカップタイプについてる『合法麻薬』ハッピーパウダー）を奪うことが出来るかな？」

「ネギせんせー！」

「あ、面白そう。何の遊び……」

「ガロスを生贄にケルビムを召還！！！」

「クッ！無駄です！ケルビムに速攻魔法『月の書』！裏側守備表示

になってもらうです！」

「それこそ無駄無駄ァ！！オルクスの効果によりライトロードと名の付くモンスターを魔法、罠、効果の対象にはさせはしないィィッ！！

そしてデッキから墓地に４枚送り……クハハ！！その『暁のシロッコ』と裏側を向いている『魔法の筒』をＢｒｅａｋＯｕｔ！！」

「な、何故これが魔法の筒だと！？」

「甘いぜ……『ＢＦの映（あきら）』……」

「その名を知っていたですか……！

しかし、シリンダーを撃破しようとあなたが次のターンにモンスターの効果で捨てるカードは５枚……このターンさえ凌げば私の勝ちです！私はモンスターカードを一枚伏せ、ターンエンド！！！」

「ひぃ！？な、何ですか亜子さん、この禍々しい空間は！？」

「ネギ君か。下手をすれば命さえ失うという……『闇のゲーム』……私も見るのは初めてや」

「命！？止めないと！！」

「ダメだよ、ネギ君！！」

「ゆーなさん！？でも命を奪い合うなんて、ダメですよ！先生とし

て！担任として止めないと！！」

いや、奪い合ってるのはお菓子だけどね。

「仮にそれで『決闘者（デュエリスト）』が死ぬ事になろうともだよ。途中で止めてしまうのは決闘者として、絶対に許されない行為なんだ。それこそ殺されようと文句も言えない」

「あわわわ……！！何で……なんで仲間なのに命を奪い合わないといけないんですか！！」

いや、奪い合ってるのはお菓子だからね。

「クッ……カケコクキコカカケケククカカッ！！」

「なっ……何がおかしいですか！？」

「ケココクッ！！『凌げば』？ハハッ！！出来るもんならな！！現在墓地にあるライトロードと名のつくモンスターは１３枚だ……」

「急に何を……ハッ！！」

「気付いたか？だが遅い！！『裁きの竜』特殊召還！！そしてライフポイントを１０００払い、ジャッジメント！！このカード以外の全てのカードは破壊される！！」

「クッ……しかし私のライフポイントは残り６０００！どうあっても攻撃力３００００の『裁きの竜』に私の撃破は不可能！！」

「ギャヒャヒャハッ！！
俺は……『裁きの竜』を生贄に……」

「なっ何ィ！？」「『裁きの竜』を生贄だと！？」「ま、まさかアレを……真のライトロードの頂点として恐れられた、そしてその二つ名に冠する『奴』を！？」

「《ライトロード・ドラゴン　グラゴニス》召還！！！
こいつの攻撃力は２０００だが……墓地にいる『ライトロード』と名の付くモンスターカードの“種類”×３００ポイント攻撃力がアップされる！！」

「ふ、ふっふっふ、アーッハッハッハ！確かに一瞬焦ったですが、その程度だったですか、麟先生！？やはりシンクロなしのデッキだとそれで限界でしょう！！何故なら私のライフポイントは６０００！！そして、その馬もどきの攻撃力、いくら上がろうとも５９００！！あなたの負け！絶対的……敗北！！そして私の勝利！！
合法麻薬、ハッピーパウダーはこの私のモノです！！」

「……いい夢は見れたか？」

「何！？」

「ならお別れだ……。装備魔法『ライトロード・レイピア』……。これにより我がグラゴニスの攻撃力は」

「「「６６００……」」」

「バ、バカな……！この私が負けるなんて……！！」

「……行け、グラゴニス……『直接攻撃（ダイレクトアタック）』……」

「ぐわぁぁぁあああああああ！！！！！」

「勝利とはいつも虚しい……。敗北を、知りたい……」

「夕映さん……夕映さぁぁあああああん！！
麟先生……僕は……僕は許さないぞ！！」

「何ですか、騒々しい。はい、麟先生。負けたのでどうぞです」

「勝ったのならば貰わぬ方が礼に背くというもの。ありがたく頂いておこう。
ぼんち揚げ、ゲットだぜ☆」

「え？……えぇ？」

「というか、何だコノヤロー、ネギ先生コノヤロー」

「え？いえ、僕にもさっぱり……」

「アハハ、ごめんな、ネギ君。場の雰囲気の異様さから思てもない事口走ってたわ」

「何で修学旅行行く前から死人出すんだよ。みんなのトラウマメーカーか俺」

「私も、柄にもなく熱くなってしまったです」

「僕も……あまりの異様な闘気に当てられてしまったみたいです。そうですよね、カードゲームで人が死ぬわけないですもんね」

ふふふ。そりゃあ、ね？

「ところでその『大豆メソッド』って奴わざわざ持ってきたん？」

「いるですか？」

「ちゅー……まずい」

「かっ！間接っ！！」

「ん？直接の方が良かった？」

「なっななな！しっ、失礼するですっ！」

豆乳とガラナとドクターペッパーを混ぜて炭酸抜いた所にマックスコーヒーの糖分突っ込んだような味がした。

「あ、麟くーん！」

「このちゃんじゃん。いーなー」

声を掛けてきたこのちゃんはせっちゃんに膝枕している。
結局押し切られたんか。あすにゃんの顔が引きつってるぞ。

「そ、そんな見ないでください……」

「麟くんはウチとせっちゃん、どっちが羨ましいん？」

「いや、せっちゃんのスパッツが羨ましい」

「なっ！」

「ブーーーッ！！ゲホッ！ちょ、ちょとアンタ！！」

「あーすにゃんがむせたーむせたーむせたー（メリーさんの羊のメロディで）」

「んふふ、麟くん分かってるやん」

「お、お嬢様……」

「……お嬢様？
でもせっちゃんな、女の子同士やからあかんって言うねん」

「こ、このちゃぁん……」

「ふふ、そんな泣きそうな顔せんでもええやん、ウチのせっちゃん

？」

「どんだけやん。全盛期の俺とエヴァにも勝らんとも劣るわ」

「あらあら、師匠にまだまだって言われてもうたで、せっちゃんのせいやわ」

「そ、そやかて、そんなん、女の子同士やねんから」

「あ、そうや、ほな間に麟くんが入ったら女の子同士ちゃうやん。なぁ、せっちゃん？ウチは麟くん好きやで？せっちゃんと同じくらい。だって、麟くんがおらんかったらウチ、まだせっちゃんに避けられてたやろ？」

「このちゃんは……ズルいわ……。そんなん言われたら断れへんやん、ウチ。それに、私も麟先生がおらんかったら……」

「あれ？謎の乱交フラグ？」

「らっ！？せ、先生！！」

「もう、ややわ」

ぬぼす！

「ねえ、あすにゃん、あすにゃんもこれ喰らうの？このハンマー」

「は、話しかけるんじゃないわよ！エロがうつるじゃない！」

「いや、ねーよ」

……ねーよな？

０５２　世界最速、闇のゲーム。（後書き）

大根は根っこより葉っぱの方が好きな豚野郎です。

カエルは犠牲になったのだ……
犠牲のための犠牲、その犠牲にな……

遊戯王知らない人には何も面白くなかったかもしれません。
知ってる人にも何も面白くなかったかもしれません。
ごめんなさい。
この指が勝手に、勝手に書きやがったんです！！

「勝利とはいつも虚しい……。敗北を、知りたい……」
→
書いてる最中は「大当たりやでぇ」とか思っていたのですが、読み返してみると調子乗りすぎやろ……。などと呟いてしまうレベル。

麟はもう少し言葉を選ぶべきだろ。
いや、書いてる僕が言う事でもないですね。

では、ヒロインメンバーはまだ募集中ですので是非に。

そして今は刹那が2票です。

では今回もありがとうございました。寝ます。

０５３　世界最速、迫る関西呪術協会の影。（前書き）

仮面ライダーのサブタイトルみたいやねんな。

０５３　世界最速、迫る関西呪術協会の影。

「京都だー！！」

「わーい！！」

京都駅に着いた麟と愉快な仲間達。

「ふはははは！京都タワーの意外なショボさにがっかりするがいい！！」

「別に京都タワーを見に来た訳じゃないからね」

「じゃあクラスごとにバスに乗ってけっつってんだろ！！クソが！市ね！！！」

「「「はーい？」」」

「これが噂の飛び降りるアレ！！」

「誰か！！飛び降りれ！！」

「いいだしっぺの法則とは　言い出したやつがやれよという戒め。どうぞ、鳴滝のバカの方」

「うわー！お姉ちゃんを放してください！！」

「やめてー！！」

「おやめなさいっ！！」

「有名な『清水の舞台から飛び降りたつもりで……』の言葉どおり、江戸時代に２３４件もの飛び降り事件が記録されていますが生存率は８５．４％と意外に高く……」

「ふふふ、見直したぞ、綾瀬夕映！
ちなみに明治５年に政府が飛び降り禁止令を出して柵を張るなどの対策によって飛び降りが下火になったのは知っているよな？」

「エヴァンジェリンさん！？」

「エヴァちゃんが妙なオーラを！」

「ふふ、エヴァンジェリンさんもなかなかやるですね」

「じゃあ撮るよー！」

「いぇーい！！いぇぇぇえええええい！！！！」

「麟さん落ち着いて！！」

「京の街が一望ですねー♪」

「お土産に何か買ってこうと思ったんだけど、良く考えればチャチ

ヤゼロくらいしかやる相手いないからなぁ」

「アイツには酒さえ飲ませてればなんとかなるよ」

「あぁ、そうな……ぬわーーーーーーーー！！」

カエルのいっぱい入った落とし穴に落ちた。

「何でや……」

「お兄ちゃん、そのギャグは新しすぎるよ……
あと参道にその仕掛けはさすがにダメだよ」

「俺じゃねーよ」

「大丈夫ですか、麟先生！」

そう言って手を差し出してくれるせっちゃんの優しさが沁みる

「せっちゃんのふとももが絶景すぎてヤバイ」

「っ！知りませんっ！」

「あぁ！途中で離したからもっと良くない体勢で落ちちゃったじゃないのよぉ！」

「お兄ちゃん何やってるの？」

「俺ヤード（説明しよう！俺ヤードとは、ビリヤードが如く穴に俺を突っ込む遊びである！！卑猥な意図は無い！！！）

てか誰よ、こんなん掘って。はまったのが俺じゃなかったらどうするつもりだったんだよ
俺は死んだ。スイーツ（）」

「右から健康、学業、縁結びです」

「左！左ー！！」

「待てーーーい！！」

「な、何ですか！？」

「アレを……」

屋根の上に酒樽が置いてある。

「な！アレは！？」

「お神酒？」

まき絵がすくった水に指をつけてなめてみる。

「ペロ……これは……青酸カリ！ペロペロペロwwwwwwオヴェェエエエエエエ！！！！！！！！！！」

「お兄ちゃん！！」

「お酒ですね、そうですね」

なぜお酒が降ってくるんだ!?

降ってこなくちゃならないんだ!!

「おや、麟くん、体調が悪そうだがどうしたんだい?」

「ああ、新田先生、音羽の滝にお酒が。警察に連絡を……あとクンヌシさんにも……

そして瀬流ピコ……お前はあそこのお土産屋さんでどこにでも売ってそうなものを買ってこい」

「あ、ああ。任せてくれ」

「え?何でそんなものを!?とにかく行ってきます」

「3－Aに告ぐ!これより当クラスはネギ先生のみの指揮下に移る!他の観光客に迷惑をかけぬよう、我らが3－Aに相応しい振る舞いを見せること。いいな」

「「「はい!」」」

「じゃあ俺は事情聴取のために残る」

瀬流彦はコーラを買ってきました。

「えー……じゃあ第一発見者はあなたなんですね?」

「第一かはわかんないね。てか普通に見えるだろ。皆気付いててスルーしてたんだろ」

「っていうか白波麟さんですよね?私、ファンなんですよ。サインもらえませんか?」

「ほいほい」

さらさらーっと

「ありがとうございます!オークションで売ります!!」

「ぶっ殺してやる」

〜〜ホテル嵐山〜〜

「ひどい目にあったんだぜ!」

「あらあら、お疲れ様です」

あ、いたんだ、しずな先生。

「やあ、麟君は災難だったね。全く酒を飲めないんだからなぁ」

「ええ。瀬流ピコ君がコーラを買ってきてくれなかったら即死でしたよ。買ってきたのがファントムオレンジだったら人死にが出ましたね」

「あ、危なかったぁ」

「買いそうになってたのか？」

「どっちのほうがより『どこにでも売ってる』か考えた』結果コーラを買いました」

「……見直したぜ」

「麟先生、よろしいでしょうか……」

夕食後、せっちゃんが声を掛けてきた。

「絶対らめっ？」

「そうですか、なら他を当たります」

「やぁん、嘘だってぇ？ねぇせっちゃぁん」

「……今日の昼間の話なんですが」

「スパッツの？」

「それはいいです！
落とし穴と滝の酒です」

「あれは貴様がやったのかァー！！」

「違います。関西呪術協会はご存知ですよね……恐らくその一部勢力、陰陽道の『呪符使い』が敵だと思われます」

「ああ、そうなんですか？すいません、変な疑い方して」

「いえ、おかまいなく。それで、事はお願いなんですが、私と共にお嬢様を護っていただけませんか？」

「お嬢様？」

「こ、このちゃん……」

調教しすぎだろ、このちゃん。

「え？断るけど？」

「なっ！何で！？」

「生徒なんだから、お前も俺が護ってやるっつってんだよ、言わせんなよ恥ずかしい」

「せ、先生！！」

抱きつかれた。

いいにほひですｗｗｗくんかくんかスーハースーハーｗｗｗｗｗ

「あれ？せっちゃんに麟くん……浮気？」

「あっ！？このちゃん！こ、これはその、違くって！！」

「いやん、冗談やん？　それに、麟くんならええねんで？」

「いや、そういうアレやなくてな、このちゃん、関西呪術協会に狙われてるんやて」

「ちょ、先生！」

「関西？じゅじゅつ？きょーかい？」

「え？詠春の娘だろ？日本の魔法使いの」

「まほー？」

「ちょ！先生！このちゃんには言うてへんのやからそんな……ハッ！！」

「え？マジ？やっちゃったぜｗｗｗ」

「言うてへん？せっちゃん、魔法って何なん？」

「い、いえ！これはその、じょ、冗談で……」

「せっちゃん？」

「その……あの……」

「……ウチ、せっちゃんのこと好きやで。せっちゃんは？」

「じ、実は……」

言うんかい。
まあそら言うわな。俺でも言う。
あれは仕方ないわ。

「へぇー、そんなんあってんなー」

「なんかごめんね、せっちゃん」

「いえ、いずれは知る事だったんですから、仕方ないですよ」

「じゃあ麟くんも魔法使いなん？」

「え？俺はライダーだけど？」

「麟先生は世界最強と恐れられる不死の魔法使いですよ」

「阿呆使いだけど？」

「そうなん！？麟くん凄いやん！不死っていくつなん？」

「永遠の１０歳」

「６００歳以上だと聴いています」

「あぁん、ひどい」

「ほえー、びっくりやなぁ」

「麟先生～、教員は早めにお風呂済ませてください」

「はぁい……」

そうして俺は歩き出したのだ、お風呂への道、『おふロード』へと……

最近オフロードバイク乗ってないなぁ。

０５３　世界最速、迫る関西呪術協会の影。（後書き）

ネギさんは何もしてなくて完全に日和ってます。

そしてこれから出かける用事が出来てしまいました。

台風行ったらすぐコレか。

このちゃんがどんどんドSやでぇ。

そしてせっちゃんを白波に引き入れる際、このちゃんも引き込まざるを得ない。

せっちゃん２票

ザジしゃん１票

です。

ちなみに、１０００票集まったってヒロインにならないものはならないし１票もなくてもなるものはなります。

要するにあんまり意味無いんです、ごめんなさい。

かなりその場のノリで話が進んでいくので、もう伏線とかフラグとかあったもんじゃない。

では、今回もありがとうございました。

０５４　世界最速、お風呂にもゆっくり浸かれないこんな世の中じゃ　ポイズン

サブタイお前いいかげんにしろよ。

みんな騒ぎすぎだろ。
いくら中学生だからってすぐ体力尽きるぞ。
とか思ってた麟です。
今はお風呂だよ。

俺「誰が一番長く潜ってられるか競争なー」

俺「俺が一番やしなー」

ネギ「麟先生とお風呂なんて緊張します……」

俺「何で？ああ、美少女顔だから。デモ大丈夫。俺の股間にはしっかりと穢れたバベルの塔がついてるから」

京都まで来て何やってんだろう。
お風呂はエヴァ達と入りたかったっつってんだよ！！

「がぼぶぼぼ」

飽きた。出よう

「ぶはぁー、脅威の肺活量」

「誰だっ！？」

急に出てきたせっちゃんに首とちんこつかまれた。
あれ？ネギは？

「何者だ？答えねばひねり潰すぞ」

「せっちゃんのえっち……／／／」

「あれ？せっちゃんどないしたん？
……麟くん？」

このちゃん。
あすにゃんと千鶴さんとなっちゃん（オレンジ）は？

「ちなみにこれは、逆レイ……」

「い、いえあの、コレは！仕事上急所を狙うのはセオリーで！
というか何でいらっしゃるのですか！？」

「え？もしかしてもう生徒の入浴時間なん？じゃあ１５分も潜ってたんかｗｗｗワロタ……」

「ど、どうしたんですか？」

「ああ、ちんちん放してぇ。そして急所攻撃なら竿より玉握ったほうが効くよ」

いつまでにぎにぎしてんだよ。びっくりだわ。

「ひわぁ！！ごめんなさい！！」

「せ、せっちゃん……いくらあんな事言うたからってそんな、大胆すぎるわぁ」

「あぁっ！このちゃん！ちゃうねん！」

立ち上がろうとしたんだろうけど、滑って抱きつかれた。

「抱きついたまんま言うなよ。俺の乳首とせっちゃんの乳首が接触して変な気分」

「麟先生！大丈夫ですか！？」

「だからアイツが溺れるわけないじゃんか」

「あれ？ここでネギとあすにゃんが来るの？」

「あ、いや、これは……これは違うんです！！」

何が違うと言うんだ

「え？こ、これはどんな？」

「ちょ！あんたら……！！え？そ、その……行くわよ、ネギ！」

あすにゃんがネギを引っ張って出て行かれた。

「このちゃん、フォロー頼める？あとせっちゃん、立ってきた」

「あん、待ってーなー、アスナぁ」

「ひっ！ご、ごめんなさい！！」

「いえいえ、ありがとうございました」

なんぞこれ。

せっちゃんとアフロ、じゃねえわ。お風呂に浸かってます。

タオルは巻いてます。

「おっきかった？」

「しっ！知りません！！」

まあ別に大きかねえんだけどな。

「ひゃぁああーーーっ！！」

「お嬢様！？」

「せっちゃん？」

脱衣所に向かって駆け出す。

「あれ、関西の？」

「恐らくそうです。くっ、私が目を放さなければ！

大丈夫ですか、お嬢様！」

「タオル放してぇ～！」

「ちょ、このおサル下着を！」

駆け入ってみればおさるに下着とタオルを剥かれそうになってる二

人と、あたふたしながらうろついてるネギが！
なんでナチュラルに女子更衣室に居るんだよ、あすにゃんに連れ込まれたんですね、そうですね。

「この小猿ども……斬る！！」

「おサル斬ったらかわいそうですよ！」

とか言いながらネギがせっちゃんに飛びつこうとしてるから叩き落とした

「どけ」

「へぶにゅ！！」

「兄貴ぃ！！」

あ、居たんだ。

「おいおい、このちゃん攫われてる攫われてる！！
任せたせっちゃん！」

「はい！
百烈桜華斬！！」

このちゃんを担ぎ上げたサルが紙に戻っていく。

「このかー！」

「麟さん！術者が！！」

「え？どこ？」

「チッ、逃がしたか」

え？俺やっちゃった感じ？

「お嬢様……良かった」

「“せっちゃん”？」

「こ……このちゃん」

「ちょ、大丈夫だったの？ってか刹那さんも関係者！？」

「はい。このかお嬢「せっちゃん？」このちゃんの護衛をしています。

あと、この場に居るのが関係者だけだったから良かったものの、あまりそういう発言は……」

「あ、ご、ごめん……。ってかアンタ！なんでネギにあんなことしたのよ！？」

「ハァ？顔洗って出直して来い。もう一回『アレ』やんぞ」

「な、何よ！脅したって無駄なんだからね！！」

ダメだこりゃ。

ホールわきの休憩所みたいな所に、さっきのメンバーで集まっている。
ネギは水をかけたら目を覚ました。
俺が溺れたと思って助けを呼びに行ったらしい。
仮に本当に溺れてたら助からないよな。引き上げろよ。

「急にあんなことするなんて、ひどいですよう！」

「そうよ！」

「え？俺なんかやったっけ？殺すぞ。あ！ごめん。ハイこれ」

「な、なによ、コレ？」

「アレだろ？二人とも温泉行ったらシャンプーなかったんだろ？替えのやつ買っといたから。
いやぁ、髪長いから結構使うんだよ。俺は切りたいんだけどな」

「いやいや麟先生、ネギ先生とアスナさんが言いたいのはそんな事ではなくて、ネギ先生を叩き落した事についてじゃないですか？」

「え？マズかった？」

「そりゃそうじゃない！何であんな事したのよ！！」

あすにゃんは鼻息荒いけどネギはさっきの『殺すぞ』で完全に縮こ

まってる。

「それについては私から説明させていただきます。というかネギ先生、何であんな事しようとしたんですか？」「訴えますよ」「いえ、別にそんなつもりはありませんが……」

「だ、だって本当に斬ったらおサルがかわいそうじゃないですか！？」

「え？いえ、アレはただの式神で斬っても紙に戻るだけですが……」

「なんだ、そうなんだ。じゃあネギも知らなかったんだし、仕方ないわよね」

「そうやなぁ」

「良かったぁ」

「ハァ？仕方ない訳ないし良かった訳ないじゃん」

「え？」

「いや、仮にアレが本当に生きたサルだとしよう」

「はい……」

「でも殺す」

「ちょ、ちょっと！！」

「麟先生、端折りすぎです」

「どういう事なん？」

「これはこのちゃんの今後にも関わる事なんで、今は聞いておいてください」

「う、うん」

「いやな、サルが襲ってくるだろ？で、ここは関西な。ネギ先生は聞いただろうが。敵の掌の上だ。で、そんな所で、襲われててみろ。そりゃ殺すっつーの。良くて身柄拘束」

「だからって、何もすぐに殺すなんて事しなくてもいいんじゃない？悪い奴かどうかもわからないんだし」

「……」

このちゃんは黙って話を聞いてる。
ネギはネズミといっしょに青くなってる。
せっちゃんは目を閉じてる、寝てんのか？

「……このちゃんがニホンザルに囲まれてました。
『まあ握力が３０ｋｇ程度のサル四天王の中でも一番のザコ、ニホンザルだしほっといてもいいか☆』
で、このちゃんがつれてかれて精神ぶっこわされて魔力タンクに使われちゃいました」

「な、何言って……」

「『知らなかったからしょうがないよね☆』」

「っ！！」

「ご、ごめんなさい、このかさん……」

ネギペアは半泣きだー！

「ええんよ。何もなかったんやし。それに麟くんも脅かしすぎやで」

「えっへへ☆怖かった？」

「まあ私も、疑わしきは罰せよとまでは言いませんが、何かあってからでは遅いので多少は強硬な手段に出ることもあります。
それに私たちは一応普通の生き物と式神、一般人と術者を見分ける術を持っていますので、それほど気負わなくても大丈夫ですよ。
ねえ、麟先生」

「え？ああ、うん。わかるよ！
当たりのやつは製造日時の印刷がちょっとだけ濃いんだ」

「……何の話ですか？」

「え？ブタメン？」

「アンタ普段からどんだけ人の話聞いてないのよ」

「そんな震える声で言われても……
おい、ネギ先生もなんか喋れよ。居ること忘れちゃうだろ」

「あ、ご、ごめんなさい。「うんこ食べたいんだZE☆」」

「……」

「……」

「……」

「……」

「ごめん……」

あんなに完璧に声似せてたのに。ばれてる。
この決め台詞はもっと言っても違和感の無いタイミングで使おう。
いつだよ、違和感の無いタイミング……。

今日はこれで解散らしいッス。
いやぁ、身が縮まる思いッスよ。

「あ、そうそう、ネズミ」

「な、何ッスか!?」

「おまえ、この前ネギたちが茶々丸に攻撃したから反撃した後な」

「は、はひぃぃぃぃ!!?」

ま、まだ怒ってらっしゃるんスかぁああ！？

「けっこうカッコよかったぜ。じゃあな」

け、結構いいお人なんじゃねぇか？
あの時は必死だったからなぁ……。
でも兄貴は完全に縮こまっちまってるなぁ。

「そうよ、カモ。あんた、あの時はありがとね」

「姐さん……」

「な、何かあったの？」

「いや、大したことじゃねぇッスよ」

「いや、あの時ね、コイツ自分はどうなってもいいから私たちは助けてって」

「カモ君……カモ君！！」

「アハハ、やめろよ兄貴。俺っちはあん時の返しきれねえ借りをほんのちょっと返しただけだぜ」

「アンタ……かっこいいわね」

て、照れるじゃねぇか……。

０５４　世界最速、お風呂にもゆっくり浸かれないこんな世の中じゃ　ポイズン

カモ△回です。

他は、早くも何書いたか覚えてません。

前頭葉ェ……

私が「連続更新したい」と言った日の日付を見て欲しい。

そう、今日なんです。

今日はなんの予定も無いんです。今のところ。

半無職なのに何でこんな忙しいんだ。

そして、連続更新などとほざいておきながら寝ます。

おやすみなさい、良い夢を。

では、今回もありがとうございました。

０５５　世界最速、救出。（前書き）

“今日”はこれからだ！

０５５　世界最速、救出。

「何やってんの？」

「式神返しの結界を布いているんですよ」

「はーん、がんばって。俺は帰っとくわ。なんかあったら連絡して」

「はい。ならコレを。念話用の符です」

「あ、こらどうも」

「いたいた、桜咲さん」

なんか来たけど俺は行くぜ！！

麟様が部屋にいらっしゃいました。
なんだか久しぶりな気がします。
別に全然久しぶりじゃないんですが。
浴衣がすごく似合ってます。持ち帰りたい所ですが、家が同じなんでその必要もありません。
ちなみに、さよさんは浴衣の右側がまえになっていました。日本だと左前は故人の着方だと知識にはあります。
ああ、そう言えば幽霊でしたね。
ちなみに、そのさよさんはもう寝ています。

「寝れるっていいなぁ。おやすみなさぁい」と言っていました。

「お兄ちゃぁん？」

「麟様ぁ？」

「ってちょっと待った待った！！脱ぐな！！」

「いやぁ、なんか久しぶりに会ったような気がしたからさ」

麟様との甘い夜を過ごそうとしたら朝倉さんに止められてしまいました。

千雨さんは外を眺めながらお茶を飲んでいらっしゃいます。

「というか何だ、朝倉和美。私達とお兄ちゃんの愛の営みを邪魔するんじゃない」

「あ、愛のって、最早セクハラだよ！？」

「つーかもう何も言わねえから、せめて誰も居ない所でやってくれ……」

「んもう、ちうたんったらスレちゃってぇ」

「ちうたんって呼ぶんじゃねぇ！！」

「何でよぉ。別に、よっ、呼ばせてくれたっていいじゃないぃ……」

「千雨さん、麟様を……泣かせましたね……」

「いくら家族であろうと赦せん事もあるんだぞ。
少し、スケールのでかい姉妹喧嘩をしようか……？」

「いや待てよ。思いっきり『ポッキリ成功』って書いたプラカード掲げてるじゃねえか。ポッキリって何だよ」

「って、家族！？千雨ちゃんアンタ……大人になっちゃったのね……」

「おい、お前さっきセクハラがどうとか言ってたよな」

そんな事をやっていると麟様が懐から一枚の紙を取り出しました。

「あ、ちょっと待って。何々？え？マジで？場所は？あちゃー。行くわ
つーわけで行ってきます。ごめんな」

そう言うとマスターと私にキスをして出て行かれました。
うふふ、キス……。

「何、今の小芝居！？
っていうかキスなんかされちゃって、もしかして茶々丸さんも！？
あぁー！！どうすんのよ！？」

「何がどうするんだ？」

「私だって麟さんのこと昔から……な、なんでもないよ？」

「ふふふ、なぁ茶々丸、いい事を聞いたな？」

「ええ。まさか『そう』だったとは」

「ちょ、別に取ったりしないからさ！ね？」

「当然だとも。愛は奪うものではない」

「分けるものです」

「ち、千雨ちゃん……助けて」

「諦めろ。別に取って食われる訳じゃねえよ」

「さよちゃん……寝てる！ザジさん……いない！」

「そんな怖がるな。お兄ちゃんの話を共有したり」

「いつから好きなのか、何故好きになったのか話し合うだけだ」

「そ……それならまぁ……」

「おい、千雨も来い」

「ハァ……仕方ないか」

この後、途中で起きたさよさんも交え、３時間に渡り麟様の話で盛り上がりました。

あと、職員の部屋は別らしく、麟様と会ったのは結局翌朝の事でした。

Ｔ２０改『サイクロン号』に跨り夜を駆ける俺はさながら仮面ライダー。
カフェレーサー風のフルカウルが似合う渋い奴だよ！
あれ？転移したほうが速くない？
「せったｎいまどこなｎ！！？？」
『京都駅の長い階段です！』
「転移」
～～京都駅ビルのなんかでかい階段～～
「クックドゥードゥー！クックドゥードゥー！クックドゥードゥルドゥー！！（マッハＧＯ！ＧＯ！ＧＯ！って感じで）」
「うわぁ！！何や何や！？誰やねん嬢ちゃん！！」
「麟先生！！このちゃんが！！」
「貴様かぁぁあああああ！！貴様がこのちゃんをぉおおおおおおおお！！！」
「新手かい。まあかまへんわ
――お札さん　お札さん　ウチを逃がしておくれやす――」

「お札「だが断る」」

「喰らいなはれ！『三枚符術　京都大文字焼き』！！」

大の字に炎が広がる。

断るって言ったのに。

「うあっ！」

「桜咲さん！！」

「ホホホ、並の術者ではその炎は越えられまへんえ。ほなさいなら」

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル！　吹け　一陣の風」

「待て、ネギ先生。飛ばした炎がこのちゃんにあたるかもしれんね」

「じゃあどうすれば……」

「下がってろ。んじゃ、いってきまー君☆」

「そんな、いくら先生でも無茶です！」

「元気があれば何でもできる！」

Ｔ２０改サイクロン号で階段を駆け上ろうと思ったけどロードバイクだからカウル擦りまくるし、仕方ないから指輪に戻して普通に階段をのぼる。

「お、おいやめとき！別に殺す気なんかあらへんねんから！！」

「ぐわぁあああああ！！！」

炎に入ってから何か思う所があって、とりあえず悲鳴を上げてみた。

「先生！」

「麟先生！！」

「ぬわーーーー！！あべし！！ぶべら！うわらば！！」

「だからやめとき言うたのに……」

自分で言うのもなんだけど、こんな元気な断末魔無いと思うよ。

「貴様よくも……よくも麟先生を！！」

炎の中から現れる、後に魔神イフリートとして恐れられない俺。

「このちゃんを……返せぇえええええええ！！」

「なっ！！これが西洋魔術師か！？」

「「「いや、無い無い」」」

「クッ、猿鬼、熊鬼！！」

ぬいぐるみのサルとクマみたいのに襲われた。

「ぬわー！！」

「え？嘘やろ！？」

「う・そ？じゃあこのちゃんは返してもらうよ」

そう言ってロン毛メガネのお姉さんに近付いたら上から剣で叩かれた。

「ぬわーーーー！！」

今日はパパスの日やでぇ……ゴクリ。
ちなみに斬ってきたのは俺好みの女の子でした。
なんか勝手にゴロゴロ転がって行った。

「あいたた～。何で斬れてませんの～？」

「天才だから」

「絶対に当たったと思たんやけど、強い人なんですなぁ。私、強い人は好きですよ」

「俺に惚れるとまっ逆さまに堕ちてでざいあ」

「ほな、私も本気で行かせてもらいますわ」

「甘く見てるとケガしますえ。ほなよろしゅう、月詠はん」

「無駄」

とりあえあず刀は二本とも折っておこう。

「わぁ～！何しますの！ひどいわぁ……グスッ……」

「えぇ～！？嘘やろ！？」

「嘘じゃないんだな、これが。うっとおしいから動きを封じておこう」

指輪を手錠と足枷に変えてツクヨミたんとお姉さんにつける。

「ああん！」

「ってウチも！？いつの間に！？」

「麟先生！！」

「おぉ、せっっちゃん。はい、このちゃん。じゃぁ転移」

「え！？ちょ、ま……」

せっちゃんとこのちゃん、他2名を旅館に転移させる。

「さぁて、楽しい尋問タイムの始まりだ。パーリナイッ！！」

「開放してもらおうとかそういうのは考えなくても大丈夫だから。ほら、俺浴衣の似合う紳士だし」

「クッ！何が目的や！」

「ウチの刀～」

「尋問だっつってんだろ。あと刀は消耗品な。後で買ってあげるからおとなしくしなさい」

「そんな事誰が信用できるか！」

「ほんまですか？『ひな』が折られた訳ちゃうし、まあそれやったら……」

「って待ちいな月詠はん！！」

「まあ落ち着けやこの脳みそド腐れゲロ豚ビッチ娘が」

「ビッ……！！うちはまだ処女や！！」

「オウフｗｗｗ思わぬ情報を手に入れてしまいましたぞｗｗｗデュクシｗｗデュクシｗｗｗ」

「っ！！っ……！！」

「そんな赤なるんなら言わへんだらええのに」

「はい、じゃあまずはお二人の名前と職業を」

「ふん、天ヶ崎千草、陰陽術師や」

「月詠、傭兵？です～」

「じゃあ趣味は……」

「何でそんなん言わなあかんねん！！」

「趣味は人斬りですかねー」

「なるほど、人にとても言えないような趣味と、えー人斬りって事は仕事が趣味って訳ね。真面目な子は好きよ？」

「ちゃうわ！！」

「褒められてまいました～」

「あんたら自由すぎやろ……」

「んじゃ次の質問はー、このちゃんを攫った理由は？」

「私は雇われたからです～。まあ攫ったんは私ちゃうけど」

「……なんでアンタなんかに言わなあかんねん」

「うーん、拷問は好きじゃないんだけどなぁ。とりあえず指落としとくか？」

「ハッ！結局あんたも下衆やないか！やりたいなら好きにすればええ。でも覚えときや！！」

「でも別にそこまでしないとダメなほど気になるって訳でもないしなぁ……どうしたもんかなぁ？」

指落とす手段なんか無いしなぁ……

下衆なんて……ゾクゾクしますｗｗｗｗｗ

「彼女達を返してもらえないかい？」

「今尋問中だから待って」

「ってフェイトはん！？」

「あ、どうも～」

え？誰？

白髪の子がなんかこっち見てる。

「君は……シラナミだね？」

「シラナミ！？あの史上最悪の大災害の！？」

「誰が大災害だ！俺は史上最高にプリチー？な紳士だぞ」

「やっぱり、それならこちらの分が悪い。なるべく彼女達に危害を加えないでほしいんだけど……「あとうんこ食べたいんだけど……」……やめてくれないかな」

「ごめん。やめるし危害も加えないからそんな目で見ないでください」

「あかん、相手側に邪神がおるなんて……。もう仕舞いやないか……」

「誰もが夢破れ大人になっていく。世知辛い世の中だ」

「知った風な口利くなや！！あんたがウチの何を知っとるんや！！」

「え？ちょっと待って、シリアスな流れにするつもりなのかもしれないけど、ロイヤルノーサンキューだから！目的聞いても答えないくせに何でそんな、そういうアレなの？そして俺は何を言いたかったの！？」

「フェイトはん、助けて～」

「我慢して、月詠さん。僕じゃ彼には敵わない」

「ほな言うたら何とかなるんか！？ウチのお父さんとお母さんは帰ってくるんか！！」

「知るか！！んなもん後で考えるんだよ！！！」

急に大きい声だされてびっくりしたんだよ！

「天ヶ崎千草さん、ここで彼を怒らせるのは得策じゃない。ひとまず質問に答えて」

「クッ！！ほな言うたるわ！私の両親はなぁ、あんたらに殺されてん！！」

千草が涙ながらに語った内容は、ちょっと衝撃的過ぎた。

「え？……俺ここ４０年くらい誰も殺してないけど……いくつ？」

「そ、そういう事ちゃうわ！！あんたら西洋魔術師が大戦の時……ウチの……」

「あぁ、そういうアレ？で、何で両親殺されたらこのちゃん攫うの？」

「このかお嬢様は、ウチら関西魔術協会の長の娘や。ウチらから言うてみれば、関東魔法協会が攫ったようなもんや」

「はぁん、なるほど。そう言えば、詠春はアレだったな。関西の長なのに関東の婿養子だ」

「そうや。今の長は東の傀儡（かいらい）に成り下がった。長はウチらに、ウチの両親をコケにして、戦争行って死んで来い言うた西洋魔術師に頭下げて生きろって言うとんのや。……誰が赦せるか！

それにお嬢様の魔力は強大や。その魔力を使えば、封印されとるリョウメンスクナノカミを呼び出せる。こいつを使うて日本に我が物顔で居座っとる西洋魔術師を追い出すつもりやった……それをお前が！！」

「ダメだ、天ヶ崎千草さん」

「何でや！西洋魔術師は殺したいほど憎い！！けど、もうウチらに関わらへんだらそれでええのに……！！何で謝罪のひとつも無しに我が物顔でウチらに偉そうに命令してきよんねや！！どの面下げて

使われなあかんのや！！！何で……なんでウチらが……」

涙なしには聞けへんやろ。

「グスッ……千草はん……そんな事あってんなぁ……」

「そりゃ仕方ないわ……」

「何が……何が仕方ない言うんや！！！」

「そりゃそこまでやられたんなら、ちょっと国が傾くくらいの嫌がらせやったって、仕方ないわ。な」

「君……まさか？」

フェイトさん、ほんまシリアス顔が似合うでぇ。

「その嫌がらせ、俺も手伝うわ。何でそのリャンメンノ神呼び出したら追い出せるのか全くわかんねぇけど、そのくらいの魔力なら足りるだろ」

「あんた……ええんか？あんたは関東の者やろ？」

「え？いやいや、俺は教師よ。麻帆良学園中等部３－Ａの副担任。要するに、シラナミ、生徒、教育機関の三つに影響が無い限り何やってもいい」

「そうなんか。でもあんさん、見る限りそこまで魔力があるようには見えへんけど」

「ふ。じゃあ見てろ。必殺！！『どや顔ネックレスはずし』！！」

説明しよう！！『どや顔ネックレスはずし』とは！！
どや顔で魔力隠蔽用ネックレスをはずす技だ！！
これにより最悪死ぬ！！

「な、なんやこのバカ魔力！？」

「やっぱり、戦おうとしなくて正解だったよ」

「あんさん、凄いねんなぁ……」

「凄かろう☆敬え」

「それさえ無かったらなぁ」

んへっ！

０５５　世界最速、救出。（後書き）

ＳＵＺＵＫＩ　Ｔ２０（外装カスタム）
のスペックですが、全くわかりませんでした。
ごめんなさい。
見た目は完全にサイクロン号です。
提案くださったもみじ様、ありがとうございます。

更新宣言をすると用事が入る。
父が働いていないかもしれない紅の豚野郎でス。

父「メンテナンス入ったから行ってこい」
私「なぜ私が行かねばならぬのでしょうか」
父「（オンゲをやりながら）わし忙しい。整備料金やるから行ってこい」
私「いらないから行きませぬ」
父「メシ抜きな」
私「行ってきます」
父「ゴミ袋も買って来い」

今回はちょっとシリアスし過ぎたかもしれん。
気をつけます。
麟はちょっとバカなので、あんまり難しい話はわかってません。
要するに

関東が悪いけど関西に謝らない、ひどい。千草はやさしい。

とか思ってるんじゃないですか？知りませんが。

では今回もありがとうございました。

大丈夫、今日はあと6時間もある……！！

０５６　世界最速の居ない夜。（前書き）

まるでシリアスみたいなタイトルですね。
ちなみに尻ａｓｓです。
麟が出かけてる間何があったのか、まあ大した事は書いてませんが。

０５６　世界最速の居ない夜。

修学旅行。
生徒達からすれば体のいい旅行だが、本当の目的はその名前の通り、普段触れない文化と触れ合い見識を深めるためのものである。
とはいっても、そのような事を意識して修学旅行に臨む中学生など、いるかどうかは怪しいが。
彼女達も、“そちらの方の意味”で修学旅行を楽しんでいる所である。

金髪の、１０歳程度にしか見えない、肌の白い少女が立ち上がり宣言する。

「さて、ではまず、『いつからお兄ちゃんの事が好きか』についてだ」

彼女の名前はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル・シラナミ。場合によっては『エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル』とも名乗るが。
この場に居ない、白波麟の妹にして不老不死の吸血鬼、さらには魔法使いでもある。

「エヴァちゃんは？」

「６００年以上前に命を助けてもらって以来の仲だ」

「いや、無い無い」

そんなエヴァンジェリンに突っ込みを入れる彼女は朝倉和美という

『一般人』だ。
当然、エヴァンジェリンが寿命を失った吸血鬼であることも、その兄であり、昔から親しい仲の麟が不死で、なおかつ世界最強であることなど知りもしない。
和美の突っ込みは無視され、エヴァンジェリンの従者、ガイノイドの絡繰・Ｓ・茶々丸が続く。

「私は……思い返してみれば０１７の終わりあたりからです」

「な、何を言っているんだ！？」

「私には全くわからんな」

「そういうお前はいつからだ？」

「いつからって、私は別に……」

エヴァンジェリンにつつかれて冷や汗を流す彼女は長谷川千雨。一応シラナミだが、まだ名前に入るまでは至っていない。
魔法使い見習いといった所だろうか、使える魔法は少ないが彼女の通う麻帆良学園の異常性に気付いた数少ない人物でもある。

「気付いてないとでも思ったか？」

「って事は……？」

「あーあー、わかったよ！０４３の最後の方で既に惚れてたよ！！」

「ヒューッ！お熱いねぇっ！」

「盛り上がるのはかまわんが、次はお前だぞ、朝倉和美」

「げ、っそっかぁ……
まあいいや。私は昔からお父さんの付き合いで知り合いだったからなぁ。
麟さんには全部見られた事あるし……」

「ブッー！！」

「ちょ、噴き出さないでよ千雨ちゃん！子供の頃だって。オムツ変えてもらってたらしいし、私が１０歳の頃あたりまで、たまにお風呂も入ってたし」

「な、何だ、そういう事か……」

「ふむ、で、肝心のいつ好きになったかって話はどうした？」

「あ、やっぱばれちゃう？
でも、いつって記憶に無いんだよなぁ……。意識しだしたのは私が中学校に通うようになった一昨年の今頃だなぁ。その前まではたまに会ってたけど、会えなくなって分かる大切さもあるって言うの？あはは、照れるなぁ」

「なんだ、結構乙女じゃないか！！」

「ちょ、私も結構恥ずかしいんだからあんまりからかわないでよぉ！」

このように姦しく健全に騒いでいる訳だが、当然寝ている者も居るわけで、ここまで騒げば当然起きてしまう。

「ん～……朝ですかぁ？」

彼女は相坂さよ、いや、今は白波さよか。かつては６０年以上幽霊として過ごしていたが、今は麟に与えられた体に憑依してその嫁として過ごしている。

「あ、起こしちゃった？ごめんね、さよちゃん」

「おお、丁度いい、お前も参加しろ！」

「ん～……何の話ですかぁ？」

「いつから麟様の事が好きか、という話です」

「私は麟さんが大好きですよぉ～……くぅー」

「……もう少し寝かせておくか」

「そうですね、マスター」

「いやいやいや、ちょ、今の発言はどうなんだ！？」

「そうよ！ゴシップは別に好きじゃないけど、コレは気になるじゃない！」

「いや、気になるも何もさよはお兄ちゃんの嫁だぞ？」

「ハァ！？アイツ私に求婚してたじゃねえか！！」

「えぇ！？ちょ、えぇ！？」

「いや、貴様らの前提条件、要するに生活基盤が違うがな、お兄ちゃんの国は重婚しても大丈夫なんだよ」

「あ？あぁ～……魔法（あっち）世界の話だよな」

「麟さんって日本人じゃないの？ってか千雨ちゃん知ってんの？」

「お兄ちゃんは、アレでも小国の王だぞ」

「え、えぇ～～！？」

「お、おい、そりゃ流石に私も知らなかったぞ！？」

「なんだ、そうか。まあそういう話もあるが、別に変わらず接してくれ」

「ま、まぁそういう事なら……」

「では次の話だ！お兄ちゃんの好きな仕草！！」

「はい！マスター！」

「茶々丸！」

「全てです！」

「正解！！」

「なんじゃそらー！！」

「ええいなおれ！その腐った根性叩きなおしてくれるわ！」

「何でそんな事」

「わかりきった事であろう！お兄ちゃんの仕草がいかにかわいらしいか！！茶々丸！！」

「はい」

壁をスクリーンに寝姿の麟が映し出される。
長襦袢を身に纏い、体を丸めて指を咥える姿を見た彼女らは光源がどこかを気にする暇も無く。

「ちょっと千雨ちゃん、ティッシュ取って。鼻血出た」

「私も両手が塞がってるんだ。他に頼め」

「もう、二人とも仕方ないですねぇ、はい」

そんな二人にポケットティッシュを渡すさよだが……

「いつから起きてたとか、なんで袂からポケットティッシュが出てるのかとか聞かないけど、さよちゃんも鼻血出てるよ」

「あら」

「ふはは、さよもたいがい抜けているな」

「滝の如く鼻血を出してるお前には言われたくないだろうよ」

そんなこんなで時間は過ぎてゆく。
ちなみに、現在かなり大きな声で騒いでいる。
当然教師にも気付かれる訳で……。

「あのー……悪いんだけどもう少し静かに……」

「悪いと思っているなら黙ってろ」

「はい、すいませんでした」

先ほどの男は瀬流彦。姓なのか名なのかは分からないが、とにかく瀬流彦なのだ。
ちなみに、なかなかの苦労人である。合掌。

そんなこんなで時は過ぎていくが、先ほどから話に参加せずに外を眺めいる少女が居る。
色黒で、顔に刺青なのかペイントなのか分からないが模様のかかれた、髪の白い少女だ。
ずっと外を眺めながら、ペットボトルでジャグリングしている。

！！

今目が合った気がしま……うわなにをするやめ！！

０５６　世界最速の居ない夜。（後書き）

今回誰視点だよ。
はい、僕視点です。
こういうのを巷では「打ち切りＥＮＤ」というらしいですね。
え？違う？

今回の話は（僕の）息抜きです。
では、今回もありがとうございました。

０５７　世界最速と、魔境奈良。（前書き）

大仏よりも見るべきところは無いかもしれません。
なら大仏は見るべきものかというとそうでもないように思います。

０５７　世界最速と、魔境奈良。

「じゃあ作戦はこうだ……」

「ふむふむ……」

「それは……」

「ここはこうしたらええんちゃいます～？」

「僕としては、かの英雄サウザンドマスターの息子も」

「そいつ１０歳なんやろ？それに西洋魔術師みたいやし、俺も戦ってみたいねんけど」

「ああ、ネギなら、まあ多少どうなってもいいかな」

「なら僕も直接出る必要は無いかな」

「それならやっぱりここはこの方が……」

「じゃあ追っ手があるようならここで何かすごいの召還して……」

「親書の件は……」

「それでネギをおびき出すと……」

「じゃあ決行は明後日でいいかな？」

「せやな、準備もあるし」

「俺は別に無いねんけどなぁ」

「ウチも斬れるならなんでもいいですー」

「生徒を斬るのはまぁ、赦さん。斬りたいなら俺を斬れ」

「麟さん斬れませんやん。いけずぅ」

「とりあえず連絡先は渡しておく。じゃあ俺先生だし、帰るわ」

「あ、麟はん！！」

「ん？どうした、ちーちゃん」

「ちーちゃん？いや、その……おおきにな」

「……犯すぞ」

「何でや！？」

「転移」

ただいま、麟だよ。

からころこからから……

「あれ、みんな寝たのか？」

「……」

「ああ、そうなん。ありがとう、おやすみ」

「おやすみなさい」

「かわいい声してんじゃん」

「……」

しゃーない、部屋戻って寝よう。

ちなみに、なぜか一人部屋だ。

「ＯＨＡＹＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！！！！！！」

……

「……知らない天井だ」

寂しくなんかないもん！！

「お兄ちゃーん？」

「麟様ぁ？」

「……俺は絶対殺させたりしないからな」

「？」

「どうかしたんですか？」

「家族は大切だよな、うん。
つーわけだから、俺関東魔法協会に反旗を翻すわ」

「え？どういう？？」

「いやな、昨日こういう事があったんだよ」

～～こういうこと～～

「で、俺ももし家族の誰かが殺されたりしたらって思ったらさ、協力しないのも人非人が過ぎるだろ」

「お兄ちゃん……」

「家族の誰かが死ぬとか考えるだけで俺が死にそうになるわ。という訳だから俺も手伝う」

「そういう事なら私も協力しますよ」

「わ、私もだよ！

それに、そこにいる千雨もね」

「き、気付いてたのか！？」

「目元が赤いぞ？」

「うるせぇ！」

みんな優しい家族で幸せ者です。

「麟先生！昨日は結局……」

「落ち着け。後でちゃんと説明する」

「何なに？麟さん、昨日何かあったの？」

「何だかずみん、大人の階段駆け上りたいの？」

「い、いや、また後でね？」

『それでは麻帆良中の皆さん、いただきます』

「「「いただきまーす！」」」

「いただきまぁあああああああああああああああああああああ

！！！！！！！！！」

「うわぁ！！どうしたの、麟くん！？」

「気にするな、お兄ちゃんの病気だ」

「いや、気にするでしょ！！」

「ごちそーさまぁぁあああああああでしたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「早っ！ってほとんど食べてないじゃん！」

「体が小さいからそんなたくさんたべれない」

「そうだ！お兄ちゃんは繊細なんだ！！」

「誰かコレ食べる？おなかいっぱいだから食べられないんだけどつ里芋」

「いや、それお兄ちゃんが嫌いなだけじゃない」

「先生が好き嫌いなんていけないんだよー」

「いや、そういうんじゃないから。おい、ソレを俺に近づけるんじゃない！！リバーシブルするぞ！！」

「麟せんせー、プリン食べる？」

「何やってんだ、さっさと寄こせよ……ハッ！？」

「捕まえろ！！」

「外車で帰るぜ！！」

「危ない所だったぁ……」

里芋はさよが食べました。

「麟先生、昨日の事の説明を……」

「麟くん、ウチも？」

「うむ。苦しゅうない。あの後な……」

～～あの後～～

「ってな事があったからな、ほな俺も手伝うやんけっつーことでな」

「そんな事が……」

「えぐっ、ズズッ……うっ、ウチも謝る……」

「このちゃんは何も悪くありません！！」

「それでもウチのお父様の事なんやろ！？そんなん聞いて知らんフリなんて、ウチにはでけへん！」

「このちゃん……」

「その心意気や良し。まあ、コレを期に関西の内部同士の摩擦が納まるといいよな。
と耳障りの良い事を言っておこう」

「いや、それは思うだけにしておいてください」

今日は３・５・６班が奈良か。地味に忙しくなるな……

「お兄ちゃん、行こっ？」

「そうだな。貴様らも充分気をつけること！何かあれば修学旅行のしおりの最終ページに俺の番号があるから電話して来い。でも意味無く電話した奴は一晩中スクワットな」

「「「はーい！」」」

「解散！」

「奈〜〜良〜〜」

「お兄ちゃん、あとどのくらい？」

「リバティシティみたいな走り方していいなら三分」

「待て待て！！」

「麟さん！普通に走ってくださいね！！」

現在、レンタカーでバスを借りて運転している。
一応奈良メンバー全員乗せて。

「ちょっと、朝倉。あんたの副担任かわいいしバスの運転できるし凄すぎでしょ」

「いいでしょ、あげないわよ」

「ちぇっ」

「ちなみにこっから一度も道を反れずにまっすぐ走るとそのうちどこ掘っても遺跡が出てくる恐怖の町橿原につくけど行く？」

「橿原神宮ですか……そちらも興味深いです……」

「運が悪ければ生で遺跡を掘ってる所が見れるぞ」

「悪ければ？」

「まあ行くっつっても奈良市にしかいかねぇけどな。着いたぞ。降

りろ」

「はーい？」

「ありがとね、麟先生？」

「気が向いたらうちの担任になってねー」

「おい、瀬流彦が泣くぞ」

というわけで、奈良だ！

「えー、注意事項！鹿は凶暴だからうかつに近付きすぎるな。あいつ等マジ暴徒」

「えー、かわいいよー？」

「ホントに道歩いてるー！！」

「しかせんべいをやろう！」

「まあ泣くなよ」

「先生！！助けてー！！」

「だから言ったんだよ！手を放せ！！」

「でもパンフレットが！」

「そっち行ったとこにいくらでも置いてある！」

鹿がむっそむっそとパンフレットを喰らっている。
それ食いモンじゃねぇから！！

「麟先生、鹿せんべい食べていいですか？」

「無害だから勝手に喰ってろ！！」

ゆえに言ったらマジで喰った。

「む、けっこうな……」

「まじか、ポリパリポリンクス……特筆してマズイとう訳でもないが、味は無く決して美味くはない。ちなみに主な原料はぬかと穀類だ」

「麟先生！鹿せんべいってどうやってあげるんですか？」

ちなみに聞いてきたのはネギだ。びっくりだわ。

「そこに１５０円で販売されてるからそれ買って一枚づつくれてや

れ。ちなみに帯も食うぞ」

「えぇ！？大丈夫なんですか？」

「パンフレット食うくらいなんだから大丈夫だろ」

「わわ！頭突きされました！」

「早く寄こせっつってんだよ。言わせんな恥ずかしい」

「せんせー！なんか変なにおいがするー」

「ぶっ飛ばすぞ。それは鹿のにおいな。フンとかの。そこかしこに落ちてる黒いツブツブがそう」

「ひゃぁ！！」

「お兄ちゃん！大仏殿行こ！！」

「はーい？」

「わぁ、おっきー」

「台座も含めてだいたい１８ｍくらいか？」

「ちなみに重量は約２５０ｔと、相当重いです」

「おお、ゆえさんではないか！」

「お嬢ちゃん、ここは一応飲食禁止やからあっちで飲んでな」

「ごめんなさいです」

連れて行かれた。

「アイツは何をしに来たんだ？」

「重さを言いに来たんじゃないの？」

「あぁー疲れた。全員乗ったか？」

「「「はーい？」」」

「おい、ネギ先生の魂抜け切ってるぞ」

「い、いいから出して！早く！！」

「うお！何だよハルナっち！まあいいや、出発～～」

純粋に疲れた。

０５７　世界最速と、魔境奈良。（後書き）

奈良の鹿ですがね、アイツらは本当に暴徒です。
以前飛び出してきた鹿を避けた友人の車が全損になりました。
恐ろしいでぇ・・・・・・・

ちなみに橿原の「運が悪ければ遺跡の発掘」がどうとかいうのは、本当にどこ掘っても遺跡が出てくるんです。
そして、うかつに出てきてしまった日にはそこから発掘が始まります。
その土地が借り土地だった場合でも借り賃は借主持ち。

恐ろしいでぇ・・・・・・・

という訳で、魔境奈良編でした。
皆さんも一度はお越しください。本当に何も無いところです。

では、今回もありがとうございました。
明日は多分、白百合の方を更新します。

間に合え、日付の境界線！！

058　世界最速、Ｐｏｋｅｒ　ｆａｃｅ。（前書き）

ｏｈ－ｏ－ｏｈ－ｏｈ－ｏｈ

０５８　世界最速、Ｐｏｋｅｒ　ｆａｃｅ。

「うーん、うーん……」

ロビーに煙草咥えて行ったらネギが転がってた。

「何やってんだ？ノミでもついたか？」

「い、いやあの、別に何も……誰も僕に告ッたりなんか……」

「え！？コ、告った！？」

「それホント、ネギ君！？誰からされたの！？」

「ＨＯＯ！びっくりした。ゆっきーとまっきーか」

そしてネギが口を塞ぐ。

「おい、ネギ先生？口を塞いでも、言った言葉は戻ってこないゾ♪」

「いえ、あのっ、告った……じゃなくて、ココッコックさんがコクのあるコックリさんのスープを……
ぼ、僕しずな先生達と打ち合わせがあるので、これでー！！」

「何だアレ、シャブやってんのか？
ってか打ち合わせとか無かったよな」

まあいいや、６班のトコ行こ？

「エヴァぁ～ん？」

「お兄ちゃ～ん？」

「茶々丸ぅ～？」

「麟様ぁ？」

「さよぉ？」

「麟さぁん？」

「ちうたぁん？」

「ちょ、やめ……」

「かずみぃん？」

「は、恥ずかしいからさ……」

「ザジ～？」

「……」

一々、一人ひとりに抱きついていく。

「ハーレムやでぇ……」

ひとまず全員適当にはべらしてると急にふすまが開いた？

A．　急や

「ちょ、ちょっと朝倉、大変だよ！！」

「スクープスクープ！！」

「そうですわ！教師と生徒が淫行を！！」

「え？……」

「おい、何だよかずみん」

「……で？」

「え？いえいえ、淫行ですわよ！淫行！！」

「いや、何を今さらって感じだけど。……一応聞くけど誰と誰が？」

「ネギ先生に誰かが告ったねぇ。別に淫行でも何でも無いじゃん」

「いーえ！これは許されざる事ですわ！！」

「俺もいけないと思う」

「麟さんはかなり激しく黙ってて」

「……！！……！！！……～？？」

「ハイハイ、まあ一応調べちゃみるけど、誰かはわかんないと思うな」

「ｈＮｍＨｍＮＨｒＮ　☆★☆◇？？」

→母音が無いから音は出てない。

「……まあ行ってくるよ」

「頼みましたわよ！！」

かずみんが出て行ってからエヴァと旅館の中をウロウロしてたらかずみんがいた。

「おいすーかずみん、お、ネギじゃん」

「あ、ネコ」

旅館の外に出たかずみんに声かけたら、振り返り際にエヴァが道路の真ん中にネコを発見。

で、ハイエースがネコに突っ込んでネギがそこに突っ込むという何

ともカオス。
何でネコって車が来てるのわかってんのに止まるんだろうな。
聞いた話だと対決するらしい。ネコ科は相手の大きさがわからないんだとか。
真偽のほどは定かじゃない。

「死んだー！？」

「いいや、ダメだね。強制転移」

別名バシルーラ。
相手は死なない。
俺のところにネギとネコとカモを転移させる。

「おい……おい」

「あ、麟先生！助かりまし……た……朝倉さん？」

「……へ？……何今の？」

「俺、俺。俺がやった。褒めて」

「別にネコだけ助ければ良かったのに」

「いや、修学旅行中のかずみんにトラウマ植えつけるとか何モンだよ、すげぇな」

「……まあ……麟さんだしね、何出来たって今さら驚かないよ」

俺だけど驚けよ。ほめろよ。

「お兄ちゃんえらいえらい？」

「せやろ？」

「俺っちまで助けていただいて、ありがてぇッス、リンの旦那！」

「いやいや、流石にオコジョが喋っちゃうのはマズイでしょ……」

俺がウルトラフォローするから寝ろ。
と言ってネギを寝かしつけた。

「さて、どっから話したもんか、って一度言ってみたかった。
かずみんよ、この世は愛と憎しみと非日常に溢れている！」

「え？いやいやいや、そんなそこらに転がってないよ！？」

「おい朝倉、愛と憎しみは知らんが、魔法はホントにそこらじゅうにある。気付かないか？
あんな学園のどこから見てもわかる大きさの巨木が堂々と学園の真ん中に鎮座しても誰も不思議に思わない、
生身の攻撃で石を粉々に砕ける中学生がいるのに、まだ１０歳の教師が来ても、学園長の頭が後ろに伸びまくっても誰も疑問に思わない」

「え？千雨ちゃんも魔法使い？」

「んな化け物連中と一緒にすんな。まだ魔法に使われてるよ」

「そ、そうなんだ……。
でも言われてみれば世界樹とかくーふぇとかネギ君とかぬらりひょんとか……ひょっとして魔法であんなことに！？」

「いや、私の話の何を聞いてたんだ？魔法であんなんが居たりあったりすんのを隠してるんだよ」

みんなでポーカーしようぜ！
お、いいねお兄ちゃん
なら私も参加いたします
私もぽーかーってやってみたいです
……
せやろ？

「って事はあの世界樹とか学園長とかは素で“ああ”な訳？」

ウルトラミラクルハイパースーパーロイヤル１ペア！
フォーカード
スリーカードです
ふらっしゅ？です
……
ろ、ロイヤルストレートフラッシュ！！

「まあそっちの方がおかしな気もするけどな」

ま、今のは勝ちをくれたやっただけだ！今回はツーペア、２と６だいや、２のツーカードなんて最早ブタ超えだよ。ＱとＫのツーペア

あ、ふるはうすです！
……
なんだ、Ａとジョーカーのフルハウスか……ってファイブカードやないかーい☆
「はぁ、なるほど……ちなみにコレ記事にしても大丈夫かな？」
「検閲で消されるんじゃね？」
「俺が消されるわ！！何でカードゲームも弱くなってんだよぉ！！」
「お兄ちゃんはザコかわいいね」
「いや、何やってんだよ」
「Ｐｏ－Ｐｏ－Ｐｏｋｅｒ ｆａｃｅ，Ｐｏ－Ｐｏ－Ｐｏｋｅｒ ｆａｃｅ」
「レディ＝ガガか！？」
「というかこのタイミングで止められたのは初めてだ。そして奇跡も魔法も、あるんだよ。
不満なら耳元でＷｅｌｃｏｍｅ ｔｏ ｕｎｄｅｒｇｒｏｕｎｄ．．．と囁くのも辞さない覚悟」
「いや、そんな痛々しいコピペみたいな展開はいらないんだけど、魔法……魔法かぁ……ねえ麟さん、私も使えるのかな？」
「奇跡も魔法も、あるんだよ……」

「お兄ちゃんは魔法を教えるのが死ぬほどヘタクソだからその類の質問は何の意味も成さないぞ」

「まあそういうこったな。いい兵士がいい指導者たりえない、という昔の偉い俺が言った言葉があってな」

「このタイプの自画自賛を見るのは初めてだよ。ある意味自虐ネタっぽいけど。ハァー、魔法使いたかったなぁ」

「おい、エヴァンジェリン、私と一緒に教えてやったらどうだ？」

「しかしシラナミでないものに……そうだ、お兄ちゃん」

「うむ。ならばかずみんよ、俺の所に来い」

「え？えぇ？」

「あぁ、始まったよ。私は出とくわ」

なんだよちうたん。言いたい事があってもはっきり言うと切ない。

「知ってしまったからには仕方あるまい。幸い、俺はかずみんがかなり好きだ。結婚しようか」

「へえぇぇ！？そ、そんな……冗談だよね？」

「本気だ。シラナミとして迎え入れて等しく愛すると誓おうじゃないか」

「そ、その……ぐずっ……麟さぁん……」

「かずみん……」

え？いやいや、俺の手はそこまで早くねぇよ。速いのはバイクくらいだよ。

「ちなみにこれが先ほどの和美さんの写真です。コレを♪乙女かずみん♪と名づけようかと」

「採用」

「ちょ、ちょっとぉ！！」

「終わったか？」

「ああ、そうだよちうたん」

「って事はライバル発生か、うかうかしてらんねぇな」

そう言うとちうたんは俺に向かって左手を出してきた。
マリッジを人差し指から外して薬指につけなおしてあげる。

「今日から白波千雨だ。んで、これからはライバルじゃなくて共闘だ。よろしく」

「よろしくねん。でも負けないよ、千雨ちゃん」

嫉妬のない関係はいいよな。

ちなみに何があったのかは知らないけど、俺の知りえない所でいろいろあってのどっちとネギがパクティオーしてたらしい。

どうでもいいな。

０５８　世界最速、Ｐｏｋｅｒ　ｆａｃｅ。（後書き）

出身高校が十津川高校なんです。

豚野郎です。

今回は魔法バレ回ですかね？そうなんですかね？

違いますね。

ではあとがきは簡素に。

ありがとうございました。

０５９　世界最速、交差しない思惑。（前書き）

すごく久々の更新な気がします。

平行線どころか思惑が一本しかないから交差しようもありません。

０５９　世界最速、交差しない思惑。

「さあ、話し合いだ！！」

「やってやりましょう、麟様！」

「えーと、彼女達は協力者でいいのかな？」

「“俺の”協力者だ。安心しろ、エヴァンジェリンは俺の次に強いし俺より賢い！
そしてなんと茶々丸はロボットで、しかもガイノイドだ！！凄かろう！」

「あんさんらも協力してくれはるんか？」

「そうだ、エヴァと茶々丸が協力してくれるっつってんだよ！！」

「麟さんにはきいとらへん」

「しょんぼ麟」

しょんぼ麟でうー。

「どうやらお前らクソどもの考えたゴミにも劣る作戦に大きな穴があるそうだから、それをエヴァが修正してくれるそうだ！」

という訳だ。
修正案を出していき、より良い方法を提案する。
さすがエヴァ！天才！！

ちなみに参加者は俺、エヴァ、茶々丸、ちーちゃん（千草）、つっきー（月詠）、フェイト（運命）の６人だ。
犬耳のイマイチ萌えないバカガキは留守番だ。

「まあ殆ど麟さんが考えたモンやけどな」

「ぐぅわ！ぐぅわ！ぐぅわ……」　K．O．

「一つ目、ネギを途中で襲うのはいい考えだ。そのコタローとかいうガキには全力でやってもらおう。死にそうなら助ける」

「それで、その次はどないします？」

「ナギの息子、ネギの親書は一時的に東の長に渡す」

「理由はなんですの～？」

「恐らくあのじじいの事だ、クソにも劣る文を書いているに違いない。コレを証拠物件として確保」

「それは可能かな？」

「そんなもん貴様等の力量次第だ。
そして次に貴様が屋敷を襲う話だが、ここでは怪我人を出さない方法を取ってもらう。捕縛魔法は？」

「捕縛はともかく、石化ならそれなりの自信だよ」

「でも何で怪我人を出したらあかんのですか～？」

「東に付け入る隙を与えてしまう。そんなもん１ｍｍもいらん。
向こうと話し合いをしようとしたが、先に手を出してきた
これが理想だな。可能ならあのガキに手を出させろ。西の者が手を
出すよりやりやすい」

「確かに……」

「で、スクナの件だが、コイツの召還までは問題ないが、やはり東
までとか無理だ。脳みそ腐ってるんじゃないか？」

「いやいや、あんさん酷いな」

「思った事を言ったまでだ。コイツはある程度遊ばせてから圧倒的
火力で消す。東への宣伝だ」

「なるほど～……それはあんさんがやってくれはりますの～？」

「そうだな。状況により、だ。
で、重要なのはここからだ。まず……」

飽きた。
いや、ホントに。
俺頭良い方じゃないからホント飽きてきたんだ。
ここまでの半分も覚えてない。

「……と言うわけだ。いいな？」

「任せい！」

「斬ってもいいんですやろ～？」

「いや、月詠君、ダメだって」

「え？うん、大丈夫大丈夫。かなりの確立で可能を不可能にできるっし」

「お兄ちゃんはその都度言うから安心してね」

「うｎ」

～～翌朝～～

「……という方法を取る事になる。異論があるなら手を上げろ」

せっちゃん、このちゃん、ＯＲＥ、エヴァ、茶々丸がいる。

異論はないそうだ。

「では質問があれば私に言うように」

「はいはいエヴァちゃん！」

「何だ、近衛木乃香？」

「私らはどうしたらええん？」

「基本的には班行動だけど、一般人にバレたら目も当てられんからな。適当に理由をつけて再編成させる。恐らく図書館探検隊？か何かと同じ班になるはずだ。あとはなるように行動し、適当に実家に向かえ。変わりは私が用意するから心配は無い」

「魔力提供は俺な！俺が魔力提供な！！」

「頼もしいなぁ、せっちゃん」

「そうですね「そう“です”ね？」そ……そうやね、このちゃん」

このちゃんこわい。

「では、私たちとは一時別れますが、何か御用がある場合はこちらの番号か札をお渡ししますので大事がある場合至急お願いいたします」

「はい、ありがとうございます、絡繰さん」

「よろしくなー」

では行動まで時間があるから修学旅行のしおりでも見ておこう。

―――――1―――――

・教師に逆らった者は、殺す。
・教師以外で権力を行使したものは、殺す。
・教師を自分の都合良く解釈したものは、殺す。
・煽り叩き潰しを他の班にした者は、殺す。
・クラス同士の対立煽りを仕掛けた者は、殺す。
・修学旅行を楽しめない者は、殺す。
・京都や奈良・大阪などより遠くに特攻した者は、殺す。
・修学旅行中の教師公認の活動を妨害した者は、殺す。
・修学旅行に関係の無いお土産を欲しがる者は、殺す。
・飲酒・喫煙などの不良行為は、殺す。
・公然わいせつ・強制わいせつをした者は、殺す。
・修学旅行費を払わない者は、殺す。

―――――2―――――

修学旅行の流れ

気合で
乗り切れ

―――――3―――――

持って行くもの
己が心に聴け。
それで解らぬなら教師に聞け。
それでも解らぬなら悩め。
悩んで、悩んで
悩みぬいて
死ね！
――――――4――――――
歴史的建造物の案内
1．京都府
寺とか。
2．奈良県
神社とか。
3．大阪府
ビルとか。
――――――5――――――

最後に

辛い事、泣きたい事があったら死ね。

なんだこの……なんだ？

エヴァのしおりを見たら普通のだった。

どういう事なの！？

「エヴァ！！☆ゲイ♂セン☆行こうぜ！！」

「そんなとこより金閣寺行こうよ！」

「よぉーし、ジェラートみんなの分奢っちゃうぞぉー☆」

「というか、まさかこっから歩いていくとか言わないよね？」

「安心しろ、こんな時の為に現地妻ならぬ現地車庫が世界中の至る所にあるぜ！

こっから一番近い7人乗れる車がある車庫は……出た。歩いて6分

！即ち這って15分って所だ！」

「這って行く必要がどこにある！！」

「あぁ、最早車庫には突っ込まないんだ。そりゃ麟さんだもんね」

「麟様は」「「「天才だから！」」」」

「うん。もういい」

～～？毘古社～～

「よっしゃ、見事に掛かったな。アホばっかしや。じゃあ小太郎、好きにしてええで」

「ああ。行ってくるわ、千草姉ちゃん」

「治してもらえる、言うたかて、怪我しなや」

「ふん、俺を誰やと思てんのや。そんなヘマはせんわ」

～～映画村～～

「このちゃん、こっちです！」

「敬語はやめてって言うてるやんかぁ～」

ふふふ……

茶番やって解ってても楽しみやなぁ～

「よろしく頼みますえ、刹那センパイ？」

などという感じでみんなちゃんとやってくれてるだろう。

俺はどっちに合流しようかなぁ～～～。

まぁ適当に特攻すりゃいいか。

「お兄ちゃん、早くぅ」

「アハハハハ、ウフフフフ」

「平和だな」

「……」

「平和ね～」

「平和ですね」

アハハハハ、ウフフフフフ

０５９　世界最速、交差しない思惑。（後書き）

ぬはぁー！！！
めっちゃ久々の更新やん

すんません、テディベア作ってたら遅れました。
淫乱テディベアじゃない方です。

というか、修学旅行編飽きてきました。
もう和解しとんねんから襲撃とかいらんやろ、と思わんでもない感じです。

スクナ戦とのどかの読心だけが楽しみです。

多分麟の用意した車はハイエースとかエスティマとかだと思います。
そんな気がする。

明日は明日で地味に忙しいっぽいので、更新できるかは危ういです。
半ニートなのに自営業の父より忙しい。

では、今回もありがとうございました。

０６０　世界最速の視点変更。（前書き）

ぽいんぽいんと視点が変わります。
なんか、カモさんがええとこ全部持って行きました。

０６０　世界最速の視点変更。

麟のねえ……兄ちゃんにはなるべくネギをいじめてやってくれって頼まれとるけど、どうも弱いもんいじめは好かんねんなぁ。
まああの大戦の英雄「サウザンドマスター」の子供（ガキ）らしいから、んな弱いって訳でも無いんやろうけど。

とか思いながら眺めとったら一緒におった、多分式返しの能力がある姉ちゃんが魔力強化で岩を蹴り砕きよった。
多少は楽しめそうやけど……関西のもん勝手に壊すなや。
これやから西洋魔術師は。

「そこまでやで西洋魔術師」

千草姉ちゃんの用意した蜘蛛の式神に乗って下におりる。
あ、めっちゃ荒らしてもうた……人の事よう言わんわ。

「な！？君は！？」

「ネギ・スプリングフィールドやったか？あんま大したことなさそうな奴でイマイチおもろないけど、俺と戦ってもらおか」

「急に出てくるなり失礼な奴だなぁ、兄貴、どうすんだい？」

「このタイミングで出てきたって事は、君が結界を？」

「そうや。出たかったら俺を倒してけってな。ま、回避不可能イベントや思て倒されてくれや。当然話はここで終いやけどな！！」

小太郎君につけておいた式神から交戦の合図が来た。
さて、じゃあこちらもそろそろか。

「綾瀬さん、早乙女さん、私はこのちゃんと二人で行く所がありますのでここで別れましょう！」

「愛の逃避行やなぁ」

「こ、このちゃん……」

「すごいラブ臭を感じる。今までにない何か熱いラブ臭を。
風・・・なんだろう吹いてきてる確実に、着実に、木乃香と桜咲さんのほうから。
　中途半端はやめよう、とにかく最後までやってやろうじゃん。
探せば麻帆良だけでも沢山の同性愛者がいる。決して一人じゃない。
　信じよう。そしてともに戦おう。
両親の反対や偏見は入るだろうけど、絶対に流されるなよ。」

「ハ、ハルナ……すごい鼻の穴です！」

「もぅ、行きますよ！」

「はぁい」

私はこのちゃんを抱えて飛び上がった。

コイツ、できるな。

今の兄貴や姉さんじゃマズイ。このままじゃ負けちまう！

「姉ちゃんにもろた式神は返されてしもた時から思てたけど……やっぱりお前は全然大したことないな、チビ助！」

「！」

「女に守ってもろて、恥ずかしいと思わへんのか？これやから西洋魔術師は嫌いなんや」

「前衛のゴキちゃんやられちゃたからって負け惜しみね、ボク！」

「いや、待ってくれ姉さん！奴の様子がおかしい！！」

「ほう、そっちのイタチはなかなかやるやないか？そうや。俺は術師とちゃう！」

奴はそう言うと姉さんの前に立って、振り回すハリセンを避けてる。

「ハハッ、当たらな意味ないな♪」

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル！風花……」

奴が兄貴の懐に潜り込んだ。
あ、あの手に持ってるのは!?

「武装解除!」

「避けろ、兄貴!!」

「枯山水はいいなぁ……」

「詳しい事はわからんがこの時期だとまだ桜が見えて中々風情のあるもんだな」

「そうだろう、千雨。貴様もこの美しさの虜になるがいいわ」

「あれ?石一個足りなくね?何回数えても14個なんだけど。俺盗ってねえよ。マジ」

「これは初めからそう見えるようになってるんですよ、麟さん」

「日本人凄すぎだろ。どんだけやり放題だ」

「本来無い物をそこに見る。日本人の美意識が垣間見れるいい場所だよ」

「なるほどー、なるほどー」

よくわかってない麟です。今日はこのまま出ないんじゃないかとちょっと焦ってた。

「さっきの西の庭も良かったけど、やっぱり龍案寺に来たら万丈庭園は見ておかないとね」

「……」

「せやな」

「左です、先生ー！」

「！」

「あんたはさっきの姉ちゃん！？」

さすがにマズイな、一般人を巻き込むのは……。

大人しぃしとけって言うたのに。

「おい、チビ助！一時休戦や！」

「な！？なんでよ？」

「やっと諦める気になってくれたの？」

「アホか！どう見てもさの姉ちゃんは一般人やろうが！こっちの世界に気軽に巻き込んでも良い思てんのか！
アホやとは思てたけどおまけにクズとはな！ホンマ気分悪いガキやで。」

「そ、そんなつもりじゃ……」

「一時休戦言うたけど、もうええわ。お前なんか戦う価値もあらへんクズや。結界は解除するから勝手に出て行け！」

「鏡容池は四季で景色が大きく変わり、春は桜、夏は睡蓮、秋は紅葉や楓、冬は雪景色がそれぞれ外せないよ」

「何で行った事ないのにそんな詳しいのか不思議」

「マスターはそりゃあもう季節の変わり目には怒涛の検索マシーンですからね」

「そんな事ならもっと連れてきてやればよかった」

「お兄ちゃん……」

「つーか俺蓮の種？っていうの？あれ死ぬほど怖いんだけど」

「アレねえ。私も怖いよ。なんていうか、混ぜたらかなり取り返しのつかない事になりそう」

「お前ら間違っても蓮コラで検索すんなよ。私も一回見たけど……」

蓮コラ見た時は思わず画面を殴り抜いたもん。

ホント怖い。一ヶ月パソコン触れないレベル。

「そんな事より一回見てどうなったの？布団から出れなくなったの？「何で私だけ一人部屋なんだよぉ」って泣きながら音楽を鳴らしてたの？」

「な、何で知ってやがる！？」

「知らなかった」

知らなかったんだ……。

なんだろう……あの稚拙な尾行は……

「せっちゃん、せっちゃん～～？」

「はい？」

「じゃ～ん？」

私の天使がそこにいた……

じゃなくて

「ど、どないしたん、その衣装？」

「そこの更衣所で貸してくれるんよ。

どう？似合とる？」

「は、はい！天の羽衣を拾い忘れた天女が降りてきたのかと！！」

「もう、ややわぁ？」

お嬢様おかわいいお嬢様お美しいお嬢様お綺麗お嬢様麗しいお嬢様

清楚お嬢様いじらしいお嬢様愛おしいおじょ……

「はっ！？私はいつの間にこのような格好を！？」

気付いたら夕凪が死ぬほどそぐわない男物の扮装をしていた。

「うわー？すごい美少年剣士とお姫様だー？」

「写真撮って良いですかー？」

「え？」

「はーい？」

ま、まあこういうのも……いいかな？

「あの、今の写真のデータもらっていいですか？」

「あんな、すっごいこと気ぃついたんよ」

「どうしたの、お兄ちゃん？」

「ここな、映画村じゃなくてな、シネマ村やねん……」

「え？……う、うん。……どうしたの？」

「前回どや顔で映画村って書いたバカがいてな」

「いや、ねーだろ。流石に間違えないだろ」

「という訳でシネマ村だ。いいか、映画村じゃないぞ。シ・ネ・マ村だ」

「そんなに気になるなら修正すればいいのではないのでしょうか。……何を修正するんでしょうか？」

「さぁ？」

「うぅ……僕は先生失格だぁ……」

「ちょっとネギ、どうせ逃げるための口実よ。そんな落ち込まないの」

「そ、そうですよー」

「うわぁあああああん！」

「どうもー、神鳴流ですー」

っておいおい！

「じゃなかったです。そこの東の洋館のお金持ちの貴婦にございます～～。

そこな剣士はん、今日こそ借金のカタにお嬢様をもらい受けに来ましたえ～」

「そ、そうはさせんぞ。お嬢様は私が守る」

「キャー、せっちゃん格好えー？」

「お、おおおおお嬢様！？」

「そーおすかー。ほな仕方ありまへんなー。えーい？」

そう言うと月詠は手袋を投げてきた。
ここまでは手筈通りだ。

「このか様を賭けて決闘を申し込ませていただきますー。３０分後、場所は「映画！！！」村正門横『日本橋』にて――って誰ですの～？」

「キノコ狩りの男！！スパイダーマ☆」

り……麟先生！？

「やる事あらへんと暇やなぁー」

「そうだね。彼らは上手くやってるんだろうか？」

そんな事を言いながら隠れ家でフェイトはんと将棋をしとった。

「ただいまー」

「お疲れさん、どうやった？」

「どうもこうもあらへんで！アイツ自身は大したことないわ、女に守らせるわ、おまけに一般人巻き込むわで碌な奴やあらへんだわ！西洋魔術師いうんはこれやから好かんのや！」

「そんな事があってんなぁ……いや、待ちや？これは使えるで」

「？どういう……ああ、そういう事か」

「わかったか？」

「そりゃあね」

「な、何やなんや、二人して？」

「ええか、小太郎こっからウチらは……」

さて、もう一仕事や！

「麟先生！？」

「地獄からの使者から来た男に情け無用のモンスター退治の専門家に命をかける約束の冷血動物マシーンベム殺しの専門家、血は人間の絆。愛の証し。愛の為に血を流す情け無用の亡き兄に復讐を誓う姉弟に心打たれる野生の少女の男の為に戦う希望を見た大切な心を粉砕する少年の友達、１００メートル先に落ちた犬笛にむせび泣く

男キラー、スパイダーマ！」

「長いし意味わかんないし主にポーズがキモい！！」

「麟さんかっこいいです！！」

「さよちゃんの美的感覚が！！」

「お兄ちゃんかっこいい！」

「麟様かっこいいです！」

「もう駄目だなこいつら」

ひどいよちうたん。

「……」

「ね？そう思うよね？」

「……」

「ぬははｗｗｗ」

「あの～？」

「あ、ごめんつっきー。忘れてた」

「んっ、んん～。ほなお待ちしておりますえ。お友達は連れてきてもええけど、助けにしようと思たらダメあきませんえ。逃げたらイ

ヤですよ、センパイ？」

ゴロロンガラゴロンロと馬車？に乗って走っていった。
何やってんだ。ああ、作戦か。忘れてた。

なんかいろんなとこから出てきた生徒どもがキャッキャウフフフとこのちゃん&せっちゃんに集り出した。
軍隊アリか。ちなみに軍隊アリって世界でもかなり恐れられてる虫。
気をつけて。日本には居ないけど。

「ンハハハｗｗｗｗよくぞ逃げずに来たなぁ！！」

「それは私のセリフですえー」

「言ってろ！！貴様如きでこの桜咲刹那様に勝てるとお思いか！バーカバーカ！！」

「せ、先生……」

「あほー！ゴスロリ似合（にお）てんじゃボケー！！」

「うふふ……そうですかー？」

「せっちゃん、後は頼んだ」

「投げっぱなしですかー！？」

「ほな始めましょか、センパイ……？
このか様も刹那センパイもうちのもんにしてみせますえーー？」

「せっちゃん、負けてもええ。私はどうなってもかまへんから、怪我せんといてな」

「このちゃん……。そのお言葉が何より私を奮い立たせます。負けませんし、このちゃんに手は出させませんし怪我もしません。ご安心を！」

「せっちゃん……欲張りやねんから？」

パチ……
パチ……
パチ……

のどか嬢ちゃんはトイレに行ってる。
話すなら今のうちだが……

「僕はもう駄目なんです……」

「ネギ……」

「僕なんて……僕なんて……」

「おい、いい加減にしろよ、兄貴」

「カモ？」

「カモ君？」

「確かにあのヤローの言った事も一理ある。でも劣勢だったあの時、そんな事を気にかけてるような余裕は兄貴には無かったんじゃないか？」

「それでも僕がやった事は……」

「兄貴、後悔なら充分だ。まだ目的が終わってない以上、今やる事はそれじゃねぇだろ。前を見ろよ！やる前から諦めてどうすんだ！」

「カモ、あんた……」

「それでもまだ後悔するってんなら勝手にしてくれ。俺っちの知ってる兄貴は、俺っちの恩返しが終わる前に死んじまったとでも思うさ……」

「カモ……」

「カモ君……ごめんね、ごめんね！！」

「わかってくれましたか！兄貴！！」

「カモ君！！」

俺っちは信じてやしたぜ！！！

０６０　世界最速の視点変更。（後書き）

イッケメェェエエエエエエエエン☆

安定のカモさんやでぇ・・・・・・

→実はここまで書いてから本編を書き始めてます。
先にあとがきを書いておけばそれを道しるべに文が書けるという物凄い力技ですね。

なんかカモさんがどんどん男前。
何だこのポジション。

※僕はやめようって言ったんですが、ゲームボーイアドバンスとともにロックマンゼロシリーズが押入れから出てきたから……

やってたんだよ。言わせんな恥ずかしい。

すんません。

今回は視点変更が多くて書きにくいしわかりにくい。
ひどいもんです。

では、今回もありがとうございました。
ダーマッ！！

０６１　世界最速、Ｎｉｎｊａごっこ。（前書き）

農耕機みたいな音がしない方です。

061　世界最速、Ｎｉｎｊａごっこ。

「で、これがその契約の魔方陣でさぁ」

「へぇ……すごいな、カモ君」

「いやぁ、照れますぜ」

麟の旦那もいらっしゃるし、あんまり派手に動くのは申し訳ねえとは言え、兄貴に強くなってもらうからには覚えといて損は無いだろうと契約の魔方陣の説明をしてたとこでさぁ。

「ネギ先生」

「あ、はい。綾瀬さんと、み、宮崎さん」

ああ、昼間兄貴に告白した。

「あの……お昼のことなんですけど……」

青春だねぇ……。

このまんま契約とかしてくんねぇかなぁ……ってマズい！魔方陣消してねえっ！？

「と、友達から、お友達から始めませんか？」

「……

はいッ？」

「えーと、じゃあ……も、戻りましょうか」

「は、はい」

あーあぶなかっ……夕映さぁぁぁぁぁぁぁぁああアッァアアアアアアァァァアァアああああぁぁん！！！

なんでのどか嬢ちゃんの足を引っ掛け……いったぁぁあああああああ！！

終わったぁぁあああああ！！！

そんなパクティオーカードまで出てきて……

終わりだ……よりにもよって仮契約の魔方陣の上でキスしやがって。

「わわっ、何ですか、このカード？」

「あ！え！あ、あの、その！！き、記念品です！！？」

兄貴ェ……

『兄貴、兄貴、複製カードだ。こいつを渡しな』

『え？う、うん、ありがとう』

「ど、どうぞ宮崎さん、その、お、お友達の証に……」

「ネギせんせー……」

「世話が焼けるです」

あんただよおおおおぉぉぁあああああ！！

少し、本気出させてもらいます？

「楽しいですなぁ～？」

「おい、月詠！演技じゃなかったのか！？」

「ややわぁ、センパイ？こんな熱いひと時を演技で済まそうなんて、酷いお人やで。いけず？」

「クッ」

せっかくこんな楽しいのに、いけずやわぁ。

「戦闘狂か！付き合わんぞ」

「まあまあ、そう言わんと～？」

『月詠はん、聞こえとるか？』

『あら、千草はん、どないしはったん？』

『引き上げや。はよう帰ってき』

『えぇ～、今楽しなってきたトコやのに～』

『わがまま言いな！ってか何でガチバトルなんかしとんねや！』

『はぁい……』

「クッ、やりますなぁ、刹那センパイ。ウチ、もういかなあかんようになってまいましたわ～」

「ふん、見たか。このちゃんはそう易々とくれてやらんぞ」

「せっちゃん？」

「妬けますなぁ。その愛情だけはウチの負けや。ほな末永くお幸せにな～？」

「つ、月詠／／／」

また今度試合ってもらえるやろか？

「さて、そろそろ行くか」

「ええ。神楽坂さんたちもそろそろ着く頃でしょうからね」

「ほな行こかー」

・・・・・・・

・・・・

・・

「どうしてこうなった……」

「いえ、私にもさっぱり……」

6班のみんなとゆえ、ハルナ、のどっち、あすにゃん、せっちゃん、このちゃんの12人という大所帯だ。

「ふふ、こんな事もあろうかとね」

「パル？」

「桜咲さんの荷物の中にGPS携帯を仕込んでおいたのよ！！」

「せっちゃぁああん！！」

「すすいません、お嬢さ、あいたっ！ご、ごめんな、ごめんなこのちゃん！」

「ひぃ！このかが黒い！？」

「というか何でのどかがここに？」

「そ、そのー……」

なんか頑張れ。俺は頑張らんけど身代わりは送っとこう。

「「「「お帰りなさいませ、このかお嬢様ーーッ」」」」

「うむ、苦しゅうない」

「いや、お兄ちゃんどう贔屓目のに見ても近衛木乃香より小さいよ」

「そんな事より詠春はどこだよ。詠春!!えーいしゅーーーーん!!!」

「はいはい。そんな大声で呼ばなくてもここに居ますよ。久しぶりです、麟、それに木乃香」

「久しぶりやなー、お父様。麟くんと知り合いやったんや」

「あ、あなたが関西呪術協会の長ですか？」

「ええ。そうですよ」

「ネギ先生、その話は後でな」

「え？は、はい」

「おい、詠春、人払いしろ」

「あなたは昔から自由な人ですね……」

「詠春老けたなぁ。碇ゲンドウに似てる」

「どうぞ、こちらです。お嬢様方はうちの者に案内させますので、少々お待ちを」

「さて、どんな話でしょうか」

「ああ、お前の下の奴らの暴走な」

「はい」

「俺が煽ってる」

「は……え？」

「んで今晩な……」

「ま、待ってください！どういう事ですか？」

「だから、いつまで土下座外交してんだっつー話よ。大体西と東の関係が悪い理由もお前が知らん訳じゃねんだろ」

「ですが……」

「いいか、婿養子だからある程度向こうの顔を立てるのもわからんでもないけどな。
東に戦争行って来いって言われた奴らにも家族はいたんだよ」

「……確かに私も婿養子になったと言えども、お義父さんのやりくちは気に入らない所がありました。ですが、関東に逆らうのはあまりにデメリットの方が大きい。もし戦争にでもなったら絶対に勝てませんもそれに、そんな事になったら『本国』も動くでしょう……」

「だから俺がいるんだよ。強制召還」

千草とエヴァを転移させる。

「え？え？何で？って長！？」

「久々だな、詠春」

「な、何故あなた方が？というか謀反を企ててたのはあなただったんですか、天ヶ崎さん？」

「あ、いえ……」

「Ｎｉｎｊａごっこ」

「かまわんぞ、お兄ちゃんが呼んだという事は、そういう事だ」

「では失礼ながら……」

そこから、ちーちゃんが氾濫を企てるに至った理由やらなんやらの

説明の後、詠春にどういう対応をして欲しいかとかそんな話。

「……確かに、いくら当時内政から放れていたとは言え、あなたの両親を亡くならせてしまったのは完全に私の落ち度です。本当に申し訳ない……」

「そんな、長。土下座なんて……」

「もし麟が来なければ、あなたを唯の裏切り者として処罰してしまっていたでしょう。
私も長として、どうすればより関西の皆が生き残れるか、苦労を強いずに暮らせるか、という事を考えなければなりませんが、わかりました。
麟も協力してくれるのなら、こちらの負けは無いでしょう。関東には徹底抗戦の意志を伝えます」

「という事は……？」

「Ｎｉｎｊａごっこ」

「私も……いえ、関西もあなた方に協力します。そもそも、あなた方も関西の一員です。仲間の為に力を出し惜しむ必要がどこにありましょう」

「長……、ありっ、ありがとうございます……ありがとう……」

「さて、では作戦の修正はこちらで行っておく。お前はさっさとうちのクラスのバカどもの所へ行け。そろそろ取り返しのつかんとこまで暴れていてもおかしくないぞ」

「Ｎｉｎｊａごっこ」

「はい、エヴァンジェリンもありがとうございま……麟、障子に穴を開けないでください！！」

「え？」

「もう！またですか、長！！あれほど障子に穴をあけさせるなって言うたのに！！」

「い、いや、私はやめろと言っていたのですが！！」

「Ｎｉｎｊａごっこ」

Ｎｉｎｊａごっことか言いながら指をれろんれろんして障子に穴を開けまくってたらまた怒られてやんのｗｗｗ

０６１　世界最速、Ｎｉｎｊａごっこ。（後書き）

程よい所で一旦切ります。↑全然ほどよくない

今回は３１人中１２人が旅館から失踪するという大事件の話です。
詠春は仲間にする予定じゃなかったのになんかこっちに来てた。

はい。オッサンキャラが好きなんです。
性的な意味じゃなく。

では、そろそろ無双回が来ますね。
何故か僕がかなり楽しみだったりします。

では、今回もありがとうございました。

０６２　世界最速、鬼神召還。（前書き）

リャンメンスクナノカミさんはバカキャラっぽい顔してるね。
見直したら負けだと思っている。

エヴァが

「さうがに死んだ方がいいと思うよ、お兄ちゃん？」

などとほざいてたので修正しました。
もみじさん、ありがとうございます！

さうがって何やねん……

０６２　世界最速、鬼神召還。

「カポーーーン！！！！！！！１１１１１」

「お兄ちゃん、それは自分で言う言葉じゃないよ」

「カポオオォォォォオオオオオオン！！！！！！！」

「麟様、落ち着いてください」

「それはそうと、作戦のおさらいだ。
まずは俺達の組織名だが、暫定的に『“できちゃった婚”の名前を“ズッコンバッ婚”に変える会』はどうだろう」

「さすがに死んだ方がいいと思うよ、お兄ちゃん？」

「いくらガイノイド茶々丸と言えどもドン引きです。世界が崩壊するレベル」

死んだほうがいい白波です。
さて、そろそろ上がるか。俺代謝とか異常に少ないから別に風呂なんかひと月に一回でいいんだけどな。

「では長さん、こちらが東の長、麻帆良学園長、近衛近右衛門からの親書です。お受け取りください」

「確かに承りました、ネギ君。大変だったようですね」

「い、いえ」

詠春が親書を読む。

「ふむ……、ふん……。どう思いますか、千草さん」

「あの、そちらの方は？」

「ああ、『ついさっき雇った』相談役の天ヶ崎千草さんですよ」

「よろしゅう」

「あ、はい、よろしくお願いします」

「ふぅん……。この一枚目の私信は別な封筒に分けるべきでしょうな。とは言うても、まぁ長同士のルールです。私には関係ありまへん。
で、この二枚目からの親書の方ですが、これはホンマに親書ですやろか？ウチにはとてもそうには見えませんわ」

「そうですね……」

「え？えぇ？」

お、ネギも気付き始めたか？

「あくまで、『ウチが長なら』、とても好意的な返事は返せません

なぁ。ましてや、こんなふざけた文やと」

「ええ。私も同意見です。
東の長の意見はわかりましたが、その前にするべき事があるだろう。
東西の仲違いの非はこちらには無い。よってそちらの意思には添えないとお伝えください。
任務ご苦労、ネギ・スプリングフィールド君」

あんな普段どおりの笑顔でエグい事言うなぁ、詠春。
内政のスキルは無いと思ってたのは改めるべきですか、そうですね。

「えぇ？あ、ありがとうございます？」

「え？ちょ、ちょっと待ってください、長さん！」

「何ですか、アスナ君？」

「納得いきません！親書はちゃんと受け取ったじゃないですか！」

「はい？何を言いたいのか解りませんが……、確かに親書は受け取りましたし、返事もお願いしましたね。それに、ネギ君の任務も成功。良い事ばかりじゃないですか？」

うわぁ、このちゃんの親父やでぇ……

「で、でも！！」

「んん……アスナ君はこう言いたいんでしょうか？『せっかくわざわざ苦労して東から持ってきた親書なので、もう少し熟考した上で、なるべく好意的な返事がほしい』と？」

「え？た、多分そうです！」

恐ろしい女やのぉ……。一言で言えば「逆らうな」っつーことやない。

その程度の言葉をあんだけ引き伸ばす詠春も詠春だけど。

「ふむ。確かにこれは東西の意志を分かつ大切な話ですので、私の友人方の意見も聞いてみましょうか……

おねがいできますか、麟？」

「ナレーションだけで飽きてた所よ。『強制召還』」

「やっと出番ですか～。暇で暇でしゃーなかったんですわ～」

「お呼びがかかったようだね。雇われの身だけど、来たよ」

「ん？何や何や？ああ、長の屋敷か……って、お前はあん時のチビ助？」

「き、君は！？」

「何でアンタがここに！？」

「クズに喋る言葉は持ち合わせとらん。話しかけんといてもらえるか。」

「ぐっ……！！」

いいぞ、煽れ煽れ。

「んで姉ちゃんな。アンタは気に入っとんねんで。ここに居る理由は簡単や。俺らが関西呪術協会の一員やからやな」

「な、それって!?」

「少し落ち着いて。親書はこちらです」

「ふん……僕は傭兵だから、中立の立場からになるけど、これはマズイね。下手すれば戦争にもなりかねないよ」

「お義父さんの率いる関東とは戦争をしたくないのですが……まぁ仕方ないですかね」

「そ、そんな!!」

「ウチも傭兵やけど、元々関西の人間ですからなぁ～。これは気分悪いわぁ……。ウチら、舐められてるんやろか」

「俺から見てもわかるくらいアホ丸出しやな。クズのお上はクズ言うこっちゃ」

「あんた、いい加減にしなさいよ!!」

「あぁ、何や姉ちゃん?手ぇ出すんか?ここやで、外すなよ?んでそこのチビ助はまた姉ちゃんに守ってもらえや」

自分のほっぺをツンツンしながら小太郎がすっごいいい仕事してる。
その年でその極悪面は勲章もんやの。

「バカにするなぁ！！」

ネギが小太郎を殴った。

身体強化なしで小太郎には障壁あり。とはいえ、その手は確かに小太郎に当たる。

小太郎は勢いを殺さず後ろに大きく吹っ飛び階段にぶち当たる。

勝利確定来たな。

「え？」

「何で？だってさっきは全く……」

「やってしまいましたね、ネギ君……取り押さえろ」

「はいな！」

「な！は、放してください！！」

フェイトとつっきーに取り押さえられるネギ。

「ネギ！！どういう事ですか！？」

「あすにゃん、よく考えろよ。ネギは東の特使だ。そのネギが西の総本山で、西の人間に手を出した。充分問題になり得ると思わん？」

「アンタもグルだったのね！？ちょっとはいい奴だと思ってたのに！！」

「今もいい奴だよ」

「覚えてなさいよ！！」

「申し訳ないがアスナ君、君の友人のお嬢さん方はここで捕虜として軟禁させてもらいますよ。私も西の人間が東の人間に手を出されたとあれば、さすがに庇い切れない。彼らを例の部屋に」

詠春△

「さて、もう一仕事だ。皆さん、お願いします」

「お父様、見直したえ？」

「ハハ、これこれ」

「では長、私どもは祭壇に向かいます」

「ええ。恐らく東から何らかのアクションがあると思いますので注意してください」

「は。ありがたきお言葉」

「あっさりやの。小太郎さんめっちゃええ仕事してたやん」

「損な役回りやで。ってか麟の兄ちゃん随分関西弁上手いな？」

「せやな」

「では行くぞ、茶々丸。貴様らは残っておけ」

「ああ、そうさせてもらうよ」

「えぇ～、私も行きたいです～」

「私も私も！！」

「わがまま言うな。一応ここからでも見えるはずだ」

「ほれ、双眼鏡。人数分あるけど見たくなけりゃ見なくてもいいぜ。かなり楽しげなモンが見えるからじっとしてろ」

「はぁい。いってらっしゃい、麟さん」

「……」

「ま、見れるならいっか」

「他の部屋は魔法で開かないようにしといたけど、あすにゃんの部屋だけは普通に開くと思う。まぁ作戦のうちだからそうなってもほっといて」

「はいよ。気いつけてな」

「ちうたんはツンデレかわいい！！」

「ち、ちうたんって呼ぶんじゃねえ！！」

「もしもし、わしじゃが……
おお、何じゃ、ネギ君か！……なんじゃと！？決裂！？
その上白波君も向こうに！？
何て事じゃ……
応援……うむ。タカミチに応援に行くように言っておく。
くれぐれも白波君に直接関わるんじゃないぞ」
何て事じゃ……

ああ、いたいた。
損な役回りだよ。怨みますよ、学園長。
「と、どうやら追っ手のようだよ。随分早いね」
「止まってもらえるかな？」
「なんだ、タカミチじゃん。何しに来た？」
「協力要請だよ。僕も君とは戦いたくないんだが……」
「戒めの風矢」

「な!?ちょ、ちょっと麟くん!?話くらいは聞いてくれてもいいんじゃないかな?」

「後でな!」

「……どうしよう」

まさかこんな事になるとは……

「あれ、タカミチ?」

「高畑先生!どうしたんですか!?」

「ああ、麟くんに捕まっちゃってね、このざまさ」

「うーん、ダメだ、まったく抵抗が効かないや」

「何よ、この光ってるの!離れなさいよ!って取れた?」

「な、何だ、アスナ君!凄いじゃないか!」

「い、いえ、そんな……」

まさか麟君の魔法まで無効化できるなんて……さすがは……っといけないいけない。

「で、どうしたんだい?」

「い、今はそれどころじゃ!」

「大丈夫だよ。いや、大丈夫じゃないけど、ああなったら麟くんはどうあっても止まらないからね。放っておくのが一番被害が少ないんだよ」

「でも……！」

「ひとまず落ち着いて。いいかい、前も言った通り、今回も麟くんに何かしら思う所があったはずなんだ。全部は解らないかもしれないが、それを知る事も大事じゃないかな」

「そ、そうですね。でも、私にも何がなんだか……」

「それなら、私たちからも説明しますえ」

「木乃香!?刹那さんも！」

「お願いできるかな？」

「ええ」

それから僕はネギ君、アスナ君とこのか君、刹那君の話をそれぞれ聞いた。

どちらが悪いかと聞かれれば、何とも答えられないけど……

「ネギ君……それはまずいぞ……」

「ええ。最早このまま西と東の和解というのはほぼ絶望的でしょう」

「せやなー」

「こ、木乃香!?あんたまさか……」

「いややわぁ、アスナ。そんな、裏切ったの?なんて目で見んといてや。ウチは元々、関西(こっち)の娘やで」

おお、このか君、黒いな!

「ええ。元々、和解などという手段は存在し得なかったのです。どちらが上でどちらが下か、などという関係はここで断ち切ります。ちなみに、麟先生からの伝言ですが、『東を見ろ』と」

「え?……な、何よアレ……」

「アレは……!!」

そちらには、とてつもない大鬼がいた。

高天の原に?留りまして云々とちーちゃんが祝詞ってる。(祝詞(のりと)る:動詞)

「んひぃぃっぃぃぃぃぃぃ!!!」

「ちょ、えらい声上げんといてや!!びっくりするわ!」

「ぬっほ☆ごめぇん」

んでなにやらクソでっかい岩からクソでっかい『ヱヴァンゲリヲン新劇場版：ドM』みたいな感じの阿修羅マンが出てくる。

「さて、両面なんとかの神もいい具合に召還出来たっぽいし、しばらく遊ばせとくか。あ、学園長室に遠見を繋げよう」

『イエー☆じじい見てるー☆』

『な！？何を考えとるんじゃ、お主は！？』

『さぁて、なんでしょーか？正解者には麟ちゃん特製、味噌ラーメンの麺をくくりつけたストラップをあげちゃう』

ブティ☆と遠見を切る。

さて……ん？念話？

『どうしたんだよせったｎ』

『あちらの応援です。龍宮、古菲、楓の三人ですが、抗戦しますか？』

『いや、行くわ。』

「ちょっと生徒を寝かし付けに」

「ん？気ぃつけてな」

「おうよ。『転移』」

「麟先生！」

「おお、行け。せったｎ、このたｎ」

行ったな。どこにだ？

「麟先生？まさかあなたが？」

「何でこんなとこに居るアルか？」

「麟先生、ここはどうやら危険らしいので帰っておいたほうがいいでござるよ？」

「あぁ、大丈夫よ。ダイジョブダイジョブ」

「おい、二人とも、気をつけろ！麟先生はかなり強い」

「そうはとても見えないアルよ。武術をしている者の歩き方じゃないアル」

「あら、そう？」

「魔法使いでござるか？」

「まぁ魔法も使えるけど、そんなん使わなくても充分つおい。ほら、

先制やるから来いよ。先生だけに」

「行くアルよ！！……へ？」

ああ、空飛んでます。
いくら装甲強くても体重軽いもん。

「油断するな、古、楓！」

「そうそう。油断していいのは絶対的強者のみよ」

「何！？」

「全然効いてないアルか！？でも確かに手応えは！」

「無駄無駄無意味よ。ほれ、もう終わり？いくらでもい・い・の・よ？」

「クッ」

「ちょｗｗｗ胸の谷間からマシンガンｗｗｗｗｗあばばばばばばばばばばばｗｗｗｗｗ」

「ちょ、龍宮！！やりすぎアル！！」

「そんな訳あるか！！」

ＲＰＧ－７出すなｗｗｗ

「あべしｗｗｗｗｗ」

「やったアルか！？」

さっきやりすぎって行ってたあなたはどこいったの？クーフォイ。

「煙で見えないでござる！」

「それはやってないフラグだ」

「ば、化け物……」

服ボロボロやん。

「キャ☆エッツィ？」

「……」

「……」

「……」

指輪を服に変える。

「ま、そーいう訳よ。ここで諦めな。でもまだ俺と戦うって言うなら二歩前に歩け。そして、引くというなら一歩後ろへ下がれ」

「言われるまでもないアル！」

「やってやろうじゃないか」

「ニンニン」

二歩前に進んだ三人を元居た場所から一歩分下がらせる。

「ふ、そうか。ならば俺はもう行こう」

「何！？」

「あ…ありのまま　今　起こった事を話すアル！
『私は麟先生の前まで進んでいたいたと思ったらいつのまにか戻っていた』
催眠術だとか超スピードだとか　そんなチャチなもんじゃあ　断じてないアル
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったアルよ……」

「これは奇怪な！」

「色々面倒になってきた。『強制転移』」

宿に帰した。

「クッ！してやられたか！！」

「結局全くダメージは与えられなかったアル」

「とんでもない人でござるな……」

「お前らもな。こんな時間にそんな格好で何処へ行くんだ？」

「に、新田アル！？」

「全員ロビーで正座！！」

麟先生……怨むよ……

「フゥハハー！！祭りじゃぁあああああ！！！！」

「やあ、おかえり。どうだった？」

「帰ってもらった」

「おかえり、お兄ちゃん！」

「おかえりなさいませ、麟様」

「お帰りな、麟くん」

「おかえりなさい、麟先生」

「ただいま☆んで今は何やってんの？」

「ひとまず起こしてみたんやけど、まだ眠いらしくて……」

「どちらの顔が仰向けに寝るかで争ってるらしいよ」

「なんてクソくだらない戦いなんだ……。
東からのアクションは？」

「今のところ何もありまへん～。腰抜かしてるんちゃいますー？」

「はぁん。んじゃ一旦屋敷に戻るか。こいつは置いといて」

「そうでんな。どうせ東の応援くらいやったらコイツを倒せる訳もあらへんし」

「一応結界張っとくかわこれで半径２００ｍ以上に被害も出ない安心設計。
なんとかの神は出れないけど他の奴なら出れるし入れる」

「ほな帰ろ。俺もう眠いねん」

「ふふ、小太郎はまだ１０歳やもんな」

「子ども扱いすんなやぁ」

うふはっはは。
さて、どう出るかね？

０６２　世界最速、鬼神召還。（後書き）

ネギ虐め回続編。
次こそ無双回にしたいんだ！！
キャラが多くて誰が居てるか完全に忘れる。そんな６２話です。

黒詠春……いいな！
あの裏表無さそうかつ人畜無害そうな笑顔であんなド下種い事いう中年も大好きです。
絵を描くにしろ文を書くにしろ、おっさんは楽しい。
そう思っています。

関係のない話なのですが、先日、９／４日に私の誕生日だったのですが、２１にして抜け毛が気になります。
年齢なんて……いらなかった！！

０６３　世界最速、納涼！お前も恐怖のズンドコに叩き落としてくれるわ！（前編）

無双してません。前回はウソつきました。

０６３　世界最速、納涼！お前も恐怖のズンドコに叩き落としてくれるわ！

もど麟。

「たっだいま☆」

「おいおい、何だよありゃよ」

「紅マグロの誕生日にお呼ばれしたい」

「意味がわからん。意味がわからん」

「二回言うほど大事な事なのか……」

「双眼鏡渡されたけどんなモンなくても充分見えるじゃねえか」

「ごめんね、ちうたん……眼鏡かけてんのに双眼鏡とかわたして、ご、ごめんねっ、ごめんね」

「い、いやいや、伊達だから大丈夫だよ！な？結構視力いいんだから！」

「知ってる」

「死ね！」

「ってか麟さん、アレホントに何なの？」

「農耕の神様」

「神さ……マジ？」

「うん。マジ。危なくないから安心して。アイツ顔とか二つあって悪そうに見えるけどホントはいい奴だから」

「そ、そうなの？」

「いや、知らんねんけどな。危なくないのは本当。んじゃ俺政治の話とかあるからちょっと詠春とこ行ってくる」

「いってらっしゃい」

「ああ、おかえり、麟。関東から連絡が入りっぱなしですよ」

「どうしてんだ？」

「あなた方に弁明しなければならない事実は一切無い。と言ってあります」

「ふぅん。どう出るかね。勝手に討伐隊でも送ってくれればやりやすいんだけど」

「そこはお義父さんの手腕に期待ですね」

「なかなかウェットの効いたブラック¥ジョーク」

「ハハハ
さて、関東から増援が来た場合の対応ですが……」

「そこは当初の予定通りでいいんじゃないかな。
僕としては、ネギ・スプリングフィールドはもうどうでもいいから
大きくは動かないし」

「そうやな。
ほな本家(こちら)に抗議に来るようなら高圧的にあしらって、先に手を出すならフェイトはんの石化で。
両面宿難(あっち)に戦闘に行くなら放置。
いずれにしろ、後々関東への交渉材料になる」

「ウチはどうしますん？斬ったらあかん？」

「抗議に来た関東のモンを取り押さえる戦闘はしてもらうけど、殺すんはマズイな」

「はぁい」

「俺はどないしたらええんや？」

「寝ろ」「寝とき」

「ん。おやすみ～。ふぁ～～」

「じゃあ最終作戦は午前3時。それまでメンコでもおはじきでもベーゴマでも好きな事やっといて。

作戦に参加しない奴は寝てろ」

「はーい。アスナ、大丈夫やろか？」

「流石に生徒だから危なくなれば助けるけどな」

「ありがとうな」

「んじゃ解散。何かあったら念話な」

「「「はい」」」

「待ってるだけってのも暇だし、せっかくの修学旅行だから起きてるメンバーは怖い話とかしようぜー！」

「わ、わわ私は怖い話とか苦手なんですぅ」

「えぇ～そうなの？しょんぼりん」

「と思いましたけど私元幽霊だから大丈夫です！」

「聞くだけならいいけど話す事なんかねぇぞ？」

「かまわん。というかお兄ちゃん怖い話とかできたんだ」

「とっておきがある」

「それは楽しみやなぁ。麟さんの怖い話いうのも興味深いわ」

「ふふ、じゃあ先手は俺がもらうんだぜ。

あれはまだ梅雨も明け切らない7月頭の雨の日の事だ……」

とっておきのウィスパーボイスだぜ。

「きゃぁぁあああああああ！！！！」

「おい、うるさいぞ、さよ！！」

「まだ何も言うてへんやないか！！」

「ご、ごごごめんなさいぃぃぃいいい！！」

「続けるぞ。

当然その日も俺はバイクに乗る訳だ。

ポケットからチャリ……と鍵を出し、梅雨の間は長らく乗っていなかったＮＳ２５０Ｒに差し込んだ……」

「ひっ……ひっ……」

「声のせいで無意味に怖いじゃねぇか……」

「車庫からバイクを押して、家の前まで出る。

何だかシャリシャリ言うなぁと思いながらもキックスターターを踏み込んでエンジンを掛けたその時！！」

「っ！！！！！！！！！！！！！！」

「マフラーから黒い煙が一気に上がる！
不審に思った俺は、アクセルを一度思いっきり回した。そしたら！！」

ゴクリ……

「マフラーから出てきたんだよ……大量のゴキブリがなぁ！！！！！！」

「キャァァアアアアアア！！！！きゃぁあああああああああ！！！！！ひ、ひぃいい、ひっ、ひっ！！！」

「っておい！！こわいっちゃ怖いけど怖さの向きが違うだろ！！」

「い、今の麟さんの話し方は評価するべきだと思うよ。いや、話し声かな」

「な、なあ、あんさんら、この子気絶してるみたいやけど大丈夫なん？」

「寝かしといたってな。怖いの苦手やねん。なあ、せっちゃん？」

「わ、わわ私はこのちゃんを守るためなら、ゆゆゆ、ゆ、ゆ幽霊くらい！！！」

「んふふ、じゃあ次は私が行くよ。報道部の真髄を見せてあげるんだから」

報道部と怪談ってどう関係あるんだろうか？

「ある女の子……Aさんが夜道を歩いていたの。

後ろから足音がする。振り返ったら誰も居ない。

気のせいかな？とまた歩き出す……

でも足音はする……もう一度振り返っても、誰も居ない。

気味悪く思ったAさんは駆け出した。

その足音はさっきと同じリズムで聞こえてくる。

でも離れない。すぐに真後ろで足音が歩くようなリズムで聞こえてくる。

Aさんは走りながらカーブミラーを見たの。

そしたら自分のすぐ後ろに白い何かがついてきてる。

一目散に自分の家に駆け込んだ。

そしたら足音も消えて、今のは何だったんだろう？と思いながらも一安心。

化粧を落とすために洗面台の前に立つと、鏡に映る自分の後ろに真っ白な服を着た女の人と目が合ったの」

「あかん！せっちゃんが漏らしてもうた！！」

「ひっ！み、みないでくださいぃ……」

「ほら、立って」

「こ、このちゃん！やめて、ウチがやるから！」

「せっちゃんはお風呂入ってき。あ、怖いか。ほな掃除したらウチも行くから」

「おい、カメラ止めろ！黄金水ペロペロ（＾ω＾）」

「もう、お兄ちゃん！意地汚いよ！！」

「麟様ったら……」

「いや、最早それどころやないように見えるねんけど……」

「気を取り直して、もう一回俺か。ちびるなよ？」

「もうちびりません！！」

「この前、授業中に雑談で「変な人にいたずらされたりしないよう気をつけろよ」
という話をした。
「いたずらってえっちなことでしょ？」と聞かれたのでそうだと答えた。
「えっちっておっぱいもんだりするんでしょ」
「双子のぺちゃぱいなんて揉むところないじゃん。つまんないじゃん」
と言ってきたまき絵に対して、
双子たちが「つまらないなんて失礼！」と怒り出して教室が騒然となった。
そこですかさず「いや、先生はつまらなくないと思うよ」と答えた。

次の日学園長室に呼ばれたその時

「そこまでだ」
聞いたことのある声が聞こえた
寺生まれで霊感の強いTさんだ

じじいによって今にも首にされそうな俺の前に来ると、
自前のチョークを振り回し「破ぁ！！」と叫ぶ
するとチョークの先が眩く光り、
振り回したチョークが剣のように次々とじじいを引き裂いてゆく！
ある程度じじいを振り払うと、Tさんの呪文によって周りには光が走り、
アッと言う間にじじいは消滅した。

「Tさんもセクハラですか？」
そう尋ねるとTさんは俺を指差し

「まあな、随分と危ない橋を渡っちまったがな・・・」

帰り道で聞いた話によると
あそこはセクハラ妖怪の部屋でぬらりひょんがセクハラを呼ぶ恐怖の地雷らしい。

「すっかり日も傾いちまったな、どれ、通学路で女の子でセクハラしに行くか」
そう言って窓から飛び乗り爽やかに墜落してみせるTさんを見て

寺生まれはスゴイ、俺はいろんな意味で思った。」

「先生!茶々丸さんが息してません!!」

「っｗｗｗｗｗ」

「始めからしてねえよ」

「Tさんって誰やねんな!!」

「寺生まれ」

「ウチ神社生まれで良かったわぁ」

「このちゃん、そういう話ではないですよ……」

「ない“です”よ?」

「あ、あらへんよ……／／／」

神社生まれはスゴイ、俺は改めてそう思った。

「関東魔法協会だ！開けろ！！」

「開けろ！！だって。お断りします（。ω。）」

「バカにするな！！早く開けろ！！どういうつもりなんだ！！」

「この声……ガングロフィーニか！？ここは危険だ！おまえにもかぞくはいるんだろう　くにに　かえるんだな」

「麟先生！？何をやってるんだ！？」

「さぁて、何やと思います？」

「関西弁！？まさか……！！」

『まさか』って何やねん。

「そうや。俺は関西の協力者や。つー訳でわざわざ来てもろて悪いねんけどまた明日にして」

「そういう訳にもいかない！アレは何なんだ！？」

「リョウメンスクナノカミ」

「は？」

「リャンメンナントカミ」

「な、な、何だって！？あの１８年前にかのサウザンドマスター、ナギ・スプリングフィールドが当時はまだ長ではなかった青山詠春と協力しても倒すことはできずに封印したというあのリョウメンスクナノカミか！？」

「説明御苦労。ウォッチングくらいならしてもいいから早く向こう行って」

「いや、ダメだ。入れさせてもらう！」

ガングロフィーニは塀を越えて中に入ってきた。

「あー、しまったあー。ぬけられたー。どうすればいいんだー。わからない、ぼくにはわからないー（迫真）」

「止まってもらえまへんかー？」

ナイスアシストつっきー。

「何だ君は！？」

「あんさんこそ何ですのん？ここは『関西呪術協会の総本山』です

え～」

「そんな事を言っている場合じゃないだろう！君にはアレが見えないのか！？」

「リョウメンスクナノカミですな～」

「クソ！君でも話にならん！君達の長は居ないのか！？」

「おっと、止まってください～。こっから先には許可の無いお人を通す訳にはいかんのです～。
どうしても進む言うんやったら、少し手荒な真似もさせてもらいますえ～」

「クッ！ならば仕方ない！！」

うん。当然のようにつっきーの勝ちだよ。
ガングロさんは伸びてる。

「さて、ほなとどめを……」

「待て待て！月詠はん！！殺すな言うてるやろ！！」

「そうですなぁ。別にこのくらいの相手、手に掛けるのもアホらしいわ～」

「麟さん、お願いできますか？」

「『治癒』んじゃとりあえず地下牢に放り込んどくわ」

～～地下牢～～

地下牢と言えども、あくまで捕虜の接待用なので、ソファーやカウチや座椅子、ロッキングチェアやリクライニングビジネスチェアにベンチ、パイプ椅子、アームチェア、スツールやキャンピングチェア、マッサージチェアに安楽椅子、果ては洋式便所やおまるまである豪華な部屋だ。
ちなみに便所もあるにはあるが、こちらは和式。

「はっ……！ここは？」

「おはようございます、ランボルギーニ先生」

「ガンドルフィーニだ！何故こんな事をするんだ！！」

「うん」

「うんじゃない！！」

「うんこ」

「ふざけないでくれ！！！」

息が荒いよ。

「お飲み」

「ああ、ありがとう……」

とりあえずコップにマックスコーヒーを入れたやつを渡して落ち着いてもらう。

「なぜこんな事を？」

「貴様の“正義”を問おう」

「うざい！」

落ち着いた様子の黒男（ブラックジャック）が悪い顔色で聞いてきたので、今回の千草の動機とそこに至るまでの心情やら、この後の対処方法も話した。

「私はなんということを……」

暑苦しい。

「田んぼルギーニ先生……」

「ランボルギーニだ。違う、ガンドルフィーニだ。わかった。立場的に私も協力するとは言えないが、捕虜として適切な扱いを受けたとだけ言っておこう。現場には、上手くいっていれば何人かの魔法先生がいるはずだ。
あと何だったんだい、さっきのコーヒーは？えげつなく喉が渇くんだが」

「コーヒー（裏声）ですよ。どうぞ、お茶です」

「ああ。明日休みで良かった」

「そうなん？」

「『学内点検による緊急臨時休校』だってさ」

「必死やな。そらそうか。じゃあ俺もそろそろやる事があるから」

そう言って地下から飛び出る。

「ヒャッハァー！！まだこんなもの持ってやがったのかぁ！こんなモン今じゃあケツふく紙にもなりゃしねぇってのによ！！」

「ちょ、麟！！いきなり障子を突き破らないでください！！」

「体が、、、か。。ら・・だが求める・・・・・・・・・・・・・・・・

殺人という快楽を」

「うぜぇ！そろそろ出撃ですね。うぜぇ！」

「じゃ、行ってくるよ。未来（みんな）のためにな」

「うざいってらっしゃい」

うざいってらっしゃいって何やねん詠春。

お前らのために動いてるとは口が裂けても言えぬではないか。

０６３　世界最速、納涼！お前も恐怖のズンドコに叩き落としてくれるわ！（後編）

秘境奈良県一のソロ充、１００ｍが２５秒、紅の豚野郎ですこんにちは。

僕の恐怖体験ですが、中学生の時に僕が勧めたネギま！経由でオタクになった友人に、普通に美人の彼女が出来てました。
そして何より恐怖したことが、それに対して全然羨ましくも妬ましくもなかった事ですね。

リア充を妬む事も無いほどにバイクに没頭通り越して埋没する自分に対し、「これがソロ充か……」と呟きました。

さて、今回は無双回だ！！と喜び勇んで書き始めたはいいものの、やっぱりそこは天に向かって吐いた唾を華麗なバックステッポゥでかわす僕です。

はい、言い訳はしません。
踏んでください。
さあ！
早く！！
もっと強く！！

０６４　世界最速、パワーインフレ。（前書き）

今回の矢はちょっとばかり多いぜ？

「黙っていろ神楽坂明日菜。貴様も下がっている、タカミチ」

を下がっていろに修正しました。
何で既に下がってんねんタカミチェ……
もみじさん、いつもありがとうございます。

０６４　世界最速、パワーインフレ。

「加速加速加速加速加速加速加速ぅぅぅぅウウウウウウううううう！！！！！！！！」

ズババババババババとタイヤノイズを立てて走るコノヤローはかなり山道が似合わない憎いアイツだ。

「ヤッハァァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！」

『ラジオネーム恋するウサギちゃんの投稿だ！「何故人を好きになるとこんな苦しいのでしょう？」知るか！！そして音楽のリクエストは広有射怪鳥事　～　Ｔｉｌｌ　Ｗｈｅｎ？だァァァァアアアアア！！！ミュージッスターッツ！！』

「お兄ちゃん！通り過ぎてる！！」

「おぉっと、いかんいかん！！とここで華麗にＶターン！！これ思ってたより乗り心地いいな。帰ったら買おう」

走る玉座（と勝手に呼んでいる）ＨＯＮＤＡのゴールドウィング。ＧＬ１８００って奴だ。
足つきは悪いが乗り心地はいい。標準でオーディオ装備って何だよ。
そのうちエアバックとかつくんじゃねぇの？
あれ？ＳＳに戻れんのか俺？
そんな白波です。

なにやってくれてんだよ麟先生ぇぇえええええええ！！
せっかく平和に過ごせてると思ったら！
あの学園長（じじい）も学園長だよ！！
何で戦闘要員でもない僕が神多羅木先生と一緒に前線に立ってるんだよ！！くっそーこのおっさんかっこいい名前しやがってぇ！

「瀬流彦君！そっちを頼む！！」

「無理！！無理です！！！」

僕になんとかできるとか思うなよ！このジェントルメン！

「くっ、僕の豪殺居合い拳も全く効いていない！」

「ほら！！高畑先生の攻撃も全く効かないのに僕がどうこう出来るわけないじゃないですか！！」

「じゃあ私が！」

「待て、アスナ君！！君達は下がっていてくれ！！」

「ほら、ネギ君に神楽坂さん！こっちに！」

「ちょ、瀬流彦先生は何もしないんですか！？」

「しないよ！怖い！！」

僕は魔法先生じゃなくて魔法を使えるだけの普通の先生なのに！！

退路を確保しようと後ろを見たら、一台の巨大なバイクが迫ってきた。

颯爽と突っ込んでバイクを指輪に戻す。

「ホラホラ、どいて！！ここ関西だよ！！東の奴らは何しに来てるの？」

「り、麟くん！！」

「おお、何だタカミチ？トレードマークのマルボロは無しか？俺のピースやるからさっさと端っこ寄って見てろ」

『ちーちゃん、一発空に向かって』

『はい！』

「何しにきたのよ！！」

「うっせぇ！下がって見てな！！」

スクナ（長いから縮めた）が口を開いてビームを出す。

「な!?あちらは関東の方角!?」

「マズイ!至急連絡を!!」

「いや、要らない」

そのスクナビームは俺の張った超イケイケな結界に阻まれ霧散する。

「な!?なんて強度の結界だ!!」

「結界はワシが育てた。

さぁて諸君!!ショータイムだ!!トイレは済ませたか!?チビっても知らんぞ!!ケガさせてやるつもりはねぇが死にたきゃ奴の線上に入っとけよ?」

「ちょっとあんた、何するつも……」

「黙っていろ神楽坂明日菜。貴様も下がっていろ、タカミチ」

「ああ、そうさせてもらうよ」

「タ、タカミチ!?」

「ネギ君、君も下がって。きっと凄いものが見れるぞ」

「じゃあ始めるぞ!エヴァ!下がってるクソどもに結界!」

「うん、お兄ちゃん!」

エヴァが後ろにいる関係者数名、瀬流ピコ、タカミチ、神多羅木先生、ネギ、あすにゃん、カモ、そしてエヴァ自身を結界の中に入れる。
ちなみに刀子さんはハワイに居るので来れない。

「プラクテ　ビギナル……」

「始動キー？でも何で初心者（ビギナー）用の？」

「お兄ちゃんは極度の面倒臭がりだから自分の始動キーを考えていないだけだ」

「そんな事ってあるんですか？」

あるんです。

「『火の精霊　１０００００３人。集い来たりて…』」

「ちょ！！」

「そ、そんなバカな話が！？」

「え？何？何なの？？」

「『魔法の射手』」

「アスナさん……僕らが喰らったアレが……３００１１本の光の矢です。それでも異常な数なのに……アレは」

「『連弾』」

「百万三本です」

「……は？」

「『火の１０００００３矢』」

１０００００３柱。

こんなバカな話聞いた事が無い……

いや、詠唱自体は誰でも出来るんだろうけど、普通はそれが形になることはまず無い。

世界中の魔法使いの魔力を集めたとしても、圧倒的に魔力が足りない。

そんなバカな話、笑い話にすらならない。

それでも僕の前には、圧倒的と思うのさえおこがましい程の魔力の奔流と、視界一面を埋め尽くすほどの、最早“矢”とはとても呼べないような炎の塊が浮いている。

「マズイ！！みんな、エヴァの結界に重ねがけを！！」

「え！？は、はい！！」

かなり後ろに居るし、当たらないのはわかっているのに、それでも防がないと絶対に死ぬと思わせるほどの力が

『火の１０００００３矢』

放たれた。

視界一面を埋め尽くすその波は、最早音とも呼べないような衝撃と、結界越しにも伝わる焼けるような熱をこちらにも放ってきた。

あの大鬼の攻撃にビクともしなかった結界が、薄紙のように破ける。

その攻撃は、水を、地を巻き上げながら3分間続いた。

水煙が、土埃が晴れた先に見えたのは、腰から先の無い大鬼、大きく貫かれた雲、そして半分ほど水の干上がった湖に、結界のすぐ手前まで削られた僕らの居る桟橋だった。

「こ……これが麟くんの本気……」

「は？何を言っているんだ、タカミチ？お兄ちゃんが本気だったなら今頃日本が無事なわけあるか」

「は、はは、ははは……」

今でも湖は沸騰を続けている。

流石に僕も、笑うしかなかった。

タカミチはすごいものって言ってたけど、凄いなんてもんじゃなかった。
あんな人に喧嘩を売ってたなんて……
ちなみにあれでも本気じゃないらしい。
もう怖いとか怖くないとかそんな次元の話じゃない。
地球を殴って壊すとかそんな話だ。
立ち向かうような相手なんかじゃない……。
凄すぎるよ、麟先生……。

０６４　世界最速、パワーインフレ。（後書き）

ＨＯＮＤＡ　ゴールドウイング
１，８３２ｃｃ
水冷４ストロークＯＨＣ水平対向６気筒エンジン
８０Ｋｗ［１０９ＰＳ］／５，５００ｒｐｍ
前後ディスクブレーキの憎い奴です。
なんとその重量４００ｋｇ越え。
重い！！
少し欲しい！！！
ちなみに走る玉座という名前を定着させたいです。
杉やん様にアイテ〝ィアをいただきました。
ありがとうございます。

この日、空に上っていく流れ星が観測されて、ムーの来月号を賑わせました。

原作宿難乃神は突っ立ってただけでしたね。
こちらの方はビームを出します。

短めなのは仕様です。
すいません、キリの良さそうな所だったんです。↑この後の展開も考えてない

実は前話を投稿した5分後くらいにパソコンの電源のコンデンサが破裂して、コンデンサ取り寄せてるうちに二日ほど経ってました。
その間、携帯で人の小説を読む日々です。
パソコンじゃないと投稿できない！

では、今回もありがとうございました。

ＮＳＲ２５０Ｒ買おうかなぁ……

０６５　世界最速、おはよう。（前書き）

挨拶はＤＡＩＪＩですね。
僕はしませんが。

０６５　世界最速、おはよう。

服が千切れ飛んだ。（腕が千切れ飛んだ。に見えた。）

指輪は無事だった。すごい。

大昔１０００ドラクマで買った魔力隠蔽用のネックレスも無事だった。すごい。

ちなみにすーちゃん（スクナだと愛想が無いから呼んでみた）はなんか光る風になって消えていった。アレを追い越したら君にきっと会えるね。

流石に全裸で颯爽と出て行くのは興奮するから指輪をワイシャツに変える。

裸ワイシャツだ。

えろの化身、麟です。

「ぬははｗｗｗｗ見たか、東の阿呆どもめ！！！」

「えろっ！お兄ちゃんえろっ！」

「という訳で、茶番は終了！！東との交渉は決裂だ。帰りに俺が西から東への降伏勧告書類を持って帰るからお前らもさっさと麻帆良に帰れよ」

「ちょ、ちょっと待ってください！どうしてそんな……」

「わかってないのか？ここは西。で、お前は西の人間に手を出しちゃったわけよ」

「それはアンタたちが挑発してきたからでしょうが！！それに子供のやった事でしょ！？」

「『強制転移』」

「ちょ！！まちなｓ……」

ネギ、あすにゃん退場。

「麟くん、ネギ君とアスナ君をどうしたんだ？」

「詠春の屋敷の牢屋（ガンドルフィーニと相部屋？）に返した。お前らもさっさと帰れよ。おい瀬流彦は帰る準備すんなよ。引率だろうが。先に嵐山に戻ってろ。『強制転移』。とにかく今日の事は一般人に悟られないようにするからお前らも気をつけろ。ガングロ先生はいっしょに帰るわ」

瀬流ピコの顔がやや青白いのがかわいそかわいそなのですが、結局戻ってもらうしかないのですよ。

「そ、そうかい？東にあんまり無茶な要求をしないでほしいんだけど……」

「さてな？それは保障できないぜ？何たってこの俺が西に居るんだからな」

「胃が痛くなってきたよ。じゃあ僕は帰るけど学園長に伝えておく

事はあるかな？」

「頭部が人並みに整形されたくなかったら良く考えておけよ、と。あと金の準備もしとけって」

「ああ、わかった。これから帰ると思うと憂鬱だよ……」

「じゃあ送ってやるよ。『強制転移』」

「ちょ、心の準……」

タカミチ退場。

「じゃ、じゃあ僕もこの辺で……」

「『強制転移』」

瀬流彦退場。

「……」

「……『強制転移』」

ヒゲグラ退場。

「じゃあ俺らも帰るか」

「うん、そうだね！」

「アレは……何じゃ！？」

憂い、関西の方向を見ておったら光の柱が空へ昇っていき、その数十秒後、かつて感じたことも無いような魔力が到達した。

まさか白波君が？

まさかあちら側に付かれるとは……考えが甘かったのかのう……。

にしても、タカミチ達は無事じゃろうか……。

正直リョウメンスクナノカミに４人は無理じゃろうと思っておるが。

「あぁ、最悪だ……学園長！？」

「お、おぉ、タカミチ！こんな早く帰ってこれたという事は白波君の強制転移か。どうじゃった？」

「い、いえ、その……『頭部が人並みに整形されたくなかったら良く考えておけよ。あと金の準備もしとけこの妖怪ぬらりひょんが！逆行まぶしいんだよハゲ！！その髪何だよ！何でそこに生えて他全部ハゲなんだよ！意味わかんねぇ！！』と麟くんが……」

「ひどい！！あちらの状況はどうなっておるんじゃ？」

「それが……、ネギ君が西（あちら）の者に攻撃してしまったようで、こちら

の立場はかなり弱いですね。
更に詳しい話を聞けば聞くほどこちらが悪いとしか思えませんよ。

一連の流れで言えば、徴兵された者の遺族が不満を持って謀反を起こそうとしたところを麟くんが阻止、
尋問の結果、東に非があると判断した麟君が一部の関係者にその事を話し、事実確認、
その話をあちらの長にした所、詠春さんも東への対抗を決意、といった感じですね」

「むぅ……」

「……」

神多羅木君も飛ばされてきたようじゃ。

「ちなみに、その一部関係者にはこのか君も含まれています」

「な、なんと!?」

こ、この世の終わりじゃ……

「ってな事になってる筈なんだよ」

「では作戦は粗方成功ですね」

詠春が腕を組んでタバコの煙を吐く。
やだ、ジェントルメン……。

「後は向こうの対応を見るだけやな……お父さん、お母さん……」

「天国のご両親も、今のちーちゃんの姿を見たら喜んでくれるさ……な？」

「ひぐ、う……うわぁあああああん！！！」

ちーちゃんの頭に手を乗せてそれっぽい事言ったら何かいけた。
でも俺ロリコンなんだよな。
年上もいけるけど。
そしてよく考えたら俺の方がかなり年上だった。

「僕はここに居てもいいんだ！！」

「急にどうしたんだい、麟？」

「では、お願いしますよ」

そう言って茶封筒を渡すＡ春。

「まかせな。約束を守ると決めたらズェッテーに守ります」

「お願いしますね（ずぇってー？）」

「つーかもう夜明けじゃん。日本の夜明けじゃん。みんな起きたら俺も行くわ」

「おや、そうですか」

「近いうちにまた来る。今は先生だから引率する」

「では私もお嬢さん方に準備をするように伝えておきます」

「ＴＡ☆ＮＯ☆ＭＵ（ビガッビガッ」

「昨日のアレって結局何なのよ！エグいなんてもんじゃないわよ！！」

「ぼ、僕もまさか魔法の射手であんな大惨事になるなんて思いもしませんでしたよ」

「規格外にもほどがあるぜ……何だよ百万本って……」

「「「ハァ……」」」

兄貴たち、そうとうヘコんでるな。
でも俺っちも全く出番がなくて結構ヘコんでるんだが、言わねぇのが華か。

なんて考えてたら悩みの元凶、麟の旦那がやってきた。

「起きろー！起きてんな。おはようございます。３０分後出発だから準備しろよこのクソヤローー！」

「え！？あ、はい。おはようございます」

いい挨拶だな、兄貴。

「おはようッス。いやぁ、昨日は凄かったッスねぇ」

「そうであろう。もっと褒めたってい・い・の・よ」

「ってアンタ！よく私たちの前に顔出せたわね！！」

「おはようは？」

「挨拶してる場合じゃないでしょうが！！」

姉さん！！オチ担当に命を掛けるのはそろそろやめてくれ！！！

「ぅ……挨拶しないとダメって……いってるのにぃ……ぐすっ……うぅ、うぁぁぁあああああああああん！！！！！」

な、何て豪快な泣きっぷりだよ、旦那……。
姉さんがえげつなくバツの悪そうな顔してるじゃねぇか。

兄貴は完全に固まってるしよ……。

「え！！？？あ、あのその……ごめん、おはよう」

「ケッ、はじめっからそう言っときゃ良かったんだよ。じゃあ準備したら一旦旅館に戻るからな！」

どう見てもマジ泣きにしか見えなかったのに

「ちょ、待ちなさいよ！！」

「」

「せめて何か言えーー！！」

「午後からナギの隠れ家兼俺の書庫に行くから。あと昨日の事はじじいが何とかするから深く気にしなくても大丈夫。じゃな」

あ、行っちまった。

「オーーーーッス☆よく眠れたか？」

「あ、麟先生、おはようです」

「おはよう。ゆえはいい子だなぁ」

あいさつするまえにされたから頭をなでる。

「な、なな……」

「はわー……」

「こ、これは……ラブ臭！？」

「うるせー！カリフラワーぶつけんぞ。お前らもおはよう」

「おはようございますですー」

「おはよう！」

「あ、３０分後に旅館戻るから準備しとけよ」

「は、はいです」

「おーっす、おるかー？」

「ちょ、着替え中だよ！！」

「おはよう！！」

「強行するな！！」

「おはようございます、麟様」

「おはよ、麟さん」

「いいから出てけ！！」

「……」

「エヴァとさよは寝てんのか。まあいいや。茶々丸、二人の荷物纏めといて」

「畏まりました」

「３０分後に出発な」

「あ、せったｎ、このたｎ、おはよう」

「おはよー」

「おはようございます！」

「なにやってるｎ？」

「いえ……麟先生も見ていってください」

そう言うと征服の背中あたりをまくりだした。

「せったｎ制服脱ぐｎ！？」

「静かに見ててください！！」

ぶわさぁ！”！”！！！

「わぁきれい。とびっきりでっかい奴だよ！」

なんか横幅２ｍくらいの白い羽がもりっと出てきた。

「その……実は私、烏族で……今まで黙ってたんですけど……」

「ええなー、天使みたいやん」

「うちにウィングなんたらゼロカスタムってプラモがあって、大昔に買ったのにまだ作ってなかったんだよ。帰ったら作る」

「そ、その……、一族の掟でこの姿を見られたら立ち去らねばならないのですが……」

「ですが？」

「所詮私を捨てる程度の一族です。従ってやる義理なんてありませんので、このちゃんさえ良ければこれからも護衛をさせてください」

「嫌や」

「こ、このちゃん……」

「護衛しかせんせっちゃんなんか必要ない。ちゃんと友達してくれなあかんえ」

「こ……このちゃん！！」

「えんだああああああああああああああああいやあああああああああああああああああいやああああああああああああああァおおおおおおおおるうぇいずらああああああぶゆううううううううううううううううううううううううう！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

『このバスは嵐山直通となっております。尚運転中は危険ですので席を立ったら死ぬ』

～～指輪製大型バス（偽装ナンバープレート付き）～～

「「「待てー！！」」」

『では出発しまーす（オライッオライッ』

マイク越しに出発宣言をする。

ぶぅーん……

『時々思うんだよなぁ……バスってドリフトできそう……』

「やめろ！！」

「おい、千雨！何の権利があってお兄ちゃんのドリフトを邪魔しようとする！！」

「普通嫌だろ！！いいか！絶対にしようとするなよ！！したら……嫌いになってやる！」

「またそんな出来もせん事を言って」

「ってかガンドルフィーニ先生は何でこんな所に居るん？」

「あ、ああ。私も人手不足で急遽参加する事になったんだが……、なにぶん京都は不慣れなものでね、迷っていた所を詠春さんのとこの巫女さんに捕まったのさ」

「へぇー、そうなんやぁ」

『えー次はー』

「「「「イバールルルァキィーーーーーー！！！！！」」」」

『いいえ、ケフィアです』

「いや、嵐山だろ」

嵐山です。

０６５　世界最速、おはよう。（後書き）

最新話上げるまでタバコを吸わない楔を自分に打ち込んだ豚野郎です。

もうすぐ休学期間も終わり本格的に忙しくなるというのにその前から既にそこそこの忙しさです。勉強してる暇がねぇ！

そして、そうなってしまえばさらに投稿速度が落ちるのは確実！！

自分への甘さが露呈しまくってます。

さて、今回は何をしたかった話なんでしょうか。

挨拶ですね。

では、ありがとうございました。

０６６　世界最速、速攻魔法発動！！（前書き）

バーサーカーソウル！！

０６６　世界最速、速攻魔法発動！！

午前中は勝てないオセロに身を費やしたかわいそうな麟だよ。

「やあ、皆さん。休めましたか？」

「どうもー、長さん！」

ぞろぞろとついてきやがって。

ネギ、あすにゃん、ゆえ、俺、のどっち、ハルナ、俺、このちゃん＆せっちゃん夫婦、俺、かずみん、エヴァ、茶々丸、俺、俺という１１人の大所帯だ。

「タバコあかんー」などとこのちゃんが詠春から取り上げたタバコを俺がさらに取り上げて吸ってみた。

「マズっ！何コレ！？パーラメント？ブルジョワが！ゴールデンバットでも吸ってろ！」

「いやいや、これはこれでいい物ですよ」

信じられるか？まだだいたいの紙タバコ２７０円なんだぜ？

「長さん、昨日の事は……」

「ああ、気にしないでください。様式美という奴ですよ。お義父さんが何とかしてくれますよ。っと、ここです。

１０年の間に草木が茂ってしまいましたが中はキレイなものですよ。

どうぞ、ネギ君」

3階建て吹き抜け式住居（？）の全然隠れてないナギの隠れ家、もとい俺の本棚京都分署だ。

「この一角がバイクの本ばっかりです……」

「ここ3列は俺の本棚だからな」

「なんと！？」

「お嬢様方、故人のものもありますからあまり手荒には扱わないでくださいね！」

「ちょｗｗｗｗエヴァｗｗｗｗｗ」

「どうしたの、お兄ちゃ……ブッｗｗｗ」

「え？なになに？……英語？」

「俺の昔のノートｗｗｗｗ」

ジェットエンジンと前後ホイールにリニアモーターを搭載した不思議バイクの図面、『ぼくの考えた世界最速のバイク』があった。

「お兄ちゃんｗｗｗジェットエンジンにリニアモーターってｗｗｗ」

「いや、絶対いけるってｗｗｗ帰ったら超☆鈴に見てもらうしｗｗｗ時速１０００ｋｍ／ｈ越えだしｗｗｗ」

「麟様ｗｗｗ」

「ってか麟先生、英語できるんだねー」

「あれ？俺授業とかしてるよな？普通に８ヶ国語くらいは話せるけど」

レベルアップしました。

「す、すごいです！！」

「せやろ？」

「あの……長さん、父さんのこと聞いていいですか？」

「ふむ、そうですね。
このか、刹那君、明日菜君も、あなた達にも色々話しておいた方がいいでしょう」

コレは……確実につまらない話になる気配！！

「じゃあ俺らはソファーでも破って待っとくわ」

「勘弁してください、麟」

「じゃあ俺はかつての自分の黒歴史でも漁っとくかな」

「私も行くよ、お兄ちゃん！」

「……この写真は？」

「サウザンドマスターの戦友たち……黒い服が私です」

「戦友？」

「ええ。２０年前の写真です」

「わひゃー、これ父様？おでこ狭ーい？」

「グハァ！！！！！」

「……父さん」

「へー、どれどれ？」

「この人やて、ええ男やー」

「へぇー、なんだ、若いわね。……？」

「どないしたん？」

「え！？ううん、何も！！？……？」

「あ、お兄ちゃん！」

「なんや？」

「これこれ！」

「うわっ、懐かしー」

俺がジムカーナ出た時に取材されたバイクライフが出てきたらしい。

「何なに、麟さん、どーしたの？」

「ああ、俺が出た雑誌」

「へー……あれ？これお父さん？」

「うん。この時からの付き合い」

「正直麟さん全然老けないから実感なかったけど、かなり昔から乗ってたんだねー。うわ、カラー印刷に迷いがある」

「こちらにはＷＧＰ２００１で優勝した時の記事がありましたよ、麟様」

「さすがは俺の本棚だな」

「へー、見せて見せて……あれ？この写真麟さんこけてない？」

「いや、そんくらい倒せんだろ」

「いやいや、完全に膝閉じてるのに地面に当たってるじゃん！」

「正直この時バンクセンサー完全に飛んでかなり焦ったｗｗｗ」

かずみんがぺらぺらとページを捲っていくが、唐突に顔を赤くした。

「どうしたん？」

「え！？いやいや、何でも！大丈夫！！」

「何が？」

「どれどれ？ああ、この時の」

「何さ？」

エヴァが見せたページには表彰台の上で俺がエヴァと濃厚なンディ

ープキッシン☆してる写真が載ってた。

「全世界に発信してたよな」

「というか和美、お前思っていたよりかなり初心だな」

「ほ、ほっといてよぉ……、そうだ！もうそろそろ小難しい話も終わってるでしょ！記念撮影行こ！！」

「……逃げたな」

「皆さーん！修学旅行楽しかったですかー♪」

「「「はーい！！」」」

……

……

……

「やれやれ、あれほど騒がしかった３－Ａが、静かなも……」

「ドロー！！モンスターカード！！」

「ぎゃあああああ！！」

「ドロー！！モンスターカード！！！」

「あぎゃアアアーーッ」

「もうやめて、麟先生！ゆえゆえのライフはとっくに０ですよ！もう勝負はついたんです！」

「ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＥ」

「……静かなものですな」

「そ、そうですね……」

プアァーーン……

０６６　世界最速、速攻魔法発動！！（後書き）

キョナラ編完！

とおもいきやまだお土産がのこってるんでしたね。
いみわかんねぇフラグ立てるなよな、俺。

しかし随分な難産っぷりでしたね。
ちなみにネギはちゃんと詠春に例の地図をもらってます。
やったネ！

では、今回もありがとうございました。

０６７　世界最速、あそこで温めてる弁当俺のなんすよｗｗ（前書き）

コンビニで弁当温めてもらってる間にすること。

０６７　世界最速、あそこで温めてる弁当俺のなんすよｗｗ

「あぁー疲れたぁーーー」

「お疲れ様、お兄ちゃん」

セコい文字数稼ぎにためらいの無いリン・Ａ・Ｒ・シラナミです。このＡ・Ｒ覚えてる人いんのかな？　俺は忘れてた。

「ああ、麟くん！！」

「ゲェ！タカミリ！！」

「誰だよそれ！そうじゃなくて今すぐ学園長室に来て欲しいんだけど」

「え～～やだぁーーー。明日にしてよぉー！！」

「そんな事言わずに頼むよ。ホントおねがいします。あの後頭部（じじい）にアゴで使われる僕の身にもなってくれ」

「仕方ないなぁ『転移』」

ぬるーんと地面から登場

「！！」

「何だよじじい、そんな豆が鳩鉄砲喰らったような顔して」

豆ガ鳩鉄砲ヲ喰ラフノ図

；ｙ＝ー　ニ三　鳩　　・

／クルッポー＼　→豆

コンコンとノックの音が響く。

「失礼します」

「あ、フィーニ先生」

「ガングロフィーニだ。違う。ガンドルフィーニだ。君も呼ばれていたのか。そりゃそうだ」

「お主ら……何があったか詳しく話してくれんか」

「あ…ありのまま　京都で起こった事を話すぜ！

「おれは　少しくらいはネギに協力してやろうと思ったら　いつのまにか東に敵対していた」

な…　何を言っているのか　わからねーと思うが
おれは　何をしようとしたのか　わかっていた
頭が後ろに伸びそうだった…　お菓子取られたとかつまみ食いされたとか
そんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ
もっと恐ろしい親殺しの片鱗を　味わったぜ…」

「……ガンドルフィーニ君、頼めるかの？」

「私はこれまで大戦について……あまりに知らなさ過ぎたのです。
当時子供だった私の知る大戦は、英雄が活躍するだけの話でした。
当然私も英雄に憧れ、立派な魔法使いになろうと努力もしてきました。
しかし、大戦というほどだったのですから、数人の英雄とその他の悪だけで回るはずがなかった。
私も何故今まで全く気付かなかったのか……。
天ヶ崎という名をご存知でしょうか？」

「……」

「知らないのですね」

「うむ」

「大戦当時、あなたが西に徴兵令を出し、そのまま帰って来なかった者です。
その娘が起こした事件が今回の事の発端でした」

なんかシリアスって慣れないんだよなぁ。
殴ってなんとかならない相手とは話したくない。
なんか一生懸命シリアス顔で話してるみたいだし俺はハナクソほじっててていいよな。

うわｗｗｗでっけぇハナクソｗｗｗｗ俺の体積の半分くらいあるｗｗｗ

んなわけあるかーいｗｗｗｗ

「そうだね、麟君！」

「え？う、うん。その通りです」

「うむ……して、要求は？」

……マズイ……何の話だ！？
一言も聞き漏らさないようにしていたのに、どこに穴があった？
何故聞き漏らした？
は……はやく何とか言わなければ……！！

「白波君？」

「だらしねぇという　戒めの心
歪みねぇという　賛美の心

仕方ないという　許容の心
それが大切だね」

「違うよ、麟君。西側の主張だよ」

「何だよ、初めからそう言っとけｙ……ゲフンゲフン」

「取り返しがつかない所まで言ってたね」

「これが西からの手紙だ。危うく忘れる所だったぜ（リアル話）」

「ふむ、すまんの……うむ……」

「帰っていいすか？」

「ダメじゃ」

窓の外を指差してガンドルフィーニ先生に

「あのコンビニで温めてる弁当俺のなんすよｗｗ」

と自慢した。

「そ……そうなのかい」

といわれた。

「ふむ……」

「どんな内容だったんですか？」

「今後一切の西への不干渉、正式な場での謝罪、慰謝料１２億円の要求……」

「で、何がそんな渋い面しなきゃならねぇ原因よ？」

「うむ……、ワシも西には申し訳ないことをしたと思っておったし、不干渉も謝罪も賠償も吝かではないんじゃが……上がのう」

「メガロメセンブリア元老院……ですか」

「うむ。この関東魔法協会はその参加じゃからのう。他に弱みを作る訳にはいかんのじゃよ」

「ＭＭ（ダブルマゾ）の連中、そんな事までうるさいのか。ちょっと脅しとくかな」

「な！麟君、待ってくれ！いくら君が強いとはいえ、個人が国家に適うわけが無い！」

「そうじゃ。上にはワシから話を通す。だから落ち着いてくれんか」

「そこまで言うんやったら相手が要求を呑まなんった時に行くやんか」

「そうしてくれると助かる。じゃあ今日は悪かったの。もう戻っても大丈夫じゃぞ」

「わぁい！」

コンビニでお弁当あっためてもらってる間後ろの人に『あそこで温

めてる弁当俺のなんすよｗｗ』って自慢した。

「……という訳だから、ＭＭに話が通らなかった時は攻め込むわ」

『ちょ、麟！！いくらなんでも無茶ですよ！』

『そうや！国家に戦争売るなんて正気やないで！』

「あれ？フェイトは？」

『傭兵やから帰った……ってそうやなくて！』

『ウチはいますえ～』

「ああ、だいじょうびだいじょうび。万一戦争になっても絶対勝てるから。俺の上位魔法ってマジ大陸一つくらい消し飛ばせるから」

『それはそれで大問題のような気もしますが……』

「気合よ、気合。誰もが恐れてた『邪神』再来なるか！」

『ならないように祈りますよ……』

『ウチも今回ばかりは腰が引けてきたわ』

「『家族への侮辱は自分への侮辱より重い』。ウチの家訓だ。今作った」

『規格外ですね』

「ちーちゃんとつっきーもウチ来いよ」

『え？い、いや、急にそんなん言われても……そのぅ』

『いーんですか？ほなウチもこの件が終わったら行きますわ～』

『ちょ、月詠はん！あんたそんな軽々と』

『よろしくな～』

「まってるぜ！ちーちゃんもな」

『う、ウチは何も言うとらへんやん！』

『説得しときますえ～』

「頼んだぜ」

「お兄ちゃん！ＤＶＤ見ようよ！」

「えー、もう４９８８回目じゃんそのＤＶＤ」

「ですが何度見ても感動しますよ」

「まるまるロボのお前が言うほどなんだから相当なんだろうな」

「実は私も見たこと無いんだよねぇ」

「じゃあ見るぞ！いいよね、お兄ちゃん？」

「うむ。良かろう」

『第１１セクションを難なくクリア！おっと、今１３番　白波選手の車体に、９番のユーノ選手の車体が接触しましたねー。と、すぐに姿勢を立て直したが順位は下がってしまいました』

「あの野郎、叩き殺してやろうか……」

「エヴァ毎回言ってんな」

『今回プライベートで初参戦、しかしこれまでの戦績は正に無敗。車体の差はありますが体躯とテクニックで埋めていきます』

「ってか麟さんえげつなく速いね」

「ああ。プロだとは聞いてたけどここまで速いとは思わなかったな」

「そりゃもう最速だからな。俺から速さ取ったらかわいさしか残らねえよ」

「もう少し残るだろ」

『さて、最終ラップです。
現在の順位は
1位　アプリリア　　マーテヒス・エンシュード選手
2位　プライベート　白波・A・R・麟選手
3位　ホンダ　　道下正樹選手
となっております』

『日本人プライベーターが本戦出場の上ここまで健闘したことがかつてあったでしょうか。もしかしたら歴史が塗り変わる瞬間を見れるかもしれませんよ』

「この時のポテンシャルは世界最強だったからな」

「ねー」

『ここで白波選手抜かすか!?抜かしたー!!スリップストリームからの猛加速です!そして綺麗にコーナーをクリア!』

『これで1位が置き換わりました』

「このスリップストリームって何だ?」

「前の車体のすぐ後ろにつくとそこは風の抵抗が他より少ないからその分パワーを温存できるんだよ」

「へぇ、大したもんだねー」

『おっとここで何か飛びましたね？』

『あれは……バンクセンサーですね。幸いなのはここが最後の右コーナリングという事でしょうか』

『ここでも綺麗なコーナリングです。コレだけドリフトされると何の大会かわからなくなってきますね』

『しかしこのままゴールでしょう！チェッカーフラグが下ろされました！！日本人プライベーター初の快挙！！やりました！！』

「やぁぁぁあああああああああああ！！！！！」

「おちつけ、エヴァ」

「っしゃあああああああああああ！！！！！」

「落ち着け茶々丸」

「いやぁ……」

「なに震えてんだよ」

「そういうちうちゃんだって……」

「はは、……すげぇな」

～～その頃のネギきゅん～～

「弟子入りします！」

「はぁ？」

「何言ってんだ、兄貴？沸いたか？」

０６７　世界最速、あそこで温めてる弁当俺のなんすよｗｗ（後書き）

エヴァのアーティファクトはごっついですよ。

さて、うかつにもバイトが決まって死にたい豚野郎です。
そろそろ本気でＮＳＲ２５０Ｒを買おうと思って決意しました。
バイトに至るまでの経緯は僕が別に書いている『紅になんとか』って小説に書いてあります（宣伝）

明日初バイトか……。
せめてもの救いはガソリンスタンドという事……
いや、救いじゃないね。
救いは無いんですか？
＜無いね
あぁん、ひどい！

道下正樹について
ごめんなさい

ネギについて
そんなフラグ回収してる場合じゃないんだよ。後にしろ。

では、今回もありがとうございました。

０６８　世界最速の花屋さん。（前書き）

エヴァのアーティファクトだし損ねた。
次回は出したいけどまだわかんない。
多分そのまた次に出ます。

０６８　世界最速の花屋さん。

「ヤバイ。白波ヤバイ。まじでヤバイよ、マジヤバイ。
白波ヤバイ。
まず強い。もう強いなんてもんじゃない。超強い。
強いとかっても
「紅き翼２０隊ぶんくらい？」
とか、もう、そういうレベルじゃない。
何しろ無限。スゲェ！なんか単位とか無いの。何ｋｇとか何ｒｐｍとかを超越してる。無限だし超強い。
しかも強化してるらしい。ヤバイよ、強化だよ。
だって普通はヤムチャとか強化しないじゃん。だって昔から近所の犬に吠えられたら死んでたじゃん。クリリンに勝ったら困るっしょ。
成長して、一年目のときは小学生に泣かされてたのに、三年目のときはフリーザに勝つとか泣くっしょ。
だからヤムチャとか強化しない。話のわかるヤツだ。
けど白波はヤバイ。そんなの気にしない。強化しまくり。最も後から入ったちうたんとか観測してもよくわかんないくらい強い。ヤバすぎ。
無限っていたけど、もしかしたら有限かもしんない。でも有限って事にすると
「じゃあ、麟より強い奴って誰よ？」
って事になるし、それは誰もわからない。ヤバイ。誰にも分からないなんて凄すぎる。
あと超かわいい。約１京カワイン。あずにゃんで言うと２７２ペロペロ。ヤバイ。かわいすぎ。男ですら見とれる。怖い。
それに超何でもある。超ごちゃごちゃ。それに超速い。０．０００１秒とか平気で出てくる。０．０００１秒て。小学生でも言わね

ぇよ、最近。
なんつっても白波は回転数が凄い。ＭＯＴＯ　ＧＰとか平気だし。
おまえらなんて無限とかたかだか敵に出てきただけで上手く扱えないから有限にしたり、ｆと置いてみたり、英雄使ったりするのに、白波は全然平気。無限を無限のまま扱ってる。凄い。ヤバイ。
とにかく貴様ら、白波のヤバさをもっと知るべきだと思います。
そんなヤバイ白波に喧嘩売ったＭ（ダブルマゾ）とか超キチガイ。もっとがんばれ。超がんばれ。」

じじいが「ＭＭは条件を飲まんかったんじゃ」とか言っちゃうもんだから、ついやっちゃうんだ。

ハンバーガー１４個分くらいの麟だよ。

「どうしても行くというのかの？」

「正直もうひっこみつかない所まできてるんだよ」

「ふむ……仕方ないのかの……」

「ちなみにシラナミも全員連れて行くから、俺は学園長（じじい）の忌引扱いにでもしとけ」

「なにそのいやがらせせつない」

そう言って学園長室（じじいルーム）を出た。

僕と学園長だけが学園長室に残る。
死にたい。
なるべく同じ空間に居たくない。

「悪い顔してますよ」

「ふぉふぉ、そうかの、タカミチ？」

食えないじじいだ。

「出陣じゃぁぁあああああ！！！！」

「って待て待て！何だ？私も行くのか！？」

「そりゃそうだよ、ちうたん。今回は新婚旅行も含めての魔法世界大凱旋なんだから。
それに伴い、まだ未契約の子は式場で契約するぜ」

無意味なガッツポーズを出しまくる。出しまくりながら

「時に麟さん、今の契約者は？」

「エヴァ、茶々丸の二人だ」

「あの時はガイノイドの私も死ぬかと思いました」

「な……何をしたんだよ……」

「フレンチキス」

「……」

「ちなみにフレンチキスは、互いの舌を相手の口腔内に……」

「知ってるわ！！」

「契約方法がキスなんだよ。どっちにしろ式場でするんだから今のうちに腹くくるべき」

「いや、まぁその……」

「こんな赤いちうちゃん中々見れないよー。記念に一枚」

「と、撮るなぁ！」

「ご安心ください。私のＨＤＤ容量にはまだ多分の余量があります」

「何やってんだよう！！」

「ぬはははははｗｗｗあれ？さよは？」

「もういい時間だから寝たよ」

「あ、マジ？じゃあ出陣は明日にするか」

「なんだそのノリ」

「その場の勢いって大事だと思うんね」

とうるるるるる
ガチャリコング！

『もしもし？』

「へイちーちゃん、明日魔法世界にカチコミじゃぁあああ！！」

『ほ、ホンマにやんねんな』

「ったりめぇだろ！つーわけで迎えに行くから準備終わったらすぐに言って。すぐに」

『わかったわ。何を用意していったらええん？』

「んー……エヴァ、何いったっけ？」

「着替えと婚姻届だよ」

「着替えと婚姻届」

『ちょ、そんなもんすぐに用意できるわけあらへんやん！』

「マジ？着替えないとかかわいそうなんだけど……」

『婚姻届のほうや！！』

「エヴァ、婚姻届無いってー」

「正直あっちの国のルール（シラナミ）でやるんだから別にそんなの無くても結婚できるんだけどね」

「そんなん無くても結婚できるんだ！」

『その、どうしても結婚するん？』

「え？……いやなの？」

『い、嫌やないねんで。でも、心の準備とか、その……』

『麟さん、千草はん、まだ告白されてないから迷ってんねんで～。私も告白されてへんけど、迷わへんでん』

「んっふふｗｗちょっとまっとれよ」

ガシャリコ

「そうだ、京都行こう」

「どうしたの？」

「女ひっかけにな★」

「いってらっしゃ～い」

「いや、いいのか妹！？」

「いいんだ。愛は奪うものではない」

「っつーわけよ。じゃねー。『転移』」

～～ショッピングモールのおはなやさん～～

「ごめんください……どなたか……いませんか……」

「目の前に私がおりますが、花をお探しでしょうか？」

「逆に鼻を捜したい気分ではあるんだが、そこの薔薇を２０本づつ纏めてラッピングしてくだち。プレゼント用でち」

「かしこまりましたーお待たせいたしましたー」

「速い！！負けるかもしれない！でも負けない！！」

「ありがとうございます７６００円ですございますです」

「安い！！ありがとうございます！ありがとうございます！！」

「女だろ？……頑張ってきな」

「姉さん……」

誰だよこのババア……イケメンやん……

～～京都・ちーちゃんＨＯＵＳＥ～～

カンコーン

「はいはーい、どなたですかー？」

狙われる身なのにこんなあっさり出てくるなんて凄すぎると思わんのかね。

「花束を、君に。結婚しようぜ」

「り、麟さん！？なんでこんなとこに？ってかこんな……その……」

「あ、ええなぁ～。私にはあらへんの？」

「ほれ。当然、あんだろうがＹＯ」

「わぁー？ありがと～。ほら、千草はんももう諦めていっしょに麟さんのお嫁さんになろや」

「お、お嫁……さん……」

「強いしかわいいしお金持ちやし愛してもらえるし、ええことばっ

かりやで」

「褒めすぎワロタｗｗｗｗｗ」

「お嫁さんに……お嫁……
ふっ、ふつつか者（モン）ですが、よ、よよゅよろしくお願いしましゅっ、
しますっ！！！……きゅう……」

ばたん

「あ、倒れた」

「熱暴走やね～」

「おっしゃつれて帰っちまうぜ」

「ほな戸締りしてきますえ～」

「うん」こ

つれてかえりました。

０６８　世界最速の花屋さん。（後書き）

２１にもなってうんこで大笑いする残念な豚野郎です。
友人に猛烈にカラオケに誘われるのですが、カラオケに着て行く服がない。

さて、さいきん更新がめっきり減っていますがそんなんどうでもいいや。

近況報告ですが、受かったバイトを一日で辞める羽目になりました。
マジリア充☆

と、こんなクソみたいなあとがきを書いている間にもおさそいが来たので、いっそパンツ一丁で出てやります。
本当に服がねえっつってんだろ。

では今回もありがとうございました。

愛してるぜ！！

０６９　世界最速、結婚式。（前書き）

後輩の揉め事に巻き込まれてました。
何で僕が東大阪まで行かなきゃならないんだ……。

０６９　世界最速、結婚式。

「う、うーん……」

「あ、おはよう、ちーちゃｎ」

「おはよぉー」

目をごしごしするちーちゃん萌えの麟です。

「ん〝ー……めがねどこぉ？」

「ハァハァハァ」

「とりあえずエヴァ、その荒い息をなんとかするんだ。そしてはい、メガネ」

「おーきに……ふぁ～～……おやしゅみー」

「かわいいだろ？これ、２８歳なんだぜ……」

「千草はん、起きてーなー」

ゆっさゆっさぁ

「というかメガネかけたまま寝るなんてとんでもねぇスイートスイートグラスベビー（？）だぜ」

「ぁんー、……ん」

「抱きつかれた。抱き枕麟です。関係ないけど俺布団よりベッド派なんだよな」

「すー、すー……」

「ぐごー！ぐごー！」

「お兄ちゃん、表現が古いね」

「FC世代だから」

「んぅ、何ぃ？」

「おはよう、二度目だぜ、ちーちゃん」

「お母しゃん……」

「……もう少し寝かしてあげようよ」

「仕方ないね」

ボタタタタッ……

「茶々丸に鼻血出す機能付けた奴、怒らないから静かに手を上げなさい。ほら、みんな机に伏せて」

～～いちじかんご！～～

「よくこの寝起きの悪さでテロとか起こそうと思ったもんだぜ」

「んー……ふあ～～～……」

「おはやう（3度目である事を悟られないようにする紳士な気遣いもモテる秘訣だ）」

「え？……なんでぇ？」

「何がさ」

「ウチ家で寝ててんでー」

「その記憶は捏造されてるから。さて、皆用意できてるからとりあえず放してぇ……！」

「な……なんでウチのお布団で寝てるんよ！！」

「俺のベッドですしやすし！」

「ここどこやねんな！ってか何でウチはこんなとこにおるん！？」

「そろそろ起きられましたか？朝食の準備が整っておりますので下に降りてきてください」

「うｎ。茶々丸、説明を丸投げた」

「丸投げられた、麟様」

「え？何？何で？」

「「「「いただきます」」」」

みんなが合掌する。

「い、いただきます」

ちーちゃんもいただきますする。

「いィィィィィィィァァァァあああああああああぁぁぁぃぃぃぃぃいいただきます」

俺もいただきます。

そしていろいろ食べて

「ごちそうさまでした」（エヴァ）

「「ごちそーさまでした」」（みんな）

「ごっつぁんです！」（俺がデブっぽい声で）

壁を叩いてひっくり返しホワイトボードを出す。

「さて、作戦会議だ」

ボードに大きく丸を描く。

「まず一日目、結婚式だ。王都シラナミで行う」

「ちょ、ちょっと待ってな！」

「意見があるときは服を脱げ！！」

「結婚式ってホンマにやるんですか～？」

「ホンマにやるんです～」

「王都シラナミって……もしかして麟はんの……？」

「うん。俺の王国。一国一城の主なんだぜ」

「でもお兄ちゃんお城解体してサーキットにしたよね」

「後悔も反省もしてない」

「あの魔法世界最強の中立武装農国ですやんねー」

「そうなん、エヴァ？」

「そうだよ、お兄ちゃん」

「そうです」

「ええかげんやなぁ」

「武装してたんか。リンリンびっく麟☆」

「武装農耕国家って何だよ。鍬持った農民が襲い掛かってくるのか？」

「敵対者を不思議な銃で撃ち殺そうとする」

「何だよ不思議な銃って。魔法か？魔法なのか？」

「ちうちゃん動揺してるけど、結婚式緊張してるだけだから怒らないでやってね」

「な！ど、どどどうようとかしてねぇし！！」

「さて、じゃあ行くぜ。結婚式＆新婚旅行＆ＭＭとのＯＨＡＮＡＳＨＩ会」

「「「おー！」」」

ホワイトボードとは何だったのか……

「『転移』」

～～魔法世界・王都シラナミ～～

シラナミの門に転移したらでっかい横断幕がかかってた。

『王妃様方　シラナミにようこそ！』

『王様は帰ってもいいよ。帰らなくてもいいよ。（居ても居なくても同じという確固たる意志のあらわれ）』

の2枚がある。

とりあえず下の方を破った。

「お、王妃様って……」

「私も王妃だぞ。この国は誰とでも結婚が赦されているんだ。妹だろうと親だろうと」

「な、何か凄い国やねんなぁ」

「この国はワシが育てた」

「おい、王様！大嘘こいてんじゃねぇよ！こっちだ。早く乗れやクソボケ！

王妃様方もぜひこちらに。パレードの準備をさせていただいております」

ちなみに声をかけてきたのは農民Aさんだ。
嘘です。国民の面とかいちいち覚えてるかっつの。
ちなみに現在のメンバーは

俺、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロ、さよ、かずみん、ちうたん、
ちーちゃん、つっきー

大所帯だ。

「この扱いの差……俺は泣いていいんだ！！」

「早く乗れっつってんだろ！！」

「つーかパレードとかやるんだ」

「王様のためじゃねえよ。新王妃様の為だ」

「なぁ、千草はん、ウチら王妃様やって～」

「……」

「千草はん？」

「うふふふー」

「あかん、旅立ってるわ」

「情けないわねぇ。ねえ、ちうちゃん」

「えへへへー」

「……」

「おっよめっさん～？おっよめさん～♪」

「なにそのうたふしぎ」

どふん！どふん！と空砲の音が響き、俺たちを乗せた不思議な車が国（小さい）を凱旋する。

「ご結婚オメデトー！！」

「お幸せにー！！」

「税金下げてくれー！！」

「ちょっと待て！一円も取ってへんやろうが！セコい評判下げすんなや！！」

「今月はこれ以上出せないんです！来月必ず払いますから、今月だけは！」

「何の話だー！！！」

「この紙ちぎったやつってどのタイミングで投げるのが正解なの？」

「ブーケこっちに投げてくださいねー！」

「キャー！！王様カワイー！！」

「おめでとーございます！！」

色々よくわかんない事も言われてるけど基本的には祝福してるみたいで一安心。

一方車内は

「ど、どどどないしよ、緊張してったわ……」

「お、おおおおちつきなよ千草さん。わ、わわ私なんて溢れるきき記者魂でここの落ち着きようだよ！？」

「なんかお前ら見てると逆に落ちいてきた」

「うふふ、皆さんこんなにお祝いしてくれるなんてうれしいです」

「さ、さよちゃん大者だね……」

「みんなかわええですなぁ～？」

なんかすごい。

みんなウェディングドレスすごく似合ってるよ！
ちなみに式場は王城跡地のサーキット兼みんなの広場だ。
催し物とかは基本的にここでやるらしい。

「えー邪神……じゃねえや、白波・A・R・麟は死のうが死ぬまいが彼女達を愛し続けると誓いますか？」

「当然であろう！」

「相坂さよ、あなたは、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

「誓います」

「朝倉和美、あなたは、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

「ちっ、誓います！」

と、このように教会式に誓いの言葉を述べつつ重婚するのはどうなんだろうか。

「……とを、誓いますか？」

「ちかいますえ～？」

「天ヶ崎千草、あなたは、その健やかなるときも、病めるときも、喜びのときも、悲しみのときも、富めるときも、貧しいときも、これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、その命ある限り、真心を尽くすことを誓いますか？」

「ち、ちきゃいまひゅ！ましゅ！！」

「よろしい。では誓いのキスを。そーれキース！キース！」

「「「「キース！キース！！」」」」

なんぞこれ。

全員とキスを交わし、仮契約もする。
それぞれのカードだが
さよは背景いっぱいに背の低い飛行機がある。あとオプションの人魂。
かずみんは記者っぽい格好にカメラを持ってる。
茶々丸は今出した訳じゃないけど、ネコミミ？っぽい何かをつけたピチピチな服。えろい。特に何も持ってない。
ちうたんはノートパソコン？なんか小さい。服はウルトラファンシー。
ちーちゃんは和服に薄手の本を持ってる。
つっきーはよくわかんない剣。西洋剣っぽい。でゴスロリ。

そしてもう一回街を凱旋。

「末永くお幸せになー！」

「ステキー！」

「ちくわ大明神！」

「誰だ今の！！」

「税金を……」

「もうええっちゅーねん！！」

「ＭＭに攻め込むんだろ？ここに結界張ってから行けよ」

「はい」

「この前雨漏りしたから直してください」

「自分で直せ！！」

「「「「さよーならー！また遊びに来てねー！！」」」」

「あれ？俺の国だよな？」

～～街を追い出された～～

「よろしくね、麟さん。いや、旦那様って呼ぶべきかな？」

「いや、今まで通りで良いだろ、和美」

「だよねー。って、か、かずみって今！？」

「ん？どうしたよ、かずみん」

「い、いや！何でもないよ！は、はは」

「自分で振っといて振り返されるととことん弱いんだな」

「そんなの何されても弱いちうちゃんに言われたくないよ」

「な！お前誤解を招く物言いするんじゃねえ！」

「なるほど、千雨。貴様は全身が性感帯か」

「絶対先生から来ると思ってたセクハラが妹の方から来た！！」

「もういいからそんなん。ＭＭ行くぞ。戦争じゃ！カチコミじゃ！！」

「さて、行くにしても何で行くんや？」

「転移か？」

「千草さんもちうちゃんも真っ赤だよ～？」

「そう言う和美はんも真っ赤ですえ～？」

「エヴァ、頼めるか？」

「うん、お兄ちゃん？」

「何するんですか？」

「まあ見てな、さよ」

「良いか、貴様等。そのカードの使い方を教えてやる。まず主人との通信、転移が可能になる。カードを額に当てて「テレパティア」で念話が出来るぞ。別にいらんだろうが」

「へぇー」

「ウチは知っとるんやけどな」

「黙って聞け。で、アデアットと唱えるとアーティファクトを出す事が可能だ。これは契約者の格にもよるが、お兄ちゃんと契約したんだから当然出来る。でもまだ出すなよ」

「何でですの？」

「見てろ。おい、茶々丸」

「はい、アデアット」

茶々丸が唱えると、その背後に全長２５ｍほどの、銃器がびっしりと搭載された平たい戦車とトラックを合わせたような物が現れる。

「な……何やコレ！？」

「と、このような事もあるから狭い場所で出したり人が密集する所で出したりするのはそれほど良くないんだよ」

「いやいや、無いだろ。流石にそれは無いだろ。だって魔法って感じじゃねえじゃねえか。明らかに科学の結晶じゃん」

「ええ。これは恐らく超が作ったモノでしょう。
その名も
（２１３０シキ　チャオパオジー　フィクセド　ボンバーディス）
二一三〇式超包子　巨大移動砲台（Ｆｉｘｅｄ　ｂｏｍｂａｒｄｉｓ）
『空（うつほ）』

これでも私のアーティファクトです」

「じゃ、じゃあさ、別に普通の道具だって出るんだよね？」

「貴様のカードには何が描いてある？
……これは……いいモノを拾ったな」

「だ、出して大丈夫？」

「いいぞ。
ほら、お前らも見せてみろ」

「ってか何だよこの格好はよ！」

「知るか！
ふん……千雨、千草、月詠も出して良いぞ？」

「アデアット！
……何コレ？」

「それはトートグラフィティと言って、そうだな……それをカメラのレンズにつけてぼうやがセクハラされてると思いながらシャッターを押してみろ」

「？
ま、いいか」

そう言ってシャッターを押すと、シャワー室にあすにゃんとまき絵とネギが一緒に入ってる写真が出てきた。

「な、なにこれ？」

「真実を写す者、トートグラフィティは、その名の通り真実を写すための道具だ。
どこで何が起こっているか、薄っすらでも予測してそれが僅かにかする程度でも当たっていればその場で起こっている事が写される。
ちなみに何も考えずに写せば幽霊が写るらしいぞ？」

「へぇー、これってビデオにも使えるのかなぁ？」

「知るか。じゃあ千雨もやってみろ」

「アデアット
ノートパソコン？」

「流石に知らんな。何か説明書みたいな物は入ってないか？」

「無いな。とりあえず開けてみるか」

ちうたんがノートパソコンを開くと、画面に
『使う機械を背面のカメラから表示させてください。何も使わない場合は「ＥＮＴＥＲ」を押してください』
と表示された。
ちなみに下画面は普通のキーボードだ。テンキー付きの。

「何だこれ？」

「さあ、わからんな。機械など、家で『ちうのホームページ』を見るのくらいにし……」

「ちょっとまてー！！」

「何やそれ？」

「いいから！いいから！！」

と勢い良く手を振り回し、指がＥｎｔｅｒに当たった。
ピロン☆というファンシー＆キャッチーな音とともに
『使うＯＳを選択してください』
と書かれ、その下に大量のＯＳの名前が書かれている。

「とりあえずコレかなぁ」

『Ｗｉｎｄｏｗｓ　２０００』と書かれたところにカーソルを合わせエンターを押すと『ＯｖｅｒＣｌｏｃｋＳｕｐｐｏｒｔｅｒ　Ｗｉｎｄｏｗｓ　２０００　ｍｏｄｅ』という表示が一瞬出てすぐに

消え、ウィンドウズ２kたんが立ち上がった。この間約２秒！！現在の価値に換算しようが２秒である！

「うわ、速ぇな！えーっと、『ＯＣＳにようこそ！このＯＣＳは機械を強制的にオーバークロックさせその性能を最大２００％させることの出来る補助装置です！』？」

「なんかよくわかんないけど凄いんですね」

「ん？ああ、そうなのか？」

「私にも全くわからん。なんとか頑張って使え。で、千草、貴様は？」

「ん。アデアット……本と手甲？」

「これは『鬼さんこちら』だな。鬼や悪魔を無条件で召還、使役できるようになる。試しに何か出してみろ」

「ど、どうすんの？」

「１ページ目を開くと表紙裏に使い方が書いてあるだろ？」

「へぇ……」

『　書籍型召還術式『鬼さんこちら』腕輪型召喚媒体『手のなる方へ』
一、当書は『手のなる方へ』と併用する
一、当書は、鬼を召還する為の術式が組み込まれたものである

一、当初に鬼の名を書き、その頁を開いた状態で二度手を叩けば召還可能である。ただしその鬼の数、及び負担魔力は使用者に依存するが、無制限に使役可能
一、帰るように言うか魔力を遮断すれば鬼は帰還される
一、言語は日本語のみである』

「はぁー……ってウチ別に魔力量はそれほど多ないで？」

「それでも何か1体くらいは可能だろう」

「んー……」

パンパン

「も〝ほ」

何故か付いていた筆で名前を書いて二回手を鳴らすと、片角で顔に札が貼られた鬼が召還された。

「ほう、中々のもんじゃないか」

「ほなお帰りやす」

そう言うと下に現れた魔方陣に吸い込まれていった。
何故かサムズアップしてたけど、ターミネーターのつもりか。

「中々のものじゃないか」

「いや、あのくらいなら普通にお札で召還できるけど」

「まあ、後々わかるさ。
月詠、貴様は？」

「はーい。あであっとー？」

と、何やら禍々しい西洋剣が出てくる。

「ん～、こんな剣見たこともおまへんわ～」

「復讐の剣、『魔剣アヴェンジャー』だな。封印しとけ」

「えぇ！？そんなマズイもんなの？」

「マズイというか、アーティファクトの中でもかなりエグい部類だ。
使用者がこれまでの人生で受けてきた全ての痛みを相手に与える。
どんな人生を歩んでいようが、相手はほぼ確実に死ぬだろう」

「うわっ、エグいな」

「へ～、切れ味はどんなもんですの？」

「半紙も切れんらしいぞ」

「え～、ほなそんなに使いませんわ～」

「何だそれは」

「斬るのが楽しいんですやん」

「ケケ、ワカッテンジャネエカ」

「あ、いたんだ」

「ヒドイナ！？」

「ねえねえエヴァさん、私は？私は！？」

「さよ……そうだな、あちらを向け」

そう言って誰も居ない方を指差すエヴァ。

「はい」

「出せ」

「はい」

「いや、はいじゃなくて」

「あ、アデアット！」

そう言った瞬間、飛行機の軍隊が現れた。

「……す、すごーい！！」

「っていやいや、やりすぎだろ！？」

うち一台が縦に浮上し、そのままゆっくり動き始める。

「ふん、なるほど、無人機か。これなら私のアーティファクトと併

用できるな」

「へぇ～、凄いんですねー」

「いや、さよちゃんのアーティファクトでしょ」

「あ、そうでした」

「できるだけ速く動かしてみろ」

「はーい。できるかなぁ……それー！」

そういって、何やら気合を込めるっぽい動作をさせるとパァン！という音と共に飛行機が物凄い速度で飛んでいった。

「あれ？消えた？」

「わー、凄い速さです！」

「え！？さよちゃんわかるの！？」

「あ、はい。何かわかります」

「ど、どう見ても消えたようにしか見えんだわ」

「ふん……戻せるか？」

「はい、ん～～～」

キーンという音を出しながら戻ってきた飛行機が上空でピタッと止

まった。

「ほう、ん？コレは名前か？」

確かに、見ると機体にＵＣＡＶと書いてあるけど

「いや、これは無人戦闘航空機の略だよ」

「へー、お兄ちゃん物知りだね。ちょっとアーティファクト辞書見てみるね」

と、どこからともなく辞書を出して調べだす。

「なるほど、これは『Ｓα－４０』といって、まあ名前の通りだ。全部で４１機あるらしい。
どうやら使用者の思う通りに動く上に効果範囲は無限、おまけに人も乗れるそうだ。
最高速度は時速３２２０ｋｍ……３２２０！？」

「速いんですねー」

「なんか世界最速が持っていかれた」

「地上ではお兄ちゃんが一番速いよ！！」

「せやろ☆」

「で、そういうエヴァのアーティファクトは何なんだよ？」

「あ、ソレ私も気になる」

「ふん、まあ良いだろう。それに『乗って』行くんだからな」

「乗って？って事は乗りもんなん？」

「いえ、マスターのは乗り物などと生易しいものではありません」

「ケケケ、見テ腰抜カスンジャネエゾ」

「おい、さよ。アーティファクトをしまえ。アベアットで消える」

「あ、はい。アベアット！」

飛行機４１機をしまい、エヴァがその方向を向く。

「ククク、では見てろよ？

……アデアット」

０６９　世界最速、結婚式。（後書き）

いやぁ、（自主）文字数制限で妙な引きを作っちゃいましたよ。

今回はアーティファクト紹介でしたね。
エヴァのは無駄に引きましたが。
さて、実を言うと豚野郎は二次創作で独自設定を入れるのは実はそれほど好きではありません。
いえ、読むのは好きなんですよ。
でも書くと自分でも纏めきれない。
でも書く。
そのうち設定だけの話とかも載せます。

エヴァのアーティファクト、今回出すつもりだったんですが、出遅れました。

では、遅くなって申し訳ありませんでした。
今回もありがとうございます。

０７０　超巨大航空母艦『しらなみ』（前書き）

設定資料集付きです。

０７０　超巨大航空母艦『しらなみ』

エヴァはアーティファクトを出す。

だがそれは全ての始まりに過ぎなかった。

無敵艦から逃げ惑うメセンブリーナ。

元老院議員の傲慢は、自分達が俺に勝てると思いこませる。

次回　「見知らぬ、母艦」

この次も　サービス　サービスぅ！

「という感じになる訳だな」

「いやもう、なんか突っ込むのも面倒くさい」

エヴァのアーティファクト、それは全長約１１ｋｍ、前幅役４ｋｍ、５６階層という、イカレた規模の航空母艦、

「水空両用超大型航空母艦　『しらなみ』」だ。

もう山にすら見えないほどの巨大なサイズである。

ちなみに、１キロ動かすのに、普通の魔法使い１００人が人生で使う全ての魔力を使うほどの燃費の良さだ。

俺から鬼のように魔力を吸い上げてる。

余裕だけどな。

「さて、乗るぞ」

桟橋を降ろし船体に乗り込む。

「ってかアレだな、規格外にも程があるな。まあ規格なんか知りもしないんだけど」

「あながち間違いでも無いな。私の魔力でもこの艦は１０ｃｍも動かん。お兄ちゃんからの魔力供給があるからこそこんな巨大な船を動かせるんだ」

「いや、わかっちゃいたがどういう事だよ」

「どういうことなの！」

「いいから、乗るぞ」

～～『しらなみ』艦内～～

「しかしこれだけでかいと操縦も艦内の移動も大変だろ、と思ったそこのちーちゃん！！」

「な、なんだよ……？」

「なんとこの艦には自動操縦機能がある。更に至る所に転移陣が展開してあり、想像しただけでそこまで一発だ。まあ慣れるまではわからんだろうし、とりあえず私に着いて来い」

「はいよー！」

「ちなみに艦内はバイクや自動車での移動も可能だＺＥ☆」

「へぇ～、便利なもんですなぁ」

「せやろ？」

「何でエヴァのアーティファクトなのに先生が偉そうなんだ？マスターだからか。そりゃそうだ」

「おい、早くしろ。ここに立って全員で手を繋げ」

「俺ちんこ出していい？」

「もうお兄ちゃんは自分の足でコックピットまで行って」

「これが反抗期か……」

「年中倫理に反抗しまくってる麟さんが言うんだ」

「じゃあ行くぞ」

そう言って転移していく。転移にかかるタイムラグは０．１秒、俺の全力疾走で、ここから約８．６ｋｍのコックピットまで０．０２秒全・力・疾・走！！

「遅かったな」

「何でもう居るんだよ！！しかも全裸で！！」

「全力疾走してきたんですね、麟様」

「うん。服が焼け飛んだ」

「そんなアホな話が……」

「とりあえず服を出さざるを得ない」

指輪でつっきーの服っぽいのを作る。

「似合う？似合う？？」

「似合ってるよ、お兄ちゃんかわいい！！」

「ここまでかわいいと悔しくもならねえな。仕込むか？」

「コスプレを？」

「そうだな。素材は限りなく良い。生かすも殺すも役次第だ……って何言わせんだよ朝倉！」

「やだなぁ、朝倉じゃなくって白波だよ？ちうちゃん？」

「か……和美……」

「クッ、いかん、ちうちゃんに欲情しちまう所だったぜ」

「ふん、まだまだだな和美。私は欲情しきってるぞ」

「もうやだこの家族」

「さて、目的地をメガロメセンブリアに設定、到着は明朝9時でいいかな？」

「うむ」

「じゃあこれからメッセージを送るけど、どんな風にする？」

「そうだなぁ……」

「ゲーデル総督！議員全員に対し緊急通信です！！」

「誰です？」

最近雇った少年が急いで入ってくる。

「それが……」

と、窓から外を指差した。そこには大きく映像が映し出されており……

『ＨＡＨＡＨＡＨＡ！！！やあやあ元老院のアホども！！いつも先代と違わぬ間抜け面ご苦労！！

私はつい２０年前に多くの肉親を亡くした旧世界は日本の関西呪術協会からの使者、リン・Ａ・Ｒ・シラナミ、いや……“邪神シラナミ”と言った方がわかりやすいかね？』

もう駄目だ……

「ど、どうしたんです総督、そんな勢い良く振動して？」

「いえ、気にしないで、君はすぐに裏から逃げなさい。なるべく遠くに。そして私の墓には『志半ばに散る』と」

「な、どうされたのです！？」

『あれ？反応薄くない？』

『お兄ちゃん、緘口令だよ』

『ああ、なるほど。無能な諸君にも緘口令程度なら布けたか！！いや、すっかり見くびっていた、申し訳ない。しかし知ってる者もいるだろう？

では手短に用件を話そう。貴様等如きクソどもに蹂躙された我らが関西呪術協会は、先日直接命令を下した関東魔法協会に謝罪要求を

申し出た所、どうやら元老院議員のどなたかが謝罪はするなと言ったそうじゃないか、ひどい話だ。
いいか？貴様らの身内の誰かが人のツラにクソこすりつけた挙句「これからも俺の命令は聞き続けろよ？」とのたまう、それこそクソにも劣る下劣な精神の持ち主だ。こいつは赦せないよなぁ？
で、要求だが、いいか？
さっさとそのクズ野郎をこっちに引き渡せ。見つけれないにしろ探す努力はしろ。時間は明朝。
何、殺しはしないさ。少しＯＨＡＮＡＳＨＩさせてもらうだけだ。
了解なら3分以内に上空に向かって見えやすい魔法を放て。了解しない場合は１０分後に、そうだなぁ……』

「マズイ！目が合った！！すぐに逃げますよ！！」

「な、何なんですか、あの人！？」

「史上最悪の大災害です！」

『その建物の上半分を消し飛ばそう。では、いい返事を期待してるよ？』

「今絶対気付いてた！私を見てここに決めたんだ！！」

「ど、どうするんですか？背景から見て恐らく場所は『王都シラナミ』だと思われますが、あの距離からだと、いや、どんな至近距離からでもここが壊されるような事なんて無いと思いますが……」

「そんな常識が通用するわけないでしょう！いいから荷物を纏めます！」

「は、はい！！」

私はすぐに荷物を纏め部屋から飛び出した。
すると、なぜかニヤニヤした麟がそこにいて……

「ウェールカーム！久しぶりだな、ベンデル！」

「……ゲーデルです。部屋ごと転移ですか、考え付きもしませんでした。というか普通は不可能なんですが」

「え！？ええ！？」

「誰だてめえ？まあいいや、茶々丸、部屋にお通ししろ。丁重にな？」

「はい、麟様。どうぞ、こちらです」

私は、少年と共に外側から鍵の掛ける豪奢な部屋に入れられてしまった。

「では、ごゆっくり。失礼いたします」

茶々丸と呼ばれた……ネギ・スプリングフィールド、そして麟の生徒の一人であり、あの『闇の福音』エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・Ｍ・シラナミの従者である絡繰・Ｓ・茶々丸は一礼し、鍵をかけて行った。

「な、何故抵抗しなかったのですか!?刀だってここにあるのに……」

「無駄です。彼の一家に勝てる者は居ません」

「彼？」

「あの中継のゴスロリ、白波・Ａ・Ｒ・麟は男です。そして世界最強の『邪神』とも。恐らくあの茶々丸さんには勝てたと思いますが、彼の家族に傷でもつけようものなら、魔法世界は終わります」

「お、終わるんですか？」

その時、壁に映像が映し出され、腹立たしくなるほどの笑顔で麟が言った言葉は「お前いい仲間持ってるな」。
好きでつるんでいる訳では無いのに。
そして間もなく総督府に画面が切り替わり麟の声が聞こえる。

『ああ、実に残念だよ。じゃあ警告どおり、その建物とはＯＳＡＲＡＢＡだ。よく目に焼き付けて置けよ？まだ人が居るならさっさと避難しろ。カウントダウン、５分３０秒。と、ここで先ほど人質にとったクルト総督からのありがたいお言葉だ』

そう言って切り替わった画面には私が映っていました。

「は、早く逃げてください!!そして明朝までに必ず麟の言っていた議員を!!」

『はい終了!という訳で準備だ、茶々丸』

『はい、麟様。アデアット』

彼女が出したアーティファクトは、恐らく『暴力そのもの』なんでしょう。
車輪のついた２５メートルほどの車の上に、黒く光る旧世界の兵器が所狭しと並べられています。

「さて、出来る事はやりました。久々に休憩しますか……」

「総督……」

『茶々丸、第三門、１号、２号起動』

『１号起動完了、２号起動完了』

『照準の調整』

麟が言うと、横を向いていた直径５０ｃｍはあろうかという前方二つの筒がメセンブリーナの方向を指す。

『調整完了』

『残念だよ、諸君、私の「お願い」を聞いてくれないなんて。発射（ファイア）』

『発射』

最早音と呼ぶべき音量ではなく、それは体を芯から砕くような衝撃となって壁伝いに部屋を揺らす。

そして、乱れた映像が戻る頃には、私の働いていた建物の上半分が、

ものの見事に綺麗に消えていた。

『さて、全員逃げれたかな？まさか巻き込まれちゃったおバカさんはいないよね？
これでこちらの本気を知ってもらえたと思う。ああ、抵抗はしないほうがいいよ。ムカつくから。じゃあね』

「私は……」

「は、はい」

「私は、全ての案件が片付いたら、どこか静かな村で畑仕事をして暮らしたいんですよ」

「そ、総督！帰ってきてください！」

『あ、そうそう、ヘーデル』

「だれが出しますか！ゲーデルです！！」

『ああ、それそれ。悪いな、新婚旅行中だからあんまかまってやれねえのよ。今回の事がカタ付くまでそのフロア好きに使っていいから』

「……はい？」

『一応不自由しないように施設はしっかりしてるから。あと二回手を叩いたらメイドが来るから、要るもんがあればそれに言って。じゃあな』

同時に鍵の開く音がする。恐らくこの部屋の。

「い、いや、待ってください！！新婚旅行のついでにメセンブリーナを潰しに来たんですか！？」

『家族の敵討ちだ。じゃあな』

「……イチゴは5分で育つんですよ」

「な、何の話なんですか！？」

あのファミコン（ファミリーコンプレックス）の麟の家族に攻撃しやがったゲロブタ野郎はどいつだ！？

「さぁて、じゃあ凱旋行こうずｗｗｗ」

「ってか好き放題だな……」

「先程の第三門砲撃は一門につき1分間に6回砲撃可能です。全てで6門ございますので、2秒弱に1発撃つ事が可能です」

「何やそれ……イカレてるやん」

「ちなみに主砲である最終門は麟様の大魔法クラスの砲撃が可能で、おそらくコレを放てば問答無用でオスティア程度なら跡形も残しま

せん」

「撃つなよ、絶対に撃つなよ」

「任せてください、千雨さん。フリですよね」

「フるかぁ！！」

「おい、何をはしゃいでる？さっさと船室に引っ込むぞ。さよ、お前のアーティファクトも展開しておけ」

「はい」

「予定では明日の朝９時にはあちらに到着します。滞在期間は長くても２日となりますので観光の際はご注意ください」

「は～い？」

「いや、観光とかすんのか？」

「やめとけ。もしどっかのバカが暴走して私たちに攻撃してきたらお兄ちゃんが魔法世界を滅ぼすぞ」

「いや、むしろやりかねないね、麟さんなら」

「俺を何だと思ってるの。やるけど」

「やんのか」

「そらやるわ、この愛妻どもが！」

「ややなぁ～、照れますわ～？」

「くっ、不覚にも……」

「ちうちゃん……私、見た目こんな小さい麟さんにドキドキしてる自分がおかしいのかと思ってたけど、ちうちゃんもなんだね」

「安心し。ウチもや」

「そろそろ暗くなってきましたね」

「うむ。明かりをつけるか」

「っしゃ、鬼の新婚初夜、始まるよー！」

「しっ、新婚初夜……」

「わかるぞ、和美。緊張するだろう、愛した人と結ばれるのは」

「マスターがこれまで麟様意外に向けたことの無いようなやさしい笑みを！」

「まあエヴァのアレは逆レイプだったけどな。痛い痛いって泣きながら襲ってくる時は狂気を感じた」

「やだお兄ちゃん、そんな昔の事……」

「ダメです！千草さん、千雨さん両名が倒れました！！」

「？？」

「さよは何のことかわからんか。まあこれからだろ」

「え？　はいー」

「わ、私もブルっちゃってるかな」

「そんな怖い事じゃねえよ。さ、行くか」

行きました。

０７０　超巨大航空母艦『しらなみ』（後書き）

ふぅ……

え？

あ、ああ、こんにちは。
みんなの希望、豚野郎です。嘘です。
ちなみに童貞なのでフルカットです。

どんだけシリアス書かせる気だよ。
ええ。全く書いてませんね、シリアス。

あとがきにみんなの設定です。
本編より長いので是非読み飛ばしてください。

微妙なネタバレ含みます。

●　シラナミ

白波麟が率いる過激派ネオニート集団。

別名白波ハーレム。

全員女に見えるが麟の性別は『秀吉』。

本拠地は一応『王都シラナミ』という事になっている。

みんな麟の嫁、麟はみんなの嫁。

● 王都シラナミ

帝国の端っこにある中立武装農耕国家。
麟は力の象徴、エヴァは慈愛の象徴。
慈愛!?
ちなみに常に国王不在。

法律は
1. 好きにしろ
2. でも好きにしすぎたら殺す
3. 移民には優しく
4. でも我が物顔をしだしたら殺す
5. 国王様はえらい

非常にアバウトである。
法律以外にもいろんな決まりごとはあるらしい。そりゃそうだ。
ちなみに偉い国王様は激しく敬われていない。

一度他国に襲われたが、その時は国民が総出でブチ切れてその軍隊を殲滅した後、麟がポテトチップスをつまみながらその国を滅ぼした。

● 白波麟

※レーサー

見た目１０歳ほど。

速い。
強い。
変たい。

身長１４０ｃｍ
体重３５ｋｇ
視力６．６
魔力無限

バイクをこよなく愛する。

王都シラナミの国王で国民からはこよなく愛され、その扱いは際限なく低い。

ＲＲ、ＳＳ、カフェレーサー、ネイキッド、アメリカン、スクーターなんでもいけるよ！

ちなみに乗車スキルは生前からの物で、実際死ぬ前もかなり速かった。
でもそんな事もう覚えていない。

酒を飲むとリバースカード『リバース』をリバースする。

人が真剣に何かをしようとしてても平然とバカにするクズ野郎。

基本的にロリコンだが、それ以外でもＯＫ。人外でも余裕。すごい。
始動キーは「あば・ばば　あ・ばばば　あばばばば」ではない。

◆　アーティファクト　◆

ねぇから！！

◆　便利なアイテム　◆

？指輪？

何の装飾もないシルバーリング。

素材やら製法やらを知ってるもの何にでもなる
しかも絶対壊れない。
でもバイクにしてキャブレターから水流し込んだら走らなくなる。
あくまで作ってるのはバイクであって、火を作ってる訳じゃ無いから、水入ったらそら走らんわな。
ガソリンはなくならない。うらやましい。

？魔力隠蔽用ネックレス？

革紐に分厚いドッグタグみたいなネックレス。

魔力を隠蔽する
丈夫
かなり長い間持ってる
１０００ドラクマで露天商から買った

エヴァとおそろい。

●　エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル・シラナミ

※ベタデレ

見た目１０歳ほど。

ｍｉｎｉライダーとして目覚めつつある。
ジムカーナでもＢクラス程度の腕前。

麟がやることなら何だろうと無条件でいい事と思う。

物凄まじい箱入りっぷりだが強い。

魔力はこのかと同じくらい。

微レズで、麟のハーレムをつまみ喰う。
麟に対してはドＭからドＳまで何だっていけるんだ！！いけるんだ！！

◆　アーティファイクト　◆

水空両用超大型航空母艦　『しらなみ』

全長１１．４ｋｍ
前幅３．７ｋｍ
５６階層

最大速度：２００ノット以上（３７０ｋｍ／ｈほど）
排水量：満載　６，０３０，６６６トン

魔法障壁、物理障壁や移動するためのエネルギーも契約者の魔力に依存する。
つまり絶対負けない。

水空両用だが地上に置くと要塞にもなる。

主な武装は
艦対地ミサイル
空対地ミサイル
艦対空ミサイル
空対空ミサイル
地対空ミサイル

ミサイルは対潜以外全て通常弾頭か無弾頭

対潜ミサイル
焼夷弾
徹甲弾

武装では無いが

照明弾
発煙弾

更には打ち上げ花火などもある。
きたねぇ花火だ。
きれいな花火もある。

弾丸全てが魔法で出来ており、対物理、対魔法共に優れている。
茶々丸の『空』、さよの『Ｓα－４０』と組合わせれば無敵じゃないかね？

●　絡繰・Ｓ・茶々丸

※メカデレ

２００ｋｇ（白波の不思議な魔法（サットリーン）で４０ｋｇに）

視覚、嗅覚、味覚、触覚、聴覚の五感があるんだ。

麟の超魔法『カナリヒエール（適当）』で２８．７ＧＨｚという恐ろしいクロック数を誇る軟体ＣＰＵを搭載。

アレ用の機能も備えてる。
何を勘違いしてるんだ。オセロの機能だよ。

砲丸を握りつぶすほどの握力があるけど使いどころはない。

◆　アーティファクト　◆

二一三〇式超包子　巨大移動砲台（Ｆｉｘｅｄ　ｂｏｍｂａｒｄｉｓ）　『空（うつほ）』

（２１３０シキ　チャオパオジー　フィクセド　ボンバーディス）

全長２５ｍ、幅３．７ｍの長方形の土台に複数の重火器が搭載されている。

背の低い戦車にトラックをつけたような形。

中央にコックピットがあり、茶々丸とは電子的な同期（リンク）が取れる。

多分超が作った。そしてワシが育てた。

最高移動速度：５０ｋｍ／ｈ

総重量：３２トン

１２０００発／分で厚さ５０ｃｍのコンクリートの壁を貫く程度の魔法の弾を発射する機関砲『第一門』　８機

３０発／分で２０ｃｍの鉄板を引き裂く程度の魔法の弾を発射する固定ライフル『第ニ門』　８挺

６発／分で１００ｍ四方が軒並み消滅する程度の魔法の弾を発射する大砲『第三門』　６門

２発／分で麟の大魔法クラスの砲撃を発射する巨大砲『最終門』　１門

呼び方は第三門の場合、右前方から

前

２号ー１号

４号―３号
６号―５号
後
となる。

弾丸の数は茶々丸の魔力、あるいは契約者の魔力分放てる。
麟に依存せずに放った場合は最大まで魔力を充填した状態で機関砲の第一門1機を2分動かせる程度。
被弾しなければ絶対勝てる。
ちなみに空砲も撃てるし実弾も射出可能。
有効射程距離はだいたい第一門が５ｋｍ。第二門が５０ｋｍ、三門は１１００ｋｍ、最終門は制限無し。
対物理攻撃は超高いが魔法装甲はペラッペラ。というか無い。
発射中の音は物凄い。

◆　便利なアイテム　◆

マリアージュ・チャチャマル
Ｍａｒｒｉａｇｅの特に良い指輪。
結婚してる事がわかる。

『空』用に音を抑える術式が組み込んである。

● 白波チャチャゼロ

※デレてない

小っさかわいい殺戮人形。
砂糖を吐く。
麟にやや狙われている。

◆ 武器 ◆

出刃包丁
刺身包丁
菜切包丁
中華包丁
マグロ包丁
麺切包丁

◆ 武器じゃない ◆

万能包丁
刀削麺用L字包丁

見た目的には麺切が一番エグそう。
でマグロ包丁がいちばん強そう。
でも一番強いのは中華包丁。
チャチャゼロの刀削麺には定評があり、一月に一回くらい、ゲリラ的に超包子で販売される。

◆　便利なアイテム　◆

金のネックレス

麟にもらったが人間用なサイズのために、勘違い系Ｂ－ＢＯＹファッションっぽくなる。
家に置きっぱなしにしている。

●　白波さよ（相坂さよ）

※デレデレ

元地縛霊、今浮遊霊

学園長の同級生だった。

今は等身大自分（超＆ハカセ作）に取り憑いて、騒霊現象に魔力の補助で動かしている。
任意で抜け出せる。

お嫁に行けません～とか抜かしてたから麟がお嫁にした。
その前まで、特に恨んでる訳でもない相手に「恨めしや」と言って回るという、ヤクザまがいの事を趣味にしていた。

麟がオカルト板のオフ会で知り合った大学生に寺生まれの先輩、Ｔさんを紹介してもらって、そのＴさんからイタコさんを紹介してもらって、そのイタコさんに師匠とか呼ばれてる大学生を紹介しても

らって、大学生に凄腕の霊能力者を紹介してもらってその霊能力者に霊媒のロープをもらったものを脊髄あたりに詰め込んでいる。

◆　アーティファクト　◆

無人戦闘航空機（ＵＣＡＶ）　『Ｓα－４０』

Ｓα－００～４０までである、全４１機の無人戦闘航空機。
コックピットが有り、無人より有人の方が綿密な作業を行える。
でもだいたいスピードに思考と行動が追いつかないので、無人の方が大雑把に速く動ける。
ちなみに、自動運転と手動運転は即座に切り替え可能。

◇↑これを縦に１２０％伸ばしたような形

最高時速：４，２２０ｋｍ／ｈ
最大航続距離：８６，９００ｋｍ

乗員０～２人
全長：２２．３０ｍ
全高：　５．６２ｍ
翼幅：１３．５６ｍ

機関銃
空対空ミサイル
空対地ミサイル
空対艦ミサイル

が搭載されている。
弾倉が∞の形になっているらしい。
どんな意味があるのかまでは知らぬぅ！！

◆　すてきなアイテム　◆

すてきなネックレス

高そうかつシンプルなネックレス。
アメジストが入っている。
魔法効果は特に無い。

すてきな指輪

高そうかつ高いアメジストの指輪。
魔法効果は何も無いが霊媒として使える。
霊能力が使いやすくなるが、元々使えない人が持っても何も起こらない。
横島とかいう霊能力者に2億で作ってもらった。

◆　さよの身体のひみつ　◆

超&ハカセ&横島とかいう霊能力者が間接的に協力して作った科学と医学とオカルトと魔法のハイブリッド。
魔法も使えるはずだが霊能力（超能力）が便利で、魔法は使った事がない。

●　白波千雨（長谷川・Ｓ・千雨）

※ツンデレ

ちうのホームページを麟に視姦されまくってる
うさぎのコスチュームが似合う
たまにデレると吐血喀血レベルのかわいさに、さすがの麟さんもたじたじやでぇ。
かわいさのあまりネットアイドルＮｏ．１の座に居座り続ける
わっしょい
いつも急に出てきて急に突っ込む
いないと寂しい。というか突っ込み不在になる
よくＨＰを更新してると思われがちだけど、それほどでもない

押しに弱く、心優しい。
視力はいい。

◆　アーティファクト　◆

強制高速処理外部補助装置（オーバークロック　サポーター）

１５センチ四方、厚さ2センチ程度のノートＰＣのような見た目で
重さは５００ｇ程度。
耐衝撃、耐水、耐埃性がかなり高く、鈍器としても使う。釘とか打てる。

電子機器の能力を強制的に2～最大２００％まで上昇させる
これ自体がコンピューターとしても使え、どこからでもネットに接続可能
魔力⇔電力のコンバートも可能
仮想電子空間に入り込める

◆　便利なアイテム　◆

指輪型魔法発動体『マリアージュ・チサメ』

大魔法５回分ほどの魔力の吸収、貯蓄。
魔法の抵抗。
オート戦いの旋律。

結婚式の日にちうたん用にフォーマットされた。

いざという時、すごい効果を発するらしい。（考えてない）

●　白波和美（朝倉和美）

※ヘタレデレ

下ネタを振っときながら下ネタで返されると真っ赤になる。
麟の取材をしてた朝倉さんの娘。

いざという時にヘタレる。

ずっと昔から麟が好きだった。

でもバイクにはそれほど興味ない。

幼女スタイルがかなりかわいい。

かなりなんてもんじゃない。宇宙がヤバいレベル。

◆　アーティファクト　◆

真実を写す者（トートグラフィティ）

カメラのレンズの前につけるような形状をしていて、伸縮自在。

何処で何が起こっているのか漠然とわかればそれがどれだけ遠距離だろうとはっきりと写せる。

ちなみにビデオカメラにつけるとライブ映像が見れるから事実永遠に追跡可能。

メガネにつけても何も見れない。

何が起こってるかさっぱりわからない、見当違いの事が起こっている、そもそも特に何が起こってもかまわない、という状態の時にシャッターを下ろせば普通に向こう側の風景が写るが、幽霊もよく写る。

◆　便利なアイテム　◆

指輪型魔法発動体『マリアージュ・カズミ』

大魔法５回分ほどの魔力の吸収、貯蓄。
魔法の抵抗。
視力、聴力を任意である程度上げれる。
結婚式場で渡された。

●　白波千草（天ヶ崎千草）

※京デレ（京テレとは関係ない）

月詠に説得されて半ば成り行きで結婚した。
ワーオ☆

涙もろく人情話に弱い。

和美と気が合う。

（何をとは言わないが）旦那さんにあげるねん！と過ごしいつの間にか２８。
やるじゃん。

◆　アーティファクト　◆

鬼さんこちら（書籍型召還術式）
手のなる方へ（腕輪型召喚媒体）

腕輪型って名前なのに見た目は左右一対の黒い手甲。
あと薄い本。同人誌ではない。

『鬼さんこちら』に鬼の名前を書き、そのページを開いた状態で二回手を鳴らして鬼とか悪魔とかを魔力で呼び出す。
召還したら鬼とか悪魔とかの名前は消える。
魔力のあるだけ使役でき、当然のように麟からの魔力供給があるため実質無限に使用可能。
リョウメンスクナノカミでもあっさり出せる。

倒されて帰った鬼をすぐに呼び出すと小言を言われる。

● 白波月詠（月詠）

※ただしイケメンに限る

名字が名前に対してミスマッチでも気にしない強い子。

絶妙にアホ。

京都弁を操り数々の京都斬撃衝を飛ばす事ができるかどうかまでは知らない。

◆ アーティファクト ◆

復讐の剣（魔剣アヴェンジャー）

今までの人生で受けてきた痛みを一気に相手に負わせる恐ろしい魔剣。
その代わり一人に対し一度分しか効果が無い上に大根も切れない切れ味。
ただ、どんな些細な怪我も一気に降りかかるためその威力は必殺。
箪笥に小指をぶつけた痛みが一気に１００回分とか確実に死ぬ。

● 高畑・T・タカミチ

※ホモデレ

オエェェエエエエエエエエエ！！！

デレない。間違いない。
多分Tはテスタロッサの Tじゃない。

パワーインフレしまくる中でもそこそこ強い。
吸ってるタバコはマルボロ（多分赤の１２ミリ。違っても知らん）。
運転技術は高いがプロには及ばない。
そりゃそうだ。
麟に負けてから密かに特訓している。

● ガンドルフィーニ

色黒。多分日焼けサロンとか行ってる。

かなり強いんじゃないかなと思ってます。
飛んでくる銃弾に銃弾当てるとか正気じゃない。

色んな事を知って苦悩してる。

結構いい人で、話せばわかるタイプ。

銃刀法がある日本で、普通に袖口から銃を出す当たり、多分クラックとかガン決まってる。

● アルベール・カモミール

オコジョ。

妹思いでシルク生地が好き。
意外と博識。

当作ではかなりいい奴。

● 近衛近右衛門

まぎらわしい名前しやがってこのじじい！

後頭部の長さもさることながら、頭頂部の高さも注目すべきだと思う。

性格は悪くないが、根性は悪い。

大物ぶって油断してボコボコになる。

口癖は「変態という名の紳士だよ!!」ではない。

● ネギ・スプリングフィールド

我が家を貫って、ものすごいテンション高い。

給料はけっこう貫ってる。

アホ。

ハーレムをいっぱい奪われつつあるが大丈夫か？

何とかなるか。

０７１　世界最速ｖ．ｓ．ＭＭ兵団、第一幕！（前書き）

タイトル考えるのがホント面倒です。

０７１　世界最速ｖ．ｓ．ＭＭ兵団、第一幕！

「立てない……」

目が覚めたらもう朝だった。
昨日倒れたちうちゃんと千草さんはそのまま他の部屋に運ばれたみたいだけど、さよちゃん、つっきー（こう呼んでと言われた）、私はあのまま麟さんと……

「ウチも立てへんわ～」

「う～ん……すー、すー」

「おはよう。
さよちゃん、昨日凄かったよね」

「大きさがどうって訳やなかったんやけどな」

「ホント、私も初めてだったのに、まさかあんだけとは」

「ウチかてそうです～」

「おい、起きたか、貴様等。
さよはまだか。起こして二つ隣の部屋に来い。朝食の準備が出来ているぞ」

「何でエヴァちゃんが言いに来たの？」

「ふふ、貴様らの事後を眺めにな」

い、今気付いたらあたしら全裸じゃん！
は、恥ずかしい……

「フフフ、お兄ちゃんは凄かろう？立てぬならそこで待って……」

「行く！いくよ！！」

「そうか、待ってるぞ？ははは」

男気を感じる……
ってか今さらだけど初めてが４Ｐってどうなの？

～～その頃のクルトン～～

「誰がスープやシーザーサラダに入れる香辛料などで匂い付けをしたサイコロ状の固くなったパンだ！！」

「ど、どうしたんですか、総督！？」

「いや、なんでもないです。悪い夢でした……」

昨日捕まってしまったんだったな。
さて、どうしたものか……
そう言えば麟が、二回手を叩くとメイドが来ると言ってたな。
私は大丈夫だがこの子はまだ育ち盛りだ。そろそろ朝食の時間だろ

うし、食事が出るならもらっておいたほうがいいだろう。

と、二回手を叩く。

「お呼びでしょうか」

「うわぁ！」

急に後ろにメイド姿の人、いや……人形が現れた。

「呼んでおいて驚くなんて、ひどいですわ」

銀髪の彼女は表情豊かな無表情でぼやく。

「呼んだのは私ですが驚いたのは私ではないですよ」

「ま、どうでもいいです。何の御用でしょうか？」

「ああ、食事は出してもらえるのかと思ってね」

「ご用意させていただきました。こちらへどうぞ」

彼女に廊下を案内され一つの部屋にたどり着いた。

そこもかなり豪勢だ。食卓にはフルコースが用意されている。

「至れり尽くせりじゃないですか」

「客人のもてなしをするように伺っておりますので。では、何か御用がございましたらお呼びください」

彼女はそういうとまた音も無く消えてしまった。どうなっているんでしょうか……

～～そのころの葱～～

カンコーン

「あれ？いないのかなぁ？」

「そうみたいだな。出直しましょうぜ」

「このかも居ないし、どうなってんだろ？」

「このかさんなら朝から刹那さんの部屋に行きましたよ？」

「あぁ～……」

「ありゃ目に毒だぜ」

「え？」

二人とも何の話をしてるんだろ？

「にしても何で急に弟子入りなんか」

「僕は修学旅行の件で思い知らされたんです。もっと強くならないと。そしてもっと多くを知らないといけない……

僕は舞い上がってました。魔法学校では天才ともてはやされて、なまじ勉強も出来たから何でも出来るんだって思い込んで……
でもそれは違ったんです。僕はあまりに弱い。何も知らない。だからこそ、僕、あの人に弟子入りしたいんです」

「な、何よ、かっこいい事言っちゃって」

「兄貴……俺っちぁ、俺っちぁよぉ！！」

「カモ君！！

でもホントにどこに行ったんだろ？」

～～お船～～

昨日、その、アレの3人がフラフラしながら食堂に来た。
私は何か早めに寝たから昨日じゃなかったらしいが、記憶は無い。
気付いたら起きてた。

「う～、おはよー」

「まだフラフラします」

「お、お前らやっぱり……ヤったのか？」

「や、やだなぁちうちゃん！！このムッツリ！！」

「い、いやぁ、あはは」

「ｚｚｚ・・・・・・」

「おい、足元がおぼついてないぞ、三人とも。というかさよはさっさと起きろ」

「そらふらつきもしますわ～。昨日かてあんな激しく……ぽっ」

「つ、月詠はん……階段を昇ったんやな」

「千草はんより先に昇ってもうたわ～？」

「え？千草さん、アンタまだだったのか？」

「悪いか！２８で処女やと悪いんか！？」

「ほらほら、悪くないからさっさと座れ。ちなみに私は６０の誕生日の日だったぞ」

「ってか麟さんは？」

「もうすぐ来るから席につけ」

そうエヴァが言ったと同時に、天井の一部が開いて上から底辺臭漂うキャラクターもの灰色スウェットの先生が落ちてきた。
んでかなり綺麗に椅子に座った。
いや、最早この程度のことじゃ動じないよ。魔法よりよっぽどファンタジーだっつの。

「おっはよーーーーーーー！！！」

「わひゃ！？お、おはようございます！！」

「ん？何だかずみん？顔伏せて」

「て、照れてるんだよ！」

自分で言うのか。

「からのいただきまっしぶ」

「「「「いただきまーす」」」」

「ごちそーさまんさ」

「麟さん食べんの早いどすな。ってか皿ちっさ。大丈夫ですの？なんか普通の人の１０００倍くらいカロリー使てそうやけど」

「大昔から少食なんだよ。実は今の量だけでホントは1月持つけど、食おうと思えばいくらでも食える。
ちなみに今食ってたのホントはプラスチック製の偽者だぜ」

「嘘だろ先生」

「なぜわかった」

「逆にわからねえ方がまずいだろ。ごちそーさん」

「家族ってええなぁ……」

「千草はん……」

『目標まで残り３０分です』

「だそうだ。さて、腹ごなしでもするか。みんなはもうしばらくメシ食ってろ」

「はーい」

「お願いしますね、麟様」

「ちょっと待って、私も行くよ、お兄ちゃん」

「字余り」

「いや、そんな話じゃねえだろ」

「ごちそーさま！いこ、お兄ちゃん。
お前らも、この部屋出て右隣の部屋に甲板に出れる魔方陣を用意したから来たければ来てもいいぞ」

「ほいさぁ！『転移』」

甲板に出たらミーデルの執務室が置きっ放しだった。

片付け忘れてた（'・ω・、）

「中身だけでも今の部屋に送っといてやるか。『転移』」

「お兄ちゃん優しいね」

「せやろ？外側要るんかな？」

「聞いてみる？」

「せやの。おい、執務室要る？」

『中のものはあるほうがいいです』

「中はさっきの部屋に送った。外は？」

『好きにお使いください』

「はいよ」

「あ、お兄ちゃん、アレ」

「ＭＭ兵か？だいたい５０００万人くらいだな」

「どう見ても万は居ないよ」

「５００人くらいだな」

「５０００人くらいがこっちに杖向けてるけど？」

「ほっとけ。障害にもならんぜ」

「それもそうだね」

「じゃあパラソルとチェアーでも出すか」

指輪をパラソルとチェアーに変えたら服が消えた。

「忘れてた」

パラソルとチェアーと服を出しなおす。

「うむ、コレでよし」

「そうだね、お兄ちゃん」

俺とエヴァは、向かってくる兵団を横目に二人でパラソルの下、寝転がって談笑をする。

「な、何だ……あの艦は……！？」

「わかりません！かなりの速度で近付いています！！」

「くっ、絶対に進入を許すな！正義は我らにある！」

「「「はい！！」」」

「では第1隊、詠唱開始」

我らがMM兵団が大人数による大魔法をあのシラナミが居ると思われる艦に放つ。
しかしその攻撃も虚しく、全くダメージを与えた様子は無い。

「怯むな！！第2隊、詠唱開始！！」

「ドンドンいいやがってうっせぇなぁ。『転移』」

「第3隊、詠唱開始！」

「た、隊長！！」

「どうした！」

「上空から何かが！」

見ると、そこには部屋が落ちてきていた。

「まずい、避けろ！！」

しかし、この声も虚しく、２０人ほどが落下に巻き込まれた。

「衛生班！」

「「はっ！」」

「引き続き第３班、詠唱！！」

「あ、防音すればええねんやん。エヴァ」

「はいはい」

エヴァが透明のパネルを展開し、結界に防音の効果も加える。

「ついでに対空ミサイルもくれてやれよ」

「はーい。ドーン」

飛んでいったミサイル１０発が兵団の中央に飛び込み爆発する。

「きたねぇ花火だ」

「クソ！何だあの攻撃は！？」

「被害状況４０％、このままでは……」

「衛生班！！」

「「「はっ！」」」

「くそっ、バカにしやがって！！」

「目標、現地点への到達まで残り約１分３０秒！」

「乗り込んで殲滅してやる。我らが兵団に敗北は許されん！！」

「「「はっ！！」」」

「行けー！！」

「「「「おおー！！！」」」」

「あべし！」

「ひでぶ！」

「たわば！」

「ちにゃ～」

「ぬべ～」

「おーおー、頑張るねぇ。乗り込んでくる気か。
うわ、結界にぶつかって落ちまくってるよ」

重さ６００万トン、幅３．７ｋｍ、高さ１２０ｍの塊が時速１６０ｋｍってかなり洒落にならんな。
そら避けられんわ。

「網戸に弾かれる羽虫……か」

『目標まで１０分です』

かわいそかわいそなのです☆

０７１　世界最速ｖ．ｓ．ＭＭ兵団、第一幕！（後書き）

さて、とうとう７１話という全くキリの良くない数字に到達いたしました。
これも皆さんの応援があってこそです。

麟のチン子さんは普通の小６程度のサイズですよ。何の話だ。

ここからが正念場ですね。
正直オチ考えてない。
バイクも出てない……。

一度に出てくる人数を増やしすぎました。子分けます。

では、今回もありがとうございました。

０７２　世界最速「前回のサブタイに『第一幕』と書いたが、ありゃウソだ」

死ぬほど腰が痛い……
バイク不足のせいです。

そして前回『第一幕』とか書いてたのに一回で終わる出オチっぷり。

０７２　世界最速「前回のサブタイに『第一幕』と書いたが、ありゃウソだ」

「関西呪術協会は、ＭＭに宣戦布告します。今更ケツまくっても遅えから。絶対許さないよ。メモったからな、３日後１００倍だからな」

「肩赤」

「繊細すぎる…」

「キミキスさん遅いなさん遅いなさん遅いな」

「まおか乙」

「おや、麟様にマスター、どうなさったんですか？」

「Ａ春に電話かけた。戦争するっていってた」

「うん」

「所でこれ、誰がどれを喋ってるのでしょうか」

麟です。どれが誰かわかるかな？俺にはわからん。

「俺がＭＭたんをボコボコにしてる同人誌のアップロードを希望します！！」

「アップロード依頼をしたものは、殺す」

「お前たち、もう寝なさーい」

「誰このじじい」

「ほ陛新チｗ」

「いよいよやな……」

「と言うわけで着きました～。おーい！ちゃんと用意したかー？」

『誰が賞金首などに屈するか！貴様の賞金は復活だ！！』

「茶々丸」

「はい」

「掃射」

「『空』第一門、全機照準調整完了、発射します」

ゴーーーーー

と、勢い良くドラムが回転し、途切れない銃声が鳴り続ける。

弾が当たった箇所は例外なく半径２．８ｃｍの穴が開き、その隣にも同径の穴が開く。穴と穴が繋がり線になって、その線は建物を一本斬り落とした。

すごいやろ。

「な?悪いこと言わんからさ、出せよ」

「そうだそうだー!」

『ハ、汚らわしい吸血鬼が!貴様の賞金も復活させたからな』

「は?てめぇ今エヴァに何て言ったよ?」

「まずい、千草さん、離れてください」

「え?な、何で?」

「早く!」

『何度でも言ってやるさ!汚らわしい吸血鬼が!!』

「まずい、千草さん、離れてください」

茶々丸はんが、柄にも無く焦ってウチを引っ張る。
ある程度麟さんから離れて前を向きなおすと、妹さんが結界を張っとった。

『汚らわしい吸血鬼が!!』

「『燃える天空』『術式固定』『掌握』」

呪文を言った瞬間、結界の上からでもわかるほどの熱と魔力が麟さんから出る。
そのまま麟さんは、艦の結界を突き破って外に飛び出して言った。

「あ～あ、汚らわしいとか言ってなかったらもう少しくらい長生きできていたものを」

「な、何なん、今の？」

「お兄ちゃんは家族がバカにされたらブチ切れるんだよ。茶々丸の時も二人ほど死にかけていたな。まあ今回は助からんだろ。
ちなみにアレは私のオリジナル魔法だ。凄かろう」

妹さんが何か自慢してるけど、その後ろで麟さんが一騎当千してる。
というか強力な魔法装甲を持つはずのＭＭ兵が、麟さんが横を通るだけで倒れていってる。

「ああ、アレはな、お兄ちゃんに全くあの魔法の素質がないから暴走してるんだよ。
結果漏れ出した熱が敵の防御を突き破り、あふれ出した炎が酸素を奪っていくって訳だ」

「そんなん、麟さん大丈夫なん！？」

「ああ、全く問題ない。お兄ちゃんが酸素無かったり熱かったりするくらいで死ぬわけなかろう」

「いや、それもどうなんよ……」

「邪神が乗り込んできます！！」

「慌てるな！そう易々と入れるわけ無かろう！」

「それをフラグっつーんだよ。死亡フラグな」

「な、邪神！？」

「警備兵はどうした！？」

「死んだ死んだ。で、さっきエヴァに向かって汚らわしいだのクズだの死ねがの言ったゲロブタ野郎はてめえだな？」

「な、そこまで言ってな……」

「死ね」

邪神が腕を振りぬいた瞬間、その議員の上半身は赤い霧になっていた。

「魔力だけだと思ったか？」

「ば……化け物め！！」

「ふはははははは！恐れよ！！跪け！！3分間だけ待ってやる！！」

「な、なぁ、いつもの麟さんやな」

「ずいぶん丸くなったからな。大方私をバカにした奴を殺して心に余裕が出来たんだろう」

「麟様はアホですからね」

「ボロクソやな……」

「さぁて、スネ夫くんに命令してる悪いジャイアンはどいつだ？怒羅獲門がお仕置きに来たよ～」

「に、逃げ……」

「てめぇかぁあああああああああああああ！！！！」

「ぎゃあああああああ！！」

「あ、気絶した。『転移』」

「わ、わわ私じゃない！！だから助けてく……」

「オボンヌぅぅぅうううううう！！！！！！」

「おびょばんべ！！」

「『転移』」

「こ、こいつがやったんだ！！私は知っているぞ！！」

「な！？貴様、おい待て、私じゃない！！」

「アッチョンブリケェェぇえええええええええええええええ！！！！！」

「あらじおぉお！！」「よのさー！！」

「『転移』」

と、こんな風に気絶した奴を片っ端から『しらなみ』の牢屋に入れていく。

すると誰も喋らなくなった。

「……」

「……」

「……あっち向いてフォイ↓」

「「「「（　。д　。）」」」」

「エンダァァアアアアアアアアア！！！」

「「「「イヤァァアアアアアアアアアアア！！！」」」」

「『転移』コンプリート！からの俺も転移」

「おかえり、お兄ちゃん」

「ただいま。尊い一人の命を奪ってしまった……」

「全然後悔してないくせに～」

「へへ」

「俺モツレテケヨナ、ニイサン」

「あ、居たんだ」

「ヒデエ」

「じゃあ尋問を始めます。牢屋に行くぜ」

「うん！」

『こちらアリアドネー報道部です！大変な事になってしまいました！！
なんと、１５年前の賞金首、「邪神」白波麟様……あ、いっけね。シラナミリンがメガロメセンブリア元老院議員、全員を攫っていきました！！
この直前にシラナミの賞金は復活、捕獲した方には賞金３２億ドラクマ以上が渡されます！！』

「お、おいトサカの兄貴、３２億って……」

「一生遊べる金額なんてもんじゃないッスよ！」

「ハ、やめとけ。敵う相手じゃねえよ」

『さらにその妹、「闇の福音」エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル・シラナミを捕獲した方にも９６３万ドラクマ以上が！』

「兄貴！？」

「だからやめとけっつってんだろ！！麟さんナメてんのかコラ！？」

「り、麟さんって……」

「兄貴……」

「な、何だよ……」

『各人の写真はこちらになります！キャー！！麟さまぁ！！！』

「……」

「……」

「……平和だな」

『失礼致しました。新情報です！全貌が見えないほど巨大な戦艦ですが、どうやら船体に書かれている文字は旧世界の日本語で、『しらなみ』と書いてあるそうです！私も欲しい！！』

「いや、どこに置くんだよ」

『おっと、動きがあったようです！『しらなみ』船体下部に映像が写されました！！』

『いえー☆見てるー？今から議員達のＪＩＮＧＭＯＮＧ（尋問）を始めま～す☆』

『犯行声明でしょうか！？はたして議員はどうなってしまうのか！？と、今回エグニ・プリンティン議員が殉職されたそうです。黙祷……。何故シラナミは議員を殺害したのか！？』

『そりゃアレだよ。エヴァをバカにしたから』

『見事なシスコンです！！というか返事を返された！？』

『俺に不可能はねえ』

「ジャック・ラカンさんと同じ事言ってるッスね」

「鬼のシスコンっぷりだな……」

『じゃあ一人目はクルトンでーす☆応援してね☆』

「「「おぉーー！！」」」

「うわ！？何だこいつら！？」

「同志の奴らだ（ファンクラブ）」

「俺あの議員いけ好かなくて嫌いなんスよ」

『私たちには見守る事しかできません！！では映像を切り替えます』

『オーッス、元気？ちなみにこの尋問は船の下にモニターを出して生中継（ライブ）されますが議員の皆さんには知らせません』

『何故そういう事を私の居る部屋で言うんですか』

『だってヘーデルさん』

『ゲーデルです！』

『ヘンゼルさん』

『グレーテルさんは何処へ！？

く……いいですか？私のような、議員というのは国民に嫌われる事

も仕事のうちですが、正直今の議員には黒い者が多すぎます。上がここまで腐っている事を国民に知らせるのは早計ですよ！一人づつ順に挿げ替えていかねば、国が機能しなくなってしまいます』

『国民の事が第一ですかそうですか。ちなみにもうライブは始まってるから。いえー☆国民のみんな見てるー？』

『な、ちょ、麟！！』

『コルト・ワーゲンさんでしたー』

『クルト・ゲーデルだ！！』

『ちなみに彼がＶＩＰ待遇なのは完全に白とわかってたからだよ。他の奴は知らない』

『なんと！！あの普段から真っ黒そうなゲーデル議員が今回の事については実は真っ白だったぁ！！そして彼の証言では他に真っ黒な議員がいるとも……メセンブリーナはどうなってしまうのでしょうか！？』

『今の立場になるまでは大分無茶をしたそうだからな。どんな無茶かは私は知らんが』

『全知全能の俺も知らんわ。全知ってのは嘘だけど』

『流石は麟様、ちゃっかりと全能アピールをしますね』

『せやろ？』

「入れろー！！」

「議員を帰せー！！」

「うっせぇ！！バーカバーカ！！」

外から結界を叩いてるバカが４０匹ほど。

「ＭＭ兵をなめるな！！」

「そうだそうだー！！」

「ハナクソでも食ってろ！市ね！！髪の毛が抜け切って金輪際生えてこない呪いをかけるぞ！！」

「ヤメロォ！！」

「悪魔！！邪神！！」

「俺の髪を返せ！！」

「いや、まだ何もしてないから。泣くなよ、ハゲ」

「ハ、ハハハ、ハ、ハゲちゃうわ！！！！！」

「チクショウ……チクショウ……！！」

「おのれ、邪神め！！よくも隊長の若きトラウマを抉ったな！！」

「黙れゲロども！！お前らが予想を兆倍下回るザコさだったせいで第一幕だけで簡潔したじゃねえか！！Ｖ．Ｓ．兵団じゃなくてＶ．Ｓ．ＭＭにしときゃよかったわこのクズ！！」

「何を言っているんだ！？」

「訳のわからんことを！！」

「うっせ！！散れ！！『エターナル俺フィーバー！！！！』」

「ぎゃー！！」

「わー！」

全身からビーム的なアレを出して兵士を吹っ飛ばすだけの簡単なお仕事です。

「ワ　レ　ハ　メ　シ　ア　ナ　リ　！！
ハ　ー　ッ　ハ　ッ　ハ　！！」

「お兄ちゃん、エックスみたいになってるよ！？」

「ヒッフッハ！」

オマエのために　はやおきして
おべんとうつくってきたんだ

０７２　世界最速「前回のサブタイに『第一幕』と書いたが、ありゃウソだ」

いえー！！意味わかんねー！！

ロックマンゼロのゼロがかっこ良すぎるんじゃないですか！？

伏線は蒔く物であって回収するものではない。
そう、あの東方仗助が憧れた学ランリーゼントが誰かは最後までわからなかったように……！！

というわけで、今回です。
随分時間が空いてしまいましたが、そりゃもうパソコンをどうこうしたりしなかったりと凄絶な２、３日を送っていたんですよ。
嘘ですけど。

医者にバイクに乗るなとか言われた腹いせに７５００円で買った中古の自転車に乗りまくってました。

では、今回もありがとうございました！

０７３　世界最速、暴く。（前書き）

お久しぶＷＲＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹＹ！！！！！

髪全部抜けたらで攻守交代だから。

←

髪全部抜けたら攻守交代だから。

修正しました。

いつもありがとうございます、もみじさん。

０７３　世界最速、暴く。

「フリーージア！！フリィィイイイイジア！！！」

「うわぁ！！邪神！！」

「あなたを、犯人です。
お前が関西をバカにしとんのかコラぁ！！
さあ、貴様のコレまでやってきた悪事を吐け。さすれば開放すると誓いましょう」

「誰が貴様などに屈するか！」

「茶々丸、砲丸」

「はい、麟様」

茶々丸がメコォ！と砲丸を握りつぶした。

「これはお願いじゃないんだよ。言え。な？」

「わ、私じゃないし誰が担当かも知らん！！本当だ！第一旧世界の地名などユナイテッドキングダム以外聞いた事もない！！」

「麟様、本当のようです」

「すごいウソ発見器でつね。じゃあ最後にお名前を」

「ニグレト・ヒューストンだ」

「麟様、ウソです」

「貴様！！！！」

「勘弁してくれ！！」

「言え！言えぇぇぇえええ！！こいつがどうなってもいいのか！？」

「な！彼女は……誰だ？」

「おい、何で私は急に茶々丸に羽交い絞めされてんだ、先生？」

「どうなってもいいのか！！！」

「おい、聞けよ」

「くっ、ピョン☆スケだ……！」

「ナバホｗｗｗｗお疲れっすｗｗｗｗ」

「クソーー！！！」

「もすもす、私メリーちゃん。今あなたの部屋の前にいたのおっじゃましまーす！！！」

「来たな邪神め！！」

「じゃあ新芽？何言ってんのこいつ、シャブやってんの？」

「ぐぬぬ」

「率直に伺いますが、旧世界からの謝罪許可の申し入れを断ったのはあなたですか？」

「違う！」

「では誰が断ったのですか？」

「そんなもん知らん！」

「ウソですね」

「おち〇んちんびろーんｗｗｗｗｗｗｗ」

「ほ、本当だ！！何を根拠に！？」

「息遣い、心拍数、発汗量、視線の向き、脳波などを測定しました。私の前でウソをつけると思わないほうがいいですよ」

「そうだそうだー！」

「く……クレイン議員だ」

「本当です」

「おちんち……、よくやった、茶々丸」

「いえ、当然のことです」

「そして当然のように私がここに居るのは何でだ？帰らせろよ」

「はぁい。『転移』
あ、そうそう、お名前は？」

「ドレング・オッピアだ」

「ではオッパイドリンクさんでしたー。じゃね」

「誰がオスティア最高のおっぱいソムリエだ！！」

「言ってない、そんな事（倒置法）」

「何だ、入ってくるなり！！」

「お名前は？」

「何故貴様に言わねばならん」

「言わないところす」

「麟様、面倒になってきてますね」

「そりゃなるっつーの。名前は？」

「ピアジオだ」

「はい。じゃあね。しばらくしたら開放するから。あ、そうそう、今までやってきた悪い事は？つまみ食い？」

「だれがするか！そんなこと！！」

「ウソです」

「その年でつまみ食いしておかあちゃんに怒られてんの？」

「してない！怒られてない！！」

「ウソです」

「ウソだとしてもお前らには何も関係ないだろ！！」

「ソウです」

「じゃあ帰れよ！！」

「じゃあね☆」

「いけ、ピカチュウ！ウサイン・ボルトだ！」

「あなたはクレイン議員ですか？」

「違う」

「ではあなたが議員の間にやってきた悪事はなんですか？」

「俺が議員になったばかりの時、議会で横に寝ている奴が居たから起こしたが、そいつはいけなかったらしい」

「あなたが議員になって得をした事は何ですか？」

「タバコと酒を買う金が増えたな」

「では議員になって損をした事は？」

「タバコを吸う時間も酒を飲む時間も無い」

「悪事を働いている議員を教えてください」

「ジェスト、ゲーデル、スティン、ソーゴ、クレイン、ウェンツ、ゼン、レーノ辺りに良くない噂を聞くが、生憎俺は自分の周りだけで精一杯だ。他を見てる時間なんか無い」

「そうですか、ありがとうございました。あなたのお名前は？」

「ジョン・スミスだ」

「ありふれた名だ。忘れた」

「おいおい」

「失敬!!」

「うわぁ、出た!!」

「あなたのお名前なんですか!?」

「フィード・ゼンだ!か、金ならいくらでも出すから助けてくれ!!」

「だから殺しもし無ければ拷問もしないって言ってんじゃん。あれ?言ってなかったっけ?まあいいや。今のは俺の質問に答えたらっていう前提条件があるから。で、議員になってから今までどんな悪事を働いてきた?」

「わ、私は悪事など」

とりあえず机を蹴り割る。

「ひ、ひぃ！？」

「どんな悪事を働いてきた？」

「賄賂や職権乱用です」

「それで全部？」

「は、はい」

「茶々丸？」

「ウソです」

「はぁ～ん……おいハゲ、俺にウソついていいと思ってるの？霧にすんぞ？」

「ご、ごごごめんなさい！！」

「ごめんはいいんだよ、何やったんだ？」

「は、はい、あの、その、賄賂とかを、受け取ったり？」

「ほぉ、賄賂！いくらほど？」

「その、５万ドラクマほど」

「はぁ、安いねぇ。誰から？」

「クレインから」

「名前はクレインなのに賄賂はアゲインってか?やかましいわｗｗｗ」

「おっしゃる通りで」

「あぁ、あと半日もしたら解放するからまってな」

「あ、ありがとうございます！」

こくみんのみなさんへ、対処はまかせた。

「貴様ぁぁあぁあああ！！！」

「出やがったな邪神め！！わしを誰だと思っている！！」

「知るか！ぶっ殺してやる！！」

「高校・大学と成績は一番で卒業した。
大学では魔法芸術部のキャプテンをつとめ…
社会に出てからも　みんなから慕われ
尊敬されたからこそ政治家になれた…

旧世界に１０００坪の別荘も持っている…
２５歳年下の美人モデルを妻にした…

税金だって、他人の５０倍は払っている！
どんな敵だろうとわしはぶちのめしてきた…
いずれオスティアの支配者にもなれる！
わしは…

ウィルソン・ジェスト元老院議員だぞーーーーーーッ」

「で、賄収はいくらほどで？」

「な、なななんのことだ？まったたたたくわかわかわからんなぁ」

「ＣＤ飛んでんぞ、デブ」

「賄賂などとクソ汚らわしい事わしがする訳がないじゃないか」

「そっか、賄賂はしないよな。するわけないもんな。でも兵団に渡してたあの封筒は何だったのか」

「き、貴様！なぜわしが不正を働いてそれをもみ消すために第８部隊の兵長に１２万ドラクマを手渡した事を知っているのだ！！」

「ふっふっふ、俺にわからないことなど無い……」

「じゃ、じゃあわしが支持を得るために愚民どもに金を配り歩いた事も……」

「ふふはははふひひｗｗｗ」

「悪魔と契約して気に入らん議員を襲わせたことも……」

「んびゅひゅいｗｗｗ」

「８歳の頃から今まで魔法を使って覗きをしていた事も……全部知っているというのか！！！」

「……強く生きなさい」

生放送しといて言う事じゃないけど。

とまあこんな調子で議員からかい巡りの旅を満喫していた訳だが、とうとう最後の部屋になった。

そして都合の良い事に、この部屋にいるのがクレイン議員だ。やったＮＥ☆

『衝撃です！！なんとあの似非雰囲気イケメン議員のゼン議員がかつらだったとは！！むせび泣くその姿を見てはどうも責められません！！そして遂に邪神の本命、クレイン議員の部屋の前に今到着したようです！！その心境を伺ってみたいのですが、どうにも画面越しだと伝わっているのかわかりません！』

「ニュースなのか実況なのかわかんないよね。やあやあメセンブリ

ーナの諸君、なんか残念な議員がいっぱいいたよね？うふふ。まあがんばって？」

『ああ！！麟様！！サイン下さい！！じゃねえわ、いっけね。今の心境を！！』

「んー、別に今回椅子にふんぞり返って出兵させろっつった議員がクレインって訳じゃねえから特に何もしないよ？ただ、日本をなめるなと伝えたい一心です。『転移』」

『なるほど、日本というのは旧世界の地名ですか？あとコレサインですよね！！ありがとうございます！！！ヤッホーーー！！』

「旧世界の国の一つだよ。俺の本拠地でもある。そのサイン、大事にしろよ？一年ごとにデザインが微妙に変わってるから」

『ありがとうございます！！私は麟様を応援しますよ！』

「サンキュー！チュィッ！」

『キャー！！（チュィッ？）』

「田のモー！！！と扉を首領（ドン）タコス」

「お、おおおそかったじゃないか！おじけじけづいたのかと思ったぞ！」

「勇ましいな。じゃあさっそく質問だ。右の小指と左の小指、どっちの方が無くなったら困る？」

「へ？」

「せやから落とすんやったらどっちにするか聞いとるんじゃろうがワレぇ！！！それとも手首からいったろかクソが！！」

「ひ、ひぃぃいいい！！ご勘弁を！ご勘弁を☆」

「というのは冗だ……何だその星！！」

「遊び心です！すんません！すんまそん！」

「なめやがって。両手の親指行くわ」

「ひぃいいい！！」

「で、何でじじいが謝ってもいいよね？って聞いたらダメって言ったの？」

「そ、そんな事言ってな……」

「ウソです」

「アウトー！」

ブチブチィ！！

「ぎゃあああああ！！！」

いや、別にグロい要素は何もないぜ？髪を1／3ほど抜いただけ。

「髪全部抜けたら攻守交代だから。あ、わかってる？今そっちが守備ね。んで、何で謝ったらダメなの？」

「そ、それは、その、覚えてないで……」

「ウソです」

ブチリチチィ！！

「じゅべんばらびゃびゅい！！」

「あと一掴みの命だけど、もう一回だけ聞くわ。何で謝らないの？バカなの？死ぬの？」

「麟様、「何故謝るなと言った？」から「何故謝らないのか？」になってます」

「いっしょだよ。いっしょ。で、何で？」

「ぜー、はー……きゅ、旧世界人ごときに頭を下げるのが癪だったからからです」

「で？今そんな旧世界人に頭下げてるけどどんな気持ち？歯牙にもかけないような相手に見下されてどんな気持ち？ねえねえ、どぉん

なきぃもちぃ～～～？？？？？」

「は、はい、当然のことで……」

「はーん、ふぅーん……」

「デデーン『クレイン、アウトー』」

「え！？ちょ、ちょっと待ってや！おかしいやん！！今笑ってへんだやん！！」

ブチチリンチ！！

「ずべっづなぁあっぁあああん！！！」

「あ、そうそう、ツル・ペカリーナさん、出兵命令出した奴誰か知らない？」

「ひー、ひいいー」

「おい、ハゲ」

「だ、誰のせいだと！！」

「え？俺のせいって言いたいの？……心外」

「え！？えぇ！？」

「そんな事いいから、大戦で旧世界に出兵命令出したの誰よ。耳なし芳一にすんぞ」

「な、何かはわからないけど凄く怖い話に聞こえる……
ポロネ・ジョバン議員です。奴はもう死にました」

「茶々丸？」

「本当です」

「はぁーん。あ、そうそう、二度と旧世界に上から目線で物言ってくるんじゃねぇぞ。次やったら星ごと叩き割るからな」

「は、はいぃぃいい！！」

「じゃあいったん戻るわ。もうすぐ解放するから待ってな」

「ありがとうございます！！」

「うわっ、散らかすなよ！お前髪無さ過ぎじゃね？」

「ひぃいいいいいいいっいいいい」

「おいコラ、インタビュー1人で足りんのか？もうすぐアンタの居る広場に議員全員転移させるけど（ちなみに議員全員で韻を踏む気

は無かった）」

『えぇ！？本当ですか！！ＡＤ判！アンタビューアーを連れてきて下さい！」

『アリアドネーパパラッチ軍ですね！了解です！！』

「うわぁ……。ファイト。あと１０分くらいで送るから」

『了解です！！』

「ちーちゃん、親御さんの敵、もう死んでるってさ」

「そうなんや……いや、もうかまへんねん。ありがとうな、麟さん」

「今くらいは、泣いていいんだぜ？」

「いや、別にそんな空気でもないしな。まあ気が向いたら胸貸してや」

「おうよ！」

「麟様、そろそろ１０分です」

「あ、マジで？『強制転移』」

とにかく議員の皆さんを転移で押しだす。

「おーおー、集ってる集ってる。すっげ、砂糖に群がる蟻が如し」

「これは……これは……」

「あ、いっけね、クルトントンだけ置きっぱなしやん。『転移』」

「麟様ったらおちゃめなんですから」

「てへっ☆」

「あ、半分ほどの議員が連行されとるで」

「なんか1人だけ凄惨な自爆してたからなぁ」

「他は麟さんと茶々丸はんがハチの巣にしとったけどな」

「やめてや、鼻が伸びるｗｗｗｗ」

「いや、全力で褒めてない。天狗になる必要全くあらへん」

いらない家具捨てたら部屋に変なスペース出来る現象みたいなんが起こって大混乱したらおもろいよな。

０７３　世界最速、暴く。（後書き）

見直しは投げ捨てるもの……

泣きながら積みゲーと化していた東方神霊廟をクリアした紅の豚野郎です。

何か半年くらい書いてない気分でした。うふふ。

それはそうと、いつも通り強引な終わらせ方で安心しました。

と言いつつも、実はこれはまだ駆けだしに過ぎなく、新婚旅行は始まったばかりです。

時速３００ｋｍ以上で飛ぶ訳だし、ネタバレでも何でもないけどちうたんのアーティファクトと併用したら時速５００ｋｍほども可能なんで回る順番とかどうでもいいかな。

では、今回もありがとうございました！

０７４　世界最速、メメタァ！（前書き）

モニターがほしい。

０７４　世界最速、メメタァ！

「この小説をお気に入り登録している人はこんな小説も読んでいます！　の所に俺の話が載ってるところ、一度でいいから見てみたい」

「そんな事あとがきとかで言ってください、燐様！！」

「にゃあああああああああん！！麟だよーーー！！！！！」

４日ぶりのテンションだよ！！！

「今日はひどくネタの匂いがしますね」

「前回（？）までシリアスばっかりだったからな」

「え？どこ？どこがシリアス？」

「あ、ごめんエヴァ、これシリアルだった。いっただっきまあああああああああああああああああああん？」

「こ　れ　は　ひ　ど　い」

「さて、情熱だけで突き進むのもアリかとは思ったが、さすがに新婚旅行中なんでどっか行こうず」

「ちょっと燐！何てことしてくれたんですか！！」

「にゃーん」

「麟！！」

「なんだようっせぇなぁ！！どうやって乗ってきたんだよ！ギャグだからって結界通り抜けるな！！」

「いや、なんかそんなそういうアレは今はいいんですよ！何してくれたんですか！！」

「いいじゃん、半分以上残ってたんだから。腐ったミカン率低くてさ」

「ああ、私の計画が……」

「あ、やっべ、こいつ頼んでも無いのに過去語りだすつもりだぜ。追い出せ追い出せ」

「下衆いなぁ、先生」

「惚れた弱みか？弱みなのか！？」

「なんでエヴァが嬉しそうなんだよ」

「あれは私がまだ「赤い羽根共同募ｋ……じゃない、「紅き翼」と共に旅をして……」

「泣いた。『転移』」

「ぬわーーっっ！！」

ティウンティウンティウンティウン……

「さて、どこ行こうか。と言ってもこことシラナミ以外はオスティアとアリアドネーくらいしか知らんのよ。もしオスティアで戦闘になったら確実に最後の一枚も落っこちるし、アリアドネーでいいか」

「ってか私ら一応学生だけど、いいの？」

「あ、俺も先生だから良くないわ。ちょっとゲート閉じるか」

「えぇ！？ホンマに言うてる！？」

「うん。時間の流れが違うらしくな。接続（リンク）を切ったら同期（リンク）が切れるってさ。詳しい事はしらん。」

「そんな個人的な理由で国を傾けるのってお兄ちゃんくらいだと思うよ。素敵！」

「特におかしいと思わない私がおかしいのか？」

「いや、そんなもんでっしゃろ～」

「つーわけで、『俺スーパーシャットアウト！』」

視覚効果的な意味でめっちゃ光ってみたり各地のゲートに雷を落としたりしたけど、効果はいたってシンプル。

地球と魔法世界が行き来出来なくなるだけ。

でも何か時間の進みがどうとかで、あっちとこっちの時間がずれ…

…もう原作嫁。

さーて、アリアドネー行くか。

ゴウン……ゴウン……

とかいう音はしないけど、気持ち的にね。

「時は飛ばず、もう夕食時です」

「誰に話しているのでしょうか？」

「男には、わからずとも話さねばならぬ時があるのよ。あと、俺は完全に忘れてたが、俺って男の娘だったんだよな。あまりに生かせてないからそんな設定あったのも忘れてたわ」

「メタの匂いがするなぁ……」

「さて、晩御飯作るか」

「私が作りますよ？」

「いいから休んでおきなさい。というか、正直薄味の和食はもう食べれないんです。さっきポテトチップス食べちゃったから」

「じゃあお願いしますね」

「任せな」

おにくを　やきます。

じゅーじゅー……

おにくが、やけました。

「資源は無限に無いけれど、お金はほぼ無限。だから食事も豪華なんです。今日の食事は森で拾ったどンぐりを砕いて煮た奴を窓から捨てて肉を焼いてみました」

「そのどんぐりの件（くだり）って必要あったのか？」

「おお、ちうたん。待ち切れなかったか？」

「いや、千草さんを探してて な」

「あぁ、見てないわ。見てない。何の話？」

「（何で2回言ったんだ?）いや、まあいいじゃねえか。頑張って食事作ってくれよ」

「今晩の事か?」

「ゴブゥア!!!おま、わかってても言うなよ!!」

「え?え?なんだ、俺の勘も大したもんだじぇ!」

「っ!!!っ!!!」

バトム!
→
扉を閉めた音

ん〜?

「ん〜?」

晩飯のネタくらいで何であんな騒ぎ立てるんだ?

というのは白々しすぎますかねぇ、ンフフ。

「いただきまーす」

「あれ？麟さんとエヴァちゃんのご飯、量少なくない？」

「見た目相応にしか食わないからな」

「昨日もしなかったっけ、こんな話」

「記憶にございますん」

「あるんかないんか……」

「無いアルヨ！」

「どっちだ！？」

「鉄板だなぁ……」

「あ、食事時ですが、今しがた電波が来たのでお伝えしますが、アリアドネーには明朝には着くそうです」

「おお、でかした茶々丸」

「いや、エヴァはんの船やおまへんの～？」

「実は茶々丸とレーダーの同期が取れるようになってるんだ」

「何その後付け設定」

「いや、ホント始めっから考えてたし！！今考えたわけちゃうし！！」

設定資料集には書いてないけど考えてたし！嘘だし！！

「それはそうと同期が取れるのは事実ですのでご安心ください」

「わぁい！！食事くらい静かに出来んのか貴様等！！」

「いや、麟さんが一番やかましいですやん」

「そやでー。麟さん食事くらい静かにしたらどうですの？」

「お前らどっちがどっちかわからんわ！！つっきーは語尾に『だっふんだ』をつけなくてもいいや」

「いいのか」

「いいんだよ。ごちそーさまあああ！！」

「いつのまに食い終わってんだよ先生、凄すぎだろ」

「世界最速は伊達じゃないぜ。最近世界最速ってサブタイでしか出てなかったからな」

「もう堪忍して……」

「エヴァ、甲板でバイク走らせる」

「うん、お兄ちゃん」

「ぶるるーん！ぶるるーん！！」

走り回った。

「な、なぁ、千草さん、やっぱり今晩、その……するんだよな？」

「そ、そうおすなぁ……やるん、ちゃうやろか」

食事の後、千草さんと会談する。
議題はその、アレだ。

「ど、どんな感じなんだよ」

「そんなんウチが聞きたいわ！」

「え？何々？そんな気になる？」

「そりゃ気になるだろ。だってお前、その、初めてなんだからさ……」

「そうやで。ウチだって結婚するまではちゃんと取っとくって決めとったから……」

「いやぁ～、青いねぇー。っつっても、私も昨日までは処女だったんだけど」

……朝く……和美!?

「「何でいる!?」」

「おお、純京都人でさえ標準語になるほどの衝撃!!そりゃ居るでしょ。ねえ、さよちゃん」

「いやぁ～、えへへー」

さよもか……!

「ま、こんな幸せそうな顔する程には良いって事だよ」

「い、良い……」

「う、ウチやっぱりまた今度でも……」

「ちょ、千草さん!ズルいぞ、アンタも一緒に来いよ!!」

「そうどすえー。千草はんも、もう覚悟決めたらどうおすか?聞いとったほど大きくもあらへんし、思てたより痛ないどす」

「んなこと言うたかて……月詠はん!?」

「俺モ居ルンダガ、モウイイカナ……」

「ホント思い出した頃に出てくるね、ゼロちゃん」

居たのか。存在感が薄くも無ければ目立たないキャラでもないのに

……

「ウッセェ。勝手ニシヤガレ」

「こうなるとエヴァにゃんと茶々丸さんが居ないのがむしろ不自然な気さえしてくるよね」

「あのお三方はバイクに乗って暴れてますよー」

「あ、ホント？」

「ってかお前ら、出て行け！！」

「やぁん！」

「ジャアナ」

「ニヒヒ、がんばってね☆」

「ほな失礼しますえー？」

「じゃあ健闘を祈りますえ」

「いや、千草さん、アンタは待て。残れ！」

「うぅ……」

「嫌なのか？」

「別に嫌やなんて……」

「じゃあもう覚悟を決めるしかないだろ」

「せやな。……うん」

ちなみに、この後先生の部屋に行ったらエヴァが居て何か毒気を抜かれた。

０７４　世界最速、メメタァ！（後書き）

いやぁ……いやぁ

やっぱり童貞なのでフルカットです。

どうやったらシリアスになるのか。こればかりは生まれもったものだと思います。

シリアスな体験をしたことがありませんからね。

いかなる状況もギャグにしか思えない。

そんな豚野郎です。

では、今回もありがとうございました！

０７５　世界最速、箒に乗りたがるもやっぱり箒よりバイクのほうがすき。（前）

あれ？昨日の夜投稿したつもりになってたデータが残ってたよ？
不思議だね。

０７５　世界最速、箒に乗りたがるもやっぱり箒よりバイクのほうがすき。

「あ〜ー、なんつーか、その、アンタ昨日凄かったぜ」

「千雨さんかて」

「「は、恥ずかしー」」

「あ、おっはよ、ちうちゃん、千草さん！」

「お！？お、おお」

「お、おはよーございますどす」

「まるで似非京都弁だよ？あ、は〜ん、そういう事かぁ〜？」

「う、うっせ！」

「なんだか今日はダイジェスト風味な日だな」

そんな、いまいち意味のわからない事を呟く俺は白波・A・R・麟。
ハーフなんだか何なんだかよくわからないし、自分が日本人かもわかっていない。
ま、一応人間のつもりだ。
で、この文体は心持ラノベ調のつもりだ。

「なっがいモノローグだな。どうせだれもこんなの求めて無いんだからいらないんだよ。実際擬音で『ドグチャ！』とか言っても、読んでる人には何が起こってるかわからんだろうが、俺にだって何がおこってるかわからんし」

「誰と話しているのですか？」

「これも定番だな」

「お約束かと思いまして」

「いや、その心遣いは良いと思うよ」

「ありがとうございます」

「全員いるね。じゃあ今日は、誰がしゃべってるのかわかるように名札を付けてもらう」

「名札？」

「茶々丸」

「はい。どうぞ、皆さん」

「あ、ありがとー」

「これどうすんの？」

麟「名札だから付けるんだよ。誰だお前」

和美「なるほど、こういうことね」

茶々丸「お兄ちゃん大好き？」

エヴァ「おいこら」

茶々丸「やってみたかったんです」

エヴァ「おい千雨、何故何もしゃべらん」

「いや、これどういうシステムなんだよ」

エヴァ「バカ、お前こんな所で常識人を気取るな。こんなもん付いたと思った時点で付いてるんだよ」

ちう「↑どういう事だ……」

かずみん「うお！逆に分かりにくい！！」

麟之助「おい、統一しろよ」

千雨「そういうお前が誰だよ」

霖之助「ながあめのすけ」

帰れ白髪「エヴァ」

麟「逆、逆」

千草「これどんな意味があるん？対面しとるし、名前も皆覚えとるさかい何の意味もあらへんような……」

月詠「何かしら考えあっての事やと思うんやけど、どないですのん？」

麟「さて、何だろうな。強いて言う事があるなら、別に何かに影響されてこうなったとかそういうアレじゃない」

チャチャゼロ「ソウナノカ」

エヴァ「お前、名前がカタカナ表記で無駄に長いんだから早くタンスの上に戻っとけ」

チャチャゼロ「ヒデエ」

「貴様ら、シラナミだな！？」

麟「おい誰だよこの名札付けてない奴」

茶々丸「申し訳ありません、お帰りいただけませんか」

「お帰りも何も、我々の領土だぞ！いったいここに何の用があって来た。そしてお前は何者だ」

茶々丸「↑こういう者です」

「あ、これはご丁寧に。私、アリアドネー魔法騎士団のレミィと申します。愛称ではなく本名ですのでお間違い無きよう願います。じゃなくって！！」

千雨「長いノリツッコミだなぁ」

茶々丸「どうぞ、どうせ使い捨てキャラでしょうが、名札を差し上げます」

レミゐ「これはどう……もう既に間違ってる！！！！！！？！？！？！！」

エヴァ「観光旅行だ。侵攻する気は無い」

レミ・ガイアール「↑そんな事より誰ですかこれ！！」

エヴァんのか？「知ら」

千雨「好き放題だな」

波バ「平カモーン！」

チャチャゼロ「イヤ、帰レヨ」

「とにかく、観光で来たんなら帰っていただけませんか？」

麟「おい、誰が名札外していいって言ったよ？」

千草「まだ続いてたんか……」

セラス「お待ちなさい」

レミィ「セラス総長！？」

セラス「その人たちの指名手配はもう解除されているわ」

千雨「そんな事より、既に名札を作ってきてる用意周到さがどうなんだ」

和美「ってか誰よ？」

セラス「挨拶が遅れたわね。私はセラス。アリアドネー魔法騎士団候補学校の総長よ。ここ、アリアドネーは学ぶ意志や意欲のある者はだれでも歓迎するわ。邪神だろうと、吸血鬼だろうとね」

麟「いや、僕別に学ぶ意志とか意欲とかそういうアレはなくて、ってか別に学ぶ事によって得るアレとか今さら無い感じだし、その、ぶっちゃけ勉強嫌い」

月詠「いや、麟さん先生ですやん。生徒の前で勉強否定とかええん？」

千雨「普通にダメだろ」

麟「いや、ぶっちゃけお前ら勝手に勉強すんだろ。したい奴はしろよ。俺はもういいや。まあそういう訳なんで」

エヴァ「お兄ちゃんが担任じゃなかったら誓って勉強しないよ」

千雨「あれ？先生って担任だっけ？なんかもう一個ちびっこいのが居たと思ったんだが。……？」

朝倉「ほら、ネギ君、ネギ君」

エヴァ「ん？ああ、そういうのも居たな」

一同「ＨＡＨＡＨＡ！」

千雨「いや、“一同”って何だよ！？」

月詠「……」

千草「どないしはったん、月詠はん？」

月詠「いや、そういえばウチ、学校って行った事無いなぁ思てまし

たんですわ」

セラス「あなた、学校行ってみたいの？」

月詠「い～や、全然？」

麟「ほな確実にお留守番組やの」

俺「ＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ！」

千雨「→いや誰だよ！？」

っぺーい！

あれ？箒（に乗った人）が飛んでる！？

「あれ箒やん？」

和美「え？あぁ、麟さん。名札はもういいの？」

「それはさっき終わったんだよ」

「確かに、ウチでは箒の乗り方も教えているわね」
ちなみにレミィは帰った。
「俺も乗ってみたいんですが」
「っていうか乗れないの？」
「むしろ箒に乗るとかどこ出展だよｗｗｗとか思ってた」
「なら入学しなさいな、シラナミ・リン」
「え？いや、ちょっと乗るだけでええんや。そんな入学とかいらんし」
「あぁ、そう？　コレットさん！」
「えぇっ！？セラス総長！？　わ、私なんぞに何のご用でしょうか！？」
「少し箒を貸していただけないかしら」
「はい、喜んで！」
「暑苦しいメスガキだなぁ」
「うわぁ……、初対面の子にひどい事言われたぁ」
「どうぞ、乗り方はご存知無いわよね？」

「え？いや、知ってるけど。何でか」

「ああ、そうなの？」

「うむ。『飛行！浮遊！箒よ飛べ！』」

ふわ……

　ふわ……

「え？浮いてるの？」

「足元、足元」

「あ、浮いてる。１ｃｍくらい」

「あなた、ひょっとして箒乗った事あるんじゃないの？」

「ない。『超加速』」

ぱひゅん！

うわ、この人こんだけしか飛べないんだ。
これは私よりも落ちこぼれじゃないかね？

「あなた、ひょっとして箒乗った事あるんじゃないの？」

え？何この反応！？ひょっとしてスゴイの？

「『超加速』」

パァン！！

「うわぁ！？」

「え、えぇ！？」

ってセラス総長！？アンタも驚くんかーい！？

「速いなあ、お兄ちゃん」

「え！？男の子なの！？」

「ん？ああ、そうだが？ついでに言うと、ここに居る奴は皆お兄ちゃんの嫁だ」

「というかコレットさん、あの人知らないの？」

「え！？もしかして超有名なお方だったりするんですか！？」

「まあ有名って言えば有名ね。なんたって彼は、あの『邪神』なんだから」

「『邪心』？」

「『邪神』」

「いやいや、無いでしょ。だって見るからに普通の女の子ですし」

でもセラス総長が出てくるくらいだしなぁ。なんかＶＩＰ待遇だし。

とか言ってたら、帰ってきた。

「あら、おかえりなさい。どうでした？」

「いらね。やっぱ俺は地面這って走るわ。何だ、メスガキ？あ、箒ありがとうございました」

「いえいえ、ご丁寧に。もしかして、邪神だったりしらっしゃいます？」

「しらっしゃいますって何だろう。そしてそう、俺こそかの有名なビッグアイドル、『白波・Ａ・Ｒ・麟』だじぇ。凄かろう。サインをやろう」

「いや別にありがとうございま……うわ、絵上手いなぁ！」

「コレットさん！あなた授業中に何……を……」

「げ、委員長！」

「り、りりりり麟様！？」

「あれ？委員長知り合い？」

「黙らっしゃい！！このお方をどなたと心得てますの！？かの超魔

法使い、ナギ様をも凌ぐと言われるあの『白波麟』様なのよ！！」

「あ、うん。聞いた」

ってか『ナギ様』って、あんたもナギ様ファンかよ。

「君も俺のファンか。サインをやろう」

「ひゃぁ！！あろい、ありがとうごじ、ございます！」

「なにこの生き物面白い」

「えへへ、うふふ」

「うわぁ、トリップしてる」

委員長って結構ミーハーだなぁ。

０７５　世界最速、箒に乗りたがるもやっぱり箒よりバイクのほうがすき。（後）

なんて中途半端な終わり方なんだ（驚愕）

新キャラの皆さんへ、

もう出てこないでください、お願いします。お願いします。

今だけで何人出てきてると思ってるんだよ。

何回チャチャゼロとつっきーの出番削ぐんだよ。

そんな日常です。
ここ最近、半ニートの分際で物凄く忙しいので更新は遅れ気味です。
そのくせ稼ぎは無茶苦茶少ない。
せめて一日丸ごと休めればいいんだけど。
もしくはモニターがあと一基あればいいんだけど。
今はパソコンの引き上げ時に備えてお客のモニターを狙っています。

あ、パソコン修理とか改造とか教室とかホームページ作成とかやってるんです。

でもパソコン屋にバイクは無縁も無縁。
趣味ですら乗る時間が無いです。

では、今回もありがとうございました。

０７６　世界最速、山なしオチなし意味なし。（前書き）

やおい

０７６　世界最速、山なしオチなし意味なし。

「勝負です、麟さん」

「なんだ棒から藪に」

「凄い絵面ですね！？」

「ちょっとコレットさん！あなたのような落ちこぼれが麟様に勝負だなんて……」

「委員長？」

「な、何ですか麟さま」

「俺、同級生の事落ちこぼれなんて言う子は嫌いだな……」

「っ！ご、ごめんなさい、コレットさん……」

「え！？あ、う、うん、いいよ。あんまり色んなこと出来ないのも本当だし」

「ちゃんと謝れる子は好きだぞ」

「り、麟様ぁ？」

ちょっと背伸びして頭を撫でたら倒れた。
いいかお前ら、これが撫でポらしいぞ。
ちなみに、今日こんなジゴロなのは、昨日ＨＤＤ整理してたら戦国

ランスが出てきたからだ。多分だ。

「で、何の勝負だっつってんだよこのメスブタ」

「……」

「気にするな。お兄ちゃんの発作みたいなもんだ」

「箒で競争です！」

「え？勝てると思ってるの？バカじゃないの？そんなんだから落ちこぼれって言われるんだよクズ」

「……ぐすっ」

「うわぁあああああああああん！！」

「何で麟さんが泣くんですかぁ！？」

「泣かれたらウザいから……ごめん。それはそうと、かなり絶望的に勝てる見込みないけど、本当にそういう、箒で飛んだりする勝負するの？俺かなりバイク乗りたい気分なんだけど」

ちなみに今この場に居るのは
俺、エヴァ、コレット、委員長（肌の黒い方）の４人だ。
セラス女史は多忙らしくどっかいった。
あの一番星がそう。

「バイク？単車の事ですか！？そんなん尚更勝てるわけないじゃないですか！！」

「いや、何やろーがお前の負けは揺るがないから。俺の勝つ可能性１９９６５５６８０％くらいあるから」

「レプレキア使ってバーストゲージ５時間くらい溜めないと見れないほどのパーセンテージだ！！！！」

やったことあんのかよ……

「何言ってるかわかんないですけど、とにかく絶対に勝てない。俺に勝つとか無いから。ことスピードに関して、そんな奴居ない。嫁ほったらかしてやる事でもない。はい論破」

「始めて論破厨凄いと思った」

「嫁ェェエえええええええ！？り、りり麟様、よ、嫁ってまさか、り、麟様のお嫁さんですか！？」

「うん。四捨五入して１０人ほどで新婚旅行中なんだよ」

「っきぃぃ一一一一一！！わ、私もお嫁さんにしてください！」

「キャラつかめきれてないから、もう少し巻数出てからな」

「？？？」

「何の話、お兄ちゃん？」

「え？いや、よくわからん」

「とにかく、もう少し時間がたてばお嫁さんにしてくれるんですか！？」

「あー、わからん。嫁にさせるさせないじゃなく、俺に惚れさせてみろ」

「麟様……、はい！」

「いい子だな」

よっしよっしと頭をなでるとまた気絶した。

「ちょろいもんだぜ」

「その綺麗な顔を吹っ飛ばしてやる！」

|？＝○　＜ちょろいもんだぜ

＞／＼

|¯＼

「→こんな体勢で撃つんだろ！？」

「だからそのユニコードでしか表示できない文字を使うのをやめないさい！！」

「うーうー！！」

「だめだ、この兄妹凄すぎてわけがわかんない……」

「コメット！！」

「コレットです」

「このカス！クズ！お前が意味の分からん事を言ったせいで、この行で１１１行目だよ！大当たりでも狙ってんのか！！」

「いや、もうなんかすんません」

「ま、許さんけどな。でも仕方ないから競争はしてやるよ。ハンデとして、俺は魔法詠唱一切無し、さらに生身で１０トンの重りを背負ってやるわ」

「いや、そんなバカな……」

「指輪さん指輪さん、最近ナチュラルに思い出したときすらあえて書かれない、さよより出番の少ない指輪さん、１０トンのベストになぁれ」

最近、よくわからない物にもなります、この指輪。
１０トンで普通に着れるサイズってどういう事。
初期設定ガン無視か。

「よいせ」

「どう見ても軽々着てるじゃないですか。１０トンも無いんでしょ

？あれ？身長縮みました？」

「もうわかって聞いてるとしか思えないけど足が埋まってるんだよ。なにここ、底なし沼？怖い」

「いや、さすがにそれは……無しでしょ」

「そうこうしてるうちに足首まで埋まってるんだけど。俺のちんこが埋まるまでにスタートしないと不戦敗にみなす」

「えぇ！？じゃああの校舎まで競争です！！いきますよ！」

「いらんいらん。勝手にスタートしろ。もいっこハンデだ」

「ぐぬぬ！」

そういうとすっ飛んでいった。

「お兄ちゃん？」

「うん」

無詠唱で転移した。

→

いつも『転移』って言ってるのは、言っとかないと何やったかわかんないだろ。

「とーちゃくー」

「わわ!?誰ですかあなたたち!?」

「そうです、私が変なおじさんです。あ変なおじさん」

「っしゃーついた!!」

「あら、ようこそコメットさん」

「な、ななんであなた達が先に居るんですか!?」

「目にも止まらぬスピードで駆け抜けてきた。あ、指輪よ戻れ」

「いやいやいや、ないでしょ!?それは無い!!」

「転移してきた」

「わー!!!ズルじゃないですか!!」

「やかましい!移動方法なんて指定してなかっただろーが!」

「いや、でも魔法使ってるじゃないですか!?」

「無詠唱だ。しかも走ってくるつったっけ?ん?」

「ぐぬぬ!!」

べろべろべーｗｗｗｗｗｗｗｗ
とかやってたら女生徒に声をかけられた。
あれ？女生徒しか……いない！？
「あ、あの、麟さんですよね？」
「そうだよ。でも人との絡みが面倒になってきたから行くね。『転移』」
「あぁ、そんなっ！」
「よいさ」
「おあぁ！？おい、急に目の前に出てくるなよ！」
「どめんちうたん、ちゅー一回で許されてやろう」
「許したからちゅーはいらねぇ」
「あぁん？
あれ？他の皆の者は？」
「あぁ、何か買い物だってよ」

「ふぅん。まあすぐ見つけれるし、いいけど」

「そんな事より、サブウーファーにアンプ繋いだらパソコン落ちて、作業が戻っちゃうんだけどかなり衝撃的じゃない？」

「だからパソコンの箱は開放するなって言っておいたんだよ。埃溜まりまくってるんじゃないか？」

「もうフィンなのか毛玉なのかわからないレベル」

「あるあるｗｗ」

「ウチら王妃やねんなぁ」

「そう言えばそうですねー」

「そうどすなぁ～」

「あべし！」

「さよちゃん何やってんの？」

「壁を通り抜けようと思って」

「幽霊の時の癖どすか」

「いやぁ～、と言っても、今も幽霊なんですけどね」

なんて、お嫁さん- sでウィンドウショッピング（別名冷やかし）してると、急に月詠さんが立ち止まった。

「？　どったの、月詠さん？」

「……ウチらに何か御用どすか、お兄さんがた？」

月詠さんに合わせて振り返ってみると、ガラの悪そうな男達が４人。一人は大柄でハゲ、その後ろに３人の男が控えていた。

「アンタら、白波麟の嫁さん達だよな？」

ハゲが口を開いた。

「ｓｉｄｅ　俺」

「何言ってんだ先生？」

「いや、ホラ、そういう気分だったんだよ」

「？」

「なんかこっちの方にみんなが居るような気がする」

路地をうろうろうろうろんとしてると、何やら人だかりが出来て騒がしい。

「頼むよ。このためにわざわざオスティアから休暇貰ってアリアドネーまで来たんだぜ」

「そんな、困ります……」

ペロ……この声は……青酸カリ！？
いや、このアーモンド臭……間違いない、かずみんだ！

「おうおう、どうしやがったてめえら！　ちょ、どいて。身長低くてイマイチ見えにくいのは仕方ないけど」

と人を押しのけて騒ぎの中心に躍り出た。

「セイフォー☆サタデー☆ナイトフィーバー！！」

左手は腰、右手は天を貫くドリルだ。

「あ、麟さん！丁度良かった！！」

「おう、かずみん。どうしたんでい」

「し、白波麟！」

「本物だよな！？」

「だれこのギニュー特戦隊。ギニュー何処いったんだよ」

「リクーム！」

「リクーム！」

「ザーボン！」

「リクーム！」

「ワイリー
ーーー！！！」

「リクーム！」

「M字ハゲ！」

「リクーム！」

「クリーム！」

「えなりか○ずき！」

「完成したところ初めて見た」

「いや、どこだよ。どこで完成してんだよ。完成してねえよ。ワイリーって誰だよ。ザーボンはギニュー特戦隊じゃないだろ。そもそも特戦隊リクームしか出てないだろ。リクーム何回出てくるつもりだよ。M字ハゲって本名ですらないじゃないか。このメンバーにも特戦隊にもM字ハゲの奴なんかいねえだろ。フサフサとモヒカンとハゲだけじゃねえか。あと一回クリームって言ったよな。クリーム

って、ソニックに出てくるあのウサギの隣で浮いてるちっさい奴だよな。何しに来た。それにえなり○ずきって最早実在の人物じゃねえか。せめてフィクションの中から出せよ、訴えられるぞ。だいたい、その○で名前の所隠せてないし。どういう意味があったんだ、その○」

「うわ、こんな長い突っ込み初めて見た」

「私もこんな長い突っ込み初めてしたわ」

「ちうたんは普段ボケ要因だしね」

「いや、ねえ。ねえわ」

「白波麟！！」

あ、忘れてた。

「いや、白波麟さん！！」

「さん？」

ハゲにも慕われる俺って凄くない？

肛門が

。→○

にならないように頑張るしかないんだよな。

「サインください！！！」

「俺も頼んます！」

「え？　あぁ、ファンの人か。どこに書く？」

「お、俺は色紙持ってきました！！」

「新品のTシャツ持ってきました！！」

「子分のトサカを持ってきました！！」

「子分のチンとピラを持ってきました！！」

「「「「わぁい！！！」」」」

「ごめん、どこに書くって？」

「俺はこの色紙に……」

「ほいさっさ」

懐からペンを出してさらさらりと書いてあげる。

「うぇっほうぃ！ありがとうございますｗｗｗｗありがとうございますｗｗｗｗｗ」

「お、俺はこのTシャツにお願いします！」

「よかろう」

ぬるぬるとマーカーでサインを書く。

ついでに水墨画っぽい竹の絵も描いておく。
紳士。

「ィヤッホーゥ！！」

逸見真理夫か。

「おい、ピラ！超オシャレじゃねえか！！」

「へへへ」

「じゃあ俺はこのヘルメットに頼んます！」

「よいせ」

「旧世界のヘルメットじゃねえか！どうしたんだ！？」

「へへ、骨董屋でな」

「ほれ、書いた」

「ざっす！」

「（ざっす？ざっくの友達か？ざっくって誰だ？）うん。……うん。
そこのハゲは？」

「ハゲ……俺は別にアンタのファンじゃねえけど、ママに頼まれた
からこの色紙にサインくれよ」

「へいほ。『白波麟　ママへ』どや」

「すまねえな」

「いいって事よ。これからも白波をよろしくね。ママには白波ワッペンもあげよう」

「ありがとうございましたー！」

「応援してやす！！」

「いや、凄いナンパだったな」

「いや、ナンパやあらへんだやん」

「さようか」

「さよどすー」

「呼びましたー？」

「お後が宜しいようで」

「……よろしいのか？」

０７６　世界最速、山なしオチなし意味なし。（後書き）

ねんがんのモニターを手に入れたぞ！！

と言うわけで、モニターが入ってきたので、少し更新速度が上がるかもしれません。
あるいは、あがるといいなと思っています。

最近めっきり更新速度が落ちたからなぁ。

では、今回もありがとうございました。
豚野郎でした。

０７７　世界最速の嫁さんとバイクに乗りたい。（前書き）

耳の裏にニキビが出来てました。
もう意味がわからない。

ちなみにバイクにライドしてる場所は甲板です。

077　世界最速の嫁さんとバイクに乗りたい。

「為せば成る、何事も」

「何か抜けてるけど急にどうしたんだ？」

「どうしたもこうしたもあるかっつーの！俺らアレよ！？新婚旅行よ！？もっと嬉し恥ずかしな素敵イベントが事あるごとにゴロゴロしとるべきやん？それが何？この、何？」

「いや、何がだよ」

「だから、こういうのどかな山村とかいらねえんだよ！俺はじっとしてるのが嫌いなんだよ！！」

「ＡＤＨＤか。ＡＤＨＤなんだな」

「なんだけどな」

「麟さーん、これどうやって運転するんですかー？」

「ロータリー式っつって踏んだら変速するわ！エヴァに聞け！！」

「ロリータ式？」

「いや、確かにロリコンだけど、でも俺も見た目ロリっ子じゃん。だからなんつーか、その、そういうアレじゃないんだよ」

「いや、それこそ暇なら教えて来いよ」

「……せやな」

「わはははははー！」

「ワオ！アブナーイ！」

「お兄ちゃんファービーみたいな声出してどうしたの？」

「モルスァ」

「ウチ、一回でええからファービーを電子レンジに入れてみたかったんどす～？」

――コッカドゥルd『ヴォォォオオン（電子レンジとファービーが反応しあって発火した時のなんか凄い音）』プスブス……――

「ようつーべを見ておきなさい」

「はぁい」

「さて……」

と、ポケットからタバコを取り出して火をつける。
ちなみにこのタバコ、多分前回この船を出した時（昔まだ魔法世界で遊んでた頃だからかなり前）に落としてた奴だ。お得。

「臭マズッ！！」

光速で捨てた。

「麟ちゃんにバイクの乗り方を教えてもらいたい奴はどいつだ！？」

「はいはーい！麟さん！私乗りたいです！」

「じゃあそのカブから降りて」

「はい」

カブを指輪に戻してもう一回、５台バイクを出す。

おなじみＮＳＲ８０、ＡＰＥ５０、ＮＳ２５０Ｒ、リード９０に、

今回新顔のドラッグスター４００さんの登場だ。

「エヴァはＮＳＲ、さよはＡＰＥ、つっきーはＮＳ、茶々丸はドラスタ（ドライバーズスタンド）、俺はリードだ」

「「はーい」」

「えいぷってどれですか？」

「それ」

「えぬえすってどれどすか～？」

「あれ」

「ドラッグスターってどれでしょうか」

「それは消去法でわかるだろ」

「ＮＳＲってどれー？」

「あの太陽がＮＳＲだ」

「リード「言わせねえよ」」

「じゃあ自由に乗ったりして。つっきーとさよはリターン式は乗った事無いからこっちゃこい」

「はーい」

００８の時みたいにさよとつっきーに乗り方を教えて、実践してもらう。

ちなみに、練習の時は二人ともエイプを使ったよ。いきなりＮＳに乗せるとか正気じゃない。

つっきーもさよも、けっこうな速さで上達した。

んで、さよがＮＳを気に入って放さない。

「あはははははー！」

パァァアアン！パァァアアン！！

「あぁ、さよさん、そんなに飛ばすと危ないですよ」

ドッドッドッドッドッ

「ウチこれ結構気に入りましたわー」

べべべべべべんべべべべべべべん

「追いつかない。みんな速く走りすぎだと思うの、俺」

ぶぅぇえええええええええええん

「頑張って、お兄ちゃん！」

パァアン！パァアアン！！

「うるせー！俺の頑張りで直進が速くなるならいくらでも頑張るわ！」

ぶぅぅぇぅぇぅぇぅぇぅぇえええええぅぇっぅぇｗｗｗｗｗｗ

「あれ？このエンジン腐ってる。不思議！」

「はい、じゃ、みんなバイクは完璧に乗れるね。良かったね。超俺のおかげだね。崇めよ。そして鉄の掟２ヶ条と豆腐の掟３ヶ条は守ってもらうよ」

白波式単車の鉄の掟

1. ヘルメット、長袖、長ズボン、グローブは絶対。フルフェイス推奨

2. 公道では道路交通法優先。緊急時は緊急度合いによって。

豆腐の掟

1. わからないことがあったら聞く

2. 転んでも泣かない

3. 公道で膝を擦ろうとしない

とかこんな感じ。投げやり。

「オイ、ニイサン」

「あぁ？何だよクソ人形」

「御主人ガ呼ンデタゼ」

「本当ですか！？ありがとうございます、チャチャゼロ様」

「アア、構ワネエヨ」

「調子に乗んなよ」

「ニイサン躁病ダロ」

「呼んだかい、ＭＹ　ｓｕｉｔｅ　ｌｉｔｔｌｅ　ｓｉｓｔｅｒ」

「ｓｗｅｅｔじゃないんだ。晩御飯どうする？」

「あれ？もうそんな時間？」

「魔法世界は見るものが全くってくらい無いからね。四日目にしてみんな飽きが来てるよ」

「俺はむしろ４日も経ってた事におどろきが鬼なった」

「で、晩御飯は？」

「茶々丸に任せた」

「負かされました」

「？？」

「任されました」

「うｎ」

晩御飯はみその鯖煮でした。

間違えた。

鮭の塩焼きでした。

０７７　世界最速の嫁さんとバイクに乗りたい。（後書き）

※水麗様にリクエストいただきました。

ＹＡＭＡＨＡ　ドラッグスター４００

３９９ｃｃ
Ｖ２
３０ＰＳ／７，５００ｒｐｍ

正直に言うと、ＹＡＭＡＨＡは完全に射程圏外でした。
いえ、乗った事はあるんですが、僕の友人が熱心なＹＡＭＡＨＡ信者で、尚且ついつもジムカーナにしろサーキットにしろ妙にタイムが近く、良く言えばライバル、悪く言えば邪魔者、本心は目の上のたんこぶのような野郎で、僕のヤマハ離れは確実にそいつのせいです。
僕がＮＳＲを買っらＹＳＲを買うし（いや、ＴＺＲかＲＺ買えよと思いました）、リードを買った時も、何のアピールか知らないけどＪＯＧなんか買ってきてボアアップやらビックキャブやらで速度に差を出してどや顔してくるもんだから９０エンジンに積み替えてポート加工したのもいい思い出です。無駄金使わせやがって。
とはいえ、ドラッグスターですが、疲労感の少ないライディングポジションに、公道走行に支障の無い巡航速度（４００ｃｃで支障があったら悲劇ですが）、アメリカンにしては高いコーナリング性能を併せ持つ、ナイスバイクです。
問題といったら、地味に乗りにくいタンデムシートでしょうか。あんまり２人乗り向けじゃない感じです。タンデムステップを探しました。

本来はあとがきを書くつもりだったんですが、そのＹＡＭＡＨＡ乗りのバカから、唐突にアポイントメント無しで「今からいくわ」とか連絡があったので少しだけそいつのことを書きます。ちなみに言ったらすぐに電話を切りやがりました。びっくりだわ。

その、大たｎ……ゲフンゲフン、仮にＯとしますが、熱心なＹＡＭＡＨＡ信者であると同時に、とてつもない下ネタ製造機で、歩く下半身とすら呼ばれていました。（僕が呼んでいます）

生まれてから今まで金に困った事が無いのか、前はレクサスＥ３に、今はプリウスに乗っています。即金一回払いです。死ねばいいのに。

しかもイケメンです。削れたらいいのに。

さらに若干ホモです。らめぇ！！

さて、あとがきですね。うん、あとがき。

ぶっちゃけ、別にそこまでバイクの知識があるわけでもないし、バイクだけで書くことってそれほど無かったんです。

せめてもう少しバイクに詳しくなってから書くべきだったと思わなくもないです。

それはそうと、生活リズムが終わってます。

朝日が昇れば眠くなる。

人是ヲニヰトト呼ブ。

人並みの　生活環境　希う（こいねが）　夕方起きて　明け方眠る

そんな感じです。

とはいっても、ガチニートではなく、かといってネオニートでもないんですが。

では、別におっぱいよりちっぱい派の僕の生活環境なんて下水を食用油に転用する技術と衛生基準の１京倍どうでもいいことのはずなんでここいらで切り上げます。

今回もありがとうございました。

０７８　世界最遅の更新速度。（前書き）

モニター買ったくらいで更新速度上がるかっつーの。
大阪プロレスはごくまれに見るくらいです。

０７８　世界最遅の更新速度。

「俺は気付いてしまったんだ！」

「「「なんだってー」」」

ＭＭＲ（マンガとマンドラゴラの部屋　Ｍａｇａｚｉｎｅ　＆ａｍｐ；　Ｍａｎｄｒａｋｅ－ｓ　Ｒｏｏｍ）からこんにちは。こちらは地上２８ｍの船室です。

「お前らの誰かが金持ちなら俺はヒモだったんだろうな」

「……」

「そうやろうね」

「……私一応元貴族だけど」

「シラナミ達です」

「何が？」

「っつーかお前ら仲がいいのはいい事だけど一気に出てくるなよ。誰だどれかわかんなくなるだろ。また名札付けさせるぞ。めっちゃ楽やってんぞ」

「いや、知らんがな」

「明日あたり帰る」

「そうだねー」

実はもう2週間ほど魔法世界にいたんだ。でも特筆する事なんて何もなかった。しばらく来ないわ。

「何かイマイチだったよなぁ」

「ホストがそんなんでいいのかよ」

「良くないから帰ったらデートに行きます。当然一人づつな。ちなみに順番はテキトーに決める。別に呼ばれた順番が遅かったからってどうこう言わないようにっつってんだろーが喧嘩すんなお前ら」

「いや、誰もしとらへんよ」

「私ら結構仲良いしね」

「そうどすな～」

「チャチャゼロさんに包丁投げを教えてもらいましたー」

「チャチャゼロェ・・・・」

「教エタゼ」フンス！

「うわ、誇らしげ！ウザゐ！」

「うざる？」

「うざぬ？」

「うざゐ！！」

「うざうぃ！」

「惜しい！！」

「うざヰ！」

「ベクトルが違う！！」

「うざゐ！」

「ハイ正解！！」

／射命丸！／／射命丸！／／射命丸！／

「クイズじゃないよ！クイズじゃないんですよ！！」

「じゃあ帰りまーす！そして帰るにあたって、封鎖したままだったゲートを開放します。『ゲート開放の魔法！ティティンプイプイ！』」

ティウンティウンティウン・・・・・・

「……開放できんのか、今ので」

「倒置法」

「今の魔法でゲートは開放される。一方、ロシアでは今の魔法が解放されるてもゲートは封鎖されている」

「ロシア式倒置法！？」

「意味がわからない」

「深読みできなくもないな」

「でも何も考えてないんだろ？」

「めっちゃ考えたし！」

「何を？」

「ぬらりひょんにする無断欠勤の言い訳」

「生徒に手を出したことについては？」

「「何を今さら」」

やっぱり俺、エヴァ、茶々丸の息の合いっぷりは不動だな。

「いや、出されといて言うのもアレだけど、いやいやいや」

「麟さんは永久不変の象徴だね」

「ぶれない男」　↑俺

「白波」　↑茶々丸

「麟」　↑エヴァ

「……

いや、分けて喋る必要ねえだろ」

もう帰るっつーから船室で適当にだべってると、朝倉が先生に質問した。

「結局、麟さんってどんくらい強いの？」

「オウフｗｗｗいわゆるストレートな質問キタコレですねｗｗｗ
おっとっとｗｗｗ�doctor『キタコレ』などとついネット用語がｗｗｗ
まあ拇者の場合強いとは言っても、いわゆる技術としての強さでなく
基礎能力の高さが強いちょっと変わり者ですのでｗｗｗパゥワーの影響がですねｗｗｗｗ
ドプフォｗｗｗつい非常識な強さが出てしまいましたｗｗｗいや失敬失敬ｗｗｗ
まあ強さの頂点としてのナギは純粋によく出来てるなと賞賛できますがｗｗｗ
私みたいに千歩上を行く見方をするとですねｗｗｗ武術使いのメタファーと
魔法使い至上主義のキッチュさを引き継いだ人物としてのですねｗｗｗ
ナギ・スプリングフィールドの方向性はですねｗｗｗｗ
フォカヌポウｗｗｗ拇者これではまるでナギファンみたいｗｗｗ
拇者はナギファンではござらんのでｗｗｗコポォ」

「いや、結局麟さんはどんくらい強いのよ」

「無茶苦茶強い。世界最強」

いや、世界最強は言いすぎじゃねえの？

「えべっさんより？」

「そらもう」

「くいしんぼう仮面より？」

「うむ」

「ヨーネル・サンダースより？」

「何で例えが全部大阪プロレスやねん！！お前ら見た事あらへんやろーが！」

「でも千草はんタコヤキーダのファンやで～」

「うわ、絶妙」

「ほ、ほっといてんか！！」

「……」

ビリーケン・キッドのファンってバレたくないな。

「俺はビリーケン・キッドのファンだけどな」

「……」

「どうしたんだよ、ちうたん」

「え、い、いや、何でもねえよ」

……顔ニヤけてねえかな？

０７８　世界最遅の更新速度。（後書き）

ソロ充代表、豚野郎ですこんにちは。

まず、更新が遅れた言い訳をします。
プライマリディスプレイの縦画面化に伴い、
真・東方縦画面化ツールというファッキングレイトなツールを導入した結果画面が見やすくなり、神霊廟Ｅｘをノーミスでクリアできてしまい、あまりの興奮に聖蓮船と地霊殿のＥＸも狂ったようにプレイしていました。
いかにクソなモニターを使っていたのかありありアリーヴェデルチとわかってしまう話ですね。

次は話が短い言い訳をします。
ピグライフにハマってしまいました。
鬼のようにすいかを収穫してます。

ええ、どっちもウソのような話なんですが、信じるか信じないかはあなた次第です。

さて、大阪プロレスの話でしたっけ？
ああ、いや、ホント特筆するようなことは何もないですね。
今日は８時まで残業コースなんで勝手にパソコンに入れたｏｐｅｒａで鬼のブラウジングです。

あと、昨日気付いたんですが、アクセス解析とかあるんですね。びっくりんぐです。
ほかの人の小説とか読んでた時、あとがきにＰＶとか書いてあって、何でプロモーションビデオの話が出るんだ？とか思ってたんですが、

これでしたか。
どうやら１１０万アクセスもしていただいてるようで、ありがとうございます。
あと、ランキングも貼り付けてみたのですが、最速の順位が分からなくてスクロールしてたらけっこう上の方にあってびっくるしました。
これも誤字を修正せず、見直しもせずにあっぷしても読んでくださる皆様のおかげです。
一位を取ってやろうなんて意欲は欠片もないです。

では、今回もありがとうございました。

０７９　世界最速、ホラーテイスト。（前書き）

いただいた感想は最新話掲載前後に返事させていただいてます。

079　世界最速、ホラーテイスト。

「ソロモンよ！私は帰ってきた！！」

「おお、久々の超無駄スキル「完全声真似」ですね」

波乱万丈とは程遠い新婚旅行、ＭＭを解体し2週間滞在した魔法世界、しかし旧世界では3日ほどしか経っていなかった。

疲労困憊なんてことはなく、平時と変わらない俺たちのポテンシャル、

そんな中、麻帆良に戻ってきた俺たちを待ち構えていたものとは！？

次回、第８０話『よしあきのあだ名がサナダムシになった～　Ｙｏｕ're　ｒｅａｌ　ｓｏｎ　ｏｆ　ａ　ｂｉｔｃｈ！！！』

バイクと魔法が交差したところで始まる物語は痴れている！

「おお、白波君！ちょうど良かった、ＭＭからの使者が我が物顔で居座っておるんじゃ。なんとかしてくれんか？」

なにこのじじい。人が気持ちよく次回予告してたら。

「おい、聞いておるのか？」

「？？　ａｈｈ，ｓｏｒｒｙ　ｔｅａ　ｂｒｅａｋ，ａｎｄ？（あ、ごめん、お茶飲んでた。で？）」

「じゃからＭＭの使者が……」

「ｏｋ，ｏｋａｙ，ｏｋａｙ　ａｎｄ　ｇｏｏｄ！　ｓｏ　ｗｈａｔ？（あ～ハイハイ、すごいすごい！だから？）」

「むきょおおおお！！！」

うわ、このじいさん死ぬんじゃね？

「あはは、その辺にしてやってくれないか？」

「あれ？タカミチミチは出張に行ってないんだ」

ヒゲメガネ大佐のお出ましだ。

「みんなが思ってるほど出張には行ってないんだよ」

「じゃあもう一回担任やれよクズ。それともクラス最ケツ記録更新しすぎて担任降ろされたか？」

「グボゥア！！」

「……マジ？」

「マジじゃ。勉学に秀でたものが教えるのにも秀でているかというと、そうでもなかった例じゃ」

「ゲボブウェア！！」

「おい、ヒゲメガネが完全にビジュアル的にアウトなんだけど。あ

すにゃんとかに絶対見せれない感じになってるんだけど！」

半ゲル状なんだけど！！

「やっと戻ってきましたか、近衛この……え……もん？」

学園町室に入ると３０代半ばっぽい奴がふんぞり返って座ってた。

「いいや、残念だったな！俺は白波麟だ。で？元ＭＭの方が何しに俺の縄張り（シマ）に？」

「近衛！こ、これはどういう事だ！？」

「ひょ？いやいや、白波君はウチの教員じゃが？」

「バカな！？邪神だぞ！正気か！！」

「おいおい無視か、寂しいねぇ？　ホラ、あっちでちょっとＯＨＡＮＡＳＨＩしようや、な？」

「おい、やめ、引き摺るな！おい！おかあちゃあああああああん！！」

「……」

「……」

「……」

「……帰れ。な？」

「そんな目で俺を見るなァぁぁぁあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

そういうと男は走って飛び出していった。

「何しにきたんだ、アレ」

「おおかた、麻帆良がＭＭからの独立宣言をしたのが気に入らんかったんじゃろ」

「ちっさい男やの」

「オーッス、てめぇら、２週間ぶり～☆あ、違ぇや。３日ぶり～。お前らにとって３日でも俺にとったら２週間だから。そこんとこ勘違いすんなよ」

でも心の中ではリアルにもっと離れてた気がする。

更新速度的な意味で。

「せんせーひさしぶりー！」

「うむ」

「おにいちゃーーーん！！！」

「うるせぇ！！ディープにもほどがあるフレンチキスすんぞ！！」

「アホです……」

「アホって言ったゆえのほーはアホでーす！このアホー！！」

「白波先生！ネギ先生は！？ネギ先生はいずこに！？」

「知るか！！と言いたいところだが、職員室に居る。まあすぐ解る」

などと、朝礼から1時間目の英語まで突貫のHR（ホームラン）で雑談しつつ場を濁し茶を濁すこと数分、ネギのアンチクショーが来た。

「みなさーん、おはようございまーす！」

「「「おはよーございまーす！！」」」

「みなさん元気ですねー」

よかった、長い間出て来てないが故にキャラがバグったりしなくて本当に良かった。

「今日は転校生を紹介しまーす！」

「えー誰ー！？」

「俺だ」

「お兄ちゃんだったか」

「暇を持て余した」

「神々の」

「「ヤイサホーーーーーーーーーーー！！！！！」」

「「「ずこーーーー」」」

「いや遊べよ」

「とまあ、俺のウルトラセンス溢れるスーパージョークはこの辺にして、入っておいで」

「もうきとりますえー」

「つっきーだ」

「どうも～。月詠言います。よろしゅう」

「席はあのへん。エヴァのとこらへん」

「はいな～？」

とことこと後ろの方にかけていくつっきー。

「あ、朝倉ぁ！！」

「ん？何さ？」

「な、何さって、朝倉が出張らない……だと！？」

「ホラ見な朝倉！ゆーなが押し付けがましい劇画タッチで衝撃を受けてるよ！！」

「っつっても、別に私ら初対面でもないしねぇ？」

「そうどすなぁ。私ら二人とも麟はんのお嫁さんですし～」

「お……」

「お嫁……」

「だと……！？」

「「「麟先生！？」」」

「あ？」

「本当なんですか！？」

「本当です。この淫行教師！！」

「何てこったい……」

「何かホント今さらだなぁ」

「あ、千雨はーん？」

「おいこっち見んじゃねえよ！私まで変人一味みたいに思われるだろうが。今まで通り教室の対角同士、和美と喋ってろよ」

「あれ？千雨ちゃん、今朝倉の事名前で？」

「い、言ってた！確かに言ってたよ！？」

「そら千雨はんも私らとおなうわっぷ！！」

「おい、言うな！……言うな！！」

「最早その反応だけで充分手遅れじゃないの？」

「うるせー！！」

「はぁ、じゃあ質問したけりゃすりゃいいよ」

ちなみに俺は解説に徹するよ。

「はい先生！！」

「パルスィ」

「誰！？　月詠さんはどこの出身なの？京都！？京都で引っ掛けてきたの！？」

「引っかけられました～」

→引っ掛けられる：引っ掛けられる事

「はいはーい！」

「ほい佐々木マッキー」

「このかとは知り合い？」

「お嬢様とは斬っても切れへん仲どすなぁ」

→斬っても切れない：多分ギャグ。地の果てみたいなギャグセンスだな。

「おい、貴様まだ諦めてなかったのか！？」

「あ、センパイ？安心してくださいな。ウチは剣技ならセンパイ一筋ですえ～？」

→ですえ：です。　『どすえ』という場合もあるが、実は京都の人

ってそこまで『どす』とか言わない。

「せ、センパイ？」

「同じ流派のセンパイなんどす～。なぁセンパ～イ？」

→同じ流派：多分、新興宗教ホンジャマカ教とかの同門。

「あ、ああ」

「せんせー」

「へイこのちゃん！」

「私もつっきーって呼んでええ？」

「お好きに呼んでください、お嬢様？」

→お嬢様：メイド喫茶に女性が行くとこう言われるらしい。

「あまりにナチュラルに言うもんだからスルーしてたけど、お嬢様ってのは？」

「ウチ、ホンマはめっちゃええとこの出やねん。せやから京都にいっぱいお手伝いさんとかがおって、そこの家系なんやね」

→ええとこの出：生まれが良い事。
家系：先祖代々とかそんなん。主に火の車になるのは家計。火車は火焔猫。

「へぇー、そう言えばそうだったわね」

→あすにゃん：神楽　坂明日菜。あれ？切るトコ間違えた？

「このかすげぇ！！」

「パネェ！」

「ハイハーイ！！」

「クーフォイ」

「穢れた血め！ってそうじゃないアル！月詠は強いアルか！？」

「うふふ、そらもう？」

→そらもう：そらもう強いで～　と続く。控えめかつ嫌味に肯定する時とかに使う。

「刃傷沙汰までは許すけど殺生沙汰は禁止な」

「当然アル」

「えぇ～、殺したらあきませんの？」

→殺したらあきませんの？：生身で出しっぱなしの刀をカチンカチンしてる。狂気。

「怖っ！！」

「目がマジじゃん！！」

「むむ、強者の目アル！」

「いや、狂者の目だろ」

キーンコーンカーンコーン

チャイムってめっちゃ便利やなぁ。

「じゃあお前らつっきーの事頼んだぞ。特に俺の嫁達。じゃあな。行くぞ、ネギ先生」

「あ、はい！」

「お前すっごい空気だったよなｗｗｗｗ」

「ひどっ！」

終礼

「きりーつ！あばよクソども！」

「「「さよーならー！」」」

「あークソ疲れたぁ～」

どうにも昼休みに菲がつっきーに仕掛けたらしく、見事な返り討ちにあっていた。
ワロスｗｗｗｗ
とはいかず、回復魔法をかけたり、おもっくそ切り傷入ってるのにどや顔で「峰打ちどす～」とかほざいてるつっきーを褒めたりして大変だった。

「麟先生！！」

「あ！？んだコラ！！」

「ひぃ！！」

「なんだネギか」

「だ、誰だと思ったんですか！？」

「あれ？お前知らないの？」

「何をですか？」

「ちょうど今くらいの、夕暮れ時、子供のような声で後ろから声を掛けられるんだよ。

『すいません……』

でも振り返ると誰も居ない。気のせいか？そう思いまた歩き出す。

『すいません……』

やっぱり、誰もいない……」

「あ、あの……」

「気味が悪くなった彼は少し駆け足になる。後ろを振り返っても、誰も居ない。

あれは自分の恐怖心が生んだ思い込みなんだ。あんな子供の声、はじめっからしなかった。

そう心の中で念じて、走る。

やがて自分の寮の前にたどり着く。いくつかの明かりはつき、賑やかな話し声も聞こえる。

子供の声は、もう、聞こえない。

あれは自分の思い込みだったんだ。と、彼は自らの恐怖心を振り払う意味も込めてもう一度、最後に振り返った。

やっぱり、だれも　いな　い」

「はっ、はぁっ、はぁ……ふぅ」

「寮に向けて歩き出すと胸元に何かがぶつかる感覚がした。

どん……

彼は何気なく下を向く。そしたら自分のみぞおちくらいの身長の、

血まみれの子供が

『なんで、返事してくれないんですか？』」

「ひゃあああああああああああああ！！！！！！！！！うわあああああああああああああああ！！！！！！！！！」

「彼は翌日、教室内で血まみれで倒れてた。

『あいさつはちゃんとしよう』

彼の机に血文字で書かれていた言葉だ。

子供は、横断歩道で友人に挨拶しようとしたところで、車に轢かれて死んだらしい。

それ以来、この話を聞いた奴の所に一週間以内に現れる」

「やだぁあああああ！！！な、何とか！！何とかしてくださいよ！！！！」

「お、おおお俺っちのと、ととと所にも来やがるつもりなんすかね！？どうなんすか！？」

「ま、嘘なんだけどな」

「あああああああ……え？」

「う……嘘？」

「それはまぁ、一週間以内にわかる事だ。で、何の用？」

「う、嘘なんですよね！！来ないんですよね！！？」

「さぁて、どーかなー」

「うわあああああああ！！！おしまいだぁあああああ！！！」

「ぬはははははｗｗｗｗｗ」

とか言ってネギをからかって遊んでた。

そしたら後ろの方からなにやらものすごい足音が聞こえる。削岩機みたいな音。

「アンタ何ネギをいじめてんのよ！！」

「うわ、出た！モンスターペアレント！！」

「誰がよ！！！」

「うわあああああん、アスナさあああああん！！！！」

「姉さぁあああああああああああん！！！！！」

「ちょ、どうしたのよ！ってかどうすればこんな事になんのよ！？」

「いやぁ、実はな……」

と、あすにゃんにもさっきの話をしてやる。

「な、ななな何よ、あああああんたそんなんでビビってた訳？」

「ひぃいいいいいい！！」

「あねさぁあああああん！！！！」

「な、その程度だろ？」

「そ、そうね。で、どどどどうすればそのガキが来なくなるわけ？」

「え？」

「だからどうしたらその子供がこなくなるのか聞いてんのよ！！！」

「なんでビビってないあすにゃんがどうして解呪方法を聞くのは何で？」

「その喋り方はくどいわよ。で、い、一応ネギがビビっちゃって話になんないから私が対策を聞いてあげようって言ってんのよ！」

「はぁん、じゃあネギにだけ教えるわ。耳かしな」

「は、はい！」

「お、俺っちも！！俺っちもお願いしやす！！！」

「おう。実はな……」

「ちょ、ちょっとぉ！！」

「何だよ？」

「わ、私にも教えなさいよぉ！！」

「何で」

「な、何でって……」

「実はな……」

「ふ……ふぇぇえええええええええええん！！！！！」

「え！？ど、どうしたんですか、アスナさん！？」

「あねさん！？」

「あすにゃんｗｗｗｗｗｗｗｗどうしたっぺよｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「怖かったから！！怖かったから私にも教えてよぉ！！」

「あ、何だ、そーいうこと。いいよ。実はな、今の話は全部俺が今さっき考えた話だから、そんな子供出て来ないのよ」

「……へ？」

「出て……」

「こない？」

「全部作り話」

「そ、そうならそうと早く言いなさいよぉぉぉおおおおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！！」↑ドップラー効果

なんか走って帰っちゃった。

「し、心臓に悪いですよー」

「俺っちも、もう駄目かと思ったぜ……」

「ふははｗｗｗ俺はやはり天才だったようだな。で、結局何の用だったんだよ？」

「あ、そうでした、麟先生、僕を弟子にしてください！！」

「は？弟子？」

「はい！！」

こいつはまだ１０歳……あれ？９歳だっけ？まあいくつでもいいや。この年から鍛えればあるいは……

「ふん。よかろう。弟子にしてやるんじゃねえの」

「ほ、本当ですか！？」

「本当じゃねえの」

「やったな兄貴！師匠が増えるぜ！」

「ヤメロォ！！」

「？？」

「じゃあ今日は遅いから、修行は明日からな。放課後また来い」

「はい！
さっそくアスナさんに報告しないと！」

腕が鳴るぜ！

～～よふけ～～

「ちょっとネギ」

「はい、何ですか、アスナさん？」

「あんたこっちで寝なさいよ！」

「え？でもいつもは……」

「今日だけなんだから！ほら、早く！」

「は、はい。おやすみなさい」

「ふん……」

二人とも仲ええなぁ～。

アスナが帰ってきたとき半泣きで抱きついてきたんと関係あるんやろか？

０７９　世界最速、ホラーテイスト。（後書き）

そんな怖くなかったよな。
まあ話の中では怖いってことで。

紅の豚野郎です。

挿絵無しでホラー書ける人は尊敬するわ。読んだこと無いけど。

さて、ここ最近の更新がこんな落ち込んでいる理由はですね、
神霊廟プレイ↓他のもプレイしてみよう↓紅魔郷から全部一通りプレイ↓やっぱ東方はおもろいな。↓そうだ、東方の小説読もう！↓にじファン↓うむ。面白かった。あ、最速書かなきゃ↓うｐ↓よし、じゃあ次の東方ＳＳを……↓うむ。面白かった。あ、最速書かなきゃ↓ループ

というわけで、東方が悪い。
いや、悪くない。東方に罪はない。

悪いのは全部この豚野郎だぁぁぁあああああああああああ！！！！！

今回もありがとうございました。悪い豚野郎でした。

０８０　世界最速、弟子を取る。（前書き）

弟子取り合戦はありません。

０８０　世界最速、弟子を取る。

「やあやあよーこそ、ネギ」

「麟先生!?ってことはここは……」

「よろしくお願いします、師匠!!」

「うむ」

「えぇーーーー!?」

うっせぇなぁ

「まあ来い」

とりあえず家に上げてやる。

「あの、いったいどんな特訓を?」

「ってかアンタコイツに弟子入りとか正気なの!?」

「もー、何だよさっきからこのメスガキ。呼んでないんだから文句あるなら帰れよー」

「なっ！　無いわよ!文句!」

「じゃあ黙って。デリケートなんだから」

「何がよ？」

「アレ。　さて、改めてよく来たな、ネギ。俺のスーパーハウスだ」

「わー！大きいですねー！」

「あたぼうよ！」

とりあえずリビングにでも待機させとくかな。

「んー？何だ、客……か……？　すまん、勘違いだった」

「ちょ、ちょちょちょっと、何やってんのよ長谷川さん！？」

あ、いたんだちうたん。

一瞬なんともいえない顔になると、テーブルにあった布巾で顔を隠した。

「私は長谷川さんなんかじゃない。愛と正義の使者、ハセガワンだ（裏声）」

ヨコシマンみたいだな。

「あ、千雨さん！千雨さんですよね！！どうしたんですか、こんなとこで」

こんなとこで悪かったなクソガキ

「てめぇ空気読めよクソガキ！！知らないフリしてたんだから通せよ！！」

「えぇ！？ご、ごめんなさい！でもやっぱり千雨さんだ。こんにちはー」

「違うっつってんだろうがブッ殺すぞ！！」

「ひぃぃぃ！？」

「んー、何なにー？あ、アスナじゃん。ネギ先生も。どーしたの？」

「俺に弟子入り」

「はーん。ま、頑張ってねー」

「うわ、投げやり」

「ってか何でアンタこんなとこにいるのよ！？」

こんなとこで悪かったなメスガキ

「だってここ私の家でもあるし」

「私の家でもありますえ～？」

「？　何や、あん時の嬢ちゃんか」

京都二人衆も参戦。

「あーっ！？あなたも居たんですか！？」

「何だ、やかましいな。ああ、お前らか」

「エヴァちゃんが普通っぽくてココロの癒しに……」

「やかましい！！」

「ネギ先生にアスナさん。ようこそお越しくださいました。すぐにお茶漬けを出しますね」

別名ぶぶ漬け。

「なにここ怖い」

「ただいま戻りましたー！」

「おかえり、さよ」

「ただいま、麟さん？」

おかえりのちゅーをする。

「あ、あわわ」

「あ、そうそうお前ら、俺らで今から魔法球行くけど来る？」

「やめとくー」

「ウチも今日はいいですわ」

「ウチもー」

「私はどうしよっかなぁ……エヴァさん、どーします？」

「私は行くぞ」

「私も失礼します」

「じゃあ私も！さよも参加です！」

「んじゃエヴァ、茶々丸、さよにネギ、あすにゃんはついてこい」

「はい！」

返事してるのネギだけとか……

Ｂ－１５０　＋　Ｆ－１４９階
Ｂ－１階。

「な、何ですかコレ！？」

「ジオラマ魔法球」

「ダイオラマ魔法球」

「ダライラマ魔法球」

「ダイナ魔球」

「「「どれだ！？」」」

「知るかーーー！！」

「まあどうでもいいけど。さて、ならばこの魔方陣に乗るが良い」

「はい！」

ディオラマ魔法球　Ｓ－Ｄ１（Ｓｈｉｒａｎａｍｉ－Ｄｉｏｒａｍａ　０１）

これは、元々あった（エヴァの）城の周りに本気の道路整備を組み合わせ、開放感溢れるサーキットにしたステキステージだ。

めっちゃ綺麗なニュルブルクリンクっぽい感じ。

全長は８．９６６ｋｍで、Ｓ－Ｄ３ステージ（雪山）とかＳ－Ｄ５

ステージ（ジャングル）とかの歴代ステージと組み合わせまくったら全長約５０ｋｍにもなるイカレコースだ。
もはやサーキットとは呼ばん。

「わぁ……」

「綺麗ですねー」

「せやろ」

レースのテレビゲームで見たようなサーキットが一面に広がる世界。
こんなすごい物を作るなんて、やっぱり麟さんは凄い魔法使いなんだなぁ。
僕も立派な魔法使いになるために頑張らなきゃ！

「じゃあまずは……」

麟さんがそう言うと、目の前にバイクが3台出てきた。
これも魔法なのかな？魔力は全然感じなかったけど……。

「ネギはバイクの乗り方は知ってる？」

「い、いえ。知らないです」

「あすにゃんは？」

「知ってるわけ無いじゃない」

「あっそう。じゃあまずはそこからか。着いて来い」

そういって歩いていってしまった。
でも何で魔法にバイク？

「ねえネギ、ちょとおかしくない？」

「でも、麟さんもきっと考えあってのことですよ」

「そっかなぁ？」

真意はわからないけど、これもきっと必要な事なんだ。
そう思って着いていくと、倉庫みたいな所につれて行かれた。

「ここは？」

「あすにゃんはここで自分と同じサイズの防具を探して。見つけたら着て、さっきの所に。わかんない事は茶々丸にでも聞けば？」

「え？私もやるの！？」

「いや、やらないならいいけど、多分暇だぞ。一日経つまで出れないし。ちなみにここでの一日が外での一時間だ。魔法ってすごい」

「そ、そうなの？じゃあわかったわよ」

「わからない事があったらそこのメイドに聞いて」

「どうも、モブ人形です。マスターにこの部屋の管理を任されています」

「は、はぁ、よろしく」

「で、ネギはこっち」

「はい。でも防具って要るんですか？」

「潰れたトマトみたいになりたいなら別にいらないけど」

「大事ですよね、防具って！」

どんな修行なんだろう……早まったかな？

「さて、ネギはだいたい身長も体格も俺とそんな変わんねえし、ここから好きな防具を選べよ」

「はい！」

見ると、色とりどりのぴっちりとした、上下一体の分厚い服がいっぱ掛けられてる。壁際にはヘルメットや靴や手袋も。この中から選ぶのかぁ。

じゃあ……

「これにしまs……うわぁ！？どうしてここで着替えるんですか！

？」

「え？何が？」

「見られても平気なんですか！？」

「平気も何も、どっちも男だし」

「あ、そっか」

アーニャよりかわいいから、ついつい女の子だと思っちゃうんだよね。

びっくりしたぁ。

「着方わかる？」

「多分大丈夫だと思います」

「いや、全然大丈夫じゃねえよ。何でスーツの上から革ツナギ着ようとしてんだよ、びっくりだわ」

「違うんですか？」

「ツナギの下に着るのはその箪笥の中に入ってるから、ぱんつ以外全部脱いでその上から着るんだよ」

「へぇー」

ためになるなぁ。

「んしょ、んしょ！」

「んじゃ背中のファスナー上げるぞ」

「お願いしまーす」

その革ツナギを着ると、すこし背中が曲がる。

「これ、少し小さくないですか？」

「いや、そんなもんだろ。ほら、靴」

「あ、すいません」

「それ履いたらメット持って外出るぞ」

「まだ着ないんですか？」

「焦るな」

「はい」

外に出ると、もうアスナさんが居た。

「遅いわよ」

「うっせバーカ」

「何でいちいち突っかかってくるのよ！！」

「バーカバーカ」

「っきーー！！」

ん？なんだろ？後ろの方から音が……

パァァアアアアン！！

と、３台のバイクが凄い速度で走り抜けていった。

「え？」

「ああ、あれはキニスンナヨ。今日一日でああなる事はまず無いから」

「アレってもしかして……」

「うん。エヴァ、茶々丸、さよの３人」

「凄……」

「ちなみに、みんな魔力は凄いよ」

「！！」

やっぱりバイクと魔法は関係あるんだ！！

頑張らないと！

「さて、バイクの乗り方だが、昔の話を読んで勉強して。このバイクはそこに書いてあるのと同じＮＳＲ５０だから」

そう言って『００８』と書かれた紙を渡された。

僕たちもおおよそその通りにしてなんとか乗れるようになった頃にはもう夜だった。

「お疲れさん。じゃあ着替えたら戻ってきて」

「はーい」

「疲れたー。ってか暑いわねー」

でも有意義な時間の過ごし方だったなぁ。

「ちなみにこの後は座学もあるよ」

「えぇー！？」

アスナさんは勉強が嫌いだからなぁ。

その頃の俺っち……

「忘れて行かれちまった……」

「マア飲メヨ」

「すまねえな」

「ナアニ、似タ者同士、仲良クヤロウヤ」

泣けてきちまったぜ……

０８０　世界最速、弟子を取る。（後書き）

最終的にシラナミ加入者は全員不老不死カスタムされるんで、今までほとんど出番の無かったヂオラマ魔法球。

別にこのくらいだとネタバレでも何でもないよね？

というわけで、紅のです。

麟、ネギ、あすにゃん：ＮＳＲ５０
エヴァ、茶々丸、さよ：ＮＳ２５０Ｒ

ちなみに、魔法球内にもバイクのストックが２００台くらいあるという設定です。今考えた。
本編内では全く語られていませんでしたが、結構魔法球内も活用されてます。今考えた。

ちなみに、本小説にはＩＢＴシステム（行き当たりばったりシステム）を採用しています。

では、今回もありがとうございました。

０８１　世界最速、インタビューがどうとか。（前書き）

長くなりました。
ネギの壊れっぷりとフルコースには突っ込まないで。
もしくは突っ込んで。

081　世界最速、インタビューがどうとか。

「白波鉄の掟！」

「ヘルメット、長袖、長ズボン、グローブは絶対！フルフェイス推奨！」

「公道では道路交通法優先！緊急時は緊急度合いによって！！」

「エヴァと茶々丸に言ってもらったこの二つが絶対に守ってもらうことだ。
ちなみに自分で言おうと思ったのにセリフ取られた」

台詞の取られた白波麟です。

「はい！」

「セリフ取られた云々のくだりはいらないでしょ」

「ちなみにこの鉄の掟、実は例外もある」

「え！？」

「パフォーマンス走行時の服装は好きに。被害は自己責任で。だね、お兄ちゃん」

「うむ。まあ俺ほどのプロフェッショナルだとどんな服装でも最高のパフォーマンスが出来るんだが、やっぱり俺の背中を目指す奴とかいるやん？そんな奴に、『こいつ実はノーヘルでタイムアタック

しちゃう奴なんだ。俺もそうしよっと☆』とか思われて真似された挙句味噌飛び散られるのも寝覚めの悪い話じゃん」

「エグい話ね。ってかあんたの背中目指すような奴っているの？」

「殺すぞ神楽坂明日菜」

「この兄妹えげつなく沸点低いわね……」

「プチ殺しますよ、神楽坂明日菜さん」

「帰りたい……」

「嘘だと思うならコレを見てみろ」

「ん？なに？」

そういってエヴァが取り出したのは月間バイクライフだいたい１００冊（別冊バイクライフ『世界最速のプライベーター・白波麟特集』含む）。

「な……何コレ」

「お兄ちゃんの出た雑誌だ。今日の座学はそれを読んでろ」

なんでエヴァが決めるんだよ……ステキ！

「ちなみにお兄ちゃんの勇姿が見れるのは付箋の貼ってあるページだ」

ちなみにこの妹、『白波』と書いてある雑誌なら、脅威のサーチ能力で全部5冊ほど買ってくる。
おかげで『ＳＹＯＨＥＩ　ＥＸ００６－Ｓ　白波レプリカヘルメット』とし書かれてない雑誌を何回買ってきたか。
サーチ能力は高いのにフィルタリング能力はえげつなく低い。

「え？　あ、ああ、そう言えばレーサーだったのよね。すっかり忘れてたわ」

「ぼ、僕もです！」

「どんだけ馴染むんだよ、俺」

「ほら、読め！ホラ早く！！そしてお兄ちゃんの勇姿を目に焼き付けまくれ。寝ても覚めてもお兄ちゃんとＦ５キーの事しか考えられなくなれ！」

「何を更新させる気よ。ハァ、読むわよ。読めばいいんでしょ」

「ちなみに読み終わったら簡単な問題を作るから、それなりの覚悟をしておけよ」

「ゲッ！」

「はい！」

ネギさっきから　はい！　しか言ってなくね？

編「よろしくお願いします。編集の朝倉です」
麟「よろしくお願いします。レーサーの白波麟です」
編「とは言っても、結構頻繁に合ってますよね」
麟「たしかに。（笑）前が先週でしたっけ？」
編「そうですね。丁度ＧＰ優勝直後でしたか。あの時は凄かったんですよ。編集部も『あの白波がレースをやめる！？』って（笑）」
麟「思い立ったら即実行の男ですからね」
編「それが若さと速さの秘訣ですか。でもあの時は本当に凄かったんですよ。社長に『おい、朝倉！お前行って白波選手の引退宣言取り下げて来い』とか言われて（笑）」
麟「アハハハ」
編「笑い事じゃないですよ（泣）」
麟「というか今さらだけど、朝倉さん編集になったの？」
編「いえ、小さな会社なので……と言ったら社長に怒られますが（笑）フリーの記者から会社お付きの記者兼編集といった所ですかね」
麟「はぁー」
編「とはいっても、やっている事は今までと変わらないんですが」

――読者からの質問――

編「編集部が抽選で選んだ質問です。ちなみに、編集は一切内容を

見てません」
麟「ドンと来い！」

広島県・サンちゃん　さん『麟さんはもうバイクに乗らないんですか？』

麟「むしろ毎日乗ってますね。埼玉に来ると稀に見れるかも」
編「埼玉県の人口が増えますね」
麟「まさか（笑）まあ、とりあえずレースはまだするのかな？気が向いたらって事で」
編「また戻ってきてくださいよー」
麟「草レースとかならそのうちね。まあその時は連絡しますよ」
編「お願いします！じゃあ次の質問です」

岡山県・やっ　さん『ＥＸ００６－Ｓの値段をさげてください！』

麟「アハハハハハ（笑）」
編「ははは（笑）」
麟「これはね、ショーヘイに言って！」
編「００６－Ｓ以外も００６シリーズは全部同じ値段ですからねー」
麟「そうなんだ」
編「麟さん、普段何かぶってるんですか？」
麟「ネコかぶってるかな」
編「知ってます（笑）ヘルメットは？」
麟「スオーミーとかシンプソンとか……ショーエイとかアライとかショーヘイとか」
編「いっぱい持ってるんですねー」
麟「メーカーから送られてくるのもあるんですけどね。いくらヘルメットあっても頭は一つしかないんだから（笑）」
編「かぶり心地はどれが一番ですか？」

麟「一番はアライかなぁ。一番悪いのはネコですね」
編「あはは。では次は」

埼玉県・むいむい　さん『此間金髪の女の子手を繋いで歩いてましたよね!?』

編「では次の質問に……」
麟「あ、見られちゃってました?アレ俺の妹なんですよ。GPの中継でも写ってたでしょ!めっちゃかわいいでしょ!天使でしょ!マジ天使!!お姫様!!この前もちょっと半日ほど家を空けるくらいで、『どこいくの?』『いつかえってくるの?』で、帰ったら『知らない女のにおいがする』とか『誰と会ってたの?』とか言って!もう逐一俺のする事が気になって仕方ないんですよ!いやぁ、参ったなぁ。実は今まで一日以上会わなかった事が無いんですよ。だいたい16時間を過ぎた辺りから血色が悪くなってきて20時間ごろには息も絶え絶えといった所でしょうか?とは言っても、よく考えたら12時間以上離れた事もありませんでした。恐らく1日離れたら本当に死んじゃいますね、俺。そもそもエヴァが俺にこんなべったりになったのは今から……」

《編集部の独断でカットしました》

大阪府・R・T　さん『麟さんみたいに速くなるにはどうしたらいいんですか?』

編「コレを待ってたんですよ!」
麟「うーん……練習かな?」
編「何で疑問系なんですか?」
麟「速くならなきゃいけない!タイムを縮めなきゃいけない!っていって走るでしょ?」

編「はい」
麟「疲れるじゃないですか」
編「そうですねー」
麟「生活が『妹：バイク：その他』だと『7：2：1』くらい」
編「それはそれは」
麟「ちなみに妹なんですけどね」

《編集部の独断でカットしました》

麟「で、バイクは楽しんで乗ってるんですよ。その結果がアレ（優勝）ですね」
編「なるほど、究極の趣味ですね。趣味の究極ですかね」
麟「謙遜しませんが、実際僕はかなり速いですからね。速さが楽しさなんですよ。まあゆっくり走るのはそれはそれで好きですよ。自分に合った走り方が速さだったんですかね」
編「なるほど。ためになります。では次です」

北海道・猫　さん『我輩は猫である』

麟「名前はまだない」

ドイツ・Ｋａｌｆ　さん『わたしとあなたは速いでしょう。どちらが』

麟「努力は認める」
編「原文そのままです。どっちが速いか聞いてるんでしょうね」
麟「僕です」
編「世界最速の男ですからね」

東京都・ＰＥＥＰＩＮＧ　ＴＯＭ　さん『僕は田園調布に住んでま

すが、麟選手はバイクに乗る時髪は邪魔じゃないんですか？』

麟「妹が僕と同じ髪の長さにしてるんですよ。で、妹は髪が長いのがえげつなく似合ってるんで一切きりません。前散髪しようとしたら本気泣きされました」

編「しかし改めてみると、どう見ても年齢一桁の女の子ですよね、麟さん」

麟「リンです？　って言ったら１００％男と思われませんね」

編「逆に、言う機会がある事にびっくりです」

麟「実際レーサーってそこまで日の当たる職じゃ無いですからね。しかも僕は職ですらない訳ですから。無職ですよ（笑）」

編「そう言えばそうでしたね（笑）では、これからも色々とコーナーを用意してますので、」

麟「ドンと来い！」

「……え？」

「いや、そのページじゃない。次のページだ」

「そうなの？」

～～世界最速のプライベーター・白波麟特集　Ｐ６３～～

『麟選手の直接指導コーナー』

抽選で選ばれた沢山の人の中から運よくその栄光を掴み取った５人のライダーが麟選手から直接指導してもらえるスペシャルコーナーだ！

ちなみに、この本を販売するひと月前に発表したにも関わらず今回の応募は、前回の麟選手の直筆サイン抽選を超える人数だったため、３人だった枠を５人に拡大したのだ！

応募はがきの数はなんと９０００枚！

これにより編集部の荒井君他数名が重度の寝不足に襲われたぞ。

そして、その９０００人のうち選ばれた事によって一生分の運を使い果たした可哀想なグッドラック野郎の五人はこちら！

鳥取県・縁　さん『麟さんのファンクラブ会員？３桁です』

山梨県・Ｎ・Ｙ　くん『また三菱がバイクを作りますように』

奈良県・紅　豚野郎『↑あれ？なんで敬称が蔑称みたいになってんの？興奮するんだけど』

大阪府・高梨　さん『明日になんかならなきゃいいのに』

群馬県・ぴろし　くん『“くん”って年でもない』

「９０００枚？」

「そうだ。凄いだろう。まだ信用ならんか」

「いや、信用するわよ。流石に」

「そうか、信用ならんか！ならばもっと凄いものを見せてやる。来い！」

「いや、だから信用するって、ねえ、ちょ、ひき、引き摺らないでよ！！テストは！？テストはいいの！？」

「これも一環だ！」

……ガンバ☆あすにゃん！

一時間後くらい

「麟さんってすごいんですね！」

「そりゃそうだ。何せ生まれた瞬間から最速を約束された存在だからな」

「わぁー！」

などと橋にも棒にもかからない会話を楽しんでいる（そして茶々丸とさよは本を黙々と読んでる）と、エヴァがあすにゃんを伴って帰

ってきた。

「ただいま、お兄ちゃん！」

「おかえり☆」

「ただいま戻りました、麟様」

「え？誰？」

「明日菜です、麟様」

「え？え？」

「お兄ちゃん、教育済みだよ！」

「それは洗脳と言うんだよ。だからあれだけマンティスと戦う時はコントローラーを２Ｐの所に挿せって言ってたのに……」

きっと１Ｐの所に挿したまんま戦って負けたんだろうな。
ちなみに一番好きなのは意外や意外、２なのだよ、この俺は。
スケボーめっちゃおもろいね。
でも１のグレイフォックスも超かっこいいね。

「じゃあ簡単な問題だ。各自に配ったボタンを押して返答してもらう早押しと、ホワイトボードに書き込む回答の二種類。
ちなみに、一番点数の低かった者は今晩のおかず一品抜き、点数の高かった者はお兄ちゃんに一つお願い事ができる」

聞くか、叶えるかまでは俺が決めます。

「という訳で、出題者のエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル・シラナミだ」

「司会、進行の白波・Ａ・Ｒ・麟だぴょん☆」

「頑張ります、絡繰・Ｓ・茶々丸です。ちなみに、ミドルネームのようになってる『Ｓ』が姓です。麟様の事をもっと知りたい２歳児です」

「お嫁さんとして、いい所を見せたい、白波さよです。旧姓は相坂でした。麟さんといつまでも一緒にいたい６０歳児くらいです」

「麟様親衛隊として、神楽坂明日菜、行きま……あれ？何でこんな事言ってるんだろ？ってちょっとエヴァちゃん！？私を洗脳してたでしょ！？」

「おい、次、小僧だぞ」

「あ、は、はい！ネギ・スプリングフィールド、麟さんの弟子として、頑張ります！」

「ちょ、無視するんじゃないわよ！！」

「やかましい！！」

「明日菜さん、空気を読んでいただけませんか？」

「はしゃぎたいのはわかるんですが、その、少し落ち着いてください……」

「アスナさんってば、そんな慌てなくても」

「あれ？おかしいの私？私が悪いの！？」

「では一問目、ボードクイズ」「でーでん！」「白波・Ａ・Ｒ・麟の『Ａ・Ｒ』は何だ」

『ピコーン！』

「さよ、早押しじゃない」

「あ、はい、すいません」

「早漏さんめ」

全員手元のボードに書き始める。

あすにゃんも止まらず書いているのは、解けたとはいえ洗脳の効果ですね。

睡眠学習法ですね！！

「時間だ、答えを聞こう」

「バルス」

「目が、目がぁぁぁあああああ！！」

俺の光の魔法に間髪入れず茶々丸が目を押さえて呻きだした。

「茶々丸に２点加点だ」

「な、何で！？」

「ノリの良さはシラナミで生きていくには不可欠だからな。ではボードを立てろ。

ふむ、サービスしすぎたか……？

茶々丸『アタナシア・レーサー』

さよ『あたなしあれえさあ』

ぼうや『Ａｔｈａｎａｓｉａ　Ｒａｃｅｒ』

神楽坂明日菜『アタナシア・レーサー』

全員正解、各５点づつ加点」

「当然です」

「次も頑張るぞ！」

「このテストの目的って何よ？」

「では第二問、早押しクイズだ。」「デデン！」「バイクの後輪を駆動させるためのギアの名前は」

『ピコーン』

「神楽坂明日菜！」

「バックギア！」

「１点やる。死ね」

バックしてどうする

『ピコーン』

「茶々丸！」

「バックスプロケット！」

被せて来た！？

「ナイスボケだ。２点やろう」

『ピコーン』

「さよ！」

「バンバンジー！」

何が何だか

「ボケ！１点！」

『ピコーン』

「ぼうや！」

「バンバンバンバンジー！！」

「１点！

で、正解は！？」

「「「「ドリブン　スプロケット」」」」

「全員5点！」

なんぞこれ……

「三問目、ボードクイズ」「デデンデンデン！」「お兄ちゃんの必殺技は？」

『ピコーン！』

「それはもうさよがやった！」

ってか必殺技って何？俺そんなん無いんだけど？
という可哀想な思いに反してみんなさらさらと書いていく。
何で俺のこと俺より知ってるの？

「よし、書けたな。
茶々丸『トンファーキック』　3点
さよ『すごいパンチ』　3点
明日菜『サイキックソーサー』　4点
ぼうや『ベンティアドショットヘーゼルナッツキャラメルエキストラホイップキャラメルソースモカソースランバチップチョコレートクリームフラペチーノ』　うーん……5点」

なにそれ怖い……
ネギのすごい怖い。

「最終問題！早押しだ！」「ジョインジョイントキィ」「お兄ちゃんが優勝したロードレース世界選手権優勝年度とクラス、及び優勝時に乗っていたバイクの名前は？」

『ぴんぽーんぬ！』『ぴんぽーんぬ！』

さよと茶々丸がほぼ同時だけど、

「今のはさよだな」

「頑張りました！」

「では回答をどーじょ」

「はい、２００１年度、２５０ｃｃクラス優勝で車体はＨＯＮＤＡのＲＳ２５０Ｒです！」

「正解！５点だ！」

「わーい！」

「結果発表だゴルァ！！」

「ふむ、中々面白い結果になったな。茶々丸　４２．１９５点」

「今ならフルマラソンも走り切れそうです」

「さよ　４０点」

「うー、負けちゃいましたー」

「神楽坂明日菜　４５点。ボケとナイスボケで地道に稼いでたな」

「やっぱり勉強はあんま得意じゃないからね」

「ぼうや　３５点。死ね」

「ふがいないです……」

「という訳で、優勝は神楽坂明日菜、貴様だ」

「やった！！」

「個人的にはあんな中途半端な点を取れた茶々丸も何らかの商品をあげたい気持ちでおっぱいいっぱい、キス甘酸っぱい、オナラの臭いが部屋いっぱい」

「なんて綺麗な韻の踏み方……」

「いえ、私は敗者です。でも商品を頂けるなら今度のデートはパソコンのパーツ屋さんに行きたいです」

「ＭＡＫＡＳＥＲＯ！」

「で、神楽坂明日菜。貴様は？」

「うーん、エヴァちゃん、神楽坂明日菜じゃなくて普通に『明日菜』って呼んでくれない？」

「いや、お兄ちゃんに対するお願いだからな」

「じゃあ麟先生、エヴァちゃんに、これから私を明日菜って呼ぶように言ってよ」

「エヴァ、呼んでよ」

「はーい、お兄ちゃん？
明日菜。これでいいか？」

「うん」

「では食事にするか。今日は私が作ってやろう」

「黙って座ってろ。俺が作る。ヤメロー！シニタクナーイ！」

「はーい」

お兄ちゃんが走って調理場に行っちゃった。

「エヴァちゃんって料理下手なの？」

「ふん、そう思うか？」

「マスターは、昔はうどんに墨汁を入れていましたが」

「うどんに墨汁！？」

「食べれるんですか！？」

「お兄ちゃんはまずいって言いながら食べてたぞ」

どんなにまずいのか気になって少し食べたけど、アレには『吸血殺し』の名をつけた。

「愛の為せる技ですね。
最近は水性絵の具を使うようになりました」

こっちは不死殺しだ。

「……」

「原因……原因は何なんですか？」

「お兄ちゃんの愛だ」

「麟様が輝かしいばかりの溺愛っぷりで、最近のコーラばっかり飲んで甘やかされて育ってきたガチュピンの１０００倍ほど甘やかされていたので、全く料理が出来ないんです」

「もっと甘やかされていたぞ！」

「憤慨するところそこなんだ」

「アスナさん、憤慨なんて言葉使えたんですね！？」

「ブン殴るわよ、クソガキ！
ってかエヴァちゃんはまずいって気付かなかったの？」

「殴ってから言わないでくださいよう……」

「はあ？いや、普通にマズイぞ。食えたもんじゃない」

「じゃあ何で作るのよ！？」

「むしろあの材料の何が悪いのかわからんな」

「無駄ですよ、明日菜さん。マスターは食材がどう加工されて食事になるのか全く知りません。カレー以外は」

「カレーはわかるんだ……
麟先生はご飯作れるの？」

「洋食はプロ顔負けです。以前、皆さんが図書館島に潜っている間、クラスメイトの皆さんに振舞っていました」

「あの時は全員かなり満足していたぞ。『イギリス料理が美味いとは思わなかった』そうだ」

「む……」

「何だ、ぼうや？イギリス料理が不味くないとでも言いたげだな」

「いえ、美味しい料理もあります！」

「その美味しい料理だけ出したんだよ」

「くっ……」

「ねえ、茶々丸さん、イギリス料理ってそんなマズイの？」

「そうですね。視覚から攻めてくるタイプの食事です。どうぞ、これはうなぎゼリーの写真ですが……」

「どれど……うげぇ……」

「懐かしいなぁ……」

「ネギ、ひょっとしてコレ、おいしいの？」

「いいえ、えげつなくマズイですよ。あの冷え固まった微妙に硬くて、味も薄いゼリーに、中途半端に硬いうなぎの身がまた合わないんですよ。それに塩コショウなんてかけるもんだから」

「いい。もういい。アンタはそれ食べて生きてたから気にならないだろうけど、その食文化って私からしたら虫食べてる民族と大差無いわよ」

「えぇ！？そんなですか！？」

「そんなだ。刺身を生魚だと聞いた時一歩引いただろ」

「た、確かに……でも食べてみたら美味しかったですよ」

このぼうやも大概わからん奴だな……。

「いや、イギリス料理は食べてみたら美味しくないだろ。何で調味料やら香辛料をつける事が前提の食いもんばっかりなんだよ」

「お兄ちゃん！」

「メシできたぞーいほーいほれほーい」

「じゃあ運ばせるね」

「うむ」

場内にいる人形に食事を運ばせる。

「はいお待たせー。今日の晩御飯はまさかのフルコースよ」

「別にそんな気を使ってもらわなくても良かったのに」

「いや、結構毎晩フルコース」

「じょ、上流階級だ！！」

「そして最下位だったネギこんにゃろーには残念ながら食前酒は抜きだ。ぶどうジュースでも飲んでろ」

「麟さん……」

「私も未成年なんだけど……」

「いけんだろ」

「「「「いただきます」」」」

「い、いただきます」

「ん？何だ、かぐ……明日菜？」

「いや、私こんな上品な料理の食べ方なんて知らないわよ」

「好きに食ったらええねん！！！！！貪れ！！！」

「いや、流石にそれは無しでしょ……見よう見まねだけど。ん、お……美味しい！！」

「そうだろう！お兄ちゃんが作ったからな！！」

「麟さんが作りましたからね！」

「麟様が作ったのですから、当然です」

「師匠が作ったんですから」

「あ、ネギも乗るんだ」

うん、今日も美味しい！

０８１　世界最速、インタビューがどうとか。（後書き）

こんな事するつもりじゃなかったのに、気付いたらこうなってたしかし、元々何をしようとしていたかは全く覚えていないが故にこの話は初めからこうするつもりだったんだろうか、僕は

などと考えております。
一切代謝の無い体になって死ぬまで寝ていたい紅の豚野郎でございます。

最近柄にも無くシリアスを書いていたもので、反動にギャグを書いてしまいました。
読む分にはギャグもシリアスも好きなんですが。
とはいえ、半年ぶり、話数で言うと７４４話ぶりにギャグを書きましたが、やはり腕が鈍っていますね。
あの頃と比べてキレがありません。
この衰えた腕を元に戻す意味も込めて、しばらくギャグコメディを書こうと思います。
間違ってシリアスが入ってしまったら「あーあ、やっちゃったねｗｗ俺ぁ知らねえよｗｗｗｗ豚野郎だよｗｗｗｗ」と冷笑に伏してやってください。

では、今回もありがとうございました。

０８２　世界最速、（前書き）

頑張りが足りない。
サブタイも足りてなかった。

082　世界最速、

「おっぱぁぁあああああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「おはようございます、麟さんっ」

「おはよー、お兄ちゃん！」

「うむ」

「おはようございます、麟様」

「うむ、今日の俺は紳士的だ。茶々丸、朝飯は？」

何故なら豚野郎が親知らずを抜いたからだ。

「はい、今日は玉子焼きですよ」

「わーい！わーいわーい！」

「あらあら、麟様ったら、まだまだ子供ねぇ」

などとベッドの上をゾンビが如く駆けずり回っていた。

一部屋丸ごと余す事無くベッドって本気やろ。

「何この茶番……」

扉を開けるとあすにゃんが一人いた。

2、3人いたら一人くらい欲しかったけど、一人しかいないならいらない。

「おお、おはよう、あすにゃん。πタッチ☆」

「ひゃぁあ！！やめなさいよ！！」

「お兄ちゃんったらセクハラ教師～」

「もう、麟さんったらぁ」

「そんなおまいらにもπタッ……無い……だと！？」

エヴァの胸を触りながら劇画調に呟く。

「ほら、行くよ、お兄ちゃん」

「うむ」

「「「「いただきまーす」」」」

「いっただあああああんあああああああんなあああああなあなななん」

「師匠、師匠！！」

「玉子焼き砂糖入れすぎじゃね？朝から胃にくる」

「マスターが甘いもの好きなので」

「俺のほうが好きだし」

「そういう話じゃない」

「師匠！！」

「茶々丸の作るミッソスープは絶品だな」

「ありがとうございます」

「師匠～」

「え？俺？」

「そうですよ～」

「何」

「今日は何をするんですか？」

「うまい！」／テーレッテレー／

「うぅ……」

「あ、ごめん、聞いてなかったわ。何？」

「いえ、今日は「バイク乗って外に出る」……はい」

「ごちそうさまスカンク！！」

「何そのスカンク」

「ごちそうさマスタング！？」

「言ってない」

「さあ乗れ！跨れ！！」

「はい！」

「エンジン始動！」

「はい！」

「キルスイッチ！」

「ない！」

ですよねー

「じゃあ茶々丸が軽く流すから着いていって」

「「はい」」

「で、俺は後ろからフォームチェックな」

なんか普通に走っても面白くないから俺はウィリー縛りプレイでもしとこう。

「うぇーいｗｗｗｗうぇーいｗｗｗｗｗ
あ、ヘルメット越しだとエンジン音と合わさって誰にも声が届かない……ということは……！？」

「おちん○ぽーーーーーーー！！！！！」

「ＣＨＩＮ☆ＫＯ！！」

「開国シテクダサイヨー！！ネー！開国ー！」

「第一音が違うでしょ！？音が違うと当然名前も違ってくるでしょ！！」

「シカト！？鹿とですか？」

寂しい。

おっとネギよ、今後ろを見てふらついたな。死ねばいいのに。

ってか平均速度４５ｋｍ／ｈの上に５０ｃｃでウィリー縛りとか難しすぎて泣けるんだけど。

などと一周走り、ピットに戻る。

「えー、まずネギ。それなりに乗れてる。二日目にしたらたいしたもんね。
でも曲がる時の速度と車体を倒す角度が一致してない。あんな倒さなくても大丈夫」

「はい！」

「で、あすにゃん。本気で鍛えたらレースに出れるね。でも直進でもコーナリングでもニーグリップ。基本的にタンクから膝は離さない」

「はーい」

「あとは二人ともそれなりに走りこめばすぐ速くなるから、これから２０周さっきのコース行こうか」

「はい！」

「えぇ！？私も！？」

「え？嫌ならいいけど？」

「行くわよ！！」

何怒ってんのこいつ？

「まあ焦らず走りなさい。怪我したらぶっ飛ばすぞ」

「余計怪我するわよ」

「バイクこかしても怪我すんなよ。まあ死なない限りすぐ治せるけど」

「はい！」

「行ってこい」

ぷぉーんぷろろーぬと走り出す二人を見送って２０秒、エヴァ、茶々丸、さよの３人がピットイン。

「お前ら何勘違いしてるのかしらないけど、俺ピットクルーじゃないからね。あ、さよ、もう乗らないならＮＳかして」

「はーい」

「じゃあ俺もちょっと行ってくるわ」

「いってらっしゃいませ」

「いってらー」

「あーばよーとっつぁ～（→ｖｉｂ）ん」

「３２周送れだけど泣くなよ。排気量がちがうんだから」

「いや、別に気にもしてないけど」

「あっ、そう。ちなみに、あと３０分で出れるようになるから準備しておきなさい」

「はい！」

「じゃあ今回はこの辺で」

「何言ってるの？」

次回！

最速の戦艦　ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコボコにする映画

最速の要塞　ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ

ボコにする映画
最速の断崖
ボコにする映画
最速の陰謀
ボコにする映画
最速のテロリスト
コにする映画
最速の標的
ボコにする映画
最速の聖戦
ボコにする映画
最速の追撃
ボコにする映画
最速の脱獄
ボコにする映画
最速の傭兵
ボコにする映画
最速の奪還
ボコにする映画
最速のステルス・・
ボコにする映画
最速の激突
ボコにする映画
最速の報復
ボコにする映画

やらないよ！！

ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ
ある日偶然遭遇したテロリストを麟がボコ

０８２　世界最速、（後書き）

おはこんばんちわ豚野郎です。
ええ、ここまで更新が遅れた事に対する言い訳の時間です。

？　警告　？

ここから先の文には、残酷ではないもののかなり痛い描写が含まれています。
ご注意ください

僕には一本の親知らずが生えていました。
歯並びがとてもいい僕は、こいつにどうこうされることは無いと思っていたのです。
しかし、現実は非情でした。
２１にもなって日々成長を見せる親知らず。
それに比例してどんどん噛まれる僕のほっぺの内側の肉。
悲しみのあまり体重が８ｋｇ減って、真剣にＨＮの変更を悩んだほどでした。
言い過ぎました。
それでも強く生きていきたい僕は、このアンノウンペアレンツ（親知らず）を抜く事を決意しました。いや、それだと知らない親になるだろうなどとは微塵も考えなかったのです。
それにあたり、いくらくらいかかるのだろう?と『親知らず　抜歯』で検索したのです。
そると数々の反応が。
曰く「歯を砕いて、破片を歯茎から掻き出し2，3針縫っておしまい」「３日は生きる気がしない、一週間は食べる気がしない、一月は日常生活すら困難、半年でやっと正常に活動できるようになる」
と、僕の決意を大いに鈍らせる話のオンパレードですよふざけやが

って。
僕は、部屋に篭って泣いていました。

ここで勘違いして欲しくないのが、決して痛いのが怖くて泣いていたんじゃない。
この年になって、今さら親知らずの生えてくる自分の不甲斐無さに泣いていたんです。
更に言うと、小学校の時予防注射も、注射なんかに頼らないと病気も防げない自分の不甲斐無さに泣きましたし、生まれてきた瞬間もこれから親のスネをかじらないと生きていけないという不甲斐無さに泣いていました。
今もスネをかじっています。

それはそうと、とにかく無意味に検索してしまったのが運の付き、僕は布団に包まって『自分の不甲斐無さに』涙を流す日々が続いたのです。
それ故に更新できなかったんです。

ああ、歯は普通に抜いてもらいました。
砕いたりとかなかった。代わりに僕が砕きに砕いて近所のドブに捨てました。
歯ごときがびびらせやがって。

それはそうと、僕基準で最速も軌道に乗って来たので、もうひと作品手を出そうと思います。
ロックマンゼロとゼロの使い魔のクロスでも、と。
もし興味があるなら一度覗いてみてください。

では、今回もありがとうございました。

０８３　世界最速の弟子のペットは携帯のプリセットデータで例えるなら真っ先

前回サブタイが飛んでいったので今回は長めにしました。

「やらねえっつったじゃねえかよーーーーーー！！！」

「おわ！？」

「ど、どーしたってのよ！？」

「１４本立てって・・・・・・サザエさんでも無い」

テロリストをちぎって鼻毛、麟でしゅ。
お前ら忘れてるだろうけど、俺男の娘キャラだから。

「とにかく、明日も似たような時間にやるからまたおいで。文化祭の準備とかあって忙しいだろうからダメな時はダメとちゃんと言える子になろう」

「はーい」

「え・・・・・・・文化祭？」

「・・・・・・・おい担任教師」

「えー、追加講習、朝礼でやること」

「はい！」

「はい！じゃねーよボユゲ！！」

言いながらガムシロップを投げつける。

「す、すいません……」

「ちょっと、何もそんな言う事ないんじゃない？」

「保護者の方も現場に行き過ぎた要求するとモンスターペアレントとして教員に煙たがられますんで。っつか俺が煙たがるんで。マジ自重してほしいっつーか、教師の話なのになんで居るの？まあいいや」

「誰が保護者よー！？」

「いや、どうみても保護者じゃねえか。所でメシ食ってくだろ？」

ふんもっふ！！と怒るあすにゃんにライトツッコミしつつ食事が要るか聞いてるちうたんマジ天使

「いいの？ってか、もう隠さなくてもいいんだ、千雨ちゃん」

「かまわねえよ。ってか諦めた。クラスの奴らに言うなよ」

「寮出た時点でみんな知ってる気がするけど……

あ、そうだ、木乃香に連絡しないと」

携帯を取り出すあすにゃん。

「所で気付いてる？上のほうで三点リーダがちゃんと変換されなくて半角中点六つ並んでる所が何箇所かあるんだけど」

「いや、修正しろよ」

「めどい」

「そ」

「で、朝礼でやる事！」

「は、はい！」

「話を聞く、話をする、瀬流ピコに『あーん、またやっちゃったぁ☆私ったらドジなんだからぁ』と言いながらコーヒーあるいは紅茶をかける」

「瀬流彦先生……」

「体育教師でもないのに朝からジャージ着てたのは……。ってか木乃香と刹那さんも来て大丈夫？」

「ねー、このちゃんとせっちゃんの分もー！！

で、何で話聞いてないの？俺が知ってるっつーことはお前も知ってるはずなんだけど？」

「ご、ごめんなさい、聞きこぼしです」

「あ、そう？じゃ次から気をつけてね。
ねーちうたーん！！ごはんまだー！？」

「今日は千草さんの日だよ！！」

「え？そんな制度あったんだ……」

「作りたい奴が作ればいいんだよ」

「後にシラナミ制と名づけられる」

「何がだ」

「もう出来ますえー」

「さよか」

カンコーンコロローンと呼び鈴が鳴った。
いや、むしろ呼び麟が鳴った。

「うち新聞はデイリー取ってますんでー！！」

「何でスポーツ新聞なんだよ、見たことねえわ」

「「お邪魔しますー」」

「おお、せったｎよ、死んでしまうとは情けない」

「……？」

「ドラクエやね」

「略すなよ。フルネームでドラ息子クエイクと呼んでやって」

「何それ？」

「「「「いただきます！」」」」

「からし菜漬けうまい」

「そうどすか？」

「山葵漬けもうまい」

「腕を上げたな、千草」

「そらもう、麟さんの為に」

「奈良漬食べれない。あげる」

「そうどしたか？」

「めっぽう酒に弱い」

「妹のエヴァはんはお酒強おすのに」

「えー！？　エヴァさんお酒飲むんですか！？　中学生なのに！」

「６００歳だけどな」

「俺の分も飲む」

「お兄ちゃんの分も飲む」

「ってか昨日も飲んでただろ」

「前のこと過ぎて忘れてました」

「老化早っ！」

「ごっつぁんです」

「相変わらず食べるの早いね」

「絶対量が少ない」

「千草はん料理上手いねんなぁ」

「ややわ、お嬢様ったら」

仲よさげでなにより。

「お邪魔しましたー」

「私、全く会話ありませんでしたね」

「俺っちよりマシさ」

「あ、居たんだ」

「ひでぇ！？」

「アンタってプリセットで携帯についてくるとしたら真っ先に消すポジションよ」

「俺っちもそこまで言われると逆にスッキリしまさぁ」

「ほなまた明日の」

「はい！」

「さいならー」

ネギのフェイバリットスペルは「はい！」だな。

「あれ？明日って学校休みだっけ？」

「A：そうだよ、お兄ちゃん：学校は休み。何かイベントがあるかも」

「B：はい、明日は登校日です：学校に行くと何かいい事があるかもしれません」

「うーん……どっちにすべきか……」

「どっちも何も明日は普通に金曜だから授業あるだろ」

「えー」

「えーじゃねえよ。教師が学校休みたがるな」

「千雨はんったら、麟はんがおらな学校行きたくもないって駄々こねて」

「こねてねえよ」

「私もお兄ちゃんが居ないがっこうなぞ行きたくも無いぞ！！」

「こじらすなややこしい！！」

「私もそうです」

「……私もそれでいいよ、もう」

「ええ落としどころどすなぁ～」

「っ！！　っ！！！」

べんべんとつっきーを叩くちうたんを見て、ずっとこんな平穏が続くんだろうなと思っていたんだ。
その頃はまだ、思っていた。

二回目な気がするけど、やっぱり言ってみたかっただけなんだ。

０８３　世界最速の弟子のペットは携帯のプリセットデータで例えるなら真っ先

なにも考えず適当にキーボード打ってたらこんなん出ました。
作業用ＢＧＭは石川さゆりと美空ひばりのメドレーです。
仕事の関係でお年寄りとカラオケに行く事になったのですが、棚から演歌のＣＤを引っ張り出して聴いてみたら予想外にハマり直してしまって天城越えを鼻ずさみながら書いています。
みなさん、お年寄り受けのいい演歌とかあったら教えてください。
しかし、山口百恵やらかぐや姫やらあみんやらと、２１歳らしいＣＤってのが極端に少ないですね。
水樹奈々のＳｃａｒｌｅｔＫｎｉｇｈｔのＣＤの横に近藤奈々のつがざくらがあるのには友人も戦慄していました。

ともあれ、なんとか弟子入りっぽいものは書けたので次からの修行はかなりさらっと書くつもりです。

では、今回もありがとうございました。

０８４　世界最速、セクハラはセクシャルハラオウンの略ではない。（前書き）

でもストライカーズの友人の嫁はセクシャル。

０８４　世界最速、セクハラはセクシャルハラオウンの略ではない。

「あー、授業めどいわー。お前ら別に俺が教えなくても出来る子だろ？俺信じてるもん、お前らのこと。っつかＡクラスの英語担当ネギ先生だろ。どこ行ったんだよあのゲロカス」

「学園長に呼ばれてました」

「マジかよあのじじい。授業中に呼ぶなっつの。今月の俺の給料１割り増しにしとこ」

「何権乱用なんだソレ」

「俺様特権活用」

「じゃあこの単語の発音だが……あこりん」

「え！？　う、ウチ？　んーと、あーすほーる？」

「声が小さいよ！もっと大きい声で！」

「……あーすほーる！」

「ぜんっぜん気持ち伝わってこない！もう１回！」

「アースホール！！」

「違う！」

「えー、正解何なんー？」

「アスホール。ルは気持ち分発音。アッソーゥくらいの気持ちでアスホール」

「おい、中学生に何教えてるんだよ先生！」

「え？ちうたんわかるの？」

「ネットゲームでしか聞かねえような単語を」

「結構使うけどな」

「使うな！！」

「ねえ千雨ちゃん、どういう意味なの？」

「私にきくな！！」

「おいコラじじい！！」

扉を蹴り開けて突入する。
何故なら天才だから。

「そんな雑な二段論法聞いたこと無いわい！！」

「どーでもいいんだよォ！！！！てめぇ何ウチの担任に公式ボイコットさせてんだよクソが！　おかげで俺が全クラスの英語やる羽目になるわズボンの股のところ破れるわで散々だわ！！」

「いやの、図書館島の最深部への行き方をのう……」

「ソレ本当に授業中にしなきゃいけなかったの？」

「う、うむ。いけなかったのじゃ」

「じゃあしゃーねーか。あ、今月の給料一割り増しな」

「ぐっ、ま、マジか？」

「折衷案を聞こう」

「面倒じゃから一割り増しで」

「」

「せめて何か言わんか！！」

「」

職員室戻ろう。

「あ、居たです！　せんせー！」

「おい、先生、呼んでるぞ」

「いや、麟先生しか居ないです」

「人違いじゃなかろうかと思ふ心ありけり」

「中途半端な古語ですね」

「で、何だよ」

「修学旅行の時に確信しましたが、先生は……魔法使い、ですね？」

「え？うん。そうだけど。それよりさんぽ部ののぼり作ったんだよ。見てみて。逆からみると『ちんぽ部』としか読めない。日本語の、ふっしぎー★」

「いや、それはさすがにさんぽ部の面々も嫌がるかと……」

「あ、そう？　あ、甲賀忍法帖！！」

「甲賀？忍法？さて、何の話でござるかな？」

「さんぽ部ののぼり作ったからあげる」

「おお、かたじけないでござる」

「じゃねー」

「あいあい」

「じゃあ、ゆえもばいばーい」

「あ、はい。失礼するで……いや、しないですよ！？」

「え？まだ何かあったの？」

「だ、だって先生魔法使いなんですよね！？」

「そうだっつってんだろ。で、なんだよ」

「そんなあっさり言ってもいいんですか？」

「え？そんだけ？良いだろ。別に隠してないし。あ、ネギー！」

「あ、師匠！何ですか？」

「魔法って一般人に言ったらまずいの？」

「し、師匠、オコジョにされちゃいますよ！！」

「まずかったらしいぜ☆」

「らしいって……ネギ先生も魔法使いだったですか」

「やっちゃったＺＥ☆」

「ど、どどどうするんですか！？」

「うろたえるな。為せば成る。そんな事より、たかだかメセンブリアのアホ魔法使い、略して阿呆使い如きに俺がどうこうされる訳も無かろう。むしろオコジョになって女どもに愛でられる生活も悪くないと思ったりもした」

「なんてアホなんですか……」

「アホだなんてとんでもない。バレたから開き直っちゃいますけど、麟さんはとても凄い人なんですよ。魔法世界最恐と言われるエヴァンジェリンさんの兄にして、そのエヴァンジェリンさんの何十倍も強い、生きる伝説なんですから！」

「ね、ネギ君、さすがに天下の往来でその話はまずいぞ」

「あーっ！タカミチ！」

「高畑先生……」

「アッー！！タカミチィ！！アッー！！」

「……。まあ知ってしまったものはしかたないか。あんまり広めないでくれよ」

「わかったな。ホラ行け。シッシ！」

「うぅ……」

「伝説の魔法使い……ですか」

「あがめよ」

「すいません、とてもそんな気分じゃないです」

「あ、そう？」

「魔法使いの事はのどかと話しました。なぜ魔法使いの事を秘密にしなければならないのか……今の先生の反応からしても全くわかりませんが、まず会話から察するに、エヴァンジェリンさんも明らか過ぎるくらい魔法使いですね」

「え？ごめん、聞いてなかった。何？」

「……わざと話を逸らそうとしているですか？」

「いや、さつまいもって分厚く切れば切るほど不味くなるんだけど、コレって要するにさつまいもが不味いって事でいいんだよな？」

「私は結構さつまいもが好きなんで、その質問に的確に答える事は恐らく不可能ですがそれは、麟先生がさつまいもが嫌いという事じゃないでしょうか」

「心当たりが無い訳じゃない」

「それはそうと、何で今まで気にもしなかったのかわかりませんが、あの巨大な世界樹や図書館島地下の動く石像、更にはある程度不自然な事でも自然に溶け込んでしまう土壌……これらも含め、ひょっとしたらこの学園はあなた達魔法使いが作ったと考えれば、非常に納得がいくのです」

「へー」

「い、いや、へーって」

「ふん、中々面白い推察だな」

「エヴァンジェリンさん！」

なんか忙しそうだからこっそりパンツのぞいとこう。

具体的に言うと、何故か肩幅くらいまで開いてる足の間に寝転がって下から覗こう。

「紐パン大使！」

「な、何で知って……ひゃわあ！？　な、ななな何でそんな事してるですか！？」

「乙女のスカートには秘密がいっぱい♪」

「で、その事を知ってどうしようと言うんだ、綾瀬夕映？」

「いつまで覗いてるですか！？というか覗きなんですかそれは！？そんな豪快に下に潜り込まないでほしいです！！」

「俺はゆえが紐パンである事を知り、更なる高みへ臨むつもりだ。何で紐パンなの？」

「ど、どうでもいいでしょう！！」

「それもそうだ」

「もう、お兄ちゃん、私のカリスマタイムもって行かないでよ！」

「すまぬ……すまぬ……」

「何なんですか、この状況……」

「仕切りなおしだＺＥ☆」

「その事を知ってどうしようと言うんだ？」

「私はただ知識が欲しいんです。知識を得る為には実践が一番です」

「ノーレッジの称号をくれてやろう」

「少し嬉しいです。ありがとうございます」

「とりあえず聞いては見たけどどうする？魔法教える？」

「良かろう。この俺様自ら教えてくれよう」

「本当ですか！ありがとうございます！！」

「ただし楽な事ではないＺＥ。わかってるんだＺＥ？」

「気に入ったですか、ソレ」

「気に入っちゃったんだＺＥ」

「と言う訳で、今日からゆえも参加することになった」

「結局そうなったんですね」

「これにあたり、ネギと保護者の方はまた走り回っておいで。ただし、今日は倉庫にあるバイクから自分で選んでね」

「はーい」

「誰が保護者よ！」

「はよ行けやクソボケ！　さて、ゆえよ、着替えてきたな」

「はぁ、まあ着替えましたが、これと魔法にいったいどんな関係が？」

「どんな関係って、そりゃアンタ、箒とか乗るやろ？で、箒乗った時に速度に耐えれなかったり「おまたこすれて変な気持ちなのぉ」とか、そんなんなったら大変やん」

「そ、そ、そんな事いう教師が居ることの方がた、たた大変です！！」

「は？何がよ？　まあいいや。そうならないように特訓するんだから。実際魔法ってそんな遅い動きな訳じゃないから動体視力は要るんだよ。ちょっと必死になったくらいで魔法の矢が見えるかっつの。俺は見えたけどな」

「何て無茶な……」

「という訳で、バイクに乗ってもらいます。あ、おーい、ネギ！！それ無茶苦茶速いから気をつけろよ！！」

「はーい！」

「じゃあ乗り方だけど、手取り乳繰り教えてやろう」

「見事なクズっぷりですね。よろしくです」

「なるほど、そう見ればこれも興味深いです。それに、結構楽しいです」

「そりゃ何より。ちなみに、俺等に乗った時全然楽しくなかったわ。空とか別に箒無くても飛べるし」

「飛べるですか！？」

「ああ。ある程度バランス感覚とスピード感覚に慣れたら連れてってやるお」

「お、おお、お願いします！！」

「お、おおおおおおおおお願いされます」

「じゃあ予行演習な。後ろ乗ってめっちゃ掴まって」

「は、はい。よろしくおねがいします」

久々の本気走りはできないから適当に流すか。

ふぉうーんふぉうーん！

パァァアアアアアンパァンパァァアアアアアアアアアパァンパァアアアアアア……

あ、ネギとあすにゃん抜かした。

「せ、先生！！も、は、はや！！」

「え?もっと速く!?欲張りさんめ!!」

パァァン!!パァン!!パァアアアアアアアアア!!!

「と、止めて!止めてくださいです!!」

「うん!」

必殺ジャックナイフ

／

→

このくらいの角度で停止する。

「お、降ろして、降ろしてくださいです」

「うん」

ガシュンと後輪を地面につける。

賀春で思い出したけど、もう年賀状の季節ですね。

俺は出す相手がいません。

「ううう、ひ、ひどいです」

「このくらいで根を上げるようじゃ箒には乗れんぞ。ま、ウソだけど」

「そんなウソいらないです!」

「箒に乗る時も防具はつけてほしいなって」

「こんな怖い思いしたら装備しないわけないでしょ！！」

「……その言葉が聞きたかった」

「先生！」

そりゃ違う人だ。

０８４　世界最速、セクハラはセクシャルハラオウンの略ではない。（後書き）

自失になるほど眠いです；。

豚野郎です。

あまりの眠さにキーボードさわってないと意識がブラックアウトしてしまうのです。

ってかたぶん１０分くらい寝てました。

エディタの文字、見渡す限り「ｒ」だもん。

ｒｒとかなってるもん。

ああ、そう言えば、今年のクリスマスも中止だそうですね。

もし中止じゃ無ければ何故かうちにあるアメリカ海軍の軍服を着て人通りの多い所に友人と出向き「ハッピーバースデー　ディアージーザス」と腕を振りながら野太い声で歌ったのですが。

さて、そもそもこんな更新が遅れたのはある理由があるのです。

口に出していいものかもわかりませんが、文字に起こすだけなので簡素に説明しますと、今更ながら催眠誘導音声にハマり直したのです。

原因や経過は言いませんが、結果だけで言うならこの二日間で体重が２キロほど減りました。

飯くらい食えっつの。

では、今回もありがとうございました。

０８５　世界最速「おしっこペロペロする話だから気をつけろ！」（前書き）

いろんな人の小説読んでたら妙な電波をキャッチしたのでそっちに手をつけていました。
まだ何に手をつけていたかは話せませんが、そのうち発表します。

０８５　世界最速「おしっこペロペロする話だから気をつけろ！」

「も、もうダメ……もるです……」

「うわぁああ！！！」

草葉の陰からこんにちは。りんです。
大変です。
ゆえがもるらしいです。

「こ、これどうやって脱ぐですか……」

「背中のチャックだ！」

「こ、この際仕方ない。脱がせてくださいです」

「うん。転移」

「ひゃ！寒……あ……」

おしょんしょんタイムだＺＥ

「い、いや、見ないでくださいです……」

「あばあばば、転移」

とりあえず風呂場に非難するぜ！

「ぐすっ、ひぐっ……滑稽ですよね。私が紐パンを穿いてるのはトイレが近いからなんです。パンツを穿いてるとおしっこもできないんです。だからすぐに脱げる紐パンを穿いていたですよ。さあ、笑ってください！」

「うふふ」

「笑わないでください！何がおかしいですか！
うぅ、うわぁあああぁ……」

どういう事なの

「落ち着きたまえ。急いては事を仕損じるぞ」

「もう仕損じた後ですよ。人に……しかも先生に漏らしてるところを見られるなんて。
こんな女なんて誰も好きにならないです。もう私の人生も終わったようなもんです」

「すっげえ興奮した」

「……は？」

「ゆえが漏らしてるの見てオラすっげえ興奮したぞ」

「そ、そんなウソ要らないです！人前で粗相する小汚い女なんです！！」

「ハァ！？小汚くねえわ！舐めるぞ！！」

「ええどうぞ！本当に舐めれるなら舐めてみればいいです！！」

っしゃぁあああああああ！！！！！

「ペロ……これは、テトラクロロジベンゾパラジオキシン！？ペロペロペロペロペロｗｗｗｗｗｗ」

「ひゃぁあああああ！？な、なぜ青酸カリとして幅広い世代に知られるシアン化カリウムの数万倍の致死性を持つ最凶のダイオキシン類の名前を言いながら舐めるですか！？」

「うわぁ、ゆえのおしょんしょんあったかいナリぃ……」

「さ、最悪です！人として最低です！！」

「まさかそんな褒められるとは思ってなかったの。あれ？昨日『ハイエンシェントコーラ・無炭酸』飲んだ？」

「死んでください！！！」

「そんな事より皆さん見てください！！ボクはさっきまで蒸し暑いライディング用革ツナギを着ていた上に今は下着しか着ていない少女のおしっこを舐めているんです！！！蒸れた少女臭がたまらんちｗｗｗｗ」

「お、お嫁にいけないです！！」

「っしゃ新シラナミゲットォォォオオオオ！！！」

「お背中流しに来ました」

「おっす茶々丸」

「ひゃわあああああ！？？？？？？な、な、な、なんで！？」

「私も夕映さんのお小水をペロペロしに着ました」

「さ、サイテーの一家です！！」

あ、パン一で走って逃げた。
そのまま魔方陣の上乗って出て行った。
もうパン一で一日経ってたんか。

「おっすゆえー」

「話しかけないでください！！！」

「ウワァァァアアアアアアン！！」

「ゆえ、麟先生泣いて行っちゃったよ。何かあったの？」

「それが……」

い、言えない！
いくらのどか相手とはいえ、おしっこを漏らしてしまったのを見られた上に半裸でおしっこを舐められてたとは！！
さらにその後羞恥に耐え切れずにびしょぬれの下着だけで寮まで帰ってきたなんて！！

「な、なな、何でもないです！！く、くれぐれも『いどのえにっき』なんかで、の、覗いたりしないように！！！」

「ひゃわい！！？」

「ゆえさんおっすー」

「喋りかけないでください！！」

「ひぃぃぃぃぃいいいいいいいん！！！！！！！」

「ど、どうしちゃったのよ、ゆえ？」

「昨日からこの調子なのー」

「へぇ……はぁーん！！ラブ」「なんて腐り爛れた想いじゃないのは確実です！！」

「なぁんだ。じゃあ純粋に嫌ってるの？」

「そうです！！」

あの場には茶々丸さんも来てました。
それに、わざわざ密室に連れて行ったのがタチ悪いです。
あれ？でもあの時茶々丸さん、着替えを持ってたような……

「ゆえっちー」

「寄らないでください！」

「おべんべるんべろぼろうぇあいおうぇあいお！！」

「あれは最早泣いてると言っていいのかしら？」

「どうでもいいです！！あんなへんｔ……」

「ん？あんな何？」

「な、な、なんでもないです！！」

「――？？」

「何読んでんのー？」

「これはあｙ……何でもいいでしょう」

「うっ……ぐすっ……ズビビズバボビビッシュ！！（鼻をすする音）」

「ふん！！」

何で話しかけるですか？
ずっとあんな態度で対応してるのに！
それに、すぐに言いふらされると思ってたのに誰も気にした風も無いです。
あの場にいた茶々丸さんでさえ……。
いや、茶々丸さんはロボットっぽいのでまだ良いとしましょう。
でもあの時、他に誰か……
あ、明日菜さんとネギ先生！？
確かあのサーキットではあの二人も居たはずです！！
うぅ、顔合わせづらいです……

「あ、夕映ちゃん」

「ひゃわい！？あ、あ、明日菜サン！？」

「な、何よ？」

「い、いえ、どうしたですか？」

「――？　いや、もう４日ほどあそこ来てないからどうしたのかな

って思って」

「き、聞いてないんですか？」

「え？もしかしてまだ体調悪いの？じゃあこれない訳ね」

体調が悪い……？

「誰に聞いたですか？」

「え？麟（アイツ）先生だけど、どうして？」

「い、いえ、なんでもないです……」

「ふうん、お大事にね」

言ってない？

明日菜さんはバカだから嘘を隠すのは苦手です……

じゃああの時茶々丸さんは場を和ませようと冗談を？

いや、しかし麟先生は本当にな、な、舐めていたです！

でも飲尿研究法という民間療法も……しかしそれだと……

休日だから先生には会わずに済むです。

「ゆえゆえ、どーしたの？」

「あ、い、いえ、何でもないです！」

「最近変だよー？」

「うぐぅ……」

これというのも、麟先生があんな事するから……！！

今日麟先生は大阪に出かけるらしく、休みです。
何故昨日のうちに行かなかったんでしょうか。
まあ、声をかけられなくて清々します！

「ゆえ、どうしたの？機嫌わるそうだけど……」

「別に悪くないです！」

「そ、そう？」

「あ、ゆえー。本読んで歩いてると危ないよー」

「あ、すいませんのど……麟先生」

「何読んでるの？」

「ハァ……。ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルの『精神現象学』です」

また飽きもせず声をかけてきて……
少しからかってやるです。

「思想家の？」

「し、知ってるですか！？」

「有名人だからな。ドイツ観念論哲学だけじゃなく普通に哲学の話でも出るレベル」

「今まで会った人の中で知ってる人は居ませんでした」

まさか、見るからにアホっぽい麟先生が知っているとは思っていませんでした。

「哲学とか根暗な中二病疾患の男子高校生でも興味ない分野だろ。そら女子中学生が知る訳無いわ」

「私がえげつなく根暗で手遅れなレベルの中二病疾患者だと？」

「いや。綾瀬泰造って言ったら超有名やん。『眼鏡』『煙草』『東

大』で誰連想するって言ったら綾瀬泰造やん」

「ほ、本当ですか!?」

「うん。『メガネ』と『単車』を入れ替えたら俺になるそうで。東大紛争の時の用心棒についてたし」

「ほ、他には!?先生から見てどんな人でしたか!?」

「温和でおおらかなひねくれ者って感じかな。……ああ、なんか手紙によく『愛を知らぬ者が本当の強さを……』なんだっけ?」

「『愛を知らぬものが本当の強さを手にすることは永遠にないだろう』……おじい様の座右の銘です」

「ソレだ。なんかGP優勝した時に送ってきた手紙にも書いてあったわ」

「そうなんですか。もう少し詳しく聞いても?」

「ああ。なんか『世界一気持ちのいい変人』とか言われてんきっぼぢいいいいい!!」

「じゃあ、おじい様の言ってた『人間特急』というのは」

「時間がないとき便利に使われてた悲しい男やね」

「他にはどんな事があったですか?」

「アレは学生運動も終盤の時だけど……」

「そ、それでその後どうなったですか！？」

「『思想も思考も人により違う。お前の見てる赤は俺から見たら青だ』とか言うから、『じゃあお前も青を赤と認識してるならそこに見え方の違いがあっても考え方の違いは無い』って」

「ですが、その違いがある可能性を認識する事によって考え方にも違いが生じてくるのでは？」

「同じ事言ってたわ。だから『何色を赤と見ようが、それがそいつの赤である限り、緑も青も赤なんだよ』って言って」

「また思考放棄ですか」

「頭はそれほどいい方じゃないんだよ。で、あんま覚えてないけど信号の話になってた」

「青というか緑というかですか？」

「いや、左から青・黄・赤に並んでるように見えて、実は全然違う色じゃねえのかって話。違っても感じ方も役目も一緒だからもういいじゃんって言ったら良くないらしい」

「考えるのをやめたら哲学は終わります」

「だから次回持越しになったんだけど、次回は無しか。残念だったり、残念じゃなかったりする」

「おじい様は帰らぬ人となりましたから……」

「宗教的な意図はないけど、今頃転生して楽しくやってるわ」

「お心遣い、ありがとうございます」

「そういうアレは無いけどな」

「話してたら元気になったです」

「さよで。あ、職員会議すっぽかしてた。んじゃ行くわ」

「はい、また」

「ん。あ、そうそう、セパレートタイプのツナギ買ったからまた来いよ～」

セパレート？分離されたツナギ？
ツナギって言うとこの間の……
っ！！
わ、私とした事が、おじい様の話に夢中で完全に忘れてたです！！
でも、気にかけていてくれたですか……
考えれば、麟先生は６００年を生きる大魔法使い。
あまりに長い時を生きたために、考え方もスレてしまったのかもしれません。

でも、純粋に好意で取ってくれた行動だとしたら、私はなんて失礼な態度を取っていたのでしょうか……。
思想も思考も人によって違う……ですか。

「のどか……」

「どーしたの？」

「私は……麟先生が好きなんでしょうか？」

「ブーーッ！！」

「な、な、何で毒霧攻撃を！？」

「も、もしかして、ここ一週間ほどゆえの調子がおかしかったのも！？」

「はい。実は、麟先生の事を考えていたのです……」

顔を拭きながら言うべきなんでしょうか……
いえ、のどかは親友です。恥ずかしい話ではありますがここは意を決して言うべきですね。

「実は……」

私はあの日の事、そして今日までの事や思ったことをのどかに話しました。

のどかは、終始唖然としていましたが。
そりゃ、私だっておかしいと思います。
何でおしっこ舐められてそこから好きになったのか。
いや、まだ好きと決まった訳ではないのですが！

「な、なんかすごいね……」

「我が事ながら、私もそう思ってます」

「でも、ゆえが麟せんせーの事好きなんだったら私も応援するよ」

「その気持ちはありがたいのですが、私もまだ麟先生のことが好きかどうかわかっていないんです」

「そうなの？」

「今の話を聞いていて、どう思ったですか？」

「私は……いいなぁって思ったよ。私はネギ先生に話しかける勇気もないし、先生から話しかけてくれることも滅多に無いもん」

「そうですか……。って、そうではなくて、私が麟先生の事を好きなのかどうかという話ですよ！」

「え？違うの？」

「わからないんです。本当に好きなのか」

「でも、その……お、お、お……こを、な、舐められても嫌いじゃないなら、好きなんじゃないかなぁ」

「そこを伏せるなです」

「へ？　あ、あ、いや、そういう事じゃなくてね、その、うまく言えないけど、そんな事をされても嫌いにならないんだったら、やっぱり好きなんだよ。それに、さっきの麟先生の事を話してる時のゆえの顔って、なんていうか、幸せそうだったし」

「そ、そんな幸せそうな訳ないじゃないですか！！何を根拠に！！」

「こ、根拠って」

「……すいません、取り乱しました。そうですね、まだ結果を望むのは早すぎました。もう少し様子をみましょう」

「でも私、麟先生って素敵だと思うよ。妹にしたいもん」

「見事にハーレム囲ってる男ですけどね」

「そ、それはホラ、甲斐性があるって事で……って何で私がフォローしてるのー」

「ふふ、ありがとうです、のどか。まだこの気持ちはよくわかりませんが、少し前に進めそうです。のどかも頑張るですよ」

「え!?わ、わたしはまだいいよぉ」

のどかは女の私から見ても魅力的なので、ネギ先生ももう少ししたら放っておかなくなるでしょう。

私も、久々に先生の家に行ってみようと思ったです。

０８５　世界最速「おしっこペロペロする話だから気をつけろ！」（後書き）

幼児を囲ってる主人公が
「俺はロリじゃねえ！」
と言うのを読むたび
「んなもん見りゃわかるわ」
と思う紅の豚野郎です。

こういｓんが遅れてたけお、いろんあ人のしょうせちをよんでましｔｓ
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ４９５７ｏ／
こんな面白い小説を作りたいので僕は読みますごめんなさい
他の人も早く読むべき死にたくないなら読むべき
ごめんなさいリアル時間ロストしたくないんです

ここ数日間は色々してました。
アルトネリコ３のクソフレ様等身大タオルが届いたり、幼な妻等身大タオルタオルが届いたり、近くの店でルカフィギュアが売っていたけどお金が足りなかったり、演歌の練習したり、ココナの等身大タオルが届いたり、あの夢に手が届かなかったり、ティリアの等身大タオルが届いたり、アカネの等身大タオルは注文してなかったり。

ちなみに、夕映のおじいちゃんの話ですが、『アンサイクロペディア』から引っ張ってきました。
妙に信憑性を持たせる書き方で戦慄したので、ぜひ皆様も『綾瀬泰造』でググってみてください。結構上のほうに来ます。

では、今回もありがとうございました。

０８６　世界最速もバイクから落ちる。（前書き）

転倒：転がれ
スリップ：滑れ
追突：祈れ

０８６　世界最速もバイクから落ちる。

「おいすーゆえー」

「まっ、まま、またお世話になるです！！」

「何急に話しかけてきてるわけ？」

「え……あ……そうですよね、すみません。舞い上がってたみたいです」

「おい綾瀬夕映、一々気にするな。お兄ちゃんの発作だ。ほら見ろ、うれしそうだろ」

「珍しく無表情です」

「うれしいです」

「本人もこう言ってる」

「言ってます」

「じゃあよろしくお願いするです」

「何急に話しかけてきてるわけ？」

「おい、その辺にしとけよ、先生」

「ｈａｉ！」

「今日は私も走る。で、お前用の着替えだが、コレだ」

「なるほど。これがセパレートタイプのツナギですか。ですが、セパレートの名の通り分離されている時点で繋がっていないのでツナギという表現は間違っているのではないかと思います」

「別に表現方法としてそう言ってるだけで、実際はバンクセンサー付きレザーパンツとパッド入りレザージャケットなんだがな」

「なるほど」

「ちなみに今週の月曜お兄ちゃんが休んでいたのは、大阪までソレを受け取りに行ってたからだ」

「受け取り？」

「配送だと日が遅れるから直接受け取りに行ってた。ちなみに、オーダーメイド品だ。
大阪府大東市の大阪産〇大学裏に本店を構えるバイクショップ。ウェアもパーツも本体も揃う『ＲＳタイチ』をよろしく」

「な、何を言っているのかはわかりませんがオーダーメイドという事は結構お金もかかったんでしょうか」

「さあな。金なら幾らでもある。でも品質は一級品だ」

「そうですか……」

ツナギを見てみると、黒の基本色に赤と黄色の線が入ったデザインです。

「このデザインはどこかで見た事があるです……」

「ふん、わかるか。お兄ちゃんのバイクやツナギと同じデザインだ。そこにもあるだろ。セパレートじゃない市販のツナギはＳＨＩＲＡＮＡＭＩ　ＲＥＰＬＩＣＡとして一着２５万で売られているぞ」

「に、にじゅうごまん！？」

「まあ、そこそこのツナギだとそんなもんだろ。そこらに掛けてあるツナギもそんなもんだ。ホラ、さっさと着替えろ。あんまりお兄ちゃんを待たせるな」

「は、はいです！」

「じゃあ今日もコースを流すけど、何かあったら道の脇に停まっといて。路から出れそうになかったら発炎筒をカウルの裏につけたからそれに火つけて。それすら無理そうなら祈れ」

「「「はい！」」」

「行け」

おちんちんびろろろーん……

「俺は何を考えているんだろう……宇宙の真理ですね。
おい茶々丸」

「はい、ピット要員の茶々丸です」

「何かあったらインカムで連絡。俺も走る」

「いってらっしゃいませ、麟様」

「うむ」

倉庫から高速巡回仕様、規制ガン無視のＧＳＸ－１３００Ｒ、つまり隼を引っ張り出す。

１分ほど巡回走行してるとＮＳＲ８０に乗った夕映が居た。

「ヤエー！」

とかほざきながらピースサイン。

さらにしばらく巡回走行するも、ＮＳ２５０Ｒに乗ったネギ・あすにゃんペアが見えない。
見えないまま一周しちゃった。

「茶々丸、ネギ・あすにゃんとの距離は？」

『４５秒です』

「エヴァは？」

『１：３６秒です』

「オーライ」

ちょっと本気出す。

出しすぎた。
５分で全員追い抜いた。（綺麗な５・７・５だと感心するがどこもおかしくないな）

まあバイクの差はデカいな。

ピットで休憩してるとみんな入ってきた。

「止まった瞬間暑いー」

「それが青春よ……
とりあえず、ゆえはもう少し好きに走っといて。」
「はいです」
「ネギとあすにゃんはこっち来い」
「「はい」」

「お前ら二人は思ってたよりだいぶ筋がいい。ぶっちゃけ天才だ」

「えぇ!?そ、そうなんですか？」

「ホントに!?」

「ああ。間違いなく天才。魔法使いやめてプロレーサーにならね？
ああ、そう。ならない。まあ考えといて。
それはそうと、お前らまだこけた事ないよね」

「はい！」

「無いわね」

「じゃあこけてもらう」

「何でこけなきゃならないのよ？」

「何でって、お前これから移動手段としても使う可能性があるのに
こけた事無かったらいざこけた時大怪我すんぞ」

「確かに……」

「っつーわけでちょっと派手にこけるから見といて」

ピットの入り口まで戻って思いっきり加速する。で、出口あたりで急転回。

グリップが死んでタイヤが空転するけど、それを制御せずに滑りっぱなしにさせとく。

急にグリップが戻って逆側に吹っ飛ばされる。

これをハイサイドといいます。

２００ｋｍ／ｈほど出してたからバイクは吹っ飛んで、俺は軽いからもっと吹っ飛ぶ。

空中で体を丸めてそのまま着地。

２０ｍｋらい転がって止まる。

「と、こんな風に」

「だ、大丈夫ですか！？」

「かなり吹っ飛んでたけど」

「これは最強最弱関係なくダメージを受けない転がり方だから。ちゃんと見てた？」

「いえ、バイクの挙動ばっかり気になって……」

「ヴォケッ！こけかた見ろっつってんだろーが」

「うぅ……すいません」

「まあいいわ。ヘルメットかぶってグローブつけてから体丸めて」

「はい、こうですか？」

ネギ形態変化　モード：アルマジロ　に変形する。
そのままネギを持ち上げる。

「え！？ちょ、ちょ、師匠！？」

「いいから。絶対その体勢を崩すなよ」

「ちょ、アンタ何するつもりよ！？」

「うるせぇ！！これでもくらえ！！」

ネギをあすにゃんの横に時速１２０ｋｍくらいで投げる。
ネギはそのまま転がって２０ｍほどしたら止まった。

「ねえ、ネギ動かないんだけど大丈夫よね」

「いけんだろ。もういいぞー！」

「し、死ぬかと思いました！！」

立ち上がって言うネギ。

「で、どっか痛い？」

「体中が……あれ？痛くない？」

「ホント？大丈夫なの？」

「お母さん、過保護はいいんですけどお子さんもこう言ってる事ですから」

「だれがお母さんよ！！」

ネギは体を動かして不調なところは無いか確認してる。

「今のこけかただと体に行くダメージはかなり少なくなる。と言っても、その装備があって初めての話だから。Tシャツとかでも同じ防御力があると思ったら大間違いだから。じゃあ次、あすにゃん」

「えぇ！？わ、私はいいわよ……」

「良くない。嫌ならそのまま投げるけど」

「わ、わかったわよ！」

「神楽坂アルマジロ、いっきまーす！そぉい！！」

ごろごろろごろ……

「痛くない！」

「だからそう言ってんだろーが！！！じゃあ次はスリップした時の対処法な」

氷の矢で地面を凍らせてその上を走る。
前輪も後輪もグリップが無くなってそのまま車体が落ち込むから体を丸めてそのまま横向きに滑る。
しばらくして止まった。

止まったんだぜ！

「こんな風に、スリップの時は転がろうとせずに滑るようにしなさい」

「はい！」

「とは言っても、今お前らが痛くなかったのは装備と俺のサポートがあったからこそであって、いきなりできるなんて上手い話あるわけないから肝にめいじておいてクダサーイ！」

「はい！」

「じゃあもう１８回走ってきて。いつもより２０ｋｍ／ｈ増しで」

「えぇ！？そんなん曲がれないわよ！」

「だからそれが目的だっつってんだろーが！！こけて首折れても死んでなかったら治すから行ってこい！！」

「はい！」

「ホントに治すんでしょうね？」

「じゃあ治さないから行ってこい。な？」

「な？　じゃないわよ！！治しなさいよね！！」

ふはは、アホどもめ。いつの間にか走る走らないから治す治さないの話に変わってる事に気付きもしないとは。

うふはは！

「あぁー、１００回はこけましたー」

「ちなみに二人のこけた回数はネギが６０回であすにゃんが７２回な」

「うぐっ！」

「で、即死レベルの怪我は二人とも０回。まあ単独でそんな怪我しようと思ってもできないけど。ほったらかしといたら死ぬレベルの重体がネギ２回、あすにゃん４回。重傷は二人とも１回。全治２週間以内の軽傷は３０回ほど。まあだいたい半分くらいは上手く転倒できてるわ。

ちなみに、重要なのはここからだけど、２０ｋｍ／ｈ以下でコーナ

リングした回数、ネギ１６回、あすにゃん１４回。死ね」

「し、死ねって」

「だってお前らアレだよ。いつもより２０ｋｍ／ｈ速く走れっつってんのに２０ｋｍ／ｈ以下って、お前らマイナスキロメートル毎時で転回してんのか。ビビり杉だっつの」

「そんなの回れる訳無いじゃない！！」

「お前ら二人とも１６ｋｍ／ｈまで落としてた１４コーナー、あこ６０ｋｍでも余裕で回れるから。ちょっとバイク寄こせ。茶々丸！モニター！スピードメータータコメーター付き！」

『はい、このまま出番なしかと思っていました。各計器異常なしです。カメラ位置は？』

「俯瞰で」

『はい。俯瞰視点に設定完了。いつでも大丈夫です』

「なんかどんどん茶々丸さんが何でも出来るわね……」

「見とけよ。コーナーのＲもそうだけど、角度も頭の中に入れて走っておけば最強。まあお前らにここまでなれとは言わないけど、それなりに走ってもらわないとね」

で、出発。

ちなみにゆえはピットに誘導しておいた。

「と、まあコーナリングごとに時速６０ｋｍ／ｈぴったりで一々カメラにピースしながら走ってたけど、別に危なくも無い挙動だっただろ」

「凄いです、師匠！！やっぱり映像で見るより生で見たほうがずっと迫力があります！」

「まあカメラ越しだけどな。要するに、ちゃんと考えて走ったらあのくらい余裕なのよ。まあ今日はもういいや。明日からがんばれ。ゆえ、道交法は？」

「ほぼ完璧です」

「じゃあ明日の朝から夕方まで（ダイオラマタイムだから外では一瞬の時間）は座学な」

「はい！」

「えぇー！」

「えぇーじゃねえんだよ！じじいに言ってお前らも学園都市内だったらバイク移動許可させてやろうにも法律わかってねえとそんな事もできねえの。おめえ新聞配達、バイクだったら超効率化できるか

ら。以上、異論は受け付けない、晩飯！」

「「「はーい」」」

翌日、ネギは天才だからすぐに覚えたけどあすにゃんは1週間くらいかかる。

ゆえは変態だからもう覚えてた。大したもんだぜ……。

０８６　世界最速もバイクから落ちる。（後書き）

転ける話でした。
さて、バイクに乗る人、特にサーキットなんか行ったりジムカーナする人だと、かなりこけ慣れていると思います。
かくいう僕ももう冗談抜きで４桁はこけてると思います。
でも、やはり大怪我するのは一般道で。
皆さんも気をつけてください。僕はもう一個無くしたら透析です。
友人達には「お前なら血管にタバコのフィルターつけといたらいける」という根拠の無い不死身伝説を押し付けられています。

それはそうと、前回はっちゃけすぎたので今回はかなりおとなしい話になってしまいました。
不本意です。
次は何書こうかな。
そろそろデートか。
では、今回もありがとうございました。
豚野郎でした。

０８７　みなさんのおかげで１００コメ到達しました！（前書き）

記念すべき１００件目のコメントはもみじさんです。
今日はそんなもみじさんのリクエストを極限まで曲解して書きました。

オチが弱いなぁ

０８７　みなさんのおかげで１００コメ到達しました！

Ｓｈｉｒａｎａｍｉ－Ｄｉｏｒａｍａ　０８

オンロード３．６００ｋｍとオフロード２．０５５ｋｍの二つのステージが合わさって最強に見えるコース。
オンロードの方はほとんどストレートだから難易度ゼロだけどオフロードの方は山というか崖の上を走るタイプのドＭなステージだ。
ちなみにガイドロープもないから落ちたら終わり。

「ここをはしってもらいまうまう☆」

「む、むむ無理ですよぉ！！」

「そ、そうよ！ここ、幅２ｍくらいしか無いじゃない！！」

「いや、少なく見積もっても３ｍはあるから。ま、実際走れるのは１ｍほどだけど☆
ちなみに。この坂を下ってそのままあっちに抜ける。で、その後右に少し平らな所あんだろ？あこが終点な」

「無理です！！無理です！！！」

「いいか、ネギ。やるかからないかじゃない。やれ」

「で、でｍ「やれ」」

「ちょ、わ、私はいいのよね？」

「何で一人だけ助かる話になってんだよ。やれよ。エヴァ、手本」

「うん、お兄ちゃん！」

エヴァがＣＲ８０に跨ってエンジンをかける。

「いいか。ここは下り坂だから2速発進な」

エヴァがスタートして崖を渡る。その間も加速してる。

「で、ここからあの間で4速まで上げる。そのまま前に進もうとする慣性をつかって壁を走ってあっちがわまで渡りきる。おーけー？」

あっちがわでエヴァが手を振ってる。

「おーけーじゃないわよ！！できる訳ないじゃない！」

「あっそ。じゃああすにゃんはいいよ。で、ネギはどーする？」

「え！？あ、あぅ……や、やります！！」

「えぇ！？わ、私もやるわよ！！」

「その言葉が聞きたかった」

「先生！」

「ま、落ちそうになったら助けてあげるから。心置きなく落ちろ」

「落ちませんよ！」

「じゃあ行って鯉」

すかさず念話で茶々丸に連絡。

『撮れてる？』

『腰の引けてる所からバッチリです』

「行きますよ！」

「おう」

「それじゃあスタートします」

「おお」

「走りま「はよいけや！！」」

「うぅ」

やっとエンジンを始動させるチキンマン。

「スピード落としたら死ぬからなー」

「はいぃぃいいい！」

「ほれ、池」

めっちゃアクセルひねったせいで若干ケツがスライドしてるけど難

なくクリアしやがった。
ツマンネ。

「ほれ、ネギも普通に行けてただろ。行けよ」

「わ、わかってるわよ！！」

何だよこの謎のツンデレ具合は。
神楽坂・アスナ・ラングレーか。

エンジンをかけて
うわ、めっちゃ吹かしてる。
何の意味もあらへんのにめっちゃ吹かしてからの急にクラッチ離したからバイク吹っ飛んでいったｗｗｗ
さらばＣＲ８０ｗｗｗｗ

＜ガシャーン

「……」

「……やめない？」

「……従者（笑）」

「くぅっ！もう一回！！」

ＣＲを指輪に戻してからもう一回出す。

「ほれ（笑）」

「見てなさいよ！！」

今回はスムーズに行ったけどお姉さん、そこは右に行くところであって山登る所じゃない。
ああ、登りきった。どんだけアホやねん。

「どうよ！！」

「そこちゃうわボケ！！」

「え？　あーーーっ！！！」

『あっはっはっはｗｗｗｗ』

「念話越しに笑うなｗｗｗ」

「死ぬかと思いましたよー」

「生きてる証拠だ。有り難味を噛み締めろ」

「ってか何であんな事する必要があったのよ？」

「さーて、次の撮影は茶々丸でいいかなー」

「はぐらかさないでよ！ってか撮影！？」

「え？何？聞いてなかった。そんな事より茶々丸？」

「はい、ストッピーでマスターと並走しようと思っています」

「もうそんな事できんのかよ」

「ええ。どんぶりを２ｍの高さまで両手に積んでハイヒールをはいた状態で足を引っ掛けられても転ばない（どんぶりは落ちる）オートバランスシステムが搭載されていますので」

「ねえ、そのすとっぴん？って何よ？」

「ストッピーってのはジャックナイフした状態で動く技術の事な。後輪を浮かせたまんま走らせるの。かなり難しい。ちなみに牽引トラックと荷台の連結部分がＶの字に折れ曲がるジャックナイフ現象とは何の関係も無い」

「……？」

「っつか見りゃわかんだろーがファッキン」

Ｓｈｉｒａｎａｍｉ－Ｄｉｏｒａｍａ　０１

「お兄ちゃん、見ててねー」

「言われんでも穴あくまで見続けるっちゅーねん」

「行きます」

二人がＮＳＲに乗って加速する。
同時に前ブレーキをかけて後輪を浮かせたままバイクを走らせた。

「おぉっ！！」

「凄っ！！」

そのまま１０ｍほど走って同時に前輪をロックさせる。
で１８０度ターンしてからウィリーで戻ってきてジャックナイフで停まる。

「スゲー！！角度がスゲー！！
どこまでー
どこまで俺をー」

「「「魅了するんだーい？」」」

「ところで麟様、さよさんは何をするんですか？」

「え？」

「さよさん」「え？」

「さよさ」

「自分それ何変なカチューシャつけてんの？」

「これはカチューシャじゃなくて外部機器電波送受信用アンテナですよ」

「で何やったけ？」

「あーだから、さよさんは何を……麟様？麟さま？」

「え？」

「さよさんは何をするのか聞いてるんですよ」

「自分何で変なカチューシャそれつけてんの？」

「ですから、これはカチューシャじゃなくて外部機器電波送受信用アンテナですって」

「え？」

「外部機器……」

「さよー！さよ何すんのー？」

「タイムアタックです！」

「今のやりとり必要だったの？」

「長く生きるとつまらん事でも逆に面白くなってくるんだよ」

「少ししか生きてないので何でも面白いです」

「ああ、そう」

実はさよってかなりロードレースが速い。
実はシラナミでは2番目に速い。

俺＞さよ＞エヴァ＞茶々丸

でもロード以外ならエヴァの方が速い。

オンロードドリフト走行はこいつらにはまだ早いって訳さ。

「後ろから撮影するのでさよはいつも通り走るがよろしい」

「はい」

「行け！走れ！！」

「はい！」

ちなみに車輌は二人ともＨＯＮＤＡ　ＲＳ５００Ｒだ。
むっちゃ速いで。

まあこれも滞りなく終了。

「さよめっちゃ速いな。
正直プライベーターで表彰台乗るレベル。
何でこんな速いねん」

「愛……ですかね」

「お兄ちゃんは何やるの？」

「何しよっかなぁ」

「ひどいですー」

「何でも出来るからエクストリームフリーライディングでもしようかな」

「何それ」

「ＳＤ－０」

しらなみだいおらま零とは
あのスケボーとかが走ってそうな市街地風の、謎の斜面とか明らかに無意味な手すりや階段とか意味不明な噴水に加え路面電が走って

るマジモンのジオラマ街だ。
ワシが育てた。

「今日の俺は世紀のトリックスターだ！」

「お兄ちゃんカッコカワイイ宣言！！」

「目が離れすぎな気がする」

以下音声のみでお送りします。

「ま、まさかあの構えは！？」

「麟様……あの技を！？」

「で、出たァーー！！リジェネレーション・オフ・スピンだー！！」

「空中で華麗なターンを決めて真下に下ろす高等技術ですね……！」

「いきなりあの技を出すなんて……お兄ちゃん本気なの！？」

「まさかその返す刀でジャグリング・トラピーズを出すとは！！
麟様……恐ろしい子！！」

「手すりからのスライドを利用して路面電車に乗った！！」

「アレが見れるというんですか……！！」

「そのまま電線の上を走って……インフィニティ・ロールだ！！」

「めっちゃ回ってる！！お兄ちゃんめっちゃ回ってるで！！」

「フィニッシュはウィリーサークルからの……」

「アレは伝説のストリングプレイスパイダーベイビー！！」

「これは歴史に残る名パフォーマンスでしたね……」

以上音声のみでお送りしました。

まさかバイクの上でヨーヨーやったらあんなに沸くとは思わなかった。

みんなもＢＡＮＤＡＩのハイパーヨーヨーをよろしく☆

「麟様、動画をようつーべにアップロードしましたよ」

「ぱっちり二重で丸顔幼女にしか見えない俺に隙は無かった」

「フルフェイスでしたけどね」

「まさかそんな盲点があったとは！！」

「ふふふ、一週間後が楽しみですね」

「臨む所だぁ……ハァ……」

――一週間後――

「お前らに集まってもらったのは他でもある」

「あるんですか」

「無い。
先週、全員バイクで一見無意味に思えるかもしれない無茶をしてもらったのは記憶に新しいだろう」

「アレのせいでネギ三日ほど杖で飛べなかったらしいわよ」

「どうでもいい。
それをごーぐるのようつーべにアップロードして、その再生数を競うという何の意味も無いことの為にお前らには無茶してもらったんだが」

「ちょ、何の意味も無かったんですか！？　自分の恐怖に打ち勝つとか！！」

「え？何意味のわかんない事いってんの？死ぬの？
で、当然のように俺の動画が一位になるのはわかってたから、俺の動画を覗いたお前らで一番の奴にＫＥＩＨＩＮをっと……景品をやろうという訳だ」

「何で言い直したの？」

「キャブみたいだからだろーが。
ちなみに俺の動画再生数は、えー１２０３５５。評価の高いコメントは

『コイツ白波麟だろ』
『バイク動画じゃなくね？ってかヨーヨー動画じゃん』
『ＣＲＡＺＹ！！　ＸＤ』

ネームバリューの一人勝ちだ」

「別に威張る事でもないよね」

「では（俺を除いた）第１位！！はちょっと急ぎすぎたな。最ケツ！さよ！！」

「えぇー！！そうなんですか！？」

「そうなのよ。
あの凄さがパンピーには伝わらない。
ちなみに評価の高いコメント

『プロだろ』
『イタリアのロレンツォオートサイクルの者ですが、あなたをスカウトしたいです』
『どこここ？』

こんな感じ」

「で、第二位！！と第一位、結局３組しかなかったね！
二位がエヴァ、茶々丸
一位がその他だ！」

「ちょっと、何で一位なのに余り物扱いなのよ！！」

「あんな死にそうになったのに……」

「黙れ小僧！！お前にサンが救えるか！！
エヴァと茶々丸の方のコメント

『これはジャックナイフじゃなくてストッピーですよ』
『ＮＳＲでウィリーとか正気じゃないな』
『ＳＨＥ　ＩＳ　ＭＹ　ＷＩＦＥ！！』

ちなみに一番下のコメントしたアメリカ人は、わざわざあっちまで

行ってＯＨＡＮＡＳＨＩしてきました」

「うわぁ」

「そいつのリアルワイフにもチクりました」

「流石麟様」

「で一位のお前ら

『かわいそうに』

『彼らはこの後スタッフがおいしくいただきました』

『これ２年くらい前に流行ったよね。２年くらい前に見たわー』

と、こんな感じ。再生数はだいたい二万。

商品は俺の血液配合ドリンクだ」

「えぇ！？」

「要らないわよ、そんなの！！」

「ハァ！？じゃあ私が貰うぞ！！」

「待て待て、ネギよ。魔力は生まれつき鍛えようの無いものだと聞いてるな」

「え？はい。そう教えられています」

「でも俺の血を飲んだら魔力が増えるとしたら？」

「えぇ！？ほ、本当なんですか！？」

「ああ、本当だ。私もお兄ちゃんの血を飲んで魔力が元の１００倍以上だ」

「という訳で、持っておいても損は無いぜ。売れば億はくだらない」

「お、億！？」

「いや、でもその話が本当ならそのくらいは……」

「いいから持っとけ。お兄ちゃんも尺が伸びすぎて困ってるんだよ」

「お前ら勝手にメタさえｒた奴の気持ち考えたことありますか？
マジでぶん殴りたくなるほどむかつくんで
止めてもらえませんかねえ・・？
事前にメ多発げんされるとわかっていれば反抗も出来ますが
わからない場合手の打ち様が遅れるんですわ？お？
人の意見に流される糞ばかりなので本人の意見が遅れると捏造で
好き放題叩かれまくられてマジで殺す。
ちょとｓＹレならんしょこれは・・？メタはるげんは豚野郎に断ってやれよ。
これからはそれが出来ないやつが悪者でＦＡ！それくらいも出来ない卑怯者はマジでかなぐり捨てンぞ？」

「うわ、今日一番の難文ね」

「これが普通にわかるようになればお前らも手遅れだ」

「私とマスターは完全に理解できます」

「何て言ってたんですか？」

「『おなかすいた』」

「今日は遅いからもう帰りなさいっつってんだよ。ちなみに魔力が切れた時に飲むと、限界値は増えないけど魔力が回復するという素敵な特性もあるから２４本あげよう」

「えぇ！？こ、こんな貴重なものを！？あ、ありがとうございます！！」

「かまわん。じゃあな。気をつけて帰れよ。寮の前まで絶対に振り向くなよ」

「な、何でですか！？」

「」

「せめて何か言いなさいよ！！」

「絶対振り向くなよ」

「は、はひ、わかりました……」

「り、理由を言いなさいよ！」

「……本当に言ってもいいのか？」

「じゃ、じゃあいいわよ。ネギ、はやく行きましょ！」

「へ？　は、はい」

「じゃあねー」

「お休みなさい、アスナさん、ネギ先生」

「あ、は……「振り向くな！！」はいぃいい！！！」

走って帰って行きやがった。
振り向くなって言った理由？
何となく。

「ね、ねねねネギ！！き、今日もいっしょの布団でいいわよ！！」

「はい、あすなさん」

「仲ええなぁー」

087　みなさんのおかげで100コメ到達しました！（後書き）

ＨＯＮＤＡ　ＲＳ５００Ｒ　（１９８６年型）

２ｓｔ４９９ｃｃ
Ｖ型３気筒
１２５ｐｓ／１１，０００ｒｐｍ
８．１４ｋｇｍ／１１，０００ｒｐｍ
前後ディスクブレーキ
始動方式ー押しがけ

４９９ｃｃ１２５馬力の化け物市販車。
なんと６５０万円。
ＮＳ５００の市販型バイクでむっちゃ速いそうです。
僕なんか見た事もありません。
元モデルのＮＳは、かのフレディ・スペンサーも乗っていました。
関係ない話ですが、後輩にＨという野郎がいらっしゃるのですが、
そいつが「スペンサーっていくらくらいで買えますかね？」とか言ってくるので「年間契約２億も出しゃ、時代が時代ならいけたやろ」というとどうやら「スペーサー」と言っていたらしく、僕が聞き間違えた事をいろんな人に言って回るも、そもそもフレディ・スペンサーって誰よ？という冷ややかな反応で返されたそうです。
どうでもいいですね。

さて、今回の話、タイトルやまえがきでも説明した通りコメント１００件達成記念に書いたものです。
その割にいつもと何も代わり映えしない文章でしたね。
記念すべき１００件目のコメントは『もみじ』さんに頂いたので、
そのアイディアももみじさんにねだりました。

曰く

ｈｔｔｐ：／／ｓｌｏｔ－ｒ．ｃｏｍ／ｇａｍｅ／ｄｏｕｇａ｜ｓｃｉｅｎｃｅ．ｐｈｐ？ｓｃｒｅｅｎ＝ｍｅｔａｃａｆｅ＆ａｍｐ；ｍｏｖｉｅｉｄ＝１０４９９８６／ａｍａｚｉｎｇ｜ｒｕｎ｜ｂｉｋｅ

　これをリン・・・いや、ネギかアスナにやってもらいたい

との事でしたので二人にやらせてみたのですが、予想外に短く、かつ面白みもクソも無い文が書きあがってしまったので後ろに色々付け足した結果収集がつかなくなったのもご愛嬌です。
携帯の人は断崖絶壁を走ってる様を思い浮かべてください。

さて、今までコメントについてはあとがきで何一つとして書いてきませんでしたが、みなさんから頂いているコメントにはいつも大きな勇気とほんの少しのシナモン、大匙一杯の砂糖と生姜の粉をロイヤルミルクティーに入れたものはチャイと呼ばれ、インドでは親しまれています。

もうすぐ初投稿から１００話目ですね。
その時も何かしらいかした企画をしようと思っていなくも無いので、みなさんアイディアをください。
あと、歯医者に行っても折れない強靭な心もください。
ほっといてくれって言った歯石を無理やり引っぺがされたせいで歯の裏側がめっちゃザラザラしてる豚野郎でした。

０８８　世界最速とデートに行こう！ちうたん編（前書き）

パソコンインストラクターなのに締め切りあるって何よ。

０８８　世界最速とデートに行こう！ちうたん編

――――３０００円で国買ってきた　第一話「お前らもバザーには気をつけろ」――――

「へぇ、近くでバザーやんのか……行ってみるかな、暇だし」

今朝の新聞を回収した時に、間に挟まった広告を眺めながら呟いた無職２６歳。

高校の時に株で４０００万稼いで「一生遊んで暮らせるぜェ！！」などと茹っていたのも淡く苦い思い出だ。

何を血迷ったか家なんか買っちゃって、残金２０００万円。で、細々と暮らして８年間。残金５００万円。

全然細々としてねぇ！？

一年間に約２００万使うニートって何だよ！ネオニートにもほどがあんぞ！！

と１人頭を抱えてみるも、一度上がった生活水準を落とすのは難しく、結局は今までと何ら変わりのない贅沢な生活（三食カップラーメン）だ。

主に豪華になったのは寝室周りだったりする。寝てれれば満足だからね。

あとはパソコンくらいか。箱の中の板の辺りでなんかゴチャゴチャした所が凄い性能を叩きだしている。このなんかゴチャゴチャした所で物凄い計算をしているというのだから驚きだ。

と、なんかゴチャゴチャした所の話もそこそこに、バザーに到着した。

いつまで経っても中古品とか好きなんだよ。

モノよりも前に持ってた人の想いっていうのか、そんなんがね。
後は、他では見れない珍しい物とかも見つかるし。

って訳でバザーをうろついていたが、物凄い存在感がある紙が売ってた。
サインペンかなんかで『国王』って書いてあるノートの切れ端だ。
スーツ着たイケメンが如何でしょうかとか言ってやがる。ぶっ飛ばすぞイケメン。
でも、何かこのシュール感は結構嫌いじゃない。
幸い、あと2年は遊んで暮らせる金もあるし、無駄な買い物も好物だ。
これも何かの巡りあわせだろ。買っとくか。

「幾らですか？」

「はい、３０００円でございます」

「え？」

「３０００円でございます」

ああ、アレね。何かよくわかんないゴミみたいなもんを現代アートって呼ぶ風潮があるんだろ？　田舎もんだと思って舐めたら駄目だぜイケメンさん。
と思いながらクールに３０００円を差し出す俺。こんな紙に３０００円出す俺かっけぇ！

「確かにお預かりいたしました。では、これからよろしくお願いいたします、国王様」

「え？　何？　これからって何？」

「ええ。今の契約印紙をご購入いただいた事により、これからあなたには私どもの王として我が国に君臨していただきます」

「……ありがとうございました」

なんかわからんが、この人はきっとアレな人だ。どこか遠い世界で幸せになってもらおう。

と、逃げるようにイケメンの言葉を無視して家に帰るとそこには……！！

「おい……おい！！
世界最速の魔法使いだと思って来た奴に何て言い訳するつもりだってか「そこには……！！」何やねん！！どーせお前また「さっき別れたはずのイケメンがいたんだー！！たんだー　たんだー……（エコー）」とかそんな流れなんだろーがチェケラ！！」

「何だよ先生、ラノベなんか握りしめて」

「冒頭からやる気なくなってんだよ。誰だよラブコメならラノベとか言った奴。少女マンガと同じくらい何の参考にもならんわ」

「いや、そりゃそうだろうよ」

「時にちうたｎ、今日暇？」

「ああ。特に予定もないな」

「っしゃ、デート行こうずぇ」

「デート？今からか？」

「ダメ？」

「いや、私の知ってるデートってのはせめて事前に連絡くらいしとくモンだからな」

「で、「どるーん☆待ったぁ？……待ったぁ？って言ってんでしょうが無視すんなやゴルァ！！」とか言いながらタックルしたり「どこ行きたい？」って聞かれたら「あなたとならどこでもいい……ぽっ」っていうアレがやりたかったんやろ。めっちゃ乙女やん。ちうたんったらおっとめー」

「やかましい。で、どこ行くんだよ」

「せやのー。ちうたんのＰＣ、ＯＳは？」

説明しよう！ＯＳとは、オペレーションシステムか何かの略で、それをパソコンに入れる事によってビールの空き缶とかを握りつぶす事ができるほどの握力を手に入れるのだ！！

「２ｋ」

説明しよう！２ｋとは、ウィンドウズ２０００の略で、それをパソコンに入れる事によってなんとコーヒーの空き缶を少しへこませる

事ができるほどの握力を手に入れるのだ！

「ほなＸＰのパソコン買ったげる」

説明しよう！パソコンとは。パーティクル・ソーラン節・コンプレックスの略で、人妖入り乱れてソーラン節を踊りたくて仕方なくなる症状だ！一説では精神病では？と囁かれている珍しいものだぞ！そしてＸＰについては説明しないでおこう！強いて言うなら紙も折りたためない程度の握力になる！！

「え？いや、くれるなら貰うけど別に今のでも困ってないしなぁ。強制高速処理外部補助装置（オーバークロック　サポーター）もあるし」

オーバークロックサポーターって漢字といっしょに書くと物凄い文字数になる。

「ほーん。じゃあもっと凄いのあげる。ちょいとまってな」

「あ？　ああ」

ケータイで例のアレに電話する。

「もしもし？アタシよ、アタシ。ええ。此間作ったアレね、一セット欲しいのよ。ええ。んもう、わかってるわよ。また作るから。え？もうあるの？じゃあ今から取りに行くわね

ほないこか」

「……突っ込まないぞ」

「突っ込まれる側だもんな」
めっちゃ背中叩かれた。

「オッスオッス☆」
「アレ？ここ麻帆良大の工学部だよな」
「ああ、先生、コレですよ。どうぞ」
「こらどーも」
と、四方４０ｃｍ、高さ２０ｃｍほどのダンボールを受け取る。
「外部機器も最新鋭のものを同期させてますので、規格が変わるまでコレで戦えますよ」
「ってか何だよソレ」
「ふ、ふふふ、よくぞ聞いてくれました！！
コレこそ魔法と科学の超結晶体、その名も『１６ＣＯＲＥ　ｃ０』です！！」
「シックスティーンコアシーゼロ？」

「はい！麻帆良大学工学部そ最新鋭技術に魔法を組み合わせたまさに魔法工学！ＣＰＵとマザーボード、及び周辺機器を独自開発、冷却をすべて魔法で補う事によってなんと２８ＧＨｚという脅威の外部クロック周波数を叩き出し、更にその他の部品も２６ＧＨｚのクロック数！
更にメモリはＯＳの魔改造によって１２４ＧＢのメモリを認識可能にし、ＨＤＤは２ＴＢ」

「……え？２８ＧＨｚ？」

「はい！！なんと１６コアですよ！理論上はあと６ＧＨｚは出せるはずなんですが……まあそんな必要ありませんね」

「ってかテラバイトって……ネタでしか聞かないような単位だな。メモリがすでにＨＤＤの容量じゃねえか」

「昔は３６ＭＢでもＨＤＤの容量だったんですから、これも時代ですね」

「何つーか好き放題だな」

「で、コレはちうたんにあげる」

「え？　……えぇぇえええええ！？」

「喜んでくれてなによりだ」

「いや、いやいやいや！！どんだけ全力でＣＰＵ企業に喧嘩売ってるモンをくれるんだよ！！確かにうれしいけどさぁ！」

「じゃあ持っとけって。実際ソレの性能を一番生かせるのがちうたんな訳だし、オーバークロックサポーターと併用してサーバー機として使ってくれたら最強に見える」

「いや、いいのか？でもなぁ……」

「何？」

「その……ありがと……」

「生きててよかった」

「いやいやいや！！」

顔を赤くして手をぶんぶりぶんと振り回すちうたんはかわええのう。

「じゃあデート行ってきまーす☆」

「いってらっしゃーい」

「次はどこ行くんだよ？」

「まだ顔赤いで」

めっちゃ背中叩かれた（セカンドインパクト）

「デートの定番ってったら喫茶店、映画館、公園からのレストランと相場はきまっちょうね」

「どこ語だよ」

「でもここであえてのゲーセンを選ぶセンスはなかなかだとおもう」

「まあいいけどな」「先生といけるなら、私はどこでも……」

「いや、言ってねえよ」

「思ってるくせにー」

また叩かれた。今日はめっちゃ叩かれる日やの。

「ＵＦＯキャッチャーはほにゃらら社の商標登録だから、ここはあえてのクレーンゲームと呼ぼうじゃないか」

「どっちでもいいけどな」

「ちなみに、俺は欲しい景品より取れそうな景品を選ぶタイプのポケモンだよ」

「何を言ってるんだ」

「アレ取れそう」

「うわっ、いらねぇ」

なんかｉ－ＤＯＰとか書いてあるＭＰ３プレイヤー（ＳＤカード式）が取りやすそうだった。
アレは２００円で取れる。

「確かに要らないけど取れそうなものなら取っとクオリティ」

「何を言ってるんだ」

「とりあえずいっとけ俺」

クレーンゲームを操作て景品を落とす。
穴の脇にあるから端っこを押して落とすとやりやすいよ。
ちなみに押す力が弱い筐体もあるから気をつけるんだ！

「取れた」

「取れたな」

「ちうたんクレーンゲーム上手いの？」

「いや、全然。
あ、パンチングマシーンあるじゃん。先生やってけよ」

「おうよ任せな！」

パンチングマシーンを叩きまくってほしいらしい。

「……届かない」

「なんかごめん」

身長エヴァと同じくらいだから。

１４０ｃｍだから。

「低いと便利な事もあるけど不便な事もあるよね」

「でも電車子供料金で乗れるだろ」

「電車死ぬほど嫌い」

「へー。あ、キックマシーンならいけるだろ」

「おうよ任せな！」

キックマシーンを蹴りまくってほしいらしい。

「……ちうたん、お金入れて」

「え？届かねえの？」

「届かねえの。お願いします」

「ほれ」

お金を入れるちうたん。
いや、流石に俺が出すよ。

「今日のトップは５２０ｋｇか、余裕だね」

「思いっきりやってくれ」

「え？壊れると思うんだけど……」

「いけんだろ。仮にも蹴る為の機械だぞ」

ちうたんは俺にどうなって欲しいのか……。
とりあえず上がってきた蹴る部分を思いっきり蹴飛ばす。

パパン！ゴガッ！！
→　→　→
→　→　　折れたサンドバッグが壁に激突した音
→　脚がサンドバッグに当たった音
脚が音速を超えた音

ガシャン……
→
崩れた壁が外に落ちた音

「……なんかごめん、先生」

「うわーーー！！店員さァァァァァあああああン！！！ごめエエエエエえええええン！！！」

「どっどうなさいまし……ギエピー！！！」

「ピッピｗｗｗｗｗｗコロコロの方のピッピｗｗｗｗｗｗｗｗｗ」

「先生ｗｗｗ笑ってる場合じゃねえｗｗｗｗｗ」

ちうたんもいい具合に壊れてきてるな。

「な、何があったんですか！？」

とか店員が聞くもんだから、俺も劇画調の顔になって説明する。

「あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！

『おれはキックマシーンを蹴っていたと思ったらいつのまにか壁が無くなっていた』

な…　何を言ってるのか　わからねーと思うがおれが何をしたのかはわかっていた…

頭がどうにかなりそうだった…

催眠術だとか超スピードだとかそんなチャチなもんじゃあ　断じてねえ

もっと恐ろしい怪力の片鱗を味わったぜ…」

「ああ、この人こう見えて物凄い力強いんですよ。だからキックマシーンが壊れたしそのまま壁もブチ抜きます」

「そ、そうだったんですかー。でも困ったなぁ……」

「お客さん……おや、これは麗しいリトルレディがお二方ですな。

君、麻帆良大建築部に連絡して」

「は、はい！」

「誰このおヒゲのジェントルメン」

「私、当ゲームセンター『おワン子クラブ』のオーナーである須田・コサン・太郎でございます。お見知りおきを」

このクソ暑い中ロングコートにヒゲ、シルクハットというイケイケ白髪のおじさまだ。何かタカミチよりジェントル。

「ああ、そう。よろしく、酢だこさん太郎」

「当ゲームセンターの設備が弱かったためにお客様にご迷惑をかけてしまった事をお詫びいたします。つきましてはお二人に、当系列のレストランへご招待いたしたいと申し出たのですが」

「いや、別に先生が蹴ったからああなった訳で、そっちの店は何も悪くないっつーか、ゲーセンの名前とかアンタの名前とかってなんなんだよと思わなくも無い」

「偽名でございます」

「偽名ってのは偽る為にあるんであって、あからさますぎて最早芸名だろと思わなくも無いけど……」

「ふむ……ではこういたしましょう。
麗しいお嬢様方に私からのプレゼントという事で、これを受け取ってはいただけませんか」

なんか『株主優待券』とか書いた紙をもらった。

「よかろう」

「いやいや、いいのか先生」

「もらえるんだ。もらっとけ」

「ありがとうございます。店はセントラルホテルビルディングの最上階にございます。では、良い時間を」

「テンキュー☆」

「何であんな良くしてくれるんだろうな？」

「ロリコンじゃねえの？」

「いや、どうだろうな」

「まあいいや。いい時間だから行こうぜ」

「そうだな」

麻帆良セントラルホテル前

「今まで言ってなかったけど実は今日車だったんだよ」

「何言ってんだ？」

「べつに」

「いらっしゃいませ、お客様。お車をお預かりいたします」

「よろしゅう」

車の鍵を渡したら走っていった。

「あんなカギ渡したらホテルマンが車乗っていくとか、テレビでしか見たこと無かったよ」

「俺は上流階級だからけっこうあったかな」

「一応世界の有名人だったな。そう考えるとすげえな」

「まあね☆」

ちなみにセントラルホテルとか言ってるけど結構端の方にある。ビルも世界樹よりだいぶ低い。

「いらっしゃいませ、お客様。白波様でしょうか」

「ええ、そうザンス」

「誰だよ」

「お話はオーナーより伺っております。こちらへどうぞ」

「4畳半くらいのエレベーターに押し込まれた」

「嫌な事されたみたいな言い方だな」

「わあい！！わあい！！！」

「いや誰だよ……誰だよ」

ちーん

→

こ、これは下半身を出したんじゃなくてエレベーターが最上階に着いた音なんだからね！勘違いしないでよねっ！！

「いらっしゃいませ。『レストラン蒲焼三太郎』へようこそおいでくださいました」

「訴えられるぞ」

「お席を用意させていただいております。こちらへどうぞ」

なんかレースのかかった素敵なテーブルクロスが敷いてある卓に座らされた。

なんかバラとか置いてあるけどこれ食っていいの？

「食前酒は赤ワイン、白ワイン、ロゼから選んでいただけます。」

「私は中学生だ」

「俺はレーサーです」

「そうじゃないだろ」

「教師です」

「おい……おい！」

「純愛なんです！！」

「この人車だからお酒飲めないです」

「俺は車じゃない」

「知ってる」

「車じゃなくても飲めない」

「うるさい」

「かしこまりました。ではジュースをお持ちいたします」

「え？ジュースはお餅なんですか？」

「え？」

「え？」

「お持ち致しますね」

「致すんですか……お餅」

「すいません、この人ほっといてください」

「あぁん、ひどぉい」

待つこと15秒

早い！

＼テーレッテレー！／

ワイングラスに遠慮の雫程度に注がれたぶどうジュースがやってきた。

飲んでみたら甘さは抑えられてるのに味はしっかりとしてた。多分高い。

さらに待つこと２０秒
　　早（ｒｙ
＼テーレ（ｒｙ

トマトとキュウリのサラダが出てきた。
ちなみに今日は出先だから二人とも全く音を立てずに食べてるよ。
なんと訓練された夫婦。

で、嘘みたいに上品に食べると、コーンスープとクロワッサンが出てきた
　　（ｒｙ
＼（ｒｙ

生クリームを使った口当たりのいいコーンスープで、上に刻んだパセリとか乗ってる。ちょうしのりやがって。
全く会話が無くてこっちは暇なんだよ。
でもちうたんのより俺の方の量が少ないのは評価します。

クロワッサンも千切って投げたりしないで普通に食べた。

で、次はスモークサーモンのマリネですよ。
本気じゃん、この店。
六枚切りのうっすい鮭が綺麗に並べられています。

正直な話をすると、俺の作る料理のほうが上手い。
でも雰囲気って大事だよね。
窓から麻帆良やらその先が一望できるシステム。
まあ山くらいしか無いんだけど。

全く喋ってないちうたんも心なしか上機嫌に見える。

で、次に出てきたシャーベットも食べ終えてしばらくどうでもいい話とかする。

ちなみにこのシャーベット、口直しが目的であって、出ない店もある。
店による。

何で二回言ったんだろう。

そのまま床を這ってる（アレをソレしてる時を表す比喩表現で、実際に這ってた訳じゃない）と、薄めのレアステーキが出された。

俺はレア好きだけどちうたんはそうでもないよなと思いきや、ちうたんのステーキはミディアムと、これまたエスパーか、もしくはエスパー伊藤が居るとしか思えない。

どういう事なの

ちなみに神戸和牛でした。

牛さんごめんよ。
鮭さんは別にいいや。
うそです。ありがとう。

で、果物とかスイーツ（笑）とか食べてコーヒーも出てきたからちうたんと談笑してたらさっきの焼肉三太郎が出てきた。

「気に入っていただけましたか？」

「おうよ」

「ああ。店のレイアウトも良いし料理もサービスも申し分ない。でも一つ気になる事があるな」

なんか今日のちうたんはいつにも増して攻撃的だな。
女の子の日（爆）じゃない筈なのにな。

「はい、気になること……ですかな？」

「アンタがここまでする理由だよ。先生が何の躊躇いも無くここまで来たから私も着いてきたが、話が良すぎるっつーか、ただの中学生にここまでするモンか？
それに……私たちはアンタに名前を教えても無いのにロビーで先生の名前を呼ばれたし、私の好みや先生の食事量も言った覚えが無いのに私に出たメインディッシュのステーキはミディアム、先生のはレア。全体の量も先生のほうが少なくなってたな」

「当然、麟様は有名人でしから。それに、性格や体格から適切な量や好みを判別するのはウェイターの仕事、その指示通りに作るのがシェフの仕事ですよ。
ただ、ここまでする理由ですか。……感謝ですね。『私達』はとても義理堅い“生き物”なのですよ、長谷川……いえ、白波千雨様。
ただ、害意は一切ございません。それだけ解って頂ければ幸いです。
では、良い時間をお過ごしください。ごゆっくり」

そう言うとクソ暑い中、やっぱり黒のロングコートのおっさん、略してこっさん（ぼっさんとは一切関係ない）は出ていかはった。

「……先生あのおっさんに何かしたのか？」

「さあ？　孫にサインやったとか？」

「ってか私たちのその……けっ、けっこんって……公開されてないよな？」

「いや、魔法世界の常識じゃん」

「だれがそんなファイナルファンタジーワールドの話しろっつったよ」

「もう、存在するんだからファンタジーじゃなくてリアルじゃん。驚きの無茶スルーだよ」

「っせ」

→

これは多分「うるせえ」が訛ったアレだよ。

さて、帰るか。

「ご馳走様でした」

「ありがとうございました。

そ、その……僭越ですが、白波麟様……」

「何？」

何コイツもじもじしちゃって。また尻か。

俺のケツどんだけ魅力的なんだよ。

もうエヴァに指の第二関節までいかれたわ。

あの時は泣きそうになった。

「サイン、いただいてもいいでしょうか？」

なんだそんなことか。
ケツ締めて後悔したわ。
で、渡された色紙とサインペンを持って、サインペンを折ってから
レジ横のゴミ箱に投げ入れて、ポケットから筆ペン出して筆ペンで
サインを書く。
で、サインと筆ペンを渡す。

「あ、ありがとうございます！！」

「いいって事よ」

下に降りたらホテルラブ……じゃない。ホテルマンが車出してた。

「ありがとうございました。お気をつけてお帰りください」

「まかせろ」

「先生何でサイン書くたびに人のペン折ってんだよ」

「何か昔やってから喜ばれちゃって、朝倉さんにも特集組まれちゃうし、仕方なくやってんだよ。筆ペンだってタダじゃねえんだよ」

みんな喜んで俺にペン折らせるんだから。

「この間大量に『Ｋｏｎｏｚａｍａ』から筆ペンが届いてたのソレかよ。エヴァが何の躊躇いも無く８０万円分の筆ペン代立て替えてるの見たときは戦慄したわ！ってかサイン書きすぎだろ！一日一枚書いてるとしたらアレ１００年分はあったぞ！！」

「ヒーローだからペンも折るし妹に金だって立て替えさせる。で、実はアレそんな使わないのよ。向こう数百年分買っといた」

「最低のヒーローだよな」

「ちうたんは最高のヒロインだな」

「――っ！！」

運転中に背中を叩くな。

「ってかエヴァの事エヴァって呼ぶんだ。本人の前ではエヴァンジェリンなのにｗｗｗ」

「う、うるせー！たまたまだよ！！」

「エヴァに言っちゃおー☆」

「やめろー！」

エヴァに言ったら「ちうーーーー！！」とか言いながら抱きついて寝室に消えてった。
翌朝二人はグチョグチョになって発見される。
どうしてこうなった！！

０８８　世界最速とデートに行こう！ちうたん編（後書き）

まだ１００話目の特別企画募集中の豚野郎です。
今回のフラグはちうたんがすごいパソコンを手に入れたことと別に要らなさそうなＭＰ３プレイヤー入手、あとは正体がわかり易すぎる老紳士の登場ですか。
回収するかしないかは別だけどな！

さて、ちうたんとエヴァがグチョグチョしたところで、次は誰とデートしようかな。
それとも、そろそろ夕映を引き込むべきか。
まだフラグが足りんね。

では、今回もありがとうございました。

０８９　世界最速とデートに行こう！エヴァ編（前書き）

今回は歴代でダントツにホント読む価値無い

０８９　世界最速とデートに行こう！エヴァ編

「トゥートゥートゥマシェリーマーシェーリー♪」
「トゥートゥートゥマシェリーマーシェーリー♪」
「「トゥートゥートゥマシェリーマーシェーリー♪」」
「うわっ！餃子でかっ！」
「日本くらいあるわ」
「じゃあね尊士さんそうだ」「ポア」「その子」
「こっちでええんかな」「お、にいや」
「じゃ彼は？」
「知らん彼やだわ」

「……二人とも、僕を指さして何をしてるんだい？」

「じゃ彼は？」
「知らん彼やだわ」

うそです。タカミチです。

「お兄ちゃん、こんなヒゲほっといて早く行こうよ」

「じゃあな、ヒゲ」

「……気をつけて行っておいで」

「毎日がエブリデイ！！」

「毎日はエブリデイ！！」

「今日はどこ行こうか」

「パーツ屋さん！！」

「よしこーい！！ぶるるん★ぶるるん！！」

「閉まって……いる……」

「ドライバーズスタンドェ……」

何故か全然違う店になってしまったドライバーズスタンドの前で膝をつく俺達兄妹。

こうなったら必殺ロータリーサウンドを響かせて大阪まで長距離遠征せざるを得ない。

「エヴァ、日を跨ぐぞ！！」

「どんと来いだよお兄ちゃん！！」

ＭＡＺＤＡの素敵サウンドを唸らせながら高速を走ってたら、名古屋あたりでものすごい車が居た。
平日の真昼間だから車が少ないのは頷ける話だけど、なんかその少ない車もみんな１２０ｋｍ／ｈくらい出してるのにそこから更に１００ｋｍ／ｈくらいぶっ飛んでる赤いＲＸ－８だ。
俺の超視力で見ても車内が見えない。フロントもサイドもリアもフルスモークのかわいそうな奴だ。
さらに、外装は全部カーボンらしい。ガボンガボン言ってる。

「何アイツ。チャレンジャー？」

「さあ？」

「追っかけてみるか」

「４点式フルバケットの底力を見せてやってよ！」

「上等だコンナロー！！」

と、ギアを一段落としアクセルを踏み切る。
でも全然追いつけない。
何アレ、絶対３００ｋｍ／ｈ出てる。無しだろ。あんなバケモン公道に放つとか警察の野郎イカレてやがる。

「お兄ちゃんの最速伝説はまだ始まったばっかりだ。一つくらい思い通りに行かない事がある方が面白い」

「お兄ちゃん……」

「今日の俺は紳士的だ……エヴァ、運転交代」

「がんばってね！」

「ＭＡＫＡＳＥＲＯ！」

エヴァを運転席に座らせて俺は助手席に回る。
で、指輪をお馴染『ＧＳＸ－１３００Ｒ　隼（ターボ仕様）』に変えて飛び乗った。

「っしゃったるでぇぇぇえええええええい！！！」

と、意気込んで走り出す俺、決闘者（デュエリスト）。
でも奴はもっと速度が乗ってるのか、なかなか追いつかない。
ケツは見えてるんだけどなぁ。
とかほざきつつ、大きめのカーブに差し掛かる。
「ふへっ、野郎、あの速度で突っ込んだら一発でコーナーのシミだぜ★」

うん。素通りフラグだよね。
俺わかってたよ。天才だもん。
なんか嘘みたいなグリップで、若干方輪浮かしながら曲がっていた。
何だよアレ。プロかよ。
でも少しづつ縮まってる。なんか行けそう。そんな気がしまうー。
うー。

とか言ってるのもつかの間。あと5秒で並べたのに刈谷パーキングエリアに入っていきやがった。

「エヴァ、刈谷ＰＡで」
『了解、お兄ちゃん』
念話でエヴァに連絡して俺もＰＡに入っていく。

「いやぁー、兄さん速いっすねぇ」
例のＲＸ－８の前でタバコを吸ってるバカっぽい白髪ロン毛（めっちゃ長い。俺の身長より髪長い。）に、バイクを指輪に戻してから声をかける。
うわ、こいつ右目に眼帯してやがる。危ない野郎だな。

「あぁ？んだてめぇ？」
「おめぇが何だよ。法定速度って聞いた事ねぇのかロン毛」
「俺がそんだけ出したって知ってるてめぇもたいがいの速度出してたんじゃねぇのかよ」
「すいまえんでした；；」
論破されちゃったＺＥ☆
だってコイツ身長半端ねぇもん。めっちゃ見上げないと話せないレ

ベル。
多分こいつがしゃがんだら同じくらいの高さ。
「なんだよお前、髪も長けりゃ背も長いからって調子乗りやがって……チクショウ……神よ、何故私を見捨てたのですか」
「なんだこのガキ、すごいめんどくさい」
「大体何やねん、その車！何やったらそんな速いねん！！」
「あ？お前もしかして後ろから追っかけてたブサか」
「ブサです」
正確にはハヤブサです。
「ハッ、ブサじゃ俺のエイトにゃ辿りつかねぇよ」
「言ってくれるじゃねえの。俺これでも世界最速だからね」
「同じ条件下だと車より速く走れるバイクってのは存在しねぇんだよ」
「上等じゃねえの、表出ろよ」
「お前目腐ってんのか？上見てみろよ。天井に見えたか」
「もうやだこいつ」
地面（コンクリート張り）をスコップで掘ってたらエヴァの乗った

RX－8に撥ねられた。

「あ、お兄ちゃんごめん！」

「いいってことよ」

「で、誰この白髪、めちゃくちゃ人相悪いね」

「ほっとけガキ」

「お兄ちゃん、ガキって言われた」

「敬意を込めておガキ様って呼べや白髪」

「こりゃ失礼、おクソガキ様におガキ様」

「エヴァ、おクソガキ様だってよ」

「いや、お兄ちゃんでしょ」

「寝たい。あと親指シフトのキーボードほしい」

「買いなよ」

「ってかお前何お前公道でスリックタイヤとかお前頭イカレてんじゃねえのお前」

「雨の日はスリップタイヤだけどな」

「あ、エヴァ！！ゴーカートあるじゃん！乗ろうぜ！！」

「うん、お兄ちゃん」

「自由過ぎだろこの兄妹」

「遅くてビビった」

「踏みっぱなしでもコースアウトしないような速度に設定されてるしね」

「っつか何だったよ、さっきの白髪」

「さあ？あ、お兄ちゃん、観覧車も乗ろうよ！」

「いいとも！！」

などとほざきつつ観覧車に乗りこむ俺たち。

「なんか遅くね？」

「速かったらびっくりするよ」

「……乗ってから気づいたけど、今さら観覧車で甘酸っぱい雰囲気になるような仲でもないよな」

「甘酸っぱい事しようよー」

「何よ」

「はちみつ梅」

「酸っぱ甘い」

「ひゃわあああ」

梅と一緒に口の中に入ってきたエヴァの指をれろんれろんしてたら一周してた。

「さて、当初の目的は？」

「サー、大阪のバイクパーツショップです、サー！」

「良ぉお〜〜〜〜〜〜しッ！
よし
りっぱになったぞ！エヴァ！」

「うわぶ！お兄ちゃん、髪かゆい」

抱きしめてぐわしぐわしとハンズブラッシングしてたら俺の黒髪とエヴァの金髪が混じり合って混沌を生み出した。

これこそがビッグバンを起こす原因となった超時空圧縮と呼ばれるものです（死ぬほど適当）

「すまぬ……すまぬ……」

「お兄ちゃん、早く行こうよ」

「うわーーーい！！　うわーーーい！！！

今日の俺はドリキンにすら勝てる

というのは嘘でしゅ」

「あの白髪、もう行ったのかな？」

見ると奴の気色悪いＲＸ－８はもう無かった。

「……奴はいつでも居るさ。俺たちの、心の中にな……」

「……」

さて、エヴァの反抗期ならぬ犯行期が到来する前にさっさとＴＡＩＣＨＩに行くぜ。

「なんかバイクの部品買うっつったらとにかくＴＡＩＣＨＩに来る病気にかかってるんだよな」

「転移でくるっていう選択肢は？」

「転移で帰るのはいいけど、転移で来るのは……いいな。次からそうしよう。
逆になぜ今まで気づかなかったのか……」

「真、この世は不思議に溢れているのう」

「誰？」

「新キャラだと思ったか！エヴァンジェリンだよ！」

「ひゃっはぁぁぁあああああ！！！」

と雄叫びながら店内に入る。

「いらっしゃいま……うわあああああ！！！」

「ＰＥ２４の１１５番ってある？」

「ないです」

「ああ……そう……」

「お兄ちゃん、最強ロック買おうよ！」

「いらねえええ！！俺のバイク盗るキチ○ガイなんかいねぇえええええええええ！！」

「お兄ちゃん、ＲＰＭ管買おうよ！」

「つけるバイクが無いし、よしんばあった所で絶対つけない。
男は黙ってＯＶＥＲ管。
所で、エイプのＤＯＨＣヘッドとかかなりなんだけど、コレいっとくべきかな」

「もうあるじゃん、ＤＯＨＣエイプ。私のだけど」

「そうでした。
じゃあいっそＭＯＮＳＴＥＲ　ＥＮＥＲＧＹ　ＤＲＩＮＫのステッカーを買うべきか」

「川崎重工製の車輌ないのに」

「あるし！！　」

「何が？」

「川崎純正けん玉。穴だらけになってるけど」

「お兄ちゃんが突き刺しまくってたあの気色悪い緑色のけん玉って川崎のけん玉だったんだ」

「川崎純正竹トンボください」

「ないです」

「ああ……そう……」

「もういいや。ブリヂストンのタイヤ買うし」

「私のエイプそろそろ溝なくなってきてる」

「あれ？タイヤもうない？」

「あったのは全部使ったよ」

「全俺が泣いた
店員さん、１２インチのＢＴ９２、２０本くだち」

「はい、ＢＴ９２が２０本でー……２０本！？」

「２０本で」

「か、かしこまりました」「かしこー」

「すんません、在庫がありませんでしたので配送で大丈夫でしょうか？」

「いいってことよ」

「ではこちらに名前、住所、電話番号をご記入ください」

「破ぁ！！」

「寺生まれって凄い。私は改めてそう思った」

「なんということ（をしてくれたの）でしょう。三流建築士の匠（Tさん）が手をかざすと、閑散とした用紙に氏名、住所、電話番号が」

「ありがとうございます。料金はこちらになります」

「カードで」

「はい」

「あとＮＳＲ２５０Ｒのパーツって何かあります？」

「チェーンとキャリパーくらいですかね」

「うぼぁ！！２ｓｔは死ねってかい……」

「ＮＳＲｍｉｎｉのパーツなら」

「いらない！
エヴァ何かいるものある？」

「別に無いかな」

「じゃあそんだけで。おながいします」

「かしこまりました」

「っしゃエヴァ、行こうぜ！」

「わーい！！」

「よろ彦！」

「ありがとうございました」

「ＢＡＮＧご飯何にしようかしら」

「何でもいいよー」

「ウッホホイ！じゃあすき○家で」

「わーい！」

す○き家で喜ぶとか普段ほうれん草しか食わしてねぇみたいじゃん……。

「サウザンドチーズ牛丼並くだち；；」

「同じのだ」

「サウザンドチーズ牛丼の並盛りが二つですね。少々お待ちくださいお待たせしました」

「速い！！」

「もうきたのか」

「ごゆっくりどうぞー」

「ちうたんとはなんかよくわからんホテルの最上階にあるレストランに行った。麻帆良セントラルホテルだったっけな」

「ああ、あそこ？」

「知ってるの？」

「あの店の経営者って王都シラナミ出身だよ」

「まじか。それは知らんかった」

「世の中は知らない事だらけだったね」

「うｎ。所で強盗とか入ってこないかな」

「昼だしさすがにないでしょ」

フラグかと思ったけど本当に何も無かった。

「ごっつぁんです！」

「ありがとうございます。７６０Ｙｅｎになります」

「ドルでいいですか？」

「困りますー」

「ルピーでいいか？」

「困りますー」

「図書券でいい？」

「困りますー」

「宝くじで」

「困りますー」

「カードで」

「こまりますんー」

「どっちだ！？」

「ありがとうございましたー」

「うふぇー。もう6時かー」

「まだ6時とも言うよ」

「どこいくー？」

「帰ろっ」

「そうだな。
俺たちの……家に！」（何かよくわからない決意を秘めた目で）

「うん！」（とりあえず乗った）

「ただいまー君」

「マー君ってだれだ！？」

「マー坊」

「“待”ってたぜェ！！　この“瞬間（とき）”をよォ！！」ギャギャリギャリギャリ

「“事故（ジコ）”る奴（ヤツ）は・・・・“不運（ハードラック）”と踊（ダンス）”っちまったんだよ・・・・」

「何故か　踊　の二重引用符に始点がない系の不具合まで再生するとは……茶々丸……恐ろしい子！」

「結局どっちもマー坊じゃないしな」

「なんでちうたんはどうしてそんな事を知ってるのは何で？」

「読んでたからだよ」

「連載１９９１年からだろ。２歳の時からかよ」

「親が単行本波なんだよ！」

「あ、そういえばちうたんの親御さんに会った事ないじゃん、俺。今度挨拶行こっと☆」

「く、来るな！！」

「なぜ」

「そりゃ、恥ずかしいだろ……」

「ウチは親公認だけどねー」

「まじか、かずみん。知らんかった（リアル話）」

「わ、私も親公認ですよ！！」

「「「「それは知ってる」」」」

「天国にいてはるウチの両親も許してくれます……」

「シリアスになりえない雰囲気だな」

「さーて、明日は何すっかなー」

「平日はデートって訳にもいきませんからね」

「ってか学校行けよ」

みんなでわーわー言ってたら家になんとなくつけてた電話が鳴った。
これ電話番号とかあったんか。

「もすもーす」

『あ、どもー。麻帆良大建築工学部のモンっすけどー』

「あーできた？」

『うっす。“完璧（パーフェクト）”っすよ』

「何それ流行ってんの？」

『ま、一回見に来てっせーっすよ』

「最早何言ってるかわかんない」

『しゃーっす。もっす』

切られた。

最後ホント何いってるかわかんなかった。

もっすって何やねん……。

「麟さん、さっきの電話何だったの？」

「ああ、弟子へのプレゼンチュリー」

「へー。何をやるんだよ、先生」

「ああ、明日のお楽しみだ」

「今言っちゃダメなの？」

「尺が足りないんだヨォォォォオオオオオオオ！！！」

「↑ここで５７４行目です」

「おいやめろ茶々丸」

「来週も見てね☆

リンリンとのヤクソクだぞっ！」

「絶対見ます！」

SEE YA!

０８９　世界最速とデートに行こう！エヴァ編（後書き）

母親から童貞と思われていないが故にコンドームの話を振られて死にたくなった豚野郎です。
かなりマジでへこんだ。
こんだけ遅れたのはおかんのせいです。

性欲＜＜＜＜＜＜＜超えられない壁ー＜＜＜＜＜＜睡眠欲＜＜バイク

今回出てきた不思議な白髪ですが、前書いた短編の主人公の兄です。
前書いた短編←
ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ８４５１ｙ／
そのうちコイツで何か書こうと思ってますが、さていつになるか。

今回もありがとうございました。
最近オチがつかない事で有名なブタでした。

０９０　世界最速のＲＸ－８は速いっちゃ速いけど特に何の改造もしてない普通車

一昨日もみじさんに「明日には投稿する」とか何とか言ってた覚えのある豚野郎でしたが、所詮はブタ。
結局日を跨ぎました。
さあ、ののしれ！！

０９０　世界最速のＲＸ－８は速いっちゃ速いけど特に何の改造もしてない普通車

「おい、ネギ。放課後校舎裏な。絶対一人で来いよ？ああ、そこのアルベールはいいよ」

「どうしたんですか？」

「その時話す」

そう言って職員室から出る麟先生。

一体何なんだろう。

……？カモ君が振動してる。

「カモ君？」

「あ、あああああ兄貴、ややヤバイッスよ！これはもしや日本の裏社会に古くから伝わるＹＯＢＩＤＡＳＨＩってヤツじゃないっすか！？」

「ＹＯＢＩＤＡＳＨＩ？」

「いいか兄貴、呼び出しってのはだなぁ……」

詳しい話を聞けば、どうやら後輩が何か失敗した時に校舎裏に呼び出し、そこでＯＨＡＮＡＳＨＩをする文化らしい……。

ってカモ君が言ってた……。

「ど、どどどどーしよーカモ君！！」

「あ、兄貴何かやらかしちまったんですかい！？」

「いや、そんな記憶は……もしかしてアレかな……ＮＳＲに勝手にＲＥ（ロータリーエンジン）って書いたからかな……」

「兄貴？」

「それともヘルメットの後ろのところにＲＥ（ロータリーエンジン）って書いたから？」

「いや、いやいやいやいや、何意味のわかんねぇ事やってんだよアニキぃぃいいい！？？」

「ひょっとしたら魔法球サーキットコースの壁に勝手にＲＥ（ロータリーエンジン）の横断幕を下げたからかな……？」

「いや兄貴、ロリータはＬｏｌｉｔａだから頭文字は『Ｌ』だぜ」

「何このオコジョきもい」

「兄貴ィィィィイイイイイイイイ！！？？？」

「とにかく、そのくらいで怒られるとも思えないし……」

「何で兄貴はそこまでして怒られるとこれっぽっちも思わないんだ！？」

ほうかご！

「今日の俺はローギアだ！」

「トップギアじゃないんですね」

「バカお前トップギアっつったら最高速を乗せるときに使うギアであって『最初からトップギアだぜェ！！』とか言ってる奴はどんだけナイーブな発進するつもりだよって思うやん。エンストの危機と隣り合わせなわりに何のメリットも存在せんやん」

「ローギアよりトップギアの方が聞こえがいいとはいえ、確かに……」

「で、今日俺がローギアな理由だが……」

「兄貴……やっぱりそこかしこにＲＥ（電子メールやネットニュースの「返信」を意味する語である。Ｗｉｋｉｐｅｄｉａ参照）って書いたのがまずかったんだぜ……」

ってか兄貴、ちょっと見ないうちに自由すぎるだろ……。

「そんなもんはどうでもいい」

「あ、いいんスか」

「いい」

「じゃあ一体何で？」

「いいから俺についてこい」

そう言って歩き出すお二人。

しばらく歩くと駐車場についた。

「乗れ」

と言った麟の旦那が指した車を見て兄貴が固まってる。

「こ……コレは……」

「兄貴？」

「カモ君、コレはＭＡＺＤＡが販売してる現状最後のロータリーエンジンを搭載したＲＸ－８っていう車でね」

「は……はぁ……」

「４ドア４シーターなのにも関わらず、前身と呼ばれるＲＸ－７∞、通称ＦＤとは重量差が２０ｋｇしかない凄い車なんだよ！

それに、名前やロータリーという特性からもＦＤの後継と思われてはいるけど、その実デザインは一新されてる。

さらにこのエンジン、ただのロータリーじゃないよ。最新のＲＥ、ＲＥＮＥＳＩＳは無粋なターボチャージャーを取り払った事でスムーズなレブリミットまでの回転を実現して、さらに排気をサイドポートにする事でオーバーラップゼロ、圧縮比も格段に上がって低回転トルクの安定性も従来とは比べ物にならないし燃費も計測値１２ｋｍ／１？を出したんだよ。それだけでも凄いのにその重量は今ま

でより１０ｋｇも落としたんだ！
その上フロントミッドシップをさらに改良したアドバンスドフロントミッドシップを採用して前後５０：５０のパーフェクトな重量配分にも成功、エンジンの搭載位置を低くした事による慣性モーメントの５％低減を実現して、まさに最強のコーナリングマシンになったんだ！！」

「へぇ……」

「凄いのはエンジンや重量配分だけじゃないよ！
この芸術的なコックピット！！
色んなところにおにぎり型のレイアウトが施されてさりげなくＲＥをアピールするおちゃめな遊び心もわすれず、それでも走りに妥協しないハンドル位置やサイドブレーキ、シフトノブのポジション。さらにこのＴｙｐｅ－ＲＳは走りに妥協しない、ビルシュタインのバンパーやレカロと共同開発したバケットシートが標準装備された、ノーマルでも最高の性能が出せる仕様なんだ！
そのデザインは数多くの人々を魅了して、おおかたどんな車にも辛口のコメントをする某キャスターにも褒めちぎられたまさに最高を実現させるための車！！！
その性能から子持ちのお父さんの「ホラ、コレなんかいいじゃないか。４ドア４シーターだからチャイルドシートも載せれるし、買い物だってこの開き方のドアならお手軽だろ？なに、リッター１２リットルくらいは当たり前さ。むしろいいくらいだよ。な？いいだろ？」という趣味と実益を兼ねた説得の材料としても申し分ない車だよ！
おまけに日本の警視庁にも採用されるほどの信頼性の高さ。滑らせようと思えば滑って走らせようと思ったら走り曲がろうと思ったら曲がる。車界の優等生……いや、車界の天才だよ！！」

「兄貴、乗らないんすか？」

「乗るよ！！ここで乗らないと僕の一生は後悔に塗りつぶされるだろうね！！

ああ、楽しみだなぁ。僕も将来絶対にこれを買うぞー！！」

「わかってんじゃん」

「これがＲＸ－８のコックピット……うっ、鼻血が」

「どんだけだよ兄貴！！」

「そうだよね、カモ君。この走る芸術を僕の鼻血なんかで汚していいわけないからね！！

ああ！！このシートに包み込まれる感じが！！！！」

この兄貴はもうダメだ……

「ほら、着いたぞ」

「え！？僕まだ乗ってから１分くらいしか経ってませんよ！？」

「いや兄貴、２０分は経ったぞ。どんだけだよ。いや、マジで」

「ここは……ホームセンター？」

「ああ。ついてこい」

「いい車だなぁ」

「早くしろよこの変態！！」

「何をするんですか？」

「いいから　おれに　ついてこい」

「―＞さくせん
みたいになってますよ」

「すんまへん、予約してた白波でげす」

「はい、かしこまりました。ではこちらにおながいしまっしょいまっしょい」

「ここにまともな人間はいねぇのか……」

ネギは自分に差し出された半紙と筆を見る。

「名前を書くのだ」

「た……縦書きですか！？」

「横」

「はい……頑張るぞ！！」

『わぎ　すふ○りん　〃くふぃーろど』

「別にアルファベットで書いてもいいのよ……」

「いえ、もう一回やります！！」

『ねざ　すぷりんぐふぃるど』

「惜しい」

『ねぎ　すぷりんぐ●ふぃるど』

「こう書くんだよ」

『春野　葱』

「お……おぉ！！マキシマムかっこいい！！」

「芸術だぜ……」

行書体の迫力に飲まれたな……ガキどもが。

「じゃあコレでおねがいんぐ」

「かしこまりもっこり。３０分かかるさかい適当に何かしといて」

「わっせー」

「所で、さっきのは何だったんですか？」

「お前そりゃお前これからのお前楽しみにお前取っとけよお前」

「何回お前って言うんすか旦那」

「５回」

「別にそういう事を聞きたいんじゃなくてですね！！」

「じゃあいいじゃん。何だよお前、ドラマ版でワッペン化してるくせによ」

「ドラマ版なんか無かったっんすよ！！」

「とてつもない下火感を演出してたよな」

どうしてこうなったを地で行ってた。

「あ、中国産の謎バッテリー安いやん。買っとこ」
「今なら水素ガスが通常の3倍！！とか書いてありますよ」
「ガス爆発一直線やの」
「所で麟さんって関西の人なんですか？」
「ちゃう」
「いえ、よく関西弁で話すから……」
「俺は関西弁で話していないやで」（後ろにやでをつけたら何でも関西弁になると思ってる）
「話してるじゃないですかー！」
「そういうネギも少しくらい話せるんだろ」
「えー……ワイ学校で教師をやとるまんねん」
「じゃぁかぁしゃんだら。おどれなに人舐め腐ってケツかんねん。しゃーきゃったおっぞッレぇ」
「プロの関西弁だ……」
「ちなみにここまで崩れるとホント大阪でも泉州クラスじゃないとマジで何言ってるかわからないから気をつけろ。
京都の人間にはまず通じない。毛唐がｔｈｅをｄａと言うのとはレベルが違うのだよ」

でも何故か兵庫だと通じる。不思議！

「勉強になります！」

「ならへんわ。ってかんな勉強いらんわ」

「やっとれらんね」

「どこで十津川弁覚えてきやがったこの変態」

僻地過ぎて言語が独自変化を遂げ、関西弁ですらない十津川弁ですね。

「今の十津川弁だったんですか。所で十津川って何ですか？」

「僻地オブ僻地。人口が限りなく少なく土地は限りなく広い。ちなみに北海道にある『新十津川町』は、その昔、大災害からの難を逃れた元十津川村民が作ったといわれている。
さらに木曜日には更新すると言っておきながら結局日を跨いでこの小説をアッププロードしてるゴミクズ以下のゲロブタ野郎の出身高校も十津川だったりする」

「最後のくだりはクソどうでもいいですね」

「あ、そろそろ出来てるんじゃないかしら。まだ5分くらいしか経ってないけど気持ち的にはもう8時間経ってるし」

「僕もやまだかつてない疲労感に襲われています」

「じゃあサービスカウンターまで競争な。よーいドン」

「わわっ！」

さっさと走っていったネギ。めっちゃ迷惑やん。

「店内走り回るとか自分どんだけバイオレンスよ」

「ご、ごめんなさい」

「まあええわ」

とは言ってもソレを決めるのは店員さんだけどね。

「いいドリフトだったぜ、坊主」

「誰だよ」

「ご注文いただいた品はこちらでございまーすでーす」

そう言って大理石のプレートに行書体で『春野　葱』と彫られたモノを渡される。

「うむ。大儀であった」

「殿下……」

「それはそうと行こうぜ。真打だ」

「楽しみです！」

あっと驚けと言いたい所だが尺の都合で次回持ち越しだコンニャロー！

０９０　世界最速のＲＸ－８は速いっちゃ速いけど特に何の改造もしてない普通車

こんばんは。
もしくはこんにちは。
あるいはおはやう。
ボクの小説を読んでくださっている全国２億人の方々にはいくら感謝の意を表明しても足りないくらいです。
今度正式に会見を開きますのでぜひ地上波４９９０９９８チャンネルをごらんください。

さて、色々と詰め込みませんでしたが、僕はＭＡＺＤＡのＲＸ－８が死ぬほど好きです。
将来絶対に買うと誓った車でもあります。
免許が無いときからＭＡＺＤＡのディーラーに再三にわたりカタログを請求して、何故か一回ＲＸ－８ではなくアテンザのカタログが届いた事もありました。アテンザも嫌いじゃないけど要らないの。

僕とＲＸ－８の出会いは正に衝撃的かつドラマチックなものだったのですが、ここに書くには余白が足りないので省かせていただきます。
しかし、とうとう生産終了が決定されてしまいましたね。
後継車の設定は出来ているらしいですが、あの車がもう新車で買えなくなると思うと涙がちょちょぎれる思いです。

さて、今回もここまで読んでいただきありがとうございました。
ＲＸ－８と結婚したい豚野郎でした。

０９１　世界最速の弟子、家をもらう。（前書き）

僕も車１５台ほどしまえる家付きのガレージがほしいです。

０９１　世界最速の弟子、家をもらう。

葱「師匠、師匠！！ドリフトはしないんですか！？」

俺「しねぇよボユゲ。お前それサバンナでも同じ事言えんの？」

葱「それっておかしくねぇ？だって、ここ日本じゃん」

俺「お前ってアレだよな……　サバンナじゃ真っ先に死ぬタイプだよな」

俺「そんなこと言われてもうち百獣の王やし」

俺「サヒヒｗｗｗフーセンｗｗｗｗｗ」

俺「お前の意見は正しい　サバンナ以外ではな」

葱「師匠どうしたんですか？」

「もう着くんだよ。はいここー」

なんという事でしょう！
閑静な住宅街の中央に、新築の一軒家があるではありませんか！
この門に着いている完璧に無意味なディティールも二階のベランダに貼り付けてある『私はいつでもウェルカムよ』と書かれた横断幕も不要な匠の遊び心。
否、匠の悪匠（上手い事言った）

「この家は？」

「お前の家」

「へ？」

表札を埋め込む穴に防水コンクリートを塗りつけてさっきの表札を貼り付ける。

「だってお前教師なのに三人部屋じゃん。
あのじじいもいつまで経っても新しい住居用意する気無いみたいだから、修学旅行に行く前に麻帆良大の建築科に作るように言っといたんだよ。
弟子入り記念だ。端金で作れた事だしくれてやるよ」

「うぅ……ししょー」

「えぇい抱きつくなうっとおしい！！！」

「麟の旦那……アンタ男……いや、漢だよ！！むしろ侠（おとこ）だ！！」

「お前にも妹が居るんだろう。もし来れるならこっちに呼んでやればいい」

「旦那ァァァアアアアア！！！」

「ええいしがみつくなうっとおしい！！！
とにかく中に入るぞ」

「はい！！」

「まず玄関。
知らないわけ無いと思うけど靴を脱いで入れ」

「はい！」

「で、左がリビングとダイニングキッチンだ。
簡単な料理本、冷蔵庫やその他必要な家財道具、生活家電一式は揃えてあるけど必要なものがあったら給料で買え。
ちなみに４０インチのテレビとＤＶＤレコーダーも置いてあるから使うなら説明書を読んで使いなさい。
で、右が風呂と洗面所とトイレ。絶対に一日一回風呂に入らないと殺す。
右奥が寝室。好きに寝ろ。ちなみに目覚まし時計は２０個置いてある。全部連動してるけどランダムで5個だけ正解だからその5個を押すまで鳴り止まない鬼仕様だから。遅刻したら死ね。
で、二回に5部屋あるけど2部屋が和室で2部屋が洋室、あとは図書室。全部6畳。
ちなみにリビングの本棚にはバイクレースのＤＶＤがあるけど暇な時にでも見れば。まあ俺は自分のレースしか見た事ないけど。
こんな感じ。質問は？」

「い、いいんですか？こんなにしていただいて……」

「あっはっは、何言ってんの？俺これでも一応一国の王だから。税収全く無いけど。
まあ無いなりに金持ちだから。
銀行に２０００億ほど預けてたら毎年数十億貯まるから実際俺の富がかなり無限大。
利子（としこ）が振り込んでる」

「だ……誰ですか、それ？」

「利子を擬人化した萌えないキャラクターの『銀行利子（かなゆきとしこ）』
３２歳独身、鉄壁の処女
何かあったら金を預けさせようとする恐ろしい女で、好きなタイプは福沢諭吉。
口癖は「金は金なり」
座右の銘は『無くても絞ればまだ取れる。無いところからも引きずり出せ』」

「こ、怖い人なんですね……」

「迂闊に金を借りたら即死な。
ちなみに水道代は一月一律３０００円で電気代はまあ知れてんだろ。
お前の給料から引き落とされるシステム。
じじいその他には俺から話を通しとくから引っ越す準備が出来たら勝手に引っ越して。はい、鍵」

「あ、ありがとうございます！」

「ほう、ネギ君に家をな……」

「だってじーちゃんいつまでもあの別に広くも無い部屋に男女３人も押し込めて。

多感な少年時代を過ごしたが故に後の人生に虚しさがこみ上げた結果世を儚んでいくえ不明になるのは確定的に明らか」

「むう……」

「それに、別に教員全員が寮に住んでる訳でもないし、部屋の空きもないなら家の一軒くらい用意してやるのも師匠として不自然じゃない」

「確かに教員寮には空きが……って師匠？お主、ネギ君の魔法の師匠に？」

「いや、何で俺が魔法なんか教えるよ。不老不死なんだから後世に残す必要も無いのに。
俺が教えてんのはバイクの事と教師の事くらいでう。
ああ、所得税くらいは俺が払っとくから安心なさい」

「バイクの師匠のう……まあそれもまた一つの経験じゃろう。
これからもネギ君をよろしく頼んだぞ」

「今回だけやで」

などという寒気を催す茶番を広げ、ついでにご両親にも挨拶。

「ハァ！？ネギが一人暮らし？　そんなん認められる訳ないじゃない！！」

「また始まったよ（笑）」

「何よその顔は！！　私はネギが朝起きれなかったりご飯食べられなかったりするんじゃないのって言ってるのよ！」

「せやなー。確かにネギ君朝弱いもんなー」

「そんな親御さんにも安心、完全同期型目覚まし時計『ミスターウェイクアップ』がネギの不快な朝を演出。否応無くたたき起こす事を保証します。さらに、冷蔵庫にはある程度の食材、料理の本も取り揃えてるため俺ほどじゃないにしろ天才の名を欲しいままにしてる奴さんの生活は思うがまま」

「だからって、ネギはまだ１０歳なのよ！」

「まあまあお母さん」

「誰がお母さんよ！！」

「そろそろ子離れしてもいいんじゃない？お子さんももうする年齢が二桁になる事ですし」

「そうやなー。ネギ君もいつまでも守られてるばっかりじゃあかんもんなー」

「このか！アンタはいいの！？」

「別に会えへんようになるわけでも無いし、ネギ君もそれでええって言うてんねんやろ？

テストの採点とかしてる時も生徒（わたしら）と同じ部屋やから気ぃ張ってるみたいやし、一人になりたい時もあるって」

「うぅ、でも……」

「ほら、お父さんはちゃんと理解を示してくださってますし。ね、お母さん」

「だからお母さんじゃないって！」

「ウチら夫婦かー。恥ずかしいなぁー」

「お嬢様！？」

「おい、どっから出てきたストーカー侍」

「ややなぁ、冗談やって、せっちゃん。ウチはせっちゃんのモンやし、

せっちゃんは、ウチのもんやで？」

「あぁっ、お嬢様ぁ……」

「お嬢様？」

「こ、このちゃぁん……」

このちゃんが急に出てきたストーカー侍、せっちゃんのほっぺたを両手でおさえてから抱きかかえた。
まだ日は高いってのに、びっくりのドレズっぷりやでぇ……。

「なあ、あすにゃん。この二人のアレはどういうソレなの？」

「最近この部屋で刹那さんが急に出てきてこのかとイチャイチャする現象が起きてるのよ」

「局地的なレズ現象が人目を憚らず発生するとか教育に悪い部屋やな」

「いや、それでもアンタの家よりはだいぶマシよ……」

「ああ、別にネギの家に行きたかったらネギが良ければ行ったらいいし泊まってもいいんじゃない？」

「誰がっ！！」

「ちなみに引越しの予定はネギが決めるから詳しい事はネギに聞いて。じゃあね☆」

「せんせー、またなー」

「あぁっ！！このちゃぁん！！」

「アンタらやかましいわ！」

「ししょー！」

「麟の旦那！」

「なんやおどれら。今日から住むとか流石に荷物も運び入れてへんから無理やぞ」

「いえ、そうじゃなくって」

「妹に電話したら来るって言ってやした！俺っちも一度は離れ離れになった妹と再会できるなんて……これも全部旦那のおかげでさぁ！！」

「アンジェリーナちゃんが日本に来るとき一緒に、ロンドンに研修に行った僕の幼馴染と僕の従兄弟も日本に来る事になったんです。三人とも元気にしてるかなぁ！？」

「何？アンジェリーナちゃん？」

「俺っちの妹でさぁ。何かあったら俺っちにくっついてくるかわいらしいヤツなんすよ」

「下着ドロのアレは怒ってないの？」

「いやいや、そもそも俺っち妖精とはいえオコジョっすよ？人間の下着にゃ防寒以外の意味はねえし同族は常に全裸だし」

「結果溜まったフラストレーションが全裸よりエロいものを求めさまよう悲しみのセクハラ妖精として生まれ変わったって寸法だ」

「何でソレを僕に言うんですか」

「ともあれ、俺は世界中の妹と妹思いの兄の味方だから最高のシルク生地を使った最高のベッドを用意してやるよ」

「旦那ァァアアアアア！！」

「しがみつくな。返す」

「うぎゅ」

ひっついてきたカモをネギのポケットに押し込む。

「じゃあ、また引っ越す時にでも言えよ。手伝うから」

「何から何まで、ありがとうございます」

「ふっ」

とここで颯爽と転移。

出てきた先はおうちの風呂場。

ちうたんがいてた。

「誘ってんのか」

「うるさい」

殴られた。

０９１　世界最速の弟子、家をもらう。（後書き）

主人公以外のオリキャラがレギュラー化しないように気を張ってる豚野郎です。
ましてやカモの妹が人化した挙句ハーレムの仲間入りとかフラグでも何でもなくありえません。
ああ、あと９話で１００話になっちまう……。
みんな恥ずかしがらずに俺に１００話用特別企画のアイデアを！
なるべく面白おかしく！

では、今回もありがとうございました。

０９２　世界最速は政府とユ偽フに監視されています。（前書き）

後で再起動っつってんだろーがファッキンＭｉｃｒ＊＊ｏｆｔが！！

０９２　世界最速は政府とユ偽フに監視されています。

引越しも滞りなく終えてネギのテンションは物凄い事になってる。
え？そんな昨日の今日でえげれすからやーぱんに来れる訳ないやん。
焦るなよ。

「うっひょー！麟のクソバカから家を奪ったぜェ！！！これでクラスの女どもを片っ端から連れ込んで……ウヒヒヒｗｗｗｗｗｗ手始めに宮崎のどかからいっとくかァ！！ヒャッハァァァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！」

「いやいや、師匠」

「ばれたか」

顔が見えないからって好き放題する俺の計画ェ……

「そ、そんな……でもネギ先生なら……」

「がんばるですよ、のどか！」

「うん。ゆえもね」

「わわわ私はべべ別に麟せんしぇ＃＄％＆’｛｝＿‘＊？Ｐ＋＜！！！！

ひたかんだです」

「好き放題か！！」

「出たアッー！あすにゃんのイマジンブレイカーハリセン！！このハリセンで攻撃されたモンスターカードは2ターンのあいだ攻撃、効果の使用、表示形式変更が行えない！！そしてネギのターンは強制的に終了させられる！！」

「いやいや、何やってんのよ」

「今日からはバイクの修行をする傍ら、なんとなく魔法も教えると言った所、何故かゆえがのどちゃｎも連れてきたからバイオセクシャル（？）な嫌がらせをしようと思ったら何故かテンションが上がっていたでござる　の巻」

「もう、いいかげんにしなさいよね」

「あれ？ちうたんは？」

「今日は来てないです」

すると突然、まばゆいばかりのスポットライトが飛び出した俺を映し出す

「ＣＨＩ－Ｕ－ＴＡ－Ｎは」「どこだ！」ステージに俺の声が響く

詰め掛けたオーディエンスはこの俺の久々のステージに期待で爆発しそうだ

今晩も伝説のリリックが聴ける。ストリート生まれヒップホップ育ち。本物のラップが聴けるのだ

メットを斜めに被りライディングジャケットをきた茶々丸がターンテーブルをいじりながら目で俺に合図する

重たいサウンドがスピーカーから響く。ショウの始まりだ

「ここがＢＥＳＳＯ！　俺がＳＩＳＹＯ！　菩薩のＧＹＯＵＳ

O！　麟ちゃんＳＡＮＪＹＯ！
　違法なＫＡＩＺＯＵ！　ちうたんＴＯＵＳＯ！　タイヤ地面から離れるＢＯ－ＳＯ－！
（ドゥ～ン　ドゥンドゥンドゥ～ン　キュワキャキャキャッキャキュワキャ！）
　収入倍増！　食費上昇！　エンゲル係数大変！　食事の時間！　冷たい世間を走り抜き！　パーキングエリアで息抜き！
どこだＣＨＩ－Ｕ－ＴＡ－Ｎ白波ＭＯＮＤＡＩ！　そんな毎日リアルなＳＯＮＺＡＩ！
　ＳＡＹ　ＨＯ！（ＨＯ！）　ＳＡＹ　ＨＯ　ＨＯ　ＨＯ　ＨＯ！」
　茶々丸のプレイも好調だ。オーディエンスの熱狂はこわいくらいだ
　まだ俺らの時代は始まったばかりだ、そんなメッセージがマシンガンのように俺の口から飛び出していく
　本物のヒップホップ。それがここにあるのだ

「いや、ないでしょ」

「ＹＯ」「チェケラ」

「うるさい。
ってか何よそのスピーカー」

「ＧＰＡが出してる５１５－１６Ｃの……」

「なんかもうそこまで聞いたら流れが読めたからいいわ」

「ユニットを俺が作ったエンクロージャーにはめ込んだバックロードホーン型スピーカー４基にリングダクト型スピーカー８基」

「えぇ！？　作ったの！？　凄っ！」

「えへへー。素直に褒められたらそれはそれで照れる」

「お兄ちゃん天才！！」

「せやろ。そしてネギは根菜」

「いや、根菜じゃないしそもそもこのネギ見て言うのやめなさいよ」

「え？ぼ、僕ですか？」

「でもコイツの表札『春野　葱』って書いてあるんだぜ」

「アンタが書いたんでしょうが！！」

「僕はあの表札、結構好きなんですけど……」

「あんたは黙ってなさい！」

「まただよ（笑）」

「うるさーい！！」

「仕切り直しだカスどもが。好き放題しやがって」

「長谷川さん……この人止めて……」

「じゃあバイクは今日はいいや。いや、良くない。バイクサイコー」

「本題」

「はい。じゃあみなさんには魔法を覚えてもらいます。
まず杖をみんな持って。ああ、杖無くても詠唱できる俺はいいんだよ」

「杖持ってないです」

「あ、じゃあ僕の持ってきた初心者用の杖をどうぞ」

などと言いながらみんなに杖を配る。
具体的に言うとあすにゃん、ゆえ、のどっち、茶々丸、エヴァ、俺に配る。
後ろ3人いらねぇ!!

「おい小僧」

「あい」

「お兄ちゃんじゃない」

「はい、何ですか?」

「私たちは別に杖はいらん」

「そうなんですか？」

「というか、何で私が今更お前たちと一緒に仲良く魔法の勉強なんぞしなきゃならんのだ。
茶々丸は魔法を使えんしな」

「魔力の放出は可能ですよ。
光の射手！とか言いながら射出するとそれっぽいです」

「ちなみにちうたんは俺の血液入りジュースを飲んで魔力量がバグった。
そしてジュースに俺の血が入ってる事に気付いていない。ふふふ……。
そういやアレ飲んだの？」

「まだ取ってありますよ」

「ほーん。賞味期限とか無いからなんか頑張って」

「はい（？）」

「ってか長谷川さんソレ聞いたら怒るんじゃないの？」

「この吸血鬼！って言ってやろうか」

「アンタが言うな」

「マスターが言うな」

「私が言うな」

「「「！？」」」

「じゃあ魔法は基本的なヤツからな。
大きな声で叫びましょう。
ピリカピリララァァァァアアアアアアアアアアア！！！！！！！！！！！！！！！！！！
」

「アンタ今歌詞書いたら消されるわよ！！」

「歌詞じゃねーし！やれるもんならやってみろし！！俺は負けないし！！！
あ、嘘です。ホント許してください、運営さん。もうやらないからマジ勘弁ｗｗｗｗ」

「気をつけなさいよ」

「ピリカピリララァァァァァァアァアアアアアァァアアアアアアアアアア！！！！！！！！
」

「オイぃぃぃぃぃぃぃいいいいいいいいい！！！！！
」

「はぁ、だから話を脱線させるんじゃねえよ。お前らギャングか。このちびっ子ギャングめ」

「……」

「あーはいはい、魔法ね。魔法。何が法だよ。ここでは俺が法だっつーの。

さあ、みんな、杖は持ったか？今からいう呪文を杖を振りながらそれっぽく言ったらいける。いくぞ

ああ、その前に離れろ。危ないから。茶々丸、サングラスを全員に」

「はい」

茶々丸が手際よくグラサンをみんなに渡す。

何で持ってるんだよ。

「何でこんなの要るですか？」

「ハードボイルドだ。

いいか、絶対はずすなよ。

「『プラクテ・ビギ・ナル・アールデスカット』！」

その瞬間、杖の先に着いてる星のオブジェが甲高い音とかなりの光量を撒き散らしながら砕け散った。

「え……？」

「まあ魔法の杖ってのは見ての通りそうとう良いモンじゃない限り使い捨てだ。その点、何回魔法使っても壊れないネギの杖はすごい！僕は改めてそう思った」

「そ、そうだったですか……」

「アンタすごい杖持ってたのね……」

「え？えぇ！？いやいや、今のってそんな魔法じゃないですよね！？え！？なんで！？」

ネギがアクティブに俺を糾弾する。マジひどい弟子もいたもんだ。

「り、麟先生、嘘ついてたですか」

「え？うん。嘘だけど？てかビギナーようの杖にあんなバカ魔力突っ込んだら破裂するに決まってんじゃん。言ってみりゃ風船に一瞬で２０ｋｇほど空気入れた感じよ」

「空気に重さとかあるの？」

コレを言ったあすにゃんのせいで空気が凍りついた。この罪は重く深い。

「え？な、何よ！？」

「絶対に許さないからな」

「メモったからな」

「三日後１００倍だからな」

俺、エヴァ、茶々丸のハーモニウスが織り成される。
コンサートホールの客は総立ちだ。
本物のオーケストラ。それがここにはあるのだ。

「ホントバカにゃんはアホにゃんだなぁ」

「なっ！アホじゃないわよねえネギ！！」

「えっ！？　あ、そのー……空気にも重さはあるんですよ？」

「っていうか、無かったら宇宙空間が真空なわけないです」

「というか地球が真空になってしまいますね。これでは人間は生きられません」

「う……うわあああああああぁぁぁぁぁぁ・・・・・・・・・」

「あらら」

あすにゃんが走って逃げていった。
転移で呼び戻す。

「えぇ！？何で！？」

「おれ　ちーと　つかう
おまえ　にげる　むだ
おまえ　ばか　あほ」

「未開拓地の土人みたいな喋り方でバカにされた！？」

「だから魔法使うっつってんだろーがヴォケどもが！！無意味に尺を伸ばすな！！最近この話ばっかりだわ！！！
はい、各自杖を持つ！
『プラクテ・ビギ・ナル　アールデスカット』

はいネギ、お手本」

「あ、ああ、はい。
『プラクテ・ビギ・ナル・アールデスカット』」

ネギの持つ杖（初心者用）の先から火がともる。

「これが超初級の火を灯す魔法だ。何でラテン語なの？
なんか強そうな気がするから。
って訳でこんな風に出すことも実は可能。

『火炎放射器』」

俺の指の先から火柱が上がる。
すごくね？

「え……えぇぇえええええええ！？」

「何でネギが驚いてるんですか？
いいか、大事なのはイメージです。敬語とタメグチが入り混じって最強に見える現象も相まって俺が使えば最強に見えるけど、所詮米粒ほども魔力が無いお前らカスには無理。
だからラテン語を使えばいいんや」

「お兄ちゃんクラスになると、始動キーだけじゃなく呪文自体も省略して魔法という現象を引き起こせるからこの通り関係ないことを言っていても使えるが、そこの坊や程度の熟練度じゃ到底無理な話だ。だから今のは、変な呪文を言って魔法を発動させたんじゃなくて発動させた魔法に変な呪文を重ねただけだ」

みんな「なるほどー」「わかりやすいー」などとほざいている。
それほどでもない。

「で、でもそんな話聞いた事ありませんよ。もしそれが本当ならすごい事に……」

「貴様等ごときクズの基準でお兄ちゃんを計るなよ。天才という言葉はお兄ちゃんのためにあり、全ての世界はお兄ちゃんを中心に回り、神がいるならばそれはお兄ちゃんだ」

無い胸をおおげさに張るエヴァ。
関係ないけど俺は、エヴァの俺に対する信頼と、テキストエディタしか起動してないのにタイピング速度に処理速度が追いついていな

い事に戦慄してる。

「うん。そんな感じ。だからお前らは頑張って」

「でもそこまで出来るようになるなんて……師匠はいったいどれだけの努力をしてきたんですか？」

「え……？いや、別に努力とかそんなんしてないけど」

震えながら聞いてくる。
会いたくて震えてるの？

「だって考えてもみ？俺ｏｖｅｙ　６００　ｙｅａｒｓ　ｏｌｄ。一日一回使ってたとしても２０万回は使ってる訳じゃん。別にそんな使ってないけど。
そら詠唱かて飽きるっつの」

「た、確かに……」

「麟先生、６００歳以上だったんですか！？」

「あれ？のどかには言ってませんでしたっけ？」

「聞いてないよー」

「俺も聞いてないよー！！」

「お兄ちゃんはあっちでジェンガでもやってて」

「俺が一人ジェンガ大好きじゃなかったら心を痛めて泣いてるよう

なセリフをさらっと言うエヴァもアルティメット愛してる」

「もう、お兄ちゃんったら。……私も好き」

熱い接吻を交わす。

そらもうディープに、ここにいる全ての人間どもに見せ付けるかの如く。

「あ、あわわ……」

「そ、そんな……わぁ……」

「そんな、子供もいるのに、そんな……」

お前も子供だろーが、あすにゃん。

「ぷはぁ。じゃあまた後でね、お兄ちゃん」

「うむ」

「オレモ行クゼ、ニイサン」

「いや、お前繊細さの欠片も無いのにジェンガとか自殺モンだろ」

「ニイサンニャ言ワレタクネーヨ」

「いや、俺繊細だから。ソマリア行くっつって遺書書いて出かけた挙句普通に安全なソマリアランド行った事がバレて叩いてきた週間新〇に脅迫文送りつけるくらい繊細だから」

「オイィィイイ！！滅多ナ事言ウナヨニーサン！！偉イヒトニ目エツケラレルダローガ！！！！」

「バカお前目ぇつけられたら善意の寄付金で買ったソファーに座って善意の寄付金で買った紙に『名誉毀損で訴える事も辞さない所存です』って書いて封筒に入れて善意の寄付金で買った切手貼り付けて送ってやりゃぁいいんだよ」

「ダカラソレをヤメロツッテンダローガァァ！！！１００話ヲ前ニ打チ切ルツモリカァァアアアア！！」

「うっせぇからあげさん投げつけんぞ」

「ソレハア○ネスジャナクテレ○ホーダローガ……ッテダブルリーチカマシテンジャネーヨ！！ドンダケ嫌ナ汗流サセルダヨ！！！
ッテ……イツノ間ニ汗腺ツケヤガッタンダ御主人！！！！！！」

「作業服でもエリ立てます」

「ヤメロォ！」

サスケェ！

０９２　世界最速は政府とユ偽フに監視されています。（後書き）

デスピサロごっこが楽しすぎる豚野郎です。
「ぢゅーん！ぢゅーん！」
とか言いながら手足を引っ込めたあと
「でででーん……でー→でー←でー↓でー→でー↓でー→」
とかＢＧＭを鼻歌で鼻ずさみながら手を伸ばす遊びです。
でも敵は８回逃げるというチートを使ってますのでデスピサロごっこも気付けば終了してます。
あの緑髪マジ鬼畜。

ってか大丈夫か今回。
まあお忙しい方々はこんな小説見てないか。

では、ご感想を食べて生きる珍しい豚野郎をこれからもほのかにお願いします。

０９３　世界最速、悲しみのお人形遊び（前書き）

僕はチャチャゼロも大好きです。

０９３　世界最速、悲しみのお人形遊び

「イカレたメンバーを紹介するぜ！
バイク狂いの麟！
兄ストーカーのエヴァ！
兄ストーカーのエヴァをストーカーする茶々丸！
調理用刃物マニアのチャチャゼロ！
カメラウーマンのかずみん！
貧乏オーディオオタクのさよ！
パソコンオタクのちうたん！
年増枠ちーちゃん！
カットフィリアのつっきー！
以上だ！」

ガシャーン！

「ダマッテヤレヨ」

「俺ジェンガ大嫌い☆」

「ウルセエ」

崩れたジェンガを蹴り飛ばせ！

「お人形遊びしようぜ」

「イヤ、俺ガオ人形ダカラナ」

「チャチャゼロ遊びしようぜ！」

「待テ待テ待テ！！オイ！ヤメ！！脱ガスナ！」

「ウェッヘッヘッヘヘヘヘーィヘーィヘーイ……

チャチャゼロにも……穴はあるんだよな……」ゴクリ

「オイ、ニイサ……ヤメ！！

御主人！！ゴシュジィィィーーーーン！！！！！」

「なんだ……チャチャゼロは俺が嫌いか……」

死にそうな顔をしながら聞いてみよう。

ちなみにこうすると一定以上の好意を持つ相手からは

「イ、イヤ……別ニ嫌イナンカジャ……」

的な事を言われるけどお前らにはおすすめできない。

「好きなの？」

「ダ、誰ガニイサンノ事ナンカ！

イヤ……マァ……ソノ、好キダゼ？」

「ブッ……！

ああ、しまった！！かつてないベクトルからの萌えで俺の鼻から紳士汁が！！」

「ヤッパリニイサンナンカ嫌イダー！！」

「何でさ！お前血好きじゃん！！」

「スプラッタ場面以外デ流レル血ニドンダケノ価値ガ有ルッテンダヨ！！！」

「その揺るがなさも凄いっちゃ凄い」

拳を握って血を力説する生き人形がそこに居た。

「ピアノ線で人吊り上げるとか無理だろ。どんだけピアノ線信じてんだy……ピアノ線だったー！！！」

「俺ナラマダシモ成人男性一人吊リ上ゲルノニピアノ線ハ無理ダロ」

「ご覧の番組はヒィクションです」

「フィクションダロ」

「バーローｗｗｗｗ」

「ウッセェ」

「……」

「――？　ドーシタンダヨ、ニイサン？」

「俺が高校の時な……西館二階のトイレで『出る』って噂があったんだよ……」

「ニイサン高校言ッテネエダロ」

「そうでした☆」

「デ、何ガ出ルンダヨ？」

「あ、続けるんだ。

どんな便秘の人でも一発解消……」

「モウイイ」

「うんk「もういい！！」」

まさかチャチャゼロが平仮名使っちゃうくらいもういいとは……

「そんな事より、俺漢字の『乙』書くのめっちゃ上手いねん。多分『一』書くより上手く書ける」

「イヤ、書カナクテイイ」

「べ、別に書くなんて言ってないんだからね！勘違いしないでよね！！」

「何キャラダヨ」

「あぁあ、株も飽きちゃったなぁ」

「脈絡ナイニモ程ガアルダロ……ッツーカニイサン、株ナンカヤッテタノカヨ」

「ああ。有り余る才能を駆使して今月は２０億スった」

「何ヤッタラソンナ負ケレンダ！？」

「逆に２０億も突っ込んで赤しか出さない会社って何よ？」

「一社ニツギ込ンダノカヨ！？」

「入社試験の時

「自己アピールしてください」

って言われたら

「御社の筆頭株主です」

って言いたいじゃん」

「ソンナドウデモイイ事ノ為ニ２０億モ！？何本包丁買エルト思ッテンダ！？」

「それで包丁の例えが出てるお前も突っ込まれる側だからな」

「あちらさん随分頑張ってるやん……」

「ソレナリニ強クナッテモラワネエト斬リ甲斐ガネエカラナ」

「実はキャラ作りの為にそんな事を言ってるだけで本当はそれほど斬りたい訳でもねえんだろ」

「ソンナ意図ハ一切ネエ」

「中二病か。ぐぅっ！身体……が……求……める……殺人という快楽を」

「ウルセエ！」

「俺の魔剣『ツィルケル』の超必殺技……喰らえ……ドリュックブライシュティフトォォォオオオオ！！！！」

「魔剣『コンパス』ッテ何ダヨ！オマケニ必殺技シャーペンカヨ！！」

「クーゲル……シュライバァァァアアアアアアア！！！！！！」

「ボールペン！！ソレ、ボールペンダゼ！！」

「このバイク？バイエリッシェ・モトーレン・ヴェルケ・アーゲーさ☆」

「ＢＭＷッテ言ヤァイイダローガ！」

「ドイツ語ってカッコイイイイィィィイイイイヤッフーゥ！！このカッコよさを糧に豚ちゃんねる、通称豚ネル（とんねる）に書き込むぜ！」

【速報】チャチャゼロは突っ込みキャラ
1：豚汁
突っ込まれちゃうぅぅぅぅぅ！！

2：豚汁
文字スレ立てんなボユゲ

3：豚汁
文字スレ立てんなボユゲ

4：豚汁
死ね

5：豚汁
文字スレ立てんなボユゲ

「俺は……どこで間違ったのかな？」

「知ルカ。死ネ」

「今日は単発ネタの日なんだ。お前の使いにくさが原因な」

「面ト向カッテソンナコト言ウナヨ」

「せめてお前が俺に惚れでもしてたらもうちょっとくらい使いやすいってのに」

「ハ、ハァ!?オ、オオ、俺ガニイサンニ……ホ、惚レルトカ!?」

「……んうぇっへっへｗｗｗｗｗ」

「ナ、ナンダヨ!?」

「お前、俺に惚れてんだろ?」

「ハ、ハァ!?惚レテネエシ!!」

「ぬぁんだとぉ―っ!!
じゃあ俺がお前におむつを穿かせて赤ちゃんごっこする話はどうなったってんだ!?」

「何デ話ヲソッチニ持ッテ行コウトスルンダ!?」

「ダメなんです……ふざけないと死ぬんです……」

「死ネヨ。一回クライ死ンデミロヨ」

「本気デ好キナノニイチイチ茶化シヤガッテ……」

「言ッテネエヨ！！！」

「でも、思っている」

「オ、思ッテネエヨ！！！」

「んへへへー」

「思ッテネエ！！」

「まあ思ってた所で使いにくいのは変わらないんだけどね」

「ダカラ面ト向カッテ言ウ事ジャネエダロ……」

「まあ嘆くな。俺はお前のことを使いにくいけど愛しているぞ。所で使うとか使いにくいとかって、なんか非人道的ながらアダルトな響きだよな」

「オイ……オイ……」

「ダッチチャチャゼロ」

「ブッ殺スゾ」

「死んでさえいなかったら生き返れる！！」

「ソリャソウダロ」

「例え死んでも俺なら生き返らせる！！」

「イヤ、ニイサンガ死ヌンダガ」

「君をぶっ生き返す！！」

「ダカラ歌詞載センナッテ言ワレテンダローガ！」

「コレで歌詞だとかわかる奴いねえだろ……。いや、居てもスルーだろ」

などとほざきつつ頭を振り回してたら茶々丸がやってきた。

「麟様、姉さん、今日の練習は終了しました」

「ウェイパー！！（味覇：中華料理につかわれるかなり高い調味料。使ったらびっくりするくらい美味くなるが、高い）」

「俺ニ言ッテモ別ニヤル事ネエダロ」

「いえ、姉さんがデレたと聞いたので他の全てを置いて飛んで来たのですが……もうデレ終えた後でしたか……。残念です」

「俺ハソウナッチマッタオ前ガ残念ダヨ。アトデレテネエ」

「もういいじゃん、そんなの。早く奴らの心を折りに行こうぜ」

「はい、麟様」

「俺ヨリニイサンノ方ガヨッポド悪ダナ……」

「ＹＯ！　ＹＯ！」

「あ、お兄ちゃん」

「妹よ、この者たちの実力はどうだ？」

「まだまだだよ。この中でも『火よ灯れ』が使えたのはぼうやと綾瀬夕映だけだったよ」

「いえ、でも始めたばっかりですから」

「ＹＯ！お前は黙ってな」

「何で若干傾いて喋ってるんですか？」

「今のトレンド　ＲＡＰとブレンド　ＣＯＯＬなフレンド　ダサい奴Ｔｈｅ　Ｅｎｄ」

「むしろ今の麟先生の方がえげつなくダサいです」

「ＹＯ　ＹＯ！ＹＯ！ＹＯ！　平面！」

「な、何を言ってるですか？」

「俺にラップの才能は無かった。絶望に身を任せこの腐りきった世界を滅亡へ導く。
『魔法の射手　光の１９５５６５８８５２３１矢』」

「ちょ、アンタがやるとｓＹれならんしょ！！」

「うっせぇ！ドーン！！！」

地球は終わった。スイーツ（笑）

と思ったか！
思いませんね。
はい。

「流石の俺もお菓子の包み紙捨てる感覚で世界滅ぼしたりしないって」

「ちょっと、ネギ驚きすぎて気絶しちゃったじゃない！！」

「すまんげ」

「っ……！！」

「麟先生の魔法はそんなに凄いですか？」

「何を当たり前の事を言っているんだ、綾瀬夕映。お兄ちゃんは魔法世界公認の世界最強だぞ」

「ただし魔法は尻から出る」

「だまってて」

「すいまえんでした；；」

「お兄ちゃんの力を持ってすれば銀河系ですら片手まで潰せるだろう。なんたって、お兄ちゃんは最強だからな」

「いやいや、そんなアホな話が……」

「夕映ちゃん……」

「はい？何ですか、アスナさん？」

「……マジよ」

「へ？」

「ちょっと、何か影響ない範囲で魔法撃ってみなさいよ、アンタ」

「今朝火柱上げたやｎ。まだたりｎの？」

「い・い・か・ら！撃ちなさいよ！」

「その脅し、サバンナでは通用しない」

「それおかしくね？だってここダイオラマ魔法球じゃん」

「通用しまう；；『ピーチクパーチクホホイホイホイ』」

ズゴーン！！

という音と同時にサーキットの半分が消し飛んだ。

「ほれ」

「……ね？

ってかアンタコレどうすんのよ！？」

「お前がやれっつったんじゃん。あーあ、知らねーよ。先生に怒られんぞｗｗｗ」

「じゃあ麟先生は誰なんですか」

「唯一神『八百万の一柱』」

「どっちなんですか。ほら、のどかも何か言ってやるです」

「のどかさんはネギ先生の介護と言いながら城内に立て篭もりました」

「あの女……いい友達を持ったな」

「……うるさいです」

「よし、オチはあっちに任そう」

「何の話でしょう？」

「私のログには何もないな」

「ネギせんせー、だいじょーぶですかー？」

「うーん……世界が……」

「うふふ、ネギせんせー」

０９３　世界最速、悲しみのお人形遊び（後書き）

チャチャゼロを人間化させる必要って無いですよね？
どうもありがとうございます。
毎度お馴染み豚野郎です。
天才的に天才的な１００話目のネタを思いついたのですが忘れてしまいました。
拾った方には一割差し上げますのでどうか見つけていただけませんか？
という訳でチャチャゼロ回でした。

０９４　世界最速、ゲームとタイアップ（しない）。（前書き）

投降したと思ってたのは僕一人でした。

０９４　世界最速、ゲームとタイアップ（しない）。

「ホントマジそういう感じのアレはやめてほしい感じなんだけど。俺の魔法が無かったらいまだにこのサーキットは広野だっただろうな（確信）そしてゆえは魔法を使えるようになった。これで君も魔法使いだ！という訳で、こっから先、ゆえとネギの修行は俺が受け持ちます。俺の教え方はスパルタンＸだぜ。着いてこれるか！」

俺にデレ期はないのポーズで直ったサーキットを背に叫ぶ俺（６００歳）

「映画とゲームのタイアップでつくったゲームは大方つまらないという伝説ですか？」

「グーニーズなめんな。
ああ、そっちはそっちで勝手にやっといて」

「こっちは何をやるですか？」

「そうやのー。ネギはひたすら魔法を使い続けてろ。魔法の射手…１７矢で。魔力の底までな。
茶々丸、ネギが何回撃ったか数えておくように」

「はい！」

「お任せください」

ネギが走っていった。どこいくねん。ええけど。

「で、ゆえにはエクサルマティオーを覚えてもらいます。強そうな名前やろ」

「エクサルマティオー、ですか？」

「うむ。歩いているとき、ふとすれ違ったねーちゃんのぱんつが気になる時、あるよね」

「ないです」

「そんな時、このエクサルマティオーを使うとあら不思議。ねーちゃんの服が一気に脱げておパンツとブルァジャーのみになります」

「さ、最低な魔法です」

「まあホントは武器とか杖持ったり鎧着込んでる相手の武装を解除するための魔法やねんけどな」

「随分と嫌な言い回しでしたね」

「じゃあ使い方はこう。『氷結・武装解除』」

指から魔法の光線的なものをビビっと出してゆえに当てる。

「キャー！」

「何という事でしょう。そこにはヒモぱんちゅとスポーツブラ装備のゆえが！」

「な、なな、何をしてくれてるですか！！」

「その格好だと襲ってくださいと言っているようなもん。これを着なさい」

そう言って服を出してあげる俺マジ拳王。

「だれがこんな格好をさせたと思ってるですか！？」

「え？何？俺がやったとでも言いたいの？」

「遺憾だとでも言いたげな表情はやめてください！そして服を着たいからあっち向いてください！」

「何を恥ずかしがる。おしっこぺろぺろしあった仲じゃないか」

「し合ってません！！」

「一方的に！　俺が！　ぺろぺろしましたぁぁぁあああ！！」

「うるさいです！」

「待ちたまえ！！それは鞭ではなく杖だ！！」

んぎっぼぢいいいい！！

「ぱんつむしゃむしゃ。ほら早く。その服は魔法を使いやすくさせるＳＯＺＡＩで出来てるからそれを来て頑張って」

「あ、ありがとうです。でも脱がせる前に言って欲しかったです」

「そんなん、何が楽しいんや」

「……」

「そんな目で俺を見るなァァァアアア！！」

「気を取り直して、服も着直して、もう一度チャッカマンやってみなさい」

「はいです。『プラクテ・ビギ・ナル　アールデスカット』！」

ぼす……ぼぼぼぼぼ

「ほら、何か魔法を使いやすくなったでしょう」

「言われてみれば……そんな気がするです」

「その服を着ていれば魔法がどんどん使えるようになるかもしれない。でもあくまでサポートだから、結局、実力はゆえに依存します。だからがんばっテ！」

「ｈａｉ！」

「じゃあこの中から好きな魔法を選んで。

1．風花
2．氷結
3．熱波

どれ！？
ちなみに3が一番難しいから、段階的には俺の挙げた順番通りにやるのがオヌヌメ」

「じゃ、じゃあ1で」

「はい。詠唱は『フランス・エクサルマティオー』。はい」

「『フランス・エクサルマティオー』」

「んー、ｇｏｏｄ！その調子で！」

「はいです！『フランス・エクサルマティオー』」

「ちなみにフランスの死刑執行人サンソンについて書かれた本があったが、俺は帯に荒木神の絵が描かれてたから思わず買ってしまったという過去がある」

「マガジンマンガ以外の話はよくわからないです」

「おお、それがいい、そうしなさい」

「『フランス・エクサルマティオー』」

「次はそれを俺に向かって」

「はいです！『フランス・エクサルマティオー』」

「もっと服を吹き飛ばす感じのイメージで」

「『フランス・エクサルマティオー』！」

「情熱的に」

「『フランス・エクサルマティオー』！！」

「そよ風！」

「『フランス・エクサルマティオー』！！」

「ストップストップ！！ストーーーップ！！！」

「え！？な、何ですか！？」

「始動キーを言ってみよう」

「ぷ、『プラクテ・ビギ・ナル』」

「で、そこに武装解除を繋げて」

「『フランス・エクサルマティオー』」

ぶぁさ

「寮暮らしのゆえエッチィィイイイイ！！」

「ちょ、そ、そんなつもりじゃ！！」

俺の服（ユニコーンクロイツェフ、略してユニクロ製）が花びらになって飛んでいった。どんだけよ。

「麟様！！」ジーカシャカシャカシャカシャ！

「もっと撮って！俺の恥ずかしい姿を！！」

「ちょ、茶々丸さん！？ネギ先生はいいんですか！？」

「いいんですよ、あんなガキ！！こっちは麟様撮るのに忙しいんですから！後に！後にしてください！！」

「ししょー、もう撃てませ……えぇ！？何でふんどし一丁なんですか！？」

「ジャパニーズソウルパンツ、これこそ男の証さ」

「そんな女の子した顔で言われても」

「そこの箱に入ってるジュース飲んでさっさとさっきの作業に戻れよ」

「は、はい！」

「で、茶々丸が戻るまで休憩な。ちょ、フラッシュは！フラッシュはらめぇぇ！！」

「な、なんか頑張ってください！」

何やねんな、それ。

「あー、マジ麟様至高の宝玉です。世界中の博物館が欲しがるほどの美の化身です」

「あの、私は何をすれば……」

「あの木に向かって発射しといてください」

「『プラクテ・ビギ・ナル』……」

「ハァハァハァ……」

「茶々丸さん、ガイノイドなのに息が荒いですよ」

「麟様から放出される魔力を吸ってるんです」

「ネオ変態ロイドですね」

「お褒めに預かり光栄です」

「おっぱいなめたい」

「じゃあ私はネギ先生の魔法をカウントする作業に戻りますね」

「あいさー。
じゃあゆえよ、次は『氷結・武装解除』を覚えてもらいます」

「はい！」

「『おっぱい・もみもみ・もみ・もももみ　氷結・武装解除』」

ゆえの服が凍るが砕けなかった。

「うわぁ！な、何するですか！」

「いえ、その服は武装解除でもノーダメージな感じの凄いやつだから、なんか頑張れ」

「は、はいです」

釈然としなさそうに言うな。

「で、できたです」

「すごいゆえ！ゆえすごいゆえ！すごいゆえ！」

「テンポよく褒められてしまいました。これも麟先生に貸していただいてる服のおかげです」

「え？服？　あ、ああ。うん。そうやね」

「な、何ですかその反応」

「いやあの、プラシーボがそのそういう感じ。思いが力になるってかっこいいよね」

「ぷ、プラシーボ？」

「信じる者は救われる、病は気から、蓼食う虫も葉っぱ踏み踏み、そんな感じ」

「気のせいというやつですか」

「でも、魔法を使えたのは完全にゆえの実力だから、素敵だと思います。思いました」

「ありがとう……です」

「っしゃデレ来い！どんと来い！」

「ソレが無ければ素敵なのに……」

「ん？何か言った？」

「な、何でもないです！」

「『ソレが無ければ素敵なのに……』」

「な！聞いたですか！？」

「ったりめぇだろ！！一人称なんだから聞こえてなかったらお前の台詞表記されねえっつーの！！だからもっと叩いて！！」

「変態！変態！最低です！！」

「別に今のに変態的な発言はなくない？」

「確かに。ごめんなさいです」

ゆえが俺に毒されてきてる。

クソッ！俺の奴好き放題しやがって……！！

ちなみに、ネギは魔法の矢の効率化が成功したっぽくて、最終的には半分の魔力で同じ威力の魔法を撃てるようになってた。

さすが天才。

０９４　世界最速、ゲームとタイアップ（しない）。（後書き）

今めっちゃお腹痛いから手短にまとめます。
豚野郎です。
そして今回もありがとうございました。

０９５　世界最速流、余所者の歓迎。（前書き）

びろーんｗｗｗびろーんｗｗｗｗ

０９５　世界最速流、余所者の歓迎。

「あすにゃん以外みんな魔法がつかえるようになってよかった。かいさん」

「「「ありがとーございましたー！」」」

「で、あすにゃんが魔法使えない件について。エヴァ？」

「絶望的に向いていない。魔法と気が同時に出てるな」

「じゃあアスナさんは……」

「ああ。まあ抑える事もできるだろうが、今はソレよりも向いてる物があるな」

「そんな」

膝を落とすあすにゃん。膝壊すなよ。

「向いてるもの……ですか？」

「おいエヴァ……まさかアレを……！？」

「ふふふ……」

「アレ……？」

悪乗りさせたら右にも左にも色んな人々が居る白波兄妹です。

「さてな。それは次来てからのお楽しみって奴だ。まあ悪いようにはせん」

「そんな事より、やるじゃんネギったら。魔法の効率化ってのもやってみりゃ案外出来るもんだな」

「いやぁ、そんな……」

「ま、どんだけ魔法使っても魔力減らない俺からすれば全く不必要なスキルだけど、お前程度の貧弱な魔力ならたいしたもんだろ」

「わぁ、師匠に褒められちゃいました」

「今の褒めてたんだ」

「褒めてたぞ。ってか帰れ。なんなら俺らの●●●に参加してくか？」

「い、いや、ネギ、帰るわよ！」

「はい。ありがとーございましたー」

「いい夢見ろよ」

さよーならーと手を振るネギをそれなりに見送って部屋に戻る。
リビングに置いてあるテーブルの天板を叩いてひっくり返し、ホワイトボードを出す。
それと同時に証明を落として薄暗くもしておくのを忘れないのが大人の醍醐味（？）

「さて……作戦会議だ。茶々丸」

「はい。私がアレをクラックしてリークした情報によれば、どうやら明日には……。
詳しく言うなら一〇四〇（ヒトマルヨンマル）時が順当に事が進んだ場合の到着時刻です」

水性ペンでツリーを書きこむ茶々丸。

「となれば……出迎えは豪勢にしてやらねばな。ククク……腕が鳴るわ」

「準備は茶々丸に任せていいか？資金ならいくらでも出すが」

「お任せください。ターゲットの接触予定時刻は一〇四五に」

「よかろう。私たちもその１０分前には合流しておこう」

「奴の驚いた顔が目にうつるな……」

「フフ、麟様も人が悪い……」

その時、証明のスイッチを何者かにつけられた。

「何奴！？」

「いや、何やってんだよ。目悪くすんぞ」

「それはホラ、アレやん。俺の溢れ出るサービス精神がどうこう」

沸いて出たちうたんの耳元に口を寄せて喋る。

「ふんふん……そうなのか？　ああ、そういや……うひゃあ！？息吹きかけんなよ！！」

「まあ、そういうことだ」

「ってかここのメンバー全員知ってんなら別にひそひそ耳元で話すこともなかったよな？」

「……うまいＢＯＷの納豆味買ってきます」

「店にあるだけな」

「お任せください」

「あんのか？　ってか私の質問スルーか」

「あまりの脈絡の無さに読者の皆さんも気付いてないかもしれないからあえて漏らさない選択した俺は誇ってもいい」

「何言ってんだ？」

「ま、都合よく明日は休みだし、ちうたんも来る？」

「ま、そういう事なら別に断る気もねぇよ。一応おとうｔ……むっ！？　おい、何で急に口塞ぐんだよ」

「今言いそうになったでしょ！ダメよ、特定されるから」

「……？　まあいいけどさ」

「買ってきました」

「もうついたのか！」「はやい！」「きた！ＢＯＷきた！」「うまいＢＯＷきた！」「これで勝つる！」

「すいまえｎ、納豆味が６００本しかなかったので４００本は梅おむすび味です」

「多いよ！！誰がそんな食うんだよ！？」

「まあまあ、ちうふぁんもたべたらおーあい？（サクサクサクサク）」

「何言ってるかわかんねえ上に食うの早っ！！もう１０袋開けてんのかよ！先生じゃなかったら口内炎になるわ！ってか飯もそんな食わねーんだからあんまり食いるぎるなよ、晩飯食えなくなんぞ！」

「〇フォイ」

「何がマルフォイだ」

～～よくじつ～～

麻帆良中等部学生寮前駅（っぽい名前）

「俺リーマンの人尊敬してる。だって毎日電車乗り間違えずに会社着いてんだろ?俺電車とか二回以上乗り換えあったら確実に違う所着くもん。でもバイクには乗り間違えない」

「逆にバイクに乗り間違えるって何だよ」

「俺は同じバイクが１０００台並んでても自分のバイクを見分ける自信がある」

「私にもあるわ、そんくらい」

先日プレゼンティーしたＣＢＲ１２５Ｒを気に入ってるちうたｎ。

「ってか日本でＣＢＲ１２５Ｒが１０００台も並ぶって何だよ」

「お前それタイでも同じ事言えんの?」

ＣＢＲ１２５Ｒは正規輸入有りのタイホンダ製素敵バイクだ。何故かメーターは２２０ｋｍ／ｈまであるのに使われるのは１２０あたりまでという「いつものタイホンダバイク」です。
ちなみに、同じくタイホンダ製のＮＳ１２５Ｒは軽くて乗りやすかった。
この体型に一番合ってるバイクだと思ったけど、ちうたんの体型でも同じサイズのＣＢＲに乗れてる所を見たら別にそうでもないのかもしれないね。

「到着予定時刻まであと1分です」

「うむ。全員所定の位置に着け」

「え?所定の位置って何だよ?」

「茶々丸」

「はい。ちうたn、こちらへ」

「何でお前までそう呼んで……まあいいや」

先生、車なんか出して何やる気なんだ?
あ、出てきた。あの二人組が行ってた奴か?

「あ、アーニャ・アールストレイムさんとネカネ・サスペンショングラウンドさんですか?」

「誰よそれ。ってかアンタ何よ?」

「ネギ・ほにゃららに言われてお迎えに来ました」

「いや、スプリングフィールドだから」

……何やってんだ?

「私はネカネ・スプリングフィールドよ。よろしく、お嬢さん」

「私はアンナ・ユーリエウナ・ココロウァよ」

「二人とも長いから縮めてネカネとあつしでいい？」

「だれがあつしよ！ってかあつしって誰よ！？」

「じゃあアーニャでいいよ、もう」

なんか3人で仲良さそうに話してる。

『ちうたんさｎ、ちうたんさｎ』

『何でこの距離で念話なんだよ。ってか中途半端な敬称をつけるな。……そういや、和美はどうしたんだよ。こんな面白そうな話真っ先に食いつくだろ？』

『へ？　和美さんは……学校ですけど？』

『ふーん、学こ……ちょっと待て。今日何曜だ？』

『金曜ですが……大丈夫ですか？』

『うるせえ。ってか生徒（わたしら）はいいとして、先生が休むってどうなんだ？』

『自分達を棚に上げるなんていい具合に染まってるじゃないですか』

『ネジ巻き切るぞ』

『麟先生、ネギ先生両名は、本日は他校へ講習に出ています』

『って事になってんだな。……ネギ先生？あのガキもか？』

『じつはネギ先生の新宅のリビングにある椅子に縛り付けています』

『……ま、どうでもいいか』

『麟様、ちうたんがキャパシティオーバーしました』

『おｋ、作戦第二に移行する』

「ってかアンタ、ネギの何なのよ」

「加害者、かな」

ポケッツから携帯電話を出して一枚の画像を見せる。

その画面には、椅子に縛り付けられたネギと、その横に満面の笑みでピースしてる俺が写っていたんだよ。

「ネギ！！」

「アンタ、ネギに何を！？」

「おっと、騒がないでもらいたいな」

片手を高く上げて指をならす。

ならない。

ならす。
ならない。
ならす。
なった。

そばの茂みから（水）鉄砲を持った茶々丸とちうたｎが出てくる。
ちうたんは嫌々っぽい。

「さて、これから俺たちに着いてきてもらう。異論は？」

「くっ！」

「この下衆！」

「何とでも。さ、車に乗せろ」

「はい」

「悪いな」

後部座席４席が向かい合わせになるように改造したトヨタのセンチュリーリムジンに乗り合わせる俺達５人。
ちなみに今日の運転は茶々丸です。

「ネギは……ネギは無事なの？」

「それはあなた達次第ですよ、レディ」

「……私たちをどこに連れて行く気？」

「それは着いてからのお楽しみという奴です。期待していただいていいですよ」

『先生、ソレ何キャラだよ？』

『おもろいやろ？』

『うっせ』

「緊張してますね。ワインでもいかがですか？」

「いらないわ」

「あらら、嫌われちゃいましたね」

「私たちを人質に、ネギに命令しようとしても無駄よ」

「まさか、俺がそんなひどい事をする訳が無いじゃないですか。何より、別にネギを思い通りに操るくらい人質など居なくても問題ない。ご安心ください。相当な無茶をしない限り、俺は何も悪いようにはしませんよ」

「……アンタ、何者よ？」

「……邪神」

『何だよそれ。中二病こじらせたか？』

『こじらせてんのは俺じゃなくてＭＭのアホだって』

『ああ、そういやそんな話もあったな』

「ま……まさか、あの一日足らずでＭＭ元老院を解体まで追いやった……！？」

「闇の福音の兄……」

「信じるか信じないかはあなた次第です」

「ぶっ……」

『急にネタ突っ込むんじゃねえよｗｗｗ』

『ちうたんこそ急に噴き出すなよｗｗｗえええいああ君から貰い笑いするところだったじゃねえかｗｗｗ』

「くくく……」

『ちうたんまるで悪人みたいな笑いかたになってんぞｗｗｗｗ』

『こっちも必死なんだよｗｗｗｗえええいあああってｗｗｗｗｗ』

「クッ……！」

『ほれｗｗｗ悔しそうにしてんじゃんｗｗｗｗ』

『寂しいです』

『前見て運転してろ』

『悔しいのうｗｗｗｗ悔しいのうｗｗｗｗｗ』

『マジうるせえｗｗｗｗｗ』

「ふふふ、おっと、もう着いてしまったようですね。出ますよ」

「どうぞ」

茶々丸が扉を開けてお二人をエスコートする。

その家は、新築っぽい事を除けば極普通の家。一般家庭です。

「どうぞ、こちらです」

と、茶々丸が扉を開けるのを見計らって、俺もポケットに入れておいた、火薬で『アレ』を出すおもちゃを出す。

パァン！パン！パン！

「きゃあ！？」

「て、敵！？」

大きな、火薬が弾けたような音が鳴る。

扉の先には、クラッカーの紐を引いたネギ。
背後には俺と茶々丸。

「麻帆良へよーこそ！！」

「……は、はい？」

「お姉ちゃん、アーニャ！久しぶり！！」

「……へ？」

０９５　世界最速流、余所者の歓迎。（後書き）

父が嫌煙のために母が部屋でタバコを吸うというテロをされる事で有名な紅の豚野郎です。「ッタァロウ！」と言うと何となく「豚野郎」と聞こえる今日この頃、皆さんはいかがお過ごしでしょうか。
実はクリ○○スイベントで何か書こうかなと思いもしたのですが、生憎ながら我が家は仏教、そして僕はエレミアの騎士なので、特にジーザスクライストの誕生日は関係ないかなと思い、留まった次第です。
というか、吸血鬼が祝う事でもなければその兄も祝わないし嫁達も祝わない。ＨＡＰＰＯ塞がりですね。
まず、劇中まだ初夏だし。でも原作もまだ夏休みでしたっけ？
コミックス派だから夏休み終わってもわかんない。
あと映画見にいけない。近くで上映してない。
そんな感じです。

では、今回もありがとうございました。

０９６　世界最速のＤＶＤってＴＡＴＳＵＹＡで借りれるっすか？（前書き）

いや、世界最速のインディアンじゃなくって。

０９６　世界最速のＤＶＤってＴＡＴＳＵＹＡで借りれるっすか？

「すいまえんでした；；
ホラねい gもあやまっテ！」

「ごえんなさいまだ立派な先制なってないんです；」

「いや、別に怒ってないから。……ね？」

誰こんな聖女連れてきたの。流石の俺も許センス。
ちなみにちうたんは学校に行った。
で、カモとその妹と俺の妹は別室で何かやってる。

「そんな！じゃあ俺のこのバックグラウンドハウリング土下座デスニーベルンバレスティの矛先はどこに向ければいいんだ！！」

「何よソレ！？そんな意味のわかんないもんしまっときなさい！
ってかアンタ結局ネギの何なのよ！邪神ってのもどうせ嘘でしょ！」

「なにこのツインテール。片方ほどいてサイドテールにすんぞ」

「聞きなさいよ！！」

「じゃあエレミア三謳神とでも呼べよ。俺エオリア」

「麟様、流石にあつかましいです」

「＾＾；」

「アーニャ、この人は僕の魔法とバイクのお師匠様だよ」

「よろしゅう」

「バイクと魔法な。魔法はついで」

「うそつくんじゃないわよバカネギ！」

「そうよそうよ！」

「黙ってなさい！」

（そうよそうよ）

「こいつ……直接脳内に……！？」

「ウソじゃないよ！この人はアーニャよりもずっと強いんだから！」

「でもアンタの自慢の父さんより弱いんでしょ！」

「いや、多分父さんより強いよ」

「オセロとかな」

「麟様、調子に乗らないでください」

「；ω；」

「……ネギ」

「ど、どうしたの、ネカネお姉ちゃん？」

「ホラ、ウソだってバレてるのよ！こっちは初めからお見通しなんだから！」

「バイクなんて危ないもの乗っちゃダメです！」

「そっち！？ネカネさんそっち！？」

「収集つけてー！！誰か！！」

「じゃあ一から説明します。マジでありがたく思えし」

「はやく説明しろし」

「こいつ、ネギ。女子中学校教師。女に囲まれて下卑た笑いを絶やさないジェントルメン」

「ウソです」

「お前、アンナ・ほにゃらら・ココロウァ。ロンドンで芋ほりの仕事をしてる」

「してないわよ」

「お姉さん要員、ネカネ・スプリング。他人が不幸でもメシがマズ

い国からやってきたメシウマねーちゃん」

「スプリングフィールドです！」

「以上だ！」

「以上じゃないわよ！！」

「ああ、茶々丸。日本のＨＯＮＤＡが開発した二足歩行ロボット」

「チャチャマルデス」

「日本凄っ！」

「ガンダムは！？ねえガンダムは！？」

「お台場にある。戦争始めたら動かすから」

「日本凄い！！」

なんか盛り上がってるみたいで良かった。

――３０ふんご！――

「で、結局アンタは何なのよ！」

「人生、かな」

「クラナドじゃないわよ！」

「ちょっとネギ、こいつ日本の負の文化に染まりきってんだけど」

「べっ！べ、別にネギがこっち来たからちょっと日本の事を調べてみようと思った末に居候先のお姉さんに日本のアニメを見せてもらったらはまったなんて事はないんだから！」

「このツンデレ、ニュータイプである」

「誰がツンデレよー！！」

「僕の師匠、白波麟さんです」

「白波・Ａ・Ｒ・麟だけどな」

「シラナミとか、またそんな冗談言って」

「マジ。マジだから」

「魔力なんて全く……」

「お前この世界の太源（マナ）の何割俺の魔力だとおもってんの？抑えててコレだよ（笑）」

「じゃ、じゃあ魔法見せてみなさいよ！」

「ちょ、アーニャ！待って！本当だから！！本当だから本当にやめて！！」

「必死になる所が怪しいのよ！」

「ケンカはやーめーてー！」

「あの邪神がこんないいかげんでチャランポランなわけないじゃない！」

「師匠はいいかげんでチャランポランだけど凄いんだよ！」

「俺の前でケンカとかお前まじぶっころしょ？
俺は最速だが本気だしたらまわりが騒ぎだろうな
俺はケンカにはどちかというと大反対だな
バイクは速いがやっぱり俺の性格のよさが武器だよなー憧れろ
ケンカしようとしえｔる馬鹿のジョブがさっさと弱体されろよカス」

「も、もしかして……ブロントさん！？」

このツインテはまりすぎだろ。引くわ

「え？誰？」

「言っておくけど俺は別にブロントじゃない」

「そうですかありがとうグラットンすごいですね」

「それほどでもない」

「ほら！やっぱりブロントさんじゃない！」

「俺がどうやってＢｕｒｏｎｔだって証拠だよ
言っとくけど俺はＢｕｒｏｎｔじゃないから
あんまりしつこいとバラバラに引き裂くぞ」

「アーニャ、その辺にしてよ……」

「な、何で泣きそうなのよ。わかったわよ！」

「じゃあ皆には俺が食事をふるまってやるのが大人の対応」

「封印が解けられた！」

「このロボット急に喋ったわよ！？」

「僕の生徒なんだからロボットじゃなくて茶々丸さんって呼びなよ」

「ロボットが生徒！？」

台所に避難した。
だって話題が閑散としすぎなんだもん。

「麟の旦那！」

「ああ、アルベール氏。どうなされた？」

「オレっちの妹でさぁ！ほら、アン」

と言ったカモの後ろからちっさいオコジョが出てきた。

「アンジェリーナです。このたびは、ごしょうたいいただき、ありがとうございます」

なんかちっさい体で一生懸命喋ってる感じが俺の新しい土地を開拓してる。

「……どっちかってーとお前よりこっちの子の方がマスコットキャラじゃね？」

「ひでぇ！？　でもたしかにそんくらいはかわいいっすよ！」

「おにちゃんったら」

「まだあんまり日本語を覚えてないんすよ」

「じゃあ英語で話してみるか。ｎｉｃｅ　ｔｏｏ　ｍｅｅｔ（はじめまして）」

「ｈａ～　ｑｕｉｔｅ　ｎｕｔｓ（思ったより頭カラッポっぽいね）」

「……日本語で話す」

「……すんません」

「よろしくです」

肩と膝と腰と頭とくるぶしを落としてたらエヴァが出た

「お兄ちゃん、料理するの？」

「下準備は終わってるから加熱するだけだけどな。あとこのオコジョ兄妹つれてって」

「ｓｉｓｔｅｒ　ＥＶＡ！」

「うん、お兄ちゃん！
あとアン、その呼び方はやめろ。寒気がする」

「じゃあまた後で」

日本に来たからって日本食作る俺マジ菩薩。

「オラクソども、テーブル空けろ！もうあいてますー～。はいそうですか。おまたせ」

どすどどんとサシーミ、テンプーラ、ミッソスープ、その他をテーブルに並べる。

「これ全部ブロントさんが作ったの？」

「だからブロントさんじゃねえっつってんだろーが！！」

「いただきます」

「「「いただきます」」」

「麟様、腕を上げましたね」

「まだ茶々丸には及ばない」

「ホント、おいしいわ」

「鬼の目分量」

「鬼の目！？」

「うっせ」

「日本の教師ってこんな立派な家をもらえるのねー」

「いや、この家は師匠がくれたんだ」

「へー、日本の師匠ってこんな立派な家……えぇ！？」

「ようじょの口から出た米粒おいしいです＾ｑ＾」

俺の顔が米粒だらけだわ。

「あなた、ホントにあのシラナミ・Ａ・Ｒ・リンなの？」

「そうだっつってんじゃん。こっちの愛くるしすぎてヤバイのは妹」

「エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・Ｍ・シラナミだ」

「えぇ！？じゃあホントにあの『邪神』と『闇の福音』！？」

「行儀が悪い！！」

「ご、ごめんなさい。ってかネギ、アンタいいの？正義の魔法使い目指してんのに悪の魔法使い代表の弟子になっちゃって」

「ああ、そんな事。だって、師匠は世界的なヒーローなんだよ」

「「ヒーロー？」」

「何だ、貴様等知らんのか」

「何を……ですか？」

「別に慣れん敬語を無理に話さんでいい」

「じゃあ後で師匠のＤＶＤ見ましょうよ」

「いいですとも。そしてごっつぉさん」

「片付けは私がしておきます」

「じゃあ頼むわ。ベランダ借りる」

「はい」

食後にタバコを吸うのは悪習だなぁ。別にいいけど。

「ねえ、ネギ、何か辛い事とか無い？」

「ううん、皆良くしてくれてるよ」

「ウソ言うんじゃないわよ！　だってあの邪神なのよ！？」

「というか貴様等、その妹の前でよくそんな堂々と言ってくれるな」

「い、いや別に」

「ふん……まあ続けろ。私は何もせん」

「何か酷い事とかされてるんじゃないの？」

「もー、心配性だなぁ。師匠はいい人だよ。ってかそんな悪い人が世界中でヒーロー扱いされたりしないって」

「だからそのヒーローって何よ？」

「２００１年度プライベーターＭＯＴＯ　ＧＰ　２５０クラス優勝」

「？」

ふいにエヴァンジェリンさんが喋った言葉は、麟さんの、師匠の一

番有名な戦績だった。
それ以上は何も話そうとしない。僕に続きを言わせようとしてるみたいだ。

「バイクのレースだよ。普通はああいうのは企業のバックアップがあって、専門の整備士や専門のライダーを雇うんだ。それで、企業の力を見せるために開催されるんだ。でも師匠はスケジュール調整、車体の準備、改造、整備、出場費用、ライディングテクニックまで全部一人で用意したんだ。それが世界中に評価されてるんだ」

「そ、それは知らなかったわ」

「お兄ちゃんは、取材はある一社以外は全て受けない事にしているが、お兄ちゃんの特集が組まれた号は確実に５００万部は売れる。世界中にな」

「世界中に!?」

「ああ。貴様らは、魔法関係者以外は知らないと思ってるみたいだが……、バイクに乗る者なら知らない者は居ない筈だ。そこに置いてあるヘルメット、見たことないか?」

そういってエヴァンジェリンさんが指したのは僕のライディングウェア一式が置かれた棚だ。
ライディングウェアは師匠にもらった。

「そういえば、イギリスでも何回か見たわね……」

「日本でも人気なのかしら?」

「逆だよ。イギリスでも人気なんだ。アレは『ＳＹＯＨＥＩ　ＥＸ００６－Ｓ　白波レプリカヘルメット』って言って、師匠が優勝した時にかぶってたヘルメットなんだよ」

「画面栄えする、という効果も大きいが、アレをきっかけに第二のレプリカブームが来たくらいだ。メーカーも２ｓｔ規制をなんとかかいくぐろうとして作ったコンセプトバイクもいくつもある」

「そ、そんな裏でも表でも人気の人が何で日本で教師なんかやってんのよ？」

「なんかって……」

「それは、私が中学に通う事になったからだ」

「へ？」

「麟様はシスコンですからね」

「『妹と兄でも充分禁断なのに教師と生徒まで入れたらどんだけｗｗｗ』って言ってたな」

「ど……どんだけ……」

あの邪神、底知れないにもほどがあるわよ。

こんな極東まで来てあの『不死の魔法使い』を中学校に入れた上に、

その理由がきんし……なんて！！

「うぇーい☆味方アホだけー」

「あ、師匠！ごちそうさまです」

「苦しゅうない」

ホントにただのアホな子供じゃない！

なによ、あんな奴！

「じゃあ見ましょう！」

「おお。なんたってＤＯＬＢＹ　ＰＲＯＬＯＧＩＣ　？ｚシステム突っ込んだ総計５００万以上のハイファイオーディオ環境だからな。と見せかけてＤＶＤ自体は５．１ｃｈという悲劇」

「逆に５．１に対応してるのが凄いんだよ」

「かなり頑張ってたっぽいからなぁ、あの撮影環境」

って、テレビの電源をつけるネギ。

で、その後になんか３つくらいリモコンを出してきて次々操作する。

アンタ機械苦手だったじゃない！

「このソファ６人掛けなんだ」

「へぇー、凄いのね」

ネカネさんもなんか馴染んじゃってるし！

「ん？　どうしたの、アーニャ？」

「なんでもないわよ、バカネギ！」

「？？」

画面に大きく『Ｗｏｒｌｄ　Ｇｒａｎｄ　Ｐｒｉｘ』とロゴマークが出る。

その直後、前からバイクの音が、後ろからは大声援が聞こえてきた。

「！？」

思わずネカネさんといっしょに振り返るけど、スピーカーしかない。

「え？何で！？」

「そういう物だ。臨場感のためにスピーカーを１０個も配置してある。全く、人間の技術力も侮れんな」

何で耳は二つしかないのに１０個もスピーカー要るのよ？

「ほら、アーニャ、あの赤い車体に赤いウェアの選手が師匠だよ」

「へぇ……ちっさ」

「せやろｗｗ」

別に褒めてない。

「どうだった？」

「凄……」

本当に凄かった。
バイクがあんな速く走れるなんて知らなかった。

「これが、僕が憧れた師匠なんだ」

「ちょｗｗｗ恥ずかしいんですけおｗｗｗｗｗ」

「でも本当に凄いわ。……こんな小さいのに！」

リン（それでいい。って言われた。ってか邪神って呼ぶと「もっこすじゃねえでございｗｗｗ」といわれた）の手を取って言うネカネさん。
目元には涙が溜まってる。
どんだけ感動してんのよ。

「中国かどこかの諺にこういうのがある。『男子三日で死す』」

「麟様、『男子三日会わざれば刮目して見よ』は日本の慣用句です。
『士別れて三日なれば刮目して相待すべし』が正解ですね。
ちなみに、『志のある者は三日で驚くほど成長している』という意

味で捉えていただいて間違いありません」

これは多分私たちに言ってくれてるんだろうな。と思う。

「そうね。あなたも男の子ですもの。目指すものを止める資格は私には無いわ。頑張ってレーサーになりなさい」

「お姉ちゃん……」

ネギほどの才能があるのに魔法をやめるってのももったいないけど、夢があるなら仕方ないわよね……。

「僕、別にレーサーになるつもりはないんだけど」

え……

「「「えぇえええええええ!?」」」

０９６　世界最速のＤＶＤってＴＡＴＳＵＹＡで借りれるっすか？（後書き）

ＤＯＬＢＹ　ＰＲＯＬＯＧＩＣ　？ｚ　って作中の年代ではまだ出てないよね。
豚野郎です。

最近切る場所がわかんないという悲劇に悩まされてます。

ちなみにアーニャたｎですが、シラナミに加わる予定は全くありません。
予定は未定とも言いますので今後どうなるかはわかりませんが、今のところはネギハーレム要員です。

ちなみに、今まで黙ってましたが、僕本当はバイクが好きなんです。
皆さんも全く気付かなかったと思います。
ちょっとした遊び心でいままで隠してきましたが、特にそんな必要も無いよなと思いなおし、ここに書いた次第です。
では、今回もありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4001v/

世界最速の魔法使い

2011年12月31日01時11分発行